

# 豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第3分冊)

2006

大分県教育庁埋蔵文化財センター

# 豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

(第3分冊)

2006



中世大友府内町跡 第22次・第18次調査区（東から）

## 総目次

- 第1分冊 第1章 はじめに (坂本嘉弘)  
第2章 中世大友府内町跡第12次調査区 (坂本嘉弘・吉田寛)  
第3章 中世大友府内町跡第48次調査区 (後藤晃一)
- 第2分冊 第4章 中世大友府内町跡第18次西調査区 (原田昭一)  
第5章 中世大友府内町跡第18次東調査区 (友岡信彦)  
第6章 中世大友府内町跡第28次調査区 (吉田寛)
- 第3分冊 第7章 中世大友府内町跡第22次調査区 (槇島隆二)  
第8章 中世大友府内町跡第9次調査区 (原田昭一)  
第9章 自然科学的分析 (魯禔玆・平尾良光)  
第10章 総括 (坂本嘉弘・後藤晃一)
- 付 図

## 目次

第7章 中世大友府内町跡第22次調査区 (槇島隆二)	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺構と遺物	1
1. 遺構の概要と基本層序	1
2. 道路状遺構と溝状遺構	9
3. 土坑	16
4. 井戸	34
5. その他の遺構	52
6. 包含層・整地層・ピット出土遺物	65
第3節 小結	85
第8章 中世大友府内町跡第9次調査区 (原田昭一)	89
第1節 調査の概要	89
第2節 遺構と遺物	89
1. II区	89
a. 溝	97
b. 土坑	100
c. 井戸	121
d. その他の遺構	122
e. ピット	130
f. 包含層	131
2. III区	139
a. 溝	139
b. 土坑	150
c. 井戸	166
d. その他の遺構	176

e. ピット	178
f. 包含層	187
第3節 小結	204
第9章 自然科学的分析	205
中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析（魯禊球・平尾良光）	205
第10章 総括	213
第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について（後藤晃一）	213
第2節 豊後「府内」桜町の変遷（坂本嘉弘）	220
遺物観察表	227
写真図版	257
付    図	

## 図 版 目 次

### 第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

第1図 第22次調査区の位置	1	第2図 第22次調査区遺構配置図	2
第3図 第22次調査区北壁土層図	5・6	第4図 第22次調査区東壁土層図	7・8
第5図 第22次調査区西壁土層図	7・8	第6図 SF230変遷	10
第7図 SF230出土遺物実測図	11	第8図 SD009出土遺物実測図	12
第9図 SD017出土遺物実測図	13	第10図 SD019出土遺物実測図	14
第11図 SD020出土遺物実測図	14	第12図 SD202実測図	15
第13図 SD202出土遺物実測図	15	第14図 SK008実測図	16
第15図 SK008出土遺物実測図①	17	第16図 SK008出土遺物実測図②	18
第17図 SK011実測図	18	第18図 SK013実測図	18
第19図 SK013出土遺物実測図	18	第20図 SK015・SK016実測図	19
第21図 SK016出土遺物実測図	19	第22図 SK018・SK028実測図	19
第23図 SK018出土遺物実測図	20	第24図 SK022実測図	21
第25図 SK022出土遺物実測図	21	第26図 SK024実測図	22
第27図 SK024出土遺物実測図	22	第28図 SK025実測図	23
第29図 SK025出土遺物実測図	23	第30図 SK029実測図	23
第31図 SK029出土遺物実測図	23	第32図 SK040実測図	24
第33図 SK040出土遺物実測図	24	第34図 SK069実測図	25
第35図 SK069出土遺物実測図	25	第36図 SK078実測図	25
第37図 SK078出土遺物実測図	26	第38図 SK101実測図	26
第39図 SK101出土遺物実測図	26	第40図 SK109実測図	26
第41図 SK109出土遺物実測図	27	第42図 SK136実測図	27
第43図 SK136出土遺物実測図	27	第44図 SK175実測図	28
第45図 SK175出土遺物実測図	28	第46図 SK200実測図	28
第47図 SK200出土遺物実測図	29	第48図 SK213実測図	29
第49図 SK213出土遺物実測図	30	第50図 SK214実測図	30

第51図	SK214出土遺物実測図	30	第52図	SK243実測図	30
第53図	SK243出土遺物実測図	31	第54図	SK244実測図	31
第55図	SK244出土遺物実測図	31	第56図	SK100実測図	31
第57図	SK125実測図	32	第58図	SK135実測図	32
第59図	SK233実測図	32	第60図	SK030実測図	33
第61図	SK031実測図	33	第62図	SK087実測図	33
第63図	井戸	34	第64図	SE007実測図	35
第65図	SE007出土遺物実測図	36	第66図	SE010実測図	37
第67図	SE010出土遺物実測図①	38	第68図	SE010出土遺物実測図②	39
第69図	SE010出土遺物実測図③	40	第70図	SE010出土遺物実測図④	41
第71図	SE012実測図	42	第72図	SE012出土遺物実測図	43
第73図	SE021実測図	44	第74図	SE021出土遺物実測図①	46
第75図	SE021出土遺物実測図②	47	第76図	SE021出土遺物実測図③	48
第77図	SE021出土遺物実測図④	49	第78図	SE201実測図	50
第79図	SE201出土遺物実測図	50	第80図	SE242実測図	51
第81図	SX041出土遺物実測図①	53	第82図	SX041出土遺物実測図②	54
第83図	SX041出土遺物実測図③	55	第84図	SX01出土遺物実測図①	56
第85図	SX01出土遺物実測図②	57	第86図	SX01出土遺物実測図③	58
第87図	SX004出土遺物実測図	59	第88図	SX005出土遺物実測図	59
第89図	SX006出土遺物実測図	61	第90図	SP160実測図	62
第91図	SP160出土遺物実測図	62	第92図	SB01実測図	62
第93図	SB02実測図	63	第94図	SB03実測図	63
第95図	SB04実測図	63	第96図	SB05実測図	64
第97図	SB06実測図	64	第98図	SB07実測図	64
第99図	SB08実測図	64	第100図	包含層・整地層出土遺物実測図①	66
第101図	包含層・整地層出土遺物実測図②	67	第102図	包含層・整地層出土遺物実測図③	68
第103図	包含層・整地層出土遺物実測図④	69	第104図	包含層・整地層出土遺物実測図⑤	70
第105図	包含層・整地層出土遺物実測図⑥	71	第106図	包含層・整地層出土遺物実測図⑦	72
第107図	包含層・整地層出土遺物実測図⑧	73	第108図	包含層・整地層出土遺物実測図⑨	75
第109図	包含層・整地層出土遺物実測図⑩	76	第110図	包含層・整地層出土遺物実測図⑪	77
第111図	包含層・整地層出土遺物実測図⑫	79	第112図	柱穴・ピット出土遺物実測図①	80
第113図	柱穴・ピット出土遺物実測図②	81	第114図	柱穴・ピット出土遺物実測図③	82
第115図	包含層・整地層出土遺物実測図(銭貨①)	83	第116図	包含層・整地層出土遺物実測図(銭貨②)	84
第117図	トレンチ出土遺物実測図	84	第118図	第22次調査区遺構変遷図①	86
第119図	第22次調査区遺構変遷図②	87			

## 第8章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

第120図	第9次調査区Ⅱ・Ⅲ区の位置(1/800)	89	第121図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第1段階 16世紀前葉)	90
第122図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第2段階 16世紀後葉～末葉(1))	91	第123図	第9次調査区Ⅱ区遺構配置図 (第2段階 16世紀後葉～末葉(2))	92

第124図	第9次調査区Ⅱ区 トレンチ土層断面図(1/50) …… 95・96	第125図	Ⅱ区SD001-1・2・3土層断面図(1/20) … 97
第126図	Ⅱ区SD001-1・2出土遺物実測図(1/3) … 97	第127図	Ⅱ区SD001-3出土遺物実測図(1/3) … 98
第128図	Ⅱ区SD001-1・2出土銭貨(1/1) …… 98	第129図	Ⅱ区SD002出土遺物実測図(1/3) …… 99
第130図	Ⅱ区SD002下層出土銭貨(1/1) …… 99	第131図	Ⅱ区SK003実測図(1/30) …… 100
第132図	Ⅱ区SK003出土遺物実測図(1/3) …… 101	第133図	Ⅱ区SK004実測図(1/30) …… 102
第134図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図①(1/3) … 103	第135図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図②(1/4) … 103
第136図	Ⅱ区SK004出土遺物実測図③(1/3) … 104	第137図	Ⅱ区SK005実測図(1/30) …… 105
第138図	Ⅱ区SK005出土遺物実測図(1/3) …… 105	第139図	Ⅱ区SK006出土遺物実測図(1/3) …… 106
第140図	Ⅱ区SK007実測図(1/30) …… 106	第141図	Ⅱ区SK007出土遺物実測図(1/3) …… 106
第142図	Ⅱ区SK008実測図(1/30) …… 107	第143図	Ⅱ区SK008出土遺物実測図(1/3) …… 107
第144図	Ⅱ区SK009実測図(1/30) …… 108	第145図	Ⅱ区SK009出土遺物実測図(1/3) …… 108
第146図	Ⅱ区SK010実測図(1/30) …… 108	第147図	Ⅱ区SK010出土遺物実測図(1/3) …… 109
第148図	Ⅱ区SK011実測図(1/30) …… 110	第149図	Ⅱ区SK011出土遺物実測図(1/3) …… 110
第150図	Ⅱ区SK012実測図(1/30) …… 111	第151図	Ⅱ区SK012出土遺物実測図(1/3) …… 111
第152図	Ⅱ区SK013実測図(1/30) …… 112	第153図	Ⅱ区SK013出土遺物実測図(1/3) …… 112
第154図	Ⅱ区SK014実測図(1/30) …… 112	第155図	Ⅱ区SK014出土遺物実測図(1/3) …… 112
第156図	Ⅱ区SK017出土遺物実測図(1/3) …… 113	第157図	Ⅱ区SK018出土遺物実測図(1/3) …… 114
第158図	Ⅱ区SK019出土遺物実測図(1/3) …… 114	第159図	Ⅱ区SK022・023実測図(1/30) …… 115
第160図	Ⅱ区SK022出土遺物実測図(1/3) …… 116	第161図	Ⅱ区SK023出土遺物実測図(1/3) …… 116
第162図	Ⅱ区SK023出土銭貨(1/1) …… 116	第163図	Ⅱ区SK024実測図(1/30) …… 117
第164図	Ⅱ区SK024出土遺物実測図(1/3) …… 117	第165図	Ⅱ区SK025出土遺物実測図(1/3) …… 118
第166図	Ⅱ区SK026出土遺物実測図(1/3) …… 118	第167図	Ⅱ区SK027実測図(1/10) …… 118
第168図	Ⅱ区SK027出土遺物実測図(1/3) …… 119	第169図	Ⅱ区SE028土層断面実測図(1/30) … 119
第170図	Ⅱ区SE028出土遺物実測図①(1/3) … 120	第171図	Ⅱ区SE028出土遺物実測図②(1/8) … 121
第172図	Ⅱ区SE028出土銭貨(1/1) …… 122	第173図	Ⅱ区SE029出土遺物実測図(1/3) …… 122
第174図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図①(1/3) … 123	第175図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図②(1/3) … 124
第176図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図③(1/6) … 125	第177図	Ⅱ区SX030出土遺物実測図④(1/3) … 125
第178図	Ⅱ区SX031出土遺物実測図(1/3) …… 126	第179図	Ⅱ区SX032下層出土遺物実測図(1/3) … 126
第180図	Ⅱ区SX032出土遺物実測図(1/3) …… 127	第181図	Ⅱ区SX033実測図(1/50) …… 127
第182図	Ⅱ区SX033出土遺物実測図(1/3) …… 128	第183図	Ⅱ区SX033出土銭貨(1/1) …… 129
第184図	Ⅱ区SX034実測図(1/30) …… 129	第185図	Ⅱ区ピット出土遺物実測図①(1/3) … 130
第186図	Ⅱ区ピット出土遺物実測図②(1/5) … 130	第187図	Ⅱ区47層出土遺物実測図(1/3) …… 131
第188図	Ⅱ区45層出土遺物実測図(1/3) …… 132	第189図	Ⅱ区9・10・14・42層出土遺物実測図①(1/3) … 132
第190図	Ⅱ区9・10・14・42層出土遺物実測図②(1/6) … 133	第191図	Ⅱ区7層出土遺物実測図①(1/3) …… 134
第192図	Ⅱ区7層出土遺物実測図②(1/3) … 135	第193図	Ⅱ区出土遺物実測図①(1/3) …… 136
第194図	Ⅱ区出土遺物実測図②(1/3) …… 137	第195図	Ⅱ区出土銭貨(1/1) …… 138
第196図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第1段階 14世紀) …… 140	第197図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第2段階 15世紀末葉～16世紀前葉) … 141
第198図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第3段階 16世紀中葉～後葉) …… 142	第199図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第4段階 16世紀後葉～末葉) …… 143

第200図	第9次調査区Ⅲ区遺構配置図 (第5段階 近世以降) ……………	144	第201図	第9次調査区Ⅲ区トレンチ 土層断面図 (1/80) ……………	147・148
第202	Ⅲ区SD001出土遺物実測図 (1/3) ………	149	第203図	Ⅲ区SD002出土遺物実測図 (1/3) ………	149
第204図	Ⅲ区SD004実測図 (1/30) ……………	150	第205図	Ⅲ区SD004出土遺物実測図 (1/3) ………	150
第206図	Ⅲ区SD005出土遺物実測図 (1/3) ………	151	第207図	Ⅲ区SD006出土遺物実測図 (1/3) ………	151
第208図	Ⅲ区SK009出土遺物実測図 (1/3) ………	151	第209図	Ⅲ区SK010出土遺物実測図 (1/3) ………	152
第210図	Ⅲ区SK011実測図 (1/30) ……………	152	第211図	Ⅲ区SK011出土遺物実測図 (1/3) ………	153
第212図	Ⅲ区SK012実測図 (1/30) ……………	153	第213図	Ⅲ区SK012出土遺物実測図 (1/3) ………	153
第214図	Ⅲ区SK013実測図 (1/30) ……………	154	第215図	Ⅲ区SK013出土遺物実測図 (1/3) ………	154
第216図	Ⅲ区SK014出土遺物実測図 (1/3) ………	155	第217図	Ⅲ区SK015実測図 (1/30) ……………	155
第218図	Ⅲ区SK016出土遺物実測図 (1/3) ………	155	第219図	Ⅲ区SK017出土遺物実測図① (1/3) ……	156
第220図	Ⅲ区SK017出土遺物実測図 (1/4) ………	156	第221図	Ⅲ区SK019・SK020実測図 (1/30) ………	156
第222図	Ⅲ区SK019出土遺物実測図 (1/3) ………	157	第223図	Ⅲ区SK020出土遺物実測図 (1/3) ………	158
第224図	Ⅲ区SK021実測図 (1/30) ……………	158	第225図	Ⅲ区SK021出土遺物実測図① (1/3) ……	159
第226図	Ⅲ区SK021出土遺物実測図② (1/3) ……	160	第227図	Ⅲ区SK022出土遺物実測図 (1/3) ………	161
第228図	Ⅲ区SK023実測図 (1/30) ……………	161	第229図	Ⅲ区SK023出土遺物実測図 (1/3) ………	162
第230図	Ⅲ区SK024実測図 (1/30) ……………	163	第231図	Ⅲ区SK024出土遺物実測図 (1/3) ………	163
第232図	Ⅲ区SK025出土遺物実測図 (1/3) ………	163	第233図	Ⅲ区SK026実測図 (1/30) ……………	164
第234図	Ⅲ区SK026出土遺物実測図 (1/3) ………	164	第235図	Ⅲ区SK027実測図 (1/30) ……………	164
第236図	Ⅲ区SK027出土遺物実測図 (1/3) ………	165	第237図	Ⅲ区SK028実測図 (1/30) ……………	165
第238図	Ⅲ区SK028出土遺物実測図 (1/3) ………	166	第239図	Ⅲ区SK029実測図 (1/30) ……………	167・168
第240図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図① (1/3) ……	169	第241図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図② (1/6) ……	170
第242図	Ⅲ区SK029出土遺物実測図③ (1/3) ……	171	第243図	Ⅲ区SK030実測図 (1/30) ……………	172
第244図	Ⅲ区SK030出土遺物実測図 (1/3) ………	173	第245図	Ⅲ区SE031実測図 (1/30) ……………	174
第246図	Ⅲ区SE031井戸枠復元図 ……………	175	第247図	Ⅲ区SE031出土遺物実測図 (1/3) ………	175
第248図	Ⅲ区SE032実測図 (1/30) ……………	176	第249図	Ⅲ区SE032出土遺物実測図 (1/3) ………	177
第250図	Ⅲ区SE033井筒内出土遺物実測図 (1/3) ……	177	第251図	Ⅲ区SE033掘方出土遺物実測図 (1/3) ……	178
第252図	Ⅲ区SE033実測図 (1/30) ……………	179・180	第253図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図① (1/3) ……	181
第254図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図② (1/3) ……	182	第255図	Ⅲ区SE033出土遺物実測図③ (1/3) ……	183
第256図	Ⅲ区SX034実測図 (1/30) ……………	183	第257図	Ⅲ区SX034出土遺物実測図 (1/3) ………	184
第258図	Ⅲ区SX035実測図 (1/60) ……………	185	第259図	Ⅲ区SX035出土遺物実測図 (1/3) ………	186
第260図	Ⅲ区SX035下層出土遺物実測図 (1/3) ……	187	第261図	Ⅲ区SX035出土銭貨 (1/1) ……………	188
第262図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図① (1/3) ……	188	第263図	Ⅲ区ピット出土遺物実測図② (1/3) ……	189
第264図	Ⅲ区SP044出土遺物実測図 (1/1) ………	190	第265図	Ⅲ区51層出土遺物実測図 (1/3) ………	190
第266図	Ⅲ区48層出土遺物実測図 (1/3) ………	190	第267図	Ⅲ区36～39層出土遺物実測図 (1/3) ……	191
第268図	Ⅲ区34層出土遺物実測図 (1/3) ………	192	第269図	Ⅲ区19～21層出土遺物実測図 (1/3) ……	192
第270図	Ⅲ区25層出土遺物実測図① (1/3) ………	193	第271図	Ⅲ区25層出土遺物実測図② (1/3) ………	194
第272図	Ⅲ区25層出土遺物実測図③ (1/1) ………	195	第273図	Ⅲ区10～25層出土遺物実測図① (1/3) ……	196
第274図	Ⅲ区10～25層出土遺物実測図② (1/3) ………	197	第275図	Ⅲ区7～25層出土遺物実測図 (1/3) ………	198
第276図	Ⅲ区7層出土遺物実測図① (1/3) ………	199	第277図	Ⅲ区7層出土遺物実測図② (1/3) ………	200
第278図	Ⅲ区出土遺物実測図① (1/3) ……………	201	第279図	Ⅲ区出土遺物実測図② (1/3) ……………	202



第280図 Ⅲ区出土銭貨(1/1) …………… 203	第281図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ ガラス玉の鉛同位対比 ( <sup>206</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb- <sup>207</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb) …………… 208
第282図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ ガラス玉の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb) …………… 208	第283図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ ガラス玉の鉛同位対比 ( <sup>206</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb- <sup>207</sup> Pb/ <sup>204</sup> Pb)-図1の拡大図 … 209
第284図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ ガラス玉の鉛同位対比 ( <sup>207</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb- <sup>208</sup> Pb/ <sup>206</sup> Pb)-図2の拡大図 … 209	第285図 蛍光X線スペクトルと化学組成① …… 210
第286図 蛍光X線スペクトルと化学組成② …… 211	第287図 蛍光X線スペクトルと化学組成③ …… 212
第288図 分析リスト …………… 212	第289図 メダイ様金属製品・ガラス玉実測図(1/1) … 218
第290図 メダイ様金属製品・出土分布図 …… 219	第291図 「府内」桜町遺構配置図(1/600) …… 221

## 表 目 次

### 第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

第1表 遺構一覧表① …………… 3	第2表 遺構一覧表② …………… 4
--------------------	--------------------

### 第8章 中世大友府内町跡第9次調査区

第3表 Ⅱ区遺構一覧表 …………… 93	第4表 Ⅲ区遺構一覧表① …………… 145
第5表 Ⅲ区遺構一覧表② …………… 146	

### 第9章 自然科学的分析

第6表 大分市の中世大友府内町跡から出土した メダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、 鉛ガラスの記載 …………… 205	第7表 大分市の中世大友府内町跡から出土した メダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、 鉛ガラスの化学組成 …………… 206
第8表 大分市の中世大友府内町跡から出土した メダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、 鉛ガラスの鉛同位対比值 …………… 207	

## 遺 物 観 察 表 目 次

#### 遺物観察表1

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類①) … 227
------------------------------

#### 遺物観察表3

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類③) … 229
------------------------------

#### 遺物観察表5

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤) … 231
------------------------------

#### 遺物観察表7

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑦) … 233
------------------------------

#### 遺物観察表9

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑨) … 235
------------------------------

#### 遺物観察表2

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類②) … 228
------------------------------

#### 遺物観察表4

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類④) … 230
------------------------------

#### 遺物観察表6

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥) … 232
------------------------------

#### 遺物観察表8

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑧) … 234
------------------------------

#### 遺物観察表10

第22次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類⑩) … 236
------------------------------

遺物観察表11	
第22次調査区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	
第22次調査区遺物観察表（土製品）	
第22次調査区遺物観察表（石製品）	237
遺物観察表13	
第22次調査区遺物観察表（銭貨）	239
遺物観察表15	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類②）	241
遺物観察表17	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類④）	243
遺物観察表19	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑥）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（石製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（金属製品）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（瓦）	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（銭貨）	245
遺物観察表21	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類②）	247
遺物観察表23	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類④）	249
遺物観察表25	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑥）	251
遺物観察表27	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（石製品）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（金属製品）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（瓦）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（その他）	253

遺物観察表12	
第22次調査区遺物観察表（金属製品）	
第22次調査区遺物観察表（瓦）	
第22次調査区遺物観察表（その他）	238
遺物観察表14	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	240
遺物観察表16	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類③）	242
遺物観察表18	
第9次調査区Ⅱ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑤）	244
遺物観察表20	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類①）	246
遺物観察表22	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類③）	248
遺物観察表24	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑤）	250
遺物観察表26	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土器・陶磁器類⑦）	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（土製品）	252
遺物観察表28	
第9次調査区Ⅲ区遺物観察表（銭貨）	254

## 写真図版目次

### 写真図版 1

第22次調査区 北から	
第22次調査区 東から	
SD202 SD202土層	
SK008 SK013	
SK018 SK024	257

### 写真図版 2

SK029 SK040	
SK069 SK100	
SK109 SK175	
SK200 SK243	258

写真図版 3

SE007 (埴塙 (取瓶) 出土状況  
SE007  
SE010 SE012  
SE021・SE242 SE021・SE242完掘  
SE242井筒 SE201 ..... 259

写真図版 5

SK008出土銅製柄杓  
SK040出土布  
SE007出土埴塙 (取瓶)  
SE012出土鉛製品  
SX006出土油煙墨 ..... 261

写真図版 7

包含層出土銅製品  
包含層出土ガラス・水晶  
トレンチ出土遺物 ..... 263

写真図版 9

Ⅱ区SD001-1 (西から)、Ⅱ区SK003  
Ⅱ区SK003完掘状態、Ⅱ区SK004  
Ⅱ区SK004完掘状態、Ⅱ区SK005 ..... 265

写真図版 11

Ⅱ区SK013・SK014、Ⅱ区SK013  
Ⅱ区SK014、Ⅱ区SK022  
Ⅱ区SK023、Ⅱ区SK022・SK023完掘状態  
Ⅱ区SK024、Ⅱ区SE028 ..... 267

写真図版 13

Ⅲ区完掘状態全景 (東から)  
Ⅲ区SK011  
Ⅲ区SK012、Ⅲ区SK013  
Ⅲ区SK015、Ⅲ区SK019・SK020 ..... 269

写真図版 15

Ⅲ区SK029 (西から)  
Ⅲ区SK029完掘状態 (北から)  
Ⅲ区SK030、Ⅲ区SE031  
Ⅲ区SE032  
Ⅲ区SE033集石検出状態 (北西から)  
Ⅲ区SE033集石検出状態 (北から)  
Ⅲ区SE033井筒内遺物出土状態 ..... 271

写真図版 4

SE201 SP160  
SX004 SX005  
SX006 SX006近景  
SX041 SX01 ..... 260

写真図版 6

分銅  
包含層出土埴塙 ..... 262

写真図版 8

Ⅱ区全景 (北から)、Ⅱ区全景 (西から)  
Ⅱ区完掘状態全景 (東から)  
Ⅱ区完掘状態全景 (西から)  
Ⅱ区完掘状態全景 (北から)  
Ⅱ区SD001-3 (西から) ..... 264

写真図版 10

Ⅱ区SK005完掘状態、Ⅱ区SK007  
Ⅱ区SK008、Ⅱ区SK009  
Ⅱ区SK010、Ⅱ区SK011 ..... 266

写真図版 12

Ⅱ区SE028、Ⅱ区SE029  
Ⅱ区SX030、Ⅱ区SX033  
Ⅱ区SX033、Ⅱ区SX033完掘状態  
Ⅲ区全景 (東から)、Ⅲ区完掘状態全景 (東から) ... 268

写真図版 14

Ⅲ区SK021、Ⅲ区SK021完掘状態  
Ⅲ区SK023、Ⅲ区SK023完掘状態  
Ⅲ区SK024、Ⅲ区SK026  
Ⅲ区SK027、Ⅲ区SK029 (北から) ..... 270

写真図版 16

Ⅲ区SE033半裁状態 (南から)  
Ⅲ区SE033完掘状態 (北から)  
Ⅲ区SX034、Ⅲ区SX035  
Ⅱ区SD001-1・2出土遺物  
Ⅱ区SD002出土遺物、Ⅱ区SK004出土遺物  
Ⅱ区SK005出土遺物、Ⅱ区SK006出土遺物 ... 272

写真図版17

- Ⅱ区SK013出土遺物、Ⅱ区SK018出土遺物
- Ⅱ区SE028出土遺物、Ⅱ区SX030出土遺物
- Ⅱ区47層出土遺物、Ⅱ区45層出土遺物 …… 273

写真図版19

- Ⅲ区SK021出土遺物、Ⅲ区SK023出土遺物
- Ⅲ区SX034出土遺物、Ⅲ区SK029出土遺物
- Ⅲ区SP044出土遺物、Ⅲ区19~21層出土遺物 …… 275

写真図版21

- Ⅲ区7層出土遺物、Ⅲ区出土遺物 …… 277

写真図版18

- Ⅱ区7層出土遺物、Ⅱ区出土遺物 …… 274

写真図版20

- Ⅲ区25層出土遺物
- Ⅲ区10~25層出土遺物
- Ⅲ区7層出土遺物 …… 276

## 第7章 中世大友府内町跡第22次調査区

### 第1節 調査の概要

大友氏館  
府内古図

中世大友府内町跡第22次調査区は、大分県大分市錦町3丁目に所在し、標高約4.0mの沖積低地上に立地する。1987年に大分市史編纂委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は「大友氏館跡」の東側に第2南北街路を挟んで隣接しており、名ヶ小路と御所小路に挟まれた「桜町」の一画に相当する地点である。

本章で報告する第22次調査区については1993年発行の『大分県遺跡地図』において、「中世大友城下町」の名称で登録されていたことや平成12(2000)年度以降継続されている一般国道10号古国府拡幅事業に伴う周辺地域の発掘調査で、戦国時代の遺構・遺物の存在が確実視されていたことから、平成14(2002)年度に発掘調査(本調査)を行った。本調査区は南に位置する9次調査区と隣接し、北側の28次調査区とは道路を挟んで隣接する(第1図)。調査期間は2002(平成14)年7月から2003(平成15)年3月まで8ヶ月間実施し、調査面積は約476㎡である。

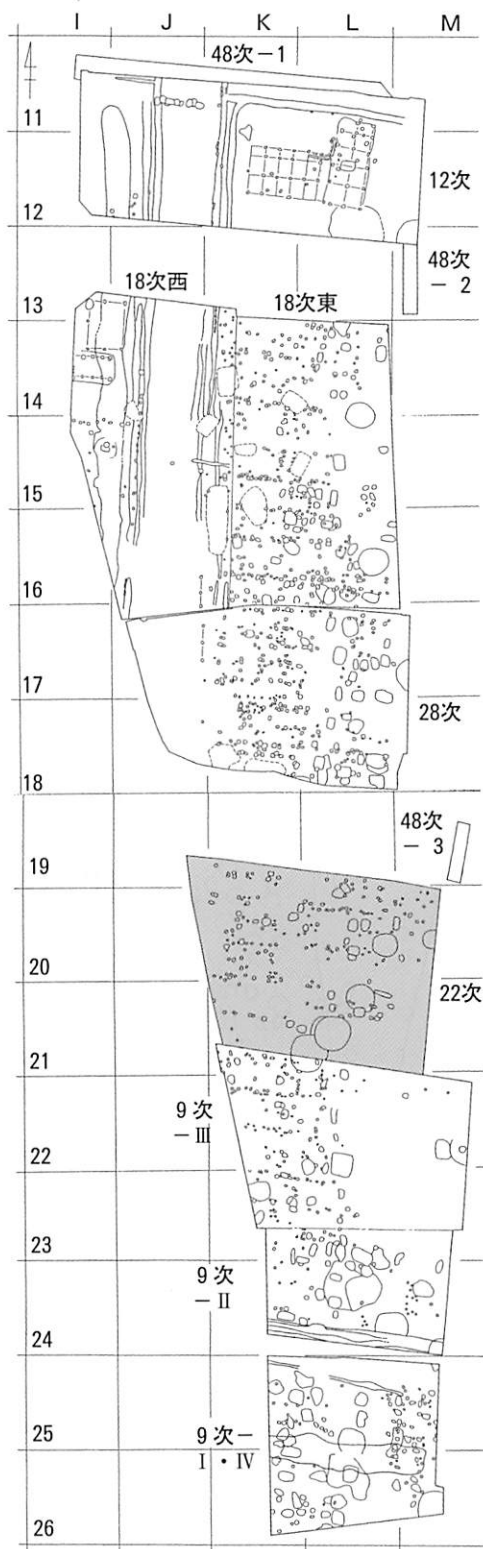
### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 遺構の概要と基本層序

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へI～M、北から南へ1～78の番号を付し、数字とアルファベットの組み合わせで、各々の区画を呼称することにした(J19区、M21区など)。本章で報告する第22次調査区は東西J～M区、南北19～21区に相当する(第2図)。

本調査区では弥生時代から近世にいたる各時代の遺物が出土しているが、遺構が主体的に検出される時期は16世紀後半代の戦国時代である。

本調査区では旧表土上に近年の造成による置土が0.6～0.9mほど堆積しており、この造成土の下位には近世から現代の所産と思われる水田層が0.5mほど堆積する。発掘調査ではこの水田層より上位を大型重機によって除去し、それより下位の遺物包含層については、発掘作業員を投入して



第1図 第22次調査区的位置(1/800)

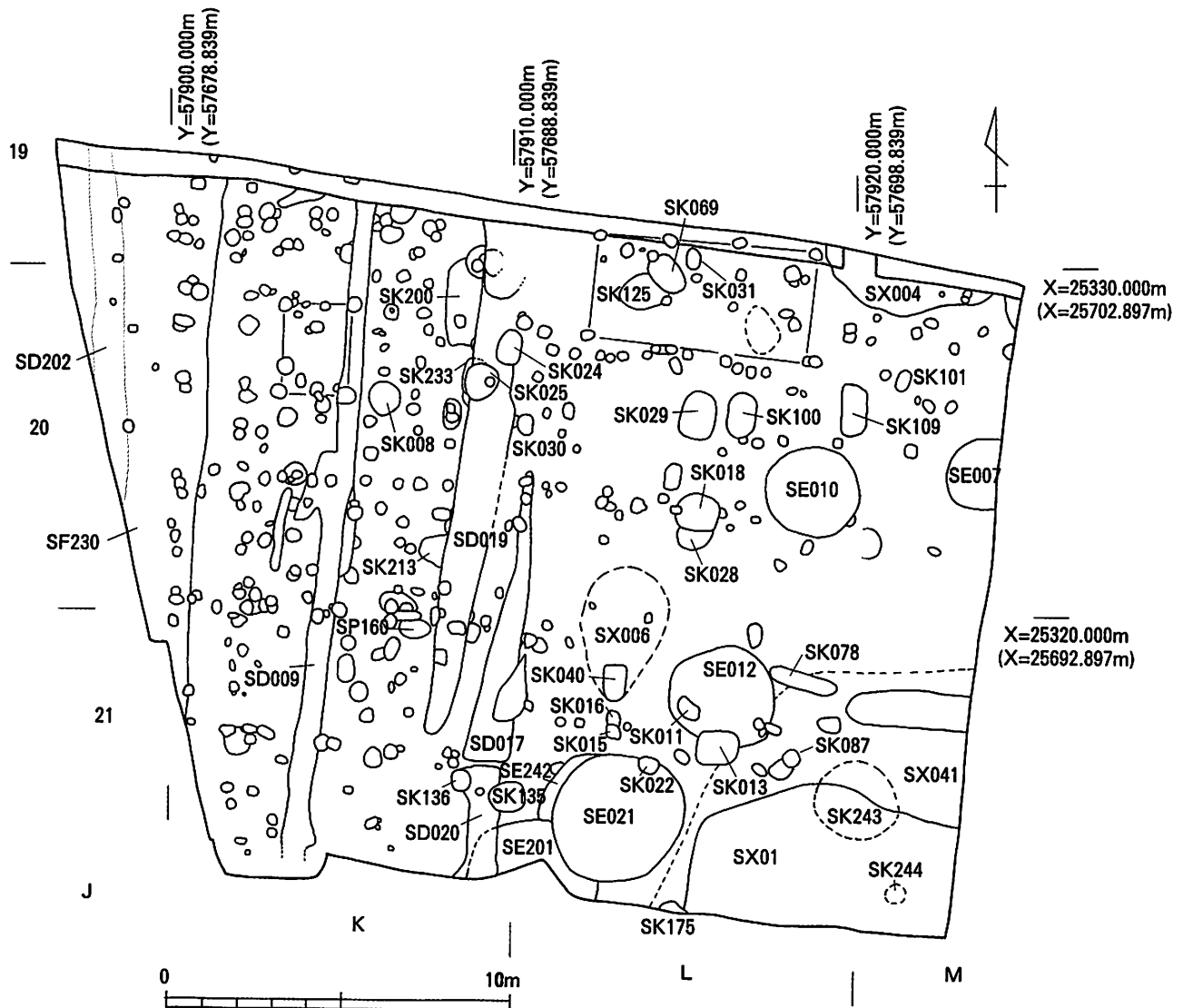
## 第2節 遺構と遺物

手堀による掘り下げを行った。

本章で検討する第22次調査区の北側では平成13年11月～平成14年3月、平成14年4月～平成15年3月に第18次調査、平成15年5月～12月に第28次調査が行われているが、そこでは「大友氏館」の東を走る第2南北街路が検出されている。当調査区でもそれに続く道路状遺構を調査区西側で検出している。さらに、道路状遺構の下層には道路構築以前に存在した溝状遺構を検出した。また、道路状遺構の東側には、掘立柱建物・土坑・井戸・土器溜まり・柱穴等があり、その大半が16世紀代の戦国時代に比定される。また、調査区南東部では第9次調査区にもみられる16世紀後葉代と思われる掘り込み遺構を検出している。

各々の遺構の配置と土層の堆積状況については第2～5図を参照されたい。また、本報告書で使用する遺構番号と発掘調査時に使用した遺構名称が異なるため、第1・2表で提示した遺構一覧表で整理を行っている。

以下、遺構と出土遺物の詳細を報告する。



第2図 大友22次調査区遺構配置図 (1/200)

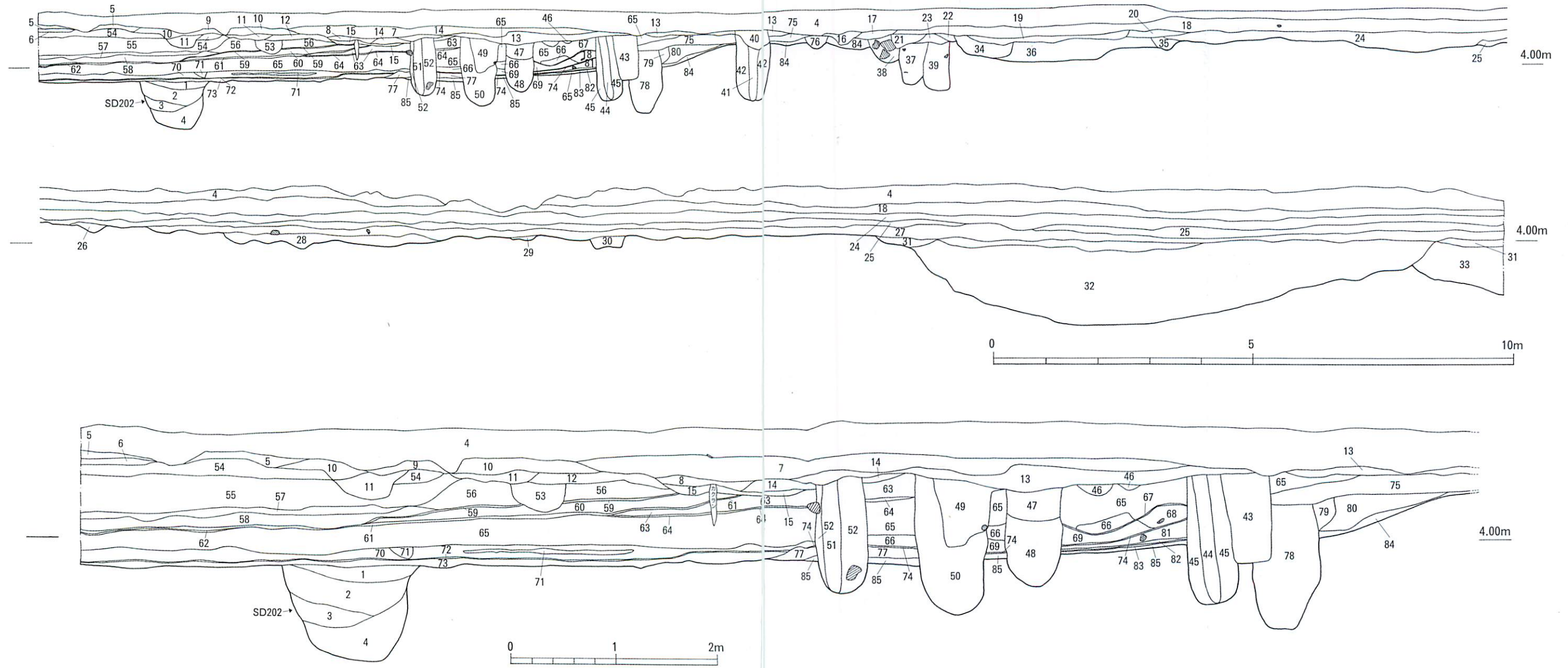
第1表 遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SF230	S230	道路状遺構	K19-J21	16世紀中葉～末葉	第二南北街路	9
SD009	S009	溝状遺構	K20-K21	16世紀末		11
SD017	S017	溝状遺構	L20-K21	近世		13
SD019	S019	溝状遺構	K20-21	近世		14
SD020	S020	溝状遺構	K21	近世		13
SD202	S202	溝状遺構	J19-J20	16中葉以前	骸骨・第2南北街路の構築以前 同じ埋土から玉・罎(中世)	15
SK008	S008	土坑	K20	16世紀後葉		16
SK011	S011	土坑	L21	16世紀末葉	S012を切る	18
SK013	S013	土坑	L21	16世紀末葉以降	S012を切る	18
SK015	S015	土坑	L21	16世紀後葉以降	S016を切る	19
SK016	S016	土坑	L21	16世紀後葉以降		19
SK018	S018	土坑	L20	16世紀末葉	SK028を切る	19
SK022	S022	土坑	L21	16世紀末葉	S021を切る	21
SK024	S024	土坑	K20-L20	16世紀後葉?		22
SK025	S025	土坑	K20	16世紀後葉?		23
SK028	S028	土坑	L20	不明		19
SK029	S029	土坑	L20	16世紀後葉～末葉		23
SK030	S030	土坑	L20	不明		33
SK031	S031	土坑	L19	不明		33
SK040	S040	土坑	L21	16世紀後葉～末葉	二つの土坑が重複・SX006の上位遺構 布状の遺物	24
SK069	S069	土坑	L19-L20	16世紀後葉	SK125を切る	25
SK078	S078	土坑	L21	16世紀後葉		25
SK087	S087	土坑	L20	不明		30
SK100	S100	土坑	L20	不明		31
SK101	S101	土坑	M20	不明		26
SK109	S109	土坑	L20-M20	16世紀後葉		26
SK125	S125	土坑	L20北	16世紀後葉以前	SK069やSP033に切られる	31
SK135	S135	土坑	K21-L21	近世		32
SK136	S136	土坑	K21	近世		27
SK175	S175	土坑	L21	16世紀後葉		28
SK200	S200	土坑	K20	16世紀後葉～末葉		28
SK213	S213	土坑	K20	16世紀後葉		29
SK214	S214	土坑	K20	16世紀後葉～末葉		30
SK233	S233	土坑	K20	不明		32
SK243	S243	土坑	L21	16世紀中葉～後葉		30
SK244	S244	土坑	L21	16世紀中葉～後葉		31
SE007	S007	井戸	M20	16世紀中葉～後葉	埧塙・漆器椀	35
SE010	S010	井戸	L20	16世紀後葉～末葉		36
SE012	S012	井戸	L21	16世紀後葉～末葉	小柄・鉛製品	42
SE021	S021	井戸	L21	16世紀中葉～末葉	二つ以上の井戸が重複	43
SE201	S201	井戸	K21-L21	14～15世紀	方形椀	78
SE242	S242	井戸	L21	14世紀代?	SE021とSE201に切られる(範囲不明)	79
SX041	S041	掘込遺構	L21-M21	16世紀後葉		52
SX01	SX01	整地層	M20-M21	16世紀中葉～後葉	調査区東南部・SX041と重複・常滑	52
SX004	S004	土師器溜まり	L19-M20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	58
SX005	S005	土師器溜まり	L20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	59
SX006	S006	土師器溜まり	L20-L21	16世紀中葉～後葉	油煙墨	60
SX236	S236	土師器溜まり	M20	16世紀中葉～後葉	土師器溜まり	60
SP160	S160	ピット	K21	16世紀代	大型ピット・円鏝による根締め 甕型分銅(長軸0.8cm)	62
SP001	S001	ピット	L19	16世紀末葉?	SB01 礎盤をもつ柱穴	62
SP064	S064	ピット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP066	S066	ピット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP117	S117	ピット	L19	16世紀末葉?	SB01	62
SP052	S052	ピット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP046	S046	ピット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP047	S047	ピット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP060	S060	ピット	L20	16世紀末葉?	SB01	62
SP079	S079	ピット	L21	16世紀末葉?	SB01	62

第2表 遺構一覧表②

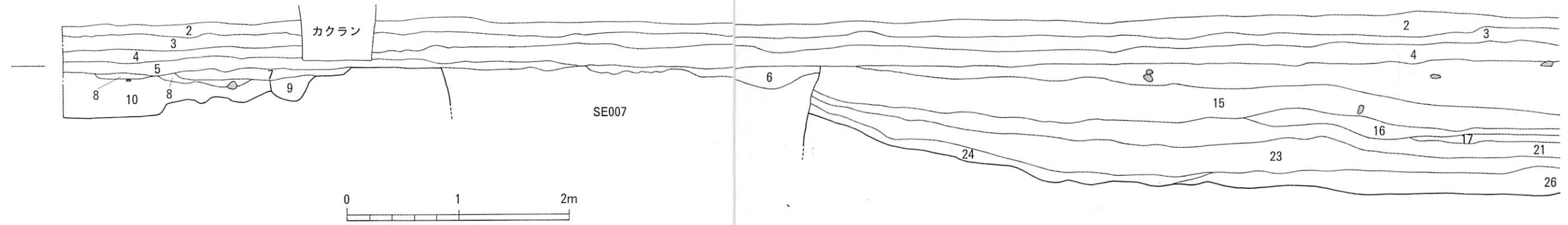
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SP099	S099	ピット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP106	S106	ピット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP096	S096	ピット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP023	S023	ピット	K20	16世紀末葉?	SB02	63
SP145	S145	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP146	S146	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP147	S147	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP179	S179	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP192	S192	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP193	S193	ピット	K19	16世紀末葉?	SB03	63
SP144	S144	ピット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP194	S194	ピット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP172	S172	ピット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP173	S173	ピット	K19	16世紀末葉?	SB04	63
SP196	S196	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	63
SP073	S073	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP134	S134	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP107	S107	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP133	S133	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP115	S115	ピット	K20	16世紀末葉?	SB05	64
SP089	S089	ピット	K20	16世紀末葉?	SB06	64
SP219	S219	ピット	K20	16世紀末葉?	SB06	64
SP095	S095	ピット	K20-21	16世紀末葉?	SB07	64
SP140	S140	ピット	K20-21	16世紀末葉?	SB07	64
SP155	S155	ピット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP210	S210	ピット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP191	S191	ピット	K21	16世紀末葉?	SB07	64
SP150	S150	ピット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP162	S162	ピット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP223	S223	ピット	K20	16世紀末葉?	SB08	64
SP239	S239	ピット	K21	16世紀末葉?	SB08	64
SP039	S039	ピット	L20	16世紀末葉?	遺物のみ	64
SP043	S043	ピット	L20		遺物のみ	
SP086	S086	ピット	L20		遺物のみ	
SP110	S110	ピット	K20		遺物のみ	
SP112	S112	ピット	K20		遺物のみ	
SP113	S113	ピット	K20		遺物のみ	
SP118	S118	ピット	K20		遺物のみ	
SP120	S120	ピット	K20		遺物のみ	
SP121	S121	ピット	K20		遺物のみ	
SP129	S129	ピット	M20		遺物のみ	
SP137	S137	ピット	L21		遺物のみ	
SP141	S141	ピット	K20		遺物のみ	
SP142	S142	ピット	K20		遺物のみ	
SP152	S152	ピット	L21		遺物のみ	
SP154	S154	ピット	K20		遺物のみ	
SP181	S181	ピット	K20		遺物のみ	
SP186	S186	ピット	K・L21		遺物のみ	
SP199	S199	ピット	K21		遺物のみ	
SP240	S240	ピット	K21		遺物のみ	
SP241	S241	ピット	K20-21	16世紀末葉?	遺物のみ	
SP245	S245	ピット	K20		遺物のみ	
SP247	S247	ピット	K19		遺物のみ	
SP248	S248	ピット	K19		遺物のみ	
SP251	S251	ピット	K19		遺物のみ	
SP254	S254	ピット	K20		遺物のみ	
SP258	S258	ピット	K20		遺物のみ	
SP260	S260	ピット	K21		遺物のみ	
SP271	S271	ピット	K21		遺物のみ	
SP277	S277	ピット	K19		遺物のみ	
SP278	S278	ピット	J19		遺物のみ	
SP284	S284	ピット	K21		遺物のみ	
SP290	S290	ピット	K20		遺物のみ	
SP002	S002	ピット	L20		遺物のみ	





- |  |   |   |   |
|--|---|---|---|
| <p>4 暗褐色シルト質土 焼土・白色粒を含み、やや締まる</p> <p>5 灰オリブ色シルト質土 鉄分が沈着し、よく締まる</p> <p>6 灰黄褐色シルト質土 わずかに炭化物や焼土を含み、よく締まる</p> <p>7 灰褐色シルト質土 焼土を少量含む</p> <p>8 褐灰色粘質土 焼土塊や炭化物を多く含む、ややしまりがいい。わずかに砂が混ざる</p> <p>9 灰黄褐色シルト質土 わずかに焼土を含む</p> <p>10 灰褐色シルト質土 焼土をわずかに含む</p> <p>11 灰褐色砂質土 少量の礫や白色粒を含む</p> <p>12 灰黄褐色シルト質土 ややしめる</p> <p>13 褐灰色粘質土 焼土・炭化物を多く含む、ややしまりなし</p> <p>14 褐色シルト質土 少量のマンガン粒や炭化物を含む</p> <p>15 褐色砂質土 炭を多く含む、しまりなし</p> <p>16 褐灰色シルト質土 炭化物・焼土を少量含む</p> <p>17 褐灰色シルト質土 わずかに焼土塊・白色粒を含む</p> <p>18 灰黄褐色粘質土 鉄分沈着、焼土・炭化物を多量に含む</p> <p>19 暗灰黄色砂質土 焼土片・炭化物・白色粒を多く含む、ややしまる</p> <p>20 明褐色砂質土 焼土片を含み、しまる</p> <p>21 暗灰黄色シルト質土 少量の焼土片・土器片・炭化物を含む</p> <p>22 暗灰黄色粘質土 わずかに焼土片を含み、ややしまる</p> <p>23 暗オリブ褐色粘質土 少量の焼土片やマンガン粒を含み、ややしまる</p> <p>24 暗褐色粘質土 焼土片・土器片を少量含む、ややしまる</p> <p>25 暗褐色粘質土 わずかに鉄分を含む(漸位層か)</p> | <p>26 黒褐色シルト質土 ややしまり、微細な焼土片・白色粒を含む</p> <p>27 灰黄褐色粘質土 鉄分沈着、ややしまる</p> <p>28 黒褐色シルト質土 5mm以下の焼土片・炭化物を含む</p> <p>29 暗褐色シルト質土 1cm以下の焼土片・微細な炭化物をわずかに含む、ややしまる</p> <p>30 にぶい黄褐色シルト質土 ややしめる</p> <p>31 灰黄褐色粘質土 炭がたまる、遺物を含む</p> <p>32 褐色シルト質土 SX004</p> <p>33 暗褐色シルト質土 SX236</p> <p>34 暗灰黄色シルト質土 少量の焼土片や炭化物を含み、ややしまる SD009</p> <p>35 褐色砂質土 焼土片・炭化物を多く含む</p> <p>36 褐色シルト質土 焼土塊・炭化物を多量に含む</p> <p>37 黒褐色粘質土 焼土塊・炭化物を多く含む。ややしまりなし</p> <p>38 オリブ褐色シルト質土 拳大の礫を多く含む。ややしまる</p> <p>39 黒褐色粘質土 焼土・炭化物を多く含む。しまりなし。</p> <p>40 褐灰色シルト質土 やや大粒の焼土と微細な炭化物を多く含む SP306</p> <p>41 灰黄褐色シルト質土 礫・焼土片・炭化物を多く含む</p> <p>42 にぶい黄褐色シルト質土 ややしめる</p> <p>43 黒褐色粘質土 微細な焼土片・白色粒を少量含む。しまりがなく、ぼそぼそしている</p> <p>44 黒褐色シルト質土 大粒の炭化物と微細な焼土を大量に含む、ややしまる(柱痕)</p> <p>45 灰褐色シルト質土 ややしめる(柱穴埋土)</p> <p>46 灰オリブ色砂質土 少量の黄褐色ブロック・土器片・礫を含む。ややしまりなし</p> <p>47 暗褐色シルト質土 少量の土器・焼土・炭化物等を含む、ややしまる。</p> | <p>48 暗褐色粘質土 礫・焼土・炭化物を多く含む、ややしまりなし。</p> <p>49 暗褐色シルト質土 少量の白色粒・炭化物・焼土・遺物を含み、ややしまりなし</p> <p>50 暗褐色シルト質土 少量の白色粒・焼土を含む。ややしまる。(柱穴)</p> <p>51 黒褐色粘質土 微細な焼土片を多く含む。しまりなし。</p> <p>52 黒褐色粘質土 微細な焼土片を少量含む。ややしまる。</p> <p>53 にぶい黄褐色シルト質土 しまる</p> <p>54 暗灰黄褐色砂質土 固くしまる。硬化面</p> <p>55 黒褐色シルト質土 焼土片・炭化物・土器片・礫等を多く含む。ややしまる</p> <p>56 灰黄褐色砂質土 土器片・砂利を含む</p> <p>57 灰色砂質土 ややしめる</p> <p>58 灰色シルト質土 ややしまり、礫・白色粒をわずかに含む</p> <p>59 灰色砂質土 56層との境が固くしまる</p> <p>60 黒褐色粘質土 焼土片・白色粒・炭化物をわずかに含む</p> <p>61 褐灰色粘質土 黄褐色ブロックを少量含む</p> <p>62 褐灰色シルト質土 ややしめる</p> <p>63 褐色シルト質土 ややしまり、土器片・焼土片・炭化物をわずかに含む</p> <p>64 灰色シルト質土 65層との境でよくしまる</p> <p>65 黒褐色粘質土 焼土片・白色粒をわずかに含む 55層よりきめが細かくしまる</p> <p>66 暗褐色砂質土 ややしまりがなく、オリブ褐色砂質ブロックを含む</p> <p>67 灰色シルト質土 ややしめる。厚さ1~3mm</p> <p>68 暗灰黄色シルト質土 しまる。微細な焼土や白色粒を含む</p> <p>69 暗褐色砂質土 ややしまりなし。礫・白色粒をわずかに含む</p> | <p>70 灰色粘質土 小砂利と黄褐色ブロックを多く含む</p> <p>71 黒褐色粘質土 黄褐色ブロックを含む</p> <p>72 褐灰色粘質土 均質でややしまる</p> <p>73 黒褐色粘質土 わずかに白色粒と炭化物を含み、よくしまる</p> <p>74 灰色シルト質土 固くしまる。厚さ5mm程度</p> <p>75 灰黄色砂質土 ややしめる。部分的に鉄分沈着。</p> <p>76 灰黄色シルト質土 ややしまりなし。焼土片・白色粒をわずかに含む</p> <p>77 暗褐色シルト質土 固くしまる。</p> <p>78 にぶい黄褐色粘質土 ややしめる。焼土片・白色粒をわずかに含む(柱穴)</p> <p>79 にぶい黄褐色粘質土 ややしめる。土器片を含む。78層とほぼ同じ。</p> <p>80 暗灰黄色砂質土 ややしめる。微細な焼土片や白色粒をわずかに含む</p> <p>81 暗灰黄色シルト質土 よくしまる。マンガン粒が沈着。</p> <p>82 灰黄褐色シルト質土 ややしめる。</p> <p>83 灰色砂質土 この層の下面がよくしまる。</p> <p>84 暗オリブ褐色シルト質土 焼土片・マンガン粒をわずかに含む</p> <p>85 暗褐色粘質土 きめが細かく、固くしまる</p> |
|--|---|---|---|

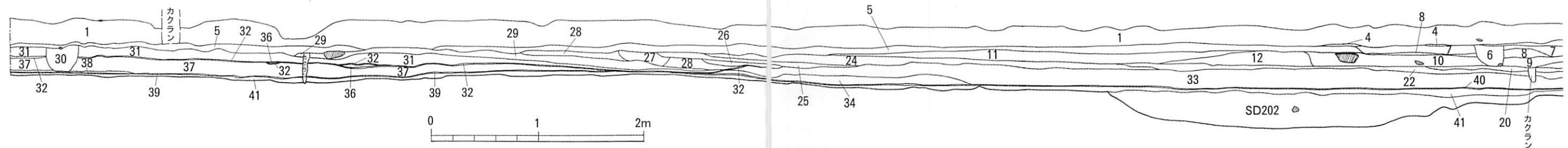
第3図 第22次調査区 北壁土層(上1/80 下1/40)



調査区東壁土層

- |    |              |                           |    |           |                             |    |           |          |
|----|--------------|---------------------------|----|-----------|-----------------------------|----|-----------|----------|
| 1  | にぶい 橙色土      | マンガン質を若干含む。               | 11 | にぶい黄橙色土   | 砂質土を含む。                     | 21 | にぶい黄橙色粘質土 |          |
| 2  | 橙 色 土        | マンガン沈着。少量の赤褐色粒とわずかな遺物を含む。 | 12 | 浅黄橙色砂質土   |                             | 22 | 黒褐色シルト質土  | ややしまる。   |
| 3  | にぶい 橙色土      | マンガン質を若干含む、赤褐色粒と土器片を少量含む。 | 13 | にぶい黄橙色粘質土 |                             | 23 | 暗褐色粘質土    | ややしまる。   |
| 4  | 橙 色 土        |                           | 14 | 暗褐色シルト質土  | 土器片や礫(4cm大)を少量含む。ややしまりが無い。  | 24 | 暗灰黄色粘質土   | ややしまる。少量 |
| 5  | 灰 褐 色 土      |                           | 15 | 浅黄橙色土     | 少量の炭化物和礫(5mm大)を含む。ザラザラしている。 | 25 | 黄灰色粘質土    | しまる。焼土片・ |
| 6  | にぶい浅黄橙色土     |                           | 16 | 黒褐色粘質土    | 少量の白色粒を含む、ややしまる。            | 26 | 黒褐色シルト質土  | しまりが無い。  |
| 7  | にぶい黄橙色土      |                           | 17 | 黒褐色粘質土    | ややしまりなし。                    | 27 | 暗褐色シルト質土  | ややしまりが無い |
| 8  | 暗褐色シルト質土     | ややしまる。焼土・白色粒を少量含む。        | 18 | 暗褐色シルト質土  |                             |    |           |          |
| 9  | 暗オリーブ褐色シルト質土 | ややしまる。焼土・炭化物・白色粒を多く含む。    | 19 | 黒褐色粘質土    | ややしまる。部分的に鉄分沈着。遺物を含む。       |    |           |          |
| 10 | 暗褐色シルト質土     | ややしまる。SX236               | 20 | 褐色粘質土     | ややしまりが無い。                   |    |           |          |

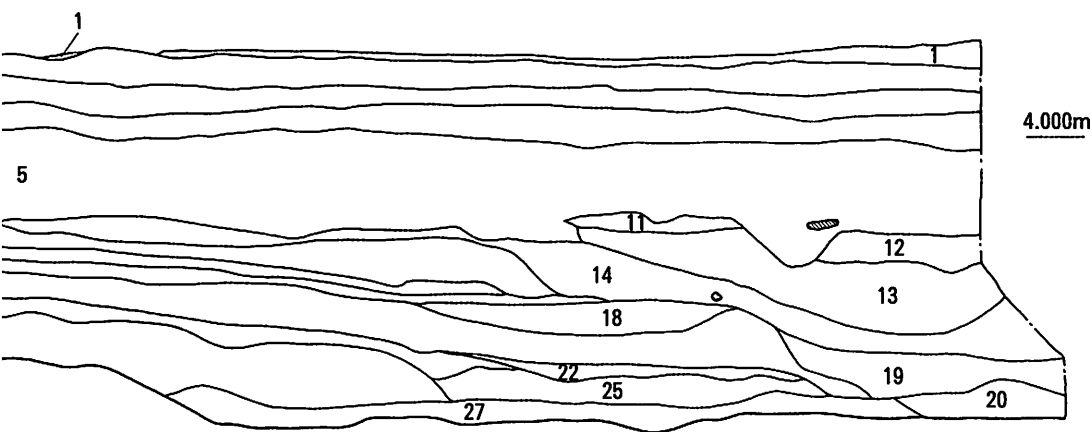
第4図 第22次調査区東壁土層図(1/40)



調査区西壁土層

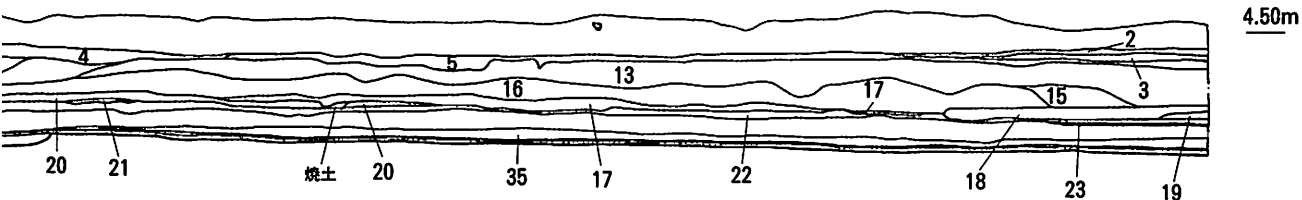
- |    |              |                           |    |          |                                  |    |          |                               |    |          |              |
|----|--------------|---------------------------|----|----------|----------------------------------|----|----------|-------------------------------|----|----------|--------------|
| 1  | 暗褐色シルト質土     | ややしまる。白色粒・焼土片を多く含む        | 11 | 暗灰黄色砂質土  | よくしまる。焼土・砂利を多く含む。                | 21 | 褐灰色粘質土   | 灰が入る。少量の炭や焼土を含む。              | 31 | 褐灰色粘質土   | ややしまりなし。少量の  |
| 2  | 灰オリーブ色シルト質土  | 鉄分沈着。よくしまる。               | 12 | 灰黄色砂質土   | 砂利や礫を多く含む。                       | 22 | 褐灰色粘質土   | 黄褐色ブロックを少量含む。                 | 32 | 黄灰色砂質土   | 均質でややしまる。    |
| 3  | 灰黄褐色シルト質土    | 炭化物や焼土片をわずかに含む。           | 13 | 黒褐色シルト質土 | ややしまりなし。焼土・炭化物・礫を多く含む            | 23 | 褐灰色シルト質土 | ややしまる。                        | 33 | 黒褐色シルト質土 | 13層よりきめが細かく、 |
| 4  | 褐灰色粘質土       | ややしまりなし。白色粒・礫・焼土・炭化物を多く含む | 14 | 灰色粘質土    | ややしまりなし。砂や焼土を少量含む                | 24 | 灰黄褐色粘質土  | しまる。上面にマンガン沈着。                | 34 | 灰黄褐色粘質土  | ややしまる。黄褐色    |
| 5  | 暗灰黄色砂質土      | かたくしまる。土器片・小礫を多く含む        | 15 | 褐灰色砂質土   | ややしまりなし。焼土・炭化物・小礫を多く含む           | 25 | 褐灰色砂質土   | ややしまりなし。砂利・土器片を少量含む。          | 35 | 灰色砂質土    | 砂利と黄褐色粘質土    |
| 6  | 黄灰色粘質土       | 拳大の礫が下部に入る。ややしまりなし。       | 16 | 褐灰色粘質土   | ややしまりなし。                         | 26 | 褐灰色シルト質土 | 少量の焼土・白色粒を含む。                 | 36 | 灰黄褐色粘質土  | ややしまる。少量の    |
| 7  | 褐灰色シルト質土     | ややしまりなし。白色粒や焼土を少量含む。      | 17 | 灰黄褐色砂質土  | ややしまる。北側に灰が密に入る。                 | 27 | 褐灰色砂質土   | 少量の白色粒を含む。                    | 37 | 灰黄褐色粘質土  | ややしまる。黄褐色    |
| 8  | 黄灰色粘質土       | ややしまりなし。上面にマンガン沈着。        | 18 | 灰色砂質土    | ややしまる。わずかに小礫を含む。                 | 28 | 灰黄褐色粘質土  | ややしまる。少量の焼土・砂利を含み、黄褐色ブロックが入る。 | 38 | 黄灰色粘質土   | きめが粗く、ややし    |
| 9  | 暗オリーブ褐色シルト質土 | ややしまりなし。少量の白色粒・礫を含む。      | 19 | 灰色シルト質土  | ややしまる。礫や白色粒をわずかに含む。              | 29 | 灰黄色砂質土   | しまりなし。土器片をわずかに含み、北側に灰が密にはいる。  | 39 | 褐灰色砂質土   | ややしまりなし。     |
| 10 | 黄灰色砂質土       | ややしまりなし。礫・焼土・炭化物を多く含む。    | 20 | 灰色シルト質土  | よくしまる。焼土・白色粒を多く含む。上層との境がガチガチで固い。 | 30 | 褐灰色粘質土   | ややしまりなし。きめが粗い。焼土や炭化物を多く含む。    | 40 | 褐灰色粘質土   | 均質でややしまる。    |

第5図 第22次調査区西壁土層図(1/40)



り白色粒を含む。  
土器片を少々含む。

わずかに遺物を含む。



焼土・土器片・黄褐色ブロックを含む。

41 黒褐色粘質土

よくしまる。わずかに白色粒や炭化物を含む。  
部分的に灰色の砂が混ざる。

しまる。焼土・白色粒をわずかに含む。

粘質ブロックが入る。

ブロックを多く含む。

砂が混ざる。

ブロックが入る。

まりが無い。

## 2. 道路状遺構と溝状遺構

**概要** 中世大友府内町跡第22次調査区では、南北に構築された道路状遺構1基と溝状遺構5基検出している。道路状遺構(SF230)は「府内古図」に描かれた「大友氏館」の東側を走る第2南北街路に比定される。また、溝状遺構のうち4基は上層で確認され、残る1基は道路状遺構(SF230)の下位に構築されたものである。

上層の溝で中世段階と推定されるものがSD009で、埋土中から小野編年のF群に比定される鍔皿が出土している。また、SD202は第2南北街路に比定される道路状遺構(SF230)の下位に構築された溝で、第2南北街路が構築される以前に何らかの区画のために構築された可能性が高い。

### SF230 (第6図)

第2南北街路 SF230は調査区西端で検出された道路状遺構で、K19～J21区に位置する。「府内古図」に描かれた第2南北街路の一部に相当する遺構である。調査区内で検出されたSF230の規模は、東西最大幅約4.0m、南北最大長約16.0mを測る。この道路状遺構に伴う側溝等は明確に確認できなかったが、道路状遺構の東側で浅い溝状のものを確認しており、これが側溝に比定される。しかし、大部分が削平を受けており明確には検出できなかった。調査区北側に設定したトレンチによる土層観察や路面上に構築されたピットなどから、道路は3～4段階(道路構築時～近世段階)にわたり西側に縮小していることが確認できる。この道路幅の縮小については、道路の東側に展開していた町屋が道路側に張り出す形で進出してきたことによるものと考えられ、これは古い段階の路面上にピットが形成されていることから窺える。

SF230を構成する土層群から出土する遺物を観察すると、最上層の土層群やそれに続く東側の整地層には唐津系陶器などの17世紀初頭から前葉の遺物が包含されており、当該道路が近世初頭から前葉にかけて、中世から引き続き使用されていた可能性が高いと考えられる。中位から下位にかけての整地層には近世初頭以降の遺物がまったく包含されない。また、出土遺物にやや薄手の京都系土師器が含まれることから、少なくとも16世紀中葉までは遡ると推定される。

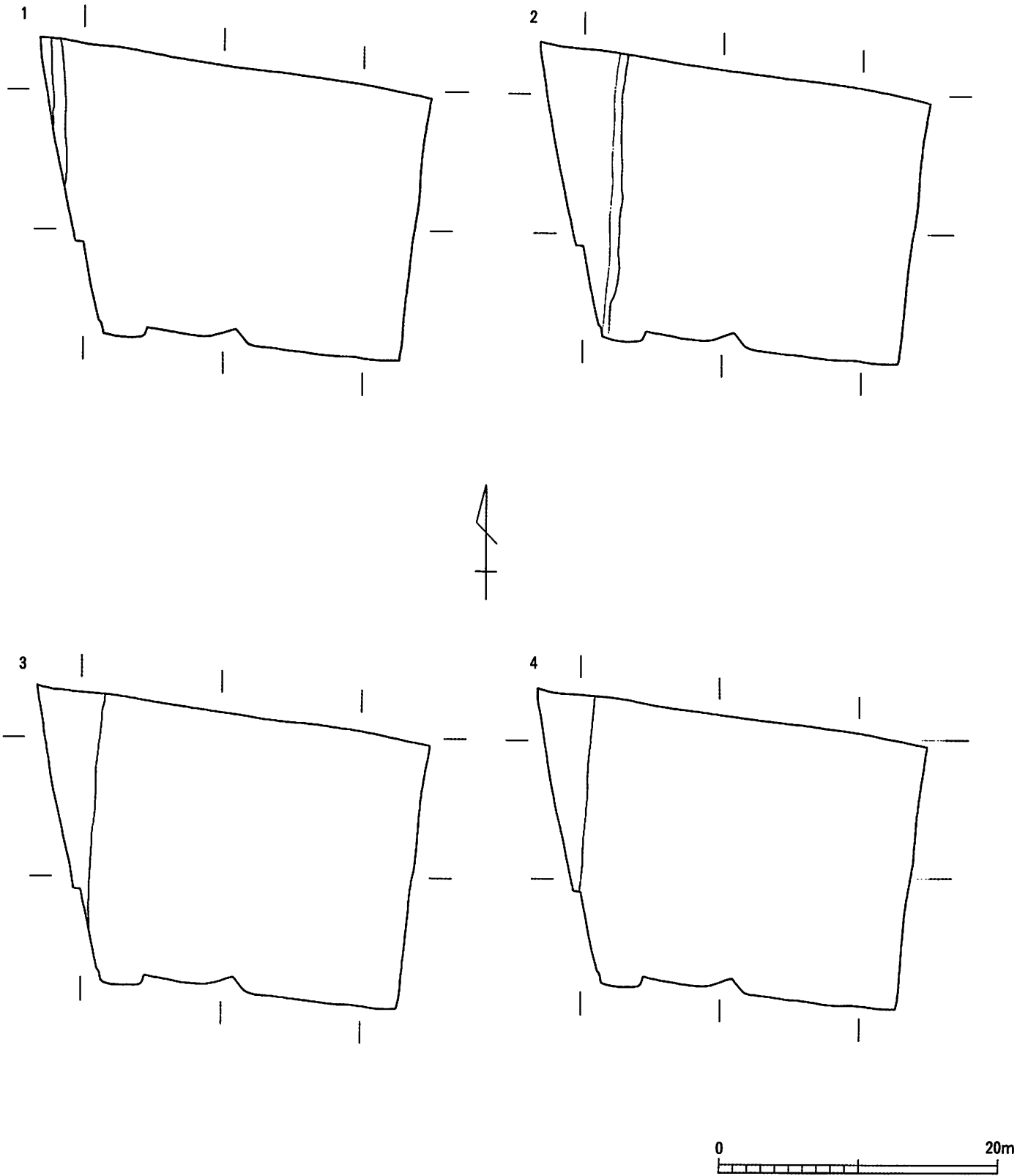
掘り込み事業 道路は粘土や砂を交互に敷き詰める版築状の土層となっているが、中世段階の土層断面を観察すると、道路の構築にあたって、その土層を形成する以前に掘り込み事業を行っている可能性が高い。(第3図土層図参照)。この掘り込み事業を伴う道路状遺構は、中世大友府内町跡第2・3次調査の東西道路や同4次調査<sup>(1)</sup>の東西道路(名ヶ小路)、同5次調査A区<sup>(2)</sup>の南北道路(第4南北街路)でも確認されており中世府内では極めて一般的な道路構築法であったといえる。

また、当遺構の下位で溝状遺構(SD202)を検出している。時期を特定できる遺物は検出できなかったが、道路状遺構が構築される以前に、この溝が構築されていることが土層断面の観察から推定される。溝の性格は不明であるが、道路構築以前にこの溝によって区画される何らかの空間が存在した可能性が考えられる。

(1) 大分市教育委員会『大友府内～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～』(2002年)

(2) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1』中世大友府内町跡第5次・8次調査区〔大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)〕(2005年)

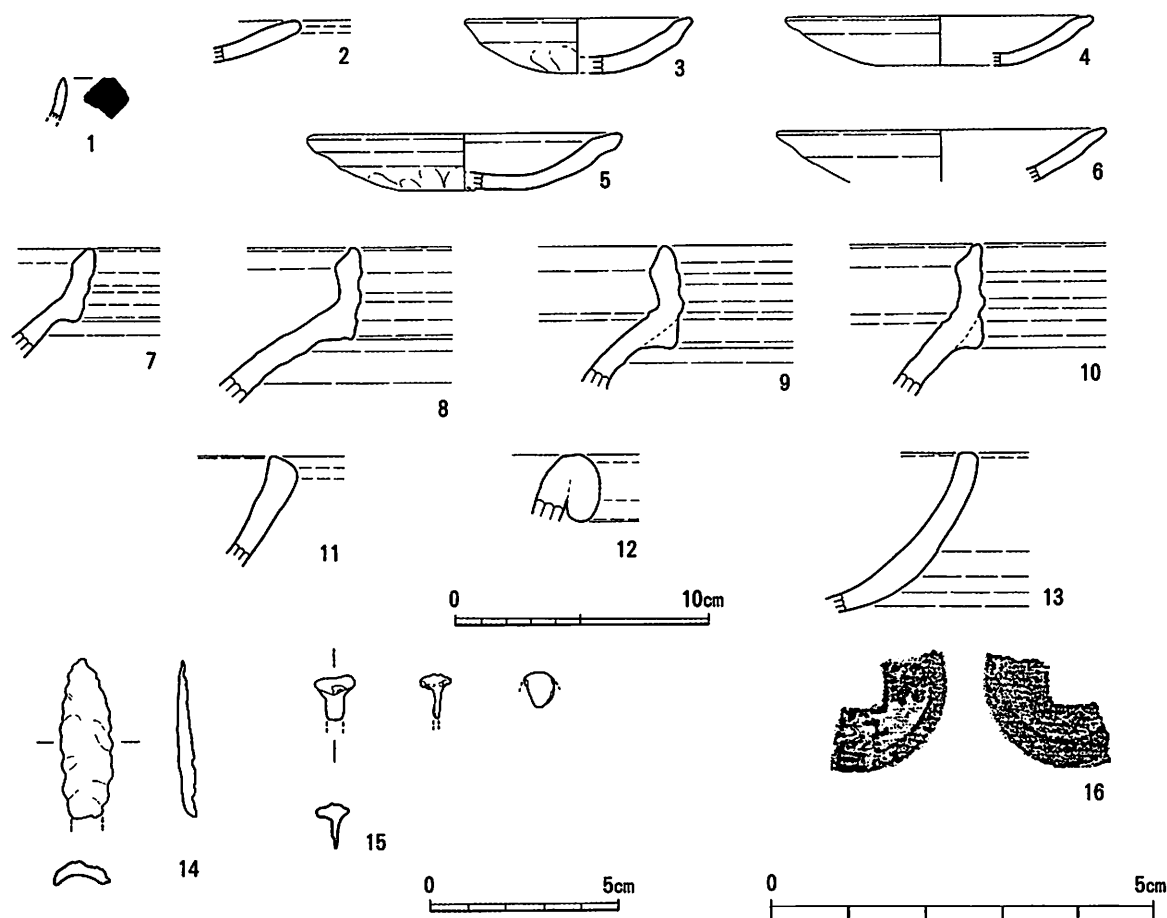
第2節 遺構と遺物



第6図 SF230 変遷図 (1/40)

SF230出土遺物（第7図）

第7図1は中国産天目茶碗の口縁部破片である。2～6は京都系土師器皿である。4・6は2期に比定される資料である。3・5はやや器壁が厚くなり、3期に比定される。7～10は備前系陶器播鉢の口縁部破片である。9・10の口縁帯の形態を見ると、断面が「く」字となっており、口端は上角を強くなでて尖り気味として、口端からやや下がった内面に稜線をもつもので、中世6期に比定される資料である。11は備前系陶器鉢、12は備前系陶器壺の口縁部破片である。13は瓦質土器鉢の口縁部破片である。14・15は銅製品である。いずれも何らかの金具と推定されるが用途は不明である。16は銅銭である。4分の3が欠損しており、銭貨名は不明である。



第7図 SF230出土遺物実測図（1～13は1/3、14・15は1/2、16は1/1）

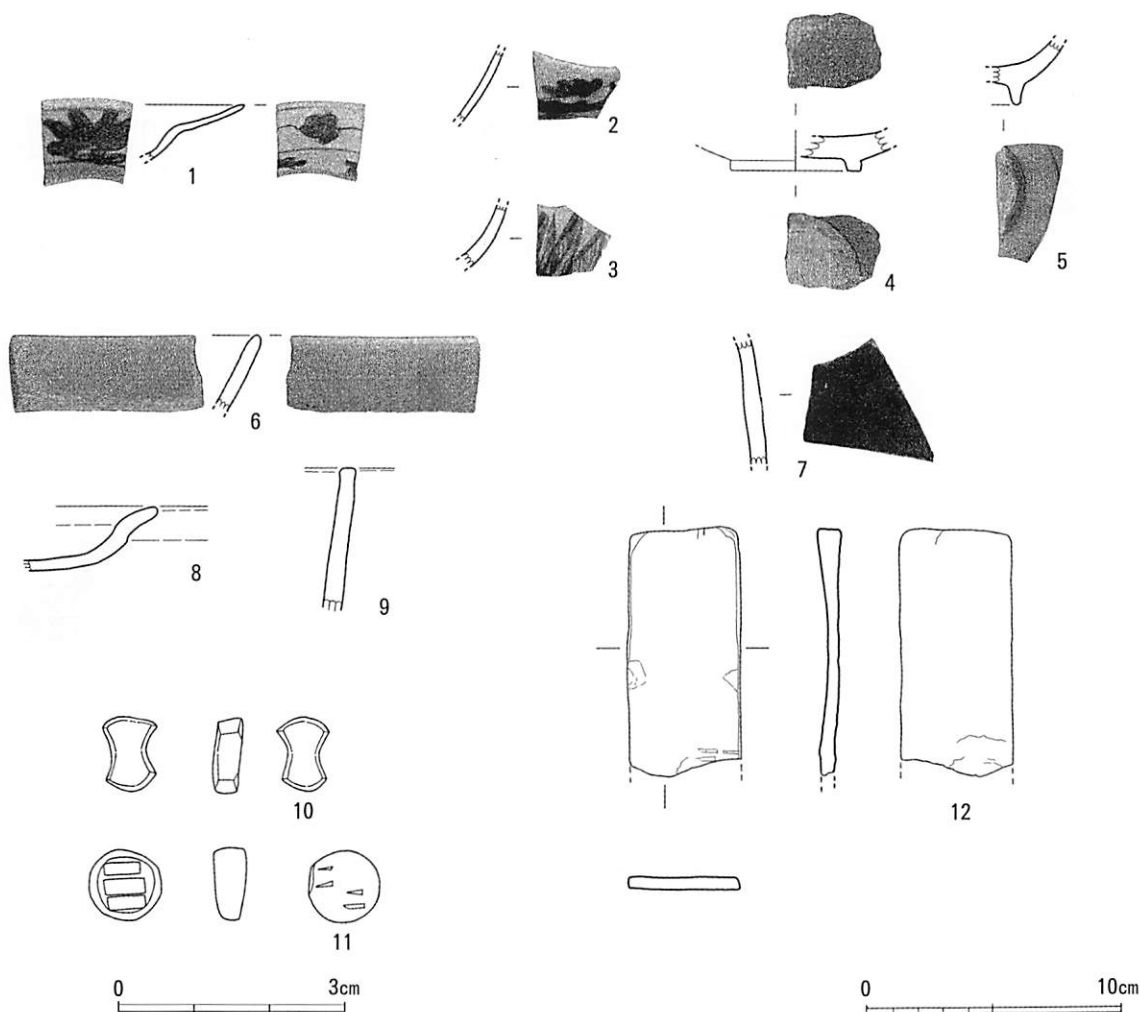
SD009（第2図参照）

SD009はK19～K21区に位置する溝状遺構である。本調査区で検出された規模は、長さ約18.0m、幅0.5～0.7m、深さ約0.1mを測る。埋土中からは小野分類のF群に比定される罎皿の口縁部や太鼓型分銅1・蘭型分銅1などが出土している。南側に隣接する大友9次調査区でも検出されており（SD1）、水田耕作等による区画溝の可能性が高い。遺構の時期は埋土や出土遺物から16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。

SD009出土遺物（第8図）

繭型分銅  
太鼓型分銅  
三木文

第8図1～3・5は中国景德鎮窯系青花である。1はF群の皿である。2・3は碗の胴部破片である。2の外面の文様は如意雲と推定され、碗E群に比定される。3は外面に芭蕉葉文を描き、碗C群に比定される。5は碗の底部破片である。4は瀬戸美濃系陶器碗の底部破片である。6は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。ヘラ先による細線の蓮弁文をもつ。7は中国産褐釉陶器壺の胴部破片である。8は京都系土師器皿の口縁部破片である。9は備前系陶器瓶の口縁部破片である。10・11は銅製の分銅である。10は繭型分銅で、重さ0.8gと小形のものである。表面は緑青で脆くなっている。11は太鼓型分銅である。重さは1.0gで、表面には三木文<sup>(3)</sup>を表現し、裏面にはタガネ彫りによる4条の記号が認められる。当該資料のような片面に三木文、片面に4条の記号を有する太鼓型分銅の出土が増加しており、大小様々なサイズの製品が存在していることが明らかになってきている。また、第18次調査西地区では、三連の太鼓型分銅<sup>(4)</sup>が出土しており、その製作が当該調査区周辺で行われていた可能性が考えられるようになってきている。12は砥石である。



第8図 SD009出土遺物実測図（1～9・12は1/3、10・11は1/1）

(3) 秦政博「守護大名から戦国大名へ」（『大分市史』中 1987年）228頁

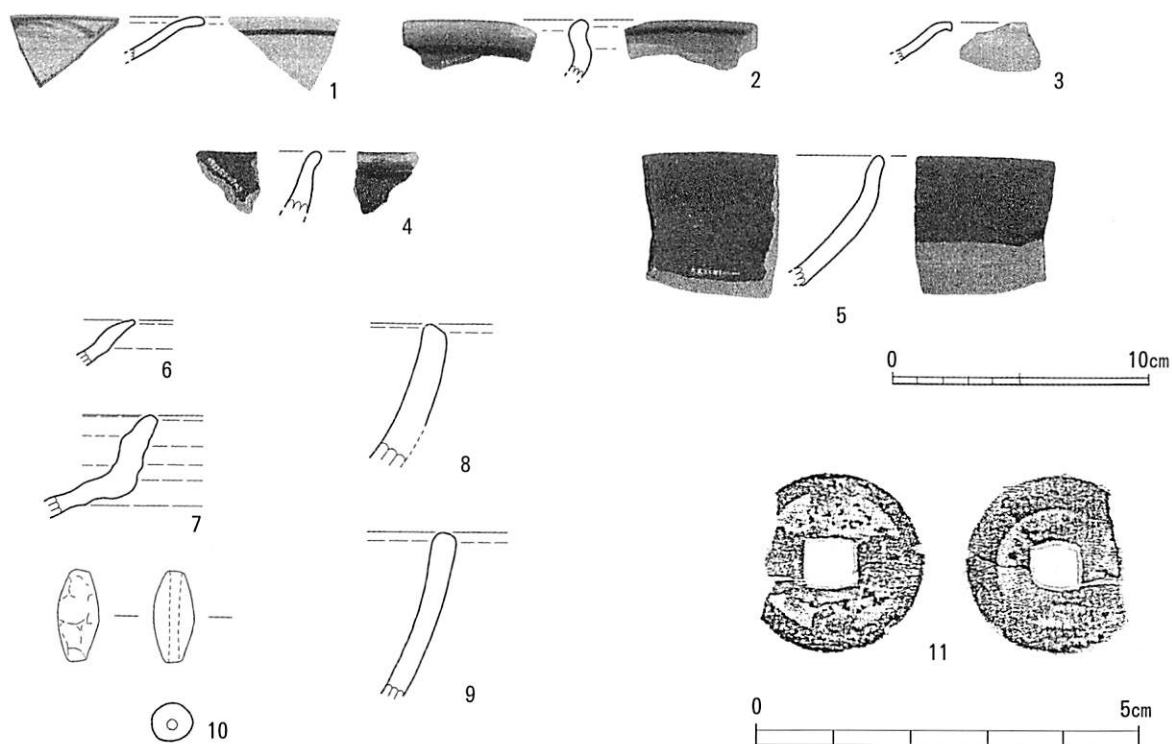
(4) 本書第2分冊第※章第※図※（※頁）参照

SD017 (第2図参照)

SD017はL20～K21区に位置する遺構である。L20区では削平を受けており、遺構の全容は把握できなかったが、検出された規模は長さ約8.5m、幅約1.4m、深さ約0.1mを測る。遺構の時期は周辺の状況や出土遺物から近世初頭以降と推定される。

SD017出土遺物 (第9図)

第9図1は中国景德鎮窯系青花皿の口縁部破片である。皿F群に比定される。2は中国龍泉窯系青磁皿の口縁部破片である。3は白磁皿の口縁部破片である。4・5は天目茶碗の口縁部破片である。4は瀬戸美濃系、5は中国産である。6は京都系土師器皿の口縁部破片である。7は備前系陶器挿鉢である。8・9は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。10は土錘である。11は中国北宋代の銅銭で、「熙寧元寶」である。書体は篆書体で、初鑄年代は1068年である。



第9図 SD017出土遺物実測図 (1～10は1/3、11は1/1)

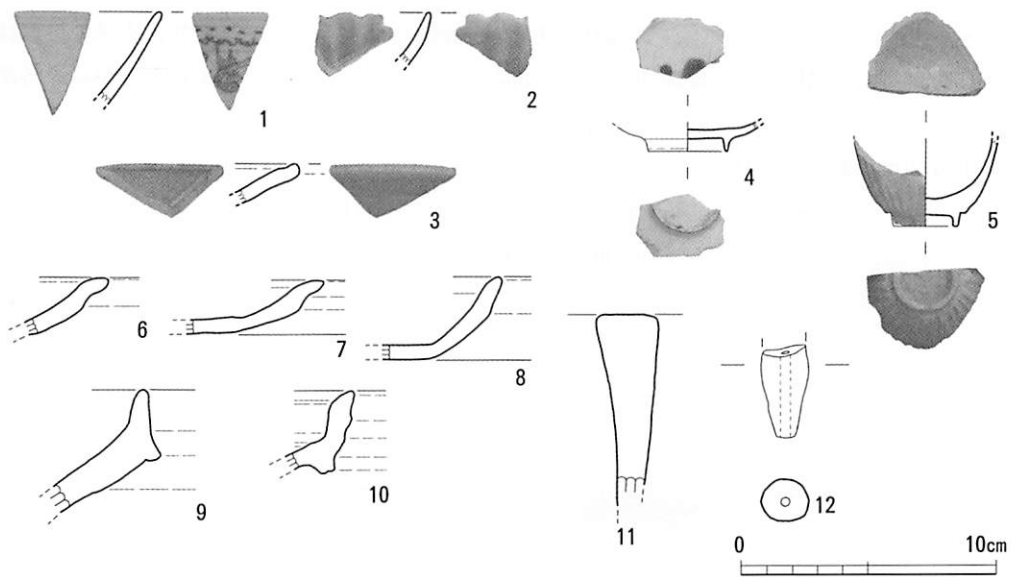
SD020 (第2図参照)

SD020はK21区に位置する溝状遺構である。検出された規模は長さ約3m、幅約0.9m、深さ0.1mを測る。SD017との連続性が考えられるが、関連は不明である。遺構の時期はSD017との関連や出土遺物から近世初頭以降に比定される。

SD020出土遺物 (第10図)

第10図1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。2は青磁稜花皿の口縁部破片である。3は唐津系陶器皿の口縁部破片である。口縁部内面に沈線がめぐる。4は中国景德鎮窯系青花小杯である。5は肥前系磁器小杯である。外面に鑄文を施す。6～8は京都系土師器皿の口縁部破片である。9・10は備前系陶器挿鉢の口縁部破片である。9は中世4期、10は近世1期に比定される資料である。11は瓦質土器火鉢の口縁部破片で、口縁端部が肥厚する。12は土錘である。





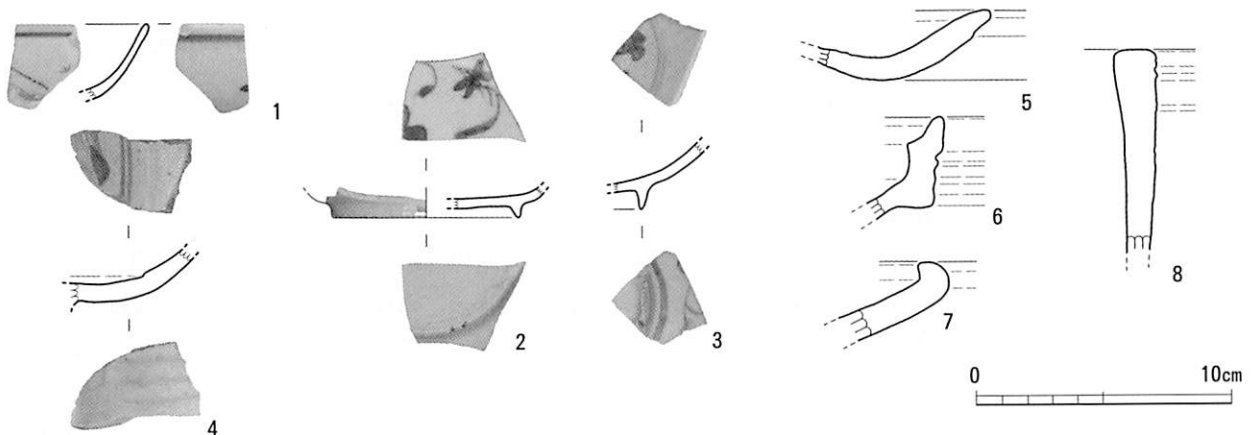
第10図 SD020出土遺物実測図 (1/3)

SD019 (第2図参照)

SD019はL19~K21区に位置する遺構である。検出された規模は長さ約15m、幅約1.4~0.5m、深さ0.1mを測る。水田耕作等の区画溝と考えられる。遺構の時期はSD017やSD020とほぼ同時期と考えられ、近世初頭以降と推定される。

SD019出土遺物 (第11図)

第11図1~3は中国景德鎮窯系青花である。1・2はE群に比定される皿、3は碗である。4は中国漳州窯系青花盤である。5は京都系土師器皿の口縁部破片である。6は備前系陶器挿鉢で、近世1期に比定される。7・8は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。7は口縁端部を上方につまみ上げ、浅鉢形になるものと推定される。8は口縁端部が肥厚するタイプである。



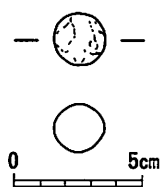
第11図 SD019出土遺物実測図 (1/3)

SD202 (第12図)

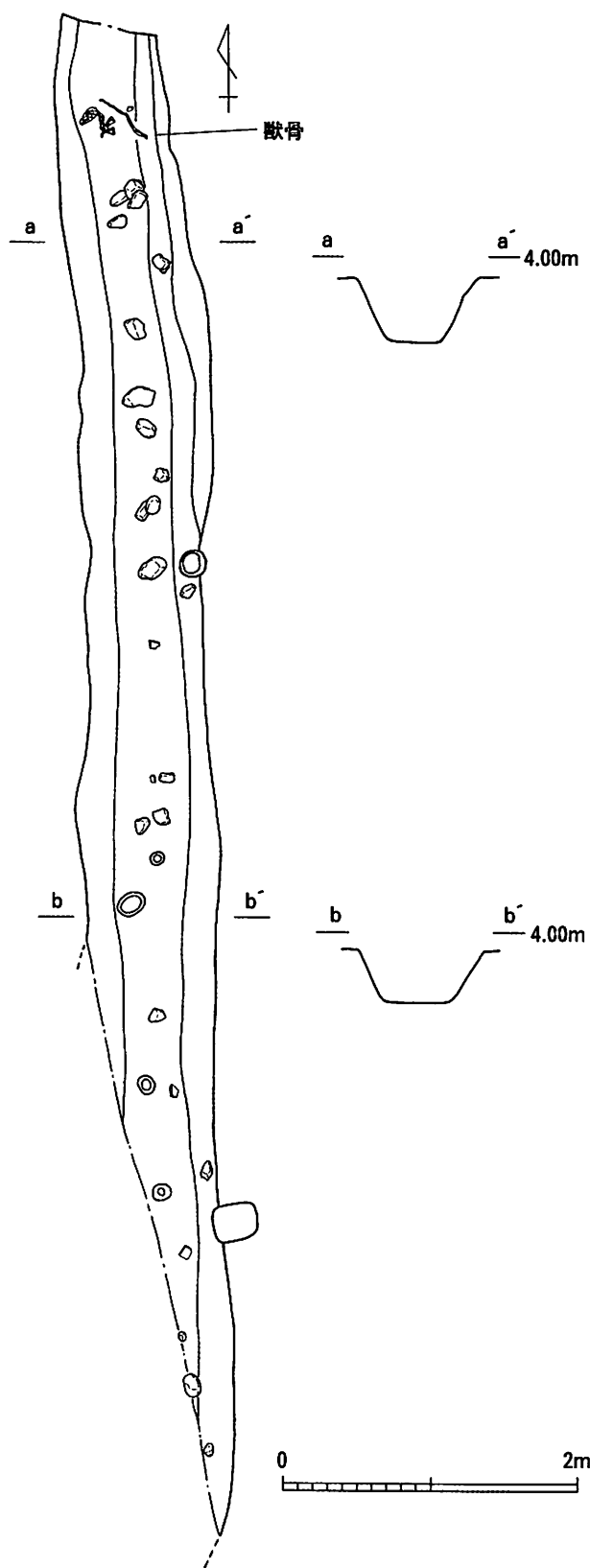
SD202はJ19～J20区に位置する遺構である。断面形状は逆台形状を呈し、検出された規模は長さ約7.8m、幅0.5～0.7m、深さ0.4mを測る。検出範囲が狭いため、溝の性格等は断定できないが、当遺構の上位には道路状遺構(SF230)が構築されており、「府内」の区画が整備される以前に何らかの区画される空間が存在していた可能性が考えられる。遺構埋土中からは、獣骨(犬もしくは猫)や土玉などが出土しているが、明確な時期を特定できる遺物は検出できなかった。

SD202出土遺物 (第13図)

第13図はSD202出土の土玉である。径約2.1cm、重さ8.9gである。用途は不明である。



第13図 SD202出土遺物実測図 (1/3)



第12図 SD202実測図 (1/50)

### 3. 土坑

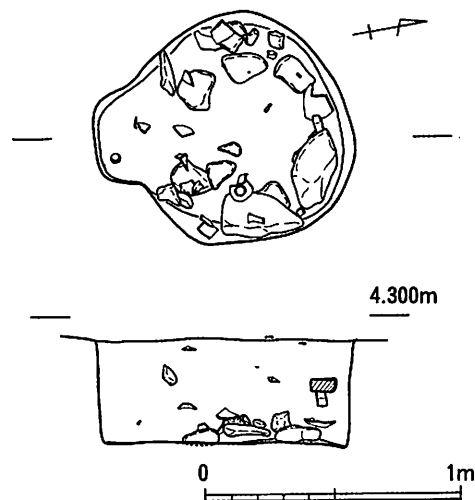
**概要** 中世大友府内町跡22次調査区では、30基の土坑を検出している。検出された土坑はほぼ16世紀中葉以降から末葉にかけての時期に比定できる。大半が廃棄土坑（ゴミ捨て穴）と推定される。良好な一括資料を出土するものもあるが、土坑の詳細な性格が判明するものは少ない。このような中で比較的良好な一括資料が出土したSK008やSK018などは注目される。

#### SK008（第14図）

SK008はK20区のほぼ中央に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約1.0m、深さ約0.4mを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青花碗の破片、青銅製の柄杓などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

#### SK008出土遺物（第15～16図）

第15図1は五彩碗の口縁部破片である。口縁部内面には四方禪文を青花で描き、外面には五彩を施す。2は中国漳州窯系青花碗の口縁部破片である。3は朝鮮王朝系雑釉陶器碗である。4・5は中国景德鎮窯系青花皿である。4は底部破片でE群に比定される資料である。5はほぼ完形で出土しており、口径

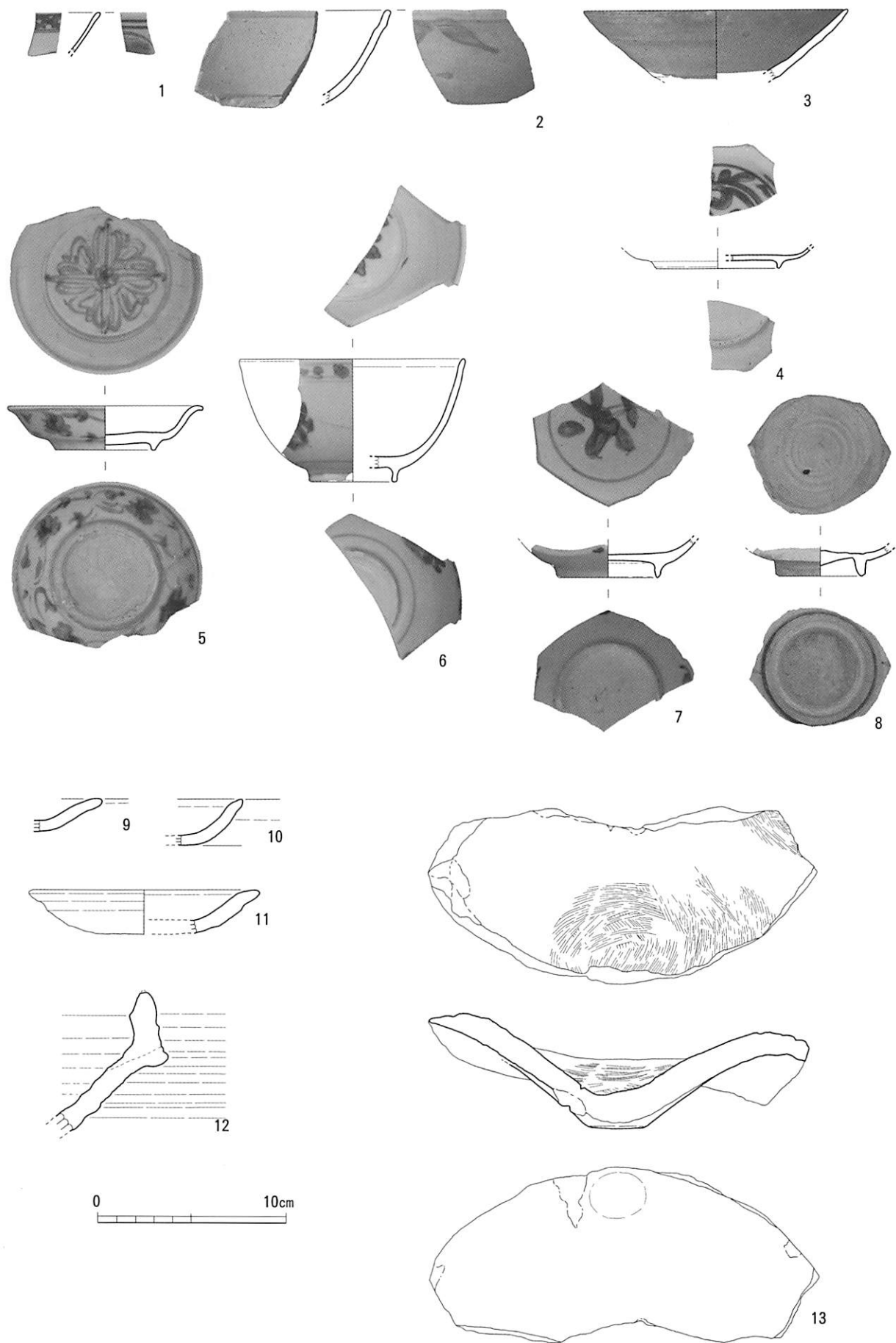


第14図 SK008実測図（1/30）

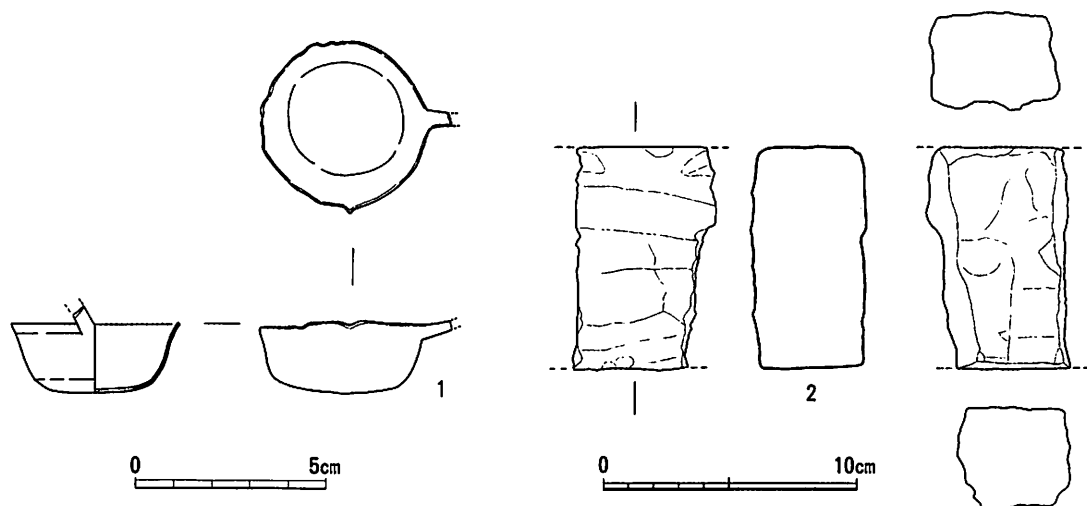
10.2cm、底径5.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部は端反りとなり、見込みに十字花文を描き、外面に牡丹唐草文を描く。高台内に字款が見られないことから皿B1群に比定される資料である。時期的にやや古い様相を呈するものであり、伝世品の可能性が高い。6・7は碗F群に比定される中国景德鎮窯系青花碗である。見込みには花文が描かれる。8は中国漳州窯系青花碗の底部破片である。9～11は京都系土師器皿である。器壁が厚く3期に比定される資料である。12は近世1期に比定される備前系陶器插鉢の口縁部破片である。13は瓦質土器である。出土した当初は何らかの蓋の一部の可能性も考えられたが、検討の結果、火鉢の脚部と推定する。全体の器形は不明であるが、三脚以上をもつ火鉢と推定される。

第16図1は青銅製柄杓の頭部分である。柄の部分は欠損している。径約4.5cm、高さ1.8cmである。類似品が第13次調査区のSE377<sup>(5)</sup>の結桶中から出土している。2は砥石である。

(5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2』中世大友府内町跡第9次・13次・21次調査区〔一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(1)〕(2005年) 219頁 第357図 2参照



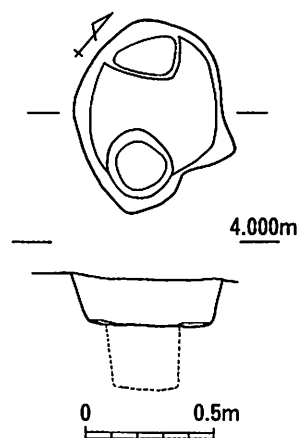
第15図 SK008出土遺物実測図① (1/3)



第16図 SK008出土遺物実測図② (1は1/2、2は1/3)

SK011 (第17図)

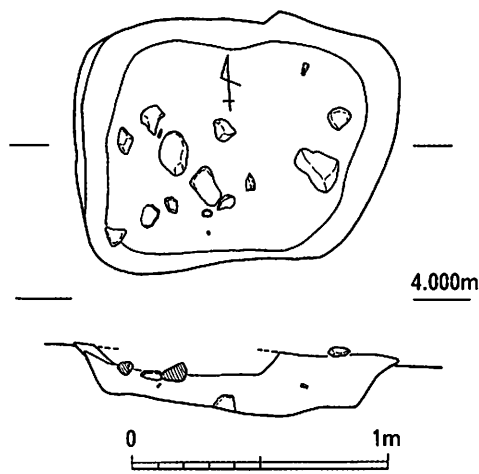
SK011はL21区に位置する遺構で、井戸状遺構(SE012)の上位に構築されている。平面プランは不整楕円形を呈し、規模は長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。時期を特定できる遺物や図示可能な遺物の出土はなかったが、SE012との切り合い関係から当遺構の時期は16世紀末葉に比定される。



第17図 SK011実測図 (1/30)

SK013 (第18図)

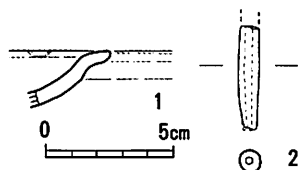
SK013はL21区に位置する遺構で、井戸状遺構(SE012)の上位に構築されている。平面プランは長方形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約0.3mを測る。当遺構からは京都系土師器皿が出土しているが、遺構の時期の時期を特定できるものではない。しかし、遺構の切り合い関係から16世紀末葉以降に比定される。



第18図 SK013実測図 (1/30)

SK013出土遺物 (第19図)

第19図1は京都系土師器皿の口縁部破片である。内面に煤が付着している。2は管状土錘である。上部は欠損している。



第19図 SK013出土遺物実測図 (1/3)

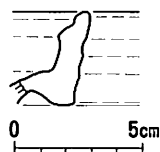
SK015・SK016 (第20図)

SK015はL21区に位置する切り合いを有する2基の土坑である。構築順序はSK016→SK015となる。SK015は平面プランが長方形を呈し、その規模は長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。SK016は平面プランが略隅丸方形を呈するが、南側はSK015の構築によって破壊されている。検出した規模は長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土下位より備前系播鉢の口縁部破片が出土している。

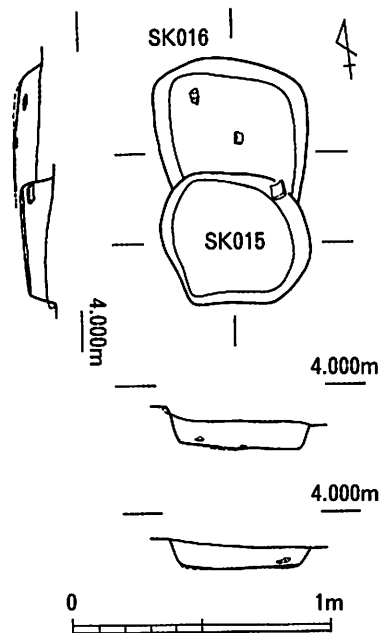
遺構の時期は周辺の遺構から16世紀後葉以降に比定される。

SK016出土遺物 (第21図)

第21図は備前系陶器播鉢である。口端のナデが摘むように強くて先細りとなり、口端から下がった口縁内に段をもつことから、近世1期に比定される。



第21図 SK016出土遺物実測図 (1/3)



第20図 SK015・SK016実測図 (1/30)

SK018・SK028 (第22図)

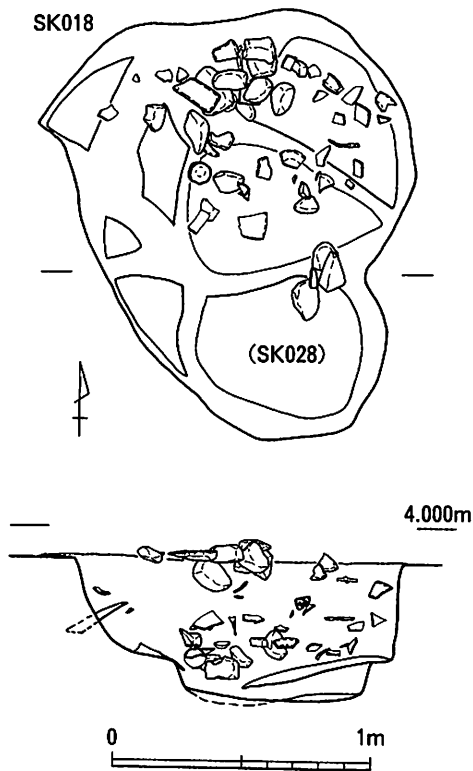
SK018はL20区に位置し、SK028を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約55cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿や備前系陶器甕などが出土している。出土遺物から遺構の時期は、出土遺物から16世紀末葉に比定される。

SK028の平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約30cmを測る。SK018が構築される際にほとんど破壊されており、詳細な遺構図は記録していない。また、図示可能な遺物の出土もなかった。

SK018出土遺物 (第23図)

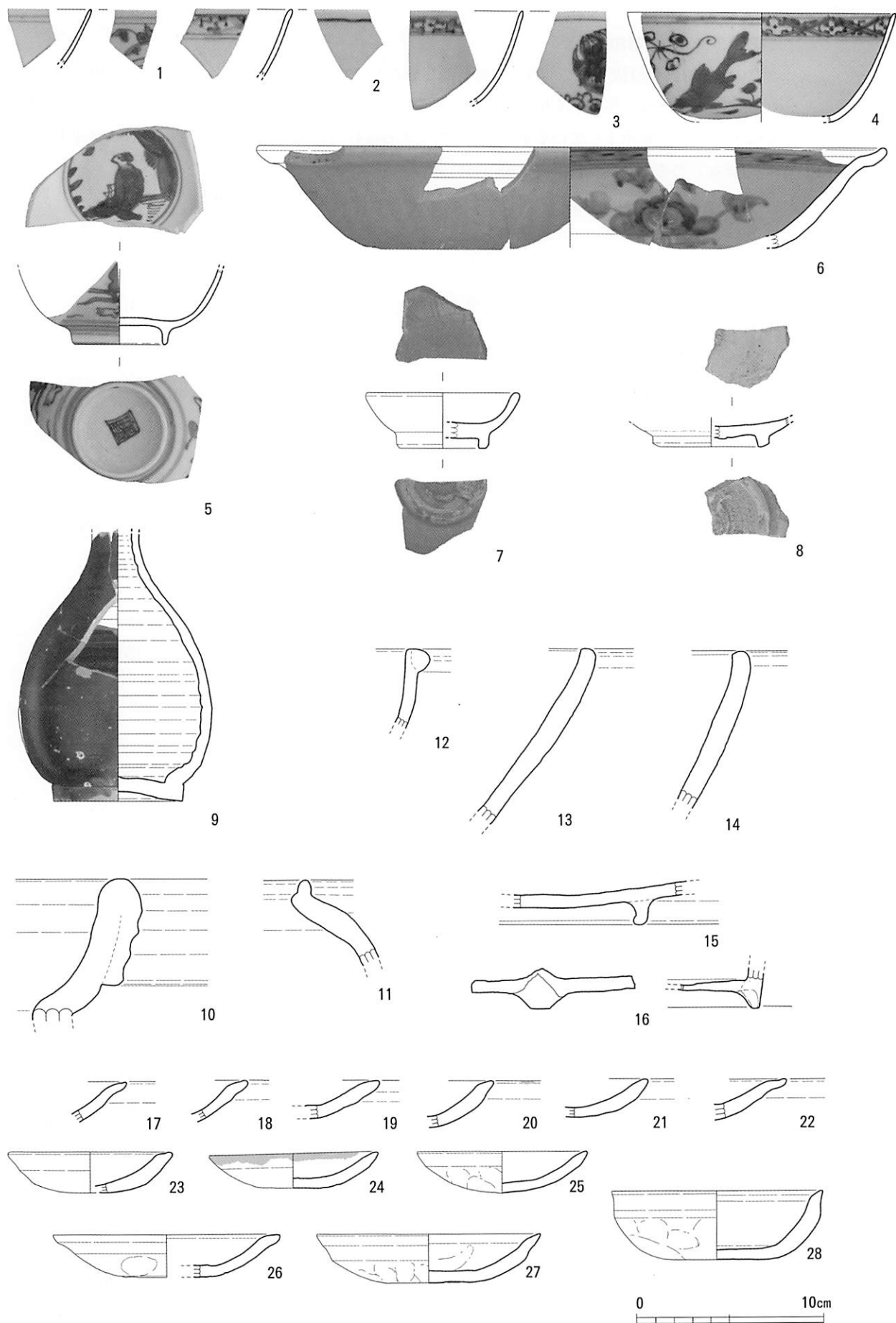
第23図1～5には中国景德鎮窯系青花碗を図示した。1～3は口縁部破片で、碗C群に比定される。

4・5は碗E群に比定される資料である。4は口縁部内面に四方禪文を描き、外面には鯉の文様を描く。5は見込みが緩やかに盛り上がり、いわゆる饅頭心碗である。見込みには人物、高台内には四角の枠取りした「福」字を書く。



第22図 SK018・SK028実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

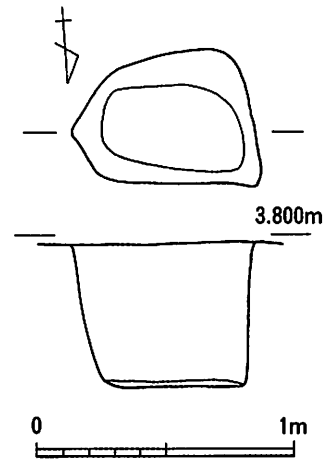


第23図 SK018出土遺物実測図 (1/3)

高台径は5.0cmを測る。6はF群に比定される中国漳州窯系青花盤である。復元口径33.2cmを測る。7は中国龍泉窯系青磁小碗である。復元口径8.2cm、復元底径4.9cm、器高2.9cmを測る。8は白磁皿である。見込み部分は蛇の目釉剥ぎとなり、底部外面は露胎となる。9は黒釉陶器瓶である。内外面に鉄釉が掛かり、外面は黒褐色に発色するが、内面の釉は薄く茶褐色に発色する。高台部分は貼り付けられており、やや上げ底状となり、露胎である。口縁部は欠損しているが、底径6.8cmを測る。中国南部産か。10・11は備前系陶器壺（甕）の口縁部破片である。10は中世6期以降に比定される資料である。11は水屋甕であろうか。口縁端部内面には蓋受けとなるようにつまみ出されている。12～14は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。12は玉縁状となるものである。15・16は瓦質土器火鉢の脚部破片である。17～27は京都系土師器皿で、28は京都系土師器坏である。器壁がやや厚く、3期の様相を呈する資料である。京都系土師器皿の口径に注目すると23が8.4cm、24・25が約9cm、26・27が11.8cmと3法量に細分される可能性がある。なお、24の口縁部内外面には煤がべっとり付着しており、灯明皿として使用されていた可能性がある。また、28の坏の口縁部には一部被熱した痕跡が観察される。

SK022 (第24図)

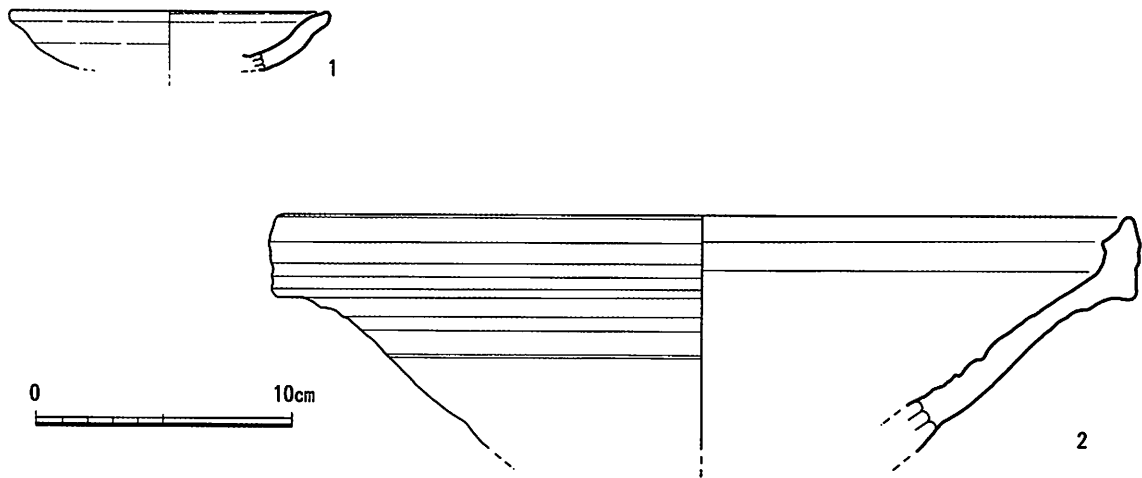
SK022はL21区に位置し、SE021を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約0.7m、短径約0.5m、深さ約58cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿や近世1期に比定される備前系陶器插鉢などが出土している。遺構の時期は、SE021との切り合い関係や出土遺物から16世紀末葉に比定される。



第24図 SK022実測図 (1/30)

SK022出土遺物 (第25図)

第25図1は京都系土師器皿である復元口径12.4cmを測り、器壁が8mmと厚めになり、京都系の3期に比定される。2は備前系陶器插鉢である。放射状スリメに加えて、斜め方向のスリメも付加される。また、口端のナデが摘むように強く先細りとなり、口端から下がった口縁内に稜をもつことから近世1期に比定される。



第25図 SK022出土遺物実測図 (1/3)

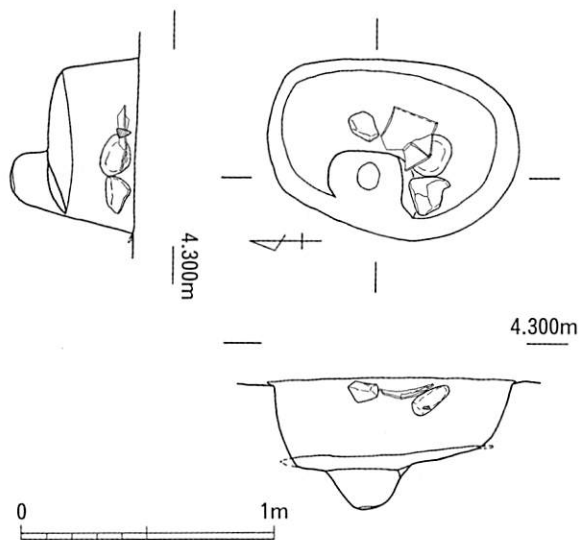


SK024 (第26図)

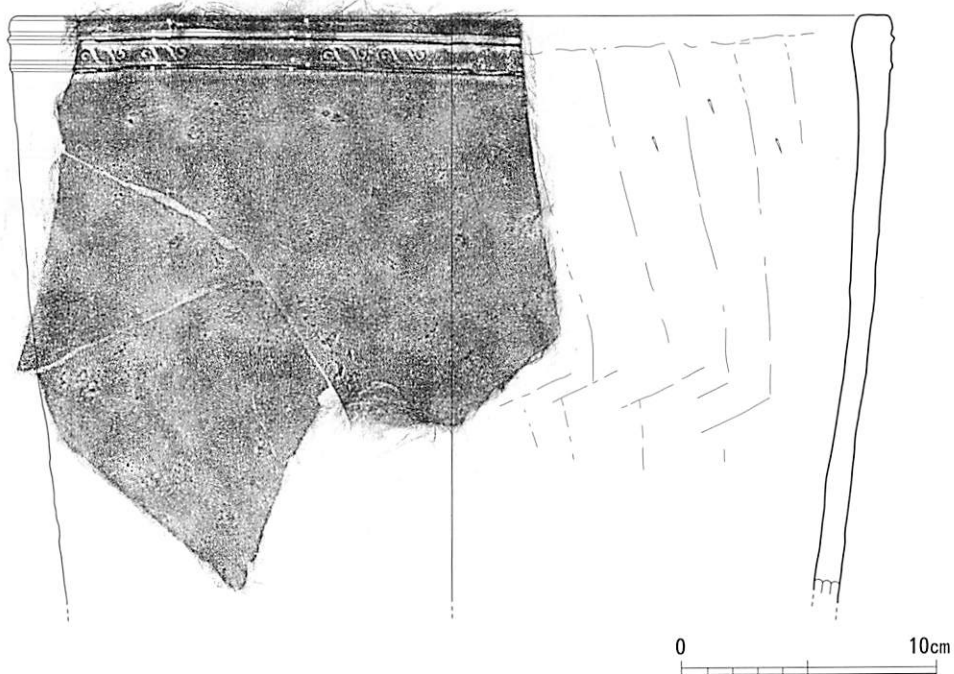
SK024はK20～L20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約95cm、短径約70cm、深さ約34cmを測る。遺構の時期を特定できる良好な出土遺物は認められないが、土坑上部の埋土中から出土した瓦質土器火鉢から、遺構の時期を16世紀後葉代に比定しておきたい。

SK024出土遺物 (第27図)

第27図は瓦質土器火鉢である。三角突帯の間に2個一対の双頭蕨手流雲文が間隔を開けて押捺されるもので、復元口径は34.3cmを測り、黒灰色を呈する。器形は深鉢型となり脚が付くと推定される。双頭蕨手流雲文を押捺された瓦質土器火鉢は豊後府内で多くの出土例があり、豊後府内に主体的に分布するものである。



第26図 SK024実測図 (1/30)



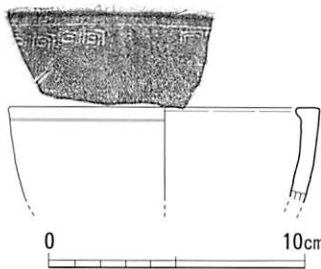
第27図 SK024出土遺物実測図 (1/3)

SK025 (第28図)

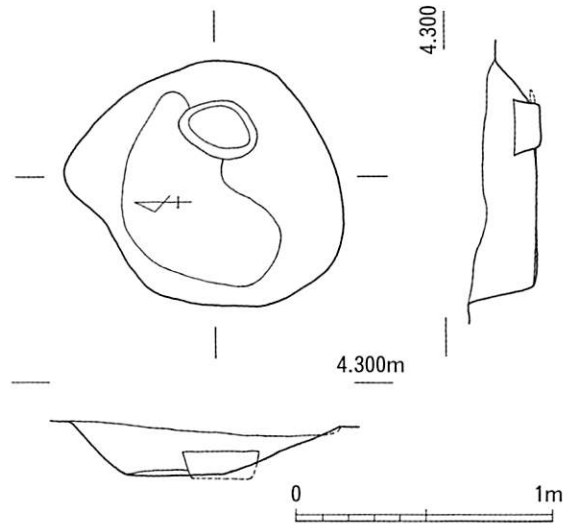
SK025はK20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約1.0m、深さ約30cmを測る。時期を特定できる遺物の出土はなかったが、瓦質土器香炉が1点出土している。

SK025出土遺物 (第29図)

第29図は瓦質土器香炉である。復元口径は12.2cmを測る。口縁端部は内側にやや屈曲する。外面には一条の沈線を施し、その下に間隔を開けて2個1単位の雷文を押捺する。



第29図 SK025出土遺物実測図 (1/3)



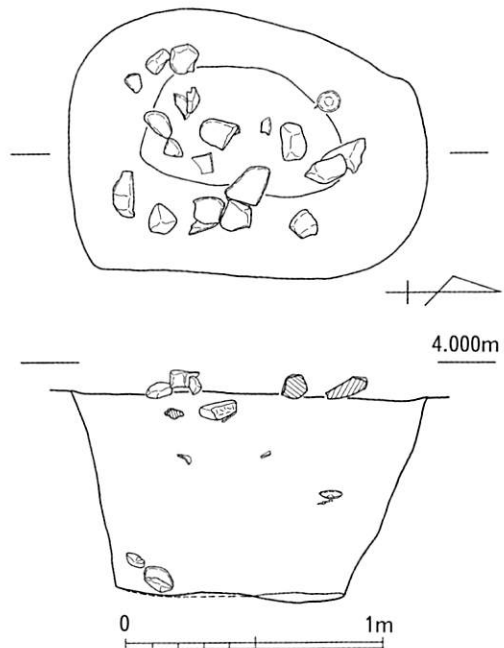
第28図 SK025実測図 (1/30)

SK029 (第30図)

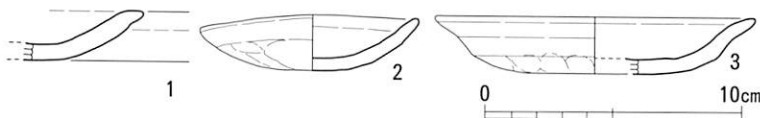
SK029はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.4m、短径約1.0m、深さ約80cmを測る。当遺構からは3期に比定される京都系土師器皿が出土していることから、遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

SK029出土遺物 (第31図)

第31図1～3は3期に比定される京都系土師器皿である。2はやや歪みがあるが口径は8.8cmを測る。3の復元口径は10.5cmを測る。



第30図 SK029実測図 (1/30)

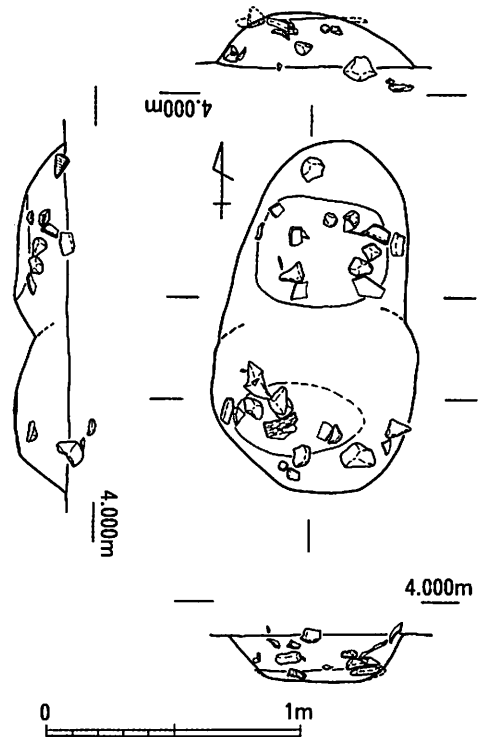


第31図 SK029出土遺物実測図 (1/3)

SK040 (第32図)

SK040はL21区に位置し、土師器の大量廃棄遺構(SX006)の上位遺構で、二つの土坑が切り合って存在する。遺物の出土状況は南北で明確に分かれるが、調査当初、不定形の一つの遺構として掘り下げており、掘り下げの最終段階で遺構の切り合いが判明したため、遺物の取上も選別できていない。また、切り合い関係も不明である。埋土はいずれも炭を含む黒褐色土であり、時期差なく掘られてすぐに埋められたと考えられる。

遺構全体の平面プランはひょうたん形を呈し、規模は長径約1.4m、短径約0.8m、深さ約0.2mを測る。出土遺物には京都系土師器皿が含まれるが下位遺構であるSX006からの混ざり込みの可能性もあるため、ここでは図示していない。遺構の時期は、SX006との切り合い関係と出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。

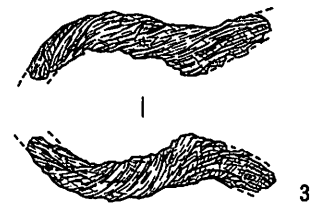
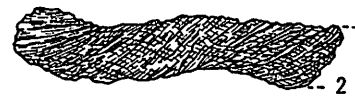
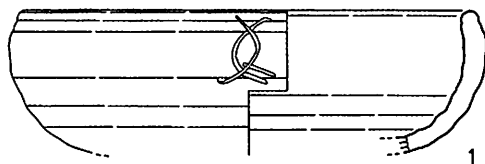


第32図 SK040実測図 (1/30)

SK040出土遺物 (第33図)

第33図1は備前系陶器鉢である。復元口径18.7cmを測る。外面はにぶい赤褐色、内面は灰褐色を呈する。外面にはカマ印が認められる。

布状遺物 2・3は燃った布状のものである。



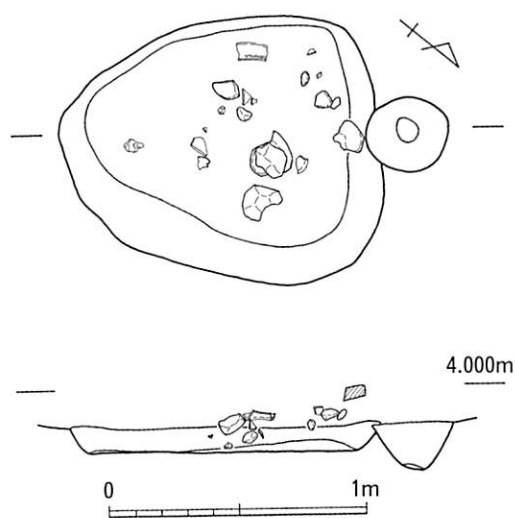
第33図 SK040出土遺物実測図 (1/3)

SK069 (第34図)

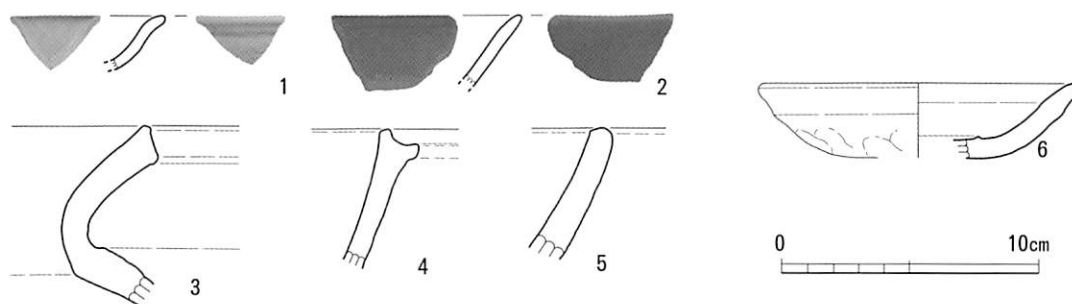
SK069はL19～L20区に位置し、SE125を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約10cmを測る。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

SK069出土遺物 (第35図)

第35図1は中国漳州窯系青花皿で端反りとなるものである、2は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。横田・森田編年のI-4・aに比定される資料である。混入か。3は焼締陶器壺である。亀山産か。4・5は瓦質土器で、それぞれ4は火鉢、5は鍋の口縁部破片である。6は3期に比定される京都系土師器皿である。復元口径は11.6cmを測る。



第34図 SK069実測図 (1/30)



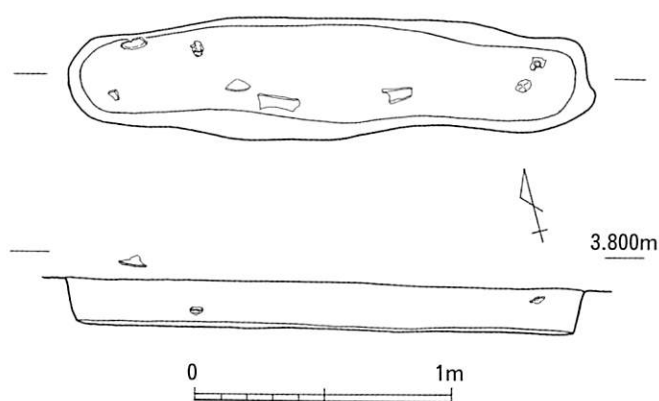
第35図 SK069出土遺物実測図 (1/3)

SK078 (第36図)

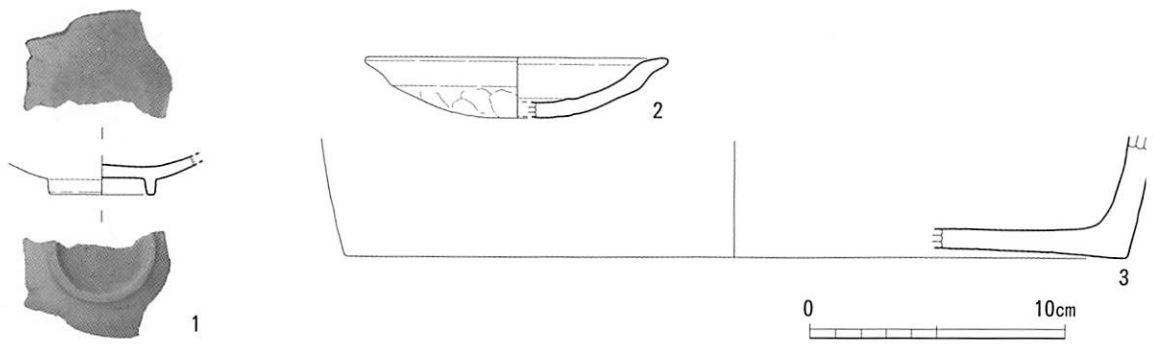
SK078はL21区に位置する遺構である。平面プランは長円形を呈し、規模は長径約2.05m、短径約0.5m、深さ約18cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や瓦質土器火鉢などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。

SK078出土遺物 (第37図)

第37図1は白磁皿である。高台部分は露胎となる。菊皿 (E-4群) と推定される。2は2期に比定される京都系土師器皿である。復元口径11.4cm、器高2.3cmを測る。3は瓦質土器火鉢の底部破片である。



第36図 SK078実測図 (1/30)



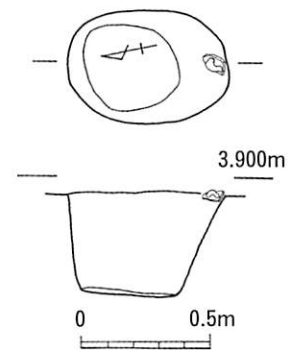
第37図 SK078出土遺物実測図 (1/3)

SK101 (第38図)

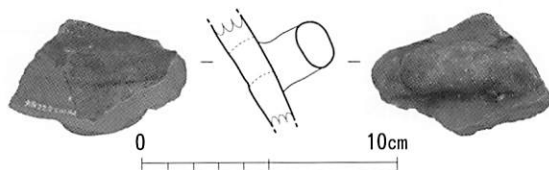
SK101はM20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約63cm、短径約45cm、深さ約40cmを測る。当遺構からは青磁壺の耳部のほか少量の土師器破片が出土しているが、遺構の時期を特定する良好な資料の出土はない。

SK101出土遺物 (第39図)

第39図は産地不明の陶器壺の耳部である。外面に灰釉が掛かる。



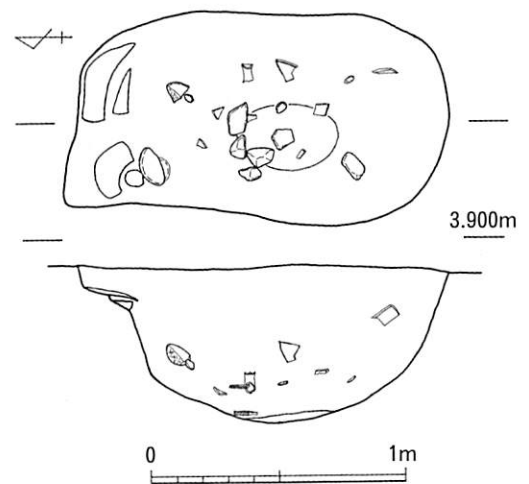
第38図 SK101実測図 (1/30)



第39図 SK101出土遺物実測図 (1/3)

SK109 (第40図)

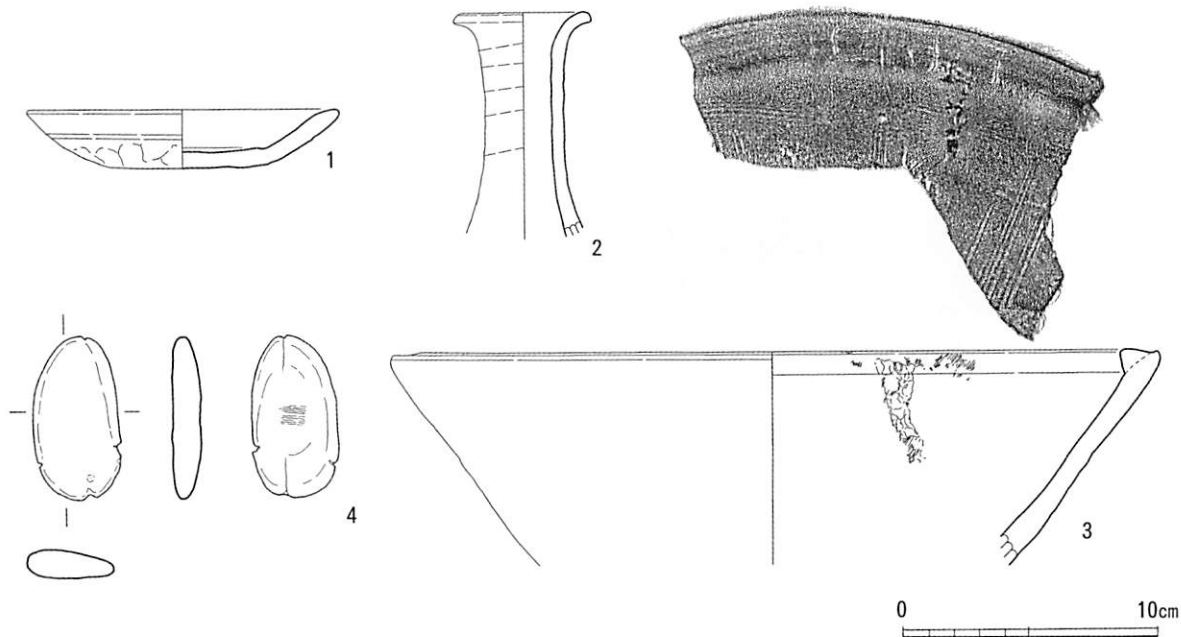
SK109はL20～M20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.5m、短径約0.8m、深さ約60cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や内面に漆が付着した瓦質土器播鉢が出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉に比定される。



第40図 SK109実測図 (1/30)

SK109出土遺物（第41図）

第41図1は3期に比定される京都系土師器皿で、口径12.0cmを測る。2は備前系陶器瓶である。3は瓦質土器挿鉢である。口縁端部内面に三角形の突帯を貼り付ける防長系挿鉢と呼称されているタイプである。内面には漆が付着している。復元口径30.3cmを測る。4は石錘である。



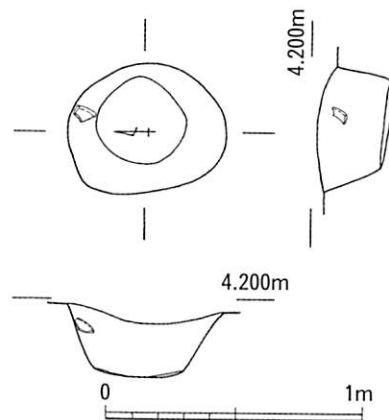
第41図 SK109出土遺物実測図（1/3）

SK136（第42図）

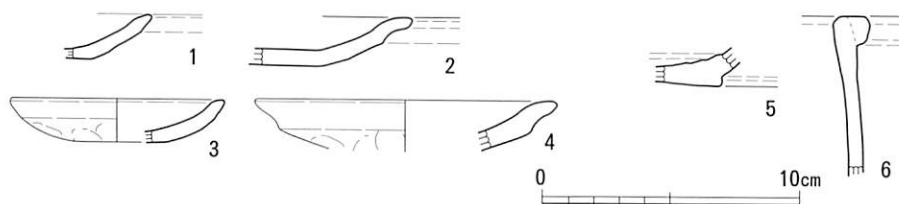
SK136はK21区に位置し、SD020を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約64cm、短径約50cm、深さ約28cmを測る。出土遺物には京都系土師器皿や在地系土師質土器皿などが認められるが、SD020との切り合い関係から、遺構の時期は近世と推定される。

SK136出土遺物（第43図）

第43図1～4は京都系土師器皿である。4は器壁が厚く3期の様相を呈する。5は在地系土師質土器皿の底部破片である。6は瓦質土器火鉢である。



第42図 SK136実測図（1/30）



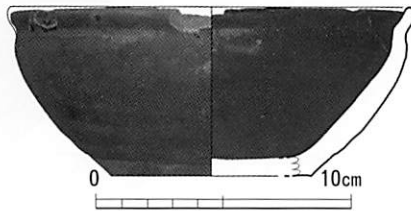
第43図 SK136出土遺物実測図（1/3）

SK175 (第44図)

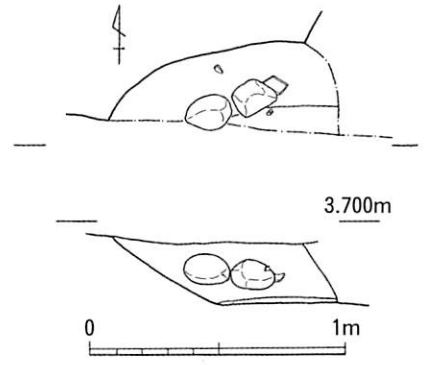
SK175はL21区に位置する遺構である。9次調査区との境に位置し、遺構の半分は検出できなかった。平面プランは楕円形を呈すると思われる。検出した規模は、最長90cm、深さ約25cmを測る。遺構内からは丸礫二つが並ぶように遺棄され、その下部から天目茶碗の破片が出土している。遺構の時期は、出土遺物や周辺の状況から16世紀後葉代に比定される。

SK175出土遺物 (第45図)

第45図は瀬戸美濃系天目茶碗である。復元口径13.1cmを測る。



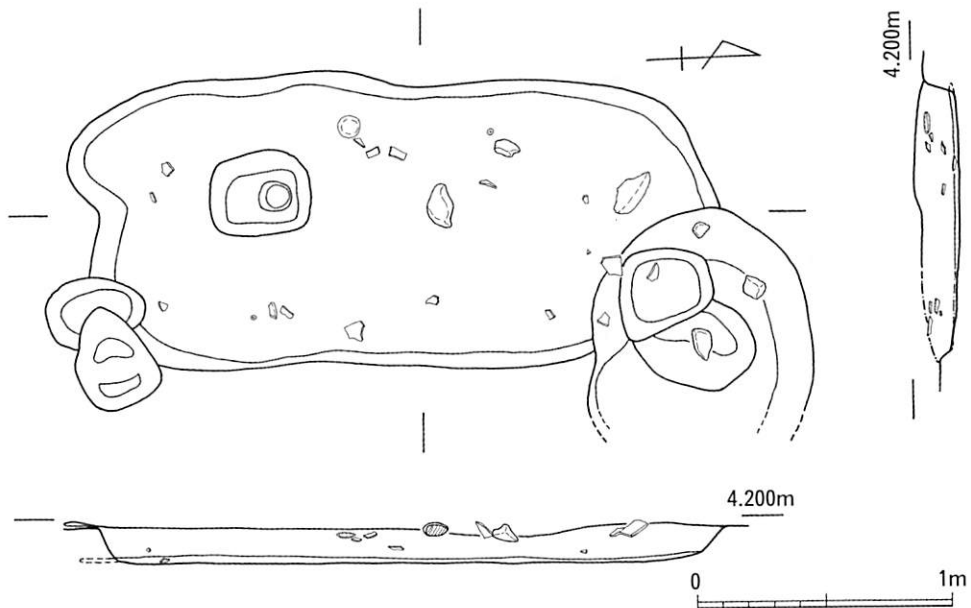
第45図 SK175出土遺物実測図 (1/3)



第44図 SK175実測図 (1/30)

SK200 (第46図)

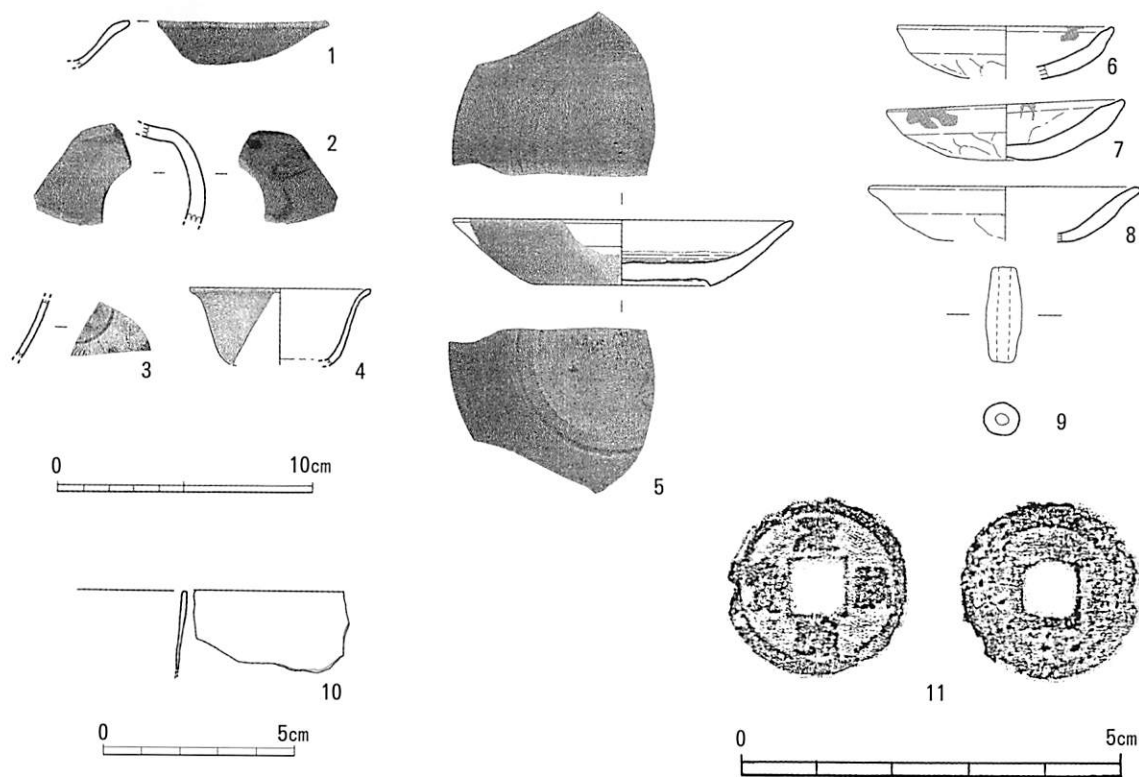
SK200はK20区に位置する不定形の浅い遺構である。SD019や周辺のピットなどに切られ遺構の全容はつかめなかった。規模は長径約2.6m、短径約1.1m、深さ約18cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青銅製品などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。



第46図 SK200実測図 (1/30)

SK200出土遺物（第47図）

第47図1は中国産白磁稜花皿の口縁部破片である。2は青花瓶の肩部である。3は五彩碗の胴部破片である。4は口縁部が端反りとなる、朝鮮王朝産の白磁小坏である。復元口径7.1cmを測る。5は碁笥底となる中国産白磁皿である。見込み部分には工具痕が残り、高台部分とともに露胎となる。復元口径13.5cm、底径7.0cm、器高2.5cmを測る。6～8は3期に比定される京都系土師器皿である。6・7には口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されていた可能性がある。9は土師質の管状土錘である。10は銅鏡の口縁部破片と推定する。11は中国北宋代の「元祐通寶」である。初鑄年代は1086年で、書体は篆書である。



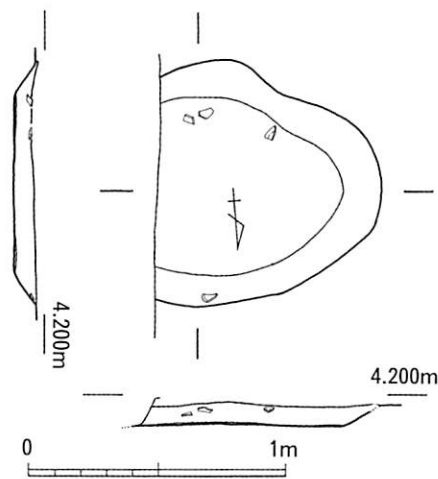
第47図 SK200出土遺物実測図（1～9は1/3、10は1/2、11は1/1）

SK213（第48図）

SK213はK20区に位置する遺構で、SD019に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、検出した規模は長径約1.0m、短径約0.9m、深さ約10cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿や青花皿などが出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉代に比定される。

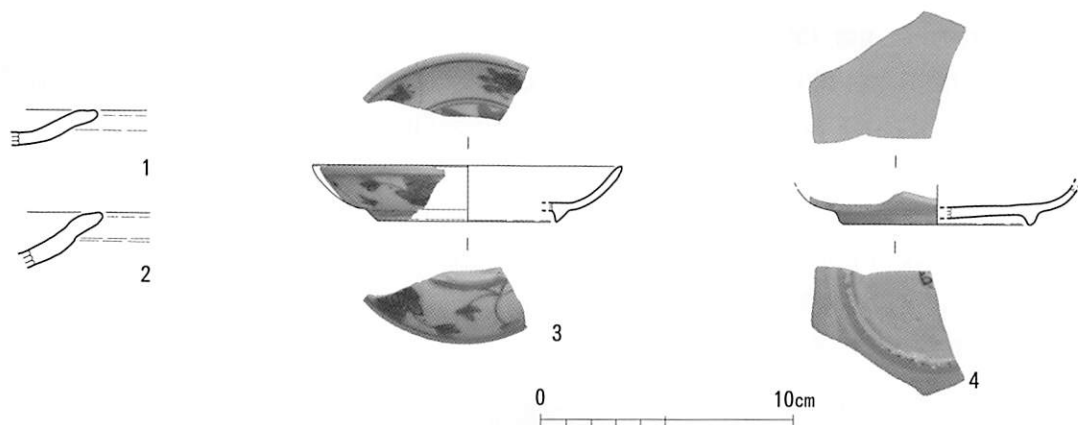
SK213出土遺物（第49図）

第49図1・2は京都系土師器皿の口縁部破片である。3は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部が内湾し、内外面に花文を施す。E群に比定される。4は中国産白磁である。高台内に青花で字款（「福」字か）を描き、高台畳付きには砂が付着する。



第48図 SK213実測図（1/30）





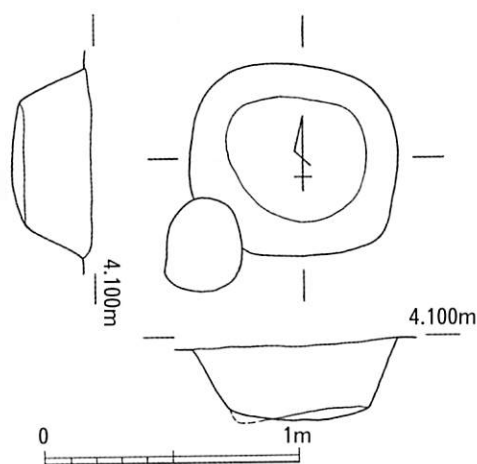
第49図 SK213出土遺物実測図 (1/3)

SK214 (第50図)

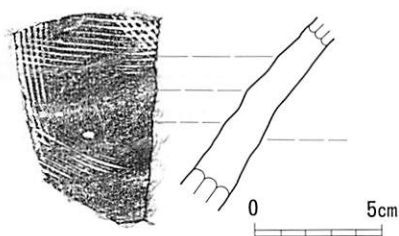
SK214はK20区に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約80cm、深さ約30cmを測る。当遺構からは土器片のほか備前系陶器挿鉢が出土している。遺構の時期は、出土遺物から16世紀後葉から末葉に比定される。

SK214出土遺物 (第51図)

第51図1は備前系陶器挿鉢である。近世1期bに比定される資料で内面の挿目は放射状挿目に斜め挿目を重ねる特徴をもち、1570年代以降に出現するタイプである。



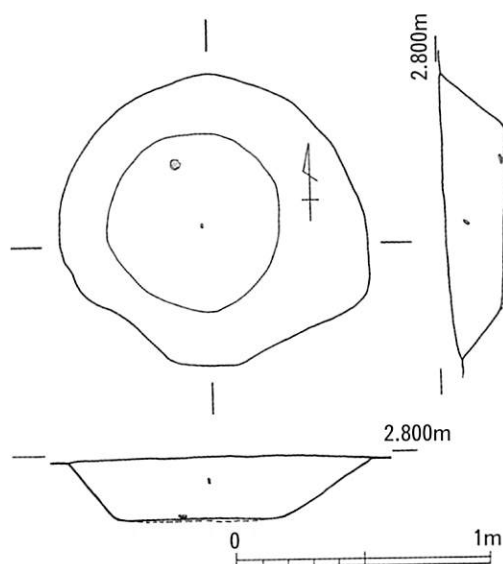
第50図 SK214実測図 (1/30)



第51図 SK214出土遺物実測図 (1/3)

SK243 (第52図)

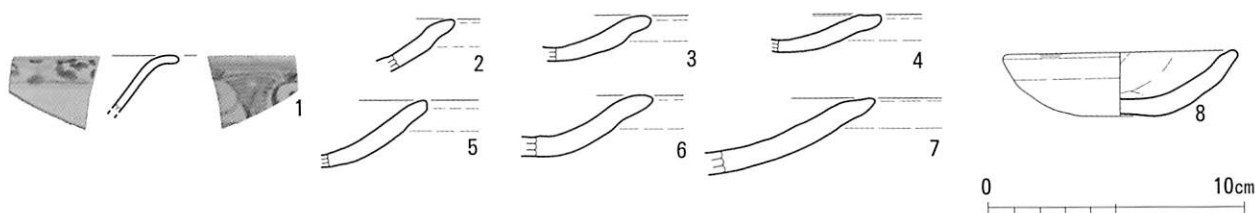
SK243はL21～M21区に位置する遺構で、SX001内に構築されている。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約2.6m、短径約2.3m、深さ約40cmを測る。当遺構からは京都系土器器皿や青花などが出土している。遺構の時期は、16世紀中葉から後葉に比定される。



第52図 SK243実測図 (1/30)

SK243出土遺物 (第53図)

第53図1は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部が端反りとなり、内面には四方禪文を描く。B2群に比定される資料である。2～8は2期に比定される京都系土師器皿である。8は復元口径8.2cm、器高2.3cmを測る。

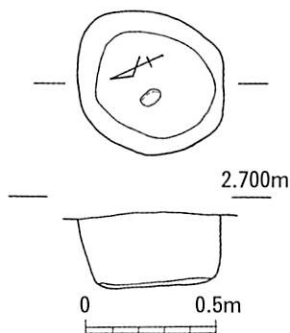


第53図 SK243出土遺物実測図 (1/3)

SK244 (第54図)

SK244はM21区に位置する遺構で、SX001内に構築されている。

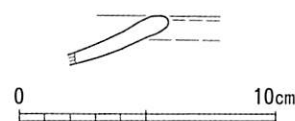
平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約65cm、短径約58cm、深さ約30cmを測る。当遺構からは京都系土師器皿の口縁部破片が出土しているほかは図示可能な遺物の出土はない。遺構の時期は、SX01内に構築されていることや、SK243との関連から16世紀中葉から後葉代に比定したい。



第54図 SK244実測図 (1/30)

SK244出土遺物 (第55図)

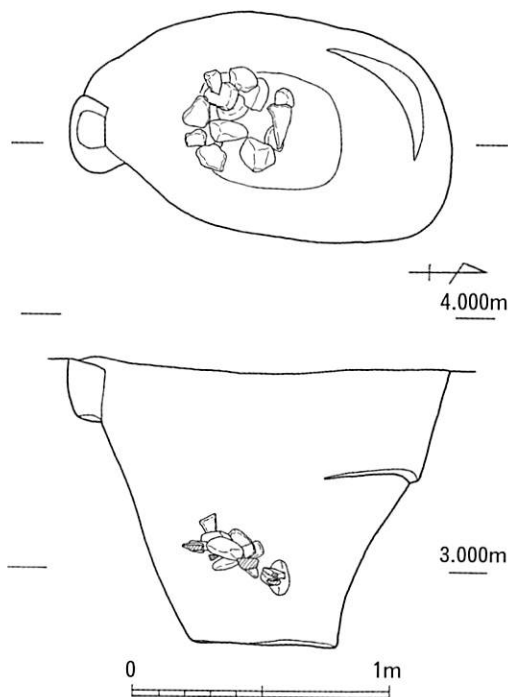
第55図は京都系土師器皿の口縁部破片である。



第55図 SK244出土遺物実測図 (1/3)

SK100 (第56図)

SK100はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.5m、短径約0.9m、深さ約1.1mを測る。埋土下位に人頭大の丸礫が集中して廃棄されていた。遺物は少量の土器片が出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。



第56図 SK100実測図 (1/30)

SK125 (第57図)

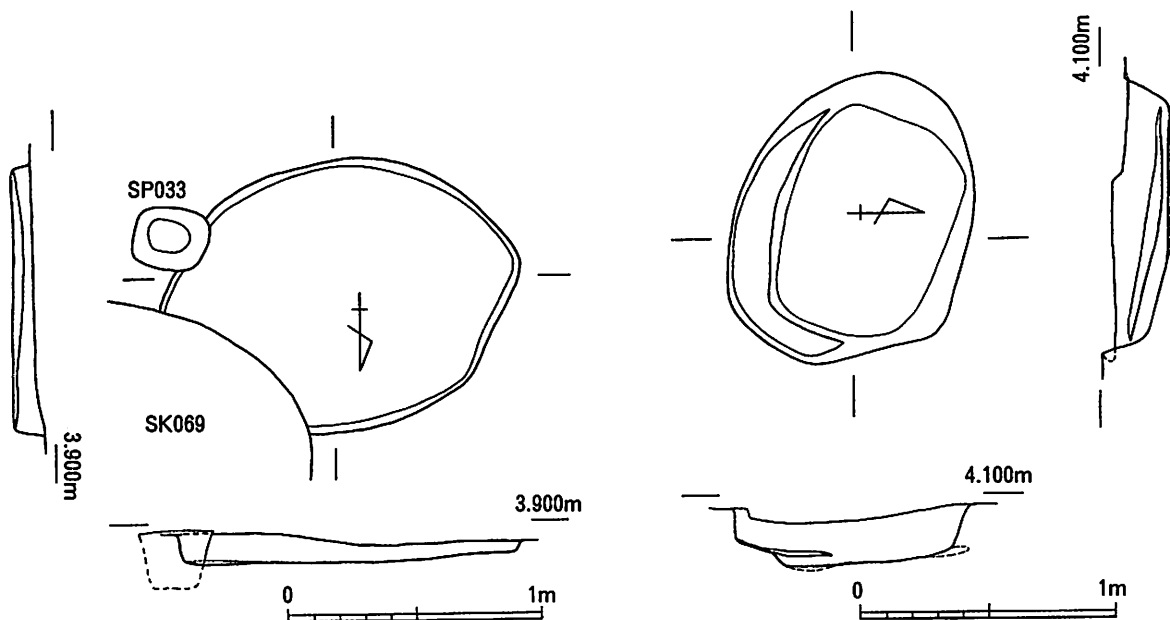
SK125はL20区に位置する遺構でSK069やSP033に切られる。平面プランは楕円形を呈するものと思われ、検出した規模は長径約1.2m、短径約1.1m、深さ約10cmを測る。図示可能な遺物の出土はなかった。遺構の時期は、遺構の切り合い関係から16世紀後葉以前に比定される。

SK135 (第58図)

SK135はK21～L21区に位置し、SD020を切る遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約20mを測る。図示可能な遺物の出土はなかった。遺構の時期は、遺構の切り合い関係から17世紀に比定される。

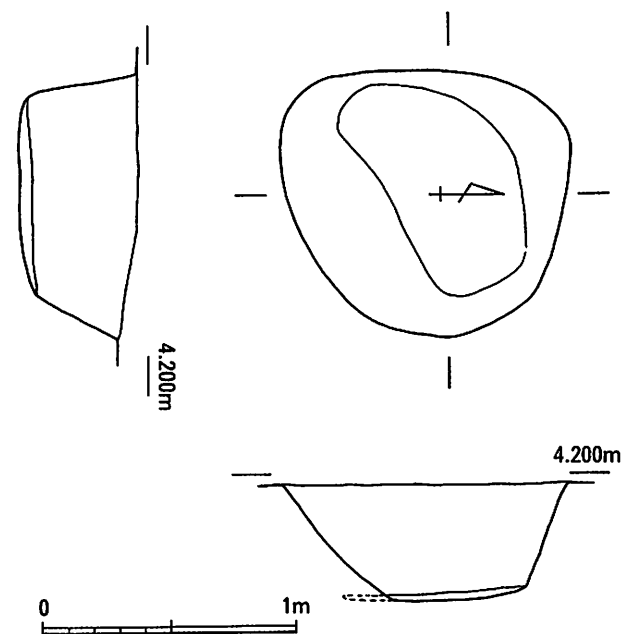
SK233 (第59図)

SK233はK20区に位置する遺構で、SP216に切られる。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約1.1m、短径約1.0m、深さ約50cmを測る。遺物は少量の土器片が出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。



第57図 SK125実測図 (1/30)

第58図 SK135実測図 (1/30)



第59図 SK233実測図 (1/30)

SK030 (第60図)

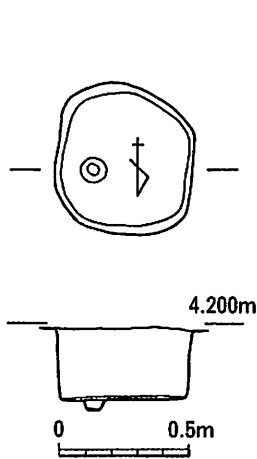
SK030はL20区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約60cm、短径約50cm、深さ約30cmを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがピット(柱穴)の可能性が高い。

SK031 (第61図)

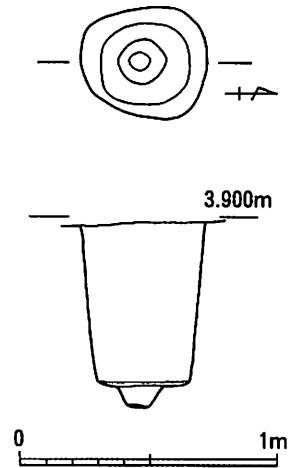
SK031はL19区に位置する遺構である。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径約50cm、短径約45cm、深さ74cmを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがピット(柱穴)の可能性が高い。

SK087 (第62図)

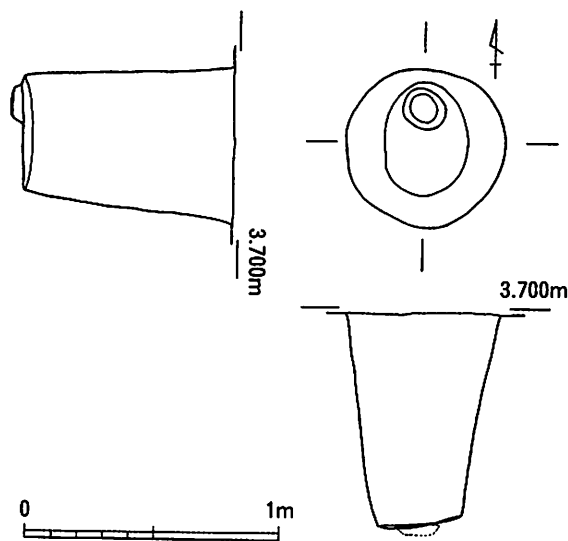
SK087はL21区に位置する遺構である。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は直径約0.6m、深さ約0.9mを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を特定する良好な資料は認められない。土坑として報告するがピット(柱穴)の可能性が高い。



第60図 SK030実測図 (1/30)



第61図 SK031実測図 (1/30)



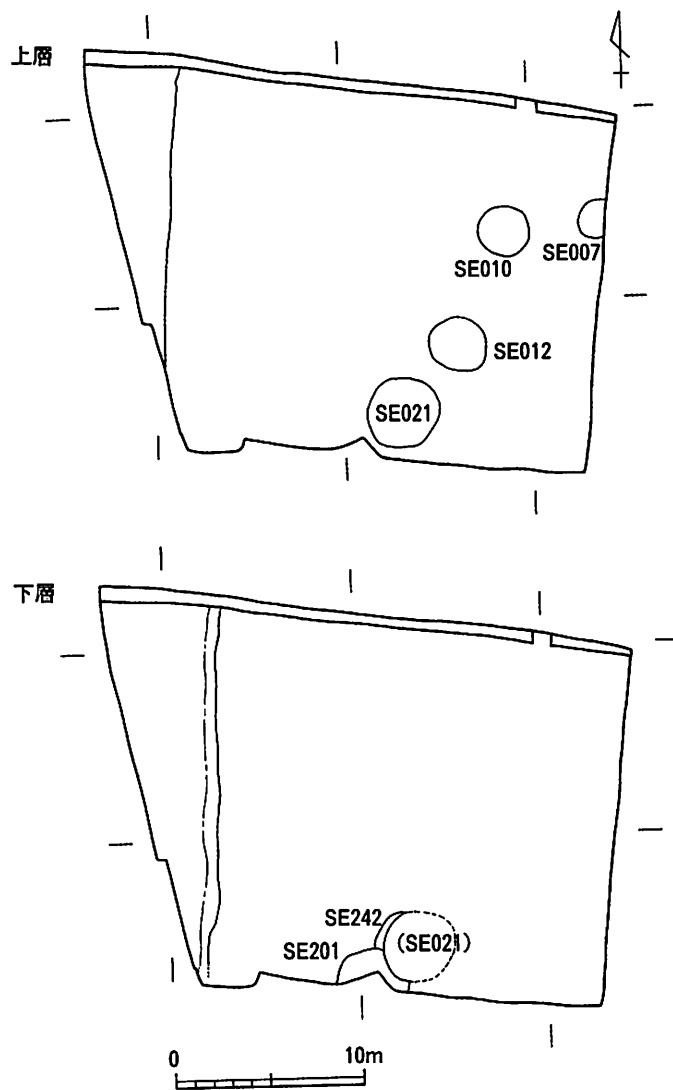
第62図 SK087実測図 (1/30)

4. 井戸

概要 中世大友府内町跡22次調査区では、6基の井戸を検出している。上層遺構群に属するものが4基、下層遺構群に属するものが2基である。上層遺構群に属するものは、16世紀末葉に比定される井戸が主体をなし、当調査区の最盛期に属する。道路状遺構（SF230）の第Ⅱ期に相当すると考えられる時期である。またこれらの井戸とSF230との位置関係を観察するとSF230が調査区の西側を南北に走っているのに対し、井戸は調査区の東側に構築されていることがみられる。また、道路状遺構と井戸の間にはピット類が多数構築されていることも観察できる。このことから、「府内古図」にみられる「桜町」（「大友氏館」に東面する町屋）が東西を軸とする短冊状に区画されていたことがみとれる。

下層遺構に属するものは2基で、うち1基は僅かに堀方の痕跡が認められるものの、ほぼ同じ位置にSE021が構築されており、全体の規模は不明である。しかし、2つの井戸とも方形の井形をもち、井筒には曲げ物または桶を使用している。このことから、これらの井戸は14～15世紀代にかけて構築及び埋没したものと考えられる。

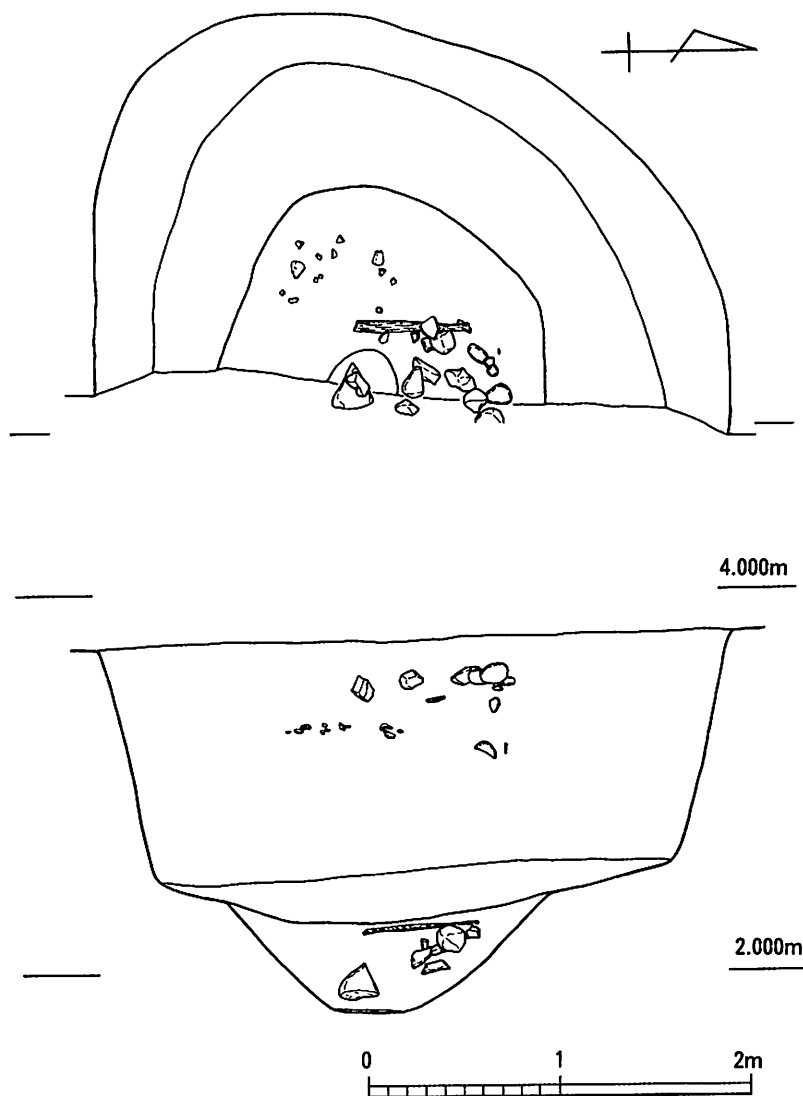
本調査区で検出した井戸のすべては素掘りのものであり、上層遺構の井戸の井戸側には結桶が使用されており、下層遺構の井戸には方形の井戸側が使用されている。



第63図 井戸 (1/400)

SE007 (第64図)

SE007はM20区の東端に位置する井戸で、上層遺構群に属する遺構である。井戸の掘方は径約2.0mの円形を呈すると思われる、東半分は調査区の制限で未発掘である。井戸側及び井筒部は完全に抜き取られており、平面及び断面でも確認できなかったが、床面で井筒に使用されたとと思われる結桶の桶材を検出しており、結桶を井戸側及び井筒として使用していたものと推定される。検出面から約0.5m掘り下げたところで埴塙(取瓶)が一括廃棄された状況を確認した。土層の堆積状況などから井

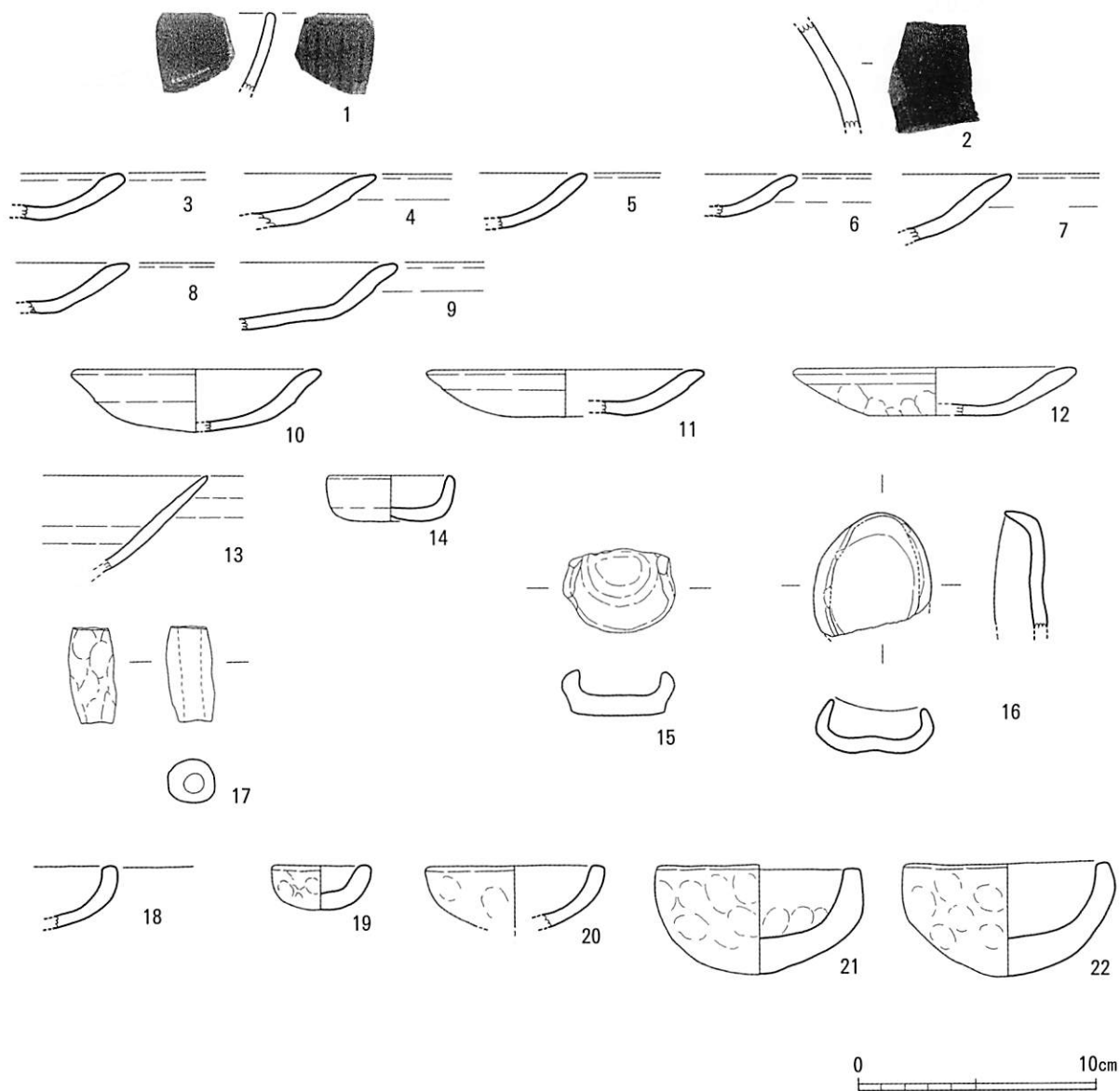


第64図 SE007実測図 (1/40)

戸が廃棄された後に埴塙類の廃棄のために再度土坑が構築された可能性が高い。なお、井戸底面で漆器碗が出土したが、残りが非常に悪く取上は困難であった。出土した京都系土師器皿の年代観から、当該井戸の廃棄は16世紀中葉から後葉に比定される。

SE007出土遺物 (第65図)

第65図1は中国産青磁碗の口縁部破片である。2は中国産と思われる黒釉陶器壺の胴部破片である。3~12は京都系土師器皿である。13は在地系土師質土器皿の口縁部破片である。14は焼塩壺の蓋を盛塩用の皿に転用したと思われる。15~16は耳皿である。15は底部に回転糸切り痕が残り、赤褐色系の色調を呈する。16は京都系土師器皿と同じ胎土を用いて手捏ねで作られたもので、浅黄色系の色調を呈する。17は土錘である。18~22は埴塙もしくは取瓶である。これらはSE007の中位の土坑状の掘り込みに廃棄された状態で出土しており、図示可能なものを挙げている。



第65図 SE007出土遺物実測図 (1/3)

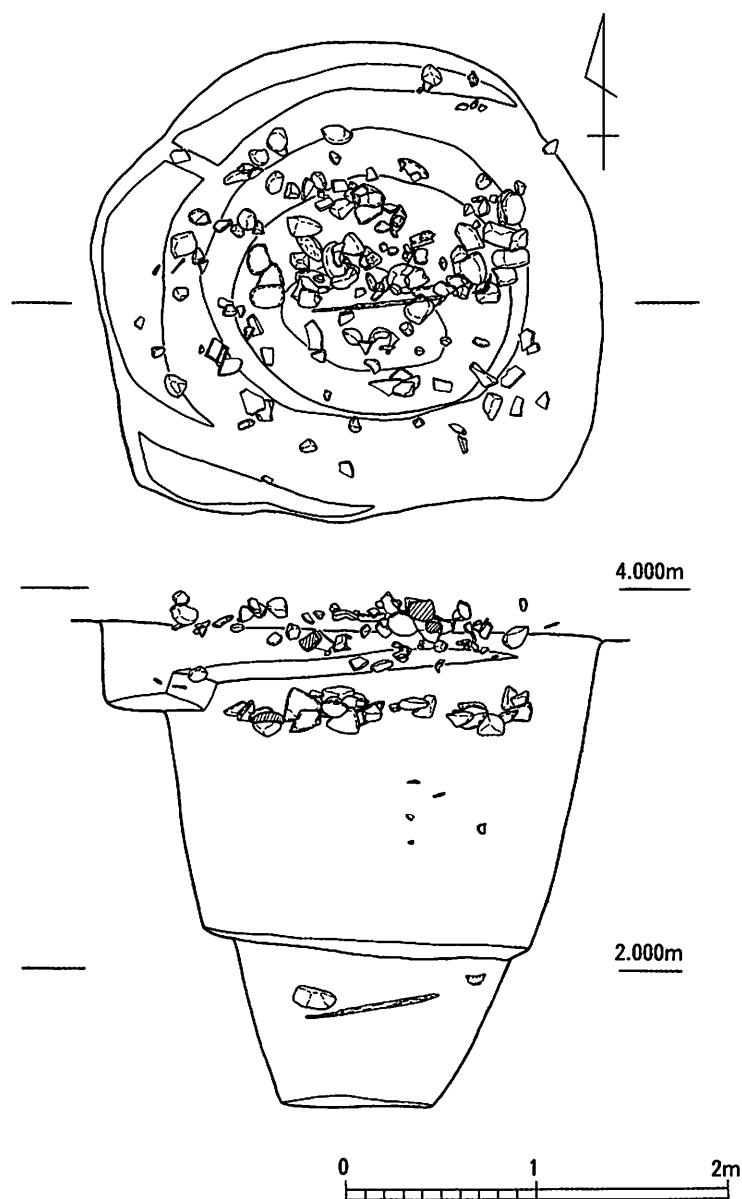
SE010 (第66図)

SE010はL20区東に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。井戸の堀方は径約2.6mの不整円形を呈し、深さは検出面から約2.1mを測る。堀方の底面には長径約0.9m、短径約0.54m、深さ45cmの水溜部がある。掘方を検出した面では10~20cm大の礫が多数確認され、検出面から約50cm掘り下げた所でも同じような礫の水平堆積が確認された。それより下位には目立った礫の堆積はなく、井戸を埋める際に緩んだ地盤を補強するために礫を敷き詰めたと推定される。なお、水溜部と推定される底面で井戸の廃棄時に伴う祭祀に使用されたと推定される竹が出土している。土層観察からは井戸側の痕跡は確認できなかったが、井戸を廃棄する際にすべて抜き取られたものと推測される。

出土遺物には3期に比定される京都系土師器があり、当遺構の廃棄時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

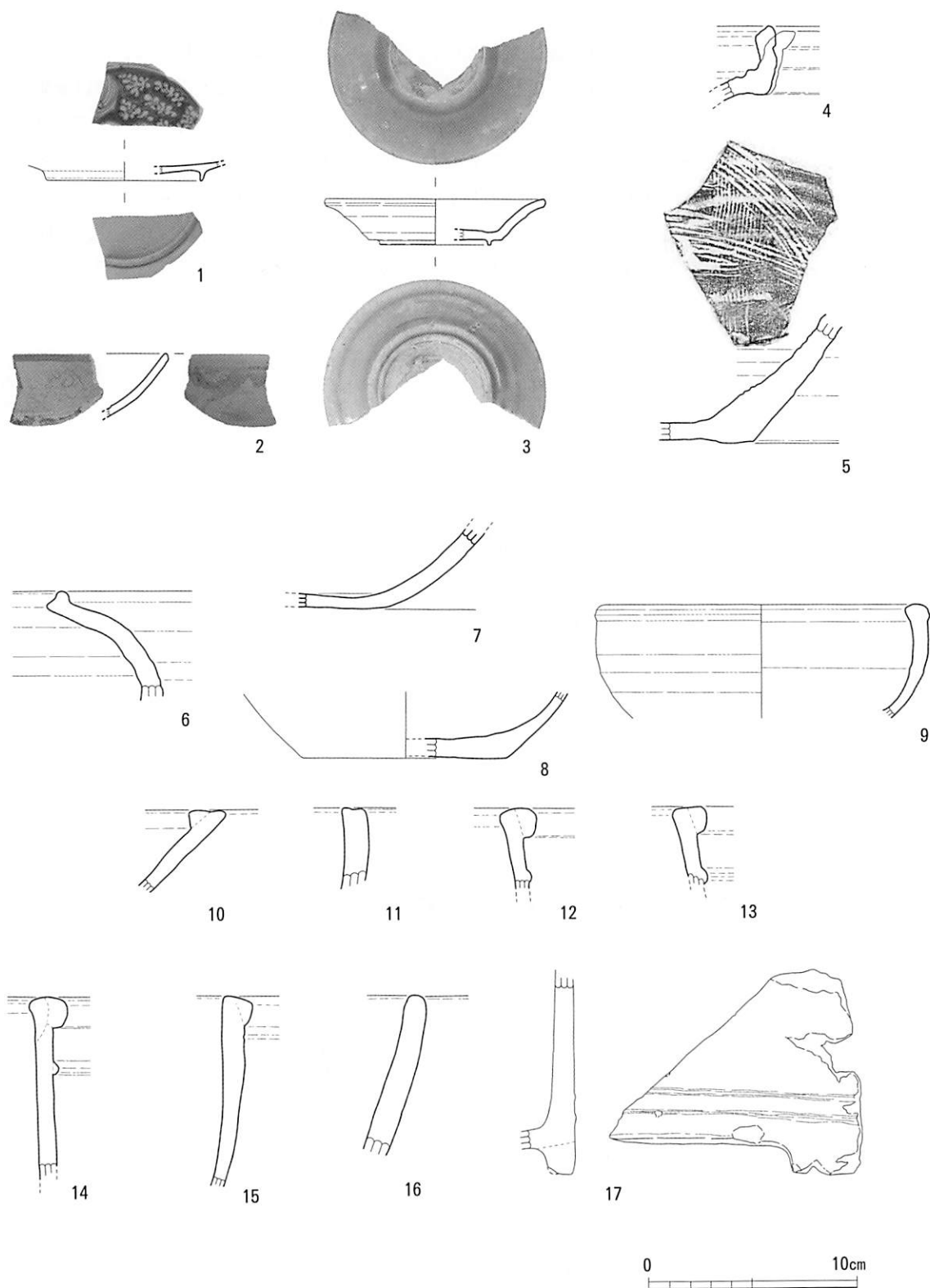
SE010出土遺物（第67～70図）

第67図1は中国景德鎮窯系青花皿で、E群に比定される資料である。2は中国漳州窯系青花碗である。3は瀬戸美濃系陶器灰釉皿である。見込みと高台部は露胎となる。4は備前系陶器播鉢の口縁部破片である。5は備前系陶器播鉢の底部破片である。内面の播目は、放射状の播目に斜めの播目が付加されているのが観察できる。近世1期bに比定される資料である。6は備前系陶器甕の口縁部破片である。7～9は備前系陶器鉢である。8・9は同一個体と思われるもので、9の復元口径は16.4cmを測る。10は瓦質土器播鉢の口縁部破片で7条の播目が認められる。11～16は瓦質火鉢の口縁部破片である。17は瓦質火鉢の脚部である。第68図1は瓦質土器風炉である。復元口径41.6cm、復元高台径30.4cm、器高9.4cmを測る。2～8は京都系土師器皿である。やや器壁が厚くなっており、3期に比定される。6には墨書が認められるが残存状況が悪く判読し難い。9～12は京都系土師器坏である。



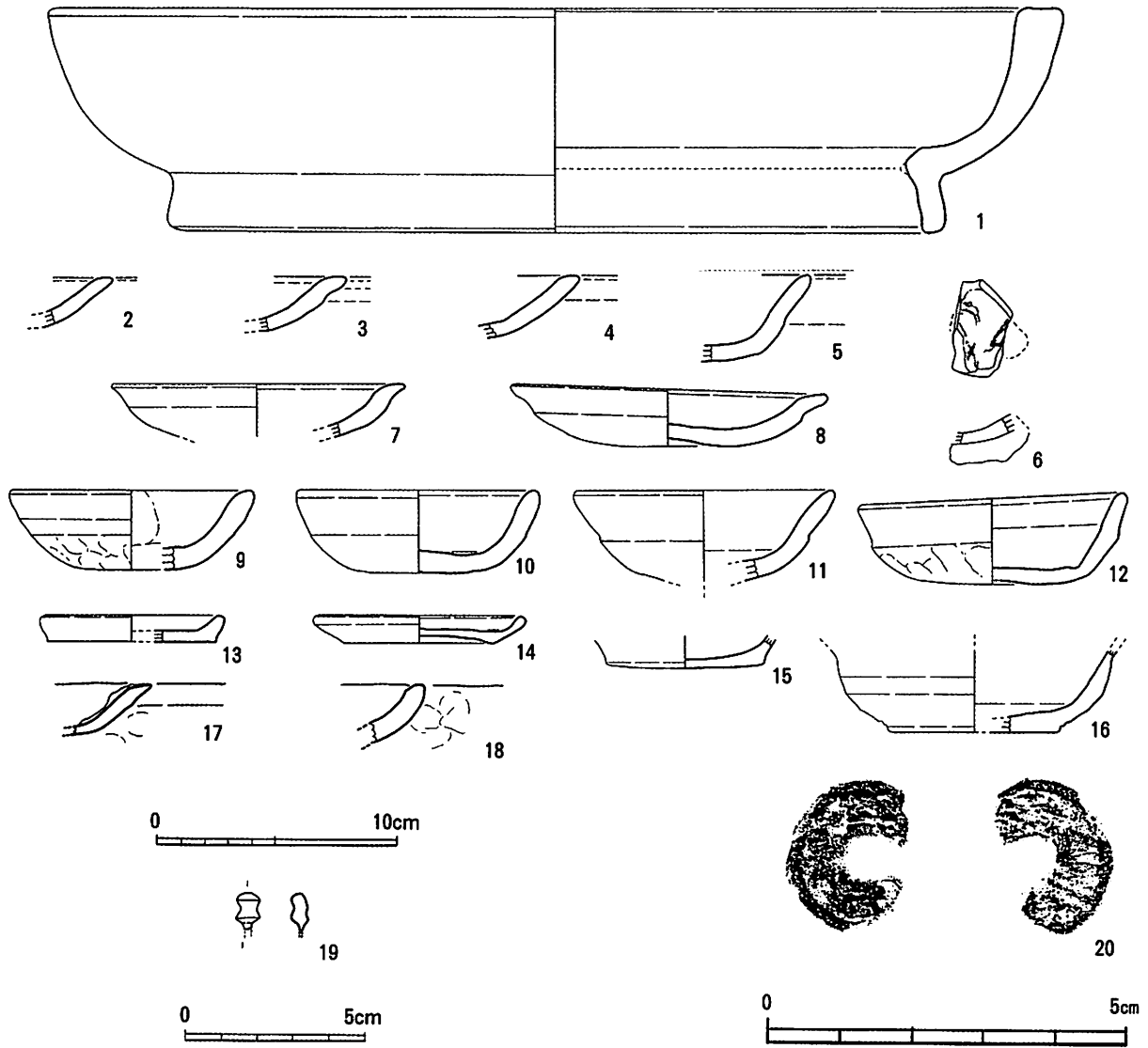
第66図 SE010実測図 (1/40)



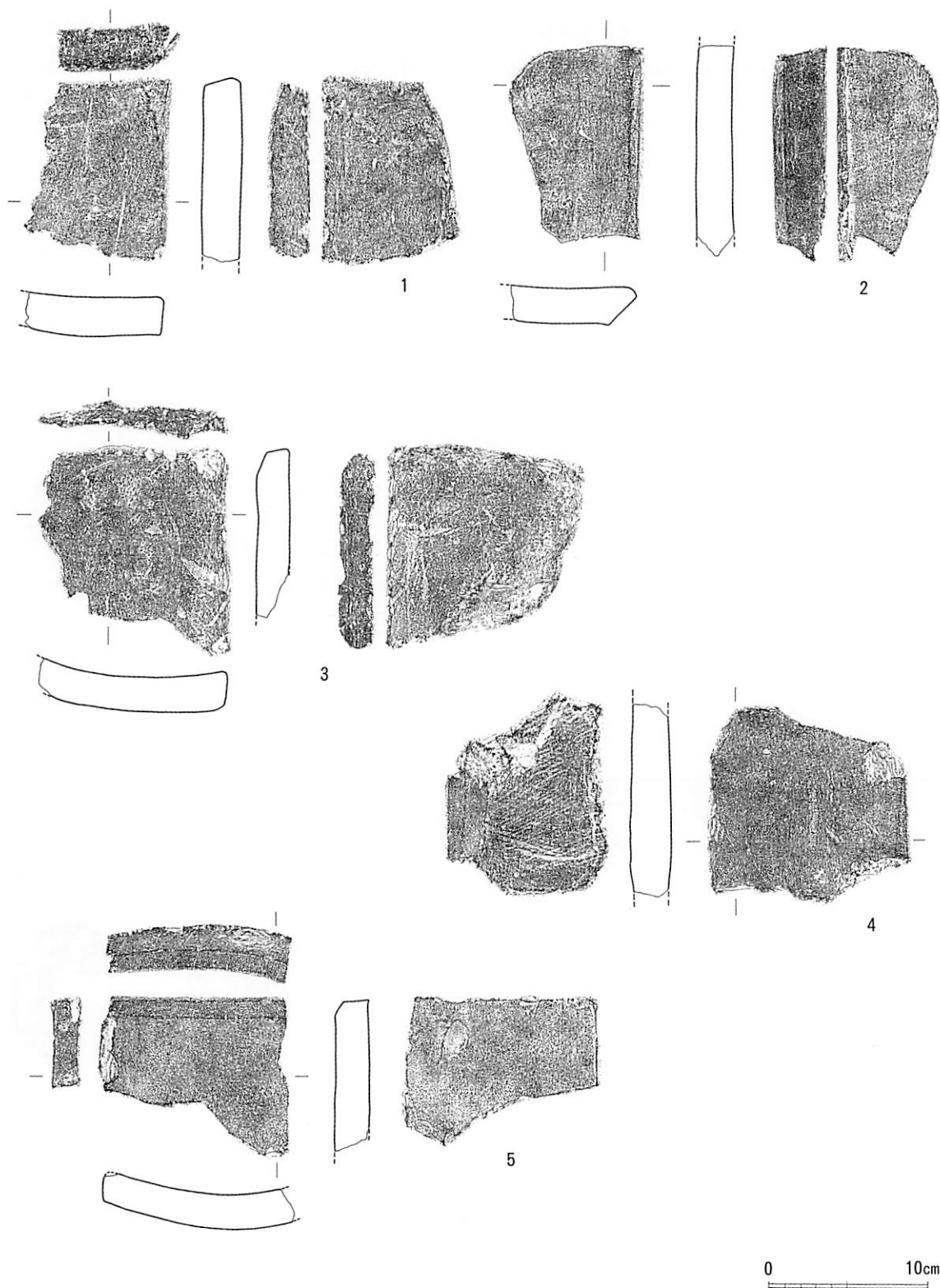


第67図 SE010出土遺物実測図① (1/3)

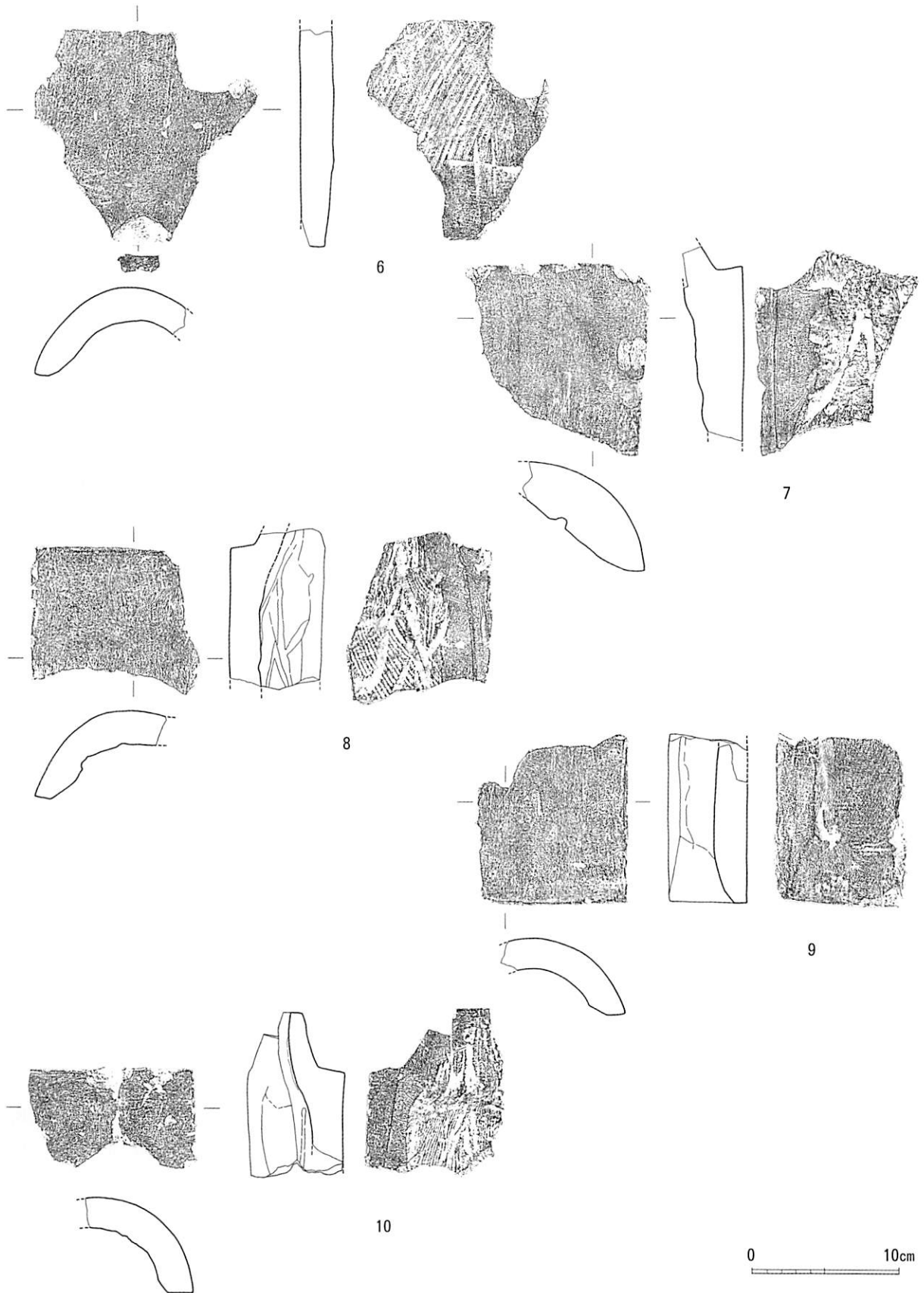
やはり3期に比定されよう。13~16は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が認められる在地系土師質土器皿である。17・18は取瓶(埴塙)の口縁部破片である。17は京都系土師器皿を転用したものである。19は銅製金具である。ピン状になると推定されるが、用途は不明である。20は銅銭である。錆が付着しており銭種は不明である。第69~70図には瓦を図示した。1~4は平瓦である。5~10は丸瓦である。



第68図 SE010出土遺物実測図② (1~18は1/3、19は1/2、20は1/1)



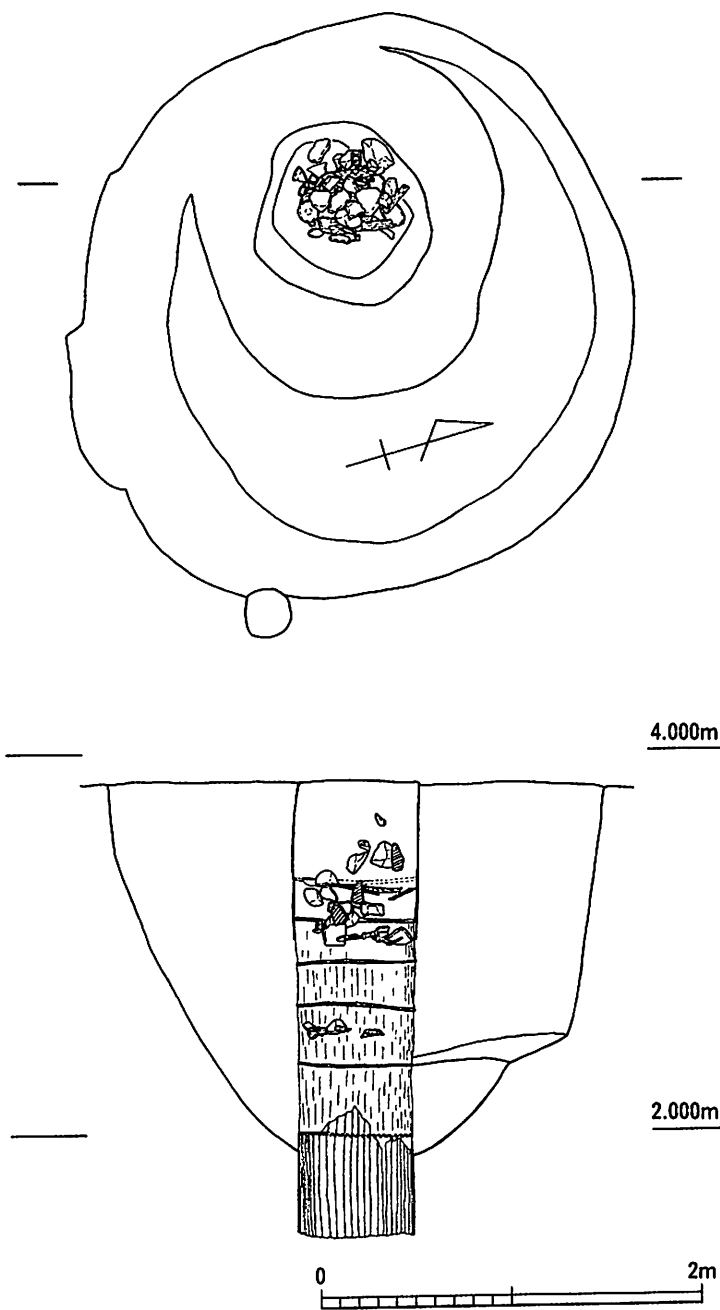
第69図 SE010出土遺物実測図③ (1/4)



第70図 SE010出土遺物実測図④ (1/4)

SE012 (第71図)

SE012はL21区東に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。調査当初、井筒の平面プランを先に検出しており、土坑状の遺構であると認識していた。しかし、掘り下げるうちに底面になかなか達せず、再度周囲を精査した結果、井戸の掘方ラインを検出できた。井戸の堀方は径約3.0mの不整円形を呈し、深さは検出面から約2.0mを測る。井筒の平面プランは径0.6mの円形である。井戸の土層断面を確認すると、井筒の桶は2段ないし3段以上が重ねられて使用されており、上から1段目及び2段目の結桶は抜き取られている。井筒内からは京都系土師器皿や青銅製小柄・用途不明の鉛製品などが出土している。出土遺物から遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。



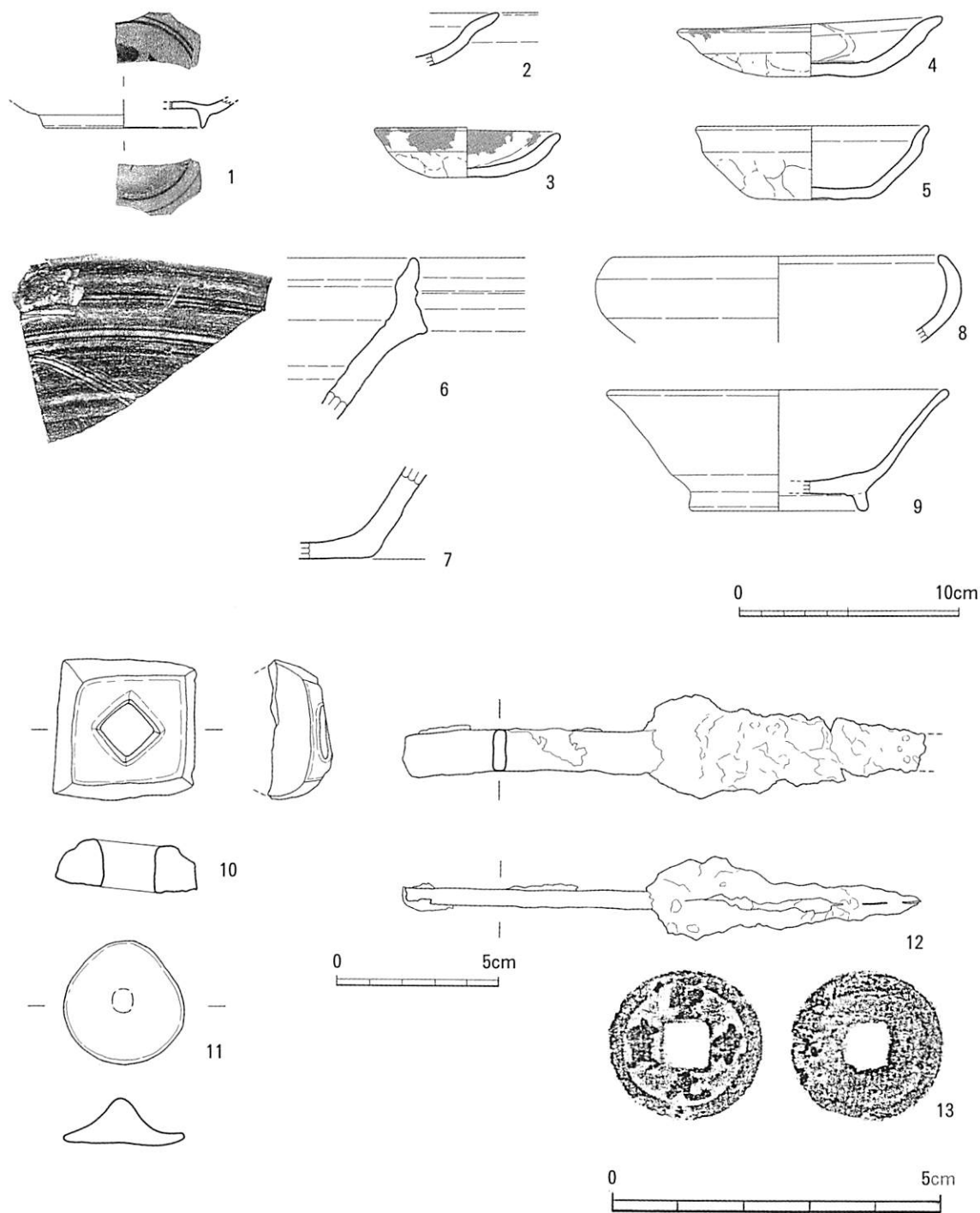
第71図 SE012実測図 (1/40)

SE012出土遺物 (第72図)

第72図1は碗E群に比定される中国景德鎮窯系青花碗である。2～5は京都系土師器の皿と坏である。6～8は備前系陶器で6・7

は搦鉢、8は鉢である。9は高台付きの土師質土器碗である。10は石臼のフルギアナの部分である。意図的に石臼から削り取られた可能性がある。11は鉛製の製品である。インゴットか。類似品が長崎市「万才町遺跡」<sup>(6)</sup>の溝状石列3から2例出土している。12は小柄である。13は中国北宋代の「聖宋元寶」で、初鑄年代は1101年である。書体は行書である。

(6) 長崎市埋蔵文化財調査協議会『万才町遺跡』－朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ (1996年) 69頁 第47図24・25



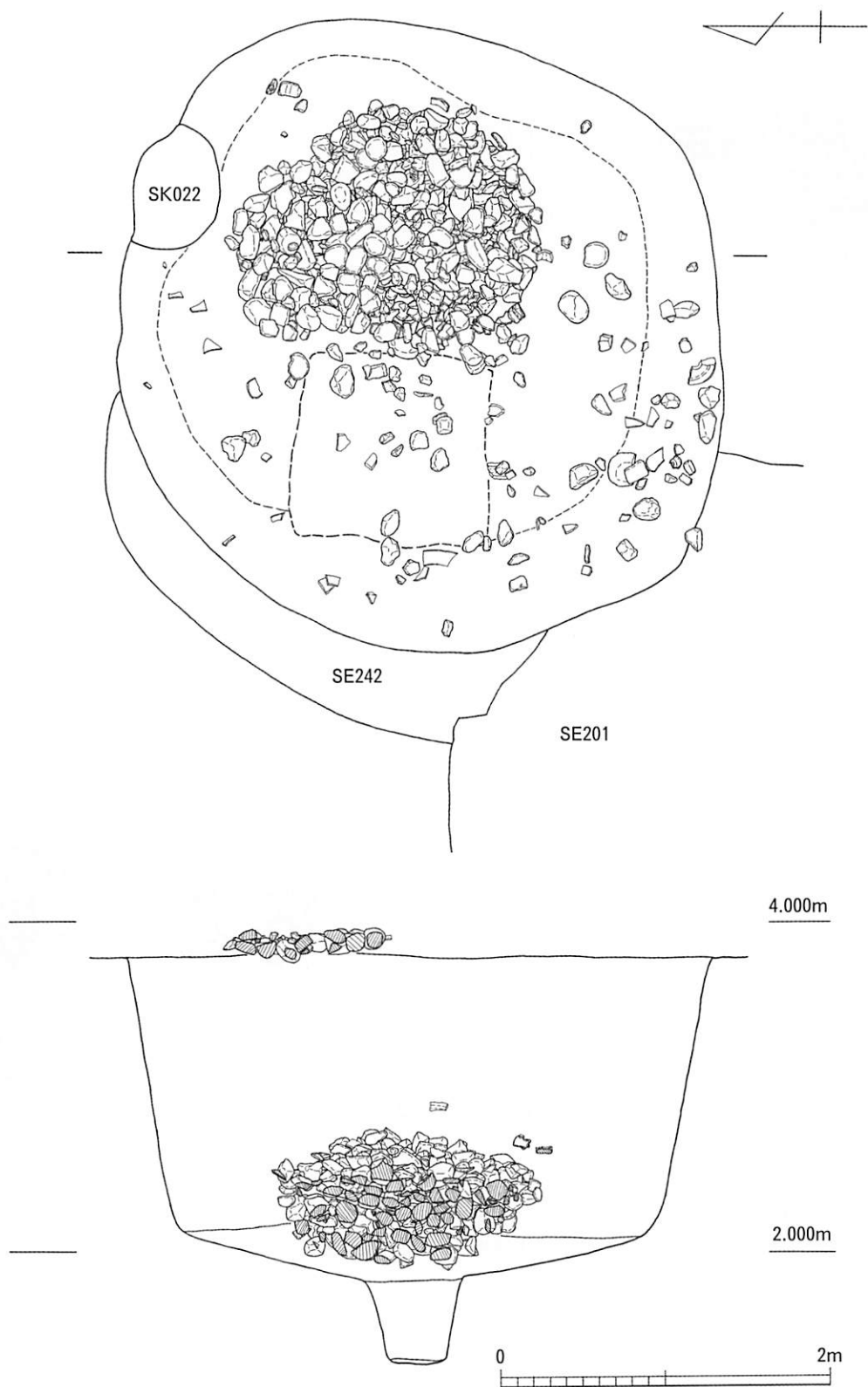
第72図 SE012出土遺物実測図 (1~9は1/3、10~12は1/2、13は1/1)

SE021 (第73図)

SE021はL21区に位置する井戸で上層遺構群に属する遺構である。次項以下で記述するSE201・SE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。井戸の掘方は径約3.7mの不整円形を呈し、深さは検出面から約2.0mを測る。掘方の埋土上位には大型の河原礫や拳大の礫が集中して投棄されている部位があり、当該部位を井筒と想定し断ち割り調査を行った。その結果、井筒は井戸廃棄時に完全に抜き取られており、井戸側は観察できなかった。また、水溜部直上に大型の河原礫や拳大の礫を投棄している状況が観察された。井戸廃棄時に大量の礫を投棄する状況は他の

## 第2節 遺構と遺物

調査区でも多々観察されており、井戸廃棄に関わる祭祀的な行為である可能性が高い。また、井戸の掘方底面、SE021の井筒の西側で方形の井形をもつSE242の井筒部を検出した。SE242が廃棄されたのち、SE201がすぐ近くで掘り直され、それが廃棄されるとSE242とほぼ同じ位置にSE021を構築し



第73図 SE021実測図 (1/40)

直している状況がうかがえる。SE021の掘方からの出土遺物には2期に比定される京都系土師器皿の口縁部破片が出土し、井筒の抜き取りのために掘られた部位からは3期に比定される京都系土師器皿や近世I期に比定される備前系陶器播鉢が出土している。このことから当遺構の構築年代を16世紀中葉、廃棄年代を16世紀後葉から末葉に比定しておきたい。

#### SE021出土遺物（第74～77図）

第74図1は中国漳州窯系青花皿の口縁部破片である。口縁部が端反りとなるタイプである。

2は中国産白磁皿の口縁部破片である。口縁部が稜花を呈する。3は褐彩磁器皿の口縁部破片である。4は褐釉陶器壺の口縁部破片である。口縁端部は折り返しており、断面形状が方形を呈する。5は中国景德鎮窯系青花皿である。いわゆる「碁笥底」をもち、高台内は露胎となる。口縁はかるく内湾気味におさまる。見込みには捻花を描く。復元口径10.9cm、底径4.4cm、器高2.8cmを測る。皿C群に比定される資料である。6は中国景德鎮窯系青花碗である。見込み部分がゆるやかに盛り上がる特徴をもち、いわゆる「饅頭心」碗である。見込みには折菊を描き、高台内の字款は「萬福収同」である。底径は5.1cmを測る。碗E群に比定される資料である。7は朝鮮王朝系雑釉陶器碗である。内外面に釉が掛かり、見込みと高台畳付きには目跡が5カ所確認できる。胴部は大きく開くが、腰部で外反気味に立ち上がる。底径5.2cmを測る。8は青磁皿の底部破片である。9・10は中国産白磁皿である。9は見込み部分は蛇の目釉剥ぎ、底部は腰部から露胎となる。口縁部は端反りとなる。焼きが非常に悪く、露胎部分は浅黄色に発色している。口径10.7cm、底径4.8cm、器高2.8cmを測る。10は口禿の皿で、横田・森田編年のIX類に比定される資料である。混入か。11・12は瀬戸美濃系陶器碗である。11は天目茶碗である。12は丸碗で、灰オリーブ色の釉が掛かる。大窯3期（16世紀後葉）<sup>(7)</sup>に比定される資料である。

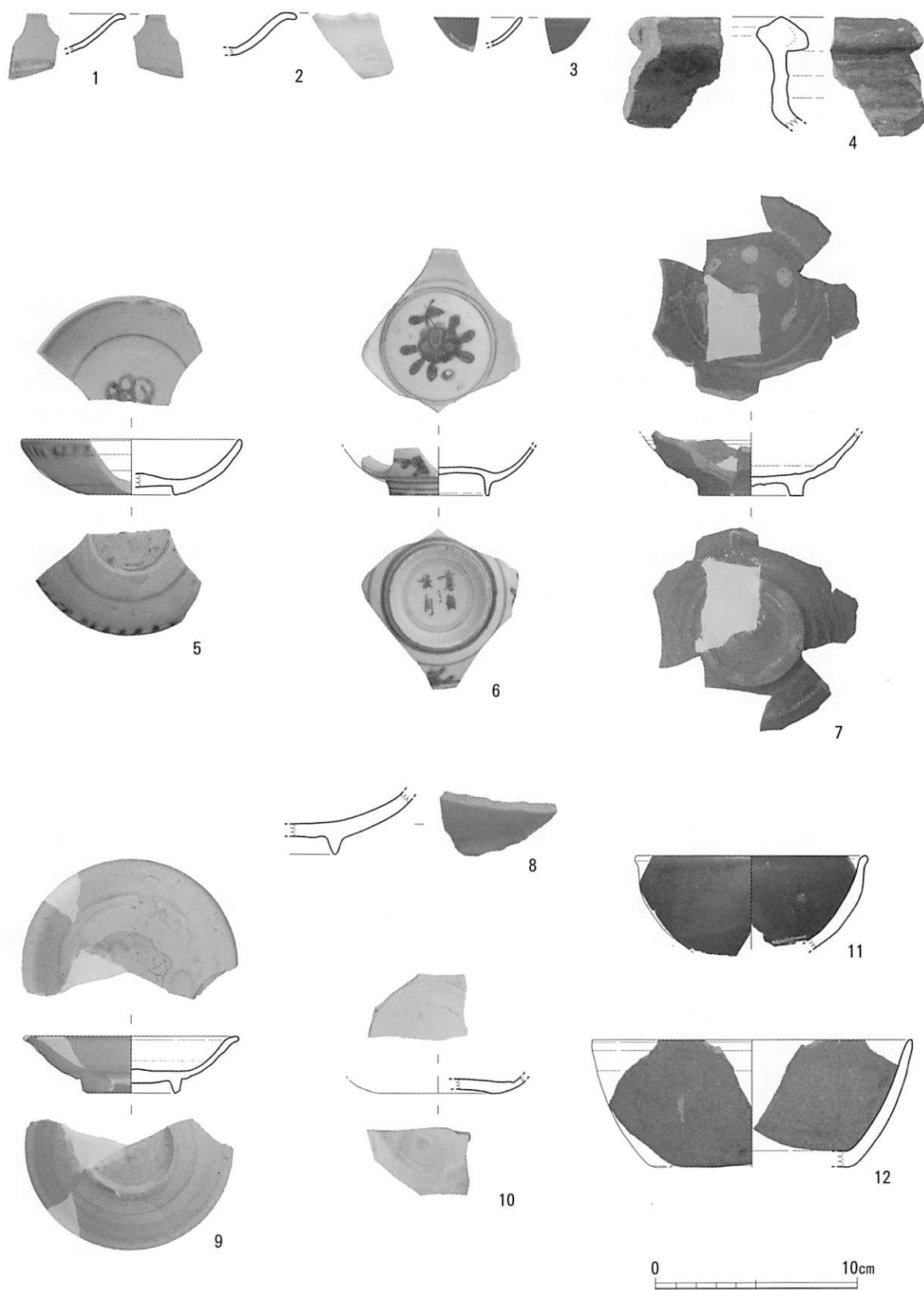
第75図1～15は浅黄色の色調を呈する京都系土師器皿である。1～5は掘方出土のものである。器壁が薄く2期に比定される。6～15は器壁が8mmを超え、厚くなっており、3期に比定される資料である。口径に注目すると8cm以内のもの（6）、8～9cmのもの（7～9）、11cm大のもの（10）、12cmのもの（11～14）、13cmを超えるもの（15）と5法量に細分される可能性がある。6の内面は被熱し、銅などが付着しており埴埴に転用されたものである。7の口縁部には煤が付着し灯明皿として使用されたものである。9は内外面全体が煤で黒くなっている。16～25は在地系土師質土器皿である。26は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。27・28は土師質土器鍋の口縁部破片である。29は東播系の瓦質土器である。甕の胴部か。30は防長系鍋の脚部である。31～34・39は備前系陶器播鉢である。いずれも近世I期に比定される資料である。35・36は備前系陶器壺の口縁部破片である。37は備前系陶器壺の肩部破片である。38は亀山系焼締陶器壺の胴部破片である。40・41は備前系陶器甕の底部破片である。42は備前系陶器鉢である。口縁部はやや内湾気味となる。口径は21.4cmを測る。

第76図には瓦を図示している。1～2は平瓦である。3～6は丸瓦である。

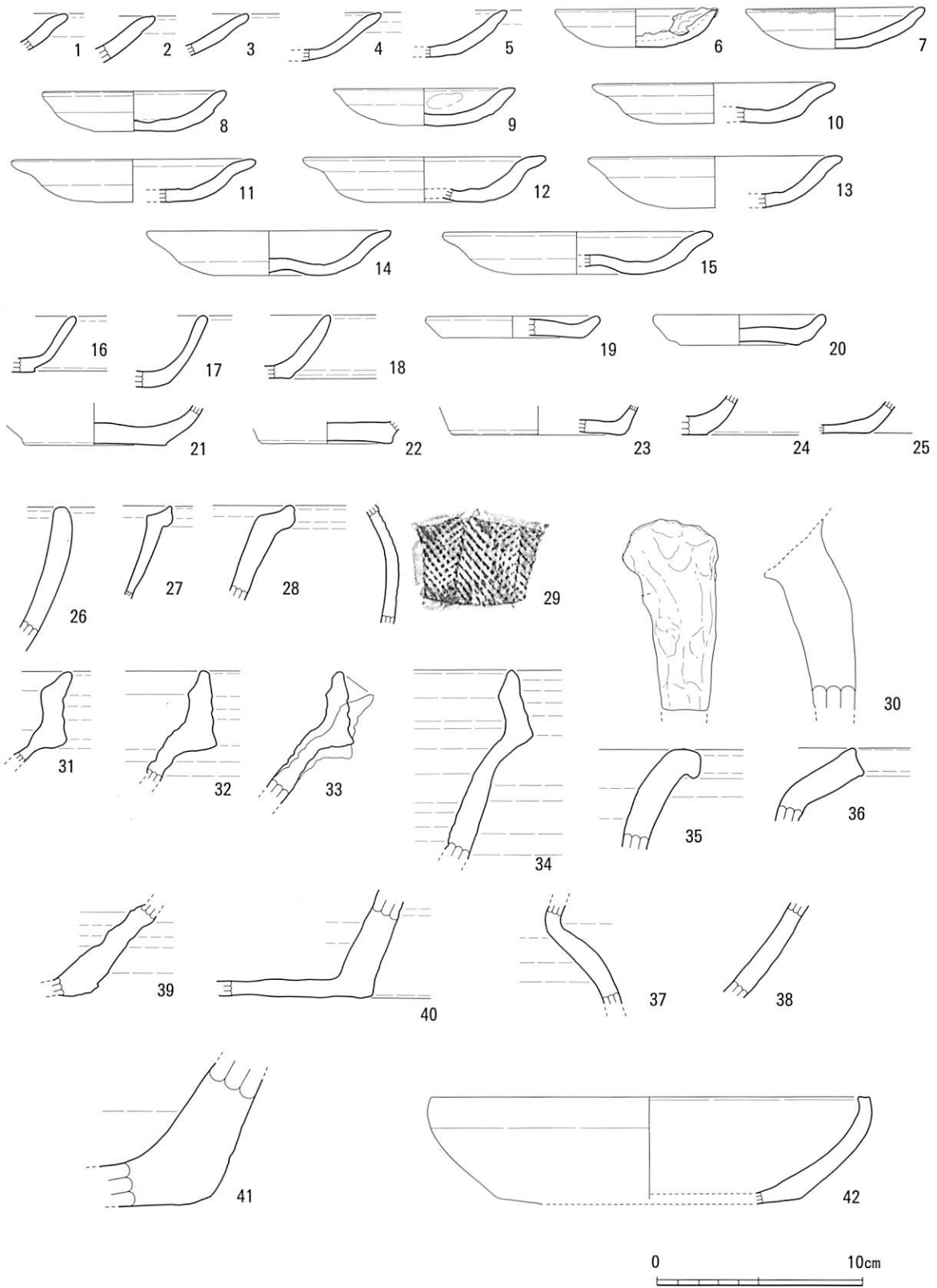
第77図1はガラス小片である。2は石臼（上臼）である。

(7) 藤沢良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市文化財センター研究紀要』第10輯（2002年）

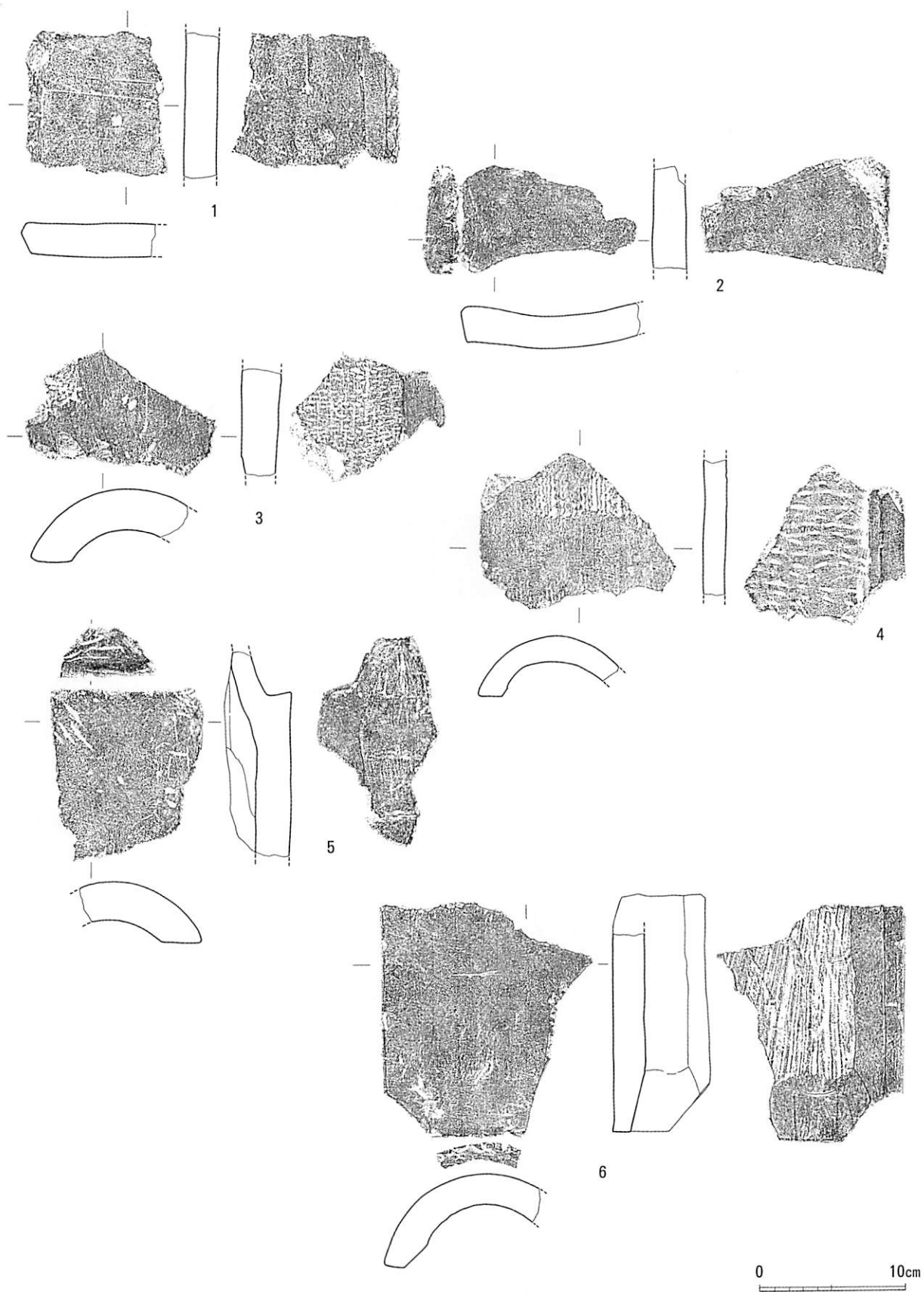




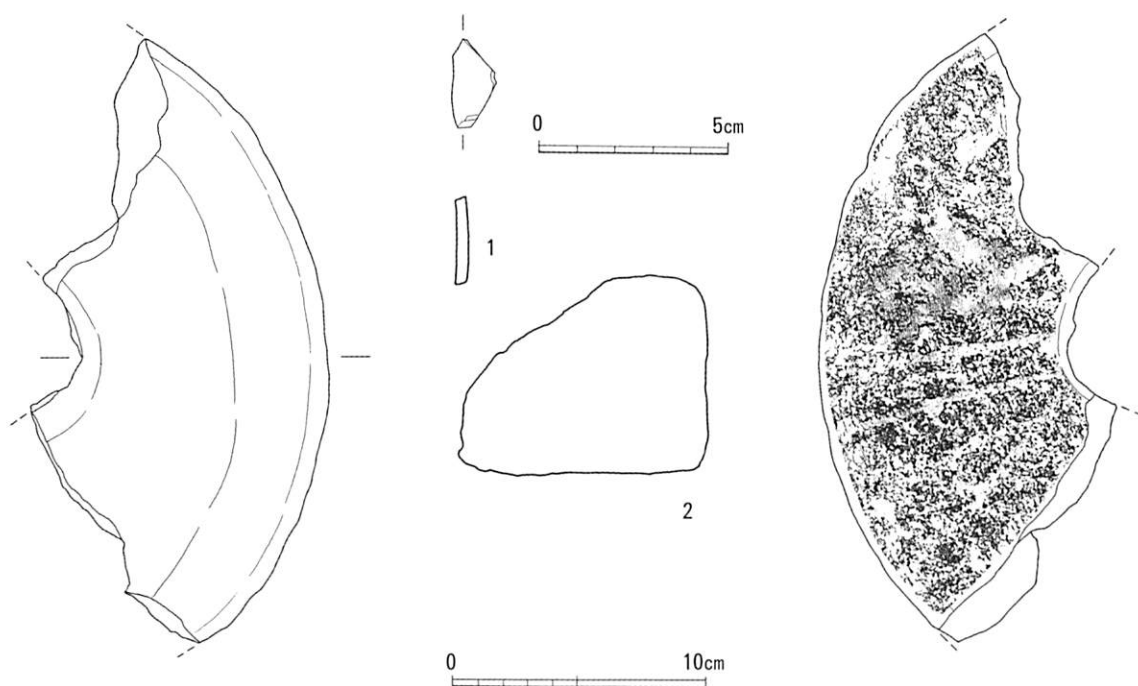
第74図 SE021出土遺物実測図① (1/3)



第75図 SE021出土遺物実測図② (1/3)



第76図 SE021出土遺物実測図③ (1/4)



第77図 SE021出土遺物実測図④（1は1/2、2は1/3）

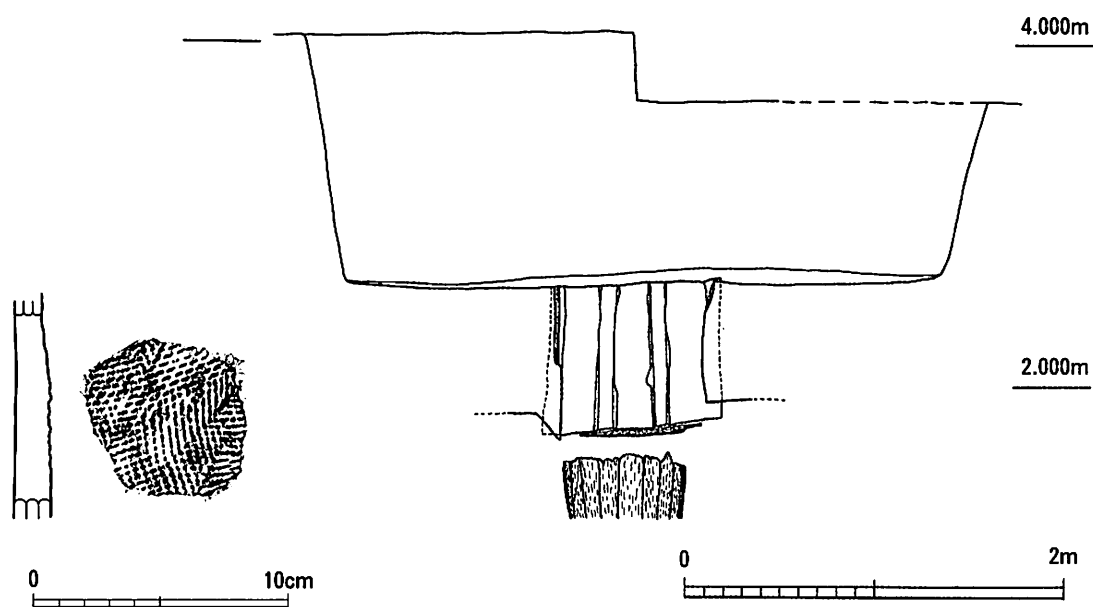
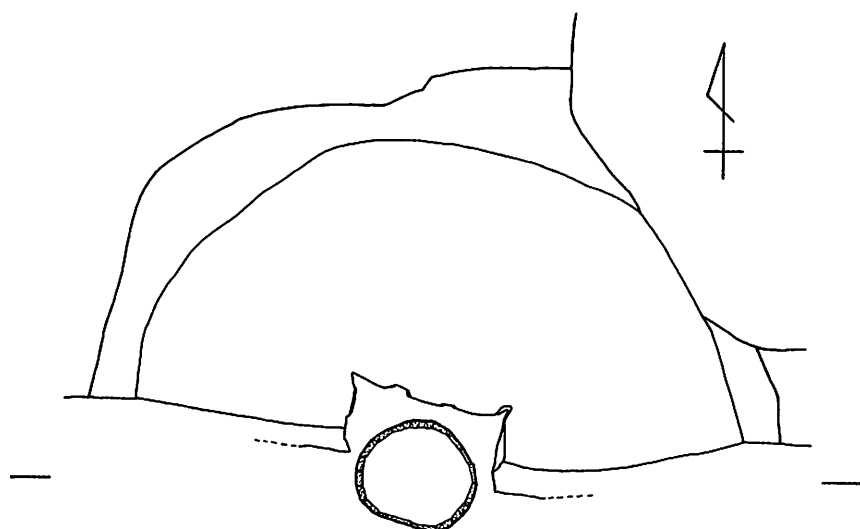
## SE201（第78図）

SE201はL21区に位置する井戸で下層遺構群に属する遺構である。前項で記述したSE021、次項で記述するSE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。平成13年度に当調査区の南で調査された9次調査の際にはほぼ半分が検出された、方形の井戸側を有する井戸であることが判明している。当調査区ではその北半分が検出された。検出した井戸の掘方は径約3.8mの不整円形を呈すると推定される。調査区の制限と壁の崩落の危険性があるため掘方全体を掘り進め、井筒部分の確認を行った。検出面（標高約4.00m）から1.2mほど掘り下げたところで方形の井戸側約2分の1を検出した。井戸側は隅柱を有し、その間に2本の縦板を配置しているもので、おそらくこの縦板に横板を渡していたものと推定される。草戸千軒遺跡でなされた井戸の形態変遷<sup>(8)</sup>によれば「方形隅柱横板型」に相当するものと思われる。また、水溜部には径約60cmの桶が据えられている。図示可能な遺物の出土はなかったが、遺構の時期は9次調査の調査結果と井戸の形態や切り合い関係から14～15世紀代に比定しておきたい。

## SE201出土遺物（第79図）

第79図はSE201の井筒から出土した資料である。表面に矢羽状の平行タタキが施される。東播系の須恵質土器である。甕の胴部か。

(8) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V—中世瀬戸の集落遺跡—』（1996年）

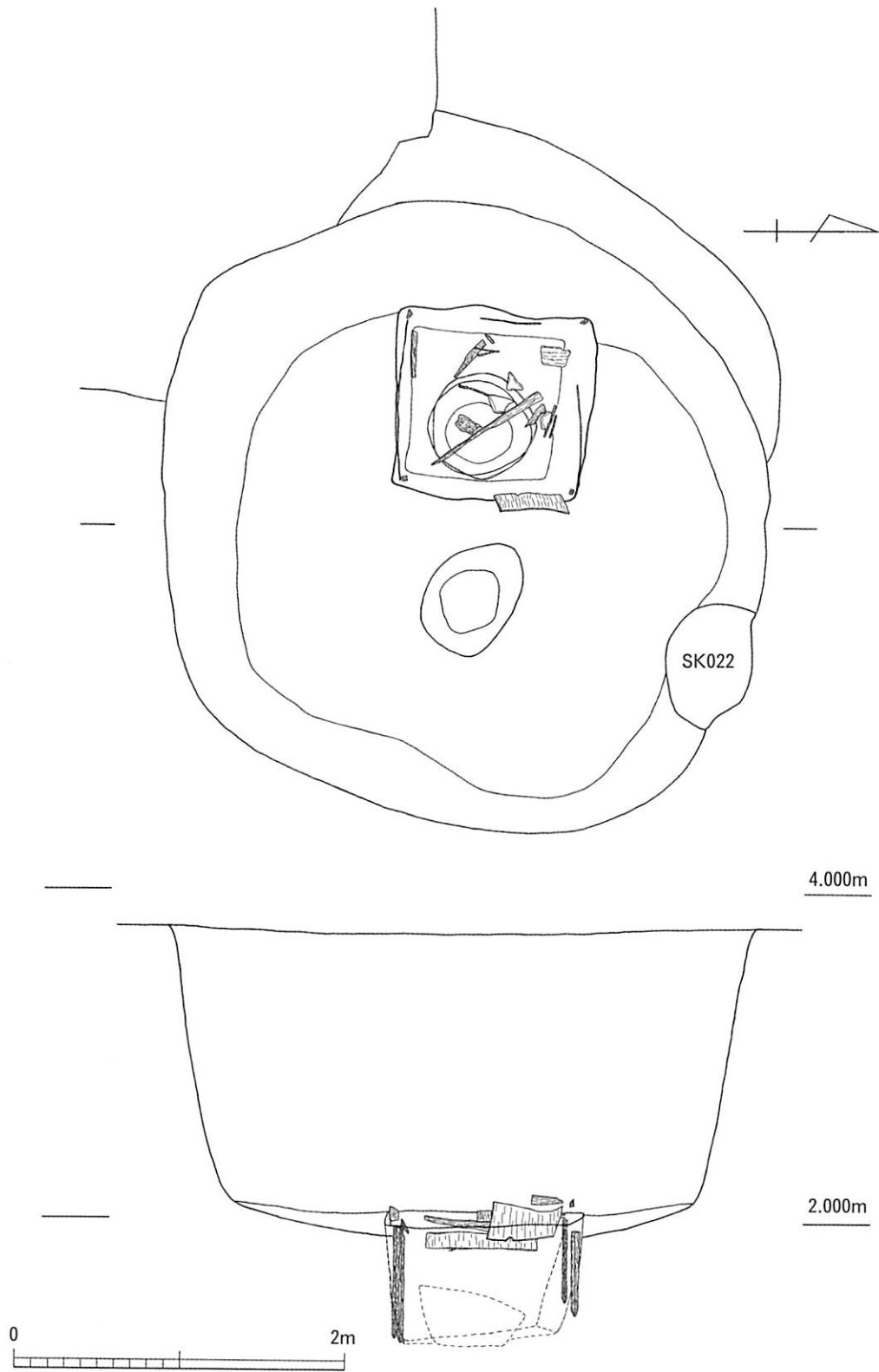


第79図 SE201出土遺物実測図 (1/3)

第78図 SE201実測図 (1/40)

SE242 (第79図)

SE242はL21区に位置する井戸で下層遺構群に属する遺構である。前項で記述したSE021・SE242と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE242→SE201→SE021である。SE021の調査中に検出した井戸である。井戸の掘方はSE021がほぼ同じ位置に構築されており、また、SE201にも切られることからSE021の西側に僅かに認められるのみで、その全体像は不明である。SE021の底面では水溜部に方形の井戸側が認められる。井戸側の残りは非常に悪いが、隅柱を有し、その間に横板が観察され、SE210で前述の「方形隅柱横板型」と推定される。また、水溜部には径約60cmの曲物が据えられている。井戸の形態や遺構の切り合い関係から遺構の時期は14世紀代に比定しておきたい。



第80図 SE242実測図 (1/40)

## 5. その他の遺構

**概要** 本項目では土取痕と考えられる大規模な落ち込み遺構（整地層）と京都系土師器皿が主体となる土器の大量廃棄遺構5について記述を行いたい。本調査区南東部で確認された落ち込み遺構（SX041・SX01）は、南に隣接する9次調査区で確認されたものと一連のものである。調査当初は土層の判別が困難で、上面の部分をSX041とし掘り下げた。その後、SX041の下層に整地層を確認しSX01とした。上面のSX041と下層のSX01では若干の時期差があるものと思われるが、さほど大きなものではないと考えられる。このような落ち込みは12次調査区や18次調査区などでも確認されている。当調査区の落ち込み遺構の埋土中からは16世紀後葉に比定される遺物が出土しており、16世紀の後葉代に土取や整地（埋め立て）などの大型事業が行われたことが推測させられる。また、これらの落ち込み遺構は後に整地され、その上面に町屋遺構が展開するが、そこから出土する遺物も16世紀後葉代のものであり、時期差を感じさせない。つまり、16世紀中葉代に「大友氏館」の前面で大規模な土取等の事業が行われ、後葉代には土取によって落ち込んだ場所を埋め戻し、整地しているわけである。この一連の事業は何を意味するものかについては、宗麟や義統が支持した「土井廻塀」に関わるものとも想定できるが、詳細については今後の調査・研究を待ちたい。

土器の大量廃棄遺構については5カ所で確認している。僅かに在地系土師質皿や陶磁器類・その他の遺物が混ざるものの、いずれも京都系土師器皿がその主体をなしている。これら土器の大量廃棄遺構は「大友氏館」の前面および「大友氏館」内で顕著にみられ、一般的な町屋遺跡ではみられないことから、「大友氏館」に関連する何らかの行事によるものと推測される。また、地盤が緩くなった所に土器を敷き詰め、地固めに利用したことも考えられる。

また、2基の掘立柱建物と6基の柵列状の柱穴の並びが確認された。これらの柵列は当調査区内の町屋の1単位と考えることも可能で、隣接する柵列の間は路地と捉えることができよう。

## SX041・SX01（第2図参照）

SX041及びSX01はL21～M21区に位置する掘り込み遺構である。南側は9次調査区に延びることが確認されているが、東側は調査区の制限から確認できていない。調査当初の認識では上層のSX041とした落ち込み状の遺構で中世面の最下層に達したと思われたが、サブトレをいれ、土層の確認をした結果、一層遺物を包含する層があることが確認された。そのため、下層をSX01として再度掘り下げ、遺物の取上を行った。SX01には2期に比定される京都系土師器皿など、SX041から出土する遺物に比べ、やや古い様相を呈する遺物が認められる。また、SX01上に土坑（SK243・SK244）などが構築されていることから、16世紀中葉にはこの落ち込みは存在していたといえよう。そして、SX041には16世紀後葉代の遺物が認められるため、この時期にSX041は埋め立てられたと推定される。さらに、この上に大友館前面の町屋が構成されていったと考えられる。なお、この落ち込みに関しては第12次調査区においては人為的なものであることが確認されているが、当該調査区のものについては、人為的なものか否かについては確認できなかった。以下、上層（SX041）出土遺物と下層（SX01）出土遺物とを分けて報告する。

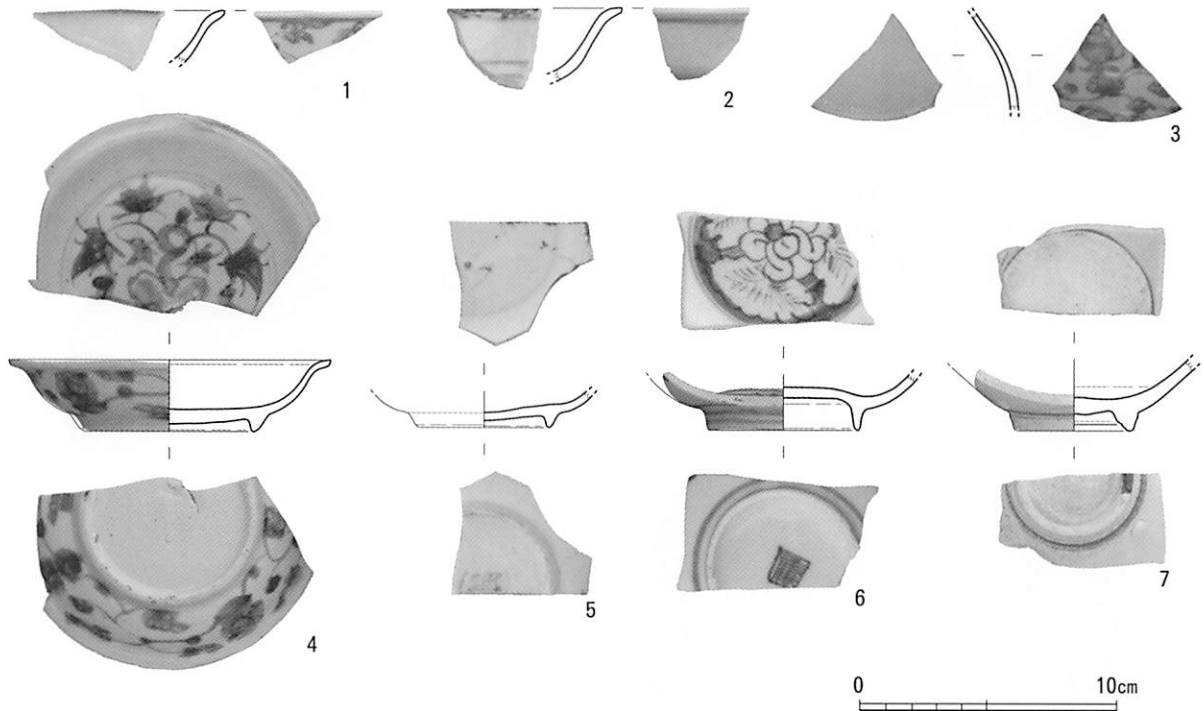
## SX041出土遺物（第81～83図）

第81図1～2は口縁部が端反りとなる中国産青花皿の口縁部破片である。1は中国景德鎮窯系で、2は中国漳州窯系である。3は中国景德鎮窯系青花瓶の胴部破片である。4は口縁部が端反りとなる中国景德鎮窯系青花皿である。復元口径12.2cm、底径6.8cm、器高2.7cmを測る。高台はヘラ削りで、斜めに面がとられ砂敷きで焼成されているため、高台畳付きは露胎となる。見込みと外面に花樹を描く。高台内に字款はなく、皿B1群に比定される資料である。5も中国景德鎮窯系青花皿である。内外面に文様は認められないが、高台内に字款（「福」字か）が認められることから、皿B2群に比定

される資料である。6は見込み部分がゆるやかに盛り上がる特徴をもつ、いわゆる「饅頭心」碗の底部破片である。底径5.7cmを測る。見込みには折菊が描かれ、高台内には四角の枠取りした「福」字が置かれる。碗E群に比定される資料である。7は中国産白磁碗の底部破片である。見込み部分と底部は露胎となり、外面腰部と見込みに青花による界線がめぐる。

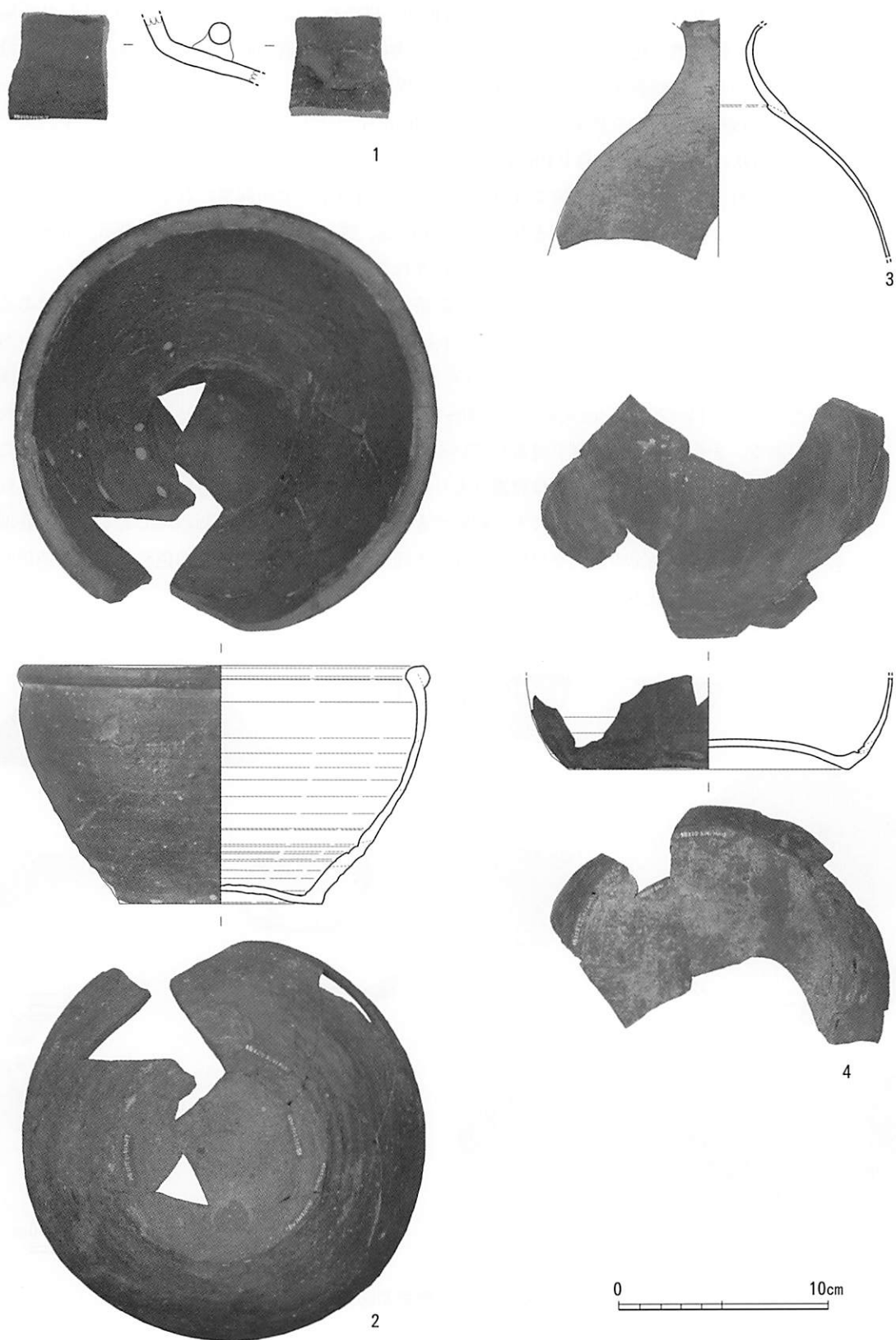
第82図1は褐釉陶器壺の耳部である。2は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部がやや内側に張り出し、玉縁状になるもので、鉢B類に比定される資料である。底部は薄造りで上げ底状の形態を呈し、貼り付けられている。口縁部上端には目跡と思われる痕跡が6カ所観察される。体部内外面には薄い褐釉が掛かり、底部内外面は露胎となる。口径19.5cm、底径9.6cm、器高11.2cmを測る。3・4は同一個体と思われる朝鮮王朝産陶器で舟徳利と呼称される瓶である。

第83図1～36は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。2期を主体とする資料であるが、36は口径18.3cmを測り、器壁が厚く、器高3.1cmと高いことから、新しい様相を示す可能性がある。1～35の口径に注目すると、9cm前後のもの(1～5)、10～11cm前半のもの(6～13)、11cm後半～12cm大のもの(14～29)、14cm大のもの(30～32)、16cm大のもの(33～35)と5法量に細分される可能性がある。また、内外面に煤が付着しているもの(1・2・6・16・34・35)が認められることから、本遺構出土の京都系土師器皿は食器(カワラケ)として使用されたものと、灯明皿として転用されたものが混在して出土していることが観察できる。37～40は京都系土師器坏である。41は底部に糸切り痕が残り、赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。42は白色系の胎土を使用し、薄手の器壁をもつ土師質土器皿の口縁部破片である。

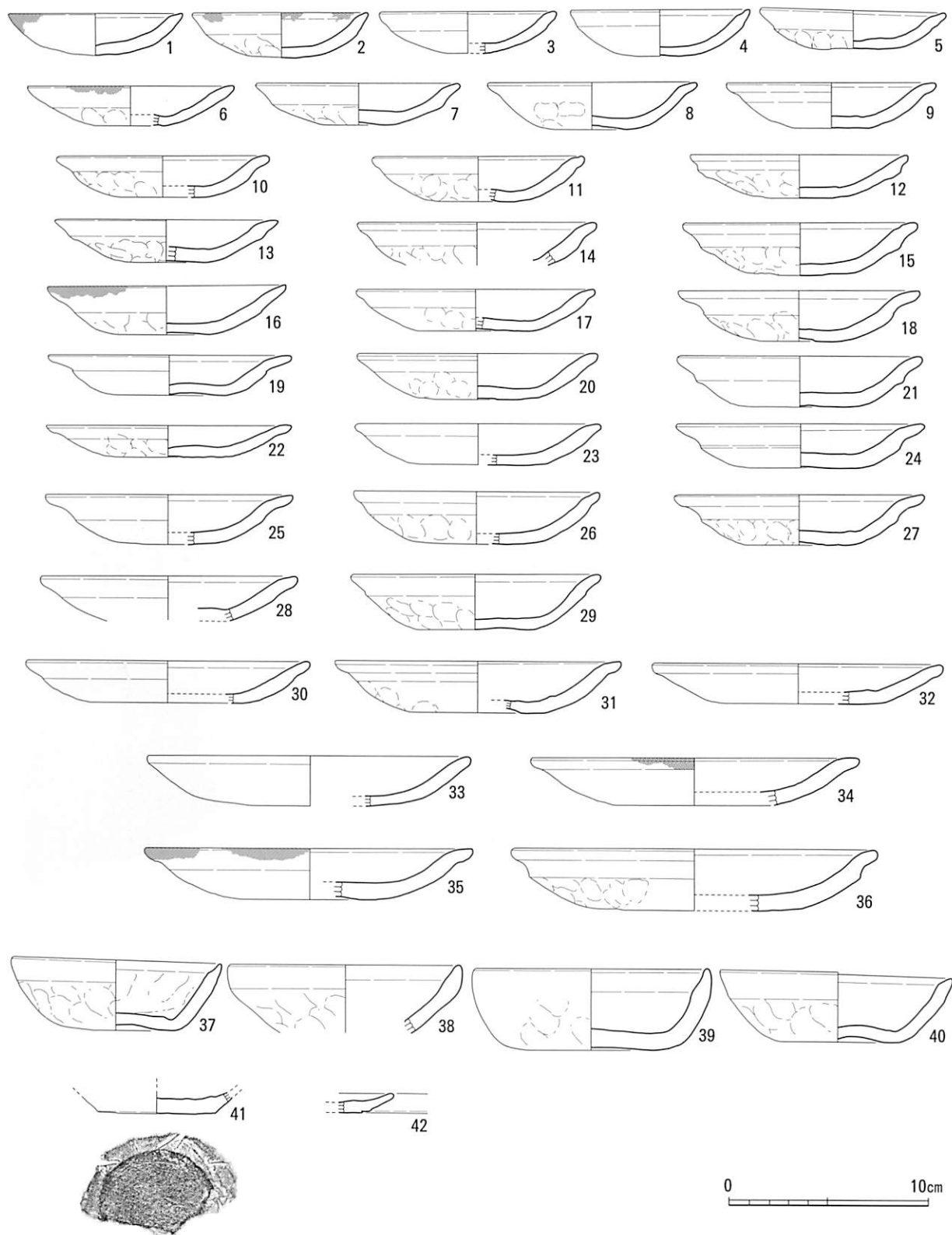


第81図 SX041出土遺物実測図① (1/3)





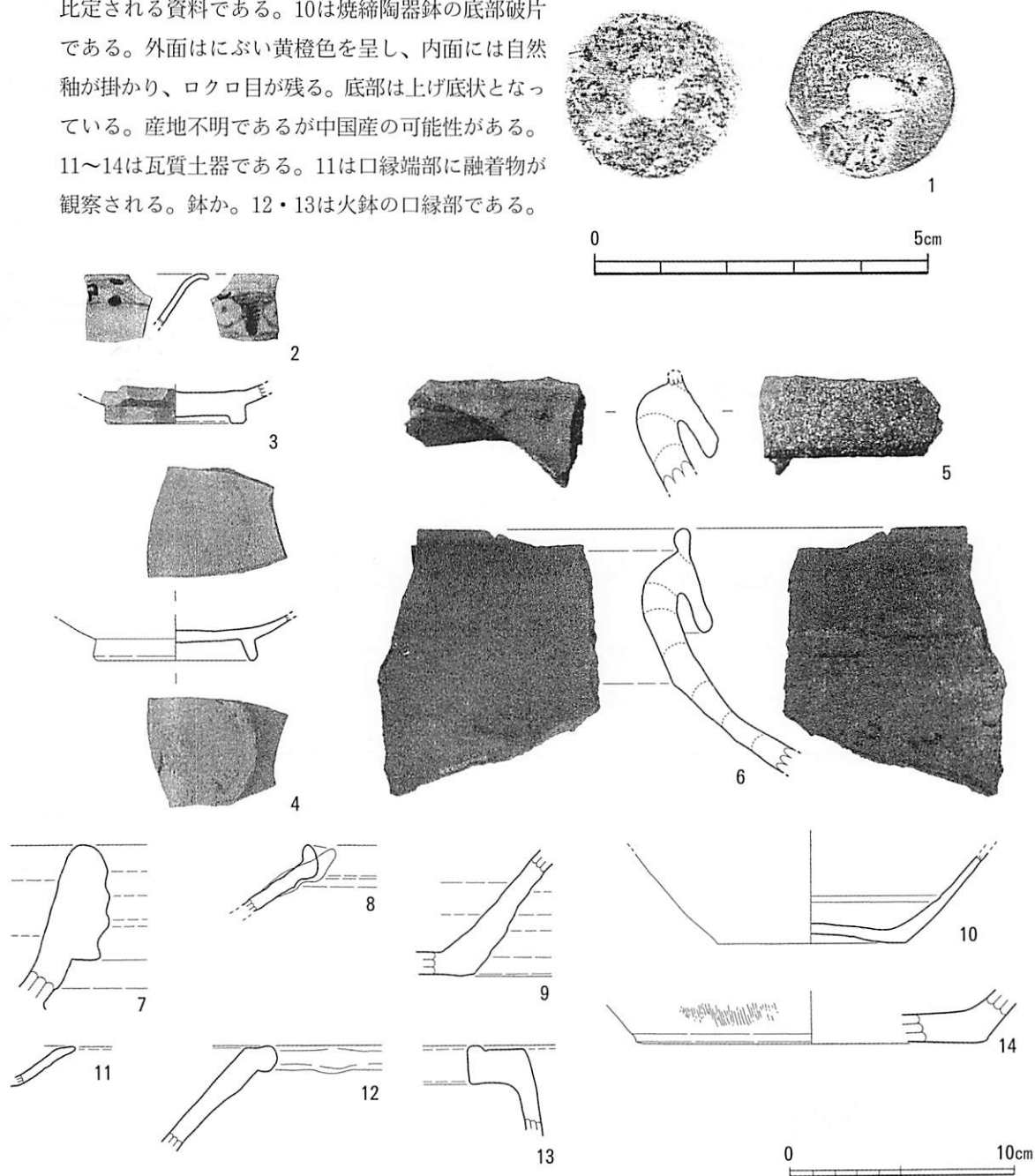
第82図 SX041出土遺物実測図② (1/3)



第83図 SX041出土遺物実測図③ (1/3)

SX01出土遺物（第84～86図）

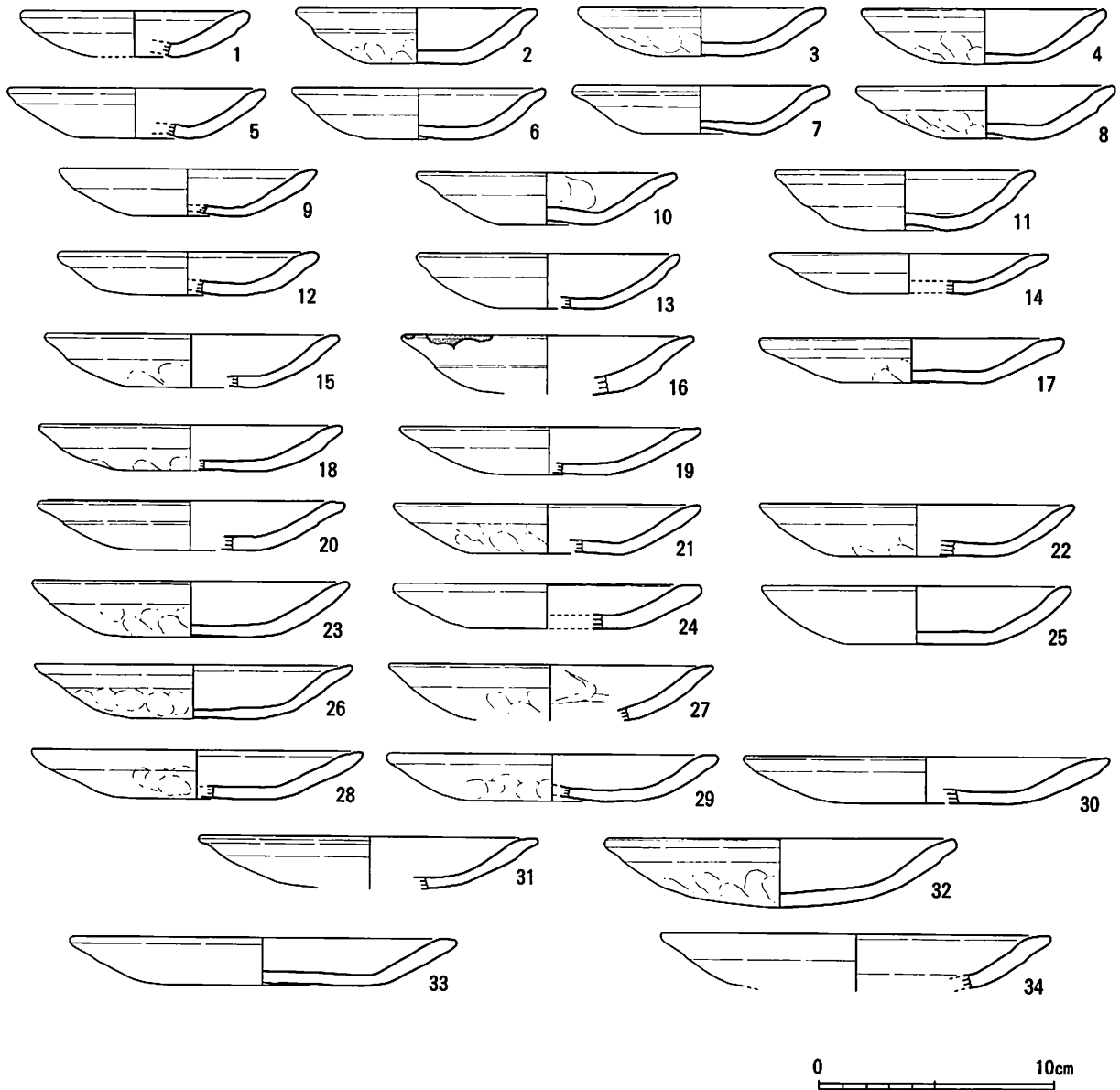
第84図1は銅銭である。鏄のため銭貨名等は不明である。2は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部は端反りとなり、B群に比定される資料である。3は青磁碗の底部である。4は皿の底部破片である。内外面は露胎となるが高台部分には一部緑色の釉が掛かるが意図的なものではない。白磁か。5・6は常滑系陶器甕の口縁部破片である。口縁部の縁帯幅から5は14世紀後半代、6は14世紀終末から15世紀前半代に比定される資料である。7は備前系陶器甕の口縁部破片で中世6期に比定される資料である。8は東播系の須恵質土器捏鉢の口縁部破片である。9は備前系陶器搦鉢で、中世6期以前に比定される資料である。10は焼締陶器鉢の底部破片である。外面はにぶい黄橙色を呈し、内面には自然釉が掛かり、ロクロ目が残る。底部は上げ底状となっている。産地不明であるが中国産の可能性はある。11～14は瓦質土器である。11は口縁端部に融着物が観察される。鉢か。12・13は火鉢の口縁部である。



第84図 SX01出土遺物実測図①（1（銭）は1/1、2～14は1/3）

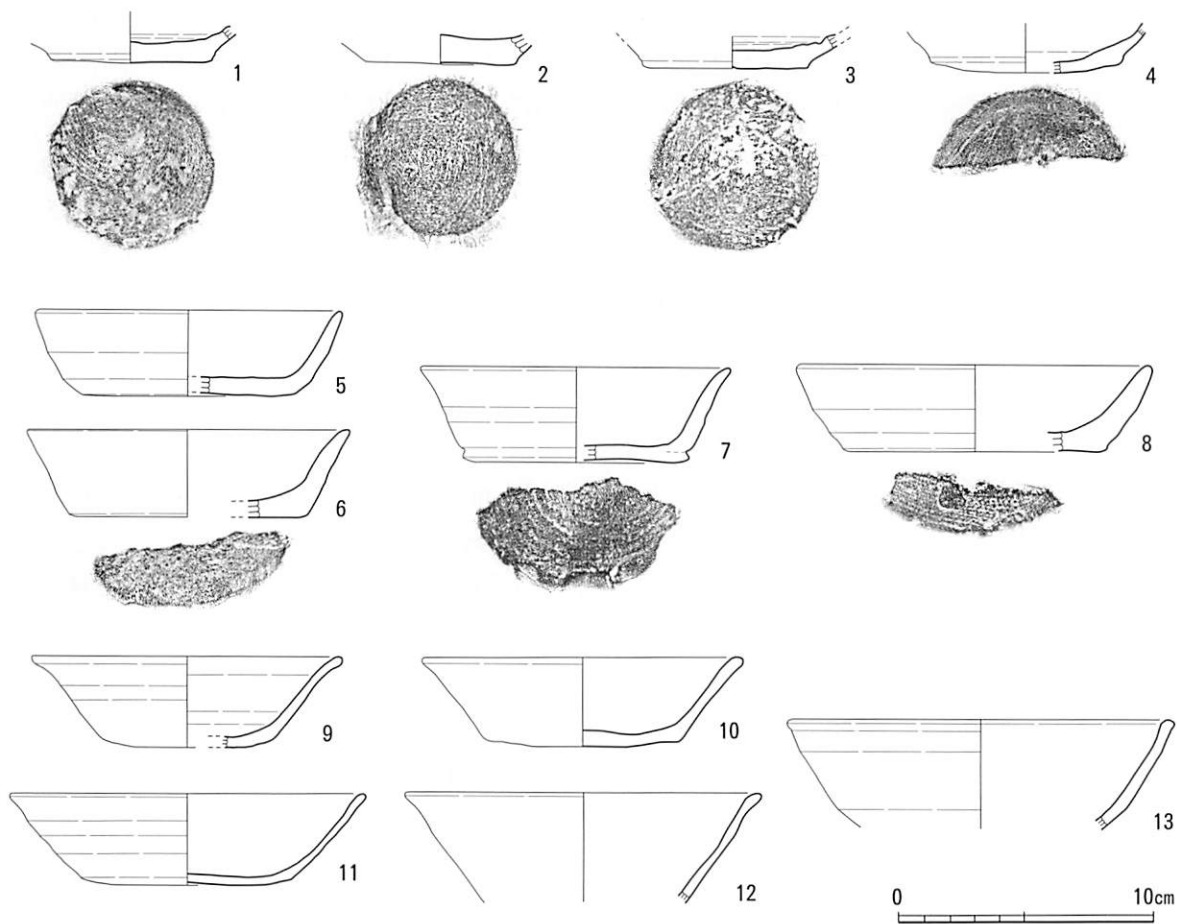
13は口縁部を折り倒したように外に張り出し、端部を上方につまみ上げている。方形の浅鉢型の器形を呈するものと思われる。14は東播系の須恵質土器播鉢である。内面に5条の播目が認められ、外面にはハケ目がわずかに残る。

第85図1～34には浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿を提示した。2期に比定される資料であるが、上層のSX041出土のものより器壁が薄く、やや古い様相を呈するものである。口径を観察すると、9cm大のもの(1)、10～11cm大のもの(2～14)、12～13cm大のもの(15～27)、14cm大のもの(28～32)、16cm大のもの(33・34)と5法量に細分される可能性がある。10・27には「の」字状のナデあげの跡が認められる。16の口縁部には煤の付着が認められ、灯明皿と使用されたものであろう。



第85図 SX01出土遺物実測図② (1/3)

第86図1～4は赤褐色器の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る在地産の土師質土器皿である。内外面にはロクロ目を有するものである。5～8は断面箱形を呈し、底面に糸切り痕が残る在地系土師質土器杯である。14世紀代に位置付けられる資料である。9～13はヘラ切りによる製作技法で作られた土師質土器杯である。9世紀代の所産である。



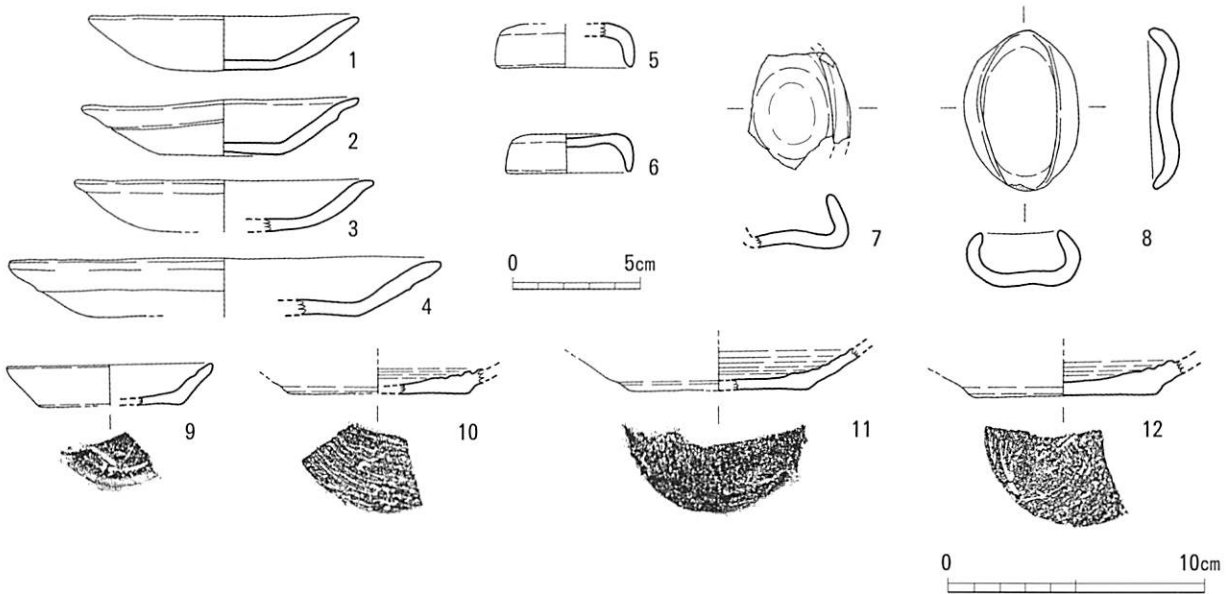
第86図 SX01出土遺物実測図③ (1/3)

SX004 (第2図参照)

SX004はL19～M20区に位置する遺構である。北側は調査区の制限から確認できていないため、詳細な実測図はない。検出した規模は、東西約5.0m、南北約1.5m、深さ約1.0mである。遺構内からは大量の京都系土師器皿が出土し、一時期に大量に廃棄された様子がうかがわれる。出土した京都系土師器皿は完形のものほとんどなく、いずれも打ち割られた状態で廃棄されている。現時点では土坑状になるものと考えられるが、前述のSX001同様、落ち込み（掘り込み）遺構になることも考えられ、今後北側の現道部分の調査を待ちたい。

SX004出土遺物（第87図）

第87図1～4はSX004出土の京都系土師器皿の中で比較的残りがよく、実測に耐えられるものを図示した。2期に比定される資料である。5・6は焼塩壺の蓋である。7・8は耳皿である。9～12は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る在地系土師質土器皿である。内面にはロクロ目が残る。なお、当該遺構から出土した資料の破片数は、京都系土師器皿2318個（口縁部11617個・胴部ほか854個）、耳皿3個、在地系土師器皿7個、陶磁器7個、瓦7個を数え、圧倒的に京都系土師器皿の個数が多い。



第87図 SX004出土遺物実測図（1/3）

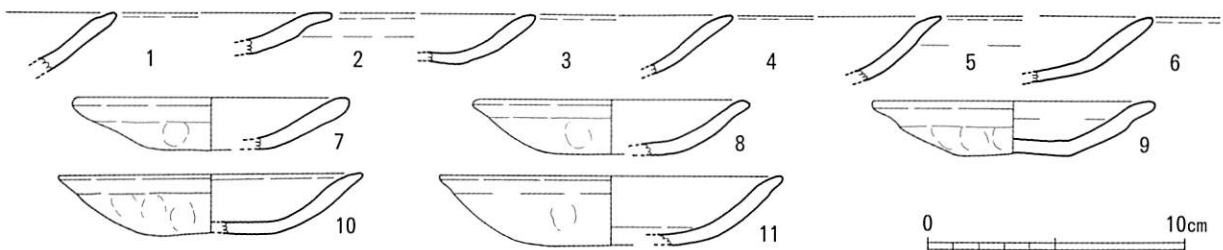
SX005（第2図参照）

SX005はL20区に位置する土師器の大量廃棄遺構である。明確な掘り込みは認められなかったが、東西約1.0m、南北約1.5mの範囲に大量の京都系土師器皿が打ち割られた状態で廃棄されていた。

土坑や掘り込みを伴わないことから、やや窪んだ土地もしくは雨等で緩んだ地盤を補強するために土器を敷き詰めたとも考えられる。

SX005出土遺物（第88図）

第88図1～11はSX005出土の京都系土師器皿の中で比較的残りがよく、実測に耐えられるものを図示した。2期に比定される資料である。当遺構から出土した遺物の破片数は、京都系土師器皿870個（口縁部471個、胴部399個）、在地系土師質土器皿8個、陶磁器1個であり、ほとんどが京都系土師器皿で占められる。



第88図 SX005出土遺物実測図（1/3）

**SX006 (第2図参照)**

SX006はL20～L21区に位置する土師器の大量廃棄遺構である。明確な掘り込みは認められなかったが、東西約2.5m、南北約4.0mの範囲に大量の京都系土師器皿が打ち割られた状態で廃棄されていた。SX005同様、土坑や掘り込みを伴わないことから、やや窪んだ土地もしくは雨等で緩んだ地盤を補強するために土器を敷き詰めたとも考えられる。また、当遺構の上位には土坑 (SK040) やピットが構築されている。

**SX006出土遺物 (第89図)**

SX006として取り上げた遺物の破片数は、京都系土師器皿6876個 (口縁部4218個、胴部ほか2658個) 在地系土師質土器皿52個、瓦3個、陶磁器14個、その他14個である。その内、図示可能な代表的なものを第90図に提示した。1～44は京都系土師器皿である。2期に比定される資料を主体とするが、35～38・40・43はやや器壁が薄く、古い様相を呈する可能性がある。また、口径を比較すると、10cm以下のもの (1)、10～12cmのもの (2～20)、12～15cmのもの (21～38)、15cm大のもの (39～42)、16cm大のもの (43・44) (グラフC参照) と5法量に細分される可能性がある。45～49は焼塩壺の蓋である。50・51は耳皿である。52は在地系土師質土器坏である。53は油煙墨である。表面に蚊龍文、裏面に「李家因」の文字があり、奈良興福寺二諦坊で作られた製品である。共伴遺物から、16世紀代の所産と推定される。類似品が中世大友府内町跡第28次調査区K-18区の攪乱部分<sup>(9)</sup>から出土している。他に福井県一乗谷朝倉氏遺跡第40次・44次調査区<sup>(10)</sup>で出土事例がある。

油煙墨

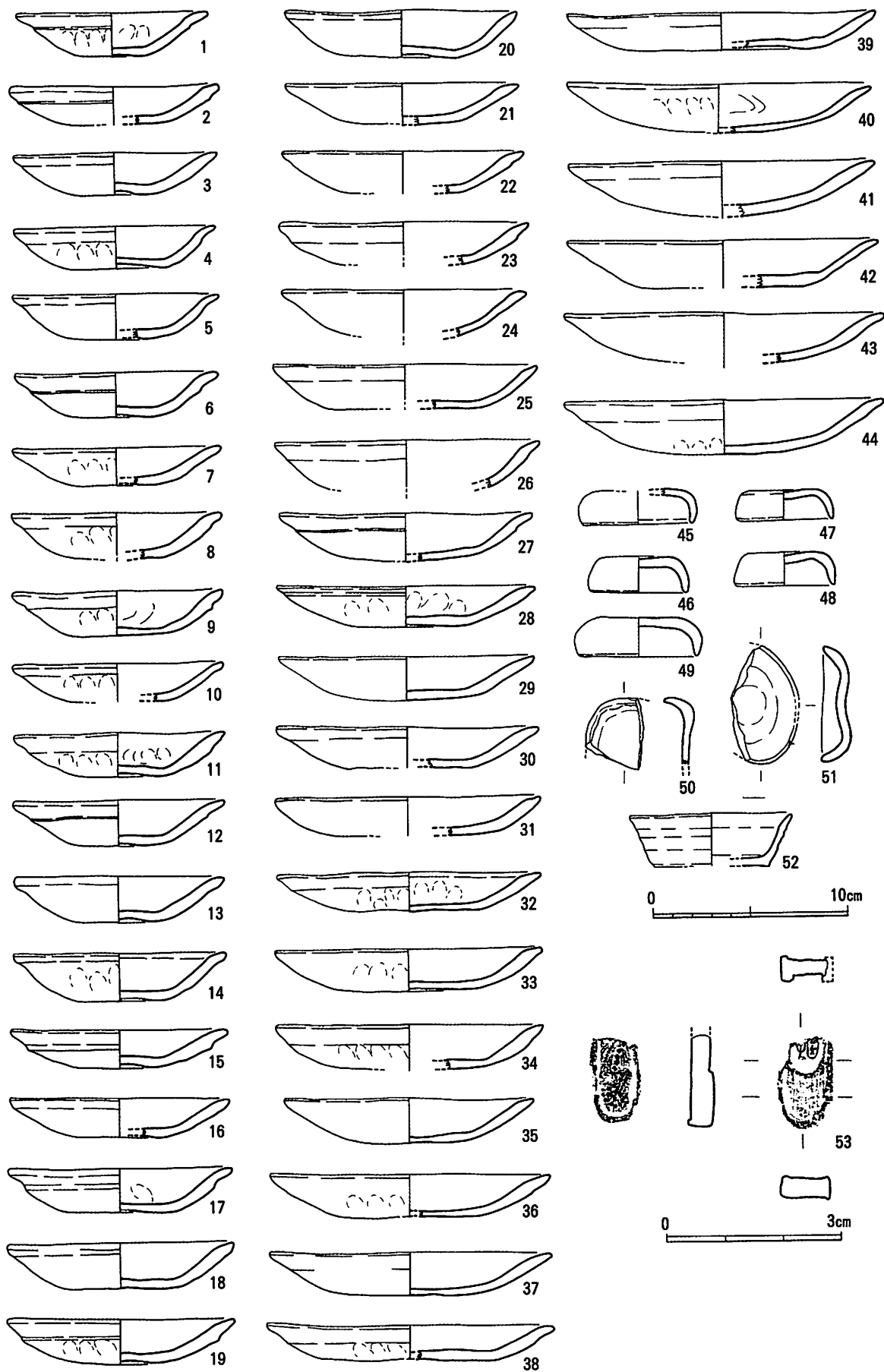
**SX236 (第2図参照)**

SX236はM20区に位置する土師器の廃棄遺構である。遺構検出が困難なため北側にサブトレを入れたことと、東側は調査区の制限があることにより、遺構の全体像ははっきりしない。そのため詳細な実測図はとれていない。埋土中からは京都系土師器皿の破片が大量に出土しているが、いずれも小破片のみで図示可能なものはない。しかし、すぐ西のSX004や周辺状況から16世紀後葉～末葉にかけての時期に比定される。

---

(9) 本書第2分冊第6章、第301図2参照

(10) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅶ 第44次 第17次調査』(2000年) 28頁第20図818参照

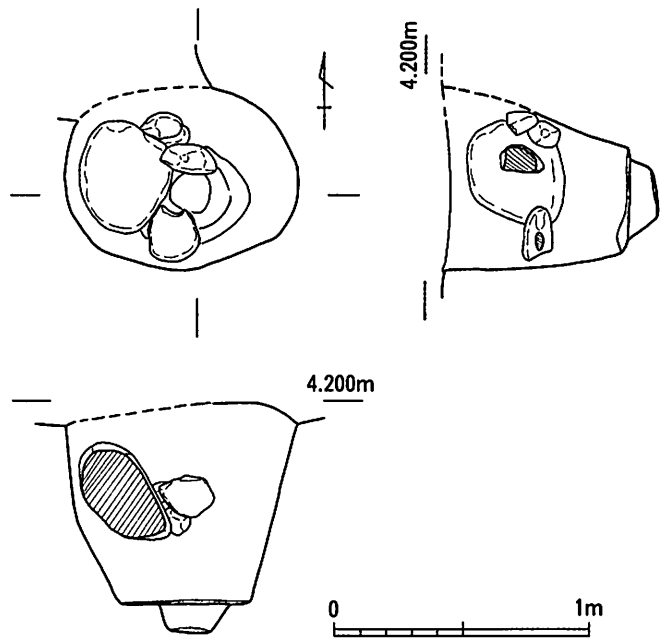


第89図 SX006出土遺物実測図（1～52は1/3、53は1/1）



SP160 (第90図)

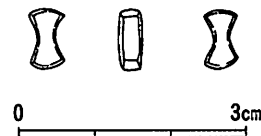
SP160はK20区に位置する柱穴遺構である。平面プランは楕円形を呈し、長径約90cm、短径約70cm、深さ約90cmを測る。遺構中位には柱痕を囲繞するように、40cmを超える大形の丸礫や小形の礫が検出されている。本来、比較的大形の柱が建っていたと推定される遺構である。しかし、当遺構に対応するような柱穴はほかに確認できておらず、幟などを立てた柱など、単独で利用された可能性も考えられるが、遺構の性格は不明である。年代を特定できるような遺物の出土はなかったが、周辺の状況から16世紀代の遺構と推定される。



第90図 SP160実測図 (1/30)

SP160出土遺物 (第91図)

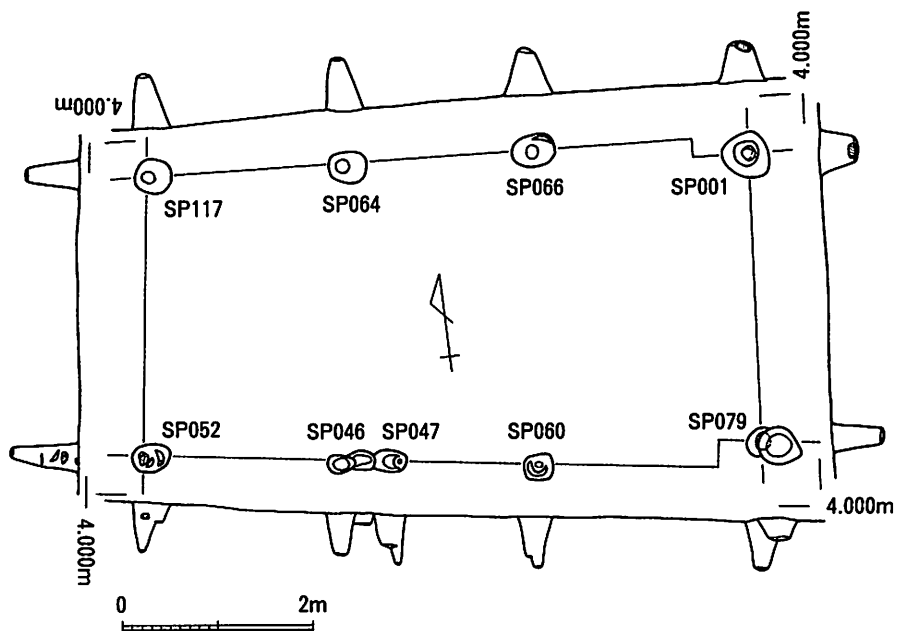
第91図は繭型分銅である。柱穴中位から出土したもので、長さ7mm、厚さ3mm、重さ0.4gと小形のものである。



第91図 SP160出土遺物実測図 (1/1)

SB01 (第92図)

SB01はL19~20区に位置する掘立柱建物である。柱間は東西約2.0m、南北約2.9~3.0mを測る。

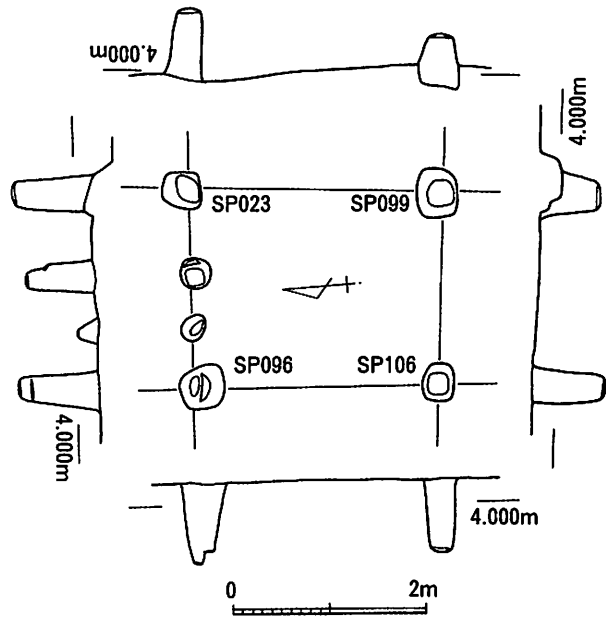


第92図 SB01実測図 (1/80)

北側は調査区の制限により確認できていないが、現状で1×4間の建物が復元できる。町屋の裏手に位置し、倉庫的な建物と推定される。

**SB02 (第93図)**

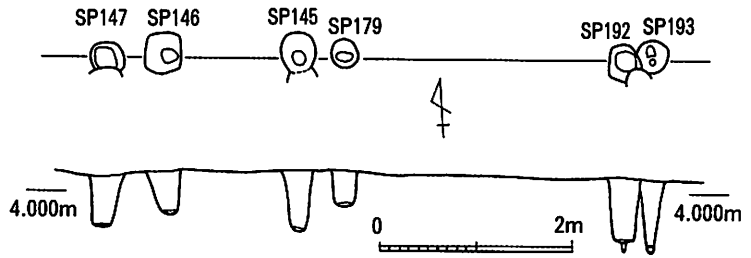
SB02はK20区に位置する掘立柱建物である。柱間は東西約2.0m、南北約2.5mを測る。道路状遺構(SF230)に面するように1×1間の建物が復元できる。また、SB04とSB05のほぼ中央にあり、町屋の表に位置することから、SB04とSB05とで区画される町屋の入り口(門など)の建物が推定される。



第93図 SB02実測図 (1/80)

**SB03 (第94図)**

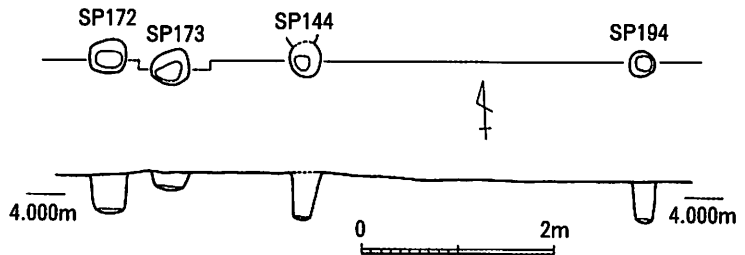
SB03はK19区に位置する柱穴列で隣接する柱穴が2基ずつ3組あり、計6基の柱穴の並びが確認された。隣接する柱穴は立て直しの可能性が考えられる。また、SB04を構成する柱穴と切り合い関係があるものもみられ、その構築順はSB03→SB04である。柱間は2.0mと3.4mを測り、SB04とほぼ同じ間隔で建てられている。このことから、SB04をSB03に建て替えたものと推定される。



第94図 SB03実測図 (1/80)

**SB04 (第95図)**

SB04はK19区に位置する柱穴列で、4基の柱穴が確認された。SB03との切り合い関係があり、その構築順はSB03→SB04である。柱間はSB03とほぼ同じ間隔で建てられている。

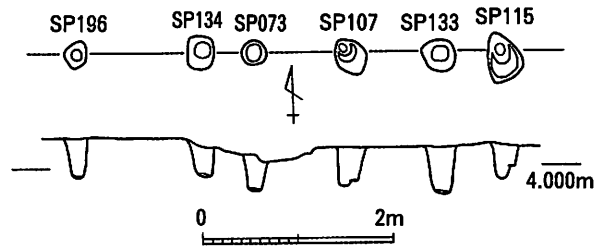


第95図 SB04実測図 (1/80)

SB05 (第96図)

SB05はK20区に位置する柱穴列で、6基の柱穴が確認された。

柱間を検討すると、約1.5mと2.0mの間隔で建てられていることが看取でき、建て替えが行われた可能性がある。



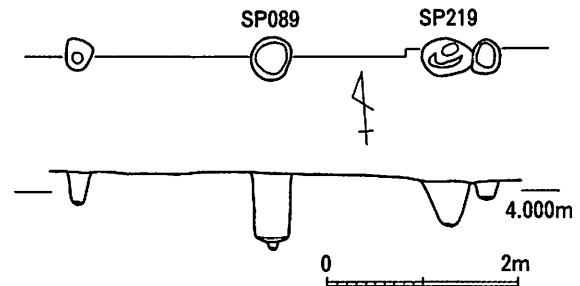
第96図 SB05実測図 (1/80)

SB06 (第97図)

SB06はK20区に位置する柱穴列で、3基の柱穴が確認された。

柱間はほぼ2.0mである。

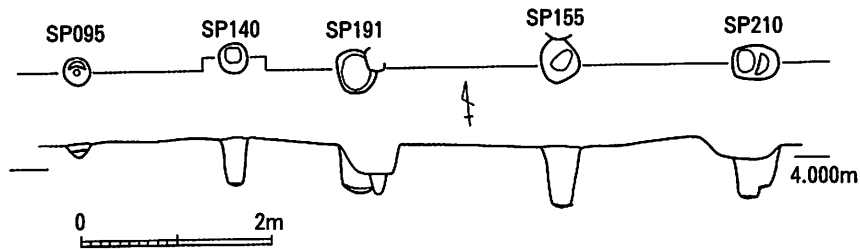
SB05とは80~90cmの空間があり、二つの柱穴列の間は路地的な空間が推定される。



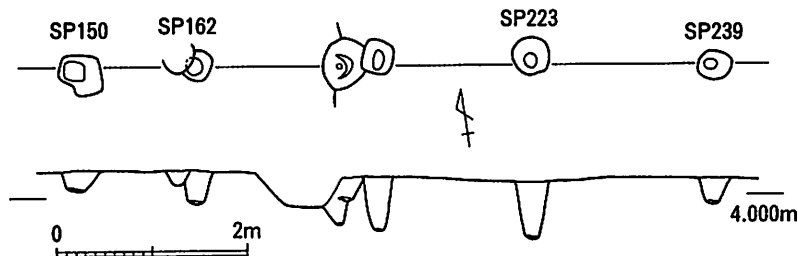
第97図 SB06実測図 (1/80)

SB07 (第98図)

SB07はK20~K21区に位置する柱穴列で、5基の柱穴が確認された。柱間は1.2~2.0mの間隔である。



第98図 SB07実測図 (1/80)



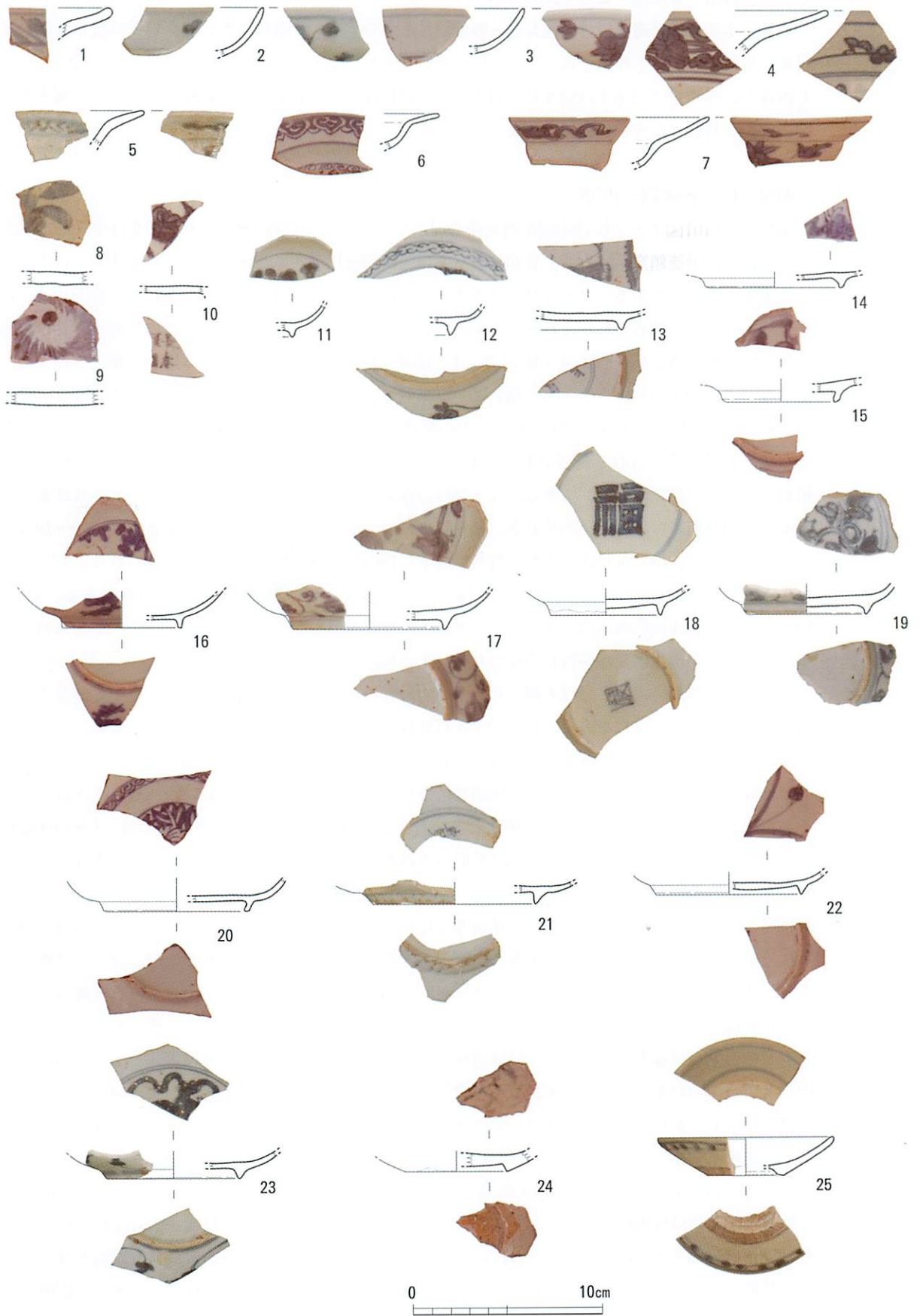
第99図 SB08実測図 (1/80)

## 6. 包含層・整地層・ピット出土遺物

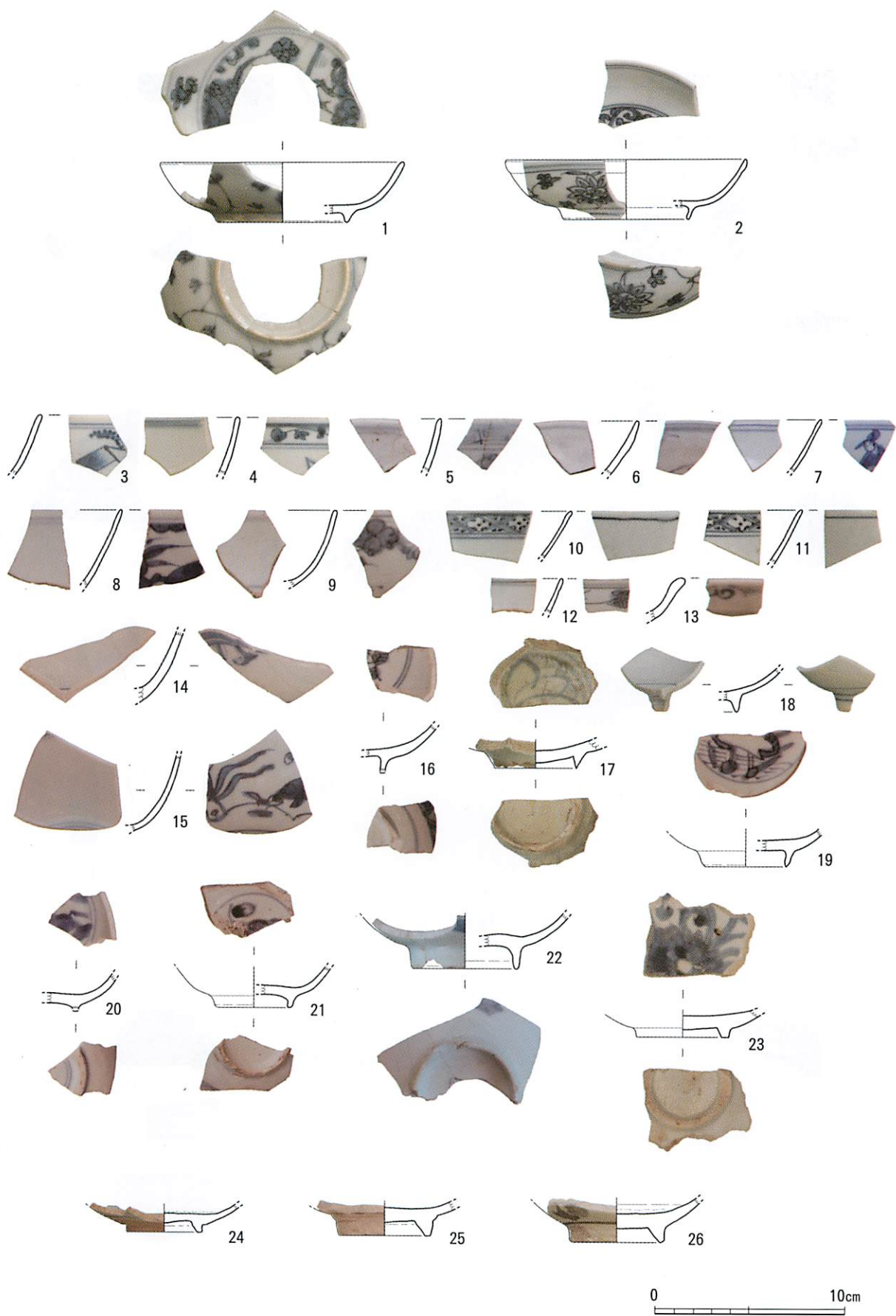
**概要** 本項目では遺構以外の包含層・整地層などから出土した遺物の内、残存状況の良いものや注目すべき物を選別して報告する。また、柱穴やピットから出土した遺物の中で注目すべき物についても便宜上、本項目で記述を行いたい。報告すべき資料は多数におよぶが、紙幅の関係から、報告者が特に重要と判断した少数の資料に留まる。

## 陶磁器類（第100図～107図）

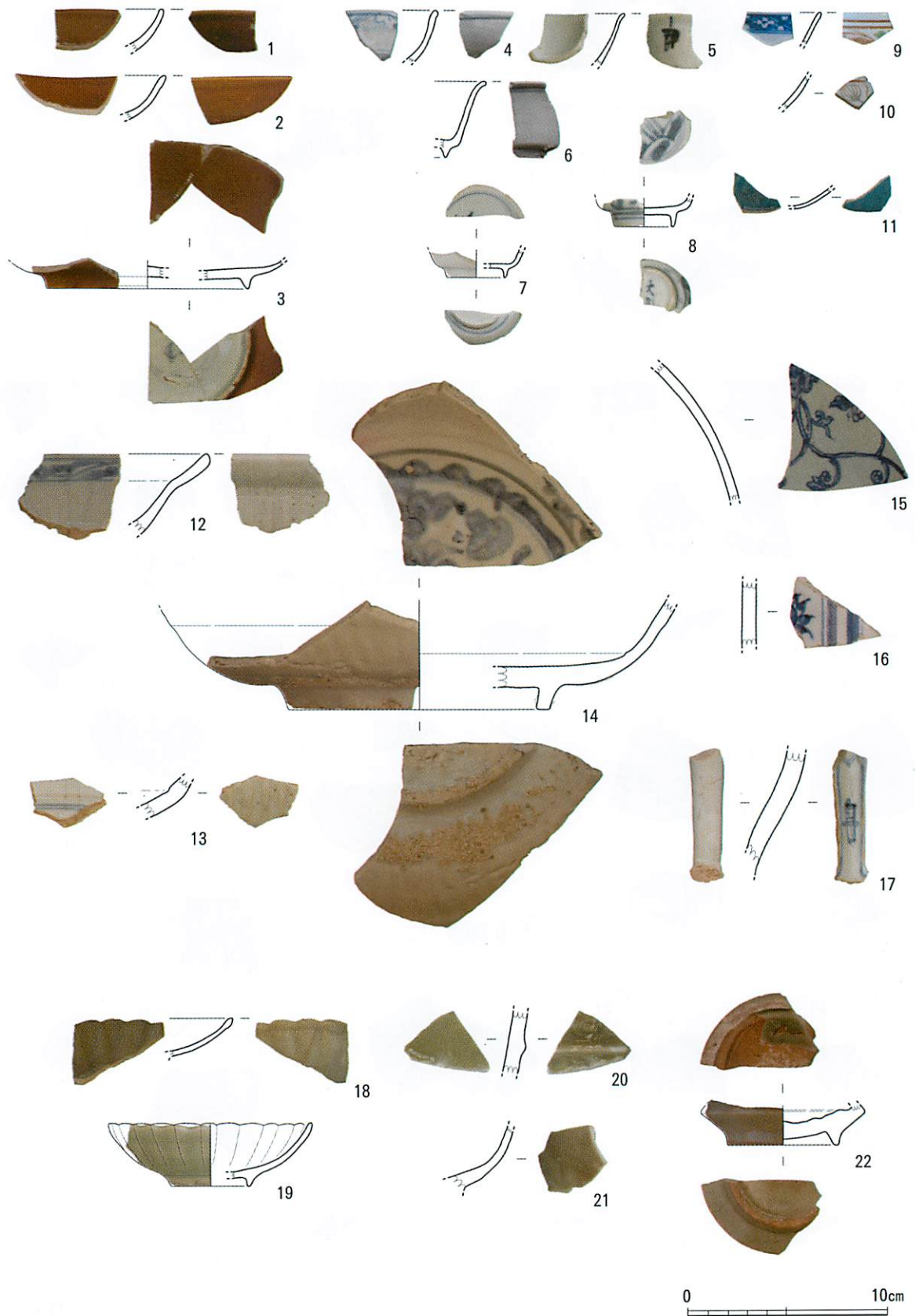
第100図～101図1～2には中国産青花皿を提示した。このうち第100図1・8・9は中国漳州窯系で、他は中国景德鎮窯系である。第100図1～7は口縁部破片である2・3は皿E群、4～7は皿F群に比定される資料である。8～10は見込み部分の破片である。10はE群に比定され、高台内には「長春佳器」の字款が認められる。11～23、第101図1～2はE群に比定される底部破片である。13の見込み部分には人物画、高台内には「宣」「年」（「宣徳年製」かの字款が見られる。18の見込みに「福」字、高台内に四角の枠取りをした「福」字が置かれる。21の見込みには「貴」字が認められる。20・21の高台内には僅かに文様が認められる。23の見込みの文様は玉取獅子か。24・25は底部が「碁筭底」となり、C群に比定される資料である。第101図3～26は中国産青花碗である。このうち3～23は景德鎮窯系、24～26は漳州窯系である。3～13は口縁部破片、14・15は胴部破片、16～26は底部破片である。7の外面には人物が認められる。10・11の外面には方彫りによる花文が施される。16～19はいわゆる蓮子碗で、碗C群に比定される資料である。19の見込みには水鳥の脚が認められる。20～22は見込み部分が緩やかに盛り上がり、饅頭心碗の形状を示す。碗E群に比定される資料である。第102図1～3は中国産褐彩磁器皿である。3の高台内には二重の界線の中に文様（文字か）が置かれている。4～8は中国景德鎮窯系青花小杯である。7の見込み部分には僅かであるが文様（文字か）が認められる。8の高台内部には「大明」の文字が認められる。9・10は五彩である。9の外表面は五彩、口縁部内面は青花で文様を描く。11は中国産翡翠釉小皿で、青色の色調を呈する。12～14は中国漳州窯系青花盤である。口縁部は端反りとなり、見込みには花文を描く。外面は鏝文を施し、底部～高台内には砂が付着する。15・16は中国景德鎮窯系青花瓶の胴部破片である。17は青花瓶の把手部分である。八宝文の一つである「書卷」が描かれている。18～21は中国龍泉窯系青磁である。18・19は輪花皿である。20は香炉か。21は碗か。23は肥前系青磁香炉である。見込み部分と高台畳付きは露胎となり、高台には砂が付着する。第103図1～8は中国産白磁碗の底部破片である。1～3の見込みと底部は露胎となる。4の見込みは蛇の目釉剥ぎとなり、底部は露胎となる。5は見込みが蛇の目釉剥ぎとなり、高台外面から内面にかけて釉が掛かるが、高台内は露胎となる。6の内面には全体に釉が掛かり、底部は露胎である。7・8は口縁部が端反りとなる白磁皿である。7の見込みと底部は露胎となる。8は全面施釉されるが、高台畳付きは露胎となる。高台内には「福」字が置かれる。9はベトナム産白磁碗の口縁部破片である。口縁部外面下にやや段をもち、僅かに外反気味となる。内面には印花文が認められる。10・11は朝鮮王朝産白磁碗である。12～15は白磁小杯である。14の高台内には文様（文字か）が認められる。16は白磁角杯である。17・18は褐釉陶器である。19～22は華南三彩である。器種不明品がほとんどだが、20は鶴形水注の破片と推定される。22は形合わせによって作られている。第104図1～9は瀬戸美濃系陶器である。1は志野の皿の口縁部破片である。3は小鉢か。4は折縁菊皿の口縁部破片である。5は瓶の底部か。7は卸皿である。8は皿で内外面に鉄釉が掛かり、見込みに輪ドチの跡が残る。9は丸皿で、大窯3期に比定される。見込み部分は露胎となり、全体が被熱している。10～13・15～19は唐津系陶器である。11～13・17・18は鉄絵が施され、絵唐津と呼称される製品である。15は播鉢である。胴部外面には鉄釉が掛かり、内面には櫛状工具による播目が6条認められる。16の見込み部分には砂が付着し、底部は露胎となる。19の口縁部はハの字状に大



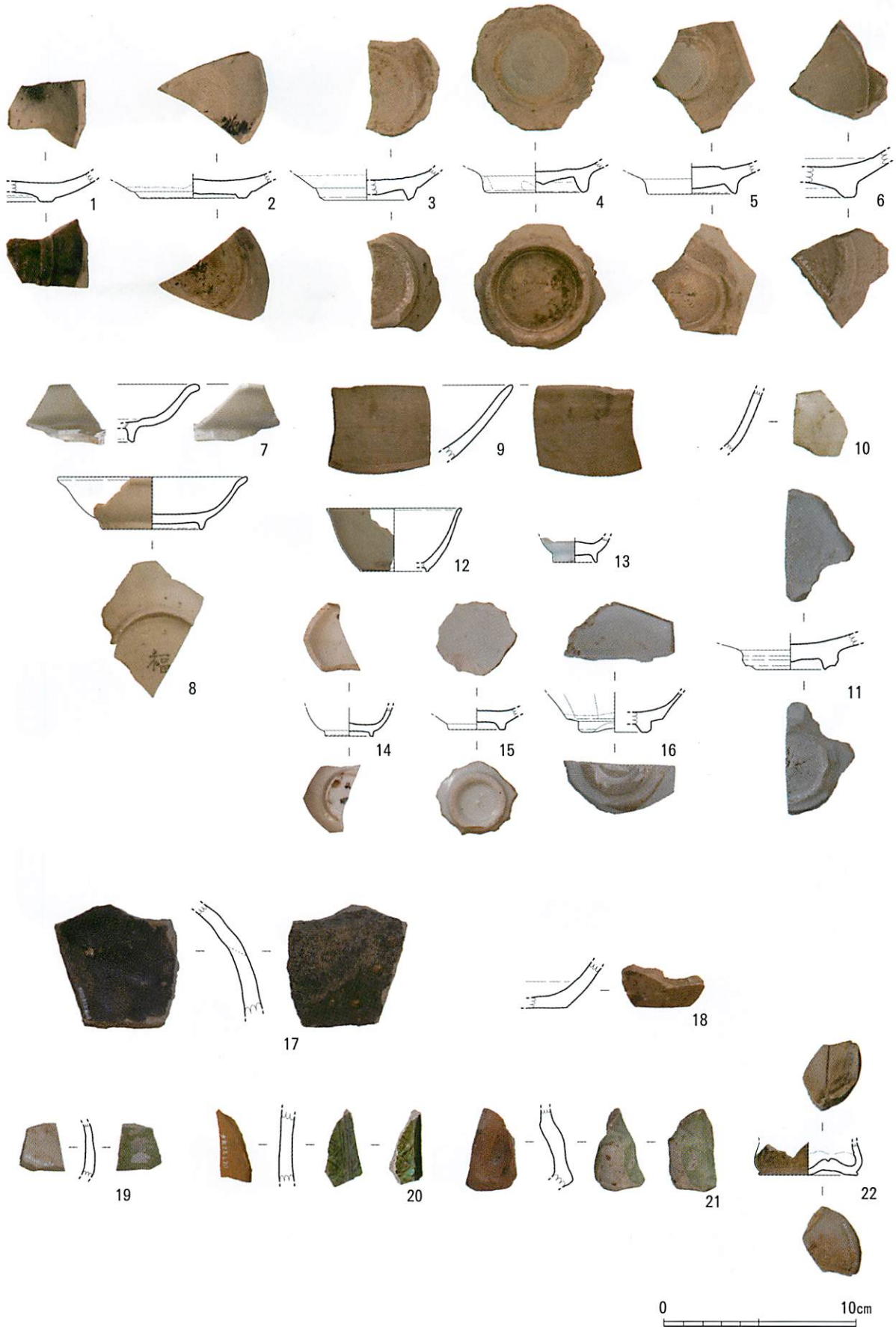
第100図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)



第101図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3)



第102図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3)

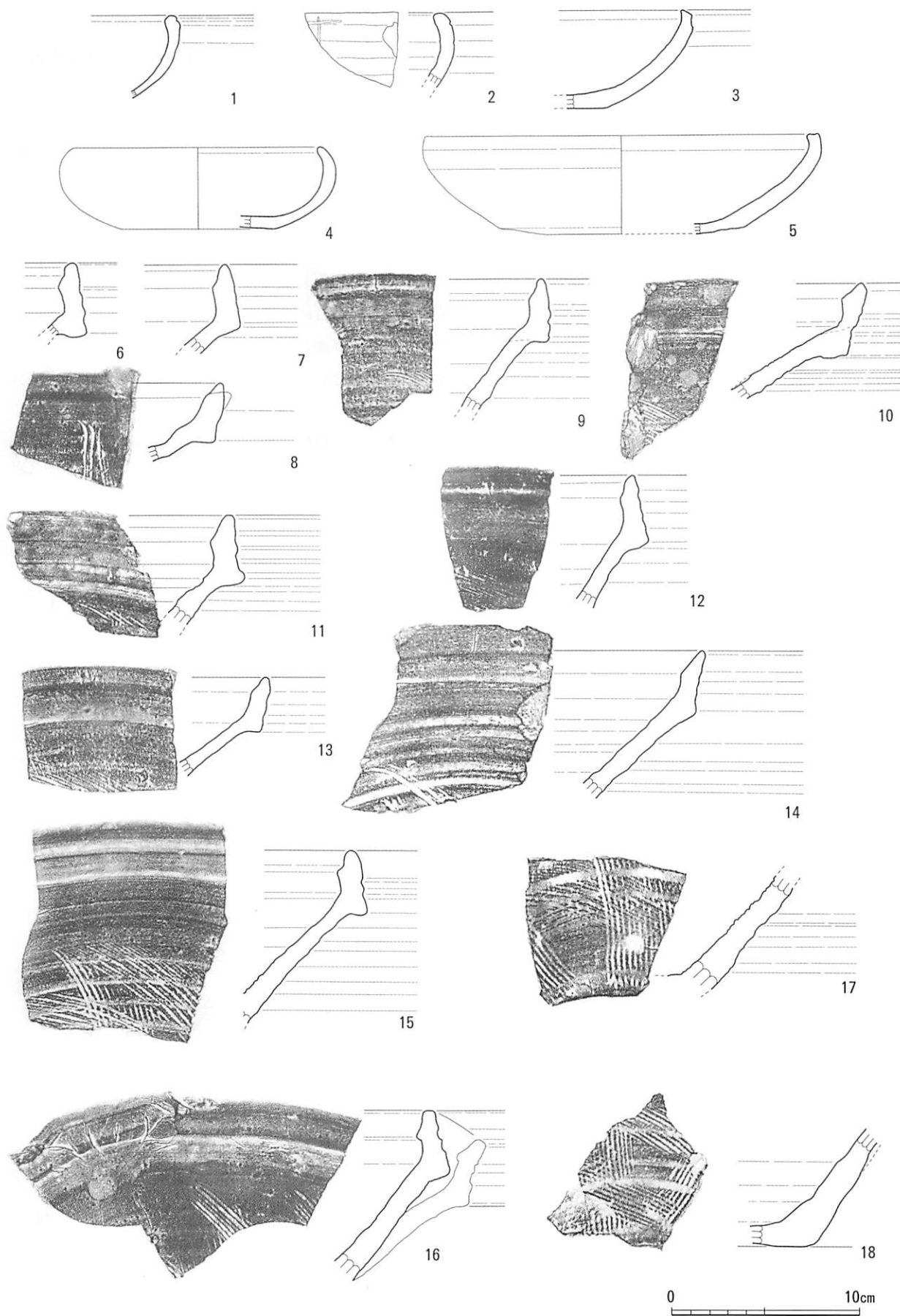


第103図 包含層・整地層出土遺物実測図④ (1/3)





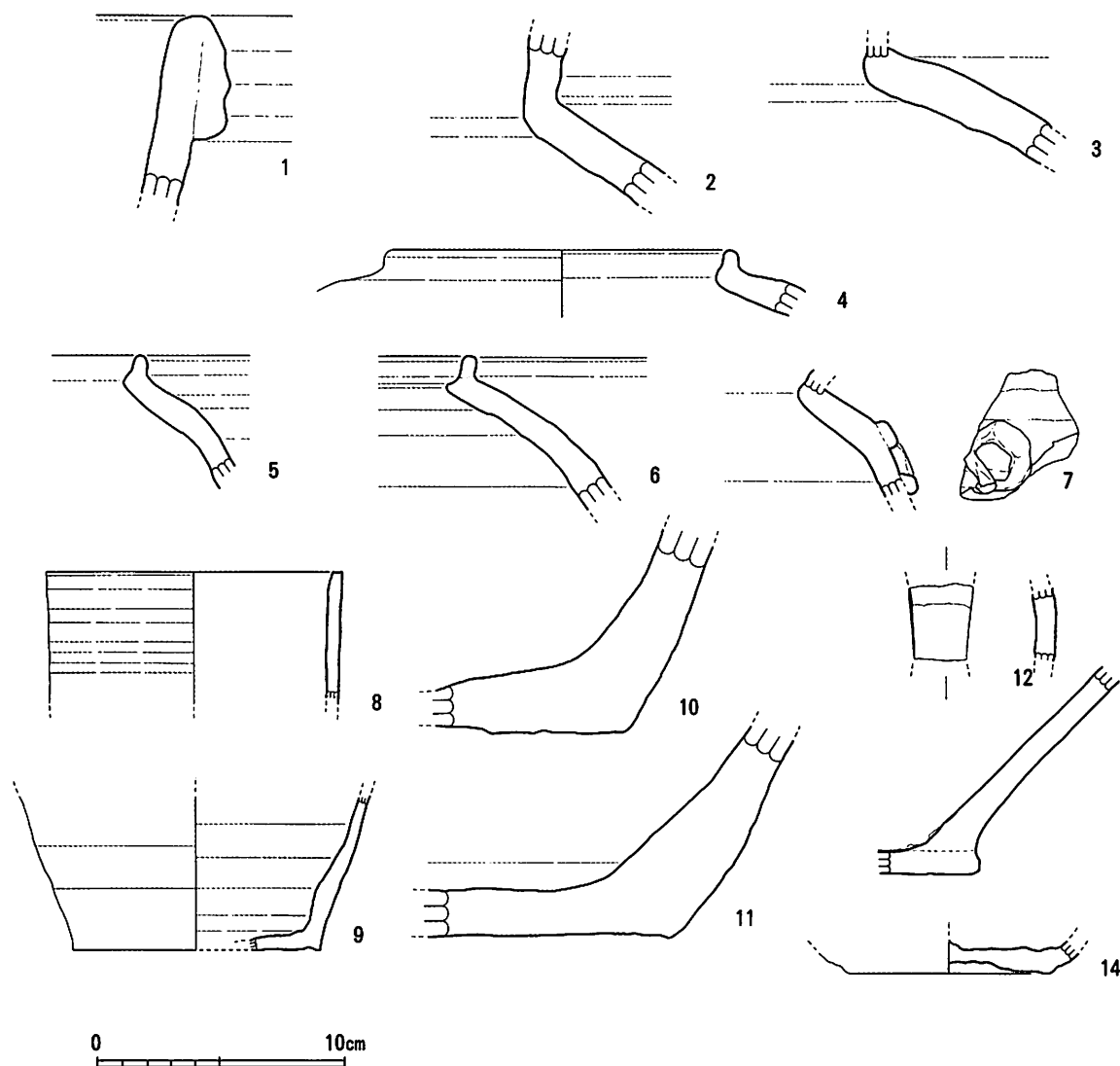
第104図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3)



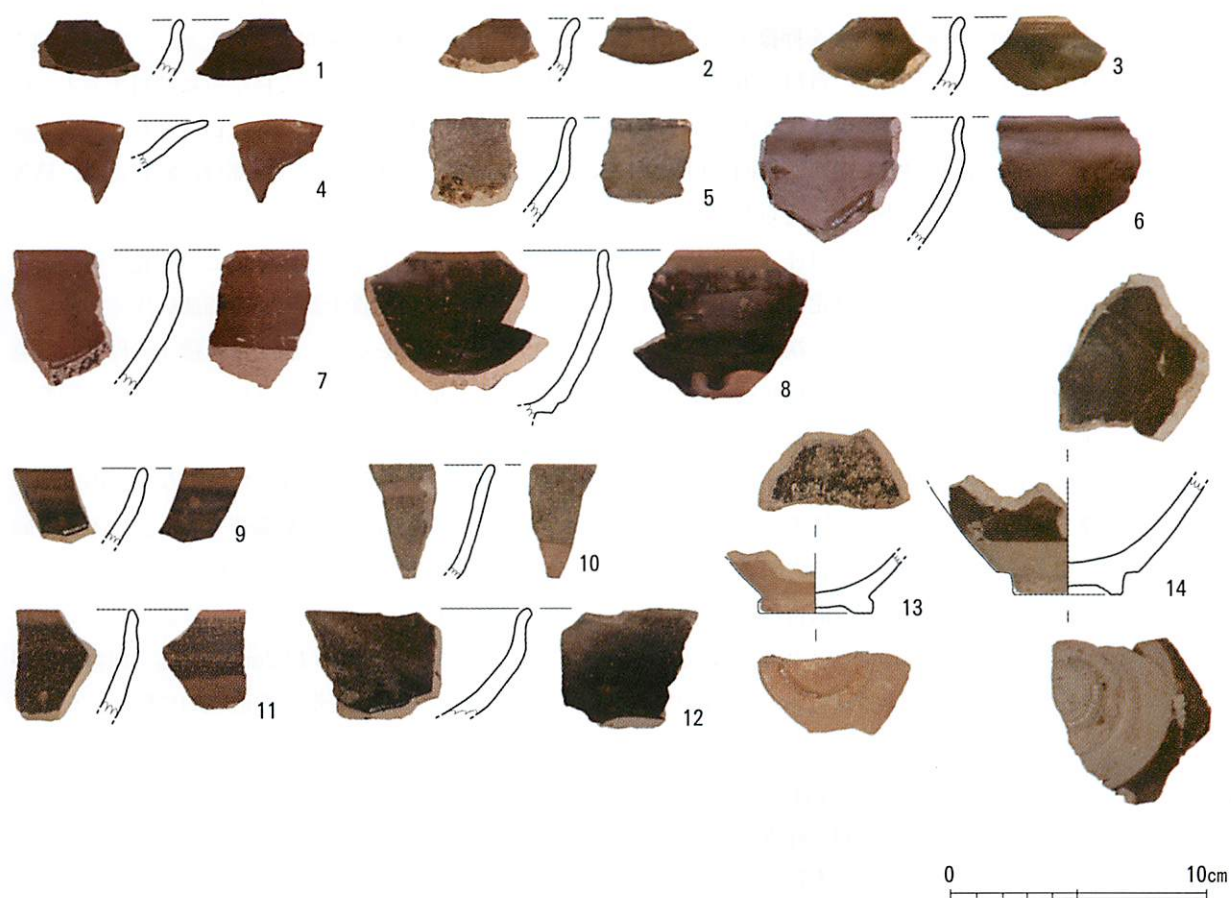
第105図 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3)

大きく開き、内面に段をもつ。全面に灰釉が掛かるが、底部は露胎となり、見込み部分と高台周辺には砂目による目跡が残る。14は肥前系磁器染付小杯である。外面には草花文を描く。20は肥前系陶器大皿の底部破片である。見込みと高台畳付きには目跡が残る。17世紀後半代の所産である。第104図21～23・第105図・第106図には備前系陶器を提示した。第104図21～23は同一個体と思われる備前系陶器瓶である。第105図1～5は鉢である。1は小鉢である。2の口縁部外面にはへら記号が認められる。6～18は近世1期に比定される備前系陶器擂鉢である。第106図1は甕の口縁部破片で、近世1期に比定される資料である。2・3は甕の肩部破片である。2の外面には灰釉が掛かり、黄灰色を呈する。3は暗赤褐色を呈する。4～7は水屋甕である。6の口縁端部内面には蓋受けのための張り出しが顕著に見られる。7は輪状の耳を貼り付けている。8は瓶もしくは鉢の口縁部破片である。復元口径約12.0cmを測る。9は甕もしくは壺の底部である。10・11は大甕の底部破片である。12は全面に釉が掛かることから瓶などの把手と推定されるが、器種の詳細は不明である。13の外面は暗赤褐色を呈し、内面には灰釉が掛かる。常滑系の可能性も否定できない。14は被熱して器壁が剥落しているが壺等の底部と思われる。

第107図には天目茶碗を図示した。1～8は瀬戸美濃系の天目碗、9～14は中国産の天目碗である。



第106図 包含層・整地層出土遺物実測図⑦ (1/3)



第107図 包含層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)

## 土師質土器・瓦質土器 (第108・109・110図1~30)

第108図1~30は包含層出土の京都系土師器皿である。器壁が厚く、口径に比べ器高が高くなるものが多く、3期に比定される資料である。3・5・7・10の口縁部内外面には煤が付着し、灯明皿として転用されたものである。16・19・20・24・25の内面には「ノ」字状のナデあげ痕が残る。31~33は京都系土師器坏である。これらの資料も器壁が厚く3期に比定される。34・35は土師質土器蓋である。34は焼塩壺の蓋である。京都系土師器と同じ胎土を用い、浅黄色系の色調を呈する。35は天井部にツマミが付いたタイプである。手捏ねによって比較的丁寧に作られており、ツマミ部分は一方の側面を押さえつけやや扁平気味に仕上げ、貼り付けられている。胎土は京都系土師器と同じものを使用し、浅黄色系の色調を呈する。口径6.8cm、器高4.0cmを測る。包含層出土であるが同じ層位から3期に比定される京都系土師器が出土しており、16世紀後葉代に位置付けられる資料である。この蓋とセットになる製品は今のところ不明である。焼塩壺の蓋とも考えられるが、周辺の遺構や包含層から取瓶(埴壇)などが出土しており、それらの蓋として利用された可能性も否定できない。ただし、器面には融着物等は観察できない。36・37は土師質土器燭台である。36は中央の穿孔が貫通し、脚をもつタイプである。38は耳皿である。39~46は胎土が赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。底部に糸切り痕が残る、内外面にロクロ目が残る。47は在地系土師質土器碗の底部破片である。第109図には瓦質土器を図示した。1~4は双頭蕨手流雲文を有する在地産の火鉢である。口縁部の資料はいずれも端部が肥厚し、外面に二条の突帯を巡らす。1は突帯の間に双頭蕨手流雲文を連続的

に押捺し、2・3は二個1単位で押捺する。4は底部の資料である。底部外面に二条の突帯を巡らせ、その間に双頭蕨手流雲文を押捺する。文様はいずれも左上がりの方向を向き、右上がりの方向を向く文様をもつSK024出土の資料（第27図参照）よりは新相を呈する。また、文様中央に注目すると、中央に分割線をもつもの（1・3・4）ともたないもの（2）が観察される。5は口縁部が肥厚する火鉢である。被熱が激しいが、外面の口縁下には幅約1cmのベルト状に変色した部分が観察され、箍等を巡らせていた可能性が考えられる。6は器種不明の製品である。口縁端部は外報に突出し、上面は平坦となる。口縁上面には径5mmほどの孔が上方から下方に向けて穿孔される。この穿孔は蓋等を固定するためのものとも推定されるが詳細は不明である。7・8は瓦質土器火鉢の脚部破片である。9は甕か。口縁部は直立し、端部は外側に肥厚する。口縁上面は面をなす。胎土には径3mm程度の石英や砂粒を含む。10は鉢か。口縁端部は外側に肥厚し、上面は面をなす。外面は横方向のハケ目調整が施される。11～15は鉢である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内外面ともに橙色の色調を呈する。16は播鉢の口縁部破片である。口縁端部は断面三角形となり、内側に肥厚する。播目は縦方向と横方向のものが観察されるが、縦方向のものの方が顕著である。胎土には砂粒が多く含まれ、径2mmほどの石英が認められる。17は播鉢の底部破片である。櫛状工具によるものと推定される3条ずつの播目が中心から外方向に向けて放射状に施される。18・19は香炉である。18の口縁部外面下には2個1単位の雷文を連続的に押捺する。復元口径は12.2cmを測る。19は器高6.8cmを測り、底部に断面三角形の脚を貼り付ける。口縁部外面には丸に菱形文を連続的に施し、その下に一条の沈線を施す。

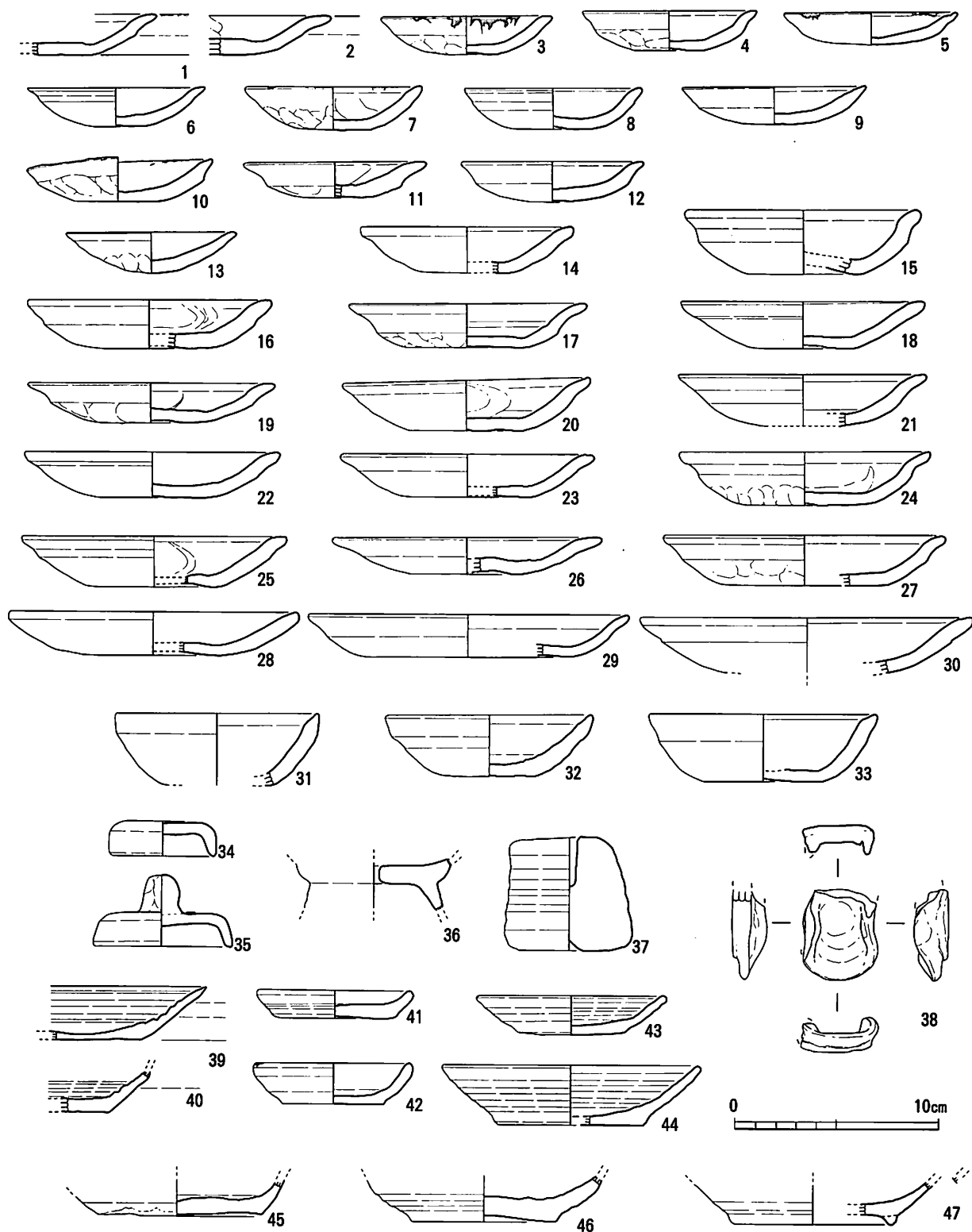
第110図1～30には包含層出土の取瓶（埴埴）のうち、図示可能なものを提示した。内面に金属滓や煤が付着する。部分的に緑青が認められることから、溶かされた金属には銅が含まれていたことがわかる。胎土は灰黒色で大粒の白色粒が混じる。外面は指で押して調整しており、内部は高温溶解液に接するため、溶けて細かく軽石状に穴があく。口縁部のみの資料には京都系土師器皿を転用したものの（4・5）も見受けられる。口径に注目すると5cm大（13～16）、6cm大（17～23）、7cm大（24～30）のものの3法量に細分される可能性がある。これらの資料のほかにもSE007などからも取瓶（埴埴）が出土している。当調査区周辺からは鑄造関係の遺物が顕著に見られ、特に18次調査区西区では3連につながった八角形を呈する太鼓型分銅の未製品<sup>(11)</sup>が出土している。これらのことから当調査区周辺（桜町）で銅製品などの鑄造が行われていた可能性が考えられる。

#### 土製品（第110図31～38）

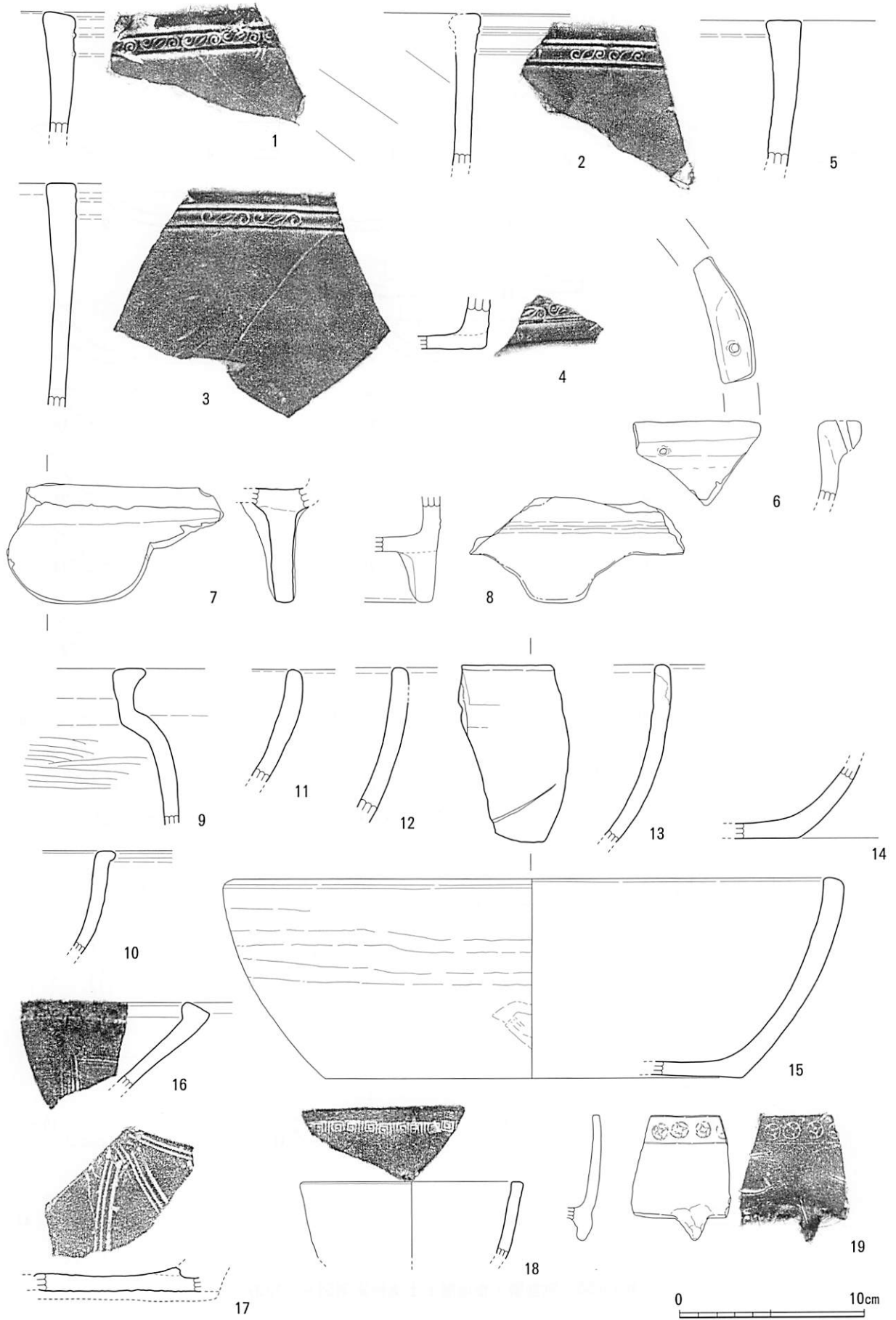
第110図31～37は土器片を円盤状に加工した製品である。31は京都系土師器の口縁部、32・33は土師質土器、34～36は瓦質土器、37は備前系陶器播鉢をそれぞれ加工したものである。大きさは径2.2cmのもの（34）から径6.6cmのもの（33）まで様々で規格性は感じられない。おはじきや双六の駒等の遊具として使用された可能性も考えられるが詳細は不明である。なお、同様の資料は府内町一帯で一様に出土しており、特に5次調査B区では在地系土師質土器を加工した製品が一括出土<sup>(12)</sup>している。38は犬形土製品で、脚部から胴部の資料である。犬形土製品についても、大友府内城下町跡では近年多くの出土例が認められる。

(11) 本書第2分冊 第5章 第184図301参照

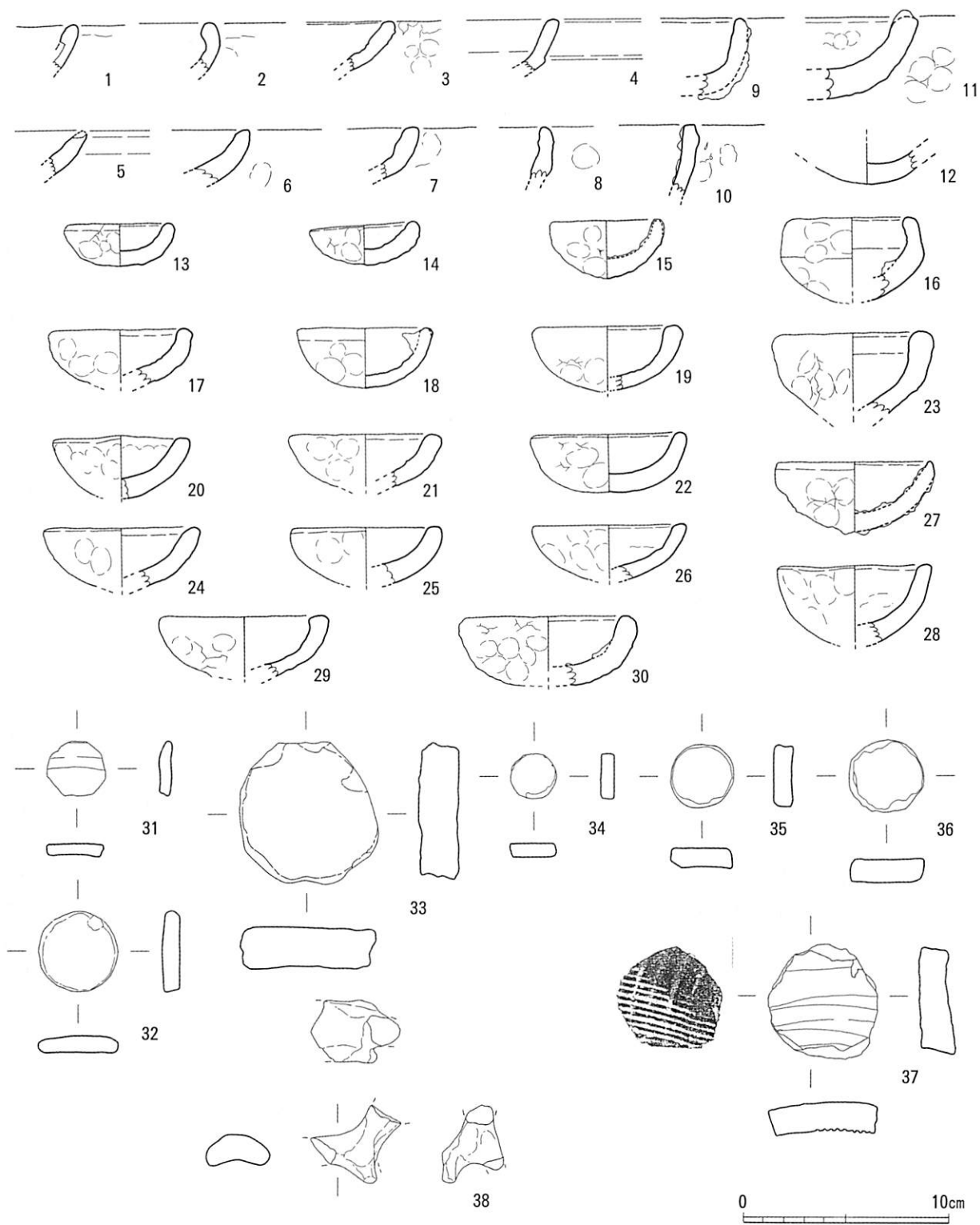
(12) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1』（2005年）



第108図 包含層・整地層出土遺物実測図⑨ (1/3)



第109図 包含層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/3)



第110図 包含層・整地層出土遺物実測図⑪ (1/3)



金属製品（第111図1～22）

第111図1～22では金属（銅）製品を図示した。1～3は銅製板である。1は厚さ0.6mm、2は緑青が付着しており、厚さは0.9mm前後を測る。3は厚さ0.2mm程度の薄い銅板が折れ曲がり重なった状態で出土した。いずれも用途不明である。4は銅製で、ドーム状の製品である。飾り金具か。5は銅製で、留め金具か。6は銅釘である。7は円錐状の銅製品である。8は断面が長方形を呈し、両端が尖る。釘の一種か。9は丸い頭部をもち、待ち針状の形態を呈する製品である。10の頭部は六角形にそれぞれの面が面取りされている。頭部表面にはメッキが施された跡がうかがえる、さらに、頭部には同じく銅製の棒状のものが差し込まれている。留め金具の類か。11は一部折れているが、原形は鋸状を呈すると推定される。12は留め金具か。13は管状の把手が付いており、小筆筭の引出等の引き手金具に推定される。14は直径4ミリ程度の環状金具で、取り付け部にあたる部分は欠損している。15は鎖の一部もしくは留め金具と推定する。16・17は銅線状の製品である。18は幅5mm程度、厚さ2mm程度の板状の製品で、飾り金具か。19は鍵である。20は太鼓型分銅である。緑青で腐食が激しいが、現状で径6mm、幅2mm、重さ0.3gを測り、当調査区最小・最軽量の分銅である。21は繭型分銅である。長さ2cm、厚さ1cm、重さ12.2gを測る。表面には「四禾」（四匁）と読める刻印が認められる。22は小柄である。長さ8.5cmを測る。

ガラス製品等（第111図23～26）

第111図23～25はガラス製品である。23はガラス玉の破片である。24はやや透明な淡緑色を呈する破片である。25はやや濃い淡緑色を呈する。26は水晶である。

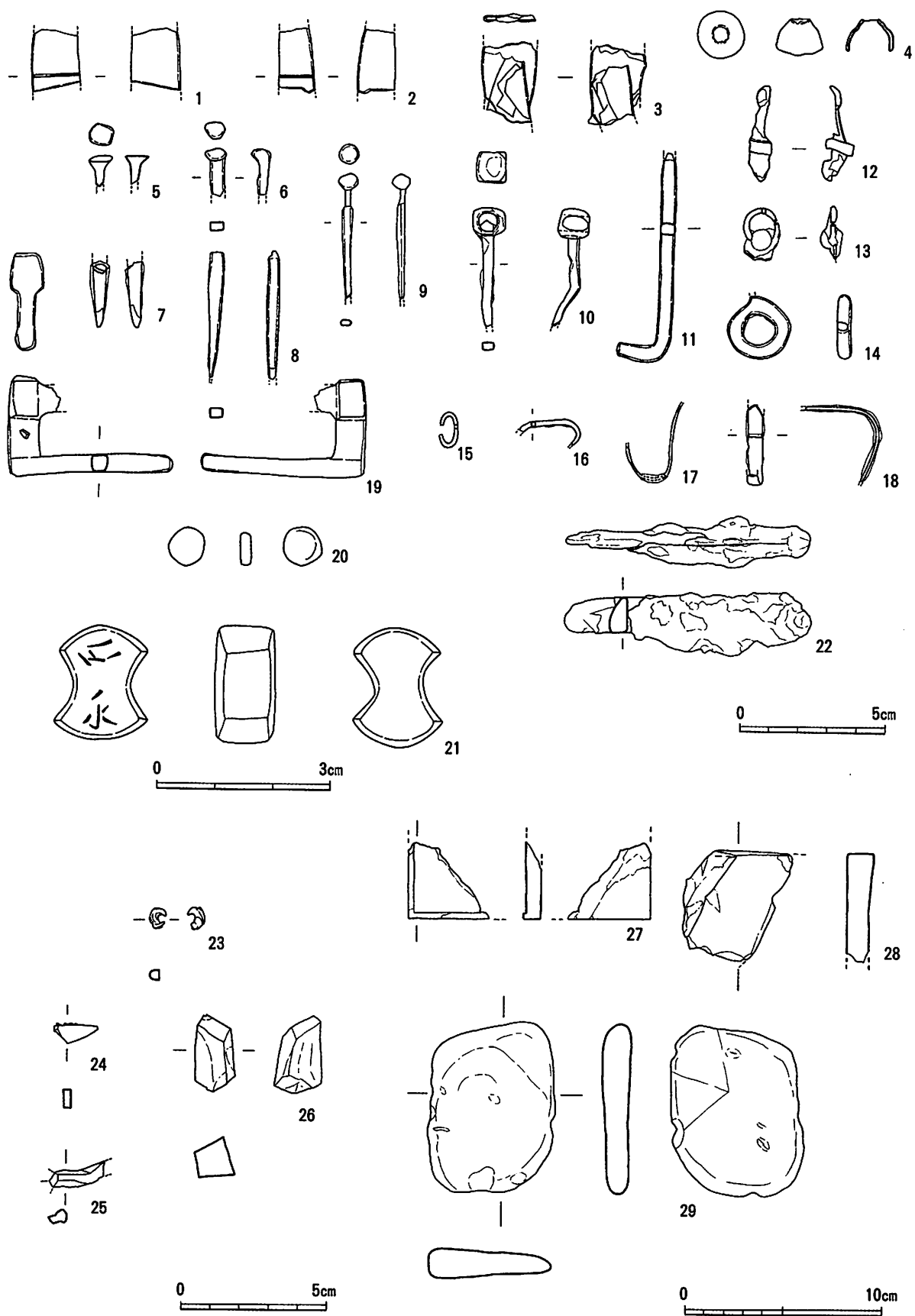
石製品（第111図27～29）

第111図27は輝緑凝灰岩を使用した硯で、いわゆる赤間硯である。28は砥石の残欠である。29は石錘である。

ピット・柱穴出土遺物（第112～114図）

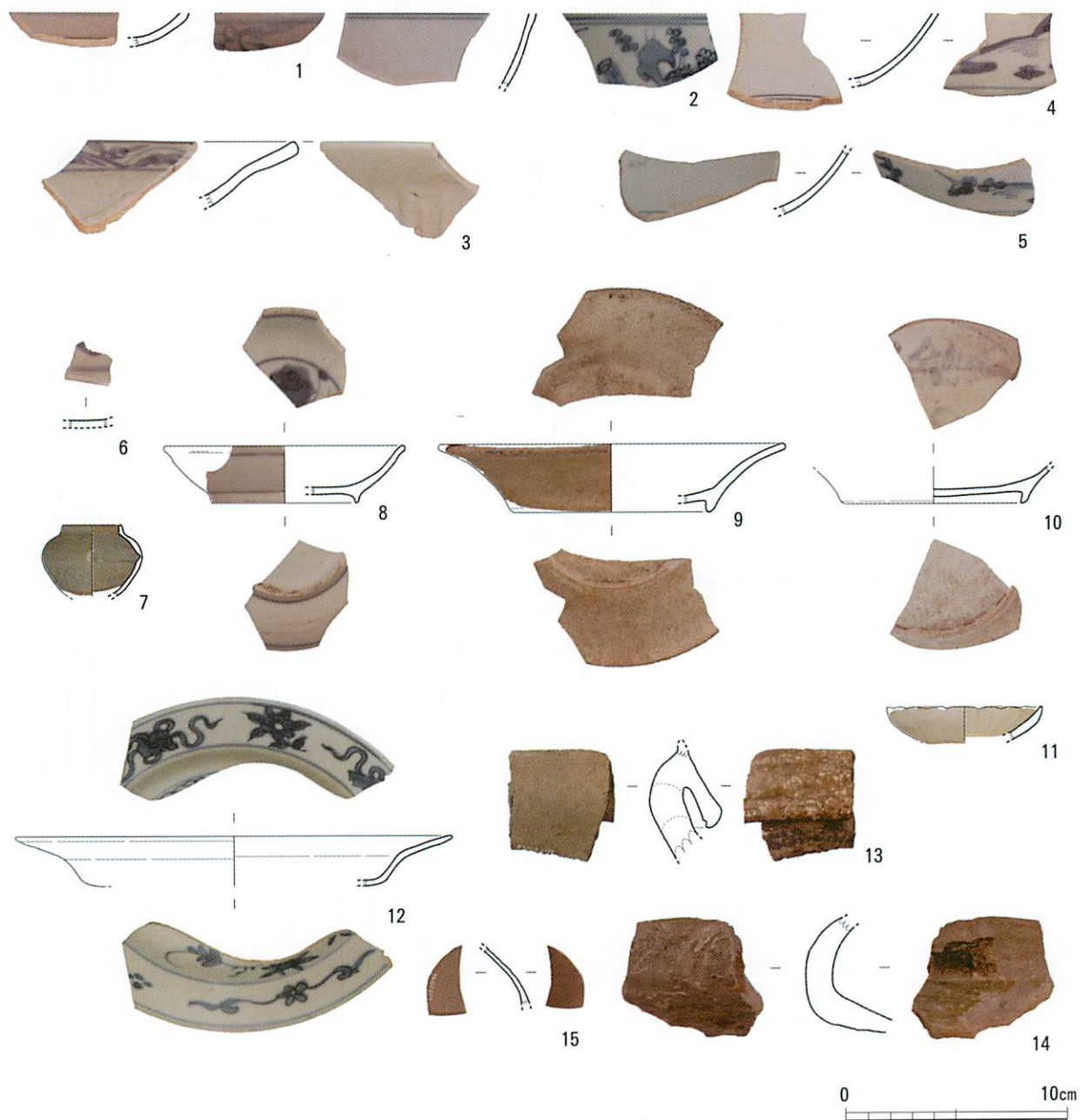
第112～114図には柱穴・ピット等から出土した遺物を提示した。第112図1は中国漳州窯系青花皿の口縁部破片である（SP043出土）。2は中国景德镇窯系青花碗の口縁部破片である。碗E群に比定される（SP248出土）。3は皿F群に比定される中国漳州窯系青花皿の口縁部破片である（SP074出土）。4は中国景德镇窯系青花碗の胴部破片である（SP146出土）。5は中国景德镇窯系青花碗の胴部破片である（SP251出土）。E群か。6は青花の小破片である（SP039出土）。7は中国産白磁小壺である。胴接ぎにより製作されている。外面には印花による文様が施され、胴部下半には蓮弁を表現する。口縁部内面と底部周辺は露胎となる（SP086出土）。8・9はSP144出土である。8はE群に比定される中国景德镇窯系青花皿である。高台部分には砂が付着する。9はE群に比定される中国産白磁皿である。二次被熱を受けており、器面は焼けただれている。10は中国景德镇窯系青花皿の底部である（SP145出土）。11はE群に比定される中国産白磁菊皿である。内外面に鎬文を施す（SP145出土）。12はF群に比定される中国景德镇窯系青花皿で、丸く内湾する胴から斜めにつばが付く（J20区北壁出土）。13は常滑系陶器甕の口縁部破片である。流れ込みか（SP152出土）。14は焼締陶器小壺の胴部破片である。外面にはクロロ目が求められる。中国産か（SP278出土）。15は瀬戸美濃系陶器である。（SP141出土）。

第113図16～28は京都系土師器皿である。順にSP112・SP241・SP137・SP240・SP245・SP271・SP142・SP141・SP129・SP284・SP120・SP110・SP254からの出土である。29・30はSP154出土である。29は京都系土師器皿、30は備前系陶器壺である。31～33はSP146出土である。31・32は京都系土師器皿、33は備前系陶器壺である。34～36はSP199出土である。34・35は3期に比定される京都系土師器皿である。口径が7.2cm・8.6cmと小形のものである。36は備前系陶器播鉢である。内面に斜め方向の播目が観察でき、近世1期に比定される資料である。37・38はそれぞれSP247・SP118出土の備前系陶器播鉢の口縁部破片である。

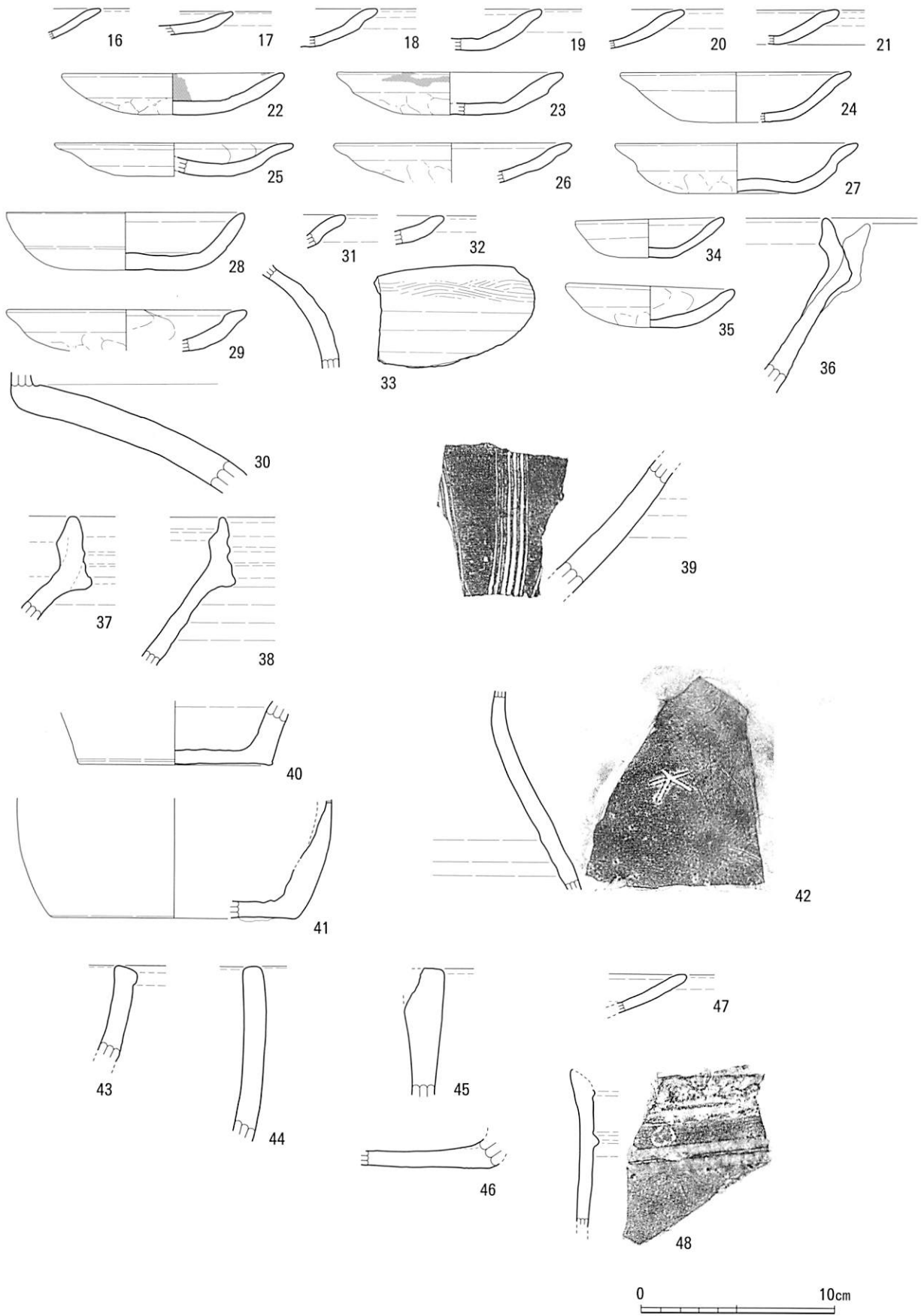


第111図 包含層・整地層出土遺物実測図⑫ (20、21は1/1、27~29は1/3、他は1/2)

39はSP290出土の備前系陶器播鉢の胴部破片である。40・41はそれぞれSP144・SP121出土の備前系陶器壺の底部破片である。42はSP191出土の備前系陶器瓶の胴部破片である。外面に「大」字状のヘラ記号が認められる。43はSP277出土の瓦質土器播鉢の口縁部である。44はSP260出土の瓦質土器鉢の口縁部破片である。45・46はSP113出土の瓦質土器火鉢である。47・48はSP258出土である。47は京都系土師器皿の口縁部破片である。48は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。外面には二条の突帯を付け、その間に梅花文状のスタンプを押捺している。第114図49・50はSP181出土である。49は土師質製品で土鈴等の破片と推定する。50は瓦質土器火鉢である。51・52はSP186出土である。51は3期に比定される京都系土師器皿である。52は瓦質土器播鉢である。胴部内面には櫛状工具による播目が



第112図 柱穴・ピット出土遺物実測図① (1/3)

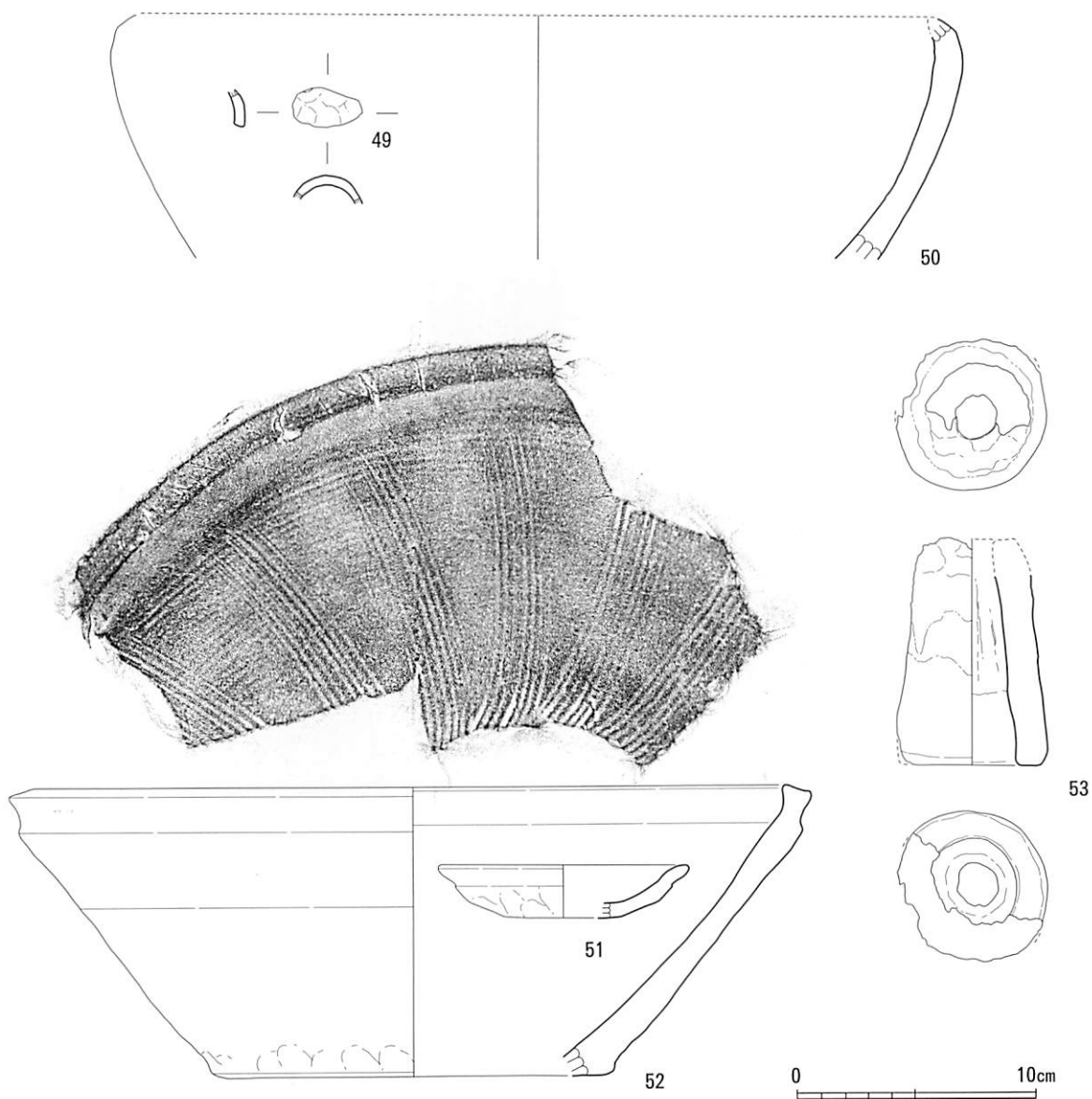


第113図 柱穴・ピット出土遺物実測図② (1/3)

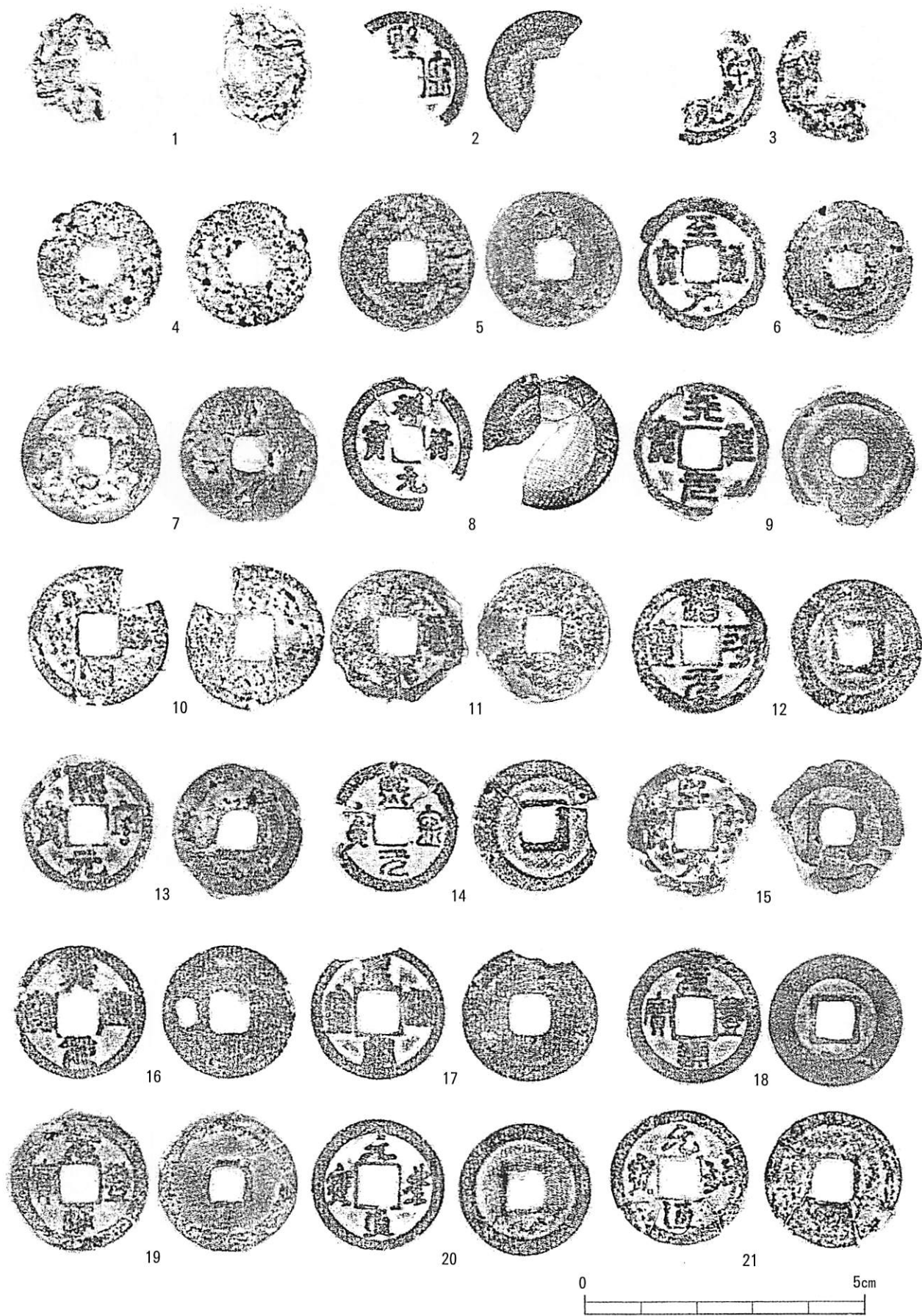
放射状に7条ずつ施される。口縁部は強くナデを施し、口縁下でくの字に折れ、外傾しながら開く。口縁端部は肥厚し、上面は面をなす。内外面とも黄白色の色調を呈する。53はフィゴの羽口である。

銅銭 (第115~116図)

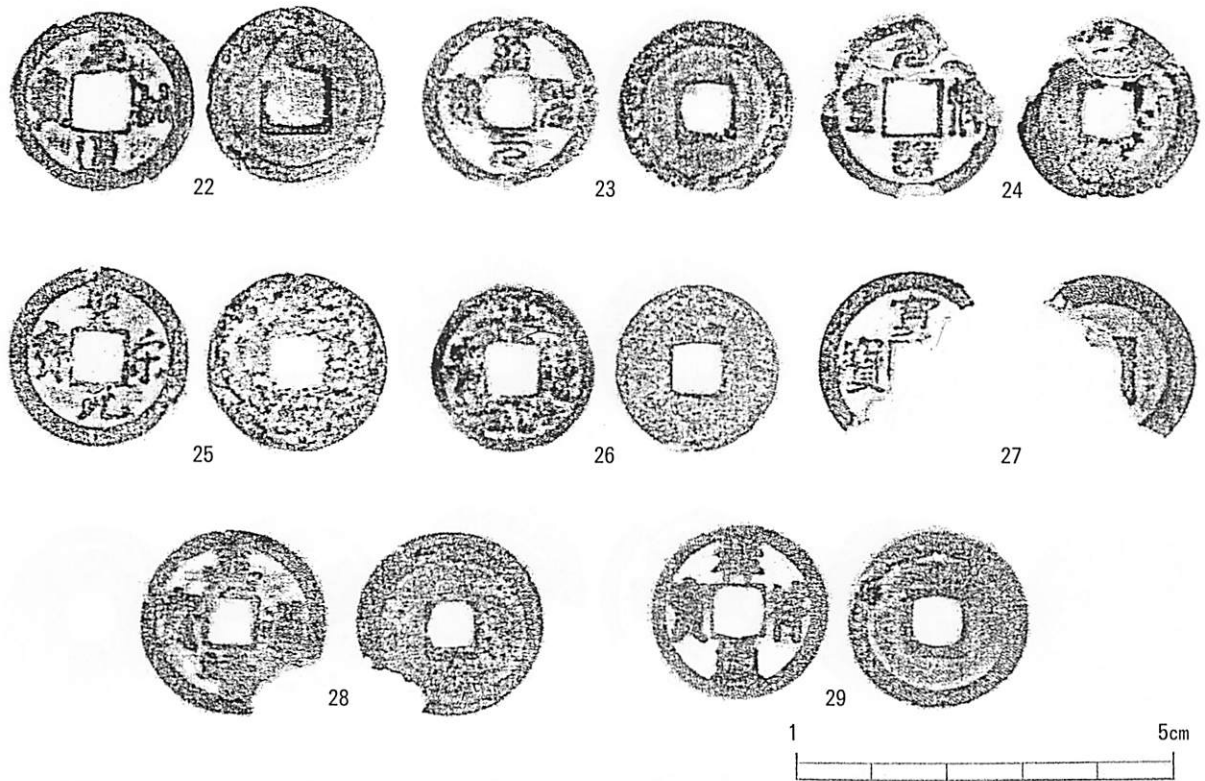
第115~116図には銅銭を図示している。1~27は包含層出土の銅銭である。28はSP150、29はSP219出土のものである。紙幅の関係上、詳細は一覧表を参照されたい。



第114図 柱穴・ピット出土遺物実測図③ (1/3)



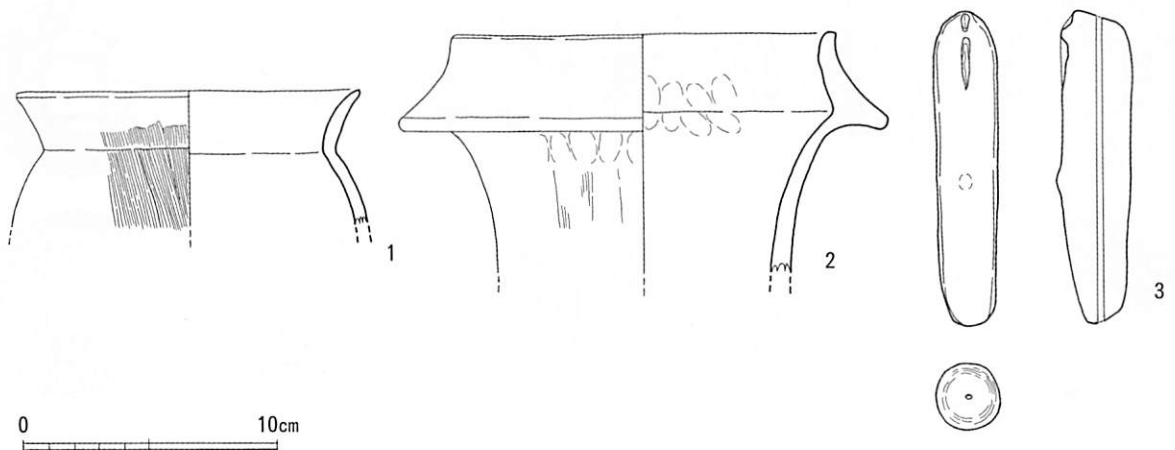
第115図 包含層・整地層出土遺物実測図 (錢貨① 1/1)



第116図 包含層・整地層柱穴出土遺物実測図（錢貨② 1/1）

トレンチ内出土遺物遺物（第117図）

第117図には中世以前の遺構等の有無を確認するために設定した東西・南北の各トレンチ内から出土した遺物を挙げています。第117図1は弥生土器甕である。復元口径は13.2cmを測る。外面には縦方向のハケ目が見られ、淡黄褐色を呈する。2は弥生土器複合口縁壺である。復元口径は14.8cmを測る。3は器種・材質ともに不明である。高師小僧の可能性も考えられるが、中心に糸通しと考えられる孔が貫通し、外面の突起にも穿孔された部分を持ち、上部は人工的な面をもつことから、遺物として報告する。



第117図 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

### 第3節 小結

#### I. 遺構の変遷

中世大友府内町跡第22次調査区は、『大分市史』に掲載されている「戦国時代の府内復元想定図」では国指定史跡大友氏館跡の東に展開する町屋部分にあたり、「府内古図」にみられる桜町周辺にあたる。当調査区では大友氏館跡の東を走る第2南北街路の一部（SF230）とその東に展開する町屋遺構が検出された。第2南北街路については第2節Ⅱで触れたように、少なくとも3～4段階の変遷がみられ、時代を追う毎に大友氏館側に道幅が縮小していることが観察された（第6図参照）。また、第2南北街路の下層には、道路構築以前に溝状遺構（SD202）が存在することも明らかとなった。道路の東側に展開する町屋遺構については、16世紀後葉から末葉に比定される遺構が主体をなすが、14～15世紀代とみられる井戸も検出されており、大友氏館前の町屋群が建設される前の姿を垣間見ることができる。遺跡の最盛期は、町屋が建設される16世紀後葉代であり、1587（天正15）年の島津侵攻以降、近世城下町が建設されるにあたり衰退していく。以下、各時期の遺構について説明を加えながら本調査区を概観していきたい。

#### 14～15世紀代の遺構

14～15世紀代の遺構は2基あるが、いずれもK・L21区の井戸遺構（SE201・SE242）である。この2基の井戸は切り合い関係を有し、その構築順序はSE242→SE201である。隣接した位置に構築されており、16世紀にはSE242とほぼ同じ位置にSE012が構築されている点が特徴的である。

この地区が地下水の汲み上げに非常に適した場所であったことが推測される。しかし、14～15世紀代に比定される遺構は、前述の2基のみであり、柱穴や土坑などの遺構は皆無である。このことから当調査区で限って言えば、大友館に東面する町屋の形成は16世紀を待たなければ為されないということができよう。

#### 16世紀代の遺構

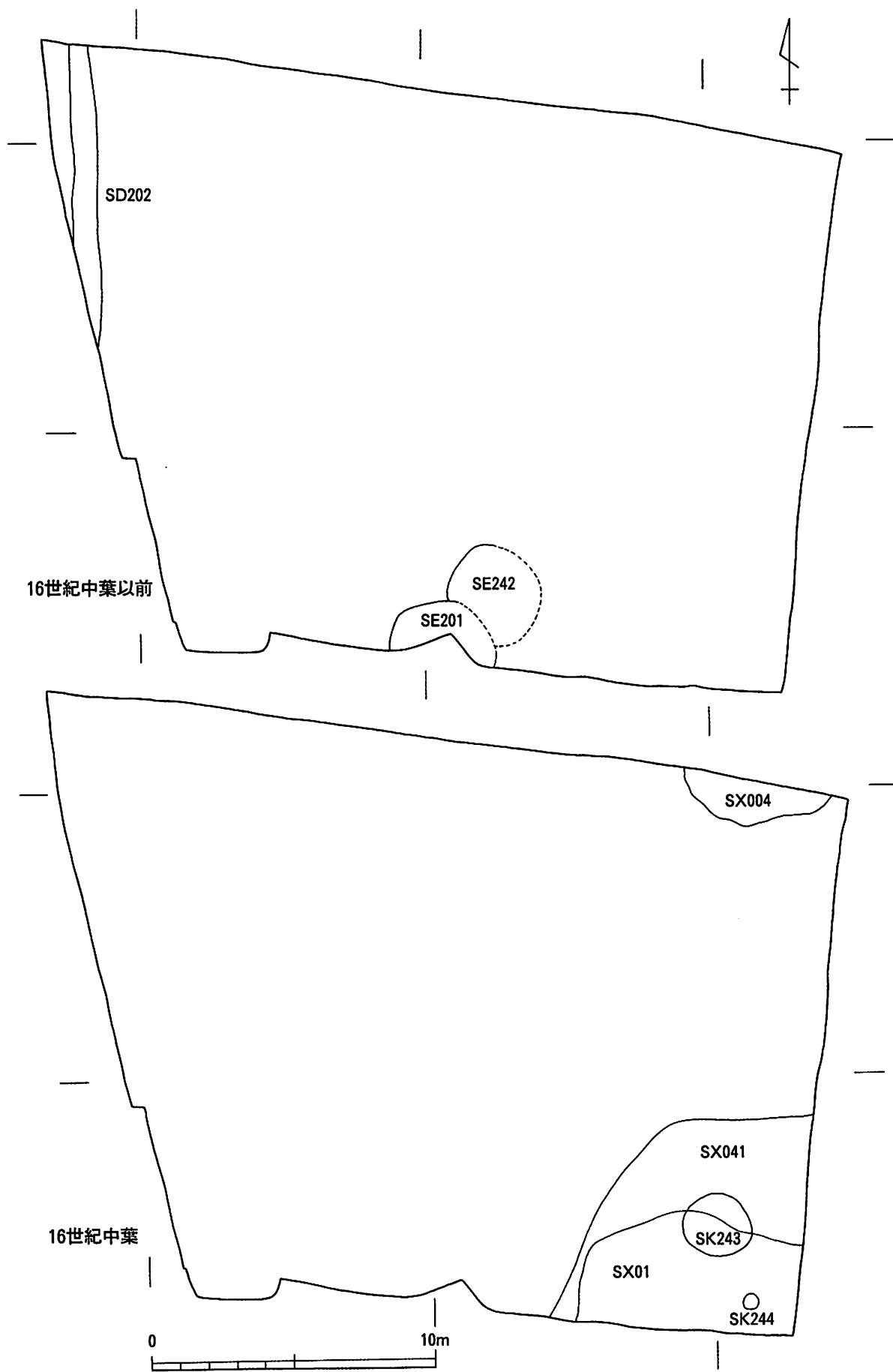
16世紀代になっても、初頭から中葉までの遺構は確実に確認できていない。僅かに第2南北街路の下位遺構となる溝状遺構（SD202）が中葉以前であると想定できるのみである。SD202については、調査区の制限から検出範囲が狭く、時期を特定できる遺物の出土もないため、確実な時期は特定できない。しかし、土層断面からは明らかに第2南北街路が構築される以前に掘削されていることが観察できる。中世の府内が街路によって区画される以前に、溝によって区画された空間が存在したことが推定できる遺構である。

SD202上に構築された第2南北街路（SF230）については、前述したように数回の変遷が確認できる。構築時期については、最下層の出土遺物から16世紀中葉に比定できる。その後は、道路の東に建設された町屋の浸食によって随時西側に狭まっていくことが確認できている。また、道路上層の火災処理の状況から、島津侵攻以後、町屋は一時復興され、SF230は道路として機能していたことがうかがえる。

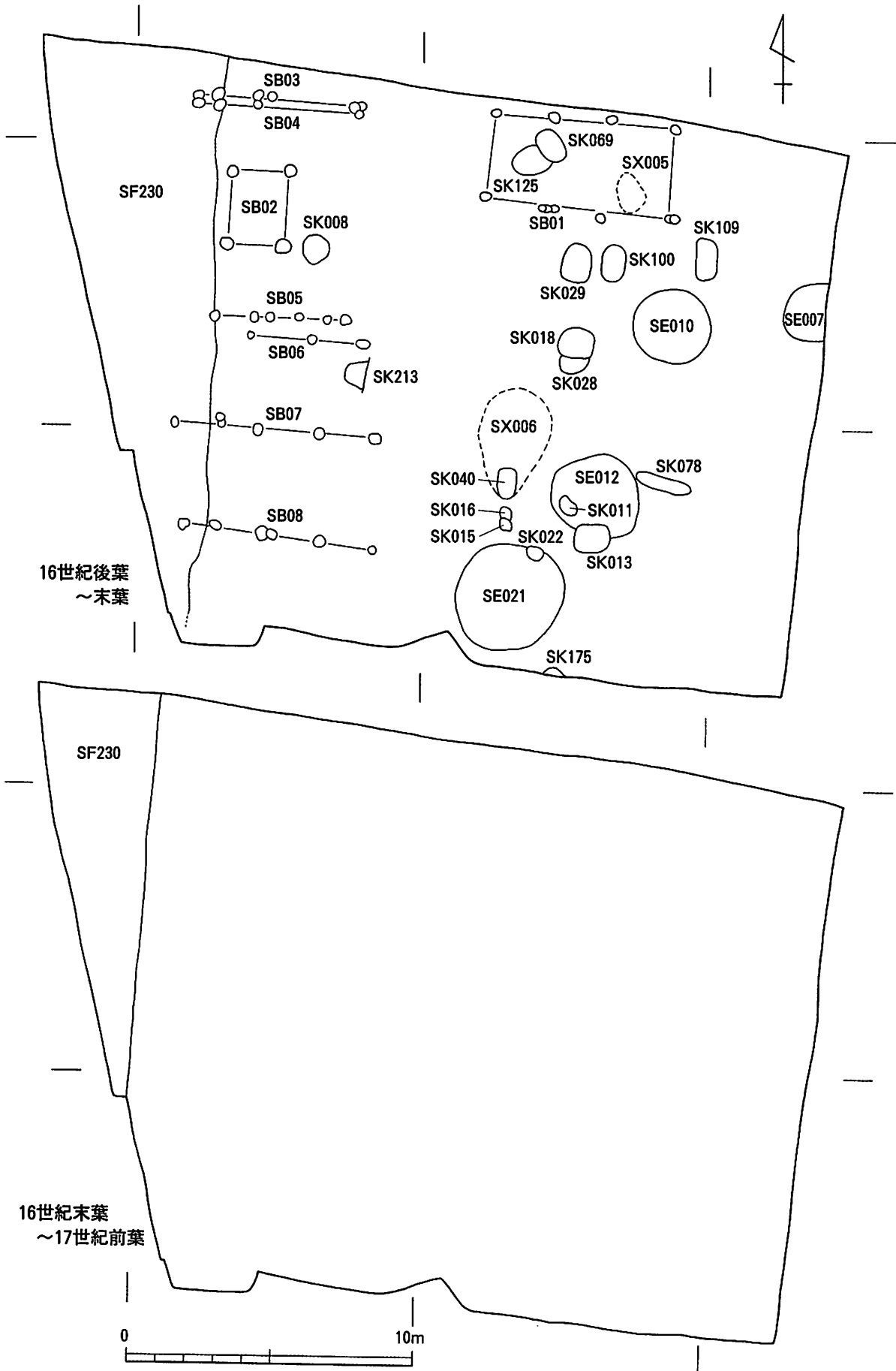
町屋遺構については、道路に面して東西に並ぶ柱穴列が確認でき、柵列状の境界が存在したことが推定できる。そして、町屋は道路に沿って鰻の寝床状に町割りが形成されていたことが推定される。東西に並ぶ柱穴列の間隔は広いところで8m、狭いところで4mの間隔である。SB03とSB04は切り合い関係がある柱穴も観察でき、柵列の立て替えの可能性が考えられる。SB05とSB06には切り合い関係は認められず、間隔も約80cmあり、この2本柵列の間は路地として使用されていた可能性が考えられる。SB03（SB04）とSB05との間隔は約8mと広く、この間にはSB01やSB02などの掘立柱建物を確認できる。SB01については町屋の裏手にあたる場所に存在することから、小屋等の可能性が考



第3節 小結



第118図 第22次調査区遺構変遷図① (1/200)



第119図 第22次調査区遺構変遷図② (1/200)

### 第3節 小結

えられる。SB02については、SB01と併存していたか否かについては明確な遺物が出土しておらず不明である。

柱穴群の裏手にあたる調査区東側には井戸や廃棄土坑などの遺構がみられ、町屋遺構の典型的な姿が確認された。井戸については、IV項で述べたように6基確認している。特に上層の井戸については前項で述べた町割りに対応するように配置されている。

調査区南東で確認された落ち込み遺構や整地層(SX041・SX01)については、南面する9次調査区や北側の18次調査区および12次調査区などでも確認されているものである。時期については出土遺物などから16世紀中葉から後葉にかけての年代が推定されるが、当調査区の遺構については人工的なものか自然のものかについての検証はできていない。しかしながら、16世紀後葉にはこの落ち込み状の遺構は埋め立てられ、その上に町屋が形成されていることは確かである。従って、大友氏館前の「桜町」などの町屋の形成がされるのは16世紀後葉になってからと推定される。

## 第8章 中世大友府内町跡第9次調査区

### 第1節 調査の概要

第9次調査区は大分市錦町3丁目に所在するが、国道10号建設予定地と、JR日豊本線が交差する地点のJR日豊本線北側に位置する。調査区は大友氏館跡の東側に位置し、I～IV区の4調査区に分けて発掘調査を実施した。今回の報告は第9次調査区の北側に位置するII・III調査区の成果であるが、このII・III区とI・IV区との間には「府内古図」にみられる「御所小路」を踏襲したと考えられる里道が存在しており、大友館跡中央付近で大友館の東側に南北方向に走る街路から東に伸びる「御所小路」に面する遺構群の実態が発掘調査によって明らかとなった。

発掘調査は、II区を平成12年6月から平成13年6月まで13ヶ月間、III区を平成12年12月から平成13年6月まで7ヶ月間、実施した。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. II区 (第120～123図)

II区の遺構群は16世紀前葉から営まれはじめる。それ以前の遺物はきわめて貧弱であり、遺構に関してはほとんど確認できない。

16世紀前葉にはSX030やSX031などの浅い不定形な地形の落ち込みが調査区の中央から西側をしめる。土取りによるものと考えられるが、これらの遺構は調査区外北西南側に延びており、埋土中には水性堆積土が確認できるため、掘削後、一時期、放置され、滞水期間があったものかもしれない。しかし、SX030やSX031は、後に埋め戻され、遺構群が形成されていく。

明確に遺構群の存在が確認できるのは、16世紀後葉～末葉に至ってからである。第122・123図に当該時期の遺構群をあらわしたが、それぞれの挿図は必ずしも同時併存の遺構をあらわしたのではなく、様々な遺構群が時間差をもちながら16世紀後葉～末葉に営まれていた。調査区の北東側では地形の落ちが確認でき、これは調査区外にもものびる。これが自然地形によるものか、土取り坑の名残であるかは明らかでないが、III区ではこの地形上に遺構が営まれているため、当時もこの地形

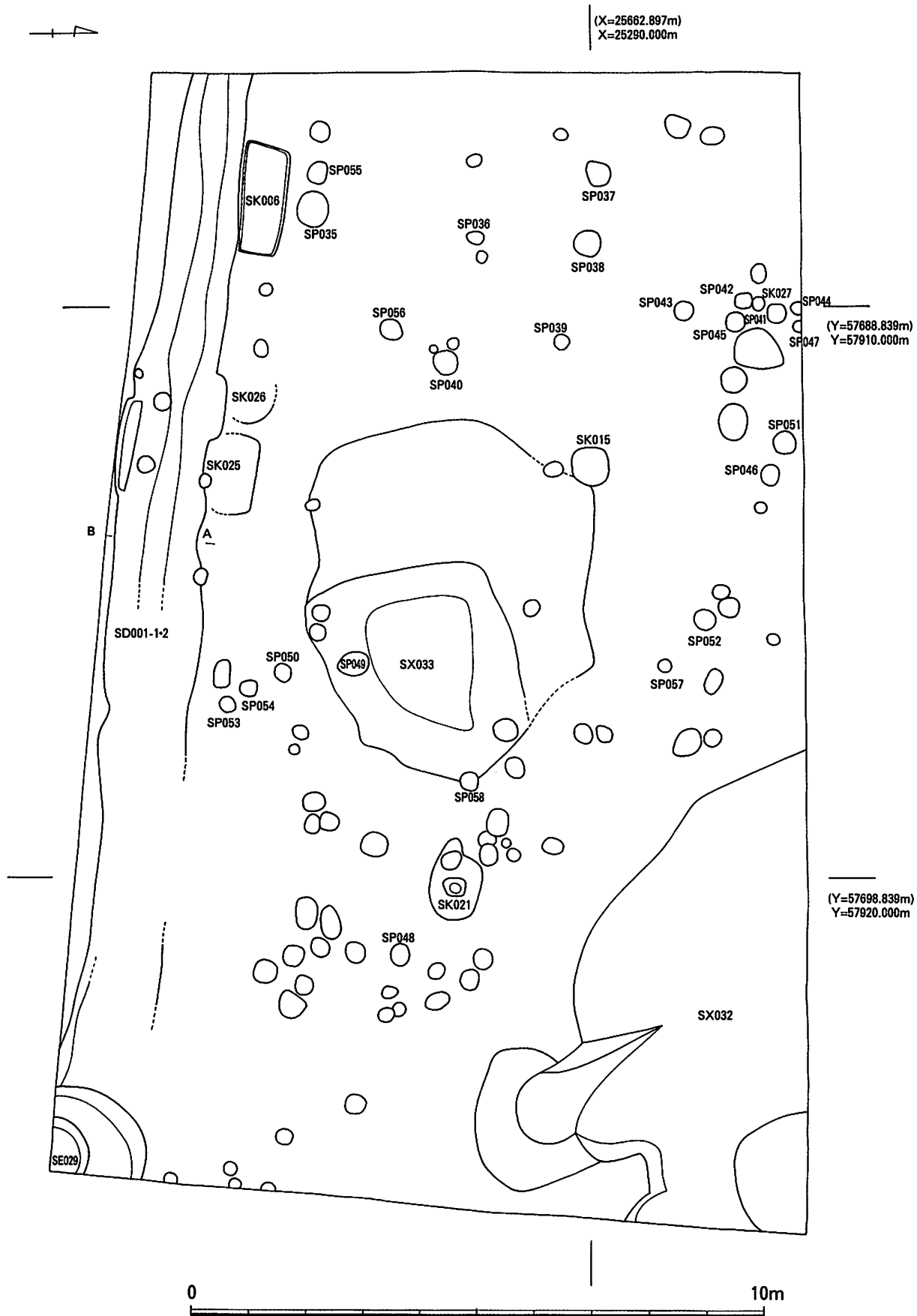


第120図 第9次調査区II・III区の位置 (1/800)

第2節 遺構と遺物

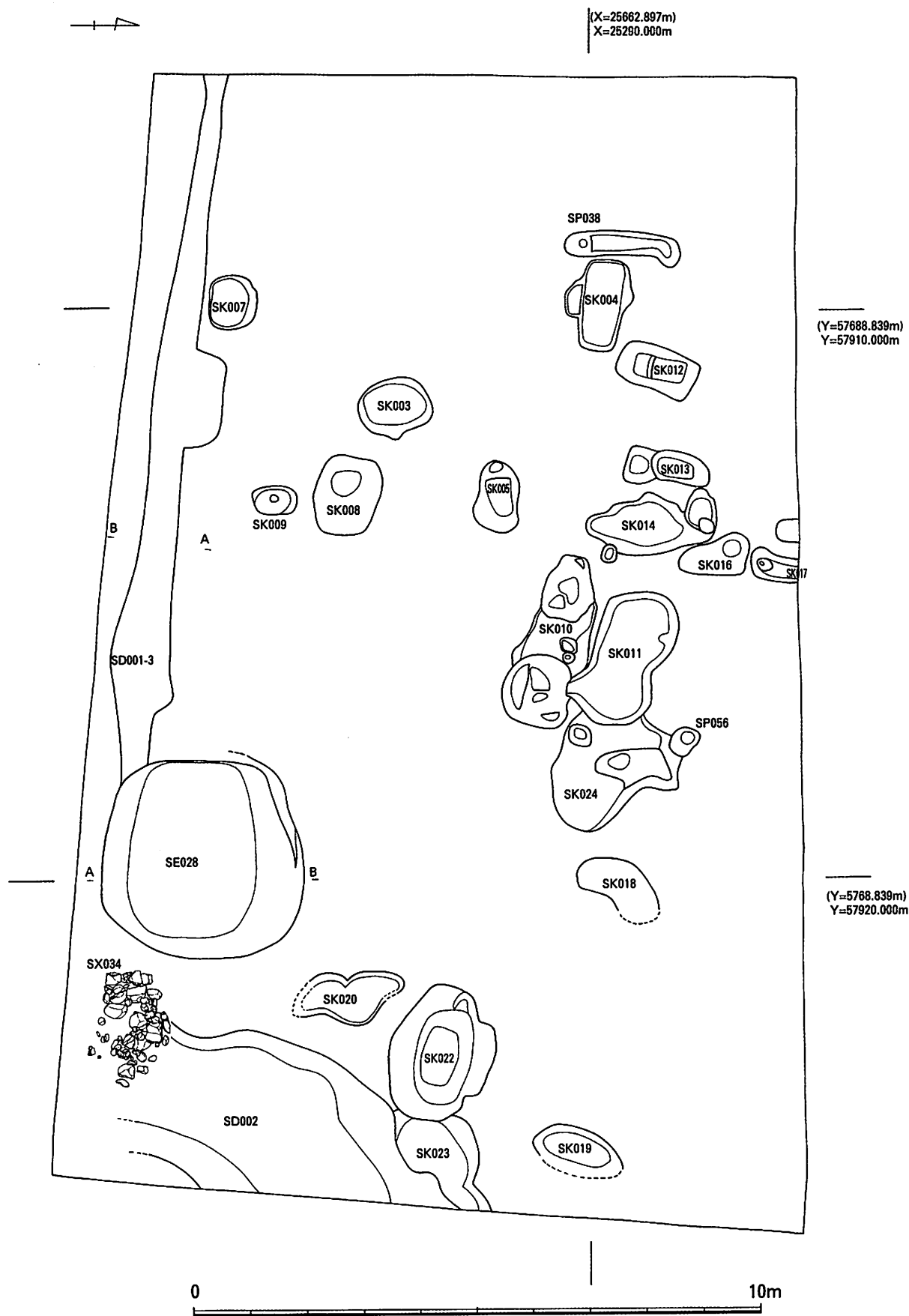


第121図 第9次調査区Ⅱ区遺構配置図(第1段階 16世紀前葉)



第122図 第 9 次調査区 II 区遺構配置図 (第 2 段階 16世紀後葉~末葉 (1))

第2節 遺構と遺物



第123図 第9次調査区Ⅱ区遺構配置図(第2段階 16世紀後葉~末葉(2))

第3表 II区遺構一覧表

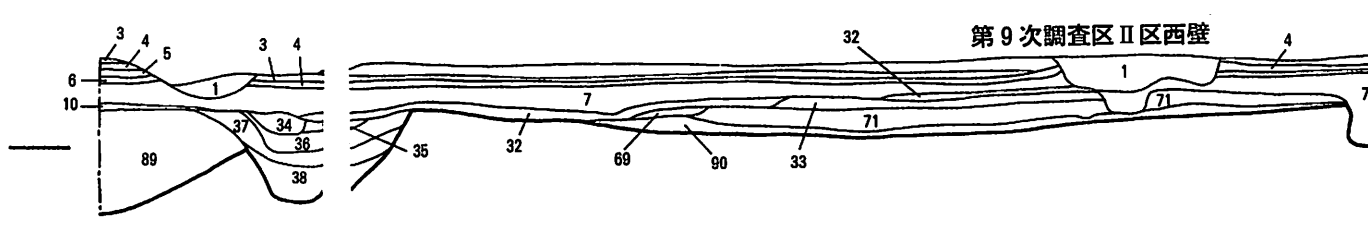
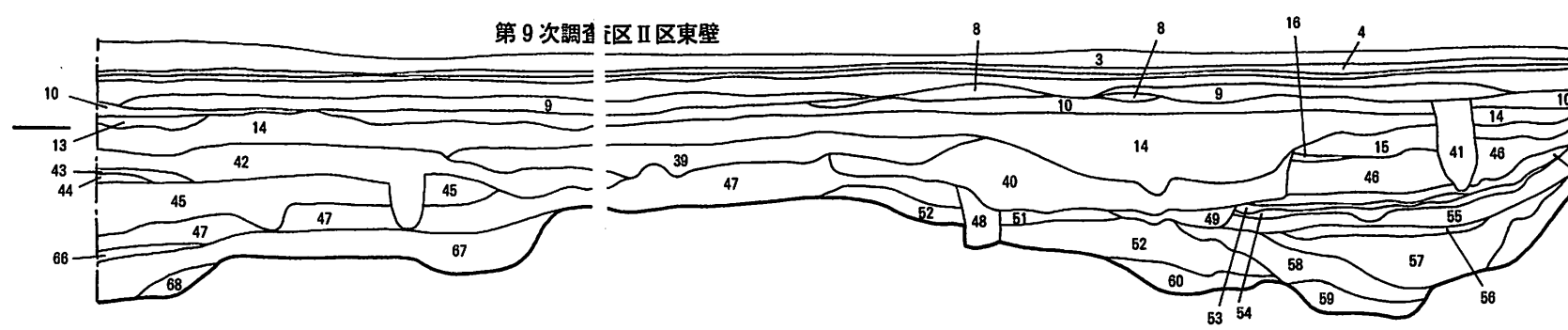
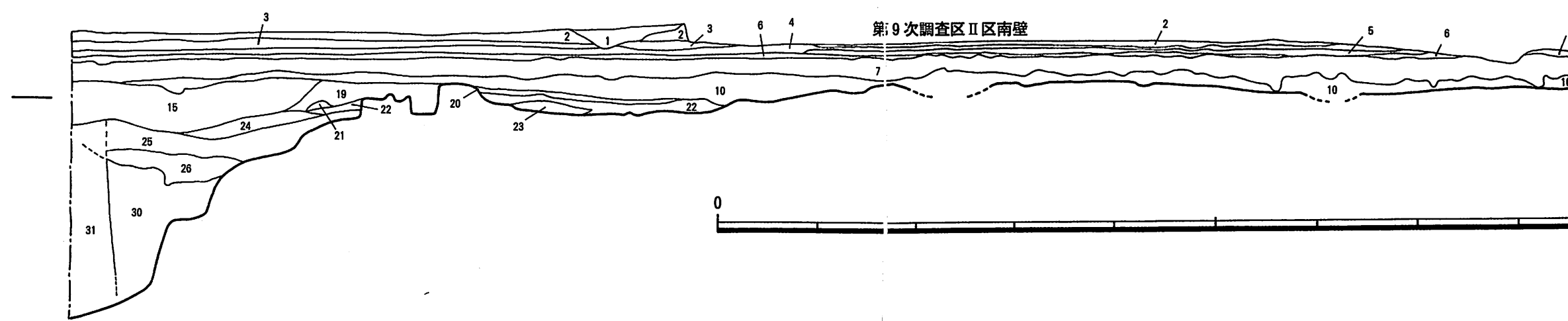
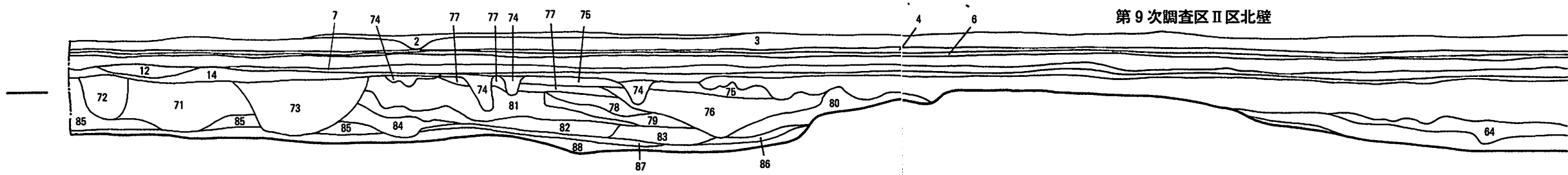
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001-1	SD1	溝	K24区・L24区・M24区	16世紀後葉～末葉		97
SD001-2	SD1	溝	K24区・L24区・M24区	16世紀後葉～末葉		97
SD001-3	SD1	溝	K24区・L24区	16世紀後葉～末葉		97
SD002	SD2	溝	M24区	16世紀後葉～末葉		98
SK003	SK1	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		100
SK004	SK2	土坑	K23区・L23区	16世紀後葉～末葉		100
SK005	SK3	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		101
SK006	SK4	土坑	K24区	16世紀後葉～末葉		102
SK007	SK5	土坑	K24区・L24区	16世紀後葉～末葉		106
SK008	SK6	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		106
SK009	SK7	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		107
SK010	SK8	土坑	L23区・L24区	16世紀後葉～末葉		107
SK011	SK9	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		111
SK012	SK10	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		111
SK013	SK11	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		112
SK014	SK12	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		113
SK015	SK13	土坑	L23区・L24区	16世紀後葉～末葉		113
SK016	SK14	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		113
SK017	SK15	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		113
SK018	SK18	土坑	L23区・M23区	16世紀後葉～末葉		113
SK019	SK19	土坑	M23区・M24区	16世紀後葉～末葉		114
SK020	SK20	土坑	M24区	16世紀後葉～末葉		
SK021	SK21	土坑	L24区・M24区	16世紀後葉～末葉		
SK022	SK22	土坑	M24区	16世紀後葉～末葉		114
SK023	SK23	土坑	M24区	16世紀後葉～末葉		117
SK024	SK24	土坑	L23区・L24区	16世紀後葉～末葉		118
SK025	SK25	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		118
SK026	SK26	土坑	L24区	16世紀後葉～末葉		118
SK027	埋壘状遺構 1	埋壘状遺構	K23区・L23区	16世紀後葉～末葉		118
SE028	SX1	井戸	L24区・M24区	16世紀後葉～末葉		121
SE029	SX2	井戸	M24区	16世紀後葉～末葉		122
SX030	SX5・6・7	落ち込み	K23区・K24区・L23区・L24区	16世紀前葉		122
SX031	SX4	落ち込み	K24区	16世紀前葉		126
SX032	SX3/SD3	落ち込み	L23区・L24区・M23区・M24区	16世紀後葉～末葉	当初、SD3として認識した遺構がSX3の一部と判明	128
SX033	土器溜遺構	土器溜遺構	L24区	16世紀後葉～末葉		128
SX034	SU1	集石遺構	M24区	16世紀後葉～末葉		130
SP035	SP1	ピット	K24区	16世紀後葉～末葉		130
SP036	SP2	ピット	K24区	16世紀後葉～末葉		130
SP037	SP3	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		130
SP038	SP4	ピット	K24区	16世紀後葉～末葉		130
SP039	SP5	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP040	SP6	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP041	SP7	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP042	SP8	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		130
SP043	SP9	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		130
SP044	SP10	ピット	K24区	16世紀後葉～末葉		130
SP045	SP11	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP046	SP12	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP047	SP13	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP048	SP14	ピット	M24区	16世紀後葉～末葉		130
SP049	SP15	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP050	SP16	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP051	SP17	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP052	SP18	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP053	SP19	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP054	SP20	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130
SP055	SP21	ピット	K24区	16世紀後葉～末葉		130
SP056	SP22	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP057	SP23	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		130
SP058	SP24	ピット	L24区	16世紀後葉～末葉		130



第2節 遺構と遺物

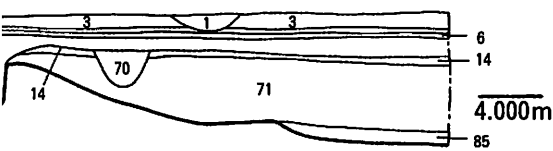
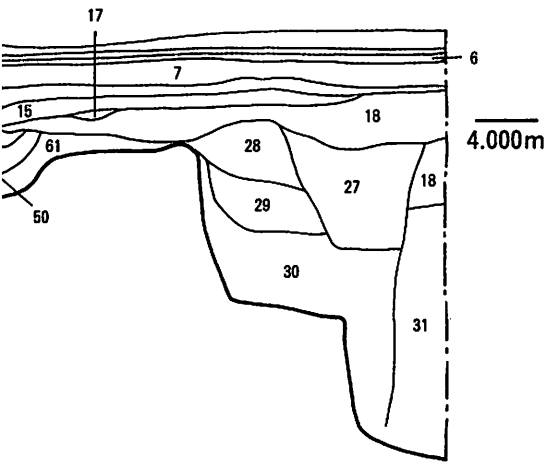
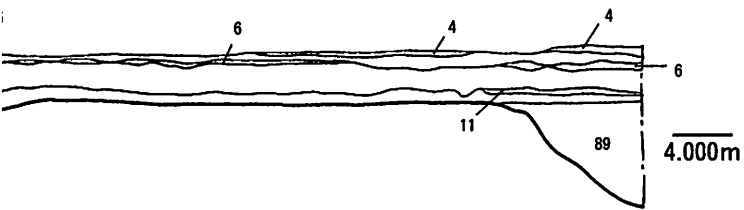
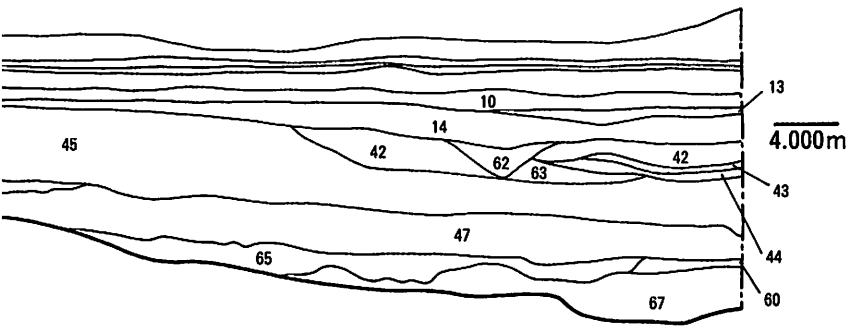
第9次調査区Ⅱ区トレンチ土層断面観察表

1	撥乱土	47	にぶい黄橙色粘質土 (SX032 42層と近似するが、きわめて均質で焼土粒・炭・遺物はきわめて少ない)
2	青灰色粘質土 (昭和期水田耕作土)	48	褐灰色土 (炭・小石が混入する)
3	にぶい黄橙色土 (昭和期水田床土)	49	灰褐色土
4	にぶい黄橙色土 (酸化鉄沈着層)	50	橙色粘質土 (ひじょうに均質な土)
5	灰褐色土 (焼土・炭を含む 7層に近似)	51	褐灰色土
6	にぶい黄橙色土 (マンガン沈着層)	52	褐灰色粘質土 (砂を若干含む)
7	褐色土 (遺物包含層 小さな焼土粒をわずかに含む)	53	褐灰色砂 (SD002 炭を少量含む)
8	7・9・10層の漸移層	54	褐灰色砂 (SD002 粒子が細かく均質である)
9	褐色土 (7層と近似するが、7層よりもマンガンを多く含む)	55	褐灰色土 (SD002)
10	褐色土 (7・9層と近似するが、上面にマンガンが固まっている)	56	明褐色砂 (SD002 薄い砂層が互層にみられる 炭を若干含む)
11	褐色土 (10層と近似するが、下面にマンガンが著しく沈着する)	57	褐灰色土 (SD002 砂・小石の層と褐色土の層が互層に堆積する)
12	灰褐色土	58	褐灰色土 (SD002 砂・小石の層と褐色土の層が互層に堆積する)
13	にぶい黄橙色粘質土	59	褐灰色土 (SD002 砂層と褐色土の層が互層に堆積する)
14	褐色土 (7層と近似)	60	褐灰色粘質土 (1cm内外の黄橙色粒を含む)
15	褐色土 (14層より遺物・炭・焼土が少なく均質である)	61	にぶい褐色土
16	砂層 (小石が混じる)	62	褐色土 (42層と近似するが、粘性に乏しい)
17	褐色砂質土 (15層と18層の漸移層)	63	褐色土 (62層と近似するが、やや暗い)
18	褐色砂層 (薄い砂層が互層にみられ、径1~2cmの小石を含む)	64	褐色砂質土 (SX032 45層と近似するが、砂・小石を多く含む)
19	にぶい橙色土	65	褐色砂 (SX032 薄い砂層が互層に堆積し、中には小石も含む)
20	黄灰色土 (均質な土)	66	にぶい黄橙色粘質土 (SX032 47層と近似する)
21	褐色砂質土	67	褐灰色粘質土 (地山か)
22	褐色砂質土 (21層と近似する)	68	褐色砂層 (地山か)
23	褐色砂層 (部分的に1~2cmの小石が含まれる)	69	淡褐色土 (14層に近似するが、シルト質の均質な土からなる)
24	黄灰色土 (均質な土)	70	褐色土 (炭・焼土粒をひじょうに多く含む)
25	灰褐色粘質土 (SD002埋土)	71	暗褐色土 (80・83・84層に近似する)
26	灰褐色砂粘質土 (SD002埋土 マンガンの薄い層が何層も入る)	72	灰褐色土
27	にぶい褐色土 (SE029掘方埋土 若干の炭・焼土が混じる 1~3cmの黄橙色土・褐色土粒が混じる)	73	褐灰色土 (粗い礫や土器を含む)
28	黄橙色土 (SE029掘方埋土 褐灰色土が混入 特に下面に厚く堆積している)	74	にぶい褐色土 (しまりのよくない砂質土)
29	黄橙色土 (SE029掘方埋土)	75	にぶい黄褐色土
30	にぶい橙色土 (SE029掘方埋土 砂や褐灰色土が混入)	76	灰黄褐色土
31	にぶい黄橙色土 (SE029井筒内埋土 炭・遺物・石が混入 3~6cmの褐色土粒を含む 掘方との境目に腐食した木質痕が残る)	77	にぶい褐色土
32	淡褐色土 (14層と近似するが、マンガンの沈着が著しい)	78	にぶい褐色土
33	淡褐色土 (14層と近似するが、シルト質の均質な土からなる)	79	褐色土
34	褐色土 (SD001-3 京都系土師器が大量に廃棄されている炭・焼土粒を含む)	80	褐色土 (71・83・84層に近似する)
35	褐灰色砂質土 (SD001-2)	81	にぶい褐色土
36	にぶい褐色シルト (SD001-1)	82	褐色土 (遺物を大量に含む)
37	にぶい褐色シルト (SD001-1 36層よりやや暗い)	83	灰黄褐色土 (71・80・84層に近似する)
38	褐灰色粘質土 (SD001-3)	84	褐色土 (71・80・83層に近似する)
39	黒褐色土 (遺物包含層 45層と近似)	85	灰褐色土 (87層と近似する)
40	褐色土 (SK023 47層の小さいブロックが比較的多く認められる)	86	灰褐色土
41	灰褐色土 (炭および1~3cmのにぶい黄橙色土粒が混入する)	87	灰褐色土 (地山か)
42	にぶい黄橙色粘質土	88	黒褐色粘質土 (地山か)
43	褐色土	89	褐色粘質土 (SX031 橙色粘質土の小さいブロックや炭・焼土を含む)
44	にぶい黄橙色粘質土 (42層に近似する)	90	灰褐色土 (地山か)
45	黒褐色土 (遺物包含層)		
46	橙色土 (47層に近似 遺物・焼土が少量混じる均質な土 下面に砂・小石が認められる)		

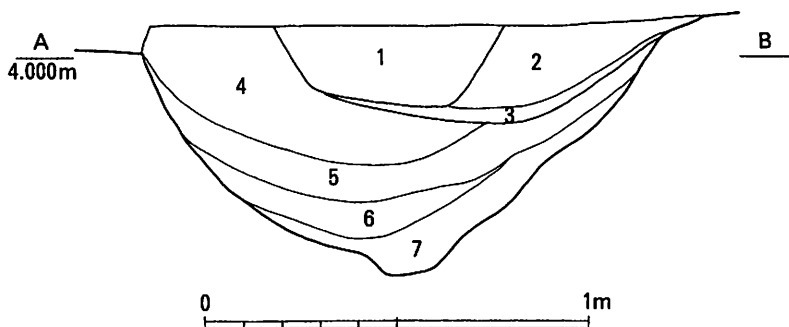


第1: 4図 第9次調査区Ⅱ区トレンチ土層断面図 (1/50)

第 8 章 中世大友府内町跡第 9 次調査区



が存在し続けていたことがわかる。また、「御所小路」に並行して東西に走るSD001をはじめ、SE028・SE029などの井戸や、井戸横の軟弱地盤を改良するためか、大量の土師質土器を廃棄したSX033や人頭大の石を組んだSX034が検出されている。また、明確に建物跡は確認できていないが、ピット群が100基前後検出されている。さらに、16世紀後葉～末葉でも最終段階には炭・焼土を含んだ埋土をもつ火災処理土坑が数多く営まれている特徴をもつ。



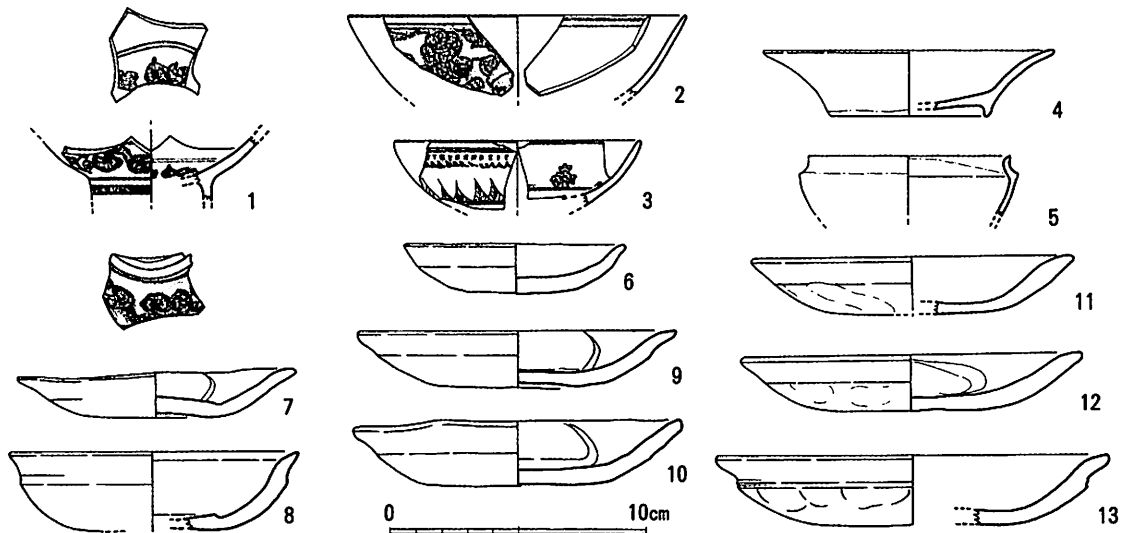
第125図 II区SD001-1・2・3土層断面図(1/20)

- 1 褐色土 (S001-3 京都系土師器をはじめとした多くの遺物を含む炭・焼土も多く含み、粘質で硬い土)
- 2 褐灰色砂質土(S001-2)
- 3 褐色シルト (S001-2 滞水状態をあらわす)
- 4 灰褐色シルト (S001-1 滞水状態をあらわす)
- 5 にぶい褐色シルト (S001-1)
- 6 にぶい褐色シルト (S001-1 5層よりやや暗い)
- 7 褐灰色粘質土 (S001-1)

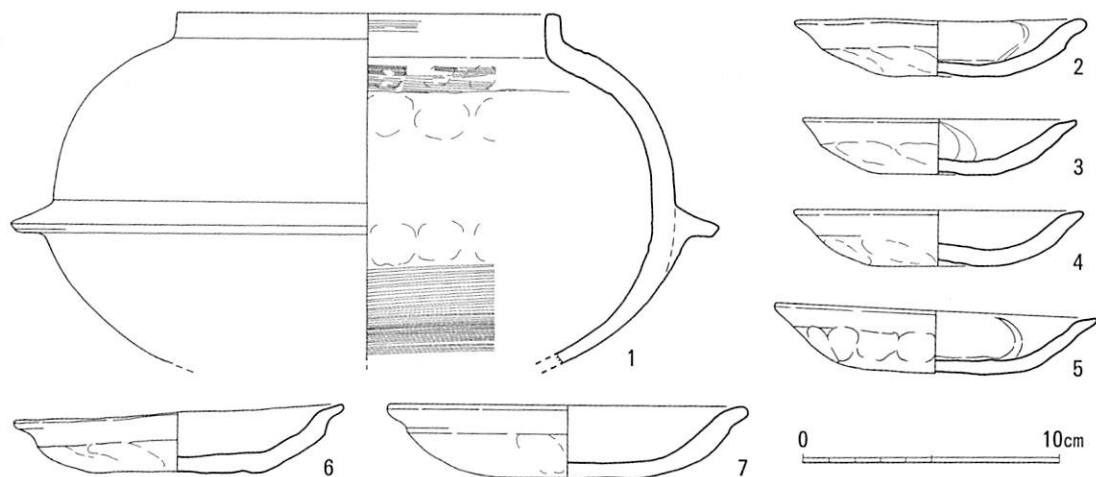
a. 溝

SD001 (第122・123・125図)

調査区南端のK24区・L24区・M24区に位置する。第9次調査区II区の南端に東西方向に走り、大友9次I・IV区に検出された道路遺構(I区SF14・IV区SF47)の北側につく側溝であると考えられる。幾段階の掘り返しが確認でき、古いものからSD001-1、SD001-2、SD001-3と3段階の溝が確認できている。幅25~100cm、深さ約20cmを測る最新のSD001-3は粘質で固い褐色土からなり、炭・焼土粒が含まれている。埋土中には塩地編年3期(16世紀後葉～末葉)に属する大量の京都系土師器の破片が含まれる。SD001-2は、断面U字状の溝である。褐灰色砂質土の埋土であり、下層にうすく褐色シルトが堆積しており、開溝時は一時、滞水状態にあったことがわかる。SD001-1は幅140~160cm、深さ70cmを測る断面V字状の溝である。褐灰色～にぶい褐色土の埋土であり、粘性がつよいため、



第126図 II区SD001-1・2出土遺物実測図(1/3)



第127図 II区SD001-3出土遺物実測図(1/3)

開溝時は一時、滞水状態にあったことがわかる。

これらの3時期の溝は、16世紀後葉～末葉に営まれている2基の井戸（SE028・SE029）により切られているが、出土遺物から16世紀後葉～末葉に存在していたことがわかる。

SD001出土遺物（第126～128図）

出土遺物は第126～128図に示した。第126図はSD001-1・2出土のものであり、第127図はSD

001-3出土のものである。SD001-1とSD001-2との遺物はどちらから出土したかは明確に判別できなかったが、明らかにSD001-1出土の遺物でも16世紀後葉～末葉におさまるものがみられるため、両者間に土器の型式差が認められるだけの時間差は確認できていない。

第126図1は中国漳州窯系青花碗である。小野分類C群の蓮子碗に分類できる。2は中国景德鎮窯系青花碗であり、外面に花文がみられる。3は中国景德鎮窯系青花皿であり、小野分類C群の碁笥底タイプの皿であり、外面に芭蕉文がみられる。4は白磁皿である。碁笥底を呈し、体部が外反して口縁に至る。5は蓋をもつ中国南方産褐釉陶器鉢である。外面に濃緑色、内面に褐色の釉がかけられ、蓋と合わせる部位は露胎のままである。6・7、9～13は京都系土師器皿である。その特徴から塩地編年1～3期に属するものが混在すると考えられる。8は京都系土師器坏である。その特徴から塩地編年3期に属する。

第127図1は瓦質土器羽釜である。底部にはススの付着が認められる。2～7は京都系土師器皿である。その特徴から塩地編年1～3期に属するものが混在すると考えられる。

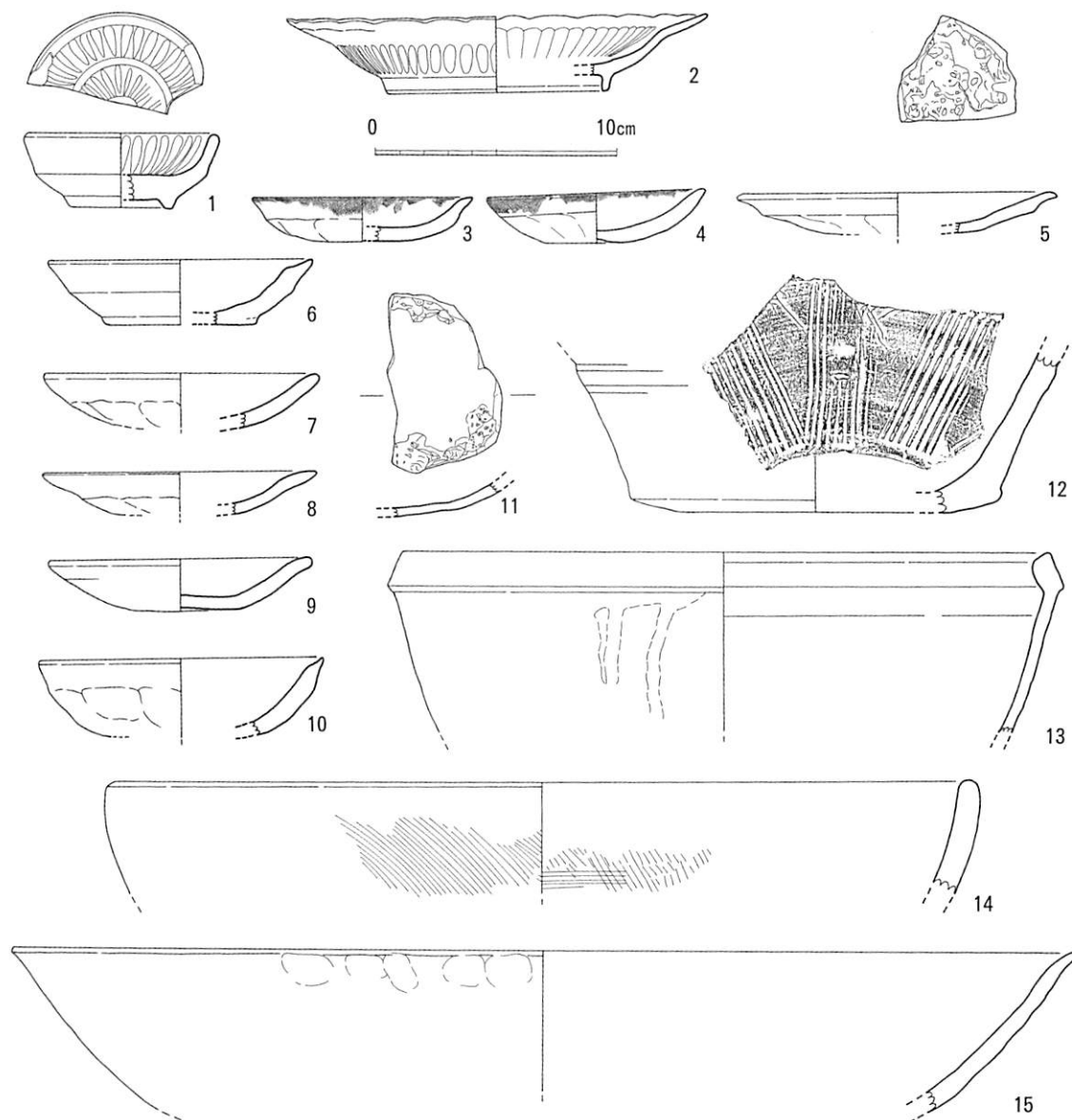
第128図は銅銭である。「熙寧元寶」（1068年初鑄）である。

SD002（第123・124図）

調査区南東端のM24区に検出された緩やかにカーブする上幅2m以上、床幅1m以上、深さ0.8m程度の溝である。SD001を切るSE029を切っているため、これらより新しく、また、SD002埋没後にSK023が営まれており、これらの出土遺物がいずれも16世紀後葉～末葉に帰属するため、短期間での遺構群の消長が考えられよう。埋土中には砂層が互層に重なり確認でき、水流を伴う滞水状態にあった溝であることがわかる。このSD002は両端とも調査区東側に延びている。



第128図 II区SD001-1・2出土銭貨(1/1)



第129図 II区SD002出土遺物実測図 (1/3)

SD002出土遺物 (第129・130図)

出土遺物は第129・130図に示した。1は中国龍泉窯系青磁小碗である。内面には丸ノミ状施文具で蓮弁を表現している。2は白磁皿であり、口縁部を幅広く折り、端部は稜花状に仕上げている菊花皿である。3・4、7～9は京都系土師器皿であり、3・4に関しては内外面に多量のススが付着している。5・11は京都系土師器皿であり、取瓶として再利用されており、内面に付着物が大量に認められ、また、器壁の色調も青灰色に変色している。6は土師質土器皿であるが、体部から口縁部にかけての形態は、京都系土師器皿の影響をうけており、折衷形といえるものである。12は備前系陶器擂鉢であり、放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。13



第130図 II区SD002下層出土銭貨 (1/1)

は中国南部産焼締陶器鉢である。器壁は薄く、口縁は幅広い台形状の縁帯を設けている。14は瓦質土器鉢であり、体部内外面にはナメ方向の粗いハケ目がみられる。外面には粗くスガが付着している。15は土師質土器鍋であり、内面にはナデ調整がみられるが、外面には指オサエや粗いナデがみられる。外面にはスガが付着する。

第10図は銅銭である。「皇宋通寶」（1038年初鑄）である。

b. 土坑

SK003 (第131図)

調査区中央より、やや南西側のL24区に位置する。長径1.3m、短径0.9m、深さ0.25mを測る楕円形の浅い皿状を呈する土坑である。埋土は上層が炭・焼土が多く混入する褐色土からなり、また、下層には灰を非常に多く含む灰褐色土が厚く堆積し、火災処理を目的として掘削された土坑であることがわかる。埋土中には土器類の他に拳大～人頭大の川原石がみられ、遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。

SK003出土遺物 (第132図)

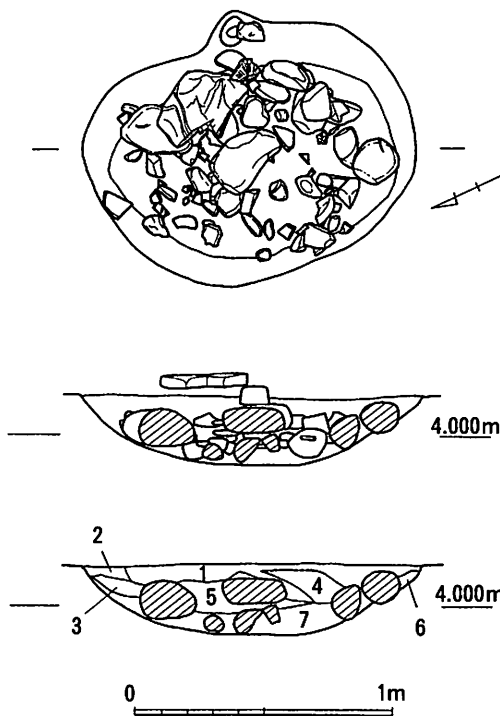
出土遺物は第132図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。4は罇であり、一面にコビキ痕が残る。5は丸瓦であり、凸面には長軸方向にナデが、また、内面には布目痕が残されている。6は結晶片岩製の砥石であり、扁平な両面に使用痕が残されている。

SK004 (第133図)

調査区中央より、やや西側のK23区・L23区に位置する。長径1.6m、短径0.7m最深約0.65mを測る隅丸長方形土坑である。埋土は焼土・炭を非常に多く含む褐色土であり、中には焼土塊もみられる。土器類とともに拳大～人頭大の川原石が出土している。炭・焼土がきわめて大量であることや、埋土中の川原石が焼成により赤変していることなど、火災処理を目的として掘削された廃棄土坑であることがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかり、中でも特筆すべき事は、焼土化した壁土塊や完形の石臼が川原石に混じってみられることである。

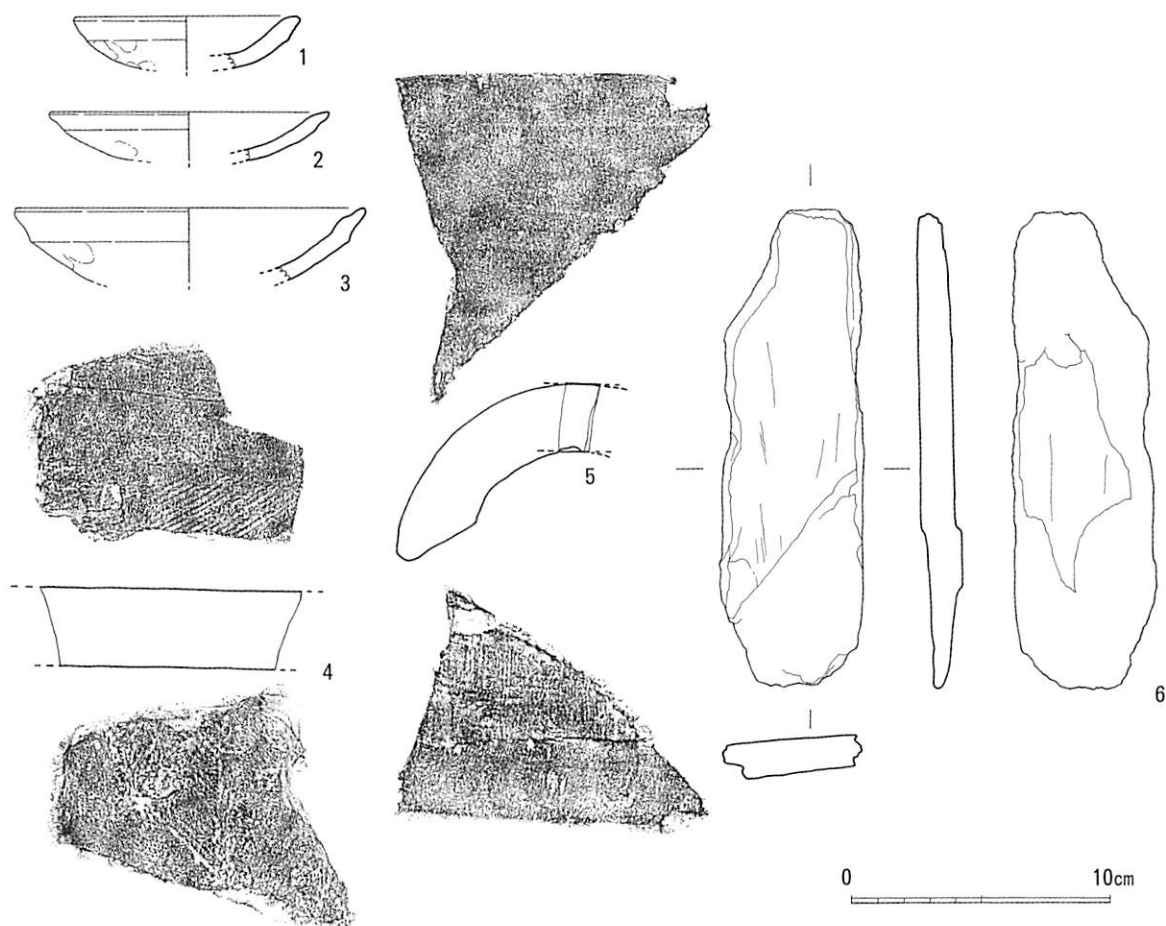
SK004出土遺物 (第134～136図)

出土遺物は第134～136図に示した。第134図1は中国景德鎮窯系青花碗である。小野分類E群の饅頭心碗に分類できる。見込みには花文が、また、高台内には字款が描かれている。2・3は中国景德鎮窯系青花皿である。小野分類B群におさまり、口縁端反りの形態をもつ。4は白磁小杯である。5は備前系陶器皿である。6は土師器香炉である。18は土師質土器の取瓶であるが、高温によるため灰黒色の色調を呈する。内面には緑青をはじめとした付着物が認められる。7～17は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。19・20は京都系土師器坏であり、その



第131図 II区SK003実測図 (1/30)

- 1 褐色土 (炭・焼土を含む)
- 2 褐色土 (焼土・炭を少量含む)
- 3 淡褐色土 (わずかに粘性を帯びる)
- 4 灰
- 5 灰褐色土 (灰を非常に多く含む)
- 6 灰褐色土 (灰を非常に多く含む)
- 7 褐色土



第132図 II区SK003出土遺物実測図(1/3)

特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。

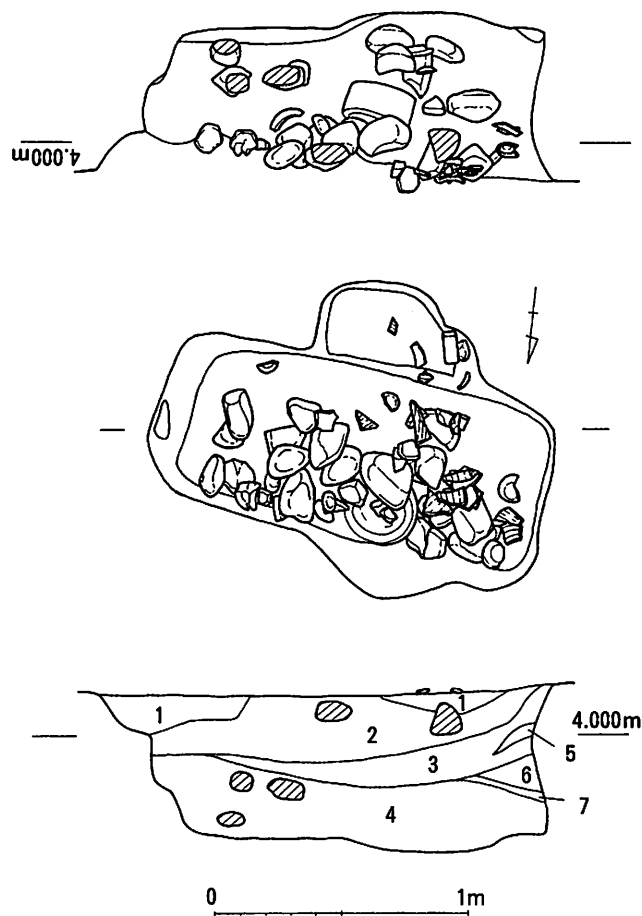
第136図1はタイ産メナムノイ窯系焼締陶器であり、頸部の耳が欠失しているが、四耳壺になるものと考えられる。2は備前系陶器水屋甕である。3は丸瓦片であり、凸面に縄目叩き痕が、また、凹面に布目痕がみられる。

第135図は安山岩製石臼の上臼である。完存で挽き手孔・軸受孔・ものくばり穴すべて良な形態で残る。磨面は摩滅が著しく、多くの溝が消滅している。かろうじて残った溝から、分画数は8分画で副溝は3条存在していたものと考えられる。

#### SK005 (第137図)

調査区中央より、やや北西側のL24区に位置する。長径1.3m、短径0.8m、最深約0.35mを測る瓢箪形の不定円形土坑である。埋土は微細な焼土・炭を非常に多く含む褐色土であり、中には径3cm程度の焼土塊もみられる。土器類とともに拳大～人頭大の川原石が出土しており、火災処理を目的として掘削された廃棄土坑であることがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。





第133図 II区SK004実測図(1/30)

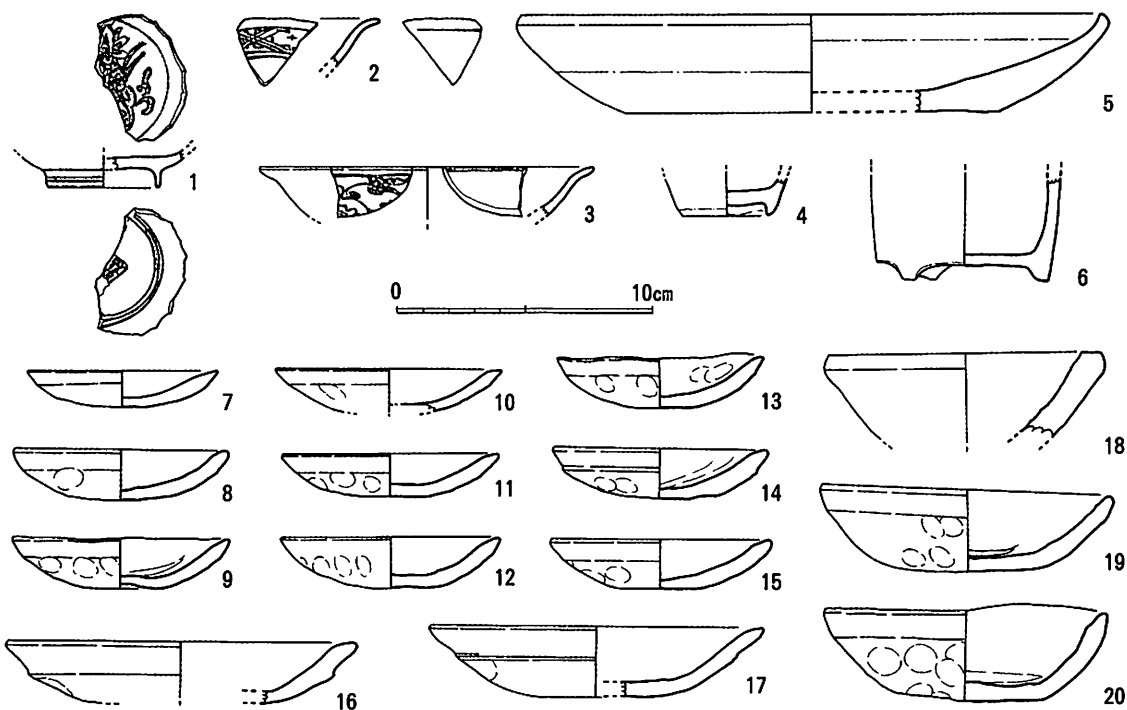
- 1 褐色土(小さい炭・焼土をわずかに含む)
- 2 焼土・炭(焼土・炭ともブロックが大きい)
- 3 褐色土(小さい炭・焼土をわずかに含む)
- 4 焼土・炭(2層よりも焼土・炭ともブロックが小さい)
- 5 焼土・炭(4層よりも焼土・炭ともブロックが小さい)
- 6 焼土・炭(4層に近似する)
- 7 炭・灰

SK005出土遺物(第138図)

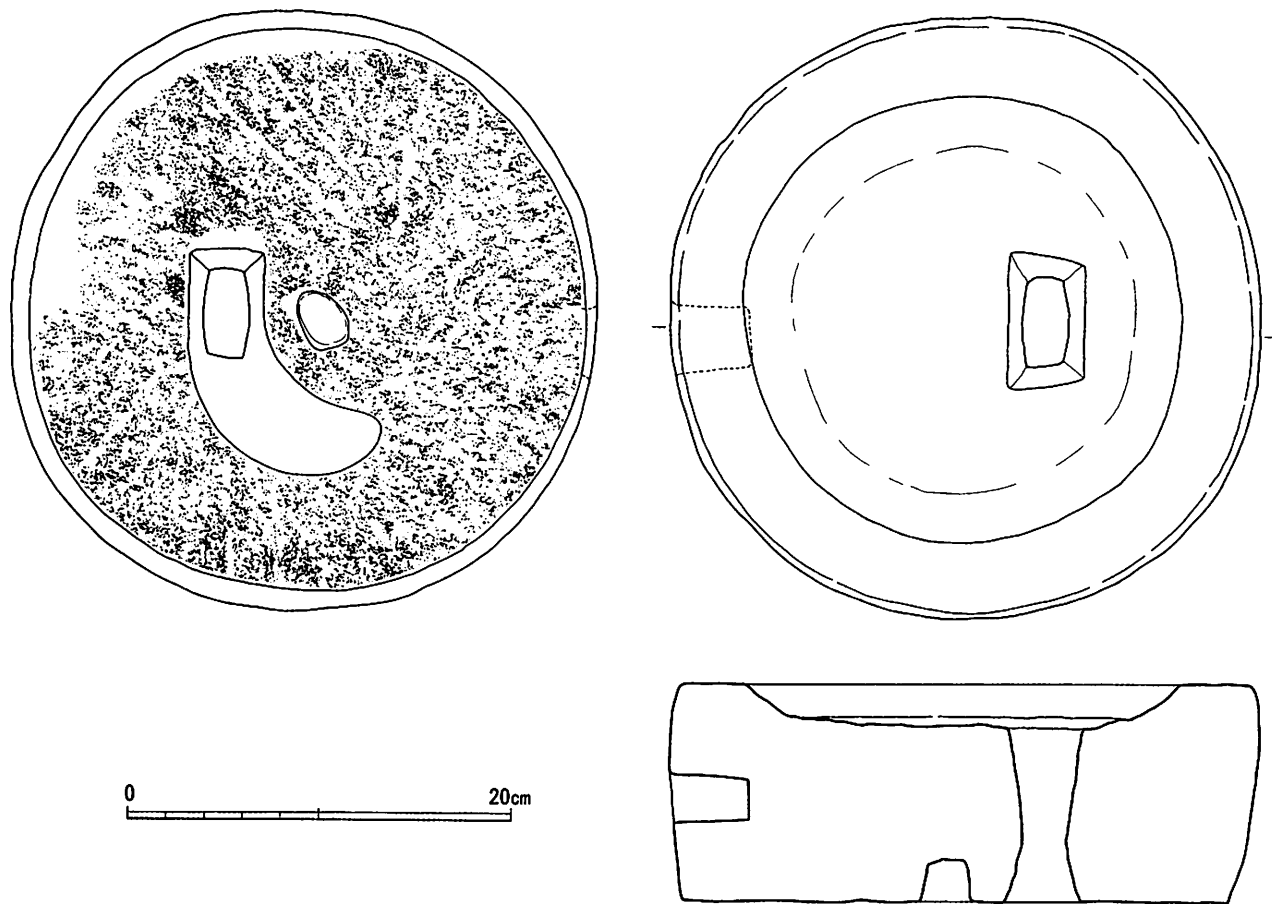
出土遺物は第138図に示した。1は中国景德鎮窯系青花碗である。2は中国産青花碗である。3は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。4と同一個体と考えられ、いずれも、火災により2次焼成を受けている。4の高台内には字款が描かれている。5～7は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。8はベトナム産焼締陶器長胴壺である。青灰色の色調を帯び湾曲して立ち上がる口縁をもち、口唇部外面を肥厚させている。肩部に2条、胴部に1条の細い沈線が確認できる。

SK006(第122図)

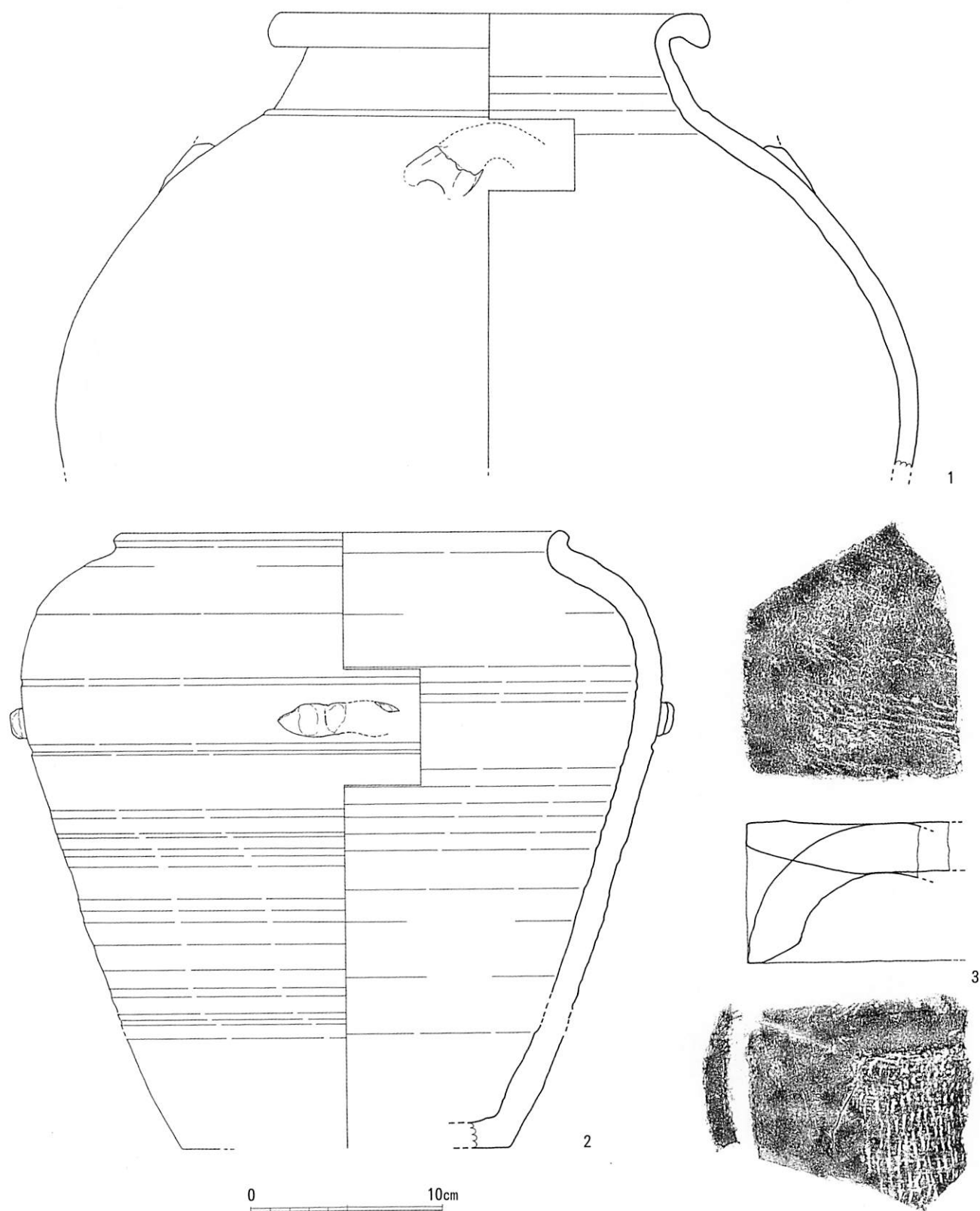
調査区中央より、やや南西側のK24区に位置する。長径0.95m、短径0.4m、最深約0.6mを測る長方形土坑である。ほぼ垂直に掘り下げられ、上層に褐色土がみられるが、中下層はにぶい黄褐～褐色を呈する軟質な砂質土のみの均質な埋土であり、当遺跡中、きわめて異質な遺構埋土であり、礫は含まれない。SK006はSD001と肩がほぼ接しているが、切り合い関係が確認できるものではなかった。



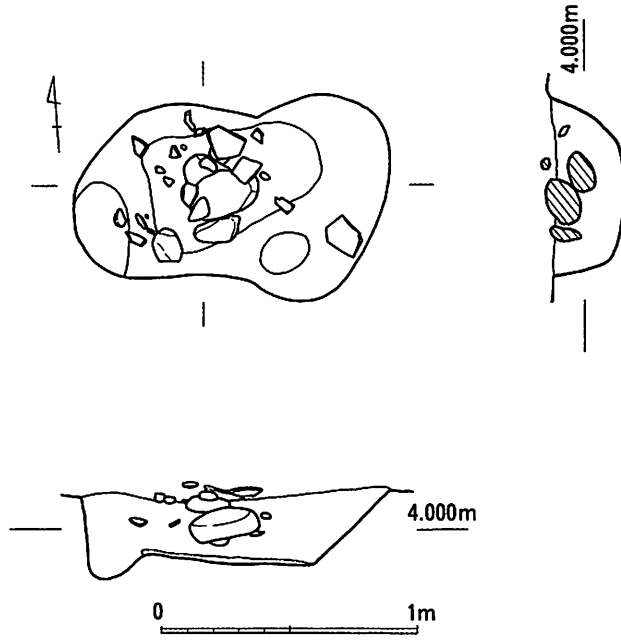
第134図 II区SK004出土遺物実測図① (1/3)



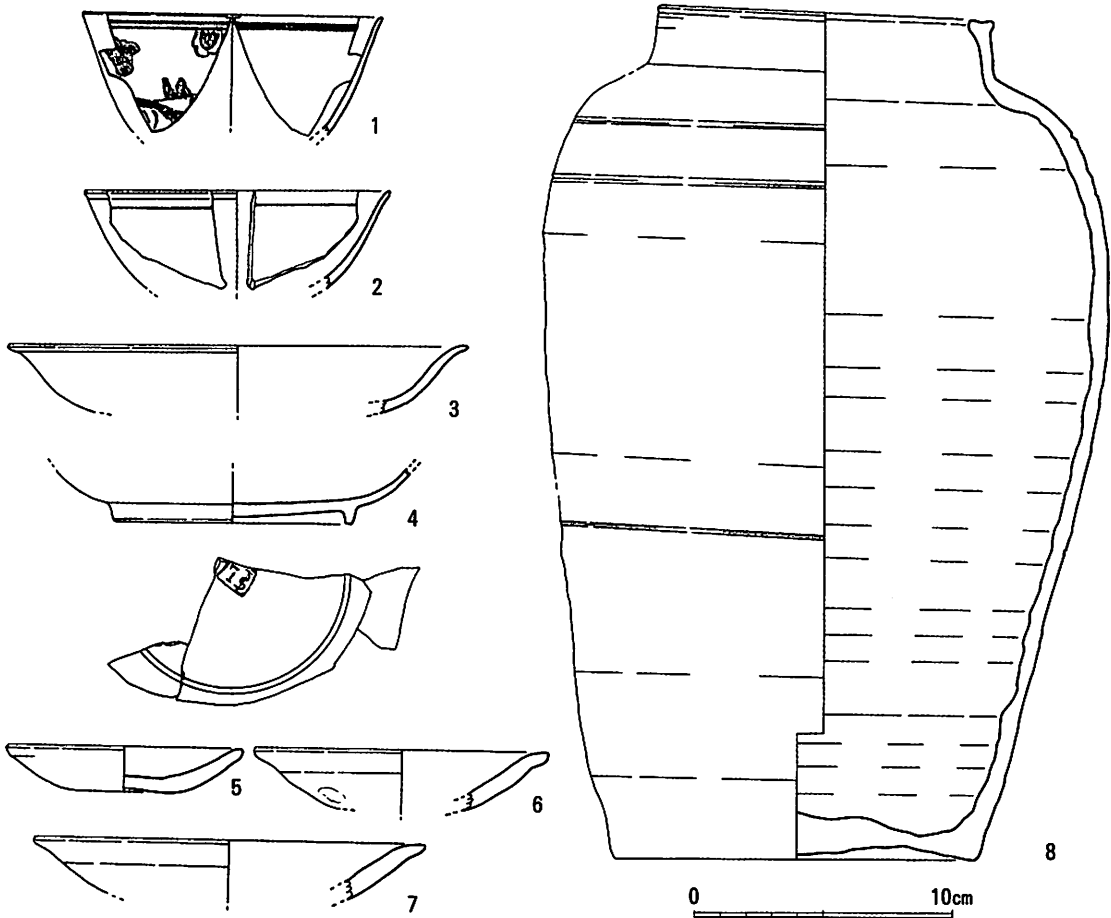
第135図 II区SK004出土遺物実測図② (1/4)



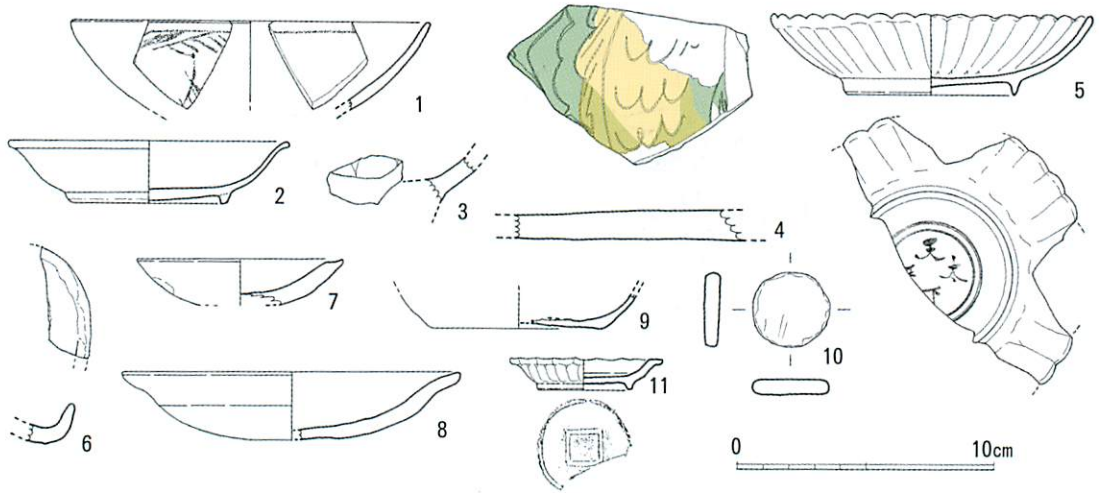
第136図 II区SK004出土遺物実測図③ (1/3)



第137图 II区SK005実測図 (1/30)



第138图 II区SK005出土遺物実測図 (1/3)



第139図 II区SK006出土遺物実測図(1/3)

SK006出土遺物(第139図)

出土遺物は第139図に示した。1は中国漳州窯系青花碗である。2は口縁端反りの形態をもつ白磁皿である。3・4は華南三彩盤の破片であり、同一個体である可能性が高い。内面に刻花が認められ、黄釉・緑釉が施されている。外面は露胎のままである。5は中国景德镇窯系白磁の菊皿である。高台内には2重圏線内に「天下太平」の吉祥句がみえる。6は京都系土師器小皿の体部両側を内に押し込んで成形した耳皿である。7・8は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。9は在地系土師質土器坏であろうが、器壁が薄い特徴をもつ。10は土師質土器片を円盤状に加工したものである。11は中国産翡翠釉菊花小皿であり、高台内には型押し of 2重の方形輪郭がみられる。

SK007(第140図)

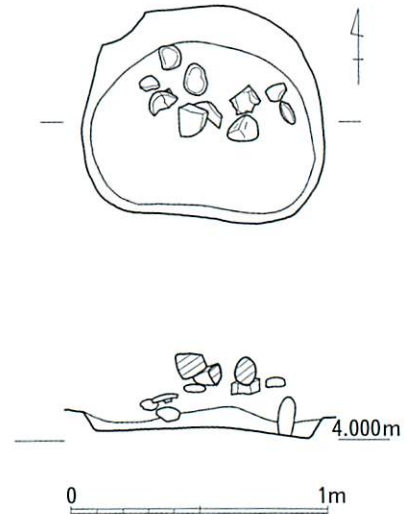
調査区中央より、やや南側のK24区・L24区に位置する。長径0.95m、短径0.85m、深さ約0.15mを測る浅い皿状の円形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。

SK007出土遺物(第141図)

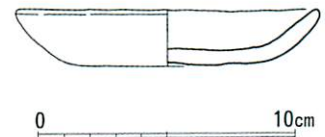
出土遺物は第141図に示した。京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。

SK008(第142図)

調査区中央より、やや西南側のL24区に位置する。長径1.35m、短径1.1m、深さ約0.25mを測る浅い皿状の隅丸方形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。



第140図 II区SK007実測図(1/30)



第141図 II区SK007出土遺物実測図(1/3)

SK008出土遺物 (第143図)

出土遺物は第143図に示した。1は中国産青花皿であり、内外面の口縁付近および見込み付近にそれぞれ圈線がみられる。2は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもち、見込みには輪状の釉剥ぎが認められる。3は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、削り出し輪高台を呈し、高台周辺には錆釉が施されている。4は備前系陶器鉢である。5～10は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。

SK009 (第144図)

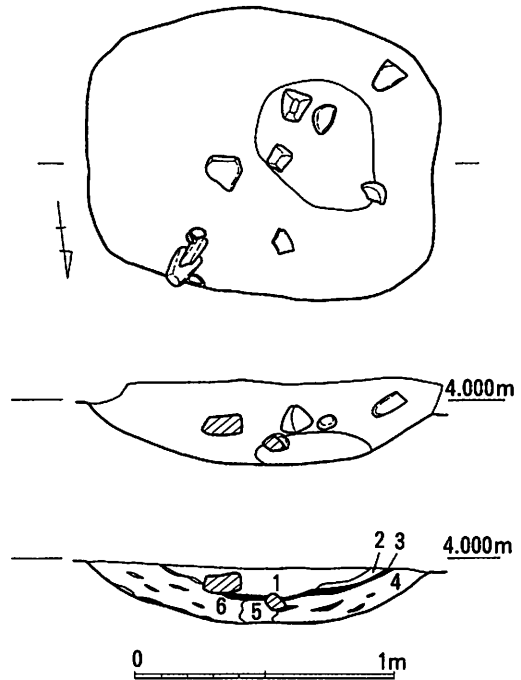
調査区中央より、やや南側のL24区に位置する。長径1.35m、短径1.1m、深さ約0.25mを測る浅い皿状の長楕円形土坑である。出土遺物は比較的少なく、わずかな土器類とともに拳大の礫が少量出土している。

SK009出土遺物 (第145図)

出土遺物は第145図に示した。1は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台に大量に砂が付着している。2は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。

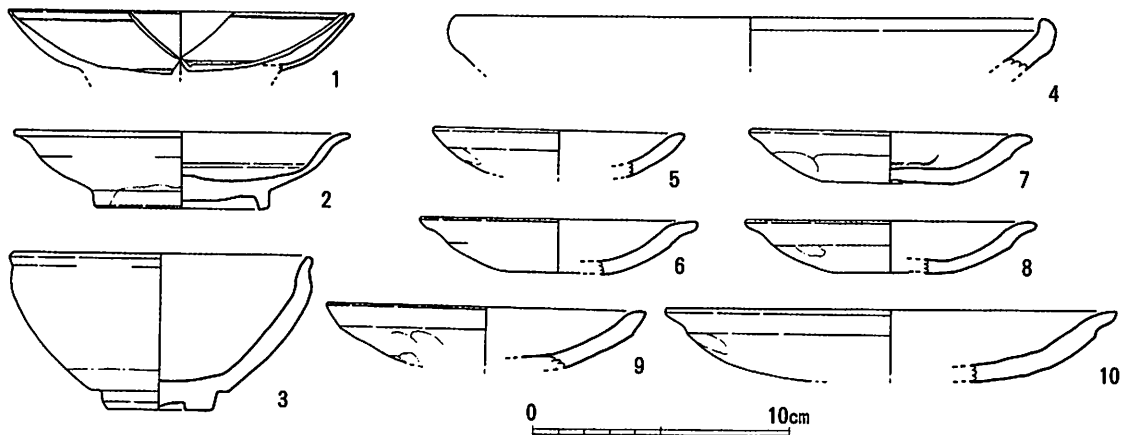
SK010 (第146図)

調査区中央より、やや北側のL23区・L24区に



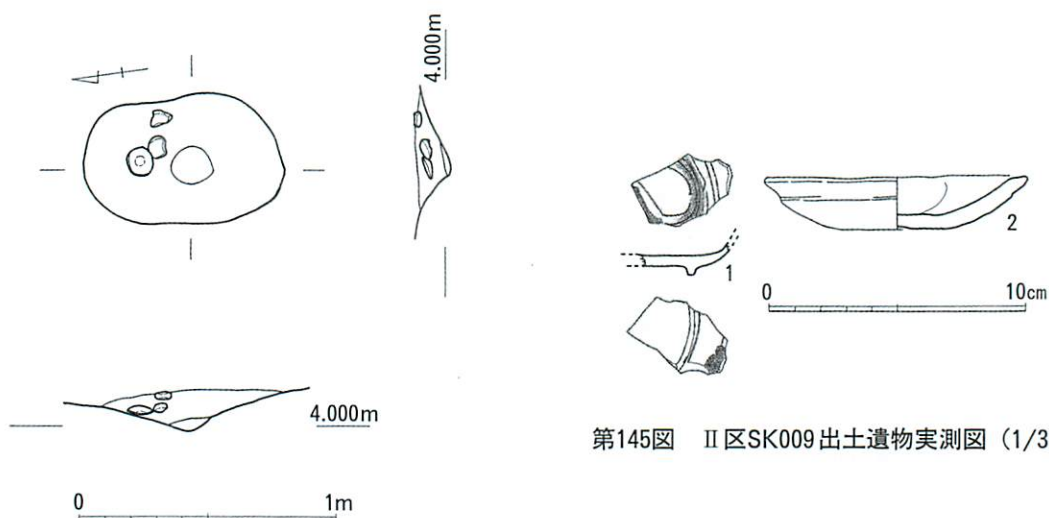
第142図 II区SK008実測図 (1/30)

- 1 褐灰色粘質土
- 2 にぶい橙色粘質土
- 3 黒色粘質土
- 4 明褐灰色粘質土
- 5 にぶい黄褐色粘質土
- 6 褐灰色粘質土



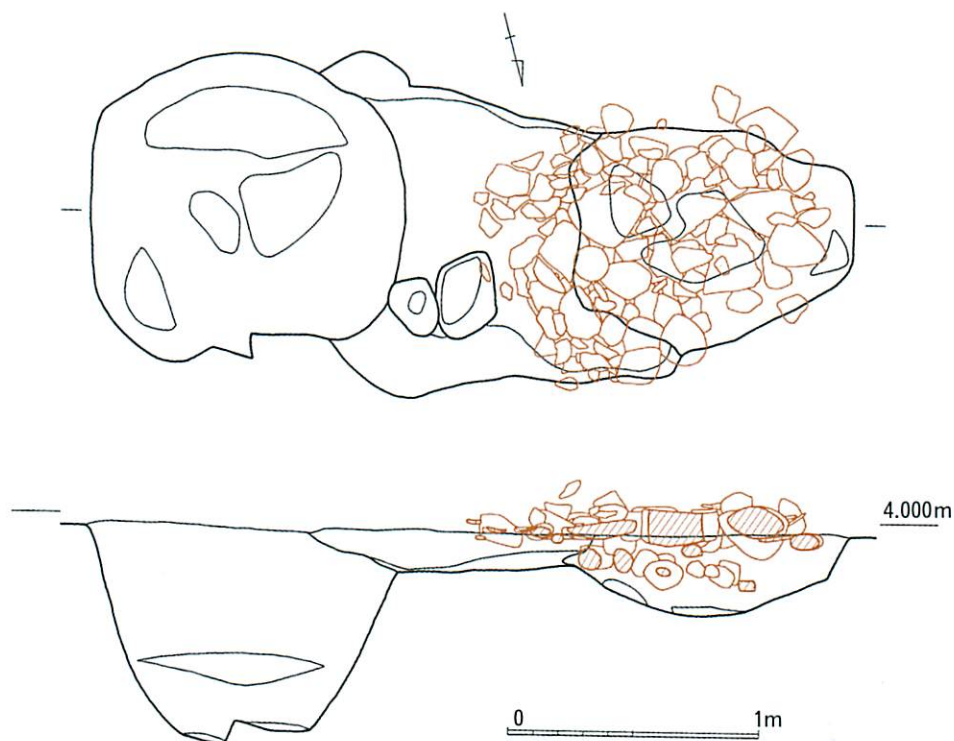
第143図 II区SK008出土遺物実測図 (1/3)

位置する。長径3.1m、短径1.2m、最深約0.8mを測る不定形の土坑である。数基の土坑が切り合っているものと考えられるが、埋土からそれぞれの土坑単位が確認できず、近接した時期に廃棄土坑として掘り返されたものと考えられる。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土坑西側部分からは土器類とともに拳大～人頭大の川原石がきわめて大量に出土しているが、東側の深い土坑部分からは、川原石の出土はほとんど確認できなかった。



第145図 II区SK009出土遺物実測図(1/3)

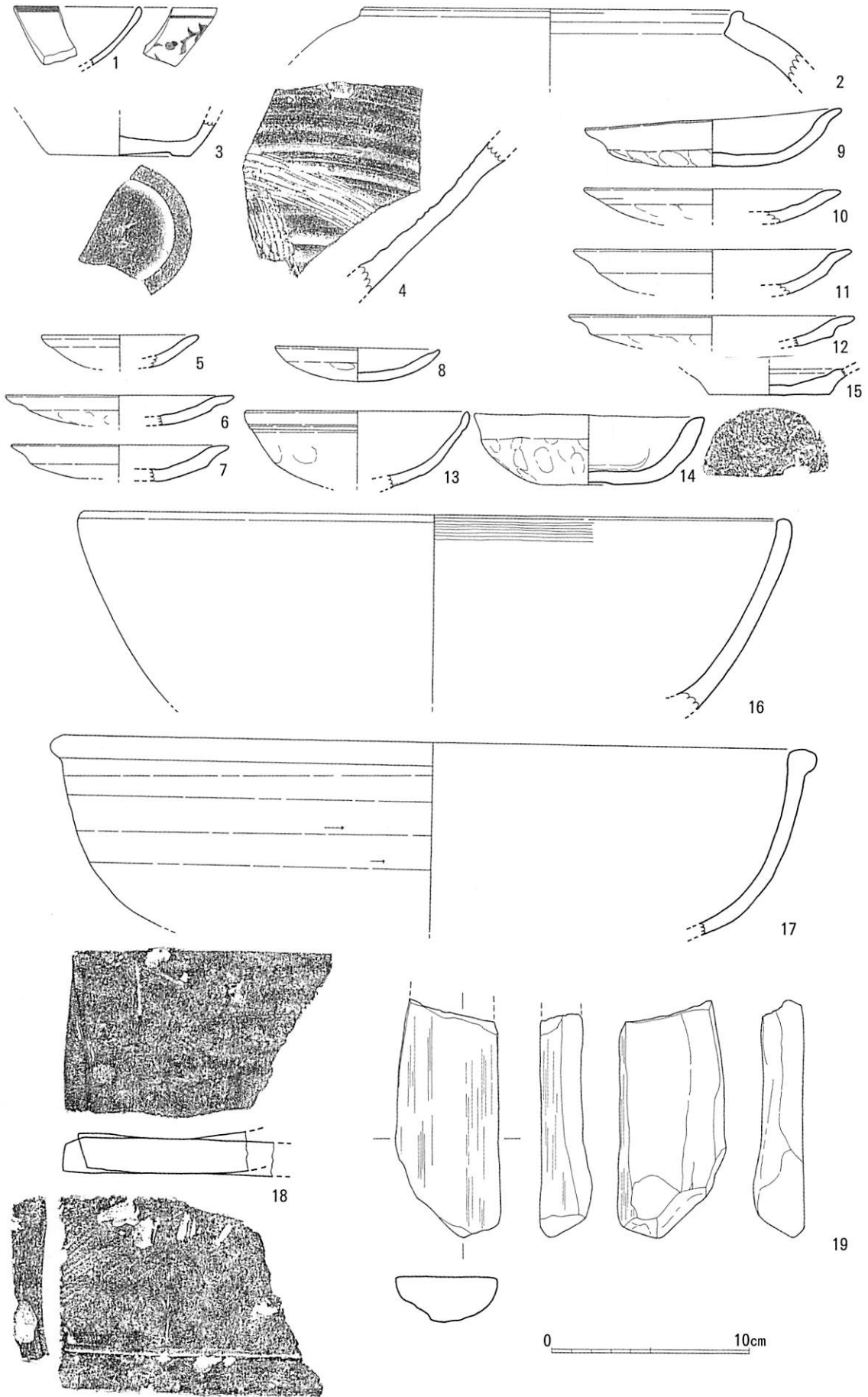
第144図 II区SK009実測図(1/30)



第146図 II区SK010実測図(1/30)

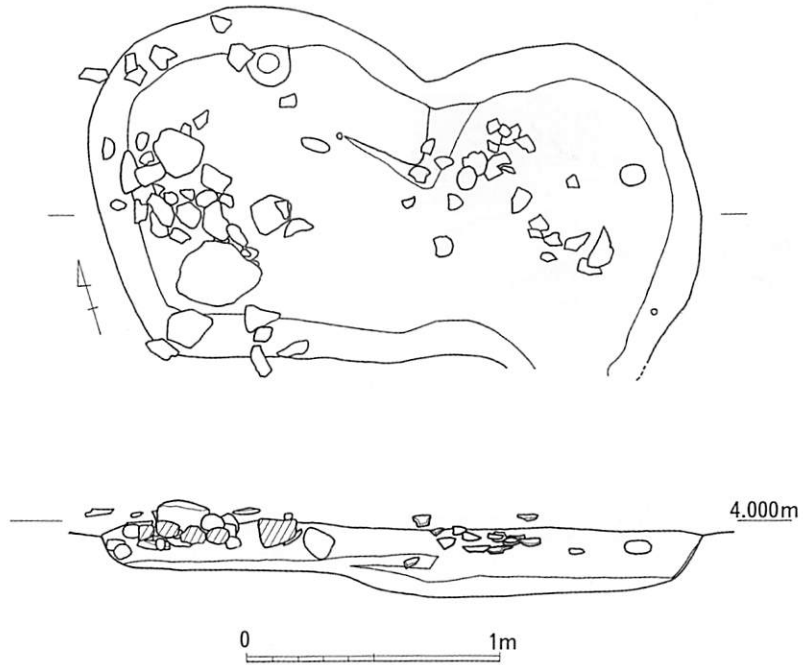
SK010出土遺物(第147図)

出土遺物は第147図に示した。1は中国産青花皿であり、内外面の口縁付近にそれぞれ圏線がみられ、外面には唐草文がみえる。2は備前系陶器壺である。無頸であり、口縁部に蓋受けを設ける形態をもつ。3は焼締陶器壺であり、幅広い高台を削り出し、削り出し後、ナデ調整されている。高台内中央には小さくヘラ記号が見られる。4は備前系焼締陶器播鉢である。放射状スリメに加えて、ナナム方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。5~12は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。13は土師質土器碗であると考えら

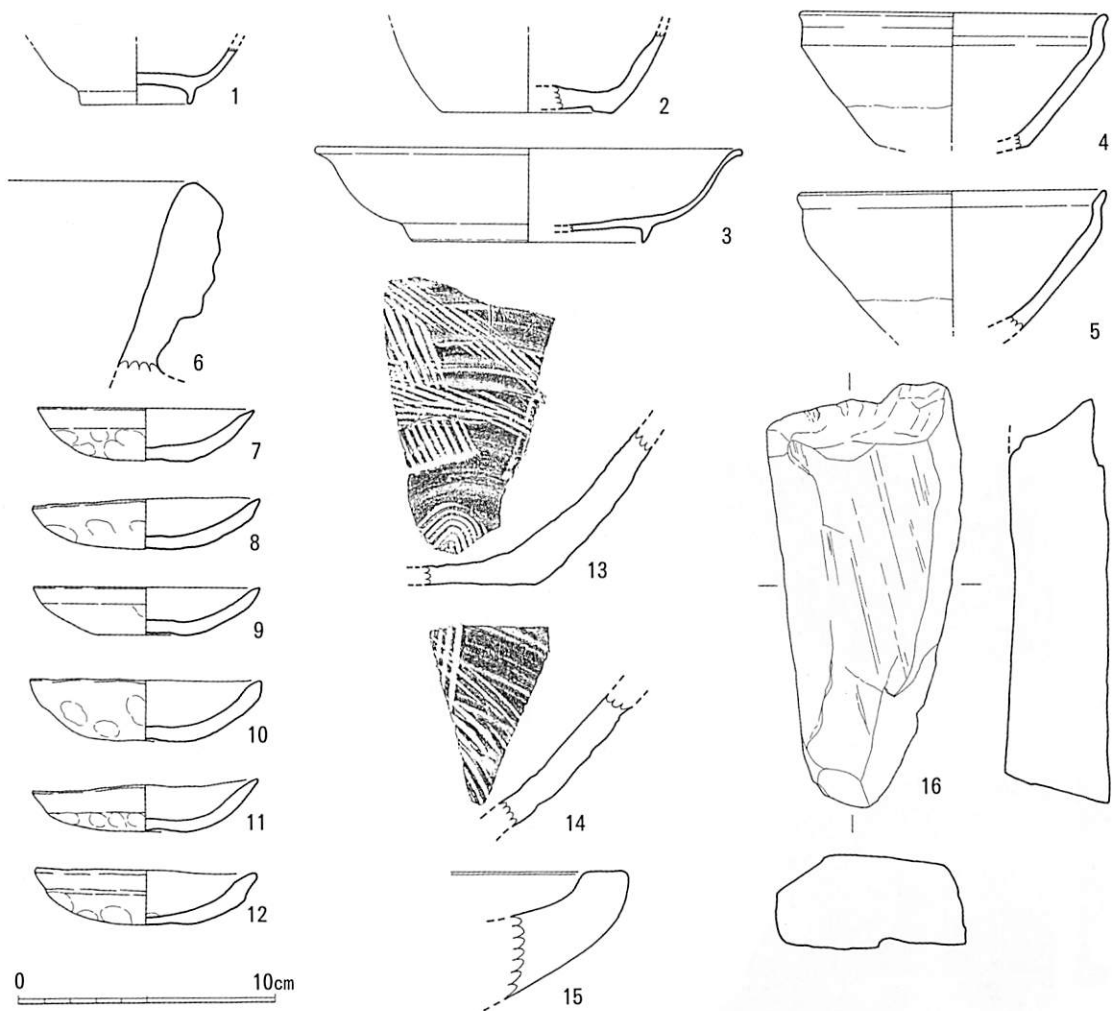


第147図 II区SK010出土遺物実測図(1/3)

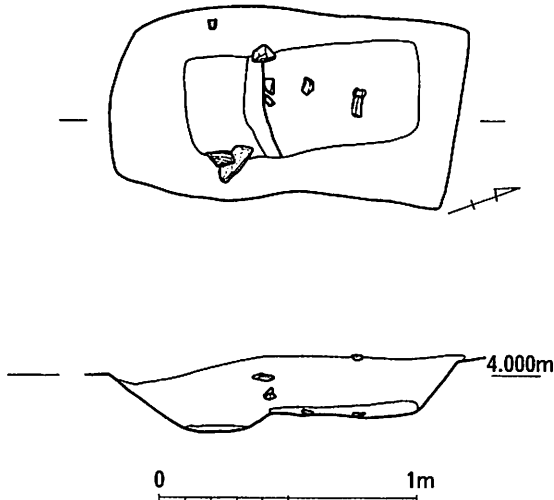




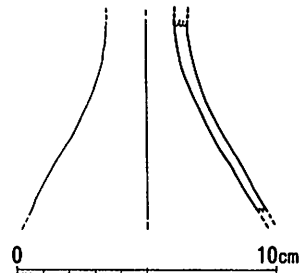
第148図 II区SK011実測図 (1/30)



第149図 II区SK011出土遺物実測図 (1/3)



第150図 II区SK012実測図(1/30)



第151図 II区SK012出土遺物実測図(1/3)

れる。体部が丸い形態をもち、口縁付近外面は丸く膨らませてナデにより仕上げられており、それ以下は指オサエにより整形されている。14は京都系土師器坏であり、器壁が厚い。15は土師質土器皿片であるが、先行した遺構から混入したものであろう。16は土師質土器鉢であり、体部を丸く仕上げ、内外面に丁寧なナデを施し、口縁部内面には横方向の刷毛を施している。17は瓦質土器鍋であり、体部を丸く仕上げ、口縁部外面を丸く肥厚している。調整は内面に丁寧なナデを、外面に横方向のケズリを施している。18は平瓦であり、内面には緩弧線が残る。19は結晶片岩製砥石であり、4面とも砥面として使用痕が認められる。

**SK011 (第148図)**

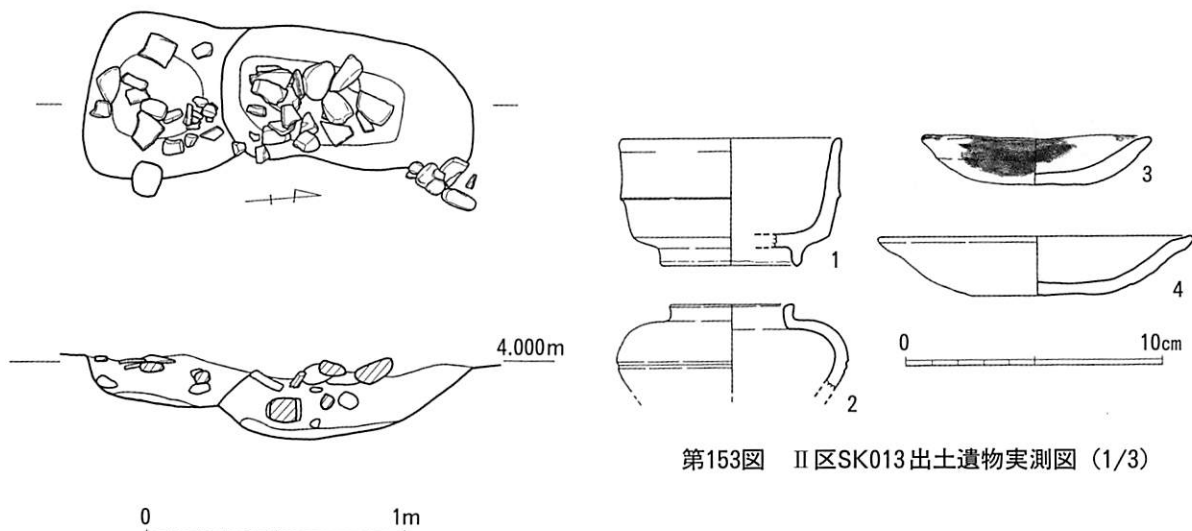
調査区中央より、やや北側のL23区に位置し、SK010の北に接続する。長径2.3m、短径1.4m、最深約0.27mを測る長楕円形の土坑である。SK010・024と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に廃棄土坑として存在していたものと考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土坑西側部分からは土器類とともに拳大～人頭大の川原石がきわめて大量に出土しているが、東側の深い土坑部分からは、川原石の出土はほとんど確認できず、土器類の出土が主体であった。

**SK011出土遺物 (第149図)**

出土遺物は第149図に示した。1は磁器碗の底部片であり、饅頭心の形態をもつ。2は備前系焼締陶器徳利である。3は白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。4・5は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、体部が直線的に開く形態をもつ。6は備前系焼締陶器甕の口縁部片である。7～12は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。13・14は備前系焼締陶器播鉢である。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。15は石臼の下臼である。16は結晶片岩製砥石であり、1面のみ砥面として使用している。

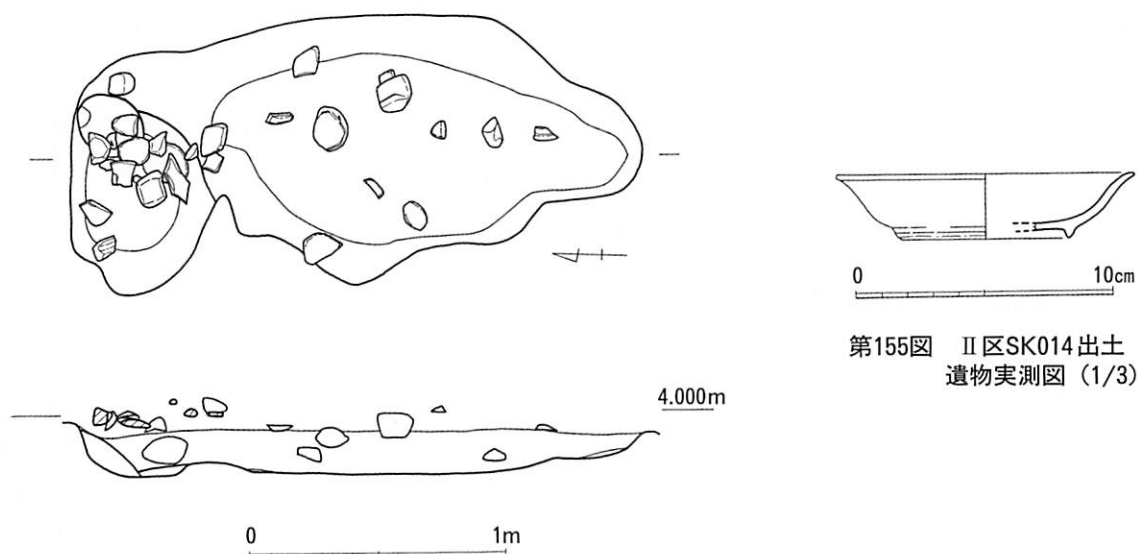
**SK012 (第150図)**

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.4m、短径0.75m、最深約0.3mを測る長方形土坑である。SK010・011と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に廃棄土坑として存在していたものと考えられる。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であるが、SK010・011に比較すれば川原石の出土がほとんどみられなく、土器類の出土が主体であった。図化できた遺物は1点のみであるが、細片の遺物を観察した場合、16世紀後葉～末葉に帰属する遺構であることがわかる。



第153図 II区SK013出土遺物実測図(1/3)

第152図 II区SK013実測図(1/30)



第155図 II区SK014出土遺物実測図(1/3)

第154図 II区SK014実測図(1/30)

SK012出土遺物(第151図)

出土遺物は第151図に示した。備前系焼締陶器徳利の胴部上半から頸部にかけての破片である。

SK013(第152図)

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.5m、短径0.65m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。SK014に隣接し、SK010・011・012と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられる。しかも、SK013内には2基とも捉えられる土坑単位が存在するものの、埋土等から別遺構として把握できなかった。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土器類とともに拳大よりやや大きな川原石がSK013北側部分より出土しているが、これは、土坑単位を示しているものかもしれない。

**SK013出土遺物（第153図）**

出土遺物は第153図に示した。1は白磁の香炉である。高台壘付以外には全面に白濁した釉がかけられている。直立した体部中央には小さい突帯が見られる。2は備前系焼締陶器小壺である。横に広く膨らみ、口縁は小さく直立する形態をもつ。3・4は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。3には内外面にススが厚く付着している。

**SK014（第154図）**

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径2.3m、短径1.05m、最深約0.25mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK013に隣接し、SK010・011・012と様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。しかも、SK014内には2基とも捉えられる土坑単位が存在するものの、埋土等から別遺構として把握できなかった。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、土器類とともに拳大よりやや大きな川原石がSK014北側部分に集中して出土しているが、これは、土坑単位を示しているものかもしれない。図化できた遺物は1点のみであるが、細片の遺物を観察した場合、16世紀後葉～末葉に帰属する遺構であることがわかる。

**SK014出土遺物（第155図）**

出土遺物は第155図に示した。白磁皿であり、口縁端反りの形態をもつ。

**SK015（第122図）**

調査区中央より、やや北西側のL23区・L24区に位置する。長径0.66m、短径0.62m、最深約0.24mを測る隅丸方形の土坑である。SK013に隣接し様相がほぼ同じであるため、上半部が削平された同一遺構か、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられる。遺物は2点の瓦質土器が出土したのみで、図化しうるものは見られなかった。

**SK016（第123図）**

調査区中央より、やや北西側のL23区に位置する。長径1.24m、短径0.75m、最深約0.20mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK011・014・017に隣接しと様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。遺物は確認できていない。

**SK017（第123図）**

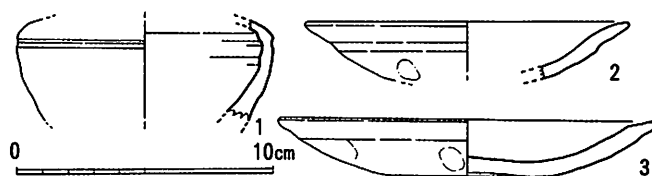
調査区中央より、北西側のL23区に位置する。最深約0.30mを測る長楕円形の不定形土坑であり、北側は調査区外のⅢ区SK029に延びる。SK016に隣接し、様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられ、同一遺構として把握すべきものかもしれない。

**SK017出土遺物（第156図）**

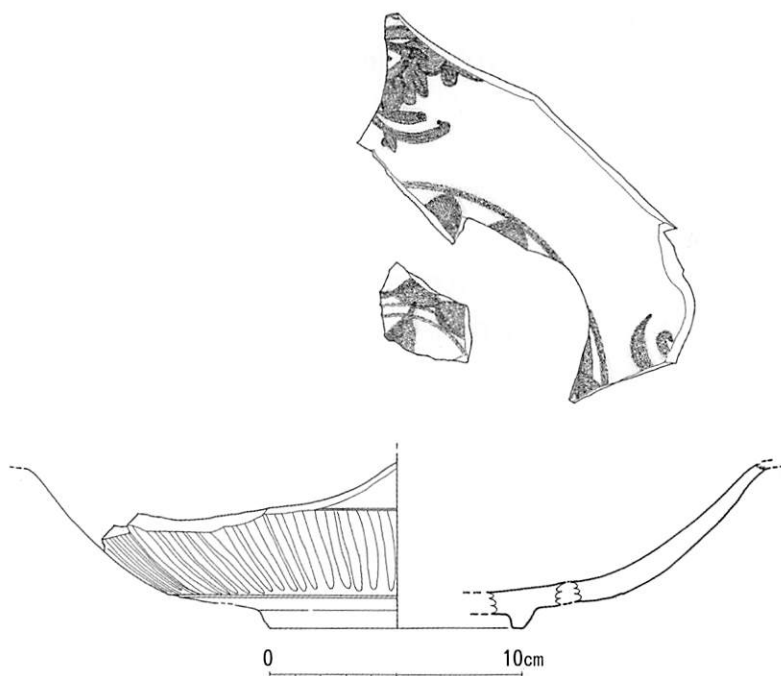
出土遺物は第156図に示した。1は備前系焼締陶器小壺であり、胴部最大径部に沈線を廻らせている。2・3は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。

**SK018（第123図）**

調査区中央より、東北側のL23区・M23区に位置する。最深約0.07mを測る長楕円形の不定形土坑である。SK024に隣接し、様相がほぼ同じであるため、近接した時期に掘削された廃棄土坑と考えられるが、出土遺物は極めて乏しい。



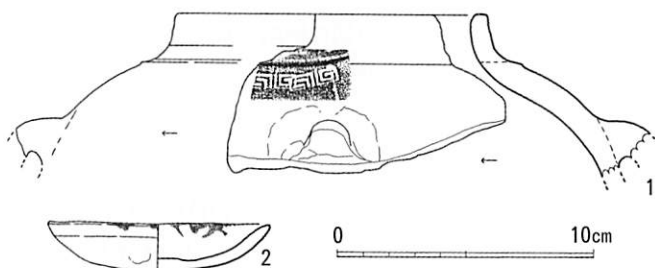
第156図 II区SK017出土遺物実測図（1/3）



第157図 II区SK018出土遺物実測図(1/3)

SK018出土遺物(第157図)

出土遺物は第157図に示した。中国漳州窯系青花の大型の皿である。口縁は外反し、外面には胴部の上下に沈線を廻らし、その間に縦方向の縞を連続させる。高台及び高台内面にも施釉しており、高台畳付けには大量の砂が付着している。



第158図 II区SK019出土遺物実測図(1/3)

SK019(第123図)

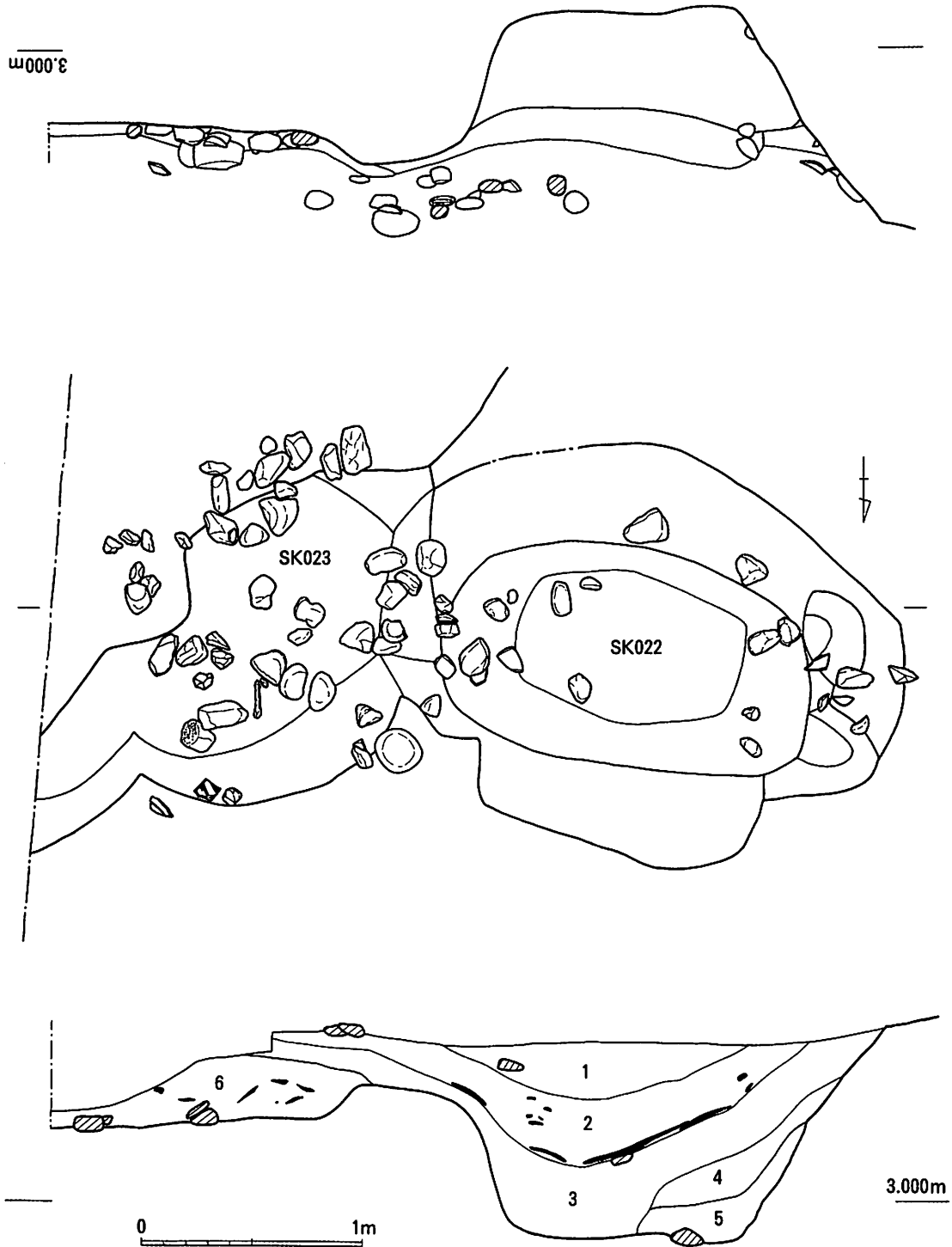
調査区中央より、東北側のM23区・M24区に位置する。長径0.8m、短径0.4m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。出土遺物は乏しい。

SK019出土遺物(第158図)

出土遺物は第158図に示した。1は瓦質土器釜である。外面口縁下に連続する雷文のスタンプが見られる。また、肩部には縦方向の把手が付けられている。2は京都系土師器皿であり、口縁部にススが厚く付着している。

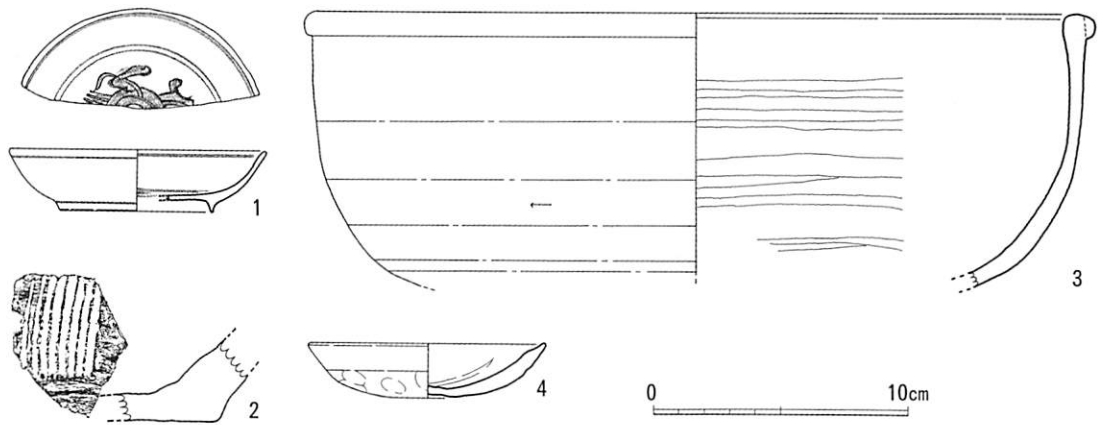
SK022(第159図)

調査区中央より、やや西側のM24区に位置する。長径2.2m、短径1.8m、最深約1.1mを測る長楕円形の土坑である。土層観察からSK23を切っていることが分かる。下層には灰色系の粘質土が堆積しており、埋没前には滞水状態であったことがうかがえるが、SK23を切るSD002の埋土に延びるため、SD002が営まれていた時期に水溜状の遺構として存在していたことが分かる。中層以上の埋土には大量の炭が混じり、出土遺物もほとんど中層以上から出土している。埋土中には拳大～人頭大に川原石も含まれていた。

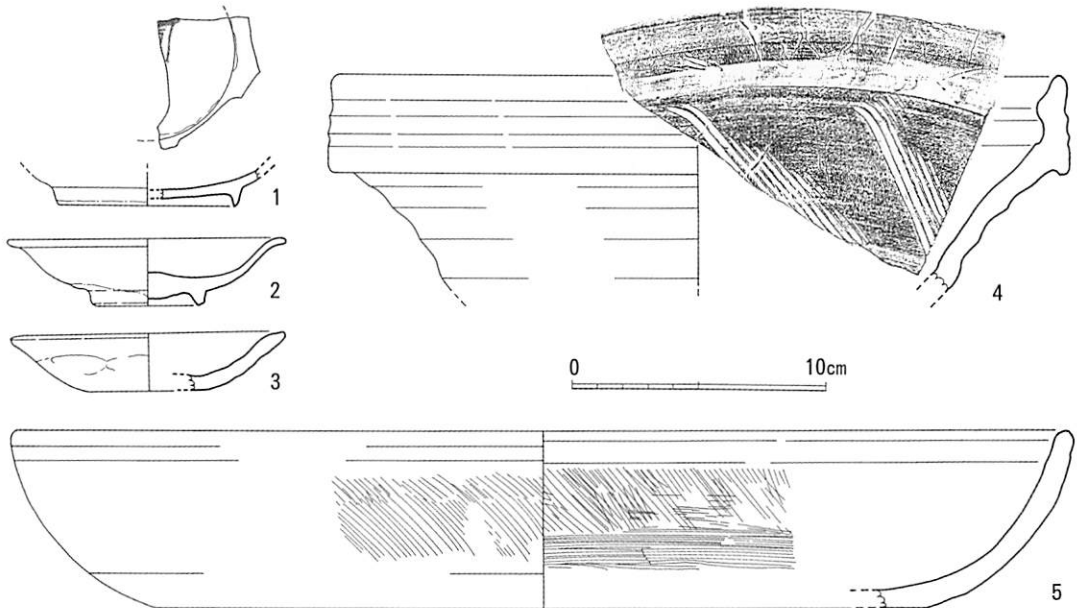


第159図 II区SK022・023実測図(1/30)

- 1 灰褐色土(わずかに炭・焼土を含む)
- 2 にぶい褐色土(多量の炭が混じる)
- 3 褐灰色粘質土(わずかに炭を含む)
- 4 褐灰色粘質土(わずかに炭を含む)
- 5 灰色土
- 6 にぶい褐色土(小さな褐色土ブロックや炭・焼土を含む)



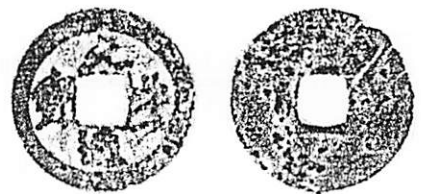
第160図 II区SK022出土遺物実測図(1/3)



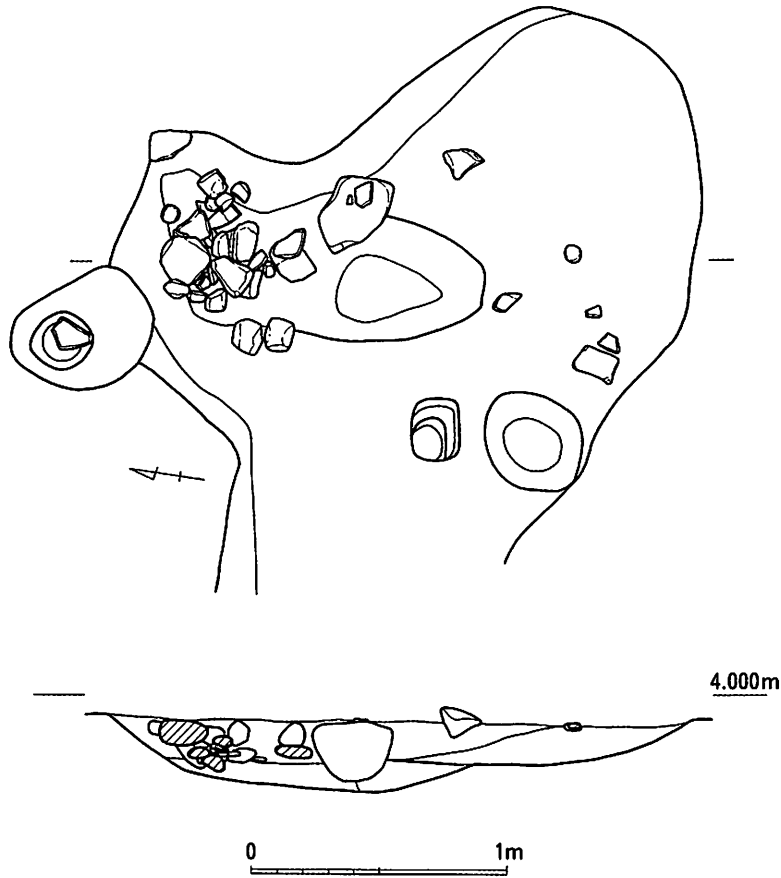
第161図 II区SK023出土遺物実測図(1/3)

SK022出土遺物(第160図)

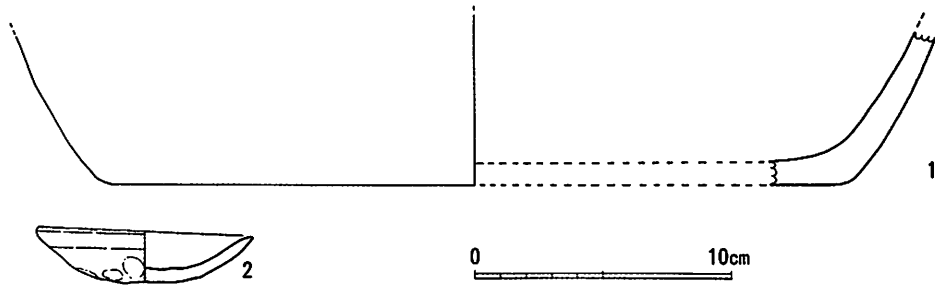
出土遺物は第160図に示した。1は中国景德镇窯系青花皿である。小野分類染付皿E群に分類できる。全面に釉薬をかけ、高台畳付部には砂が付着している。内外面の口縁付近と高台付近に圈線がみられ、見込み部にみられる文様は獅子文であろうか。2は備前系焼締陶器挿鉢である。放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。混入品であろう。3は瓦質土器鍋である。内面には細かい横方向のミガキが施され、外面には細かい横方向のケズリがみられ



第162図 II区SK023出土銭貨(1/1)



第163図 II区SK024実測図(1/30)



第164図 II区SK024出土遺物実測図(1/3)

る。4は京都系土師器である。

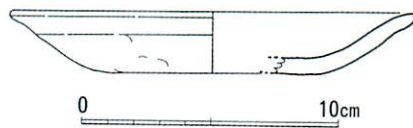
**SK023 (第161図)**

調査区東側のM24区に位置する。西側をSK022から切られており、北側のみプランを確認した遺構であり、落ち込み状地形を整地した単位とも受け取れるが、ここでは土坑として捉えておく。埋土には炭・焼土をはじめ1～3cmの褐色土ブロックが混じり、人為的に埋められたことが分かる。埋土には拳大より大きな礫を含むが、遺物はさほど多くはない。

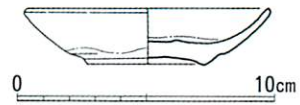
**SK023出土遺物 (第161図)**

出土遺物は第161図に示した。1は磁器皿であり、高台を含めて内外面に釉薬が全面にかけられている。高台内中央に字款がみられる。2は白磁皿であり、口縁は端反りの形態をもつ。高台及び高台





第165図 II区SK025出土遺物実測図(1/3)



第166図 II区SK026出土遺物実測図(1/3)

内は露胎を呈する。釉薬が2度掛けされており、1度目は白色釉であるが、その上にうすく緑色を呈する釉薬がかけられている。3は京都系土師器皿である。4は備前系焼締陶器挿鉢である。ナナメ方向のスリメが確認でき、乗岡編年近世1期に帰属するものである。5は瓦質土器鉢である。内外面に粗いナナメ方向の刷毛目がみられ、外面はその上下を丁寧な横ナデし、内面はナナメナデの下に細かい横方向の刷毛目を施している。

第162図は銅銭である。「元豊通寶」(1078年初鑄)である。

**SK024 (第163図)**

調査区中央のやや北側のL23区・L24区に位置する。長径2.3m、最深約0.3mを測る長楕円形の土坑である。SK011に接し、様相がほぼ同じであるため、近接した時期に同様な目的で掘り返されたもので、埋土からそれぞれの土坑単位が確認できたものであり、SK010と様相が似ている。埋土は微細な焼土・炭を含む褐色土であり、一部深い部分には拳大～人頭大の川原石が多くみられる。

**SK024出土遺物 (第164図)**

出土遺物は第164図に示した。1は瓦質土器鉢である。内外面には丁寧なナデが施されている。2は京都系土師器皿である。

**SK025 (第122図)**

調査区中央のやや西南側のL24区に位置する。長径0.7m、最深約0.07mを測る長方形の土坑であり、北側のみ残存する。SK026に近接し、様相がほぼ同じであるため、類似遺構と考えられる。

**SK025出土遺物 (第165図)**

出土遺物は第165図に示した。京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年2期に属するものと考えられる。

**SK026 (第122図)**

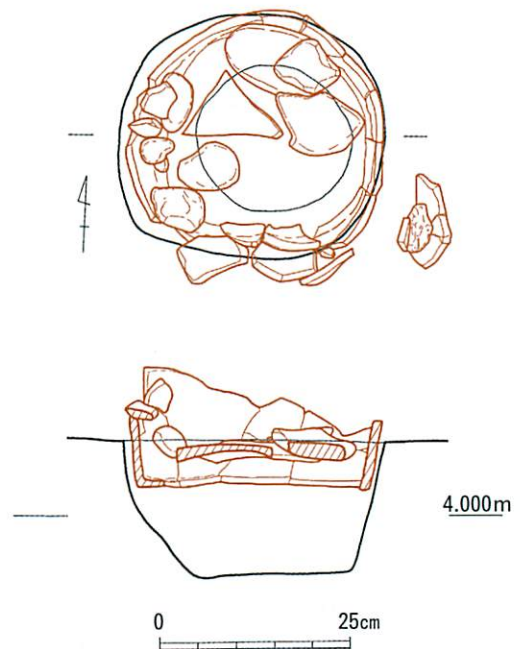
調査区中央のやや西南側のL24区に位置する。最深約0.1mを測る円形の土坑の一部のみ残存する。SK025に近接し、様相がほぼ同じであるため、類似遺構と考えられる。

**SK026出土遺物 (第166図)**

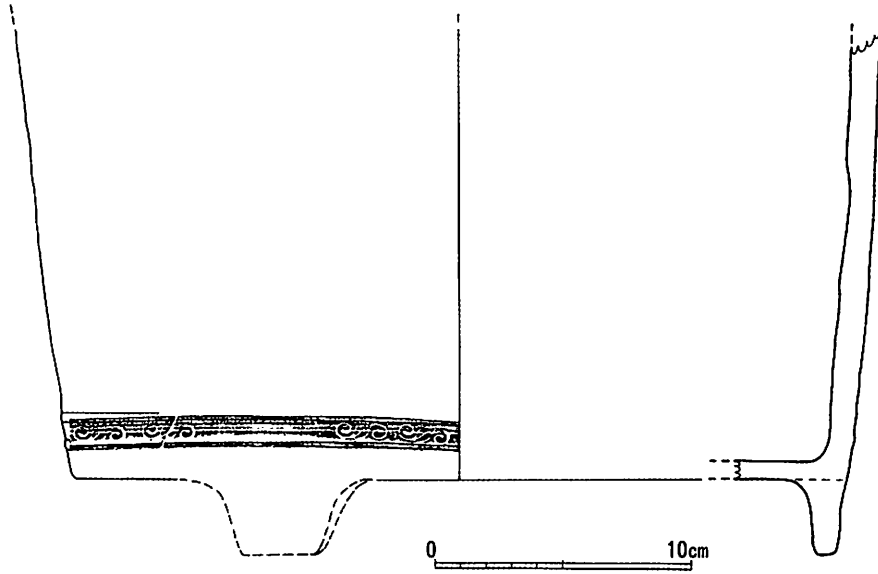
出土遺物は第166図に示した。白磁皿であり、焼成は軟質で淡黄色を呈する。見込みおよび高台をのぞき、体部上半にのみ釉薬がかけられている。高台は低くケズリ出されて成形されている。

**SK027 (第167図)**

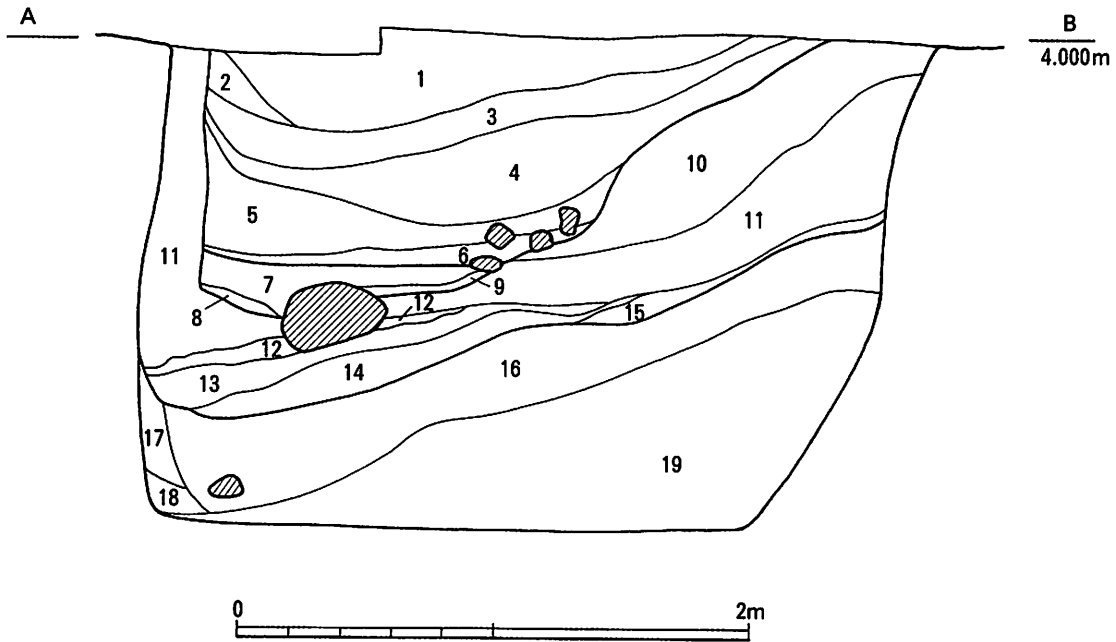
調査区中央より、北西側のK23区・L23区に位置する。瓦質土器火鉢を小土坑に埋置した遺構である。瓦質土器は上半部を欠失



第167図 II区SK027実測図(1/10)



第168図 II区SK027出土遺物実測図(1/3)



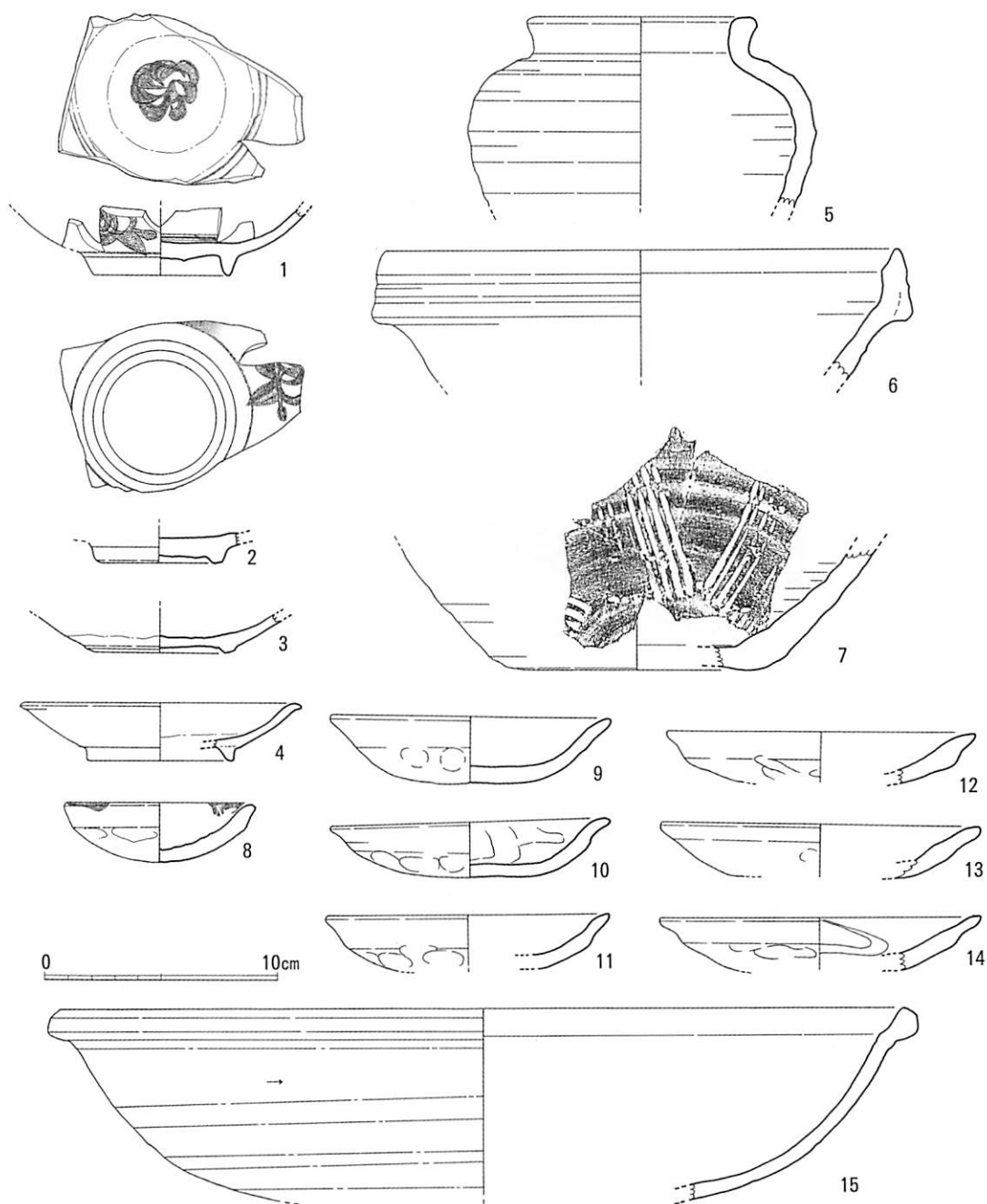
第169図 II区SE028土層断面実測図(1/30)

- |    |                           |    |                           |
|----|---------------------------|----|---------------------------|
| 1  | にぶい褐色土(径1~5cmの地山ブロック)     | 11 | 明褐色土                      |
| 2  | 灰褐色土                      | 12 | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす)        |
| 3  | にぶい褐色土(1層とほぼ同じだが若干暗い)     | 13 | 明褐色土(11層と同じ)              |
| 4  | にぶい褐色土(1・3層とほとんど同じ)       | 14 | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす 銅銭3枚出土) |
| 5  | にぶい褐色土                    | 15 | 灰褐色土                      |
| 6  | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす)        | 16 | 褐灰色土                      |
| 7  | にぶい褐色土                    | 17 | 褐灰色砂粘質土                   |
| 8  | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす)        | 18 | 褐灰色砂土                     |
| 9  | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす 8層と同一層) | 19 | 礫層                        |
| 10 | 褐灰色砂粘質土(滞水状態をあらわす)        |    |                           |

しているが、状況から本来は、完存に近いものが削平により失なわれたと考えられる。小土坑は径23～35cmを測り、ほぼ瓦質土器の底径に近い数値をもつため、瓦質土器を埋置するために掘削されたものであることが分かり、埋土中には瓦質土器以外の出土遺物は確認できなかった。なお、瓦質土器内には拳大を含め、やや小さな川原石が数点検出されているほか遺物はみられない。

SK027出土遺物（第168図）

出土遺物は第168図に示した。瓦質土器火鉢であり、胴部下半が残る。脚が付き、底部付近に2条の細い突帯を廻らし、この突帯間に双頭蕨手流雲文のスタンプがみられる。



第170図 II区SE028出土遺物実測図①（1/3）

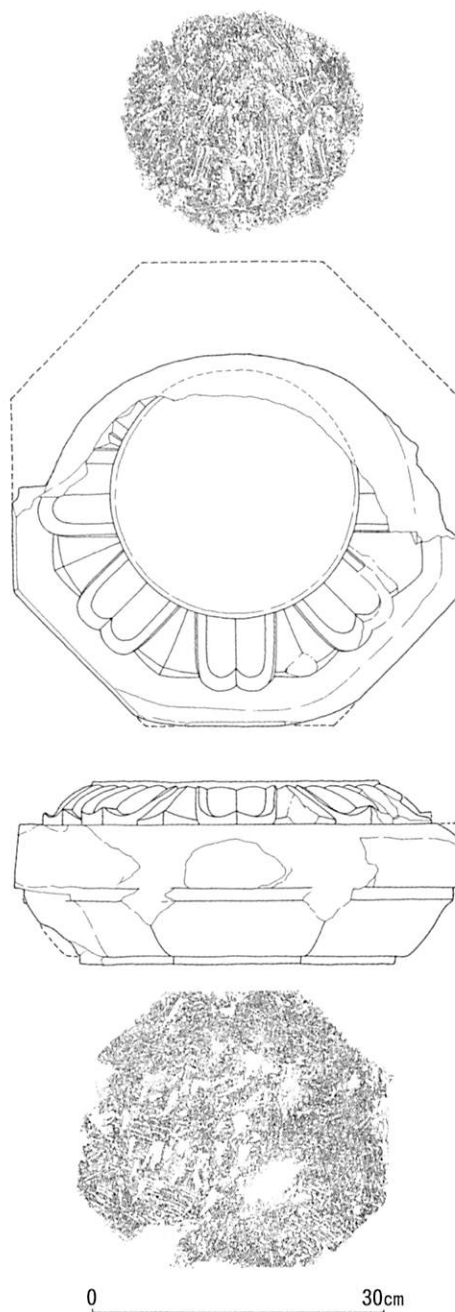
## c. 井戸

## SE028 (第123・169図)

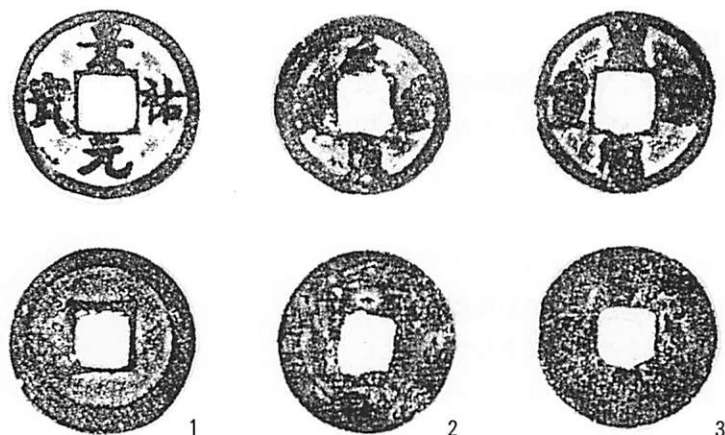
調査区中央より、やや南東側のL24区・M24区に位置する井戸跡である。それぞれの切り合い関係からSD001を切っており溝埋没後に掘削されたことがわかる。堀方は3.4m×3.7m、深さ約1.5mを測る隅丸方形を呈し、床面は砂層にまで達していたため井筒等の掘方が存在したかは確認できなかった。ただ、堀方は掘り返され、井筒は抜き取られて、廃棄土坑として再利用されていた。堀方内埋土は下層に大量の川原石が投げ込まれており、これらの中に遺物が混入していた。土層堆積を観察すると、北から南へ下がる堆積層が確認できるため、北から継続して廃棄した様相が読み取れる。埋め戻しの過程で、3度におよび床面に砂粘質土層の堆積が確認できたため、滞水状態の土坑状を呈する時期があったことがわかり、数回に分けて埋められていったことがわかる。14層からは3枚に合わさった銅銭が出土しているため、第1次の埋没が終了した時点で銭貨を伴う祭祀が行われたのかもしれない。出土遺物は比較的多く、そのほとんどが最下層の礫層に混入したものである。最下層の礫は拳大から一抱えもある川原石を中心とした礫を投げ入れたものである。比熱しているものが多く、無縫塔部材がみられるほか、礫層中から土器片も出土している。

## SE028出土遺物 (第170・171・172図)

出土遺物は第170・171・172図に示した。第170図1は中国漳州窯系青花碗である。見込み部を蛇の目状に釉薬を掻き取っている。2は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込み部および高台内面は露胎のままである。3は体部が直線的に外方に開く白磁皿であり、見込み部および高台は露胎のままである。4は陶器皿である。5は備前系焼締陶器壺である。6・7は備前系焼締陶器挿鉢である。7には放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。8～14は京都系土師器皿であり、塩地編年2・3期に属するものであろう。8には口縁部にススが付着している。



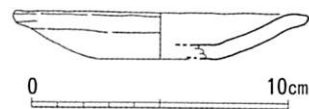
第171図 II区SE028出土遺物実測図② (1/8)



第172図 II区SE028出土銭貨 (1/1)

15は土師質土器鍋である。体部外面には横方向の細かいケズリが施されている。

第171図は無縫塔の部材であり、卵塔下の中台である。上面には八角台座の各面に向かう方向に複弁蓮華文の反花を八葉を刻出し、下部は線形を呈する。肉厚な蓮弁は鎌倉後半～南北朝初期の石造物の特徴をよくあらわすものである。卵塔あるいは蓮華座を置く上面、および八角形の竿と重ね合わせる下面はい



第173図 II区SE029出土遺物実側図 (1/3)

ずれも調整が粗く、ノミ痕が残る。その他の面はきわめて丁寧に調整されている。全体的に焼成により赤変しており、破損部は同じく焼成により、はじけた破損の様相を示しているため、屋内に安置され、火災によって強い火を受け破損したものと考えられよう。

第172図は銅銭である。1は「景祐元寶」(1034年初鑄)、2は「元豊通寶」(1078年初鑄)、3は「皇宋通寶」(1038年初鑄)である。

SE029 (第122・124図)

調査区の南東端M24区に位置する井戸跡である。それぞれの切り合い関係からSD001-1・2・3を切っており、SD002から切られている。堀方は深さ約80cmを測る円形土坑を呈し、床面をさらに小さな円形で75cm掘り下げている。堀方内埋土は砂や褐灰色土が混入するにぶい橙色土からなり、井筒内埋土には遺物をはじめ炭や小石が混じる。井筒は検出できないが井筒部分と堀方の境目に粘土からなる木質の痕跡が確認でき、円形の桶あるいは曲物であった事が分かる。出土遺物はきわめて少なく、図化できるものは1点のみであった。

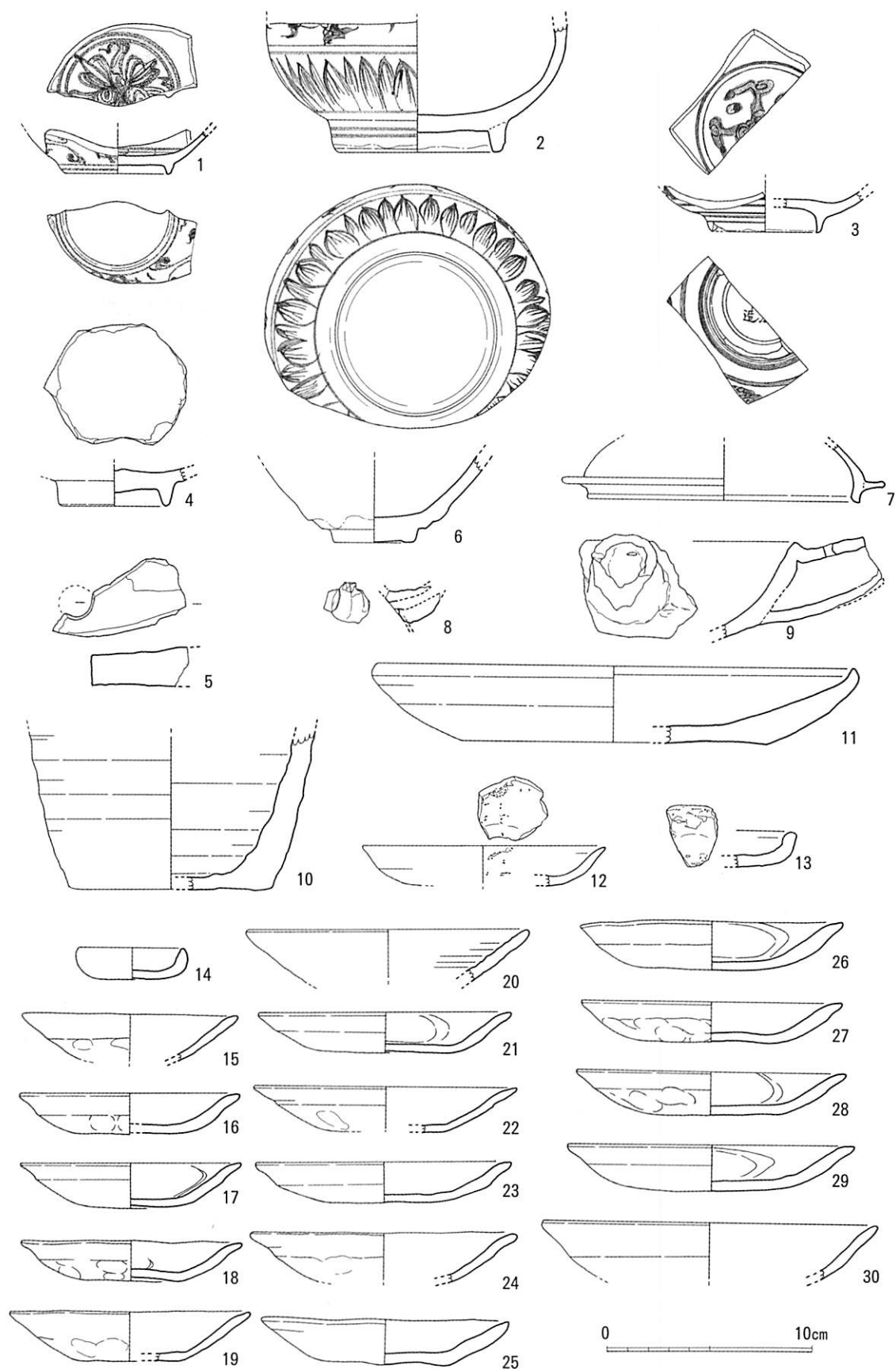
SE029出土遺物 (第173図)

出土遺物は第173図に示した。京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。

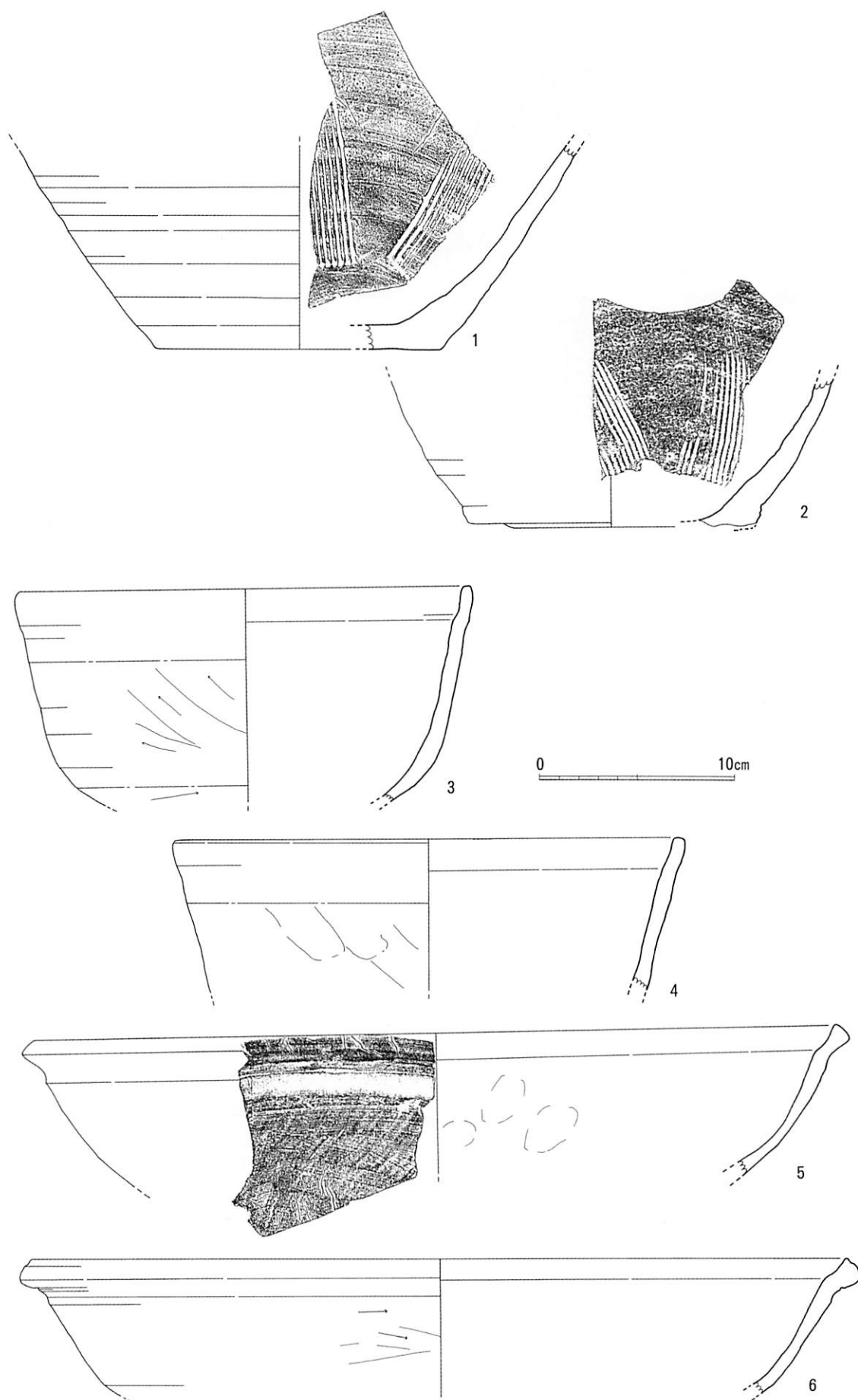
d. その他の遺構

SX030 (第121・124図)

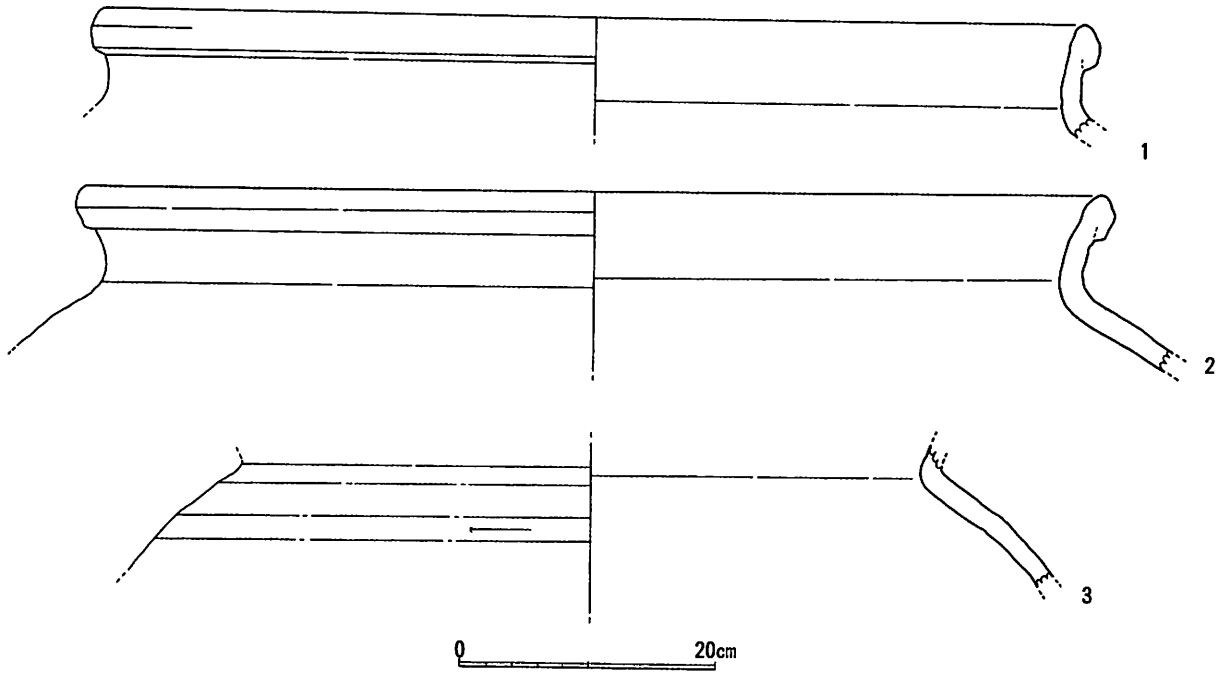
K・L-23・24区に位置し、調査区中央部から西側調査区外及びⅢ区に延びる不定形の大型落ち込み状遺構である。東西・南北とも10mをこえる規模で、最深約0.8mを測り、落ち込み床面には径1～4mの凹凸の単位が認められる。埋土は下層に褐灰色粘質土層が堆積し、中に拳大の礫や遺物が含まれている。掘削後、一時、水溜まり状を呈し、その際に廃棄されたものと考えられる。遺物中には南肩部において完形の京都系土師器皿が数点見られる。中上層は褐色土を主体とするもので、炭・焼土が



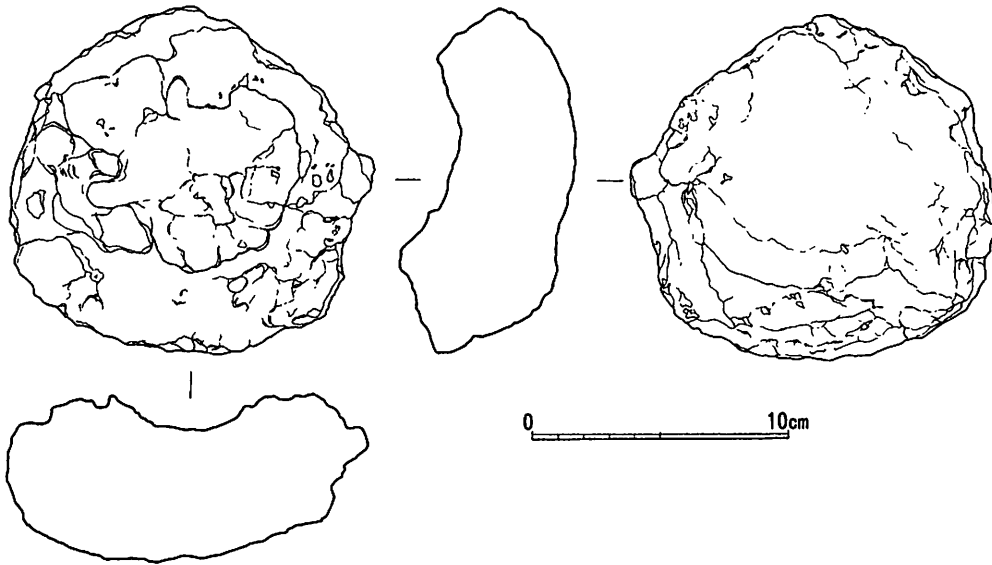
第174図 II区SX030出土遺物実測図① (1/3)



第175図 II区SX030出土遺物実測図② (1/3)



第176図 II区SX030出土遺物実測図③ (1/6)



第177図 II区SX030出土遺物実測図④ (1/3)

わずかに含まれるほか、地山土の径1～3cmの小ブロックが含まれるため、人為的に埋められ整地されたものと考えられる。この大型落ち込みが整地されて後、上に遺構が営まれている。

**SX030出土遺物 (第174～177図)**

出土遺物は第174～177図に示した。第174図1は中国漳州窯系青花皿であり、見込み部に十字花文がみられる。2は中国産青花壺であろうか。高台畳付けのみ露胎であり、内外面および高台内に乳濁した釉薬がかけられている。外面胴部下半には圈線を廻らし、その下に蓮華葉文を連続させる。3は中国景德鎮窯系青花碗である。小野分類E群の饅頭心碗に分類できる。見込みには花文が、また、高



台内には「□□□造」の年款が描かれている。

4は2次焼成を受けた磁器碗である。5は扁平な磁器製品であり、径1.6cmの円孔がみられる。用途は明らかでない。6は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、削り出し輪高台を呈し、高台周辺には錆釉が施されている。7は焼締陶器蓋である。8は焼締陶器の注口部である。9は瓦質土器焙烙の柄着装部である。棒状の柄を差し込み使用していたものであろう。着装部の上面には釘穴がみられる。10は備前系焼締陶器壺である。11は備前系焼締陶器皿である。

12、15~19、21~30は京都系土師器皿である。いずれも塩地編年1期に属するものである。12は取瓶として再利用され、内面に付着物がみられる。13は京都系土師器小皿である。20は内面に強いロクロ痕を残す土師質土器皿である。13は取瓶片であり、内面に付着物が著しく残る。

第175図1・2は備前系焼締陶器挿鉢である。放射状スリメのみがみられ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。3・4は土師質土器深鍋である。口縁部内外面には回転ナデが施され、外面にはヘラケズリがみられる。外面にススの付着が認められる。5・6は土師質土器鍋である。受部状に成形された口縁は横ナデが施され、体部には5がタタキ後にヘラケズリ、6にはヘラケズリがそれぞれ施されている。

第176図1・2・3は備前系焼締陶器甕である。

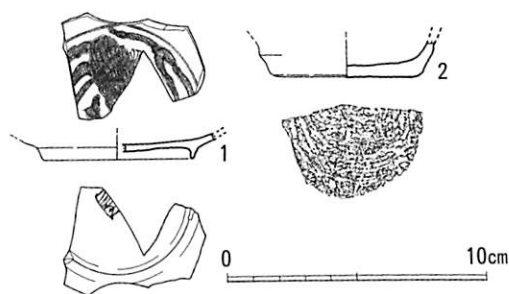
第177図は椀型滓である。

#### SX031 (第121・124図)

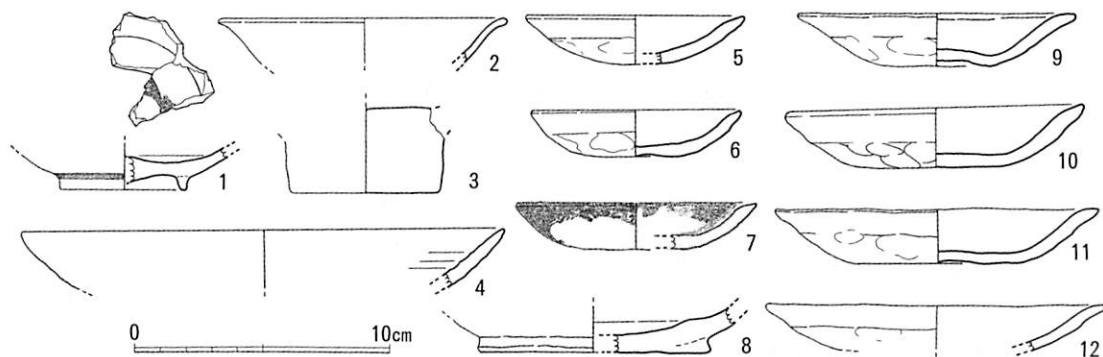
調査区南西端のK24区に位置する。遺構のプランは南側および西側に延びるため、土坑か落ち込み状遺構かは明らかでない。東西、南北とも1mをこえる規模で、最深約0.7mを測る。北側をSD001-1で切られているため、これに先行する遺構であることがわかる。埋土は橙色粘質土の小さなブロックや炭・焼土粒を含む褐色粘質土であり、遺物の出土は非常に少なく、図化できるものは2点のみであった。

#### SX031出土遺物 (第178図)

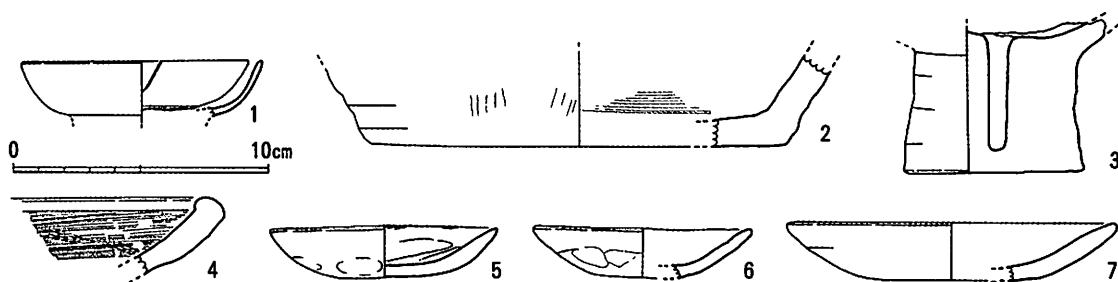
出土遺物は第178図に示した。1は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台内に字款がみられる。2は土師質土器環であり、比較的薄手である。



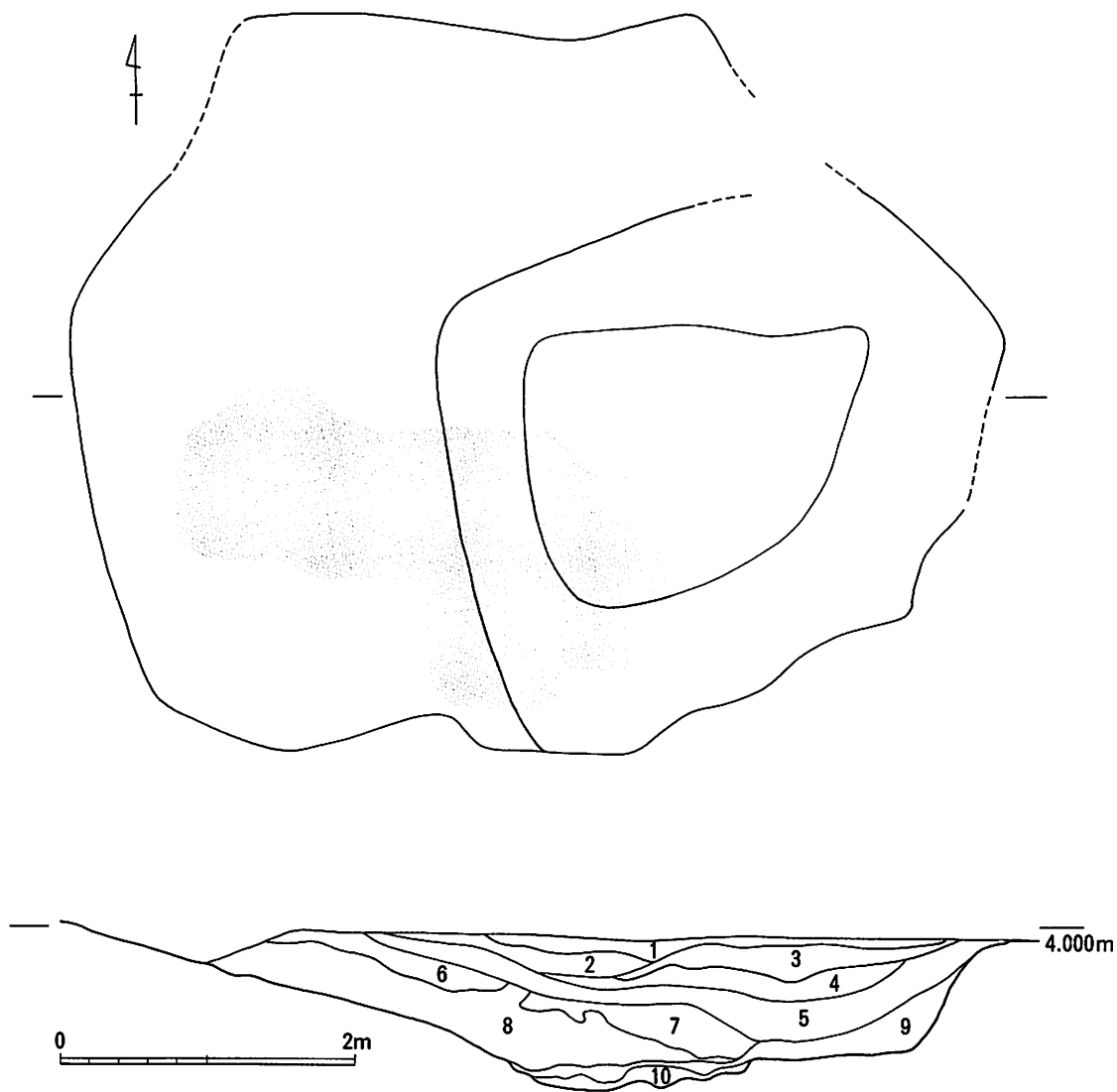
第178図 II区SX031出土遺物実測図 (1/3)



第179図 II区SX032下層出土遺物実測図 (1/3)



第180図 II区SX032出土遺物実測図(1/3)



第181図 II区SX033実測図(1/50)

- |                                     |                              |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色土(灰や土器片を大量に含む)                  | 6 暗褐色土(焼土・小石・砂が混じる)          |
| 2 暗褐色土(灰や土器片を大量に含む)                 | 7 暗褐色土(焼土・小石・砂が混じる 6層と同一層か)  |
| 3 褐色土(炭や土器片を含む 1cm程度のにぶい橙色土ブロックを含む) | 8 灰黄褐色砂層(礫や3~5cmの褐色土ブロックを含む) |
| 4 灰褐色土(炭や土器片を含む)                    | 9 褐灰色土層(炭の薄い層を含む)            |
| 5 暗褐色土(京都系土師器がきわめて大量に含まれる)          | 10 褐黄褐色土                     |

SX032 (第122・124図)

調査区北東端のL・M-23・24区に位置する。遺構のプランは北側および西側に延び、不定形の大型落ち込み状遺構である。東西8m、南北4mをこえる規模で、最深約0.8mを測り、床面には凹凸が認められる。埋土にはぶい黄橙色粘質土や褐色砂が堆積している。掘削後、一時、水溜まり状を呈していた時期が存在していたものと考えられる。この大型落ち込みが整地されて後、上に遺構が営まれている。

SX032出土遺物 (第179・180図)

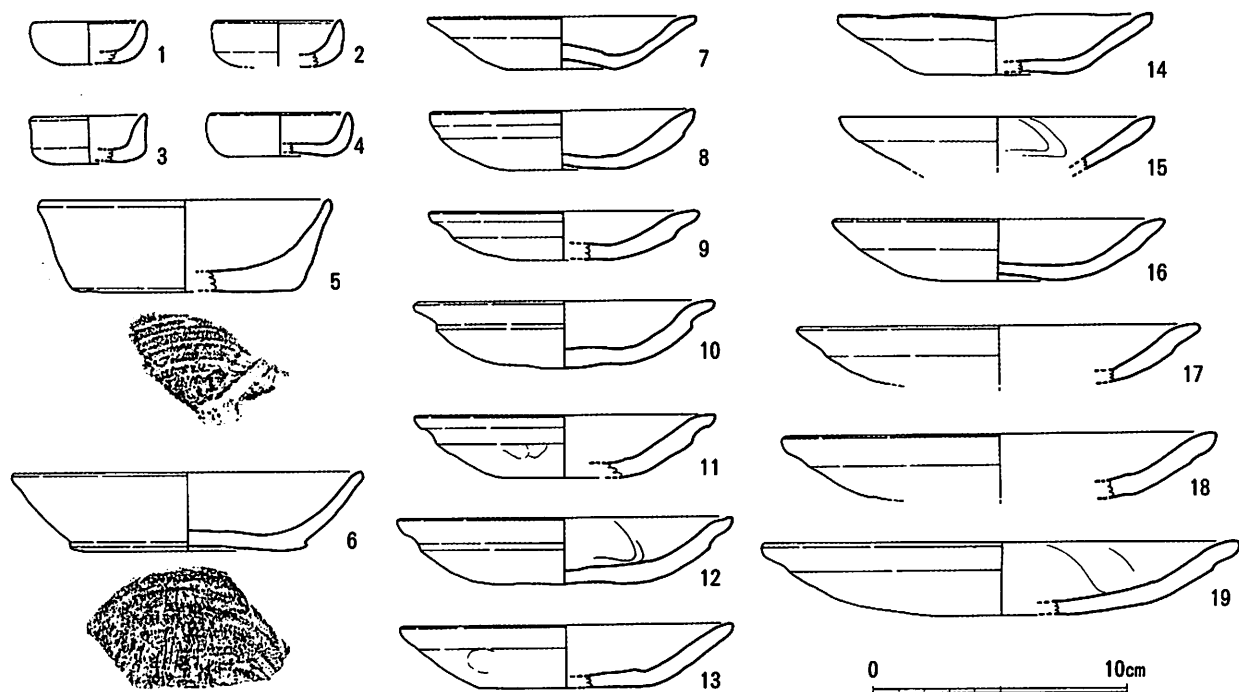
出土遺物は第179・180図に示した。第179図は下層から、第180図は上層からそれぞれ出土している。

第179図1は中国漳州窯系青花碗である。2は白磁皿であり、口縁部が端反りしている。3は瓦質土器風炉の脚である。筒状の形態をもち、器面は丁寧に磨かれている。4は土師質土器皿であり、内外面に強いロクロ痕を残す。5～7、9～12は京都系土師器皿であり、塩地編年1～2期に属するものであろう。7にはススの付着が認められる。

第180図1は中国産青花皿であり、小野分類B群におさまる。2は瓦質土器壺の底部片である。3は土製燭台であり、上部に穿孔がみられる。4は瓦質土器鍋であろうか。内面に横方向のハケ目が著しく残されている。5～7は京都系土師器皿であり、塩地編年1～2期に属するものであろう。5にはススの付着が認められる。

SX033 (第181図)

調査区中央のL24区に位置する。長径6.2m、短径4.8m、最深約0.95mを測る不定形の土坑である。この土坑内には、ほとんど京都系土師器に限定できる土師質土器皿の破片がきわめて大量に出土しており、土器溜り遺構として把握した。炭や灰が混入する褐色土からなる埋土はわずかであり、ほとんど土師質土器皿からなり、土師質土器皿に限定された廃棄土坑といえるが、9次調査区における同様の土器溜まり遺構に共通する様相として、軟弱地盤箇所に営まれていること、遺物の堆積状況から時



第182図 II区SX033出土遺物実測図 (1/3)

期差が追えるものではなく、新旧の土器片が混在して存在することなどからして、他所に廃棄されていたものを、軟弱地盤克服のために大量に持ち込まれて敷かれたものと解釈すべきであろう。この土器溜まり遺構上には非常に硬質な堆積土が長径3.6m、短径2mの範囲（第181図トーン部分）でみられ、土器片敷設後にさらに硬質土を叩き締め地面の硬化を図ったことがうかがえる。この土器溜まり遺構に隣接して南東側に井戸跡であるSE028が存在し、出土遺物からSE028が営まれた時期と土器溜まり遺構が整地された時期と重なるため、この土器溜まり遺構にみられる整地作業は井戸を意識したものかもしれない。

**SX033出土遺物（第182・183図）**

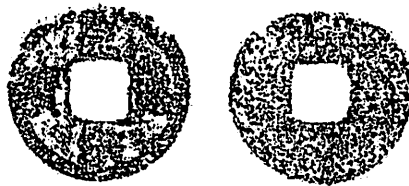
出土遺物は径1cm程度以上の大きさと取り上げが可能であった遺物の総数が17,000点にもおよび、うち在地系土師質土器1,300点、若干数の大内系土師質土器・瓦質土器・焼締陶器・磁器類以外はすべて京都系土師器であり、90%以上が京都系土師器で占められているという特徴をもつ。実測図化できる資料のうち、土坑の様相がわかる資料の一部のみ第182図に表した。

第182図1～4は京都系土師器小皿である。5・6は土師質土器皿であり、15世紀後葉に属するものであろうか。7～19は京都系土師器皿である。7・14・15のようにうす手のものや、9～12・17のように口縁外面を強く横ナデし外反させるものや8・18・19のようにやや厚手のものもみられる。塩地編年1～3期に属するものが混在しており、SX033は他所から京都系土師器細片を選び、持ち込んで埋めたものと考えられる。

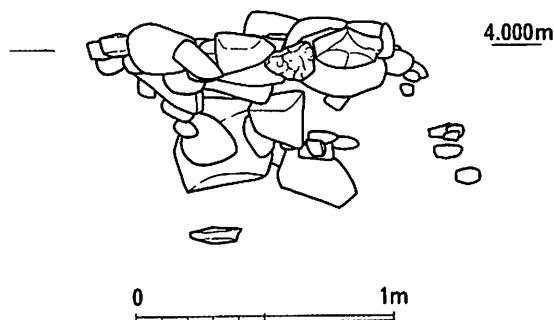
第183図は銅銭である。風化が著しく、判読は困難である。「皇宋通寶」（1038年初鑄）であろうか。

**SX034（第184図）**

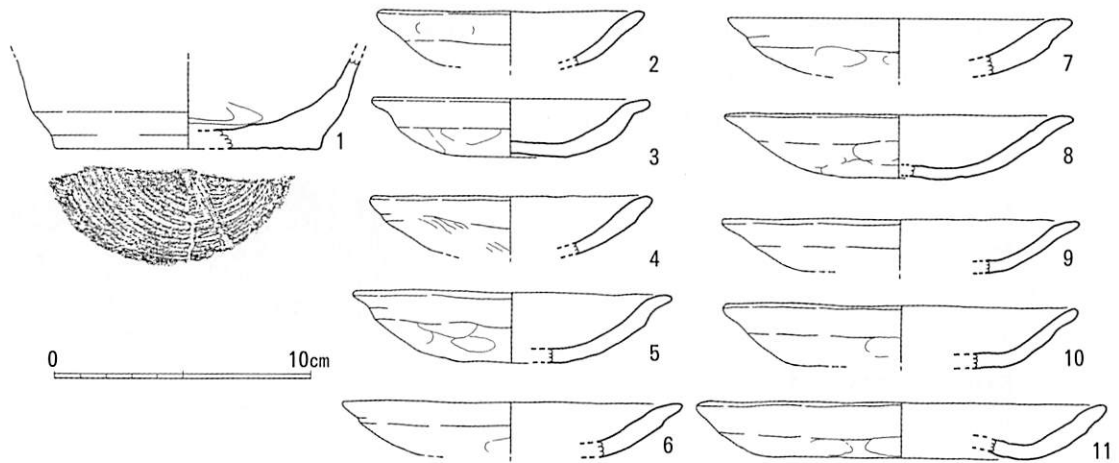
調査区南東隅のM24区に位置する。短辺約1.0m、長辺約2.0mの範囲に残る石組遺構であり、西辺および南西コーナーのみの石組みが残る。人頭大の石を利用し、上面が水平になるように組んでいる。集石内からの出土遺物はみられないが、SD001・SD002埋没後に営まれているため、16世紀後葉～末葉のものであること



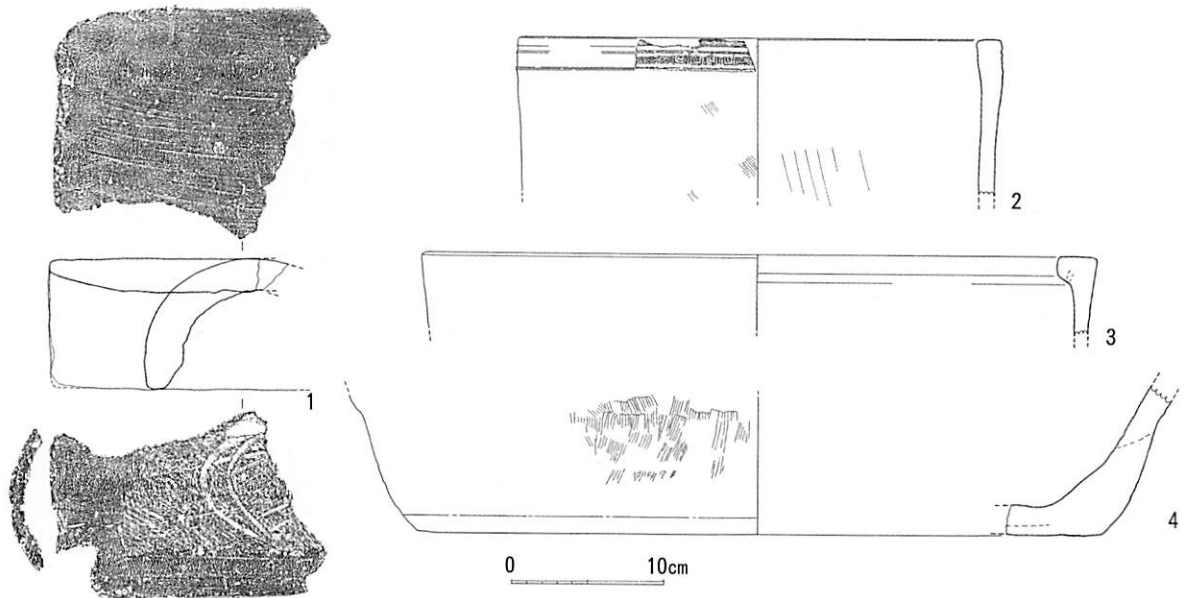
第183図 II区SX033出土銭貨（1/1）



第184図 II区SX034実測図（1/30）



第185図 II区ピット出土遺物実測図① (1/3)



第186図 II区ピット出土遺物実測図② (1/5)

がわかる。SE028が営まれていた時期と重なるため、井戸周辺の足場を安定させるために組まれた施設であろう。

e. ピット (第122・123図)

ピットは調査区ほぼ全域から出土している。これらのピットは明確に掘立柱建物や柵列となる並びで確認できたものはない。出土遺物も極めて乏しく、図化しえたものは、在地系土師質土器坏や京都系土師器皿等、数点に過ぎない。しかも、これらの出土土器が各ピットの時期を決めるだけの資料になりえず、出土遺物が14世紀や16世紀中葉にさかのぼるものもみられるが、ほとんどのピットは検出面や遺構の切り合いを考えると、16世紀後葉から末葉に営まれたものと思われる。

ピット出土遺物 (第185・186図)

出土遺物は第185・186図に示した。第185図1は在地系土師質土器坏である。底部に回転糸切り痕が確認できる。2～11は京都系土師器皿である。1はSP058、2・9はSP035、3・11はSP049、4・8がSP055、5がSP047、6がSP048、7がSP044、10がSP040からそれぞれ出土している。

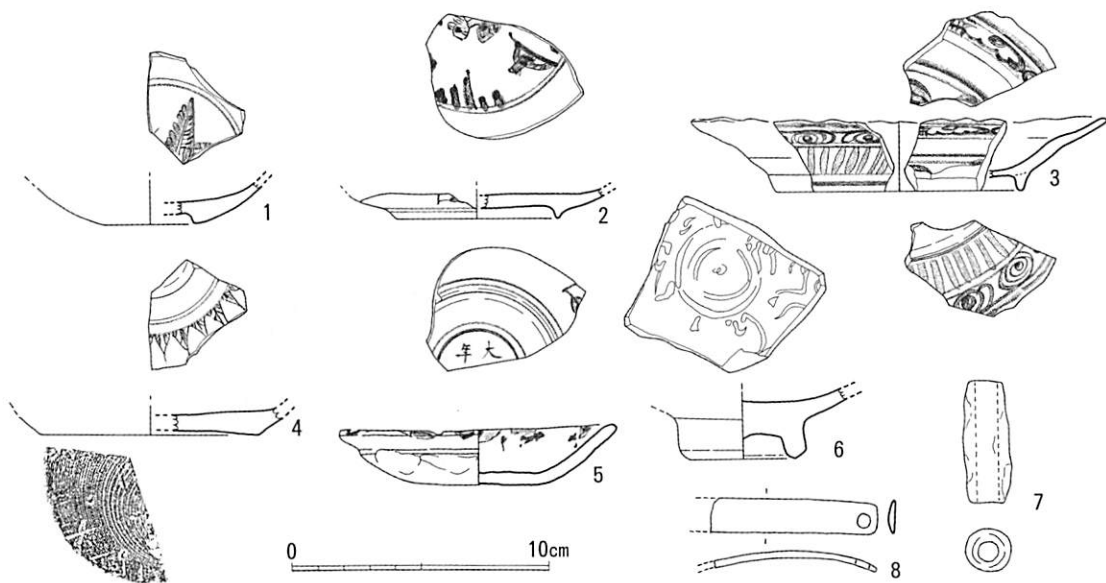
第186図1は丸瓦である。凸面には縦方向の工具による調整痕が残り、凹面には切り離し痕や吊り紐痕が認められる。2は瓦質土器火鉢である。内外面とも丁寧なナデが施され、外面口縁付近に2条の細い突帯に挟まれ、雷文帯のスタンプがみられる。3は瓦質土器火鉢である。内外面とも丁寧なミガキが施され、口縁端部をL字状に内側に突出させている。4は備前系焼締陶器甕の底部片であり、外面に縦方向のハケ目を施している。1がSP042、2がSP041、3・4がSP056からそれぞれ出土している。

f. 包含層

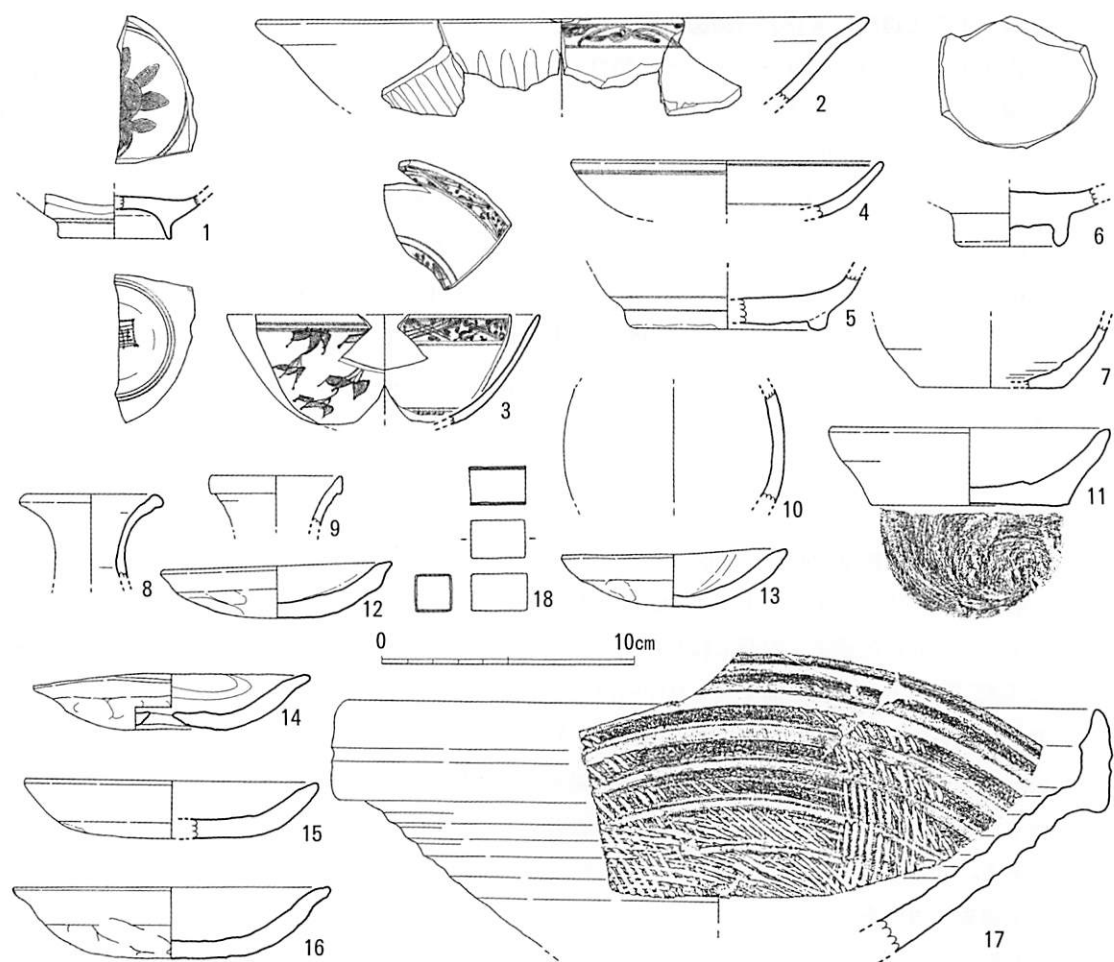
包含層出土遺物 (第187～195図)

47層の出土遺物は第187図に示した。1は中国産青花皿であり、小野分類C群の碁笥底タイプの皿であり、外面に芭蕉文、内面にねじ花文がみられる。2は中国景德鎮窯系青花皿であり、底部高台内に「大□年□」の年款を描く。3は中国漳州窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には丸彫りの鐫文がみられる。4は瀬戸美濃系陶器皿であり、内面に灰釉がみられる。5は京都系土師器皿であり、口縁内外面に煤が付着し、灯明皿であったことがわかる。6は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込み部に文様を丸彫りしている。7は土錘である。8は用途不明の金属製品である。鉛を含む合金の表面に銅を付着させたものであろうか。長い金属板の表面を緩やかに曲げ、端に円孔を穿っている。鎧金具であろうか。

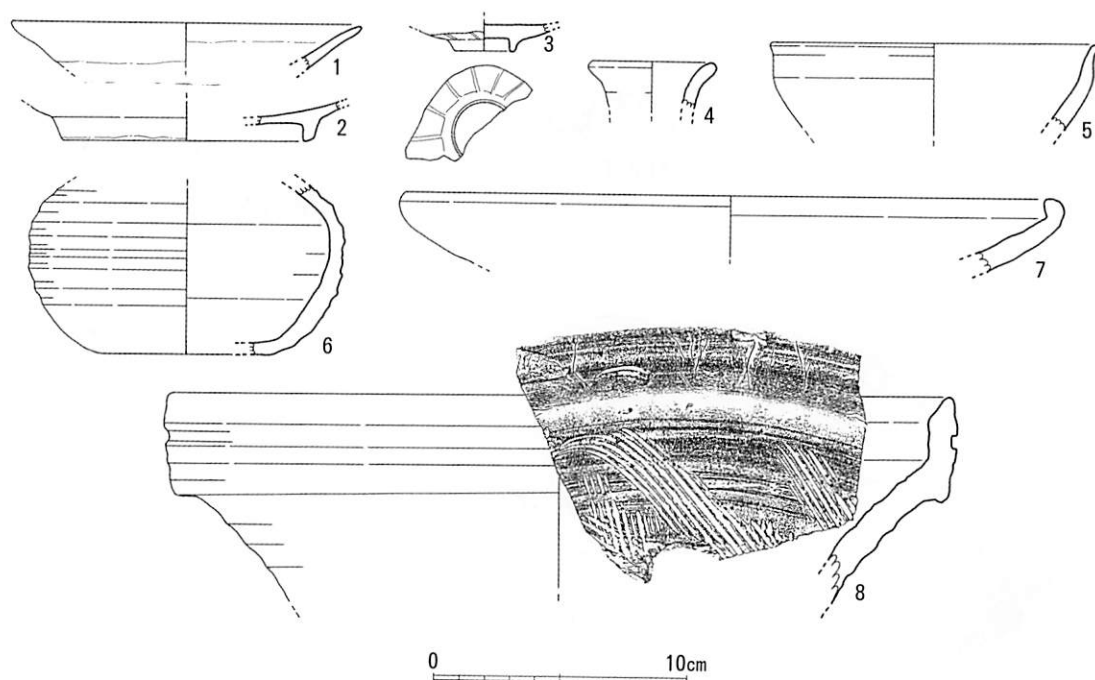
45層の出土遺物は第188図に示した。1は中国産青花碗であり、小野分類E群の饅頭心碗である。2次焼成を受けており、文様が明確でないが、高台内に字款が認められる。2は中国漳州窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には丸彫りの鐫文がみられる。3は中国景德鎮窯系青花碗であり、内面口縁付近に四方禪文帯を描いている。



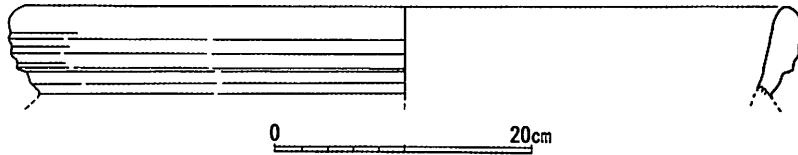
第187図 II区47層出土遺物実測図 (1/3)



第188図 II区45層出土遺物実測図(1/3)



第189図 II区9・10・14・42層出土遺物実測図①(1/3)



第190図 II区9・10・14・42層出土遺物実測図② (1/6)

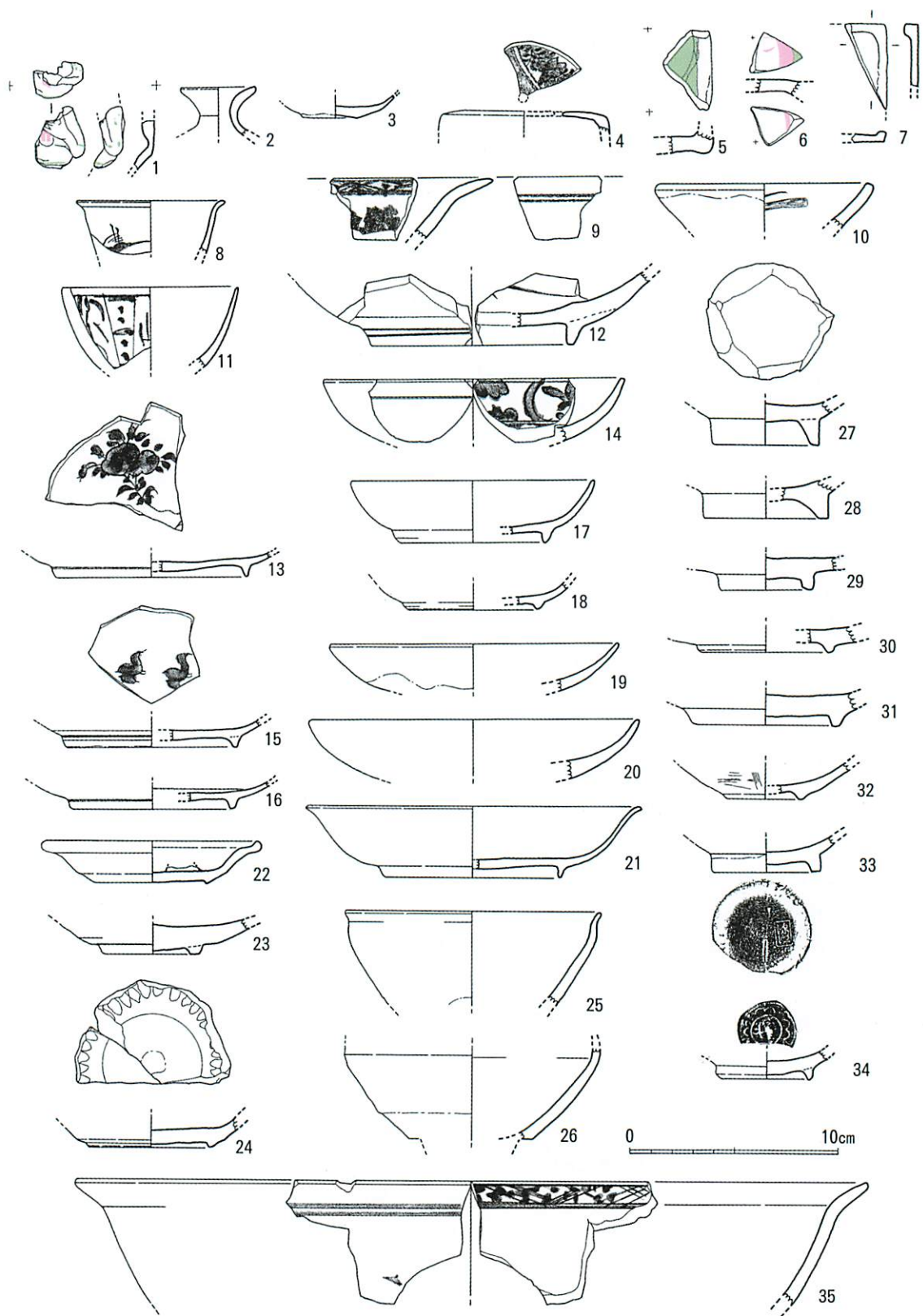
4は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類E群に属する。5は中国漳州窯系青花である。碗であろうか。6は中国龍泉窯系青磁碗であり、高台周辺を円形に成形したものと判断したい。7は備前系焼締陶器小壺である。8は備前系焼締陶器瓶である。9・10は備前系焼締陶器瓶であり、同一個体であろうか。11は在地系土師質土器坏である。12～16は京都系土師器皿である。14には底部中央に穿孔が認められる。17は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。18は用途不明の銅製品である。方柱状の中を空洞にした製品であり、木製品の飾り金具的な用途をもつものかもしれない。

9・10・14・42層の出土遺物は第189・190図に示した。第189図1～3は白磁であり、1は体部内外面上半にのみ施釉されている。3には外面に線彫りがみられる。4は備前系焼締陶器瓶の口縁である。5は瀬戸美濃系陶器天目碗である。6は備前系焼締陶器小壺であり、7は備前系焼締陶器皿である。8は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加され、乗岡編年近世1期に帰属するものである。第190図は備前系焼締陶器甕である。

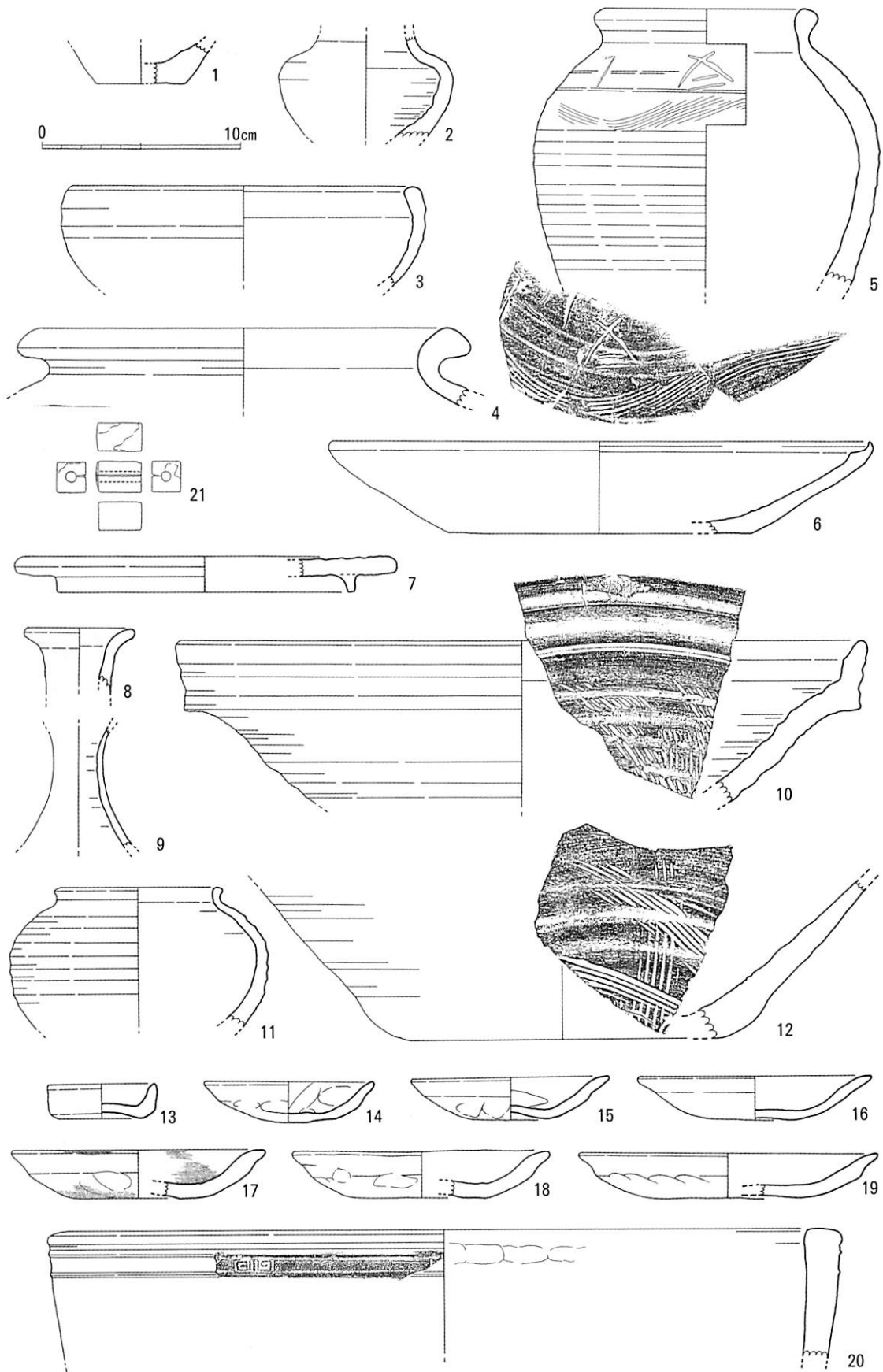
7層の出土遺物は第191・192図に示した。第191図1は磁器人形である。右手を胸のあたりで折り曲げて手に瓶らしきものをもつ。白磁であるが、赤・緑の彩色がみられる。2は白磁小瓶である。3は白磁皿であり、内面を蛇の目状に釉剥ぎしている。4は肥前系染付の蓋であり、18世紀代の所産であろう。5は華南三彩であり、線刻および緑釉がみられるが器種は明らかでない。6は五彩であり、内外面に赤色の模様が残る。皿であろうか。7は方形の海部をもつ硯であり、破片から推測し、小型に属するものであろう。8は肥前系染付杯であり、17世紀後半の所産であろう。9は中国漳州窯系青花罈皿であり、口縁内面に四方禪文を描く。13～16は中国景德鎮窯系青花皿であり、13には見込部に花文が、15には見込部に鳥文がみられる。17・18・21は中国産白磁皿である。19は唐津産陶器皿であり、1590～1610年頃の所産であろう。20は肥前系磁器皿であり、18世紀代の所産であろう。22・24は瀬戸美濃系折縁皿である。器高が低く、16世紀末～17世紀初頭の大窯4期末に帰属するものであろう。23は土灰釉唐津系陶器皿であり、1590～1610年頃の所産であろう。25・26は瀬戸美濃系陶器天目碗である。27は肥前系陶器碗の底部片であり、円盤状に加工し、再利用したものである。17世紀中葉～後半の所産であろう。29・31は中国龍泉窯系青磁皿である。29には見込部に釉剥ぎがみられ、31には見込部に蛇の目釉剥ぎが、高台部に施釉がそれぞれみえる。30は陶器碗であり、見込部に砂目痕がみえる。韓半島産であろうか。33は唐津系陶器碗であり、高台内に「源口」のスタンプがみえる。34は龍泉窯系青磁碗であり、見込部を釉剥ぎし、花模様のスタンプを押している。35は中国漳州窯系青花罈皿であり、口縁内面に四方禪文を描く。

第192図1・2は備前系焼締陶器小壺である。3は備前系焼締陶器鉢である。4・5は備前系焼締陶器壺であり、口縁部を丸く肥厚させ、肩部に櫛描波状文を施す。肩部に「×」のヘラ記号がみえる。6は備前系焼締陶器鉢である。7は陶器の蓋であろう。17世紀後半～18世紀前半の所産か。10・12は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。13は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。14～19は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年1～3期に属するものが

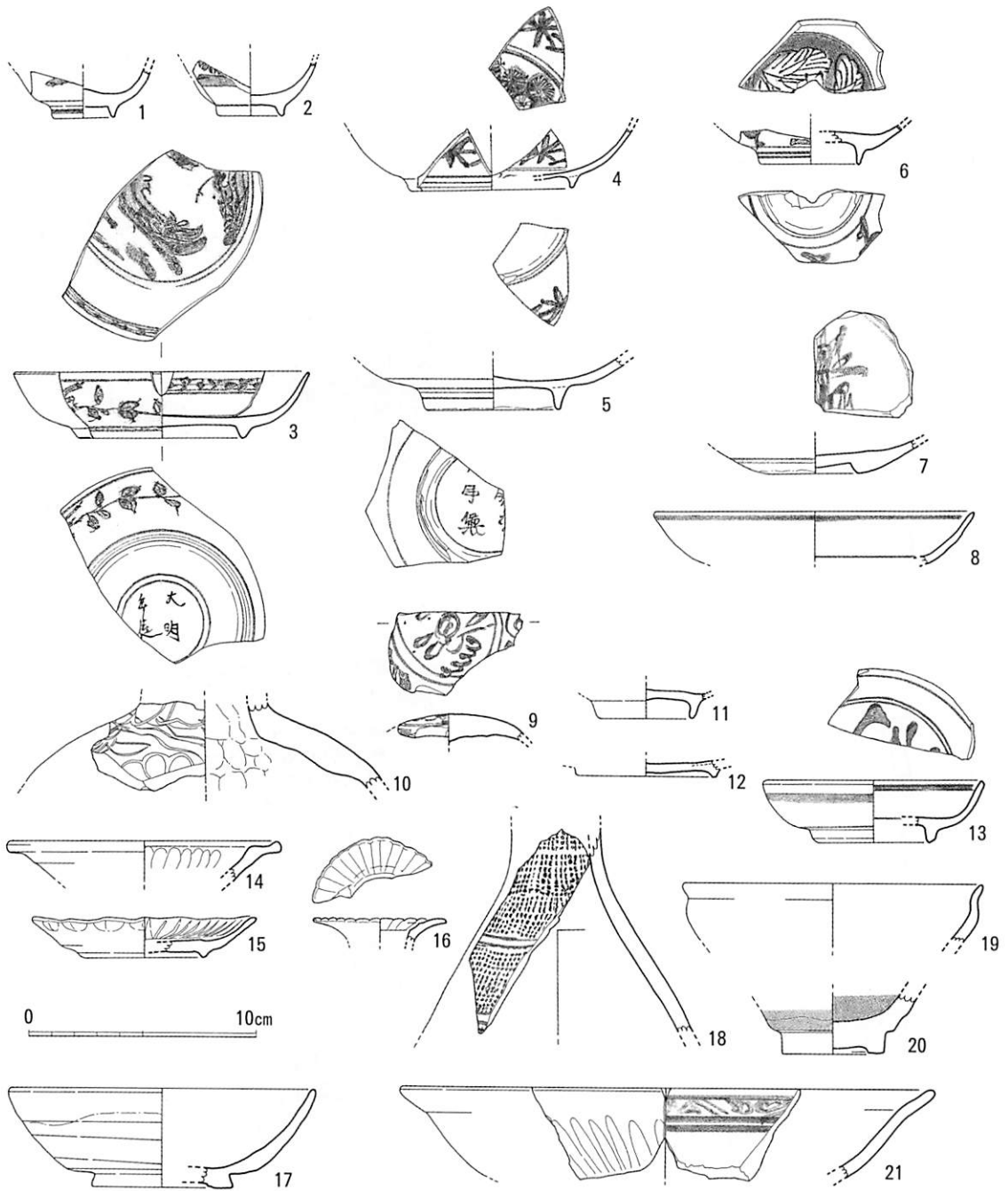




第191図 II区7層出土遺物実測図① (1/3)



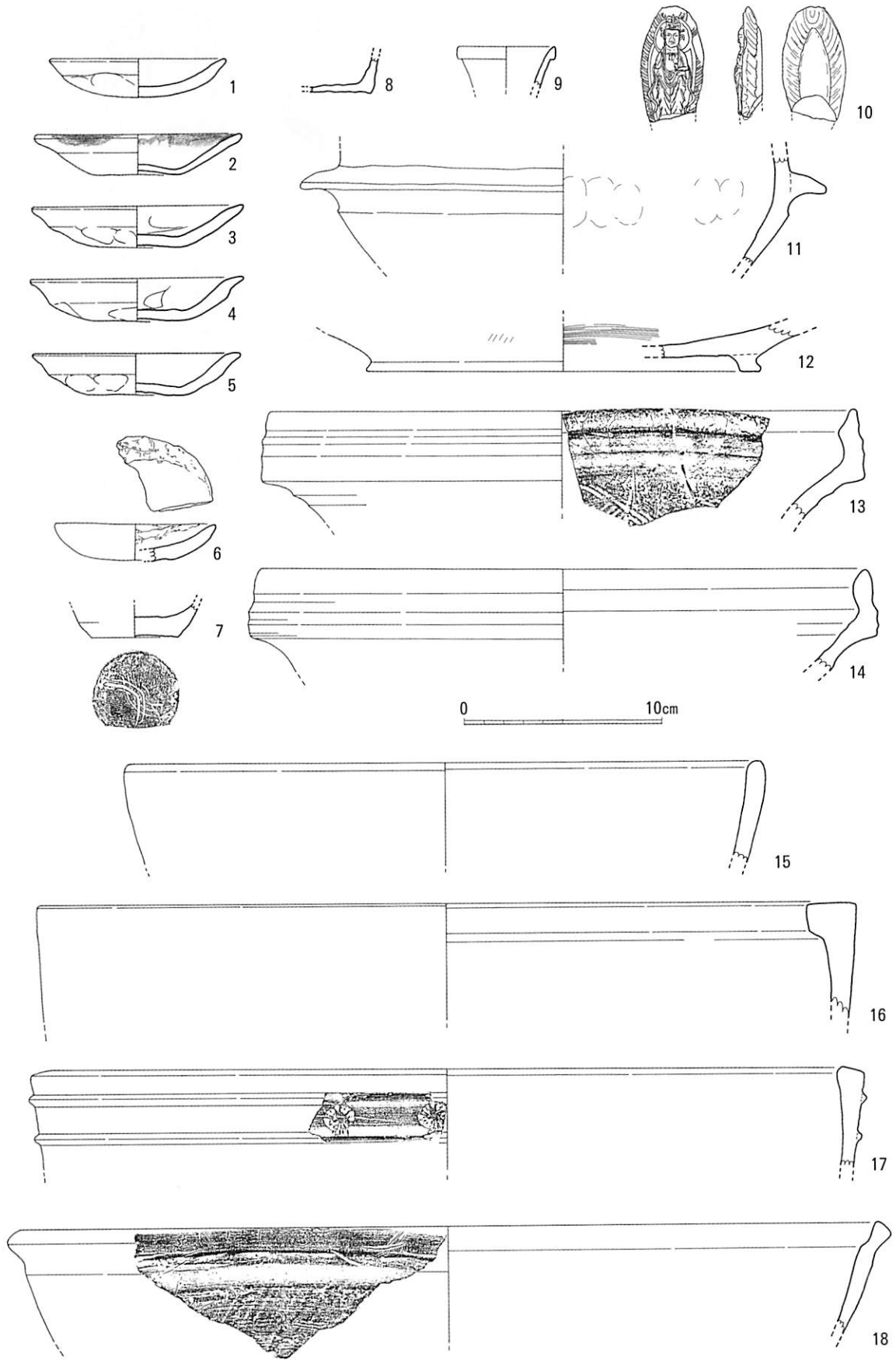
第192図 II区7層出土遺物実測図② (1/3)



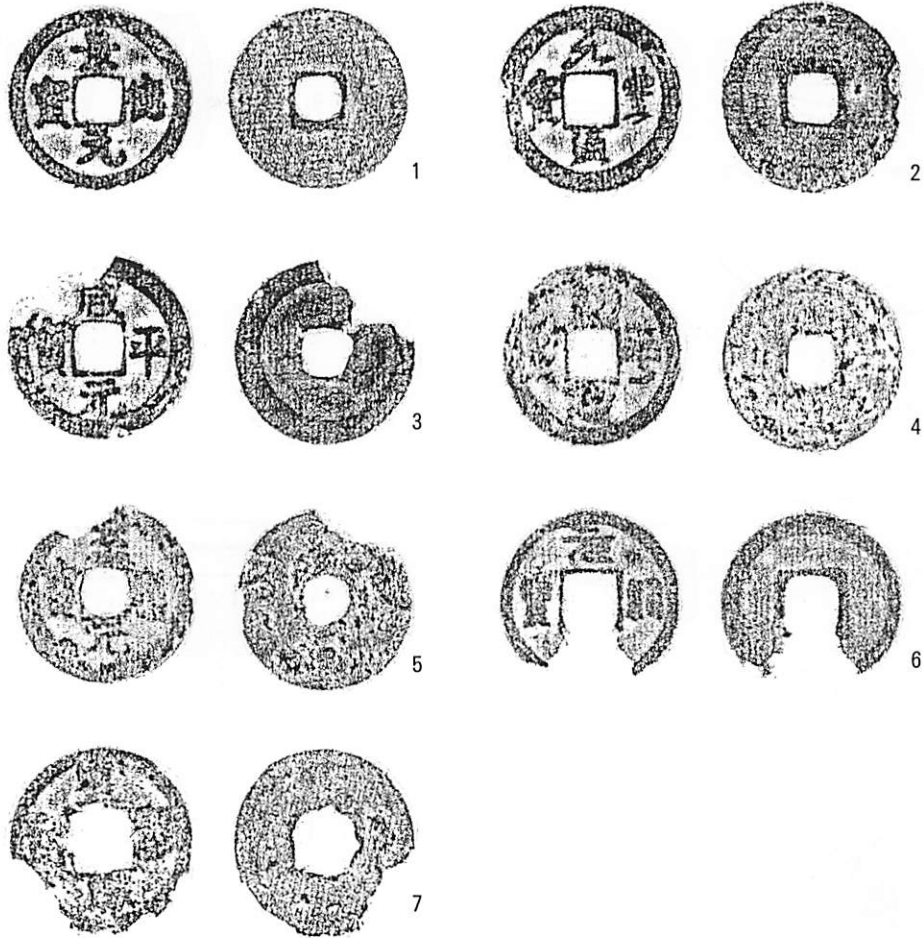
第193図 II区出土遺物実測図① (1/3)

混在したものである。17には内外面に煤の付着がみえる。20は瓦質土器火鉢であり、外面口縁付近に小さな2条の突線を施し、その突線間に雷文帯のスタンプを施している。21は1.5×1.45×2.2cmを測る用途不明銅製方柱状製品である。1面に幅1mmの深い溝をほり、中央に径4.5mmの円形孔を通して

第193・194図はII区から出土した遺物である。第193図1・2は肥前系染付猪口であり、18世紀の所産であろう。3～5は景德鎮窯系青花皿であり、3には高台内に「大明年造」の字款がみえ、5にも6文字の字款がみえ、「年製」のみ判読できる。6は景德鎮窯系青花碗であり、小野分類E群の饅頭心碗に分類できる。7・8・13は中国漳州窯系青花皿であり、7は碁笥底タイプのものである。9



第194図 II区出土遺物実測図② (1/3)



第195図 II区出土銭貨 (1/1)

は中国漳州窯系青花蓋である。10は古瀬戸瓶子である。11は中国景德鎮窯系碗であり、饅頭心タイプのものである。12は瀬戸美濃系陶器皿である。14・15は瀬戸美濃系陶器であり、14は折縁皿、15は菊皿である。16は中国産白磁瓶の口縁であり、口縁内面を菊文様の型押しで成形している。17は陶器碗である。中国南方あるいは東南アジアの所産であろうか。18は韓半島産陶器瓶であり、外面に象嵌技法による列点文がみられる。19・20は瀬戸美濃系陶器天目碗である。21は中国漳州窯系青花の大型の皿である。口縁は外反し、外面には胴部に縦方向の鐮を連続させる。

第194図1～6は京都系土師器皿である。2には口縁内外面にススが付着している。6は取瓶として再利用されており、内面に付着物がみられる。7は備前系焼締陶器徳利であり、底部外面にヘラ記号がみられる。8は焼締陶器底部片である。韓半島産の徳利であろうか。9は備前系焼締陶器瓶である。10は型造りの土製仏像であり、観音立像をあらわしている。11は瓦質土器釜である。12は瓦質土器鉢であり、高台が付く。13・14は備前系焼締陶器挿鉢である。15は瓦質土器鉢であり、内外面を丁寧になでている。16は瓦質土器火鉢であり、口縁内面をL字状に肥厚させ、内外面を丁寧に磨いている。17は瓦質土器火鉢であり、口縁付近に2条の突線がみられ、突線間には花のスタンプ文がみられる。18は瓦質土器鍋である。

第195図は銅銭である。1は「景德元寶」(1004年初鑄)、2は「元豊通寶」(1078年初鑄)、3は「咸平元寶」(998年初鑄)、4は「治平元寶」(1064年初鑄)、5は「至和元寶」(1054年初鑄)、6は「元祐通寶」(1086年初鑄)、7は「皇宋通寶」(1038年初鑄)である。

## 2. III区 (第196~200図)

III区の遺構群は14世紀代から営まれはじめる。14世紀にはSE031・SE032の井戸をはじめ不定形土坑であるSK009以外にはほとんどみられない。その後の空白期を経て、16世紀中葉には浅い不定形な落ち込みSX035が調査区の中央から南側をしめる。土取によるものと考えられるが、これらの遺構は調査区外南側に延びており、埋土中には水性堆積土が確認できるため、掘削後、一時期、放置され、滞水期間があったものかもしれない。しかし、SX035は後に埋め戻され、遺構群が形成されていく。

明確に遺構群の存在が確認できるのは、16世紀中葉～後葉に至ってからである。第198図に当該時期の遺構群をあらわしたが、数少ない円形土坑が営まれているのみであり、遺構の絶対数としては前代に引き続き貧弱である。遺構が爆発的増加をみるのは16世紀後葉～末葉に至ってからである。土坑・ピット・井戸等の遺構群が16世紀後葉～末葉の短期間でも切り合いをもちながら営まれているが、これらは必ずしも同時併存の遺構をあらわしたのではなく、様々な遺構群が時間差をもちながら営まれていたものである。調査区の東側では地形の落ちが確認でき、これは調査区外にもものびる。これが自然地形によるものか、土取り坑の名残であるかは本調査区での発掘調査において解決できないが、この地形上に16世紀後葉～末葉、遺構が営まれているため、当時もこの地形が存在し続けていたことがわかる。

さらに、近世以降、ほとんど水田化したためか、南北方向へ走る溝が2条確認されているのみである。

### a. 溝

#### SD001 (第199図)

調査区中央のK23区に位置する。約480cm、最大幅40cm、最大深約15cmの溝が残存していた。溝の方向はN-4° -Eである。SK030と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。出土遺物は土師質土器・瓦等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

#### SD001出土遺物 (第202図)

出土遺物は第202図に示した。京都系土師器皿であり、口縁部外面を強くヨコナデしている。

#### SD002 (第199図)

調査区中央のK22区・K23区に位置する。東西に約180cm、最大幅60cm、最大深約10cmの溝が残存していた。溝の方向は東西に近い。SD004と繋がる同一遺構の可能性をもち、また、SK023と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。埋土は炭や焼土粒を含む褐色土からなる。出土遺物は土師質土器・備前系焼締陶器播鉢等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

#### SD002出土遺物 (第203図)

出土遺物は第203図に示した。第203図1は中国白磁皿であり、端反りの口縁をもつタイプである。2は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。

#### SD003 (第199図)

調査区中央よりやや南西のK22区・K23区に位置する。南北に約140cm、最大幅20cm、最大深約5cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近い。SP067と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。SP067とともに大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。出土遺物は瓦がわずかに出土しているのみで、図化しえるものはなかった。しかし、他に共通する埋土の遺構時期から16世紀後葉～末に属する遺構であることがわかる。

第2節 遺構と遺物



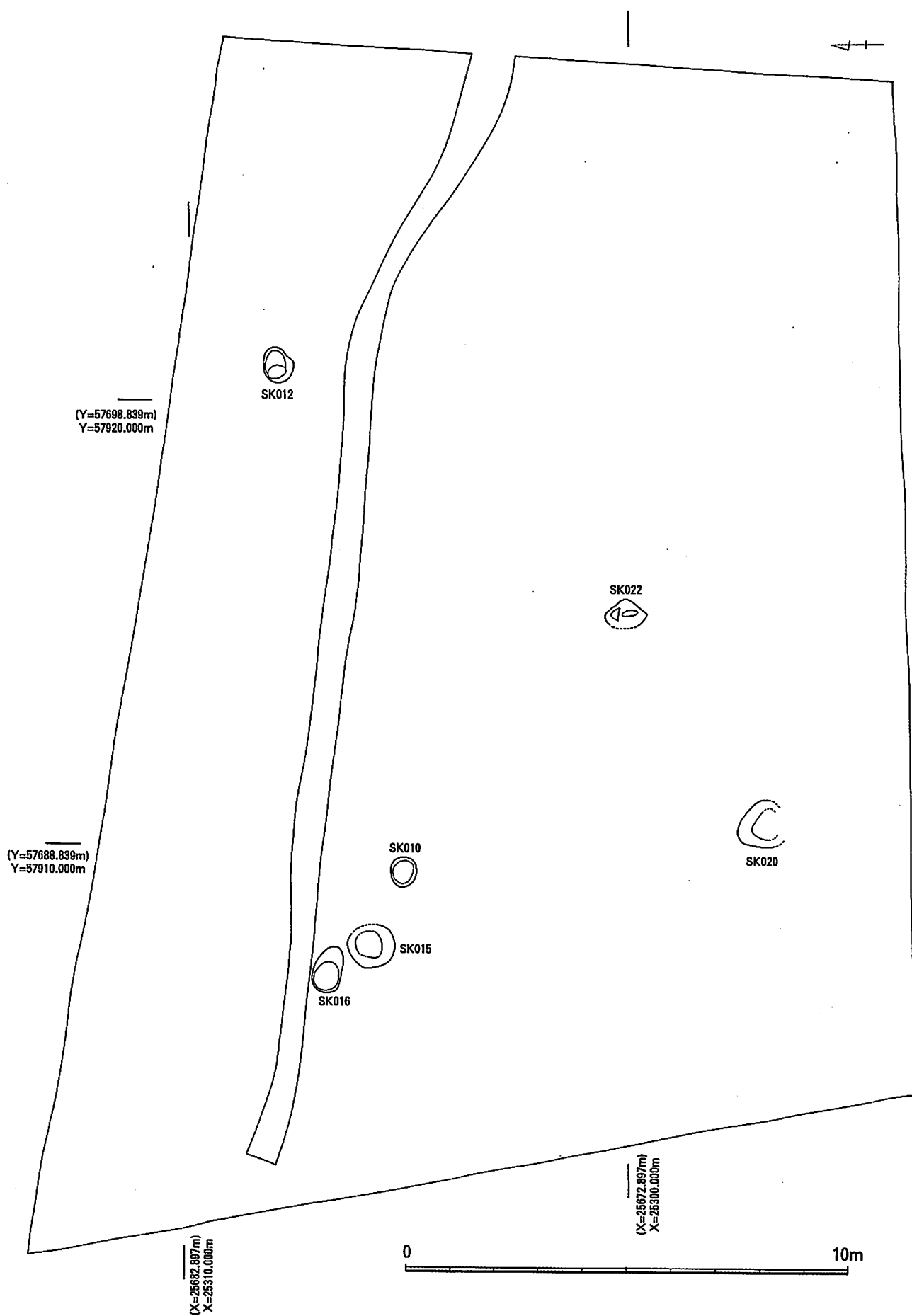
第196図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第1段階 14世紀)



第197図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第2段階 15世紀末葉~16世紀前葉)



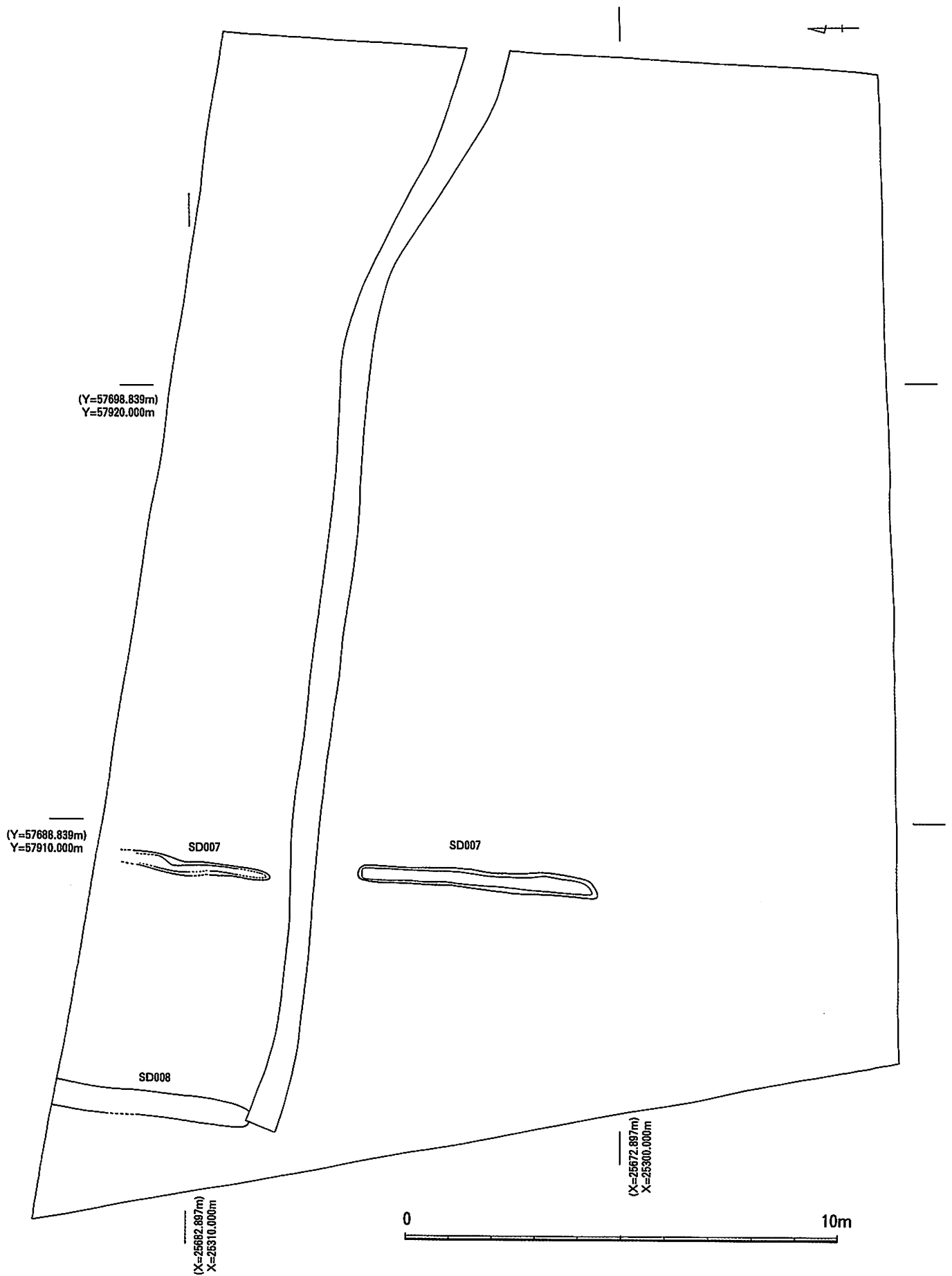
第2節 遺構と遺物



第198図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第3段階 16世紀中葉~後葉)



第2節 遺構と遺物



第200図 第9次調査区Ⅲ区遺構配置図(第5段階 近世以降)

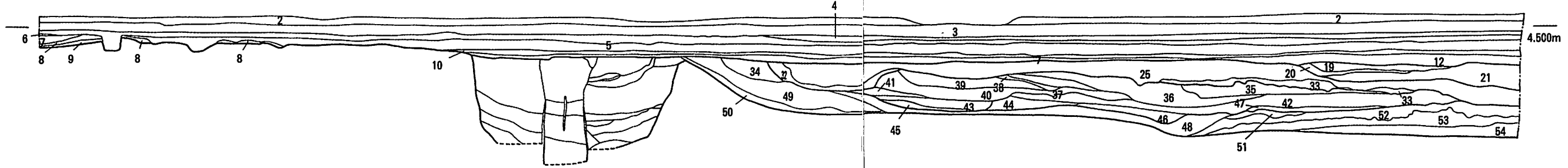
第4表 III区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD001	SD4	溝	K23区	16世紀後葉～末葉		
SD002	SD5	溝	K22区・K23区	16世紀後葉～末葉		
SD003	SD6	溝	K22区・K23区	16世紀後葉～末葉		
SD004	SD7	溝	L23区	16世紀後葉～末葉		
SD005	SD8	溝	L22区	16世紀後葉～末葉		
SD006	SD9	溝	L22区	16世紀後葉～末葉		
SD007	SD3	溝	K21区・K22区	中世末～近世		
SD008	SD1	溝	K21区・K22区	近世		
SK009	SK21	土坑	L22区・L23区	14世紀前半		
SK010	SK14	土坑	K22区	16世紀後半		
SK011	SK1	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器廃棄土坑	
SK012	SK2	土坑	M22区	16世紀中葉～後葉		
SK013	SK3	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉		
SK014	SK4	土坑	K22区	16世紀後葉～末葉		
SK015	SK5	土坑	K22区	16世紀中葉～後葉?		
SK016	SK6	土坑	K22区	16世紀中葉～後葉		
SK017	SK7	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉		
SK018	SK8	土坑	K22区	16世紀後葉～末葉		
SK019	SK9	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉		
SK020	SK10	土坑	K23区	16世紀中葉～後葉		
SK021	SK11	土坑	L22区・L23区	16世紀後葉～末葉	方形竪穴状遺構	
SK022	SK12	土坑	L22区・L23区	16世紀中葉～後葉		
SK023	SK13	土坑	K22区・L22区・L23区・K23区	16世紀後葉～末葉		
SK024	SK17	土坑	M22区	16世紀後葉～末葉		
SK025	SK18	土坑	M22区	16世紀後葉～末葉		
SK026	SK20	土坑	M23区	16世紀後葉～末葉		
SK027	SX7	土坑	L22区・L23区	16世紀後葉～末葉		
SK028	SX8	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉		
SK029	SX3	土坑	L23区	16世紀後葉～末葉		
SK030	SX4	土坑	K23区	16世紀後葉～末葉		
SE031	SX1	井戸	K21区・L21区	14世紀前葉		
SE032	SE1	井戸	M22区	14世紀中葉～後葉		
SE033	SX5	井戸	L23区・M23区	16世紀後葉～末葉		
SX034	SX2	落ち込み	M22区	16世紀後葉～末葉		
SX035	SX6	落ち込み	K22区・L22区・L23区・K23区	16世紀前葉		
SP036	SP53	ピット	L22区	16世紀後葉～末葉		
SP037	SP54	ピット	L22区	16世紀後葉～末葉		
SP038	SP1	ピット	K21区	14世紀～16世紀		
SP039	SP43	ピット	L22区	15世紀末～16世紀前葉		
SP040	SP11	ピット	K22区	16世紀後半		
SP041	SP12	ピット	K22区	16世紀後半		
SP042	SP13	ピット	K22区	16世紀後半		
SP043	SP35	ピット	K22区	16世紀後半		
SP044	SP39	ピット	K23区	16世紀後半		
SP045	SP60	ピット	K21区	16世紀後半		
SP046	SP2	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP047	SP3	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP048	SP4	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP049	SP5	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP050	SP6	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP051	SP7	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP052	SP8	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP053	SP9	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP054	SP10	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP055	SP14	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP056	SP21	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP057	SP22	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP058	SP23	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP059	SP24	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP060	SP25	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		

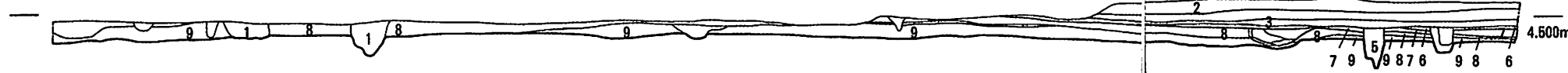
第5表 III区遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP061	SP26	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP062	SP27	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP063	SP28	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP064	SP30	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP065	SP31	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP066	SP32	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP067	SP33	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP067	SP34	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP068	SP36	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP069	SP37	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP070	SP38	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP071	SP40	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP072	SP41	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP073	SP42	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP074	SP45	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP075	SP46	ピット	K23区	16世紀後葉～末葉		
SP076	SP56	ピット	L22区	16世紀後葉～末葉		
SP077	SP57	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP078	SP59	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		
SP079	SP61	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP080	SP62	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP081	SP63	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP082	SP52	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		
SP083	SP58	ピット	L23区	16世紀後葉～末葉		
SP084	SP20	ピット	K22区	16世紀後葉～末葉		
SP085	SP55	ピット	K21区	16世紀後葉～末葉		

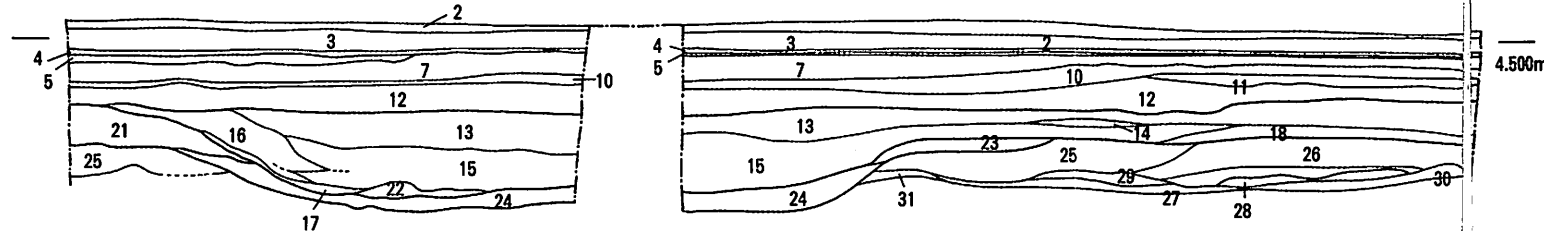
第9次調査区Ⅲ区北壁



第9次調査区Ⅲ区西壁



第9次調査区Ⅲ区東壁



- 1 擬乱土
- 2 青灰色粘質土 (昭和期水田耕作土)
- 3 におい黄橙色土 (昭和期水田床土 II区の3層に相当する)
- 4 におい黄橙色土 (酸化鉄沈着層 II区の4層に相当する)
- 5 におい黄橙色土 (焼土塊・焼土粒をひじょうに多く含む固い整地層であり、上部には酸化鉄の沈着がみられる)
- 6 灰色シルト (マンガンの沈着がみられる)
- 7 褐色土 (遺物包含層 小さな炭・焼土粒をわずかに含む II区の7層に相当する)
- 8 におい橙色土 (遺物包含層 京都系土師器を中心とした土器が多く含まれる 焼土粒もみられる)
- 9 におい黄橙色土 (遺物を若干含む 地山であるにおい黄橙色土ブロックが若干含まれる 粘質性の均質な整地層)
- 10 褐色土 (遺物包含層 7層と近似するが、マンガンの沈着がみられる II区の9層に相当する)
- 11 黄褐色土 (遺物包含層 II区の13層に相当する)
- 12 褐色土 (遺物包含層 7・10層と近似するが、上部にマンガンの沈着がみられる II区の10層に相当する)
- 13 19・20層の混在層 (21層と同一層か 地山と思われる黄橙色土がブロック状にはいるが、16層より薄い)
- 14 におい黄橙色土 (13・15層と近似するが、焼土粒が多く含まれる)
- 15 におい黄橙色土 (地山ブロックがわずかに含まれる 炭・焼土が微量に含まれる II区の42層に相当するものか)
- 16 におい黄橙色土 (地山土を掘削してここに盛土したものか ブロック状の堆積土 19層と同一層)

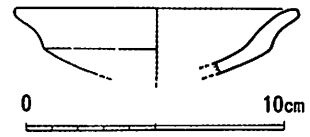
- 17 褐灰色土 (21層と16層はきわめて近い時期の整地であると考えられるが、一定期間、放置されていた時期に堆積した土であるものと思われる)
- 18 褐色土 (II区の43・44層に対応するものと考えられる)
- 19 におい黄橙色土
- 20 灰黄褐色土
- 21 19・20層の混在層 (13層と同一層か)
- 22 褐灰色土 (17層ときわめて近似する)
- 23 におい黄褐色土 (24層と近似する)
- 24 褐灰色粘質土 (SX034埋土 川原石・遺物・炭・焼土粒が多く含まれる 取瓶・鉄滓など、特に鍛冶関係の遺物がみられる)
- 25 黒褐色土 (遺物包含層 II区の45層と同じか)
- 26 黒褐色土 (遺物包含層 下部にきわめて多くの遺物を含む II区の45層と同じか)
- 27 黒褐色土 (26層とひじょうに近似するが、26層下部に比較して遺物が少ない)
- 28 黄褐色砂 (29層と同一層か)
- 29 黄褐色砂 (28層と同一層か)
- 30 におい黄橙色粘質土 (シルト質で均質 遺物・炭・焼土はほとんどみられない)
- 31 におい黄橙色粘質土 (均質で遺物・炭・焼土はほとんどみられない)
- 32 黒褐色土 (遺物包含層 炭・灰を多量に含む)
- 33 灰黄褐色砂 (褐色粘質土粒を多く含む)
- 34 灰褐色土 (炭をわずかに含む)

- 35 褐色土 (7層と36層の漸移層)
- 36 におい黄褐色粘質土
- 37 におい黄褐色粘質土 (36層よりやや明るい)
- 38 におい黄褐色土 (きわめて多量の灰が含まれる)
- 39 におい黄褐色土 (37層とほとんど同じ 炭・焼土・遺物を含む)
- 40 におい橙色土 (遺物包含層 京都系土師器を中心とした土器が多く含まれる 焼土粒を含む)
- 41 褐色土 (40層に近似する)
- 42 におい橙色土 (遺物を若干含む 地山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる 粘質性の均質な整地層)
- 43 褐色土 (地山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 44 褐色土 (地山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 45 におい黄褐色砂 (自然堆積層と考えられる)
- 46 褐色土 (地山であるにおい黄褐色土ブロックがわずかに含まれる)
- 47 におい黄褐色土 (42層と似ており、基本的に同一層であると思われるが、42層よりやや青く暗い)
- 48 におい黄褐色粘質土
- 49 灰黄褐色土
- 50 褐灰色土
- 51 におい黄褐色砂 (洪水など水流に伴う自然堆積層と考えられる)
- 52 黄灰色粘質土
- 53 黄褐色砂質土
- 54 におい黄褐色粘質土

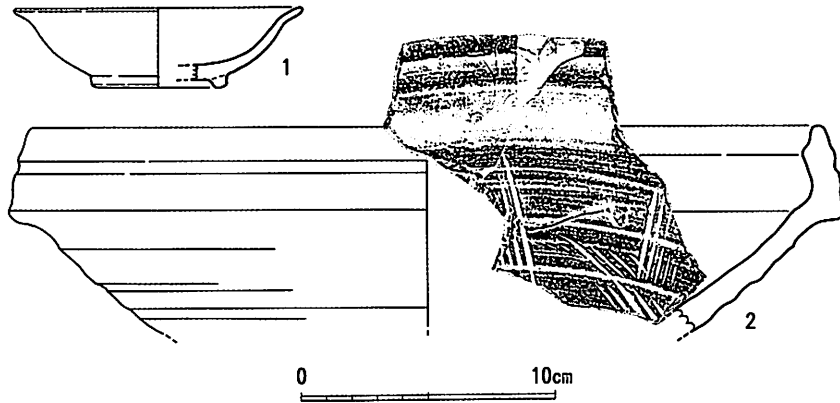
第201図 第9次調査区Ⅲ区トレンチ土層断面図 (1/80)

SD004 (第204図)

調査区中央のL22区・L23区に位置する。東西に約140cm、最大幅80cm、最大深約20cmの溝が残存していた。溝の方向は東西に近い。SD002と繋がる同一遺構の可能性をもち、また、SK023と切り合い関係を持つ可能性が高いが、先後関係は確認しえなかった。埋土は炭や焼土粒を含む褐色土からなる。出土遺物は瓦や土師質土器・備前系焼締陶器製がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。



第202図 III区SD001出土遺物実測図 (1/3)



第203図 III区SD002出土遺物実測図 (1/3)

SD004出土遺物 (第205図)

出土遺物は第205図に示した。第205図1は龍泉窯系青磁碗の底部片であり、円盤状に加工して再利用している。2は京都系土師器皿であり、器壁が厚く塩地編年3期に属するものであろう。3は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。

SD005 (第199図)

調査区中央よりやや北のL22区に位置する。南北に約1.7m、最大幅80cm、最大深約40cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近いが、真北かどうか判断できるほどの残存ではなかった。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD005出土遺物 (第206図)

出土遺物は第206図に示した。第206図1・2は京都系土師器皿であり、2は口縁外面につよいヨコナデを施している。3は瓦質土器鉢であり、口縁部を屈曲させて直立させ、体部外面には細かい横方向のケズリを施している。

SD006 (第199図)

調査区中央よりやや北のL22区に位置する。南北に約1.8m、最大幅60cm、最大深約20cmの溝が残存していた。溝の方向は南北に近いが、真北かどうか判断できるほどの残存ではなかった。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかった。

SD006出土遺物 (第207図)

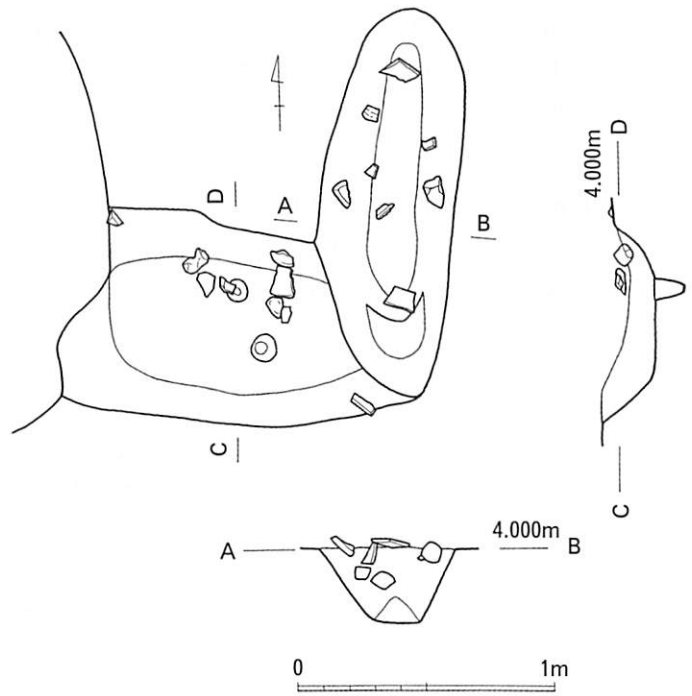
出土遺物は第207図に示した。第207図は京都系土師器坏であり、塩地編年3期に属するものである。

SD007 (第200図)

調査区中央のK21区・K22区に位置する。約550cm、最大幅50cm、最大深約25cmの溝が残存していた。溝の方向はN-4°-Eである。出土遺物は瓦等がわずかに出土しているのみで、図化しえるものはなかった。

SD008 (第200図)

調査区中央よりやや北のK21区・K22区に位置する。南北に約4.5m、最大幅60cm、最大深約20cmの溝が残存しており、南側は終息するが北側は22次調査区に延びる。溝の方向はN-7°-Eである。出土遺物は瓦や土師質土器がわずかに出土しているのみで、図化しえるものも少なかったが、ほとんどは16世紀後半のものであった。しかし、調査区北壁にみられる土層の観察から近世に帰属するものと考えられる。

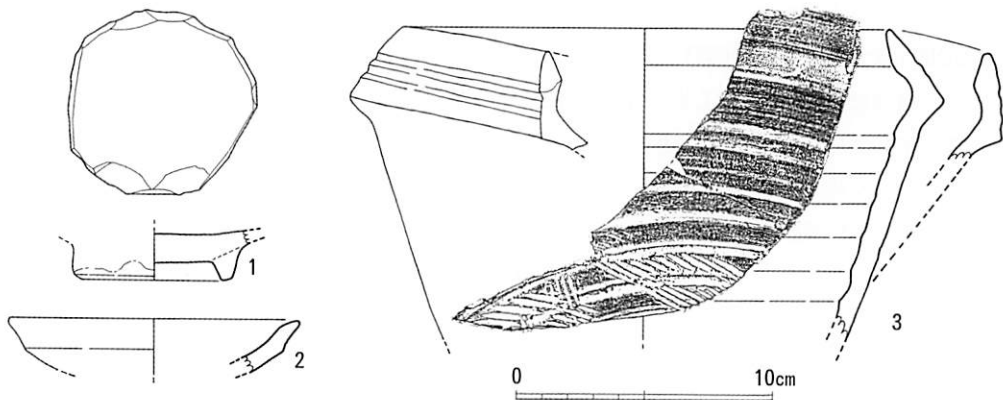


第204図 III区SD004実測図 (1/30)

b. 土坑

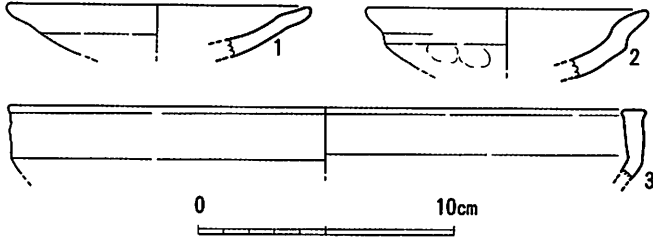
SK009 (第196図)

調査区中央東端のL22区・L23区に位置する。SD004・SP036・SP037下から検出され、SX035に切られている。長軸約115cm、最大幅約60cm、最大深約50cmの不定形土坑である。埋土中から少量の土師質土器杯皿類が出土しているが、皿のみ図化できた。

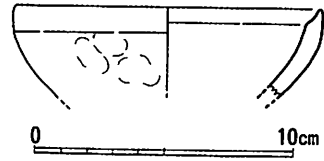


第205図 III区SD004出土遺物実測図 (1/3)





第206図 III区SD005出土遺物実測図 (1/3)



第207図 III区SD006出土遺物実測図 (1/3)

**SK009出土遺物 (第208図)**

出土遺物は第208図に示した。すべて土師質土器小皿であり、底部は回転糸切りにより切り離されている。

**SK010 (第198図)**

調査区中央よりやや北西側のK22区に位置する。長径約70cm、短径約60cm、最大深約35cmの楕円形土坑である。出土遺物は非常に少なく、図化できたものも備前系焼締陶器壺の1点であった。

**SK010出土遺物 (第209図)**

出土遺物は第209図に示した。備前系焼締陶器壺であり、内外面にロクロ痕が残る。

**SK011 (第210図)**

調査区中央より、南西側のK23区に位置する。長径2.4m以上、短径2.0m、深さ0.15mを測る楕円形の浅い皿状を呈する土坑であり、西側の肩は調査区外に延びる。埋土にはほとんどすべてが京都系土師器片からなり、土器廃棄土坑であることがわかる。出土遺物は1000点近くにおよび、そのうち970点あまりは京都系土師器であり、残り10数点は在地系土師質土器である。

**SK011出土遺物 (第211図)**

出土遺物は第211図に示した。ほとんどが京都系土師器皿であり、図化できる資料のごく一部のみ掲載した。6は煤が付着し、灯明皿として使用されたものであろうか。法量・形態とも多様であり、塩地編年1～3期のものが混在する様相をもつ。

**SK012 (第212図)**

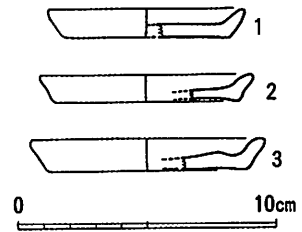
調査区中央より、北西側のM22区に位置する。長径0.75m、短径0.7m、深さ0.5mを測る円形の土坑である。埋土は砂であり、下層には砂質土が堆積していた。遺物は上層から出土しており、凝灰岩の破片を多く含む。遺物は京都系土師器を主体に土師質土器・備前系焼締陶器・瓦などが出土している。中には土壁と思われる焼土塊もみられる。

**SK012出土遺物 (第213図)**

出土遺物は第213図に示した。1～4は京都系土師器皿であり、塩地編年1～2期に属するものであろう。5は土師質土器坏であり、底部には回転糸切り痕がみられる。

**SK013 (第214図)**

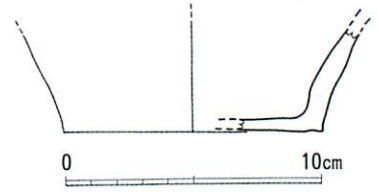
調査区南西端のK23区に位置する。長径1.55m、短径0.75m、深さ0.25mを測る長楕円形の土坑である。埋土は被熱により赤変した拳大から人頭大よりやや小さい礫が大量に廃棄されていた。埋土中には炭・焼土はあまり含まれておらず、黒褐色土が堆積していた。遺物は京都系土師器や備前系焼締陶器・瓦などが少量出土している。



第208図 III区SK009出土遺物実測図 (1/3)

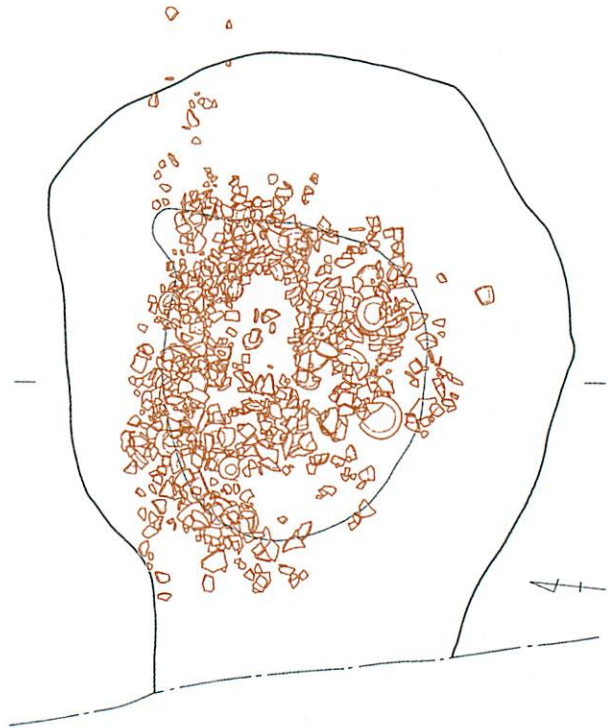
SK013出土遺物（第215図）

出土遺物は第215図に示した。1は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。2は備前系焼締陶器壺である。3は方柱体の砥石であるが、表裏面の2面を砥面として利用している。



第209図 III区SK010出土遺物実測図（1/3）

調査区北西端のK22区に位置する。南西側部分はプランを明確に確認しえなかったが、長径0.55m、短径0.50m、深さ0.27mを測る円形の土坑であろう。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は京都系土師器や備前系焼締陶器・褐釉陶器・瓦などが少量出土している。



SK014出土遺物（第216図）

出土遺物は第216図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、塩地編年3期に属するものであろう。4は備前系焼締陶器徳利の底部である。5は備前系焼締陶器挿鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。6は褐釉陶器壺であり、内外面に釉薬がかけられている。7は方柱体の砥石であるが、表面のみ砥面として利用している。8は安山岩製石臼の下臼である。

SK015（第217図）

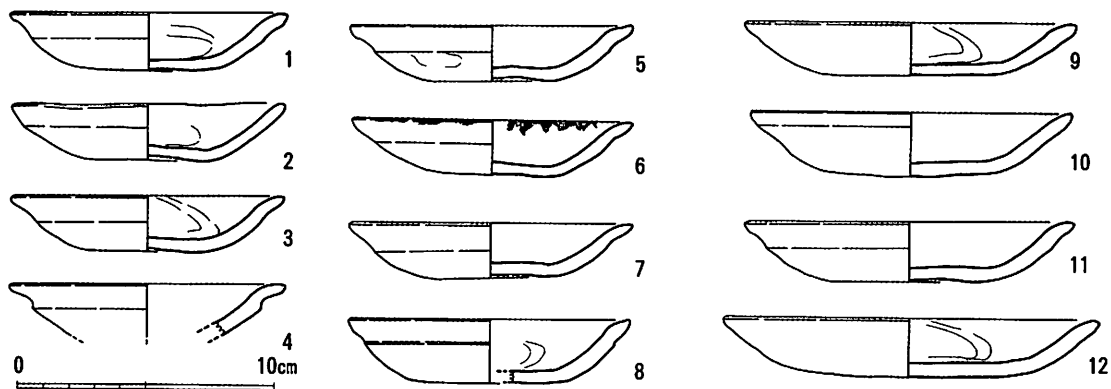
調査区中央よりやや北西のK22区に位置する。長径1.1m、短径0.95m、深さ0.25mを測る円形の土坑である。土坑内において径30

cm、深さ45cmを測るピットが確認されたが、この遺構に伴うものか、切り合い関係にあるものかは確認できなかった。埋土中には比熱により赤変した拳大～人頭大の礫がみられるが、炭や焼土があまり含まれていなかった。時期を確定する遺物はみられなかったが、16世紀中葉～後葉のものであろう。

SK016（第198図）

調査区北西端のK22区に位置する。南西側部分はプランを明確に確認しえなかったが、長径0.55m、短径0.35m、深さ0.35mを測る楕円形の土坑である。京都系土師器をはじめとし遺物が少量出土している。

第210図 III区SK011実測図（1/30）



第211図 Ⅲ区SK011出土遺物実測図 (1/3)

SK016出土遺物 (第218図)

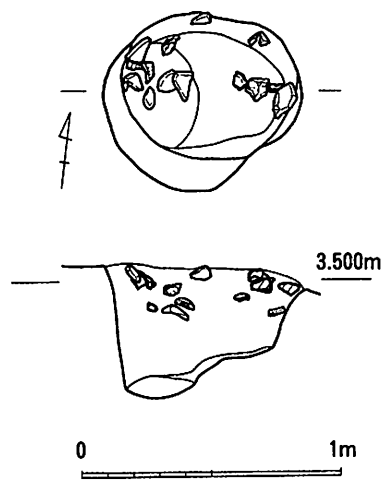
出土遺物は第218図に示した。1～2は京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。

SK017 (第199図)

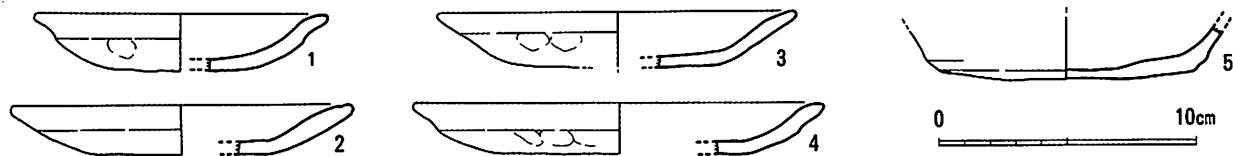
調査区西南のK23区に位置する。SK030と切り合い関係を持つ不定形な土坑が錯綜する遺構である。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は京都系土師器や瓦質土器・瓦などが少量出土している。

SK017出土遺物 (第219・220図)

出土遺物は第219・220図に示した。第219図1は中国産白磁皿である。2～7は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。第220図は瓦質土器火鉢であり、器面を丁寧にみがいている。



第212図 Ⅲ区SK012実測図 (1/30)



第213図 Ⅲ区SK012出土遺物実測図 (1/3)

SK018 (第199図)

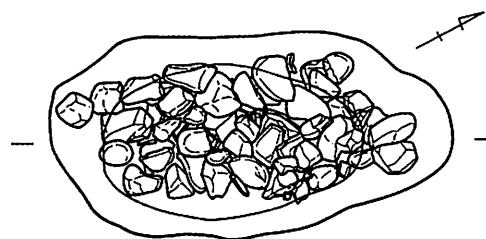
調査区中央西側のK22区に位置する。ピットにより切られているが、長径0.8m、短径0.3m、深さ0.2mを測る不定形の土坑である。遺物が少量出土しているが、図化しえるものはなかった。

SK019 (第221図)

調査区中央より南側のK23区に位置する。長径1.1m、短径1.0m、深さ0.35mを測る隅丸方形の土坑である。SK019と重複してSK020が確認されたが、SK020をSK019が切っていることが確認できた。埋土中には大量の炭や焼土が含まれており、火災処理に伴う遺構であることがわかる。

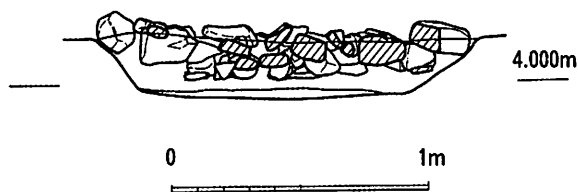
SK019出土遺物（第222図）

出土遺物は第222図に示した。1は瓦質土器蓋である。厚手の器壁をもち、手づくねで成形している。2は京都系土師器坏であり、塩地編年3期に属するものであろう。3は雁振瓦であり、凹面にコビキ痕と布目痕が残る。



SK020（第221図）

調査区中央より南側のK23区に位置する。SK019と重複してSK020が確認されたが、SK020をSK019が切っていることが確認できた。規模はほぼSK019と同じである。埋土中には炭や焼土がみられず、褐色土により埋められていた。出土遺物は京都系土師器や備前系焼締陶器・瓦などが少量出土している。



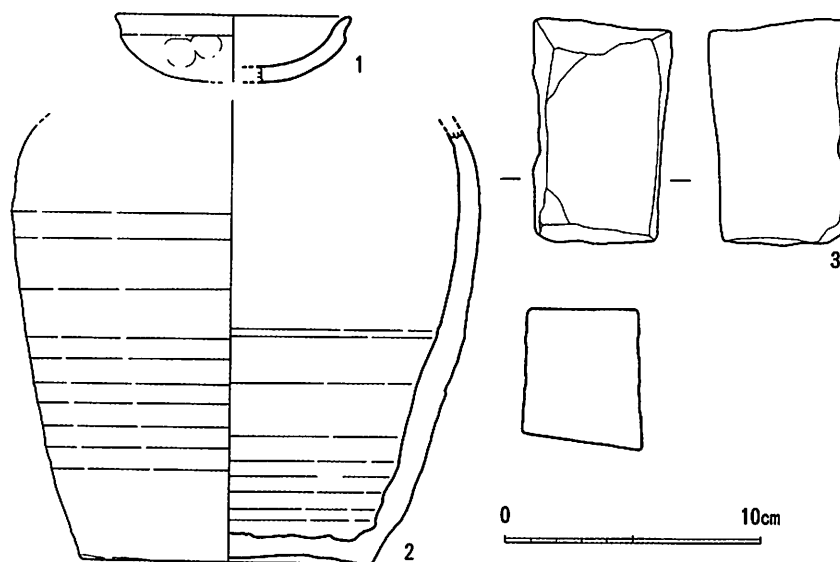
第214図 Ⅲ区SK013実測図（1/30）

SK020出土遺物（第223図）

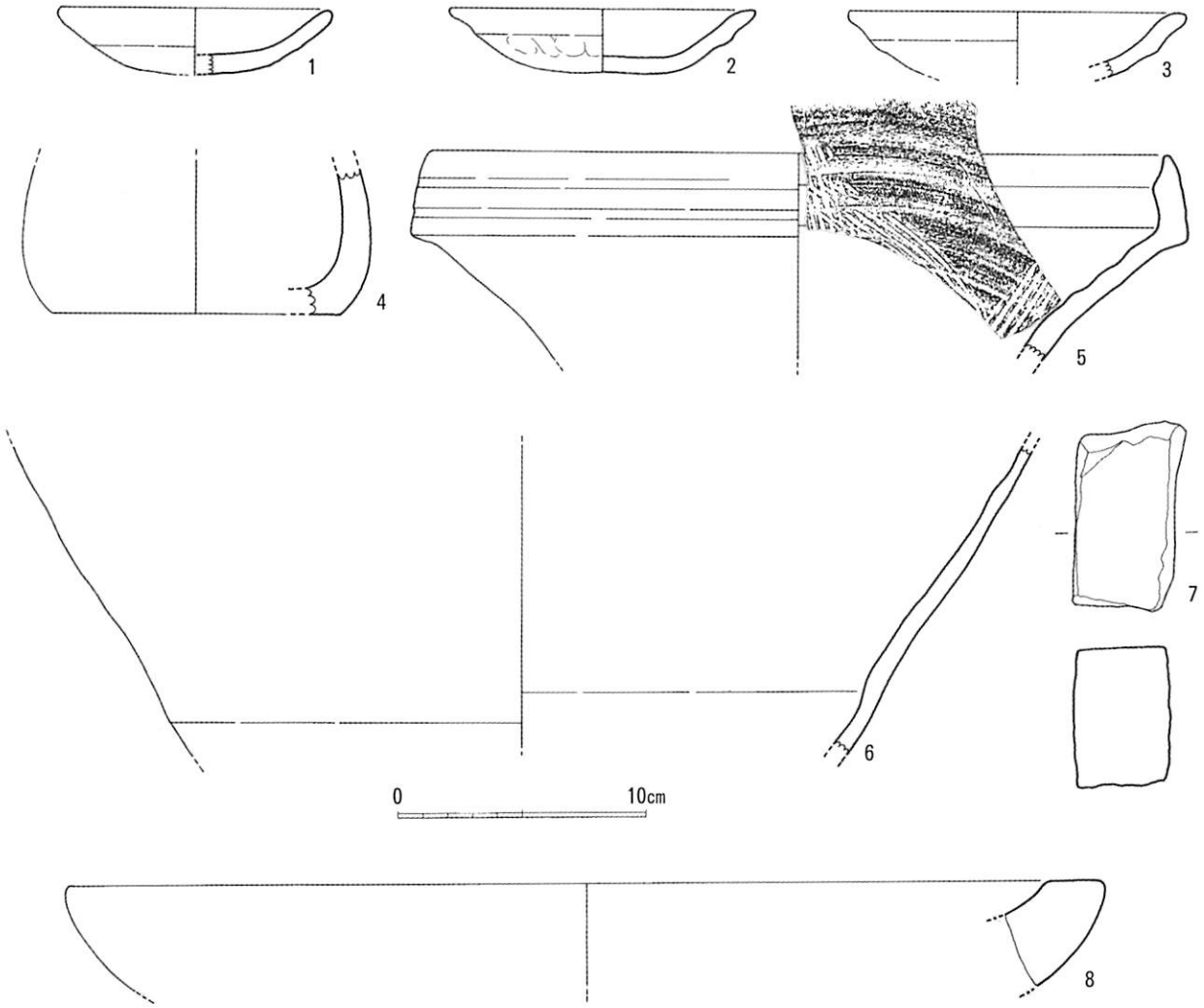
出土遺物は第223図に示した。1～3は京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものであろう。

SK021（第224図）

調査区中央より、やや南側のL22区・L23区に位置する。南北2.8m、東西2.3m、深さ0.25mを測る方形竪穴状遺構である。遺構内西側に10cm程度の若干、高い部分とともに深さ10cm程度の南北に走る2条の溝が確認できた。埋土中には大量の炭・焼土・灰・地山ブロックなどが含まれており、火災



第215図 Ⅲ区SK013出土遺物実測図（1/3）

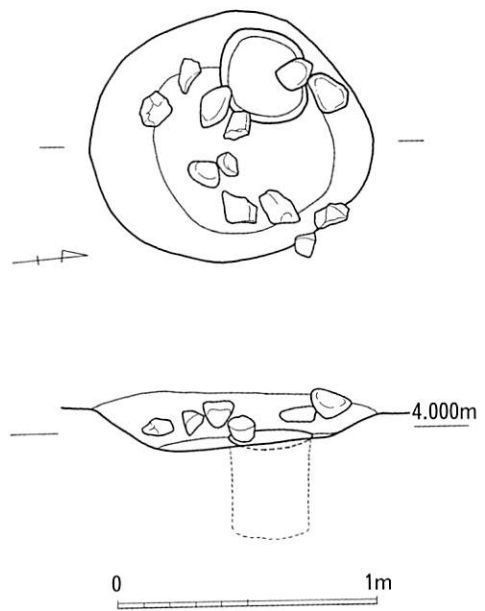


第216図 III区SK014出土遺物実測図 (1/3)

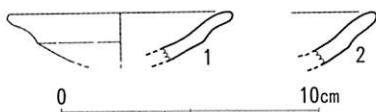
処理に伴う遺構であることがわかる。遺物は拳大からやや大きな礫と瓦・京都系土師器・焼締陶器等の遺物が比較的まとまって出土している。

SK021出土遺物 (第225・226図)

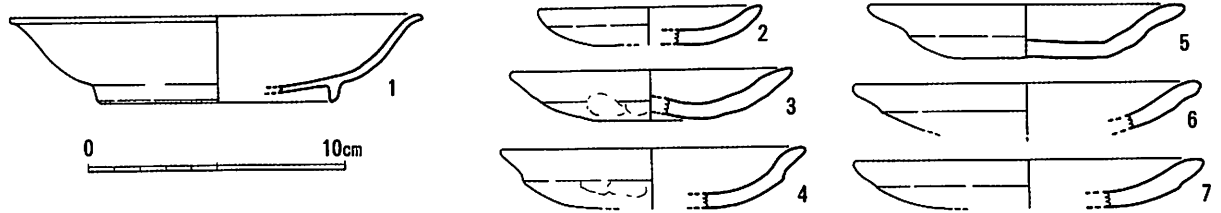
出土遺物は第225・226図に示した。第225図1は中国五彩皿である。2は中国製白磁皿であり、見込み部には蛇の目状に釉剥ぎがみられる。3は瀬戸美濃系陶器丸皿である。4～7は京都系土師器皿であり、その特徴から塩地編年2～3期に属するものであろう。9・12は備前系焼



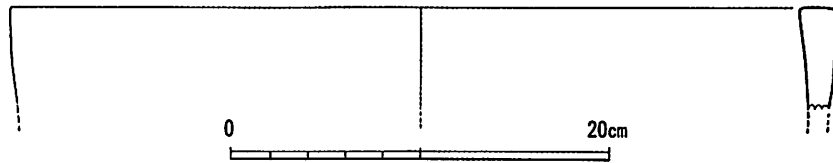
第217図 III区SK015実測図 (1/30)



第218図 III区SK016出土遺物実測図 (1/3)



第219図 Ⅲ区SK017出土遺物実測図① (1/3)



第220図 Ⅲ区SK017出土遺物実測図② (1/4)

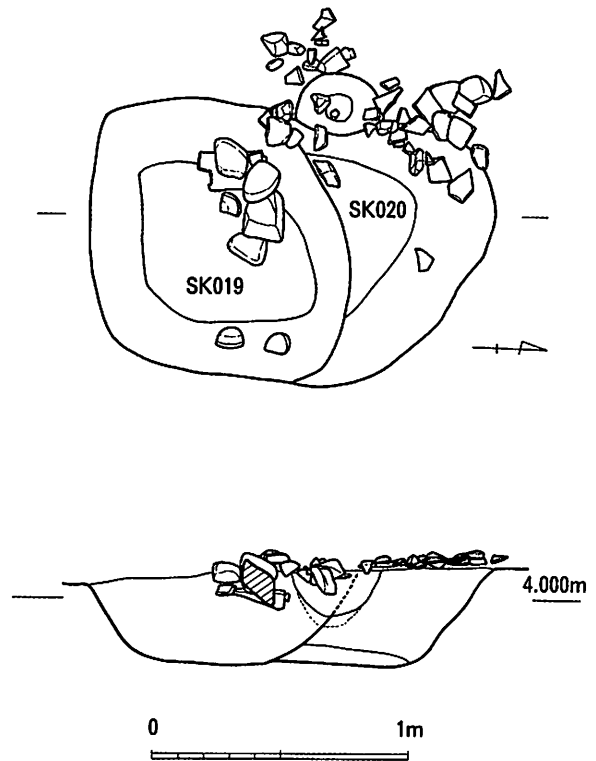
締陶器壺であり、9の肩部には櫛描波状文が、また、12の肩部には耳がみられる。10は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。11は備前系焼締陶器鉢であり、注口が折損している。8は褐釉陶器壺である。中国南方産か。13は扁平な棒状鉄製品で用途は明らかでない。

第226図1・2は瓦質土器火鉢である。

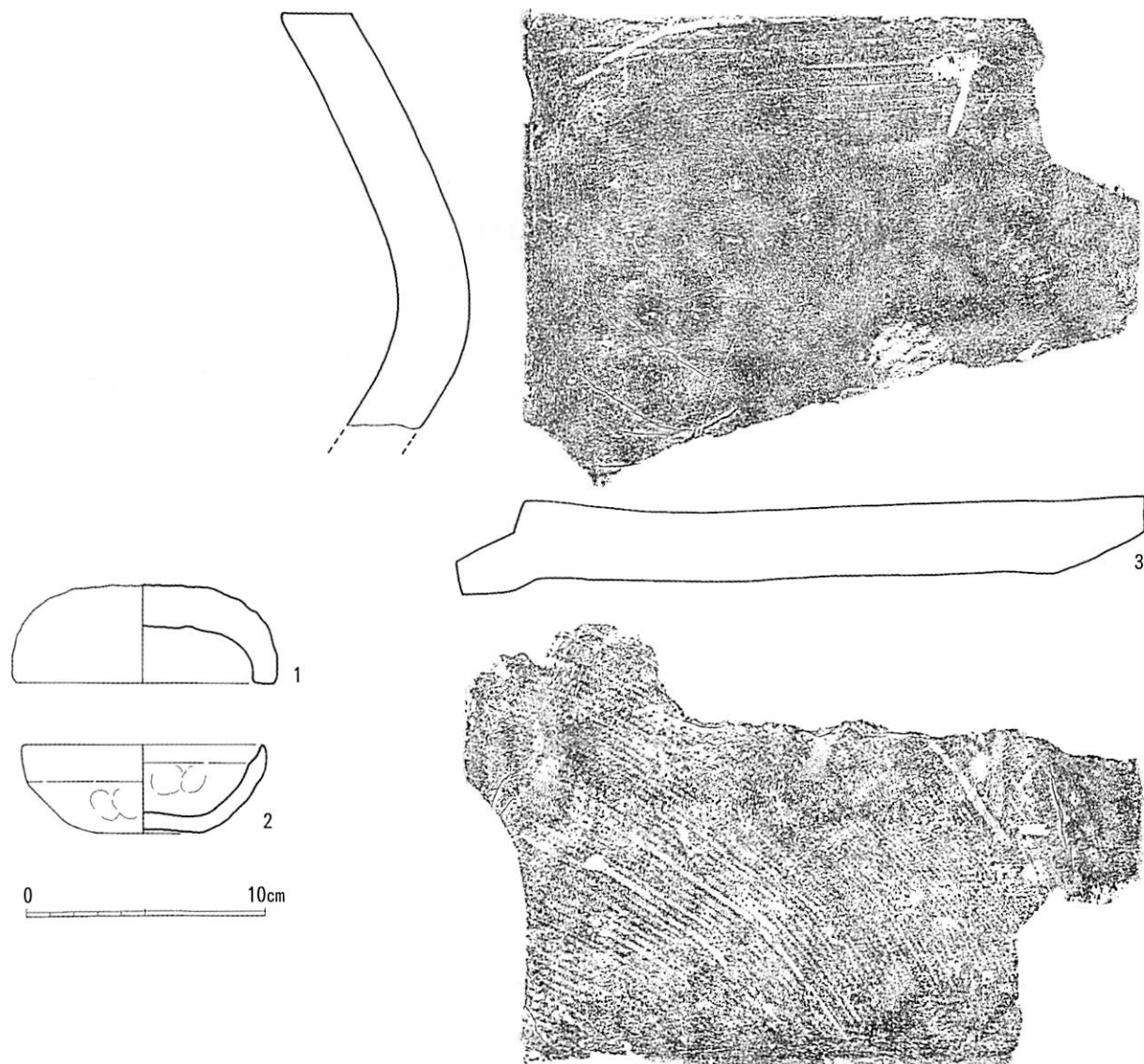
1の口縁はL字状に外方に肥厚させている。2には内面に横方向のハケ目がみられ、口縁内外面と外面には丁寧なミガキが施されている。口縁外面にはへら状工具による縦方向の線刻を連続させている。3は丸瓦の玉縁部であり、釘穴がみえる。内面には布目および吊り紐痕が残る。4は鞆羽口であろうか。一部赤変している。

SK022 (第198図)

調査区中央より、やや南側のL22区・L23区に位置する。南北1.0m、東西0.6m、深さ0.35mを測る長楕円形土坑である。SK021の東側に接して、若干の切り合い関係をもち、営まれているが、先後関係を把握できなかった。また、SK021からは良好な遺物はみられず、若干の土師質土器・瓦質土器が出土しているのみで、出土遺物からも先後関係は明言できない。



第221図 Ⅲ区SK019・SK020実測図 (1/30)



第222図 III区SK019出土遺物実測図(1/3)

SK022出土遺物(第227図)

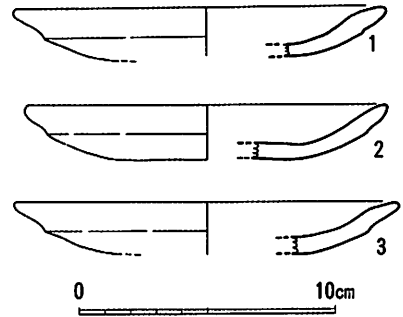
出土遺物は第227図に示した。第227図1・2は京都系土師器皿であり、塩地編年2期に属するものである。3は在地系土師質土器坏である。4は瓦質土器鉢であろうか。内外面に丁寧なナデ・ミガキがみえる。

SK023(第228図)

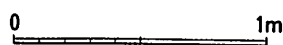
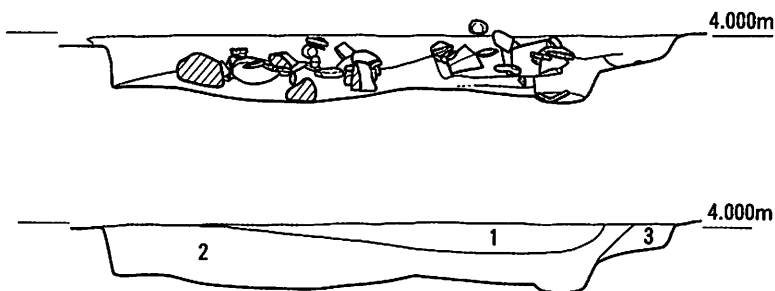
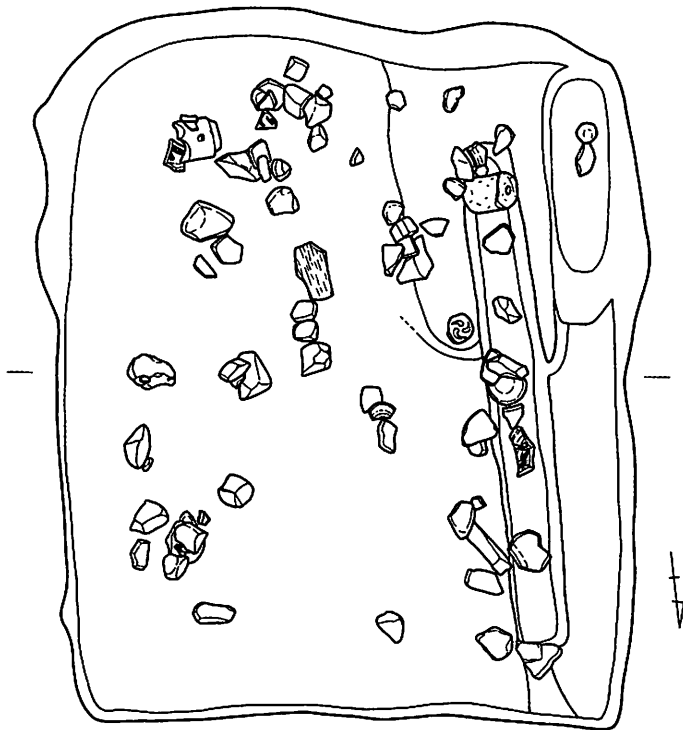
調査区中央のK・L-22・23区に位置する。南北に約190cm、最大幅135cm、最大深約25cmの楕円形土坑である。SD002・SD004と切り合い関係を持つが、両者とも埋土が炭や焼土粒を含む褐色土からなり、先後関係は確認しえなかった。埋土中には遺物とともに、被熱を受け、赤変した礫を含む拳大からやや大きな礫が多量に含まれていた。出土遺物は瓦や土師質土器・備前系焼締陶器甕・中国産青花・白磁などが出土している。

SK023出土遺物（第229図）

出土遺物は第229図に示した。1は中国景德鎮窯系青花碗であり、底部高台内に圈線を廻らし、「大明年造」の字款がみえる。2は中国産青磁皿である。3は2次焼成を受けた中国産白磁皿である。4は中国産白磁皿であり、高台内に「井」字状の記号を描いている。5は中国龍泉窯系青磁盤である。6～9は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。10は京都系土師器杯であろうか。10は焼締陶器壺であり、備前系の産であろうか。外面上半に回転ナデを、また、下半はヘラケズリ施し、口縁部は胴部から短く外反させている。12



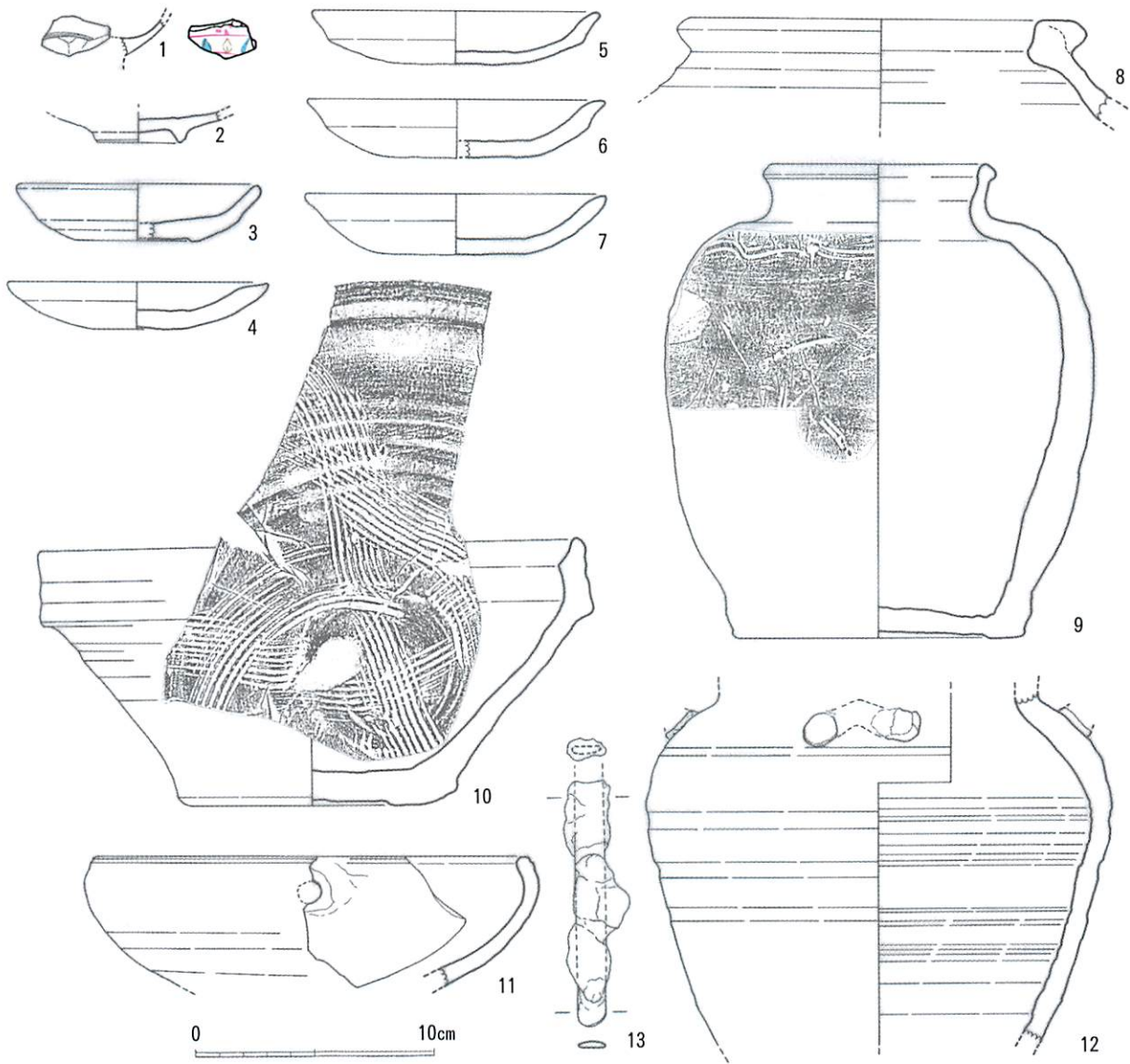
第223図 III区SK020出土遺物実測図（1/3）



- 1 褐色土（小さい炭・焼土が少量含まれる）
- 2 褐色土（炭・焼土・灰・地山ブロックが多く含まれる）
- 3 にぶい黄橙色土

第224図 III区SK021実測図（1/30）





第225図 III区SK021出土遺物実測図① (1/3)

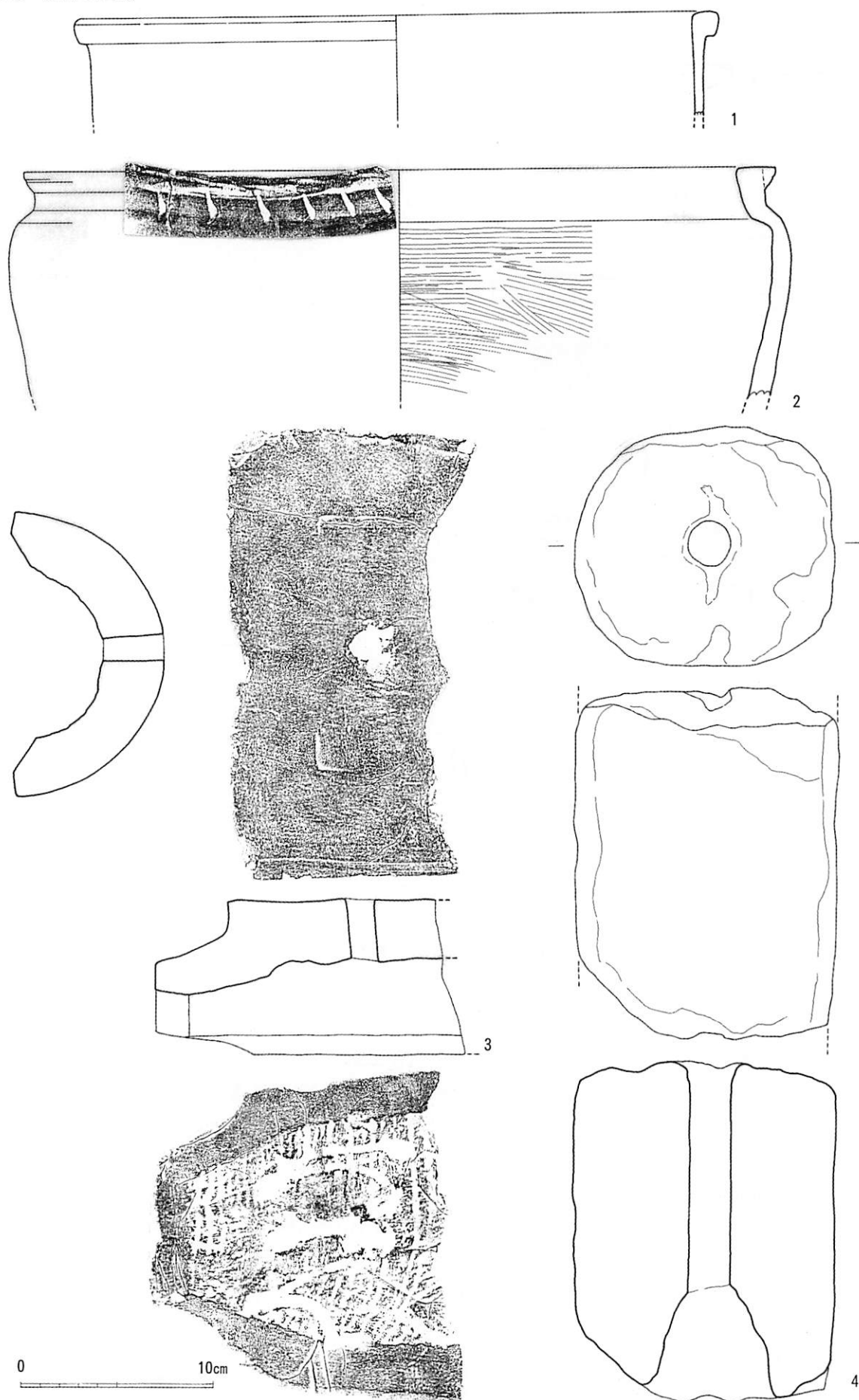
は瓦質土器鉢である。やや焼成が甘く、土師質を呈する。14は備前系焼締陶器の風炉状の器形をした特殊製品である。袋状の胴部に逆ハート形の大きな透かしを設けている。16は平瓦を円盤状に加工して再利用したものであるが、機能は明らかでない。しかし周縁部が磨滅しており、周縁で磨る行為に利用したものであることがわかる。13は薄く湾曲した青銅製品であるが、その用途は明らかでない。15は扁平な棒状鉄製品であるが、その用途は明らかでない。

SK024 (第230図)

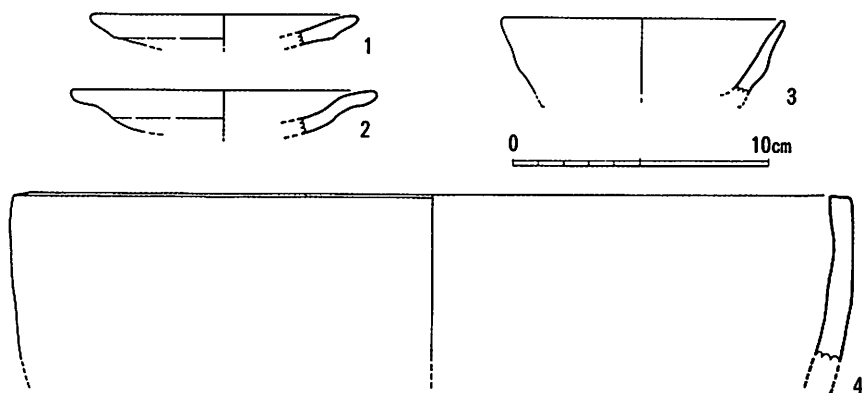
調査区中央東側のM22区に位置する。長径約150cm、最大幅70cm、最大深約25cmの長楕円形土坑である。埋土中には遺物とともに、拳大から人頭大の礫でほぼ埋め尽くされていた。

SK024出土遺物 (第231図)

出土遺物は第231図に示した。すべて京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。



第226図 III区SK021出土遺物実測図② (1/3)



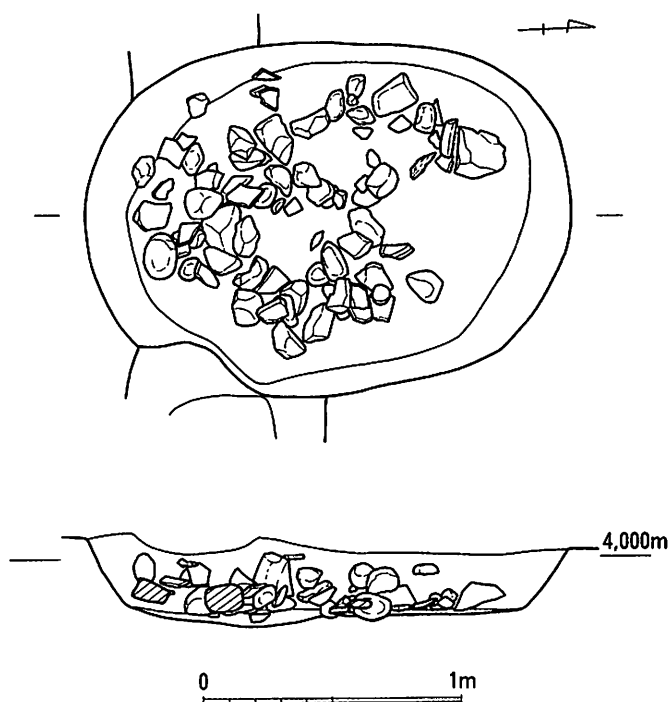
第227図 III区SK022出土遺物実測図(1/3)

SK025 (第199図)

調査区中央東端のM22区に位置する。長軸約220cm、最大幅170cm、最大深約50cmの隅丸長方形である。SK025の東側ではSE032の掘方を切るため、SE032開設時より新しいことがわかる。

SK025出土遺物(第232図)

出土遺物は第232図に示した。1は中国景德鎮窯系青花碗である。2・3は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。特に、3については口縁部外面を強くヨコナデし、外反させており、復元径22cmを測る大型のものである。



第228図 III区SK023実測図(1/30)

SK026 (第233図)

調査区中央東端のM23区に位置する。長軸約140cm、最大幅約50

cm、最大深約20cmの長楕円形である。SK024に隣接し、土坑の様相は似ているが、埋土中には遺物とともに、小石が多く含まれ、特に白色の玉石がみられることは、特徴的である。

SK026出土遺物(第234図)

出土遺物は第234図に示した。すべて京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。

SK027 (第235図)

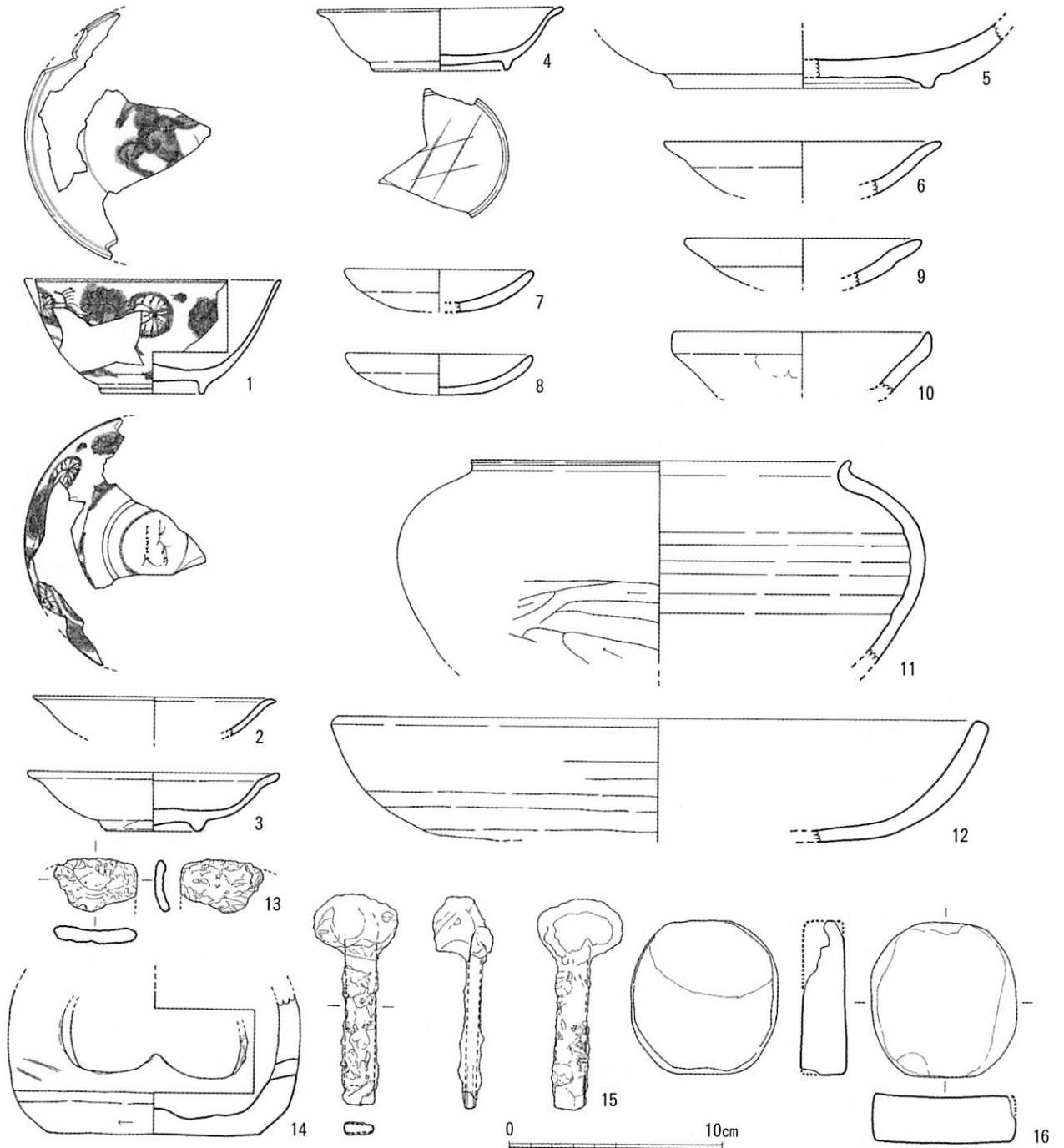
調査区南東部のL22区・L23区に位置する。地山が東側に落ちていく段落ち部分に焼成を受け赤変している円礫や土器が集中してみられる遺構である。明確に東側の遺構プランを確認できなかったものの、廃棄土坑である可能性がきわめて高いため、土坑として報告する。

SK027出土遺物（第236図）

第236図1～5は京都系土師器皿であり、塩地編年1～3期に属するものであろう。6は土師質土器鉢であり、内外面に横方向のヘラミガキが施されている。11は瓦質火鉢である。

SK028（第237図）

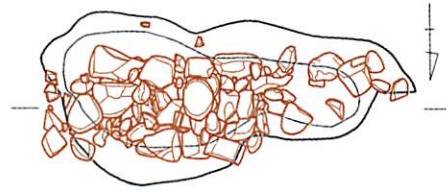
調査区南部のK23区に位置する。SX035上に拳大前後の礫が約100×40cmの範囲で集中して検出された。調査中、明確な平面プランは確認できなかったが、Ⅱ区とⅢ区の境界域の断面図において、土坑の落ち込みが確認できたため、土坑として把握した。



第229図 Ⅲ区SK023出土遺物実測図（1/3）

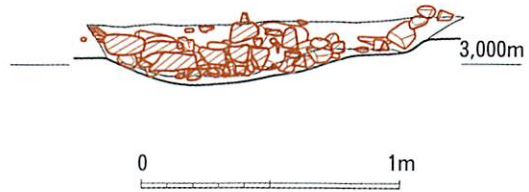
SK028出土遺物（第238図）

第238図1は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。2は瓦質土器火鉢である。

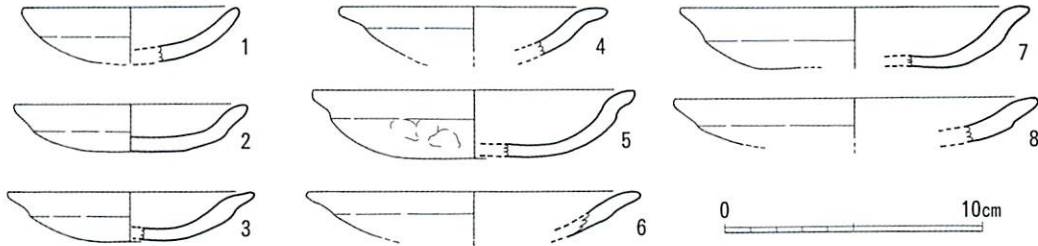


SK029（第239図）

調査区中央南端のL23区に位置する。遺構の南側はⅡ区に延びるが、東西5m、南北4mの範囲において、混在する土坑群の集合体である。埋土の状態がほとんど同じであり、調査の過程でそれぞれの土坑プランを明確に把握できずに、巨大廃棄土坑SK029としたが、土層断面図をみても南北に長い不定形小土坑が重層的に切り合う様相が読み取れ、きわめて近接した時期に営まれ続けた廃棄土坑であると考えられよう。埋土中には炭を多く含むほか、拳～人頭大



第230図 Ⅲ区SK024実測図（1/30）

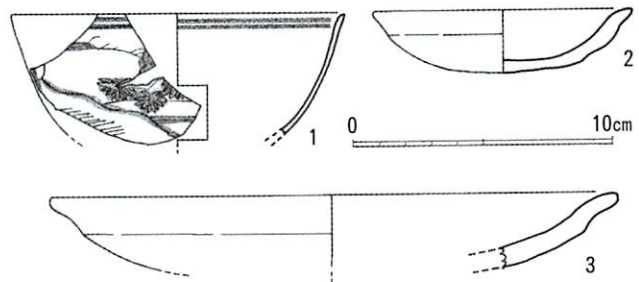


第231図 Ⅲ区SK024出土遺物実測図（1/3）

の川原石が大量にみられ、中には焼成により赤変したものも存在し、まれに景石で使用したのと考えられる結晶片岩やさざれ石の礫もみられる。

SK029出土遺物（第240～242図）

出土遺物は第240～242図に示した。第240図1は景德鎮窯系青花小壺である。2は小野分類E群に分類できる景德鎮窯系青花皿であり、見込み部にウサギと草花文、高台内には字款がみられる。3は小野分類B群に



第232図 Ⅲ区SK025出土遺物実測図（1/3）

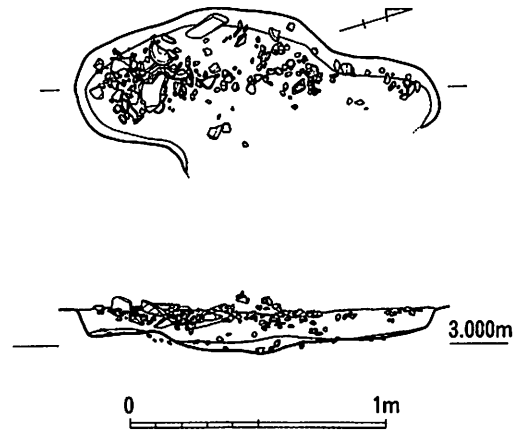
分類できる中国漳州窯系青花皿であり、外面に唐草文がみえる。4は中国漳州窯系青花碗であり、内外面口縁付近に界線がみえる。5・8は中国竜泉窯系青磁碗である。8には外面に雷文帯から脱化した波状文がみられる。6は白磁碗であろうか。2次焼成を受けているため、胎土・釉薬とも変化しているが、見込み部は露胎のままである。7は備前系焼締陶器瓶であり、底部にへらによる「叶」の刻

第2節 遺構と遺物

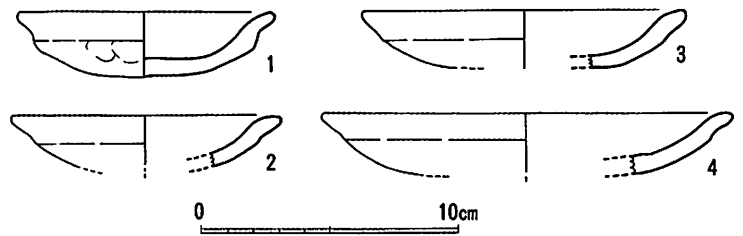
字がみられる。9は朝鮮王朝産焼締陶器瓶であり、舟徳利と呼ばれるものである。10は備前系焼締陶器甕である。11~13は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。14は瓦質土器火鉢である。

第241図1~3は大型の備前系焼締陶器甕である。1の肩部外面にはヘラ記号がみられる。

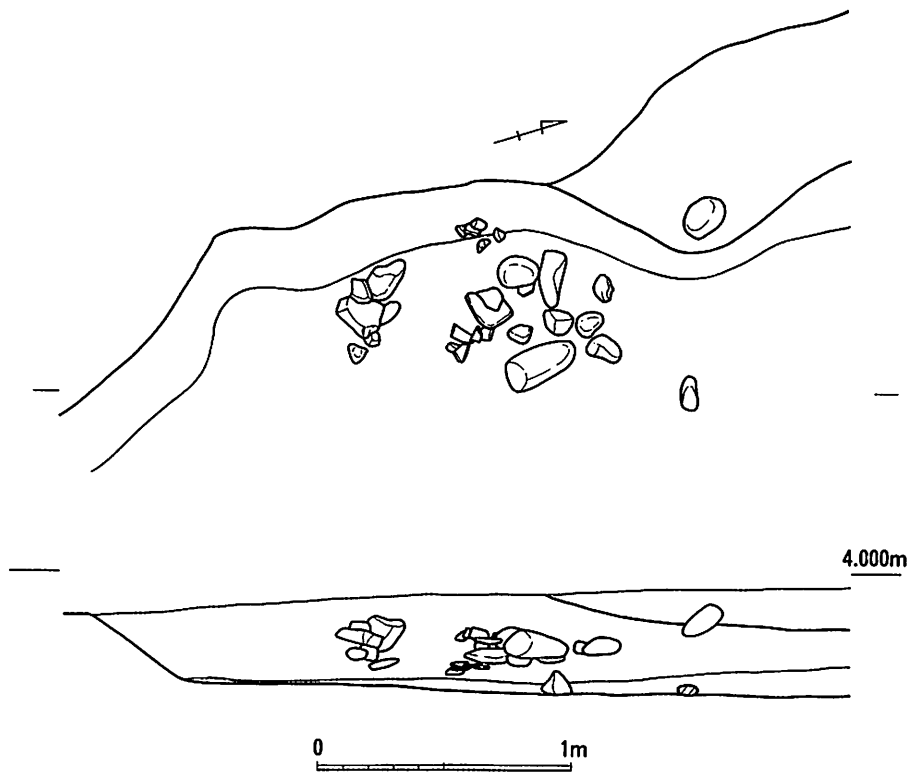
第242図1は土師質土器皿である。底部には回転糸切り痕および板状圧痕がみられる。2は瓦質土器火鉢である。3・4は京都系土師器坏である。5~11は京都系土師器皿であり、塩地編年2~3期に属するものであろう。6は灯明皿として使用したためか、口縁部に煤が付着する。12は軒平瓦であり、瓦当には均整唐草文がみえる。14は雁振瓦で凹面に布目およびコビキ痕がのこる。15は挽き手孔・軸受孔が残る



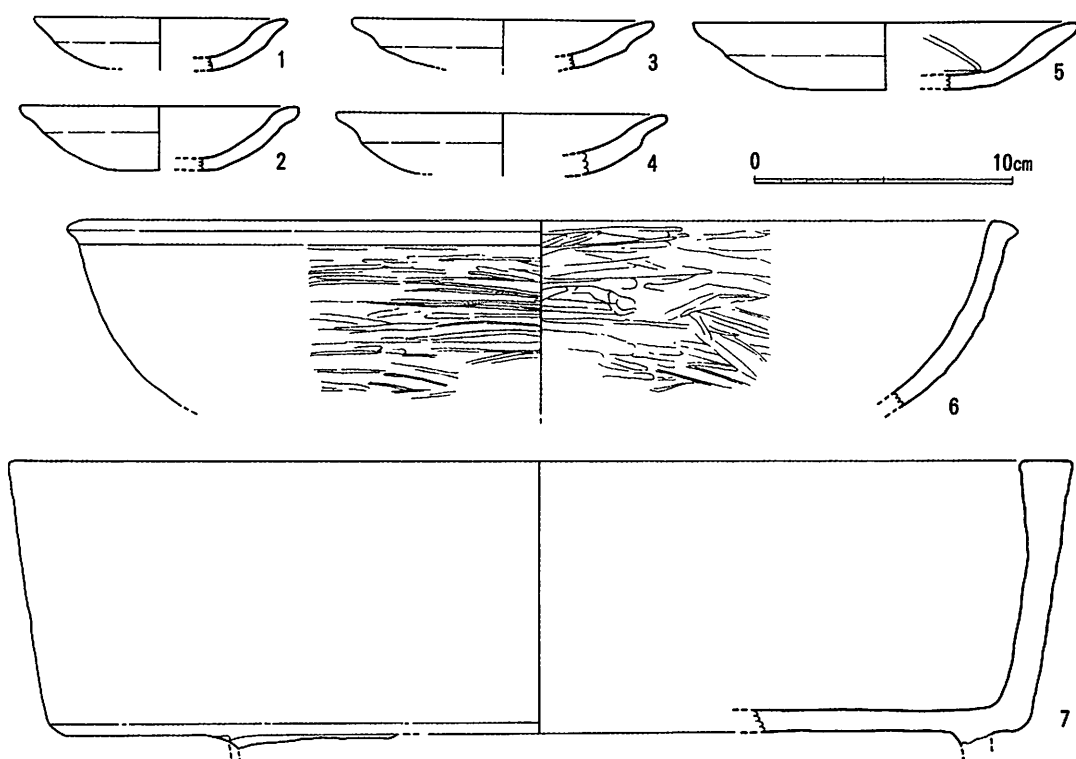
第233図 Ⅲ区SK026実測図(1/30)



第234図 Ⅲ区SK026出土遺物実測図(1/3)



第235図 Ⅲ区SK027実測図(1/30)



第236図 III区SK027出土遺物実測図 (1/3)

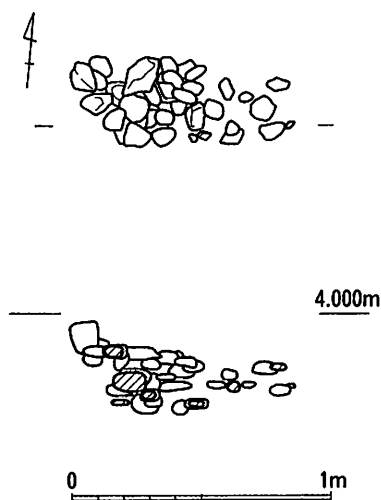
茶臼である。赤間石と呼ばれる輝緑凝灰岩を石材として  
いる。分画数は8分画で副溝は9~10条存在していたも  
のと考えられる。16は安山岩製石臼の下臼皿の破片であ  
る。

SK030 (第243図)

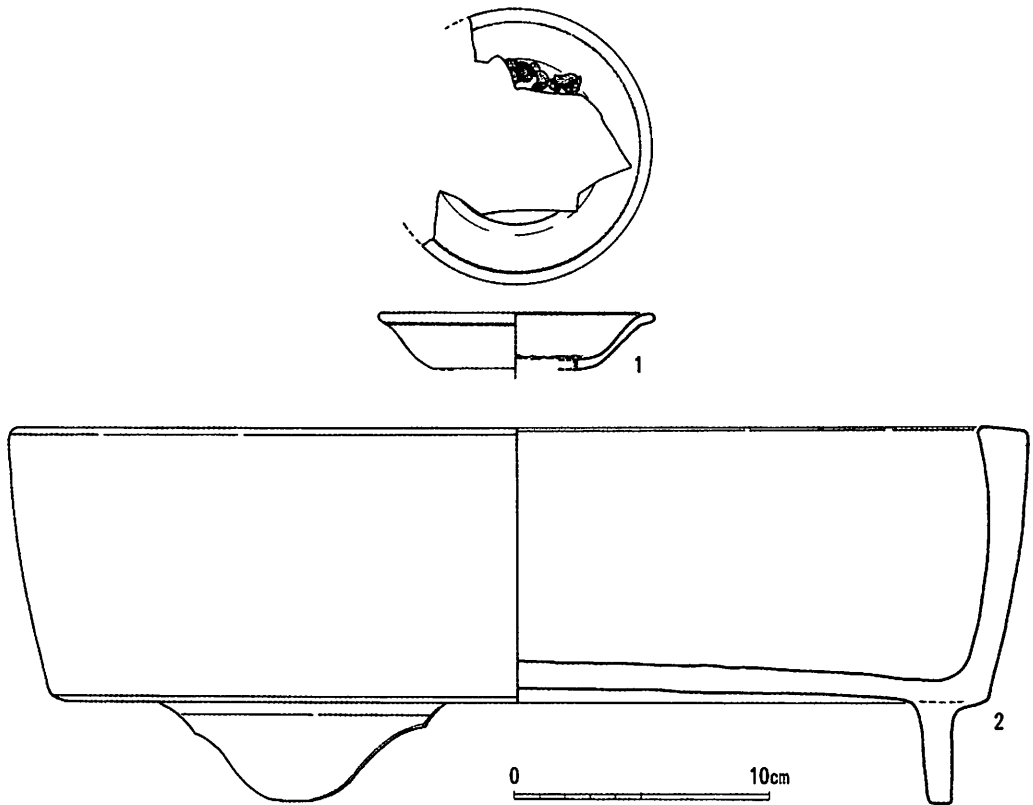
調査区西南端のK23区に位置する。径2mをこえる深  
さ15cm程度の浅い不定形土坑であるが、この土坑床面  
にさらに小さい円形土坑が確認できたため、複数基の遺  
構が切り合っていた可能性も残るが、遺構埋土が識別で  
きずに、プランとして確認できていない。埋土中には炭  
や焼土粒を多く含むほか、拳~人頭大の川原石が大量に  
みられ、中には焼成により赤変したものも存在し、火災  
処理土坑として営まれたことがわかる。

SK030出土遺物 (第244図)

出土遺物は第244図に示した。1は中国景德鎮窯系青  
花碗である。2は小野分類E群に分類できる中国景德鎮  
窯系青花皿である。3は中国漳州窯系青花皿であり、見込みに花文がみられ、この周囲の釉薬を輪状  
に掻き取っている。4・5・6は白磁皿であり、口縁を波立たせ、内面に断面三角隆状の突線により、  
花状の文様をあしらっている。同一個体の可能性も高いが、複数枚の資料が廃棄されたとも考えられ  
る。7は白磁皿であり、口縁端反りの形態を持つ。8は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、内反り高台の  
形態をもつ。9は大振りの青磁鉢であり、口縁端部を上方に引き上げる特徴をもつ。10は京都系土師



第237図 III区SK028実測図 (1/30)



第238図 III区SK028出土遺物実測図(1/3)

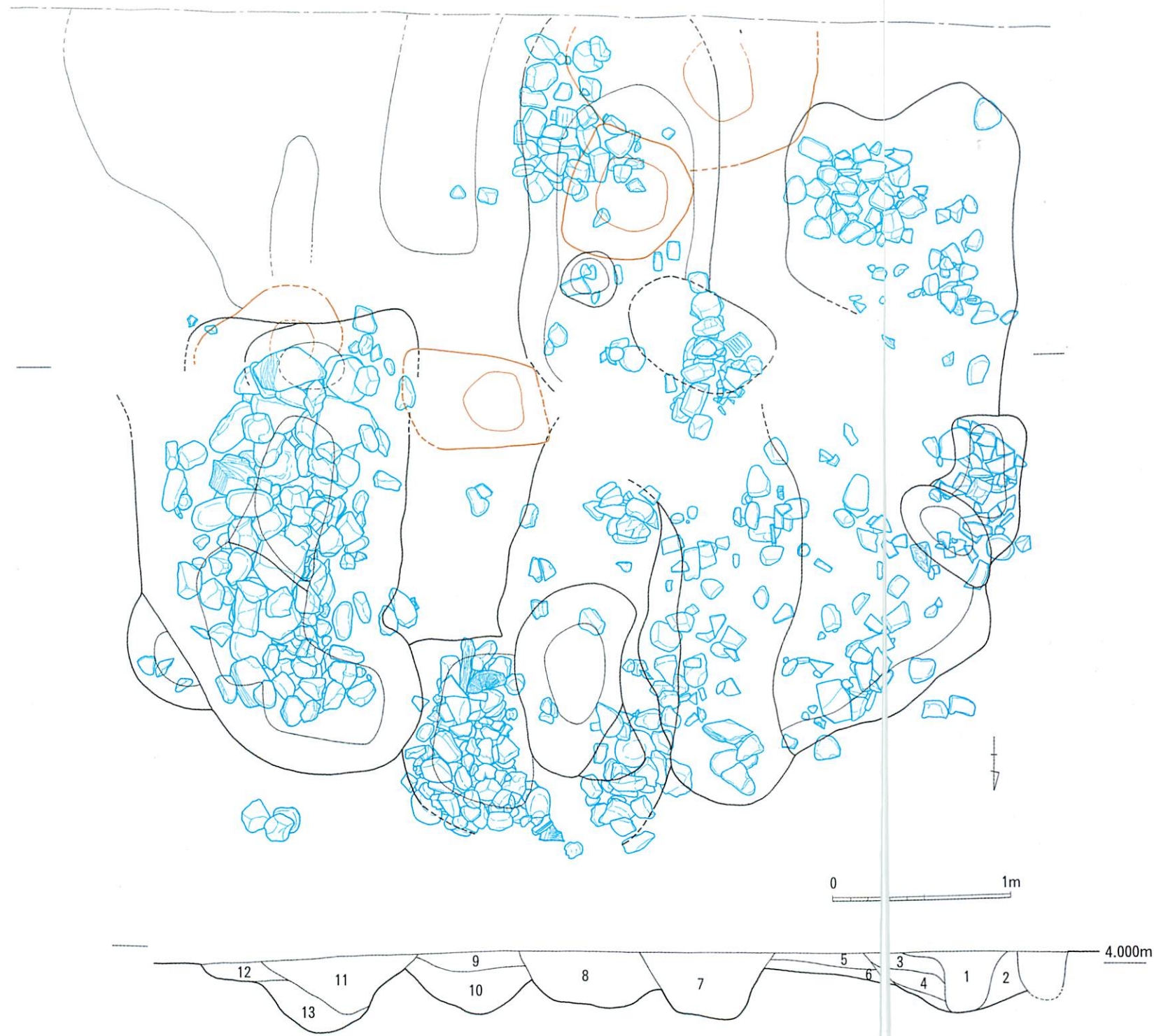
器坏である。11・12は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。13は備前系焼締陶器鉢である。深手で体部を丸く膨らませたまま口縁にいたり、底部には何らかの印刻が認められるが、判読できない。14は備前系焼締陶器播鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。15は方柱形の砂岩製砥石片であり、4面とも砥面として使用している。

### C. 井戸

#### SE031 (第245図)

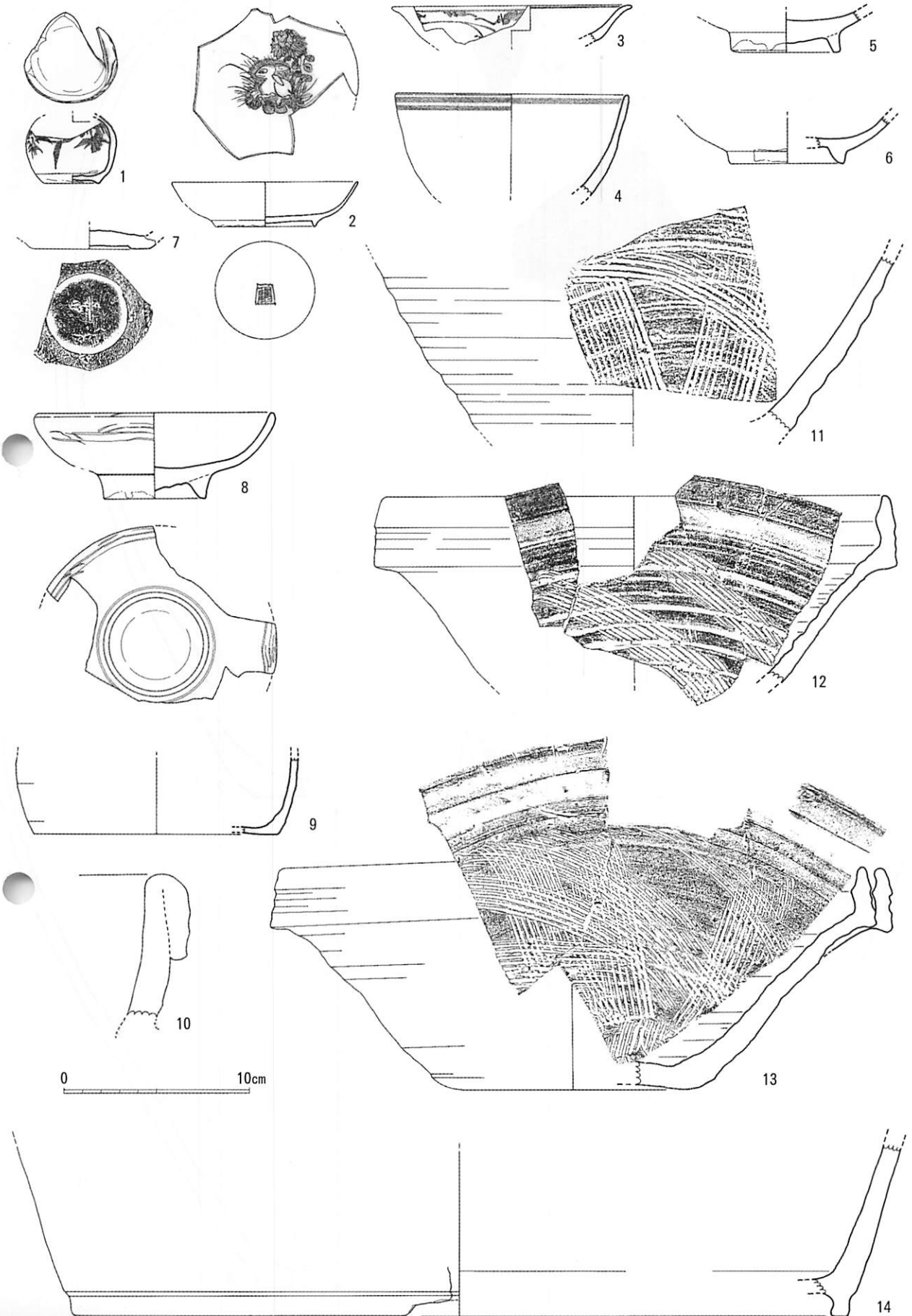
調査区中央北端のK21区・L21区に位置し、SE031の北側プランは22次調査区(SE201)に延びている。径3mをこえる円形掘方内に、一辺約90cmの方形の井戸枠をもつ井戸である。遺構の掘り下げは、検出面下2m程度まで行ったが、作業の安全性を考慮して、それ以下の掘り下げは行わず、井筒等の確認は行っていない。方形井戸枠は木質であり、腐食していたが、明確にその痕跡が残り、第246図の復元図のように角材と板材を組み合わせていたことが痕跡から窺い知れる。土層断面観察から井戸枠中央に径2cm程度の細い竹の痕跡が確認でき、井戸の埋め戻しの際に竹を通し祭祀を行っていたことがわかる。また、井戸枠内埋土の最上層である13層から単独で完形の土師質土器坏(第247図3)が出土し、井戸埋め戻し完了時の祭祀に伴う遺物である可能性も考えられよう。出土遺物は乏しく、掘方内から土師質土器・瓦質土器が数点出土したのみであり、特に井戸枠内埋土からは完形の土師質土器坏以外には遺物は1点も確認できなかった。



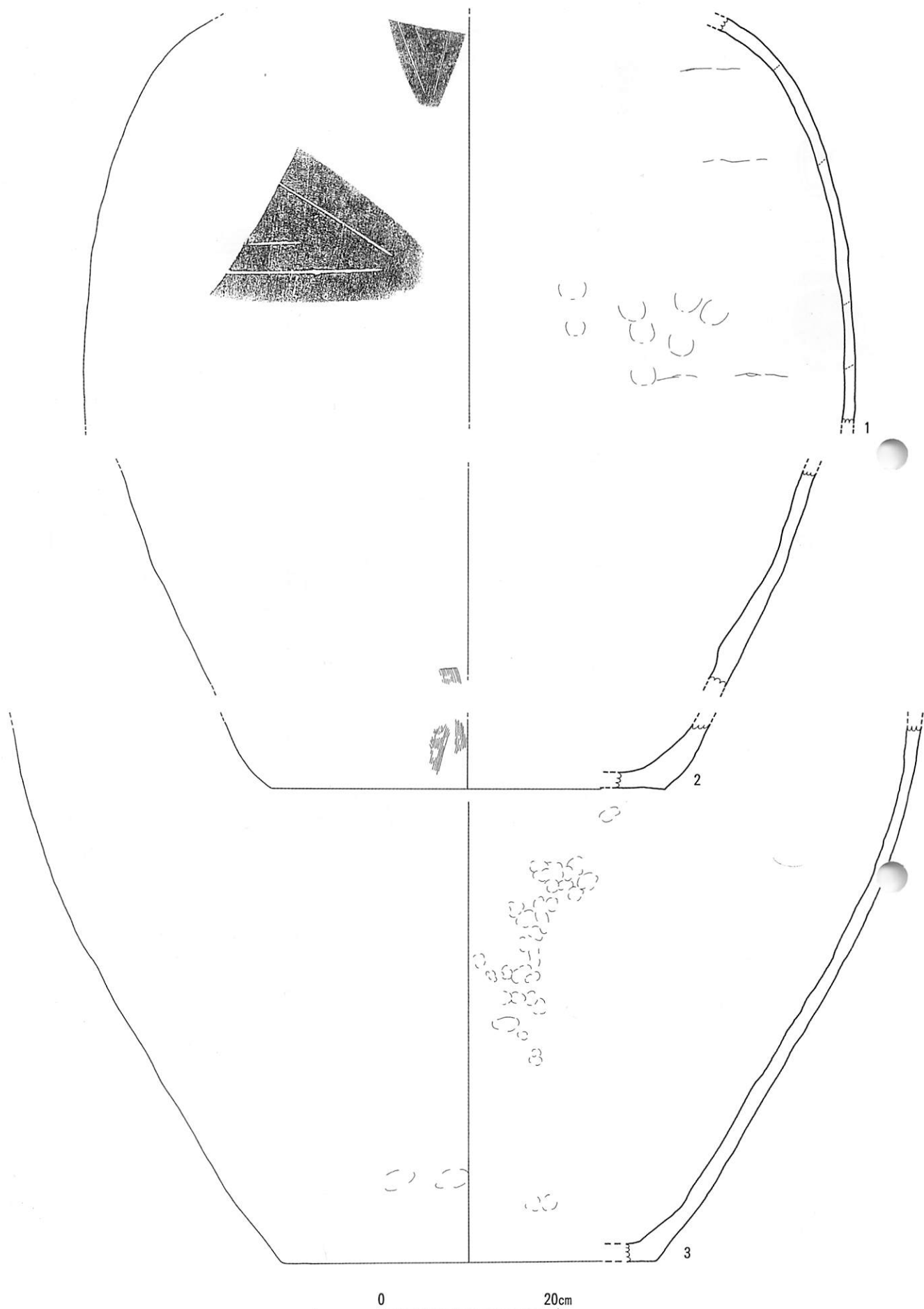


- |                          |  |
|--------------------------|--|
| 1 褐灰色砂質土                 | 8 黒褐色土 (遺物包含層、炭・砂・小石を含む。)                    |
| 2 褐灰色砂質土                 | 9 黒褐色土 (遺物包含層、炭を含む。)                         |
| 3 褐灰色砂質土                 | 10 黒褐色土 (遺物包含層、炭を含む。9層に近似するが、褐色ブロックを多く含む)    |
| 4 褐灰色砂質土                 | 11 黒褐色砂質土 (遺物包含層、炭を含む。)                      |
| 5 褐灰色粘質土                 | 12 黒褐色砂質土 (遺物包含層、炭を含む。)                      |
| 6 褐灰色粘質土                 | 13 黒褐色砂質土 (遺物包含層、炭を含む。12層に近似するが、褐色ブロックを多く含む) |
| 7 黒褐色土 (遺物包含層、炭・礫を多く含む。) |  |

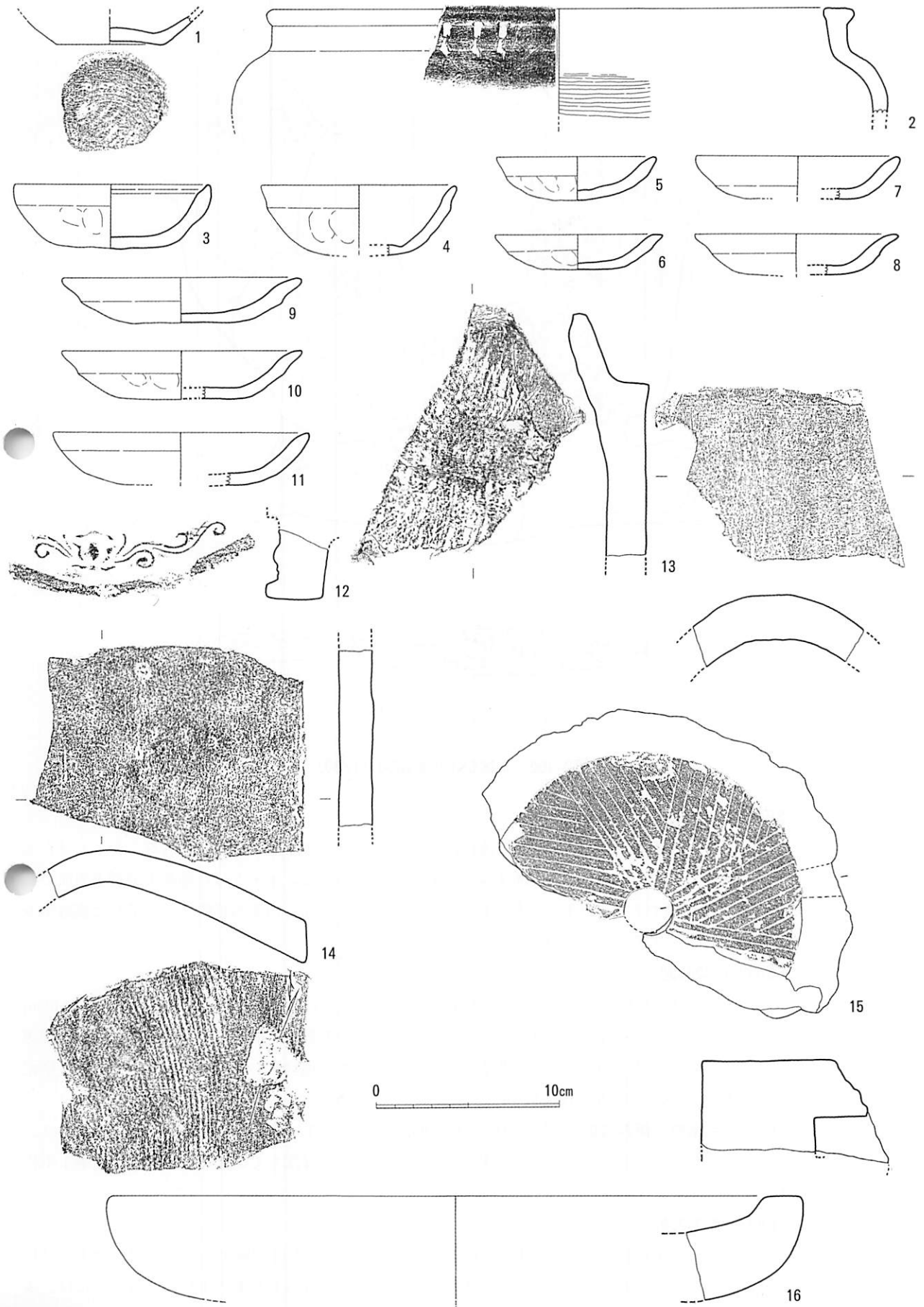
第239図 III区SK029実測図 (1/30)



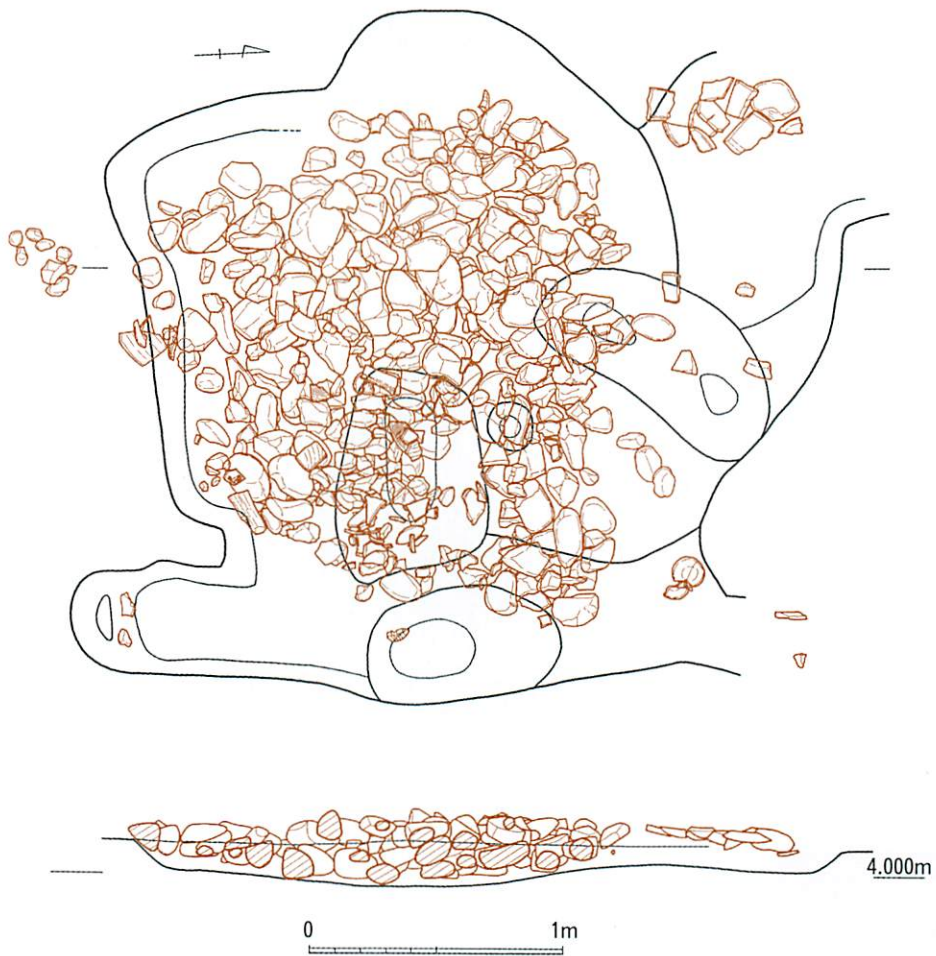
第240図 III区SK029出土遺物実測図① (1/3)



第241図 III区SK029出土遺物実測図② (1/6)



第242図 III区SK029出土遺物実測図③ (1/3)



第243図 III区SK030実測図(1/30)

**SE031出土遺物(第247図)**

出土遺物は第247図に示した。1は口禿の白磁皿である。2は緑釉陶器小壺である。3・6は在地系土師質土器坏であり、6には糸切痕および板状圧痕がみられる。4・5は在地系土師質土器皿である。7は須恵器甕である。外面には格子目叩き痕が、内面には同心円文当具痕をナデ消した痕跡がみられる。亀山焼であろうか。8は土師質土器鍋である。

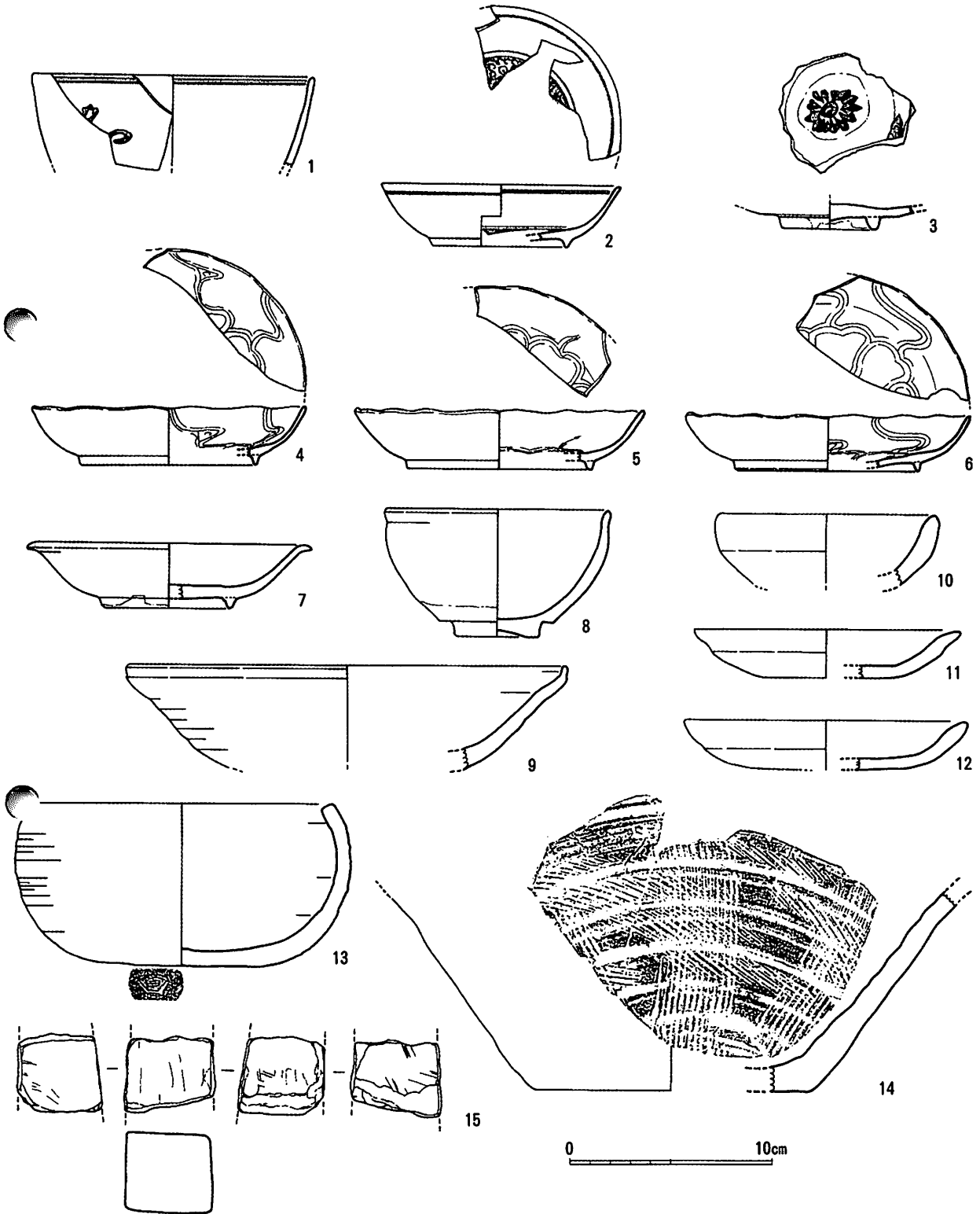
**SE032(第248図)**

調査区中央東端のM22区に位置する。調査区東側の落ち込みに存在しているためか、堀方が40cm程度と浅い。井筒は径70cm程度であり、深さは55cmを測る。井筒最下面では結桶の板材の痕跡が確認でき、井筒内には拳大よりやや大きい礫が投げ込まれていた。遺物はいずれも細片のみであり、祭祀に伴う様相を持つ遺物はみられなかった。

**SE032出土遺物(第249図)** 出土遺物は第249図に示した。1・2は在地系土師質土器坏であり、3は在地系土師質土器皿である。4は瓦質土器挿鉢である。口縁部をくの字に立ち上げ、5条1単位の挿目がみられる。

**SE033(第252図)**

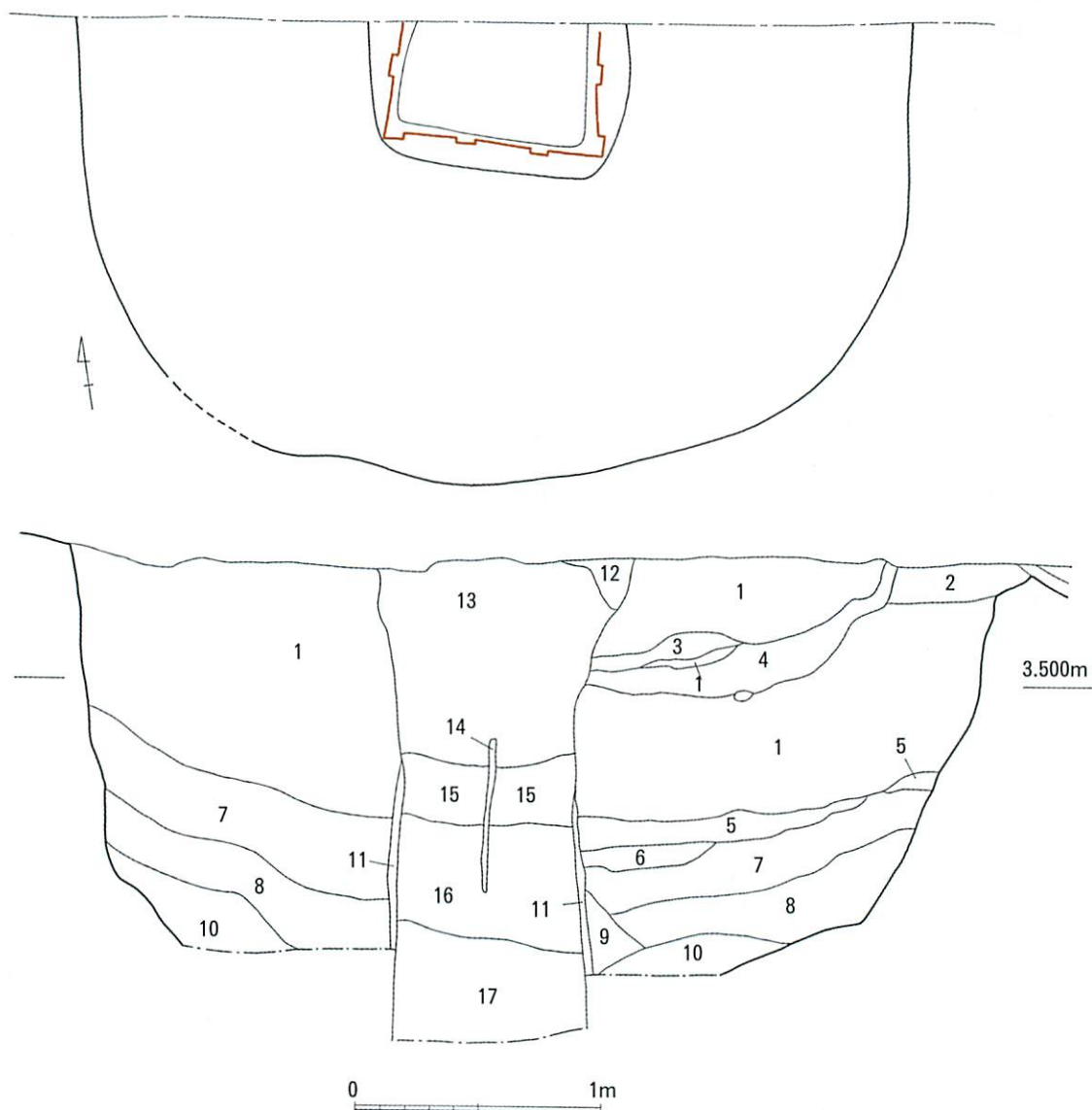
調査区南東部のL・M-23区に位置する。桶を埋設して井筒とした井戸跡である。井筒内埋土には比較的遺物は少なく、上部には礫が投げ込まれていた。円錐状に掘られた堀方上にあたる位置には、浅い彫り込みが設けられ、径3m以上の範囲に拳大～人頭大の大量の礫が敷かれていた。特に井筒部分



第244図 III区SK030出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

に接する箇所には小さな玉砂利が意識的に敷かれていた。この礫群の周囲を取り囲むように大量の京都系土師器の破片が敷き詰められていた。これらの礫群は井戸利用時の軟弱地盤を解消するための土木的な工夫であると考えられる。大量の京都系土師器の破片は総数4,400点にも及び、他所から大量に持ち込まれて敷かれたことがわかる。



- |                 |                     |                      |
|-----------------|---------------------|----------------------|
| 1 にぶい黄褐色土       | 7 明黄褐色土             | 13 褐色土               |
| 2 褐灰色土          | 8 にぶい黄褐色土           | 14 明褐灰色土 (径2cmの竹の痕跡) |
| 3 灰黄褐色土 (4層と近似) | 9 灰白色粘質土            | 15 にぶい褐色土            |
| 4 灰黄褐色土 (3層と近似) | 10 灰黄褐色土            | 16 灰白色土              |
| 5 明褐色土          | 11 明褐灰色粘質土 (井戸枠木質痕) | 17 褐灰色粘質土            |
| 6 明褐色土          | 12 褐灰色土             |                      |

第245図 III区SE031実測図 (1/30)

SE033出土遺物（第250・251・253～255図）

出土遺物は第250・251・253～255図に示した。第250図は井筒内埋土中出土遺物であり、第251図は井戸堀方内埋土中出土遺物であり、第253～255図は井戸上出土遺物である。

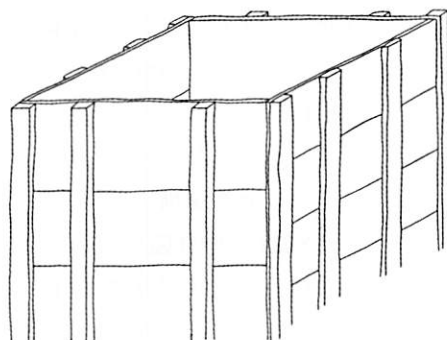
第250図1は中国漳州窯系青花碗である。2～7は京都系土師器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。8は備前系焼締陶器瓶である。10は京都系土師器坏であり、塩地編年3期に属するものであろう。9は雁振瓦であり、内面に布目が残る。

第251図1は中国龍泉窯系青磁碗であり、見込部に花文のスタンプがみられる。2・3は京都系土師器小皿であり、4～11は京都系土師器皿である。塩地編年2期に属するものであろう。

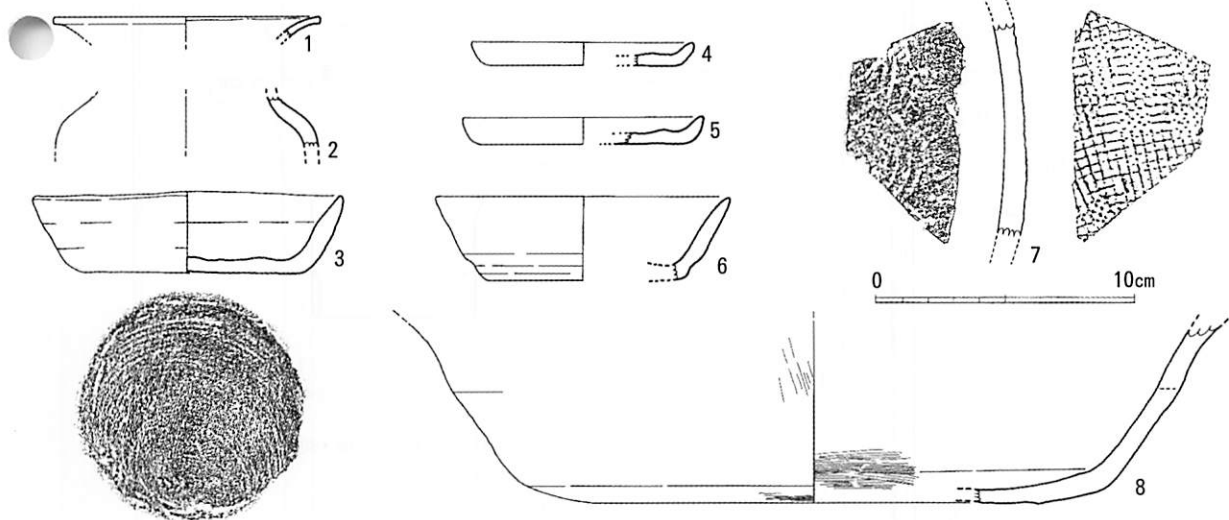
第253図1は小野分類B群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、外面に唐草文がみえる。2は中国景德鎮窯系青花碗であり、見込に十字花文がみえる。3は中国景德鎮窯系青花碗であり、外面に唐草文、内面口縁付近に四方禪文がみえる。4は中国龍泉窯系青磁碗であり、口縁外面に波状文がみえる。5は口縁が端反りする白磁皿である。6・7・8は備前系焼締陶器插鉢であり、6・7は放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。8は放射状スリメのみであり、乗岡編年中世6期に帰属するものである。9は備前系焼締陶器茶入である。10・11は瓦質土器鉢である。

第254図1は瓦質火鉢である。2は安山岩製下臼であり、分画数は8分画で副溝は5条存在していたものと考えられる。3は雁振瓦であり、凹面に布目痕およびコビキ痕がみえる。4は丸瓦であり凹面に布目痕がみえる。

第255図はすべて京都系土師器皿であり、図化できる資料のごく一部のみ掲載した。1・2は煤が



第246図 III区SE031井戸枠復原図



第247図 III区SE031出土遺物実測図（1/3）



付着し、灯明皿として使用されたものであろうか。法量・形態とも多様であり、塩地編年1～3期のものが混在する様相をもつ。

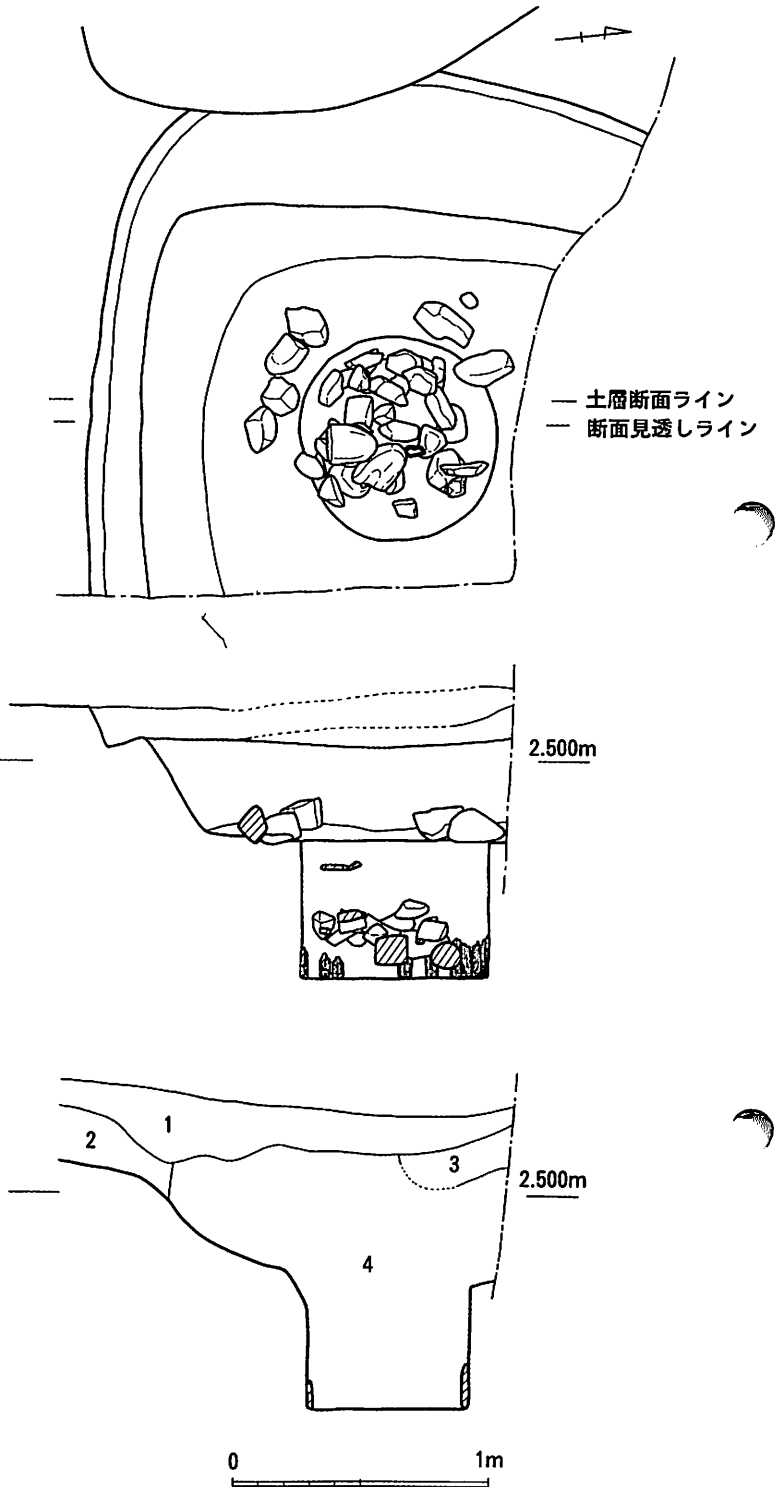
d. その他の遺構

SX034 (第256図)

調査区中央東端のM22区に位置する。南北3.4mを測るヒョウタン形の平面形をもつ遺構の東肩は調査区の東側に延びる。深さは30cm程度であり、SE032埋没後に低湿地状を呈していたと考えられ、堆積土は粘質土を呈する。埋土中には炭・焼土が非常に多く含まれ、拳大～人頭大の礫も多くみられる。出土遺物は第257図に示したが、図化しえないものも含めて、鑪羽口・取瓶などの鍛冶道具が多く確認できた。このほかにも鉄滓が比較的まとまって出土している。

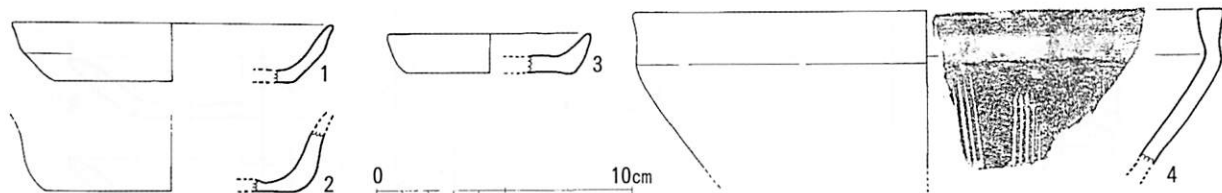
SX034出土遺物 (第257図)

出土遺物は第257図に示した。1は景德鎮窯系青花皿である。丸く内湾する胴から口縁を外反させるツバをもつ小野分類F群のツバ皿であり、外面には鑄文がみられる。2は朝鮮王朝産陶器碗である。内外面に檜垣文がみられる「彫三島」と呼称される高麗茶碗の破片である。3は中国漳州窯系青花皿である。4・5は白磁皿であり、5には内面見込み部に釉薬を蛇の目状に掻き取った痕跡がみられる。6・7・10～14は京都系土師



- 1 にぶい黄橙色粘質土 (小さい炭・焼土を含む)
- 2 にぶい黄橙色粘質土
- 3 にぶい黄橙色土
- 4 灰色粘土

第248図 III区SE032実測図 (1/30)

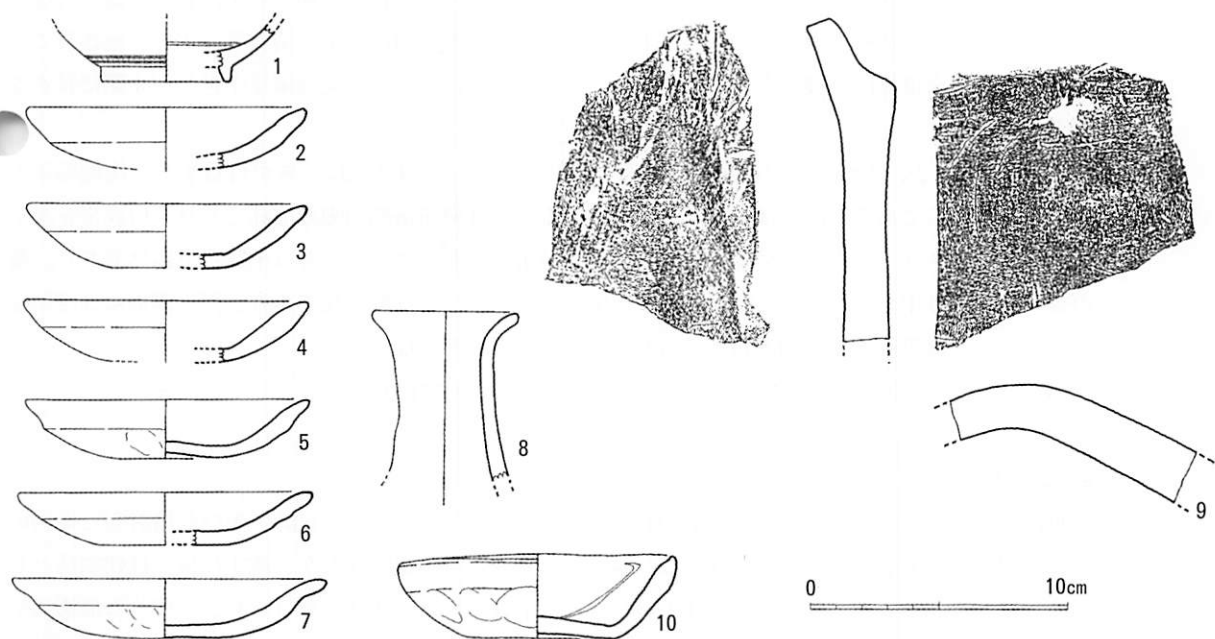


第249図 III区SE032出土遺物実測図 (1/3)

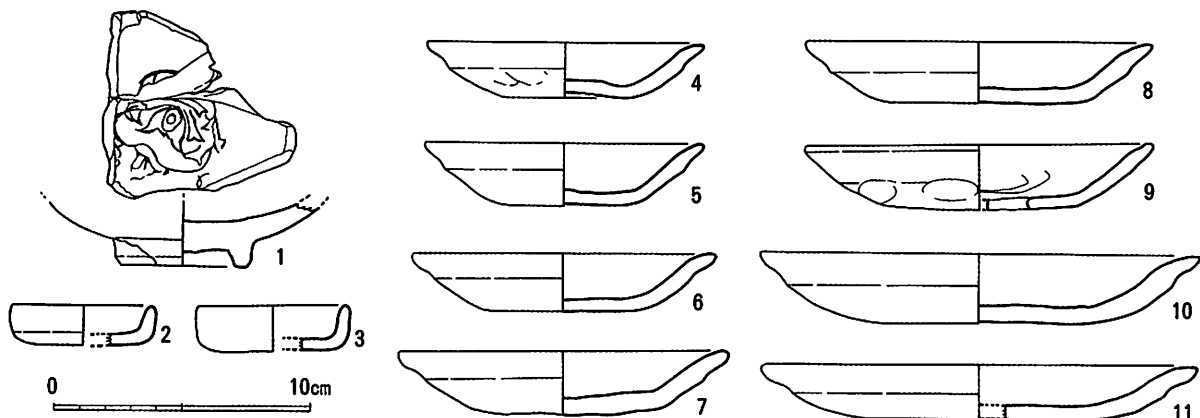
器皿であり、塩地編年2～3期に属するものであろう。9は京都系土師器坏である。8は備前系焼締陶器甕の口縁片であり、玉縁外面に太めの凹線を巡らす。16は備前系焼締陶器挿鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。17は焼締陶器鉢であろうか。内面底部付近に指頭圧痕が連続してみられる。焼きは備前系焼締陶器と思われる。15は土師質土器鍋であろうか。外面上半部および内面に横ナデを施し、外面下半は指オサエにより成形している。18は瓦質土器鉢であり、外面に縦方向のハケ目が著しく残る。19は安山岩製石臼の下臼である。20～22は土製の取瓶であり、20は口径3.6cm、器高1.9cmと、特に小さい。23は鞆羽口である。

SX035 (第197図)

調査区南東部のK・L-22・23区に位置し、南側はII区 SX030に続く。東西約4m、南北約5m、最深部約50cmを測る不定形の落ち込みであり、最下層である7～8層は砂質土であり、また、その上層の5～6層は粘質土であることから、SX035が掘られて以降、一時期、滞水状態であったことがわかる。これを埋める2・4層は地山のにぶい黄橙色粘土のブロックが非常に多く含まれる人工的な埋め戻しの堆積土の様相を示している。遺構西側肩部に京都系土師器が大量に廃棄されているほか、最上層である1層には比較的大量の土器が混じる。遺物は下層の滞水状態であった時期のもの、上層の埋め戻しに伴う時期のものに分けて取り上げたが、それぞれの土器型式に明確な時期差があらわ



第250図 III区SE033井筒内出土遺物実測図 (1/3)



第251図 III区SE033掘方出土遺物実測図 (1/3)

れず、近接した時期に埋め戻されたことが想定できる。

**SX035出土遺物 (第259~261図)**

出土遺物は第259~261図に示した。第259図1~20、25~30は1・2層出土遺物であり、21~24は3・4層出土遺物である。また、第260図は5~8層出土遺物である。

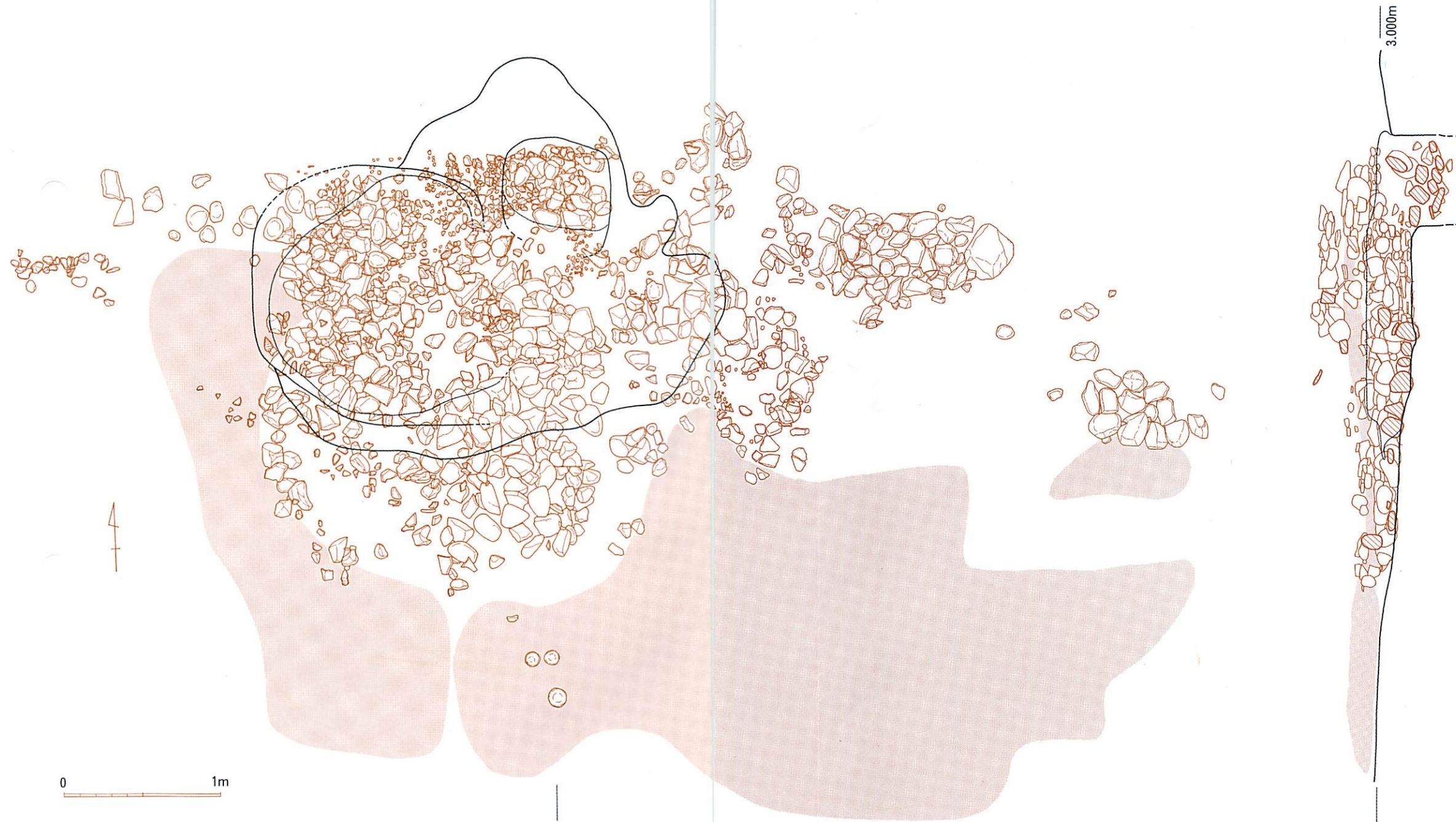
第259図1は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。2は中国龍泉窯系青磁碗であるが、2次焼成を受け、胎土・釉薬も変調がみられる。3は土師質土器小皿である。4・5・6・23は土師質土器皿・坏である。4・5・6は回転糸切り離しであり、4に関しては回転糸切り離し後に筵状圧痕がみえる。23はヘラ切り離し後に底部をナデ調整し、その後に板状圧痕がみえる。7~22、24は京都系土師器皿であり、塩地編年1期を主体に2期が若干含まれるものであろう。25・26は備前系焼締陶器播鉢である。25は口縁上角が突出し、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世4期に帰属するものである。26は口縁帯を高くもち、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。口縁帯外面にナナム方向のヘラ記号がみえる。27は内外面にナデ調整を施した土師質土器甕である。28は備前系焼締陶器瓶である。29は瓦質土器火鉢であり、内外面にハケメ調整後、ナデが施されている。30は備前系焼締陶器甕であり、口縁を丸く肥厚させた特徴から、乗岡編年中世3~4期に属することがわかる。

第260図1・2、4~6は京都系土師器皿であり、1の口縁内外面にススが付着する。塩地編年1期に属するものであろう。3は土師質土器皿である。7は備前系焼締陶器播鉢であり、口縁帯を高くもち、放射状スリメがみえ、乗岡編年中世6期に帰属するものである。8は土師質土器鉢である。蓋の受け部を作り出し、内外面に丁寧なナデが施されている。9は軒平瓦であり、瓦当模様には唐草文がみえる。10は凝灰岩製の凹み石片であるが、用途は明らかでない。

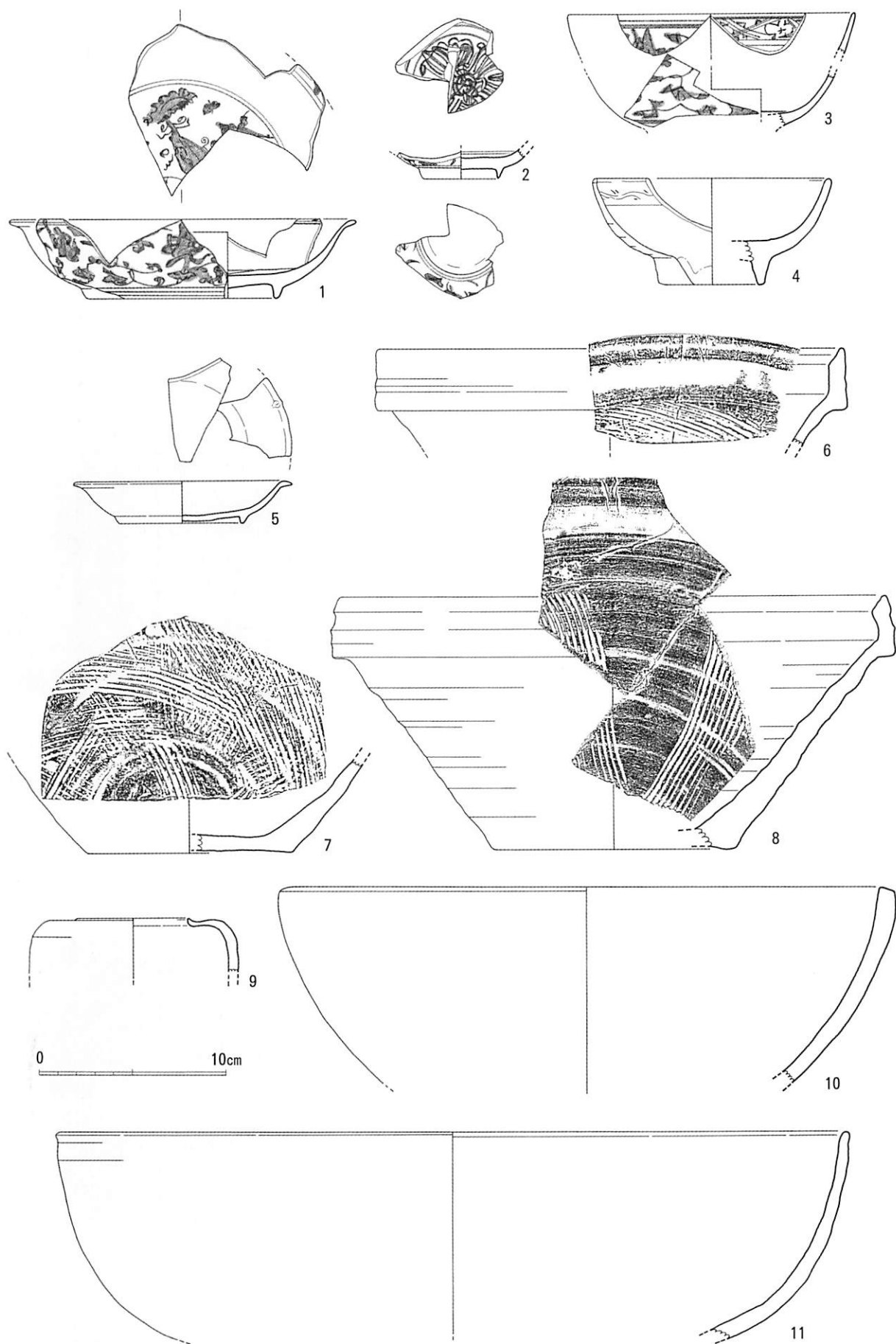
第261図は銅銭であるが、風化が著しく、銭種等は明らかでない。

**e. ピット**

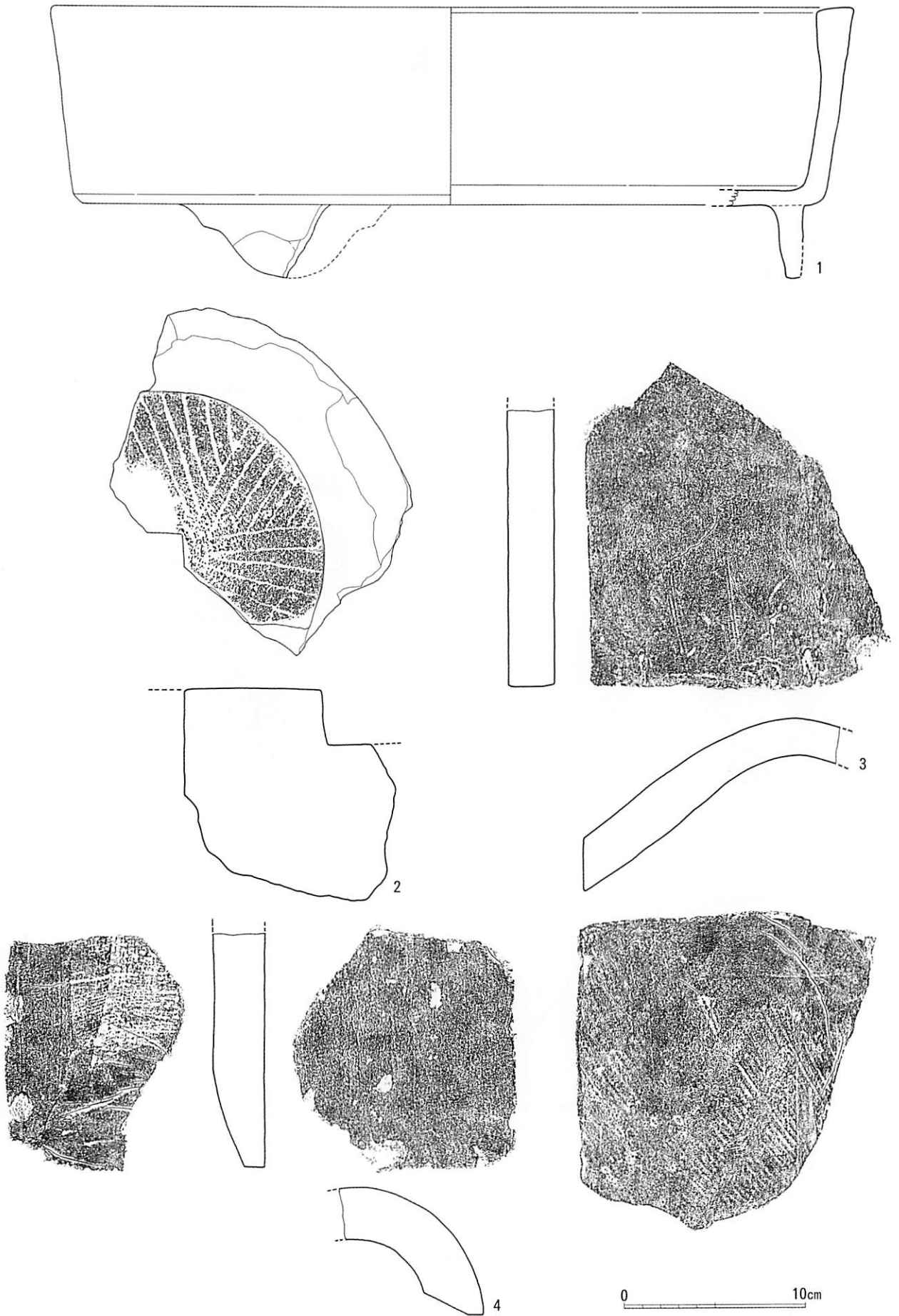
III区からは、300基に近いピット群が検出されている。これらのピット群の並びを検討した建物の復元は困難を極め、明確に掘方と柱根部が観察できるものも確認できたが、確実に掘立柱建物跡としての並びを復元できたものはない。埋土の特徴としては、大きく2様に分けられ、一般的な遺構埋土と、ピット上面に炭・焼土を大量に含む火災処理土が堆積していたものに分けられる。その分布は第199図に示したとおりであるが、この火災処理土を埋土とするピット群には、調査区西側において東西方向に3列に及び、柵列状に連続して並ぶものがみられる。北からピット列1、ピット列2、ピッ



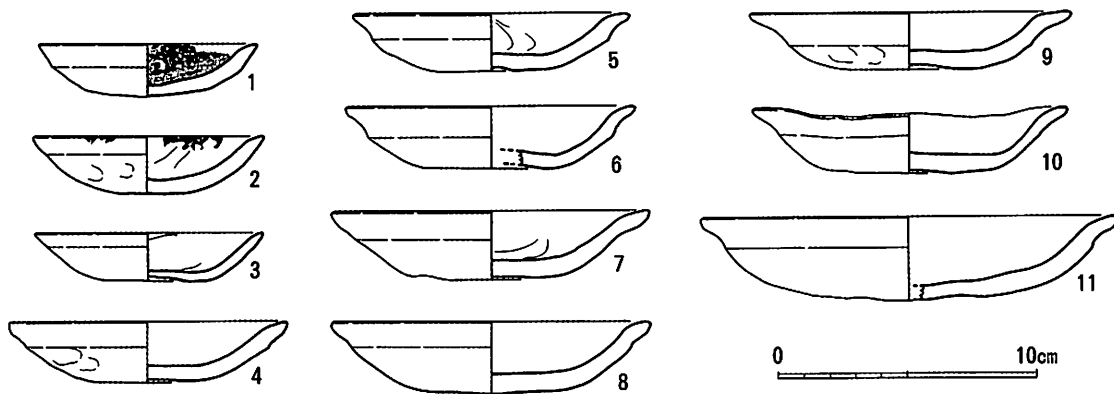
第252図 Ⅲ区SE033実測図(1/30)



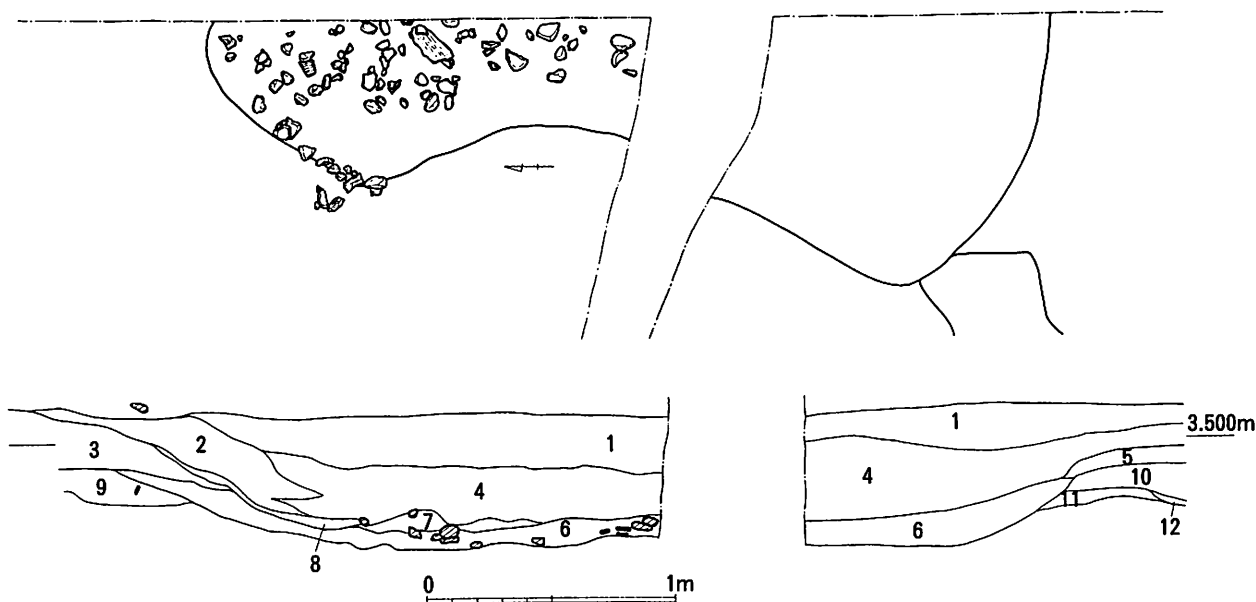
第253図 III区SE033出土遺物実測図① (1/3)



第254図 III区SE033出土遺物実測図② (1/3)



第255図 III区SE033出土遺物実測図③ (1/3)

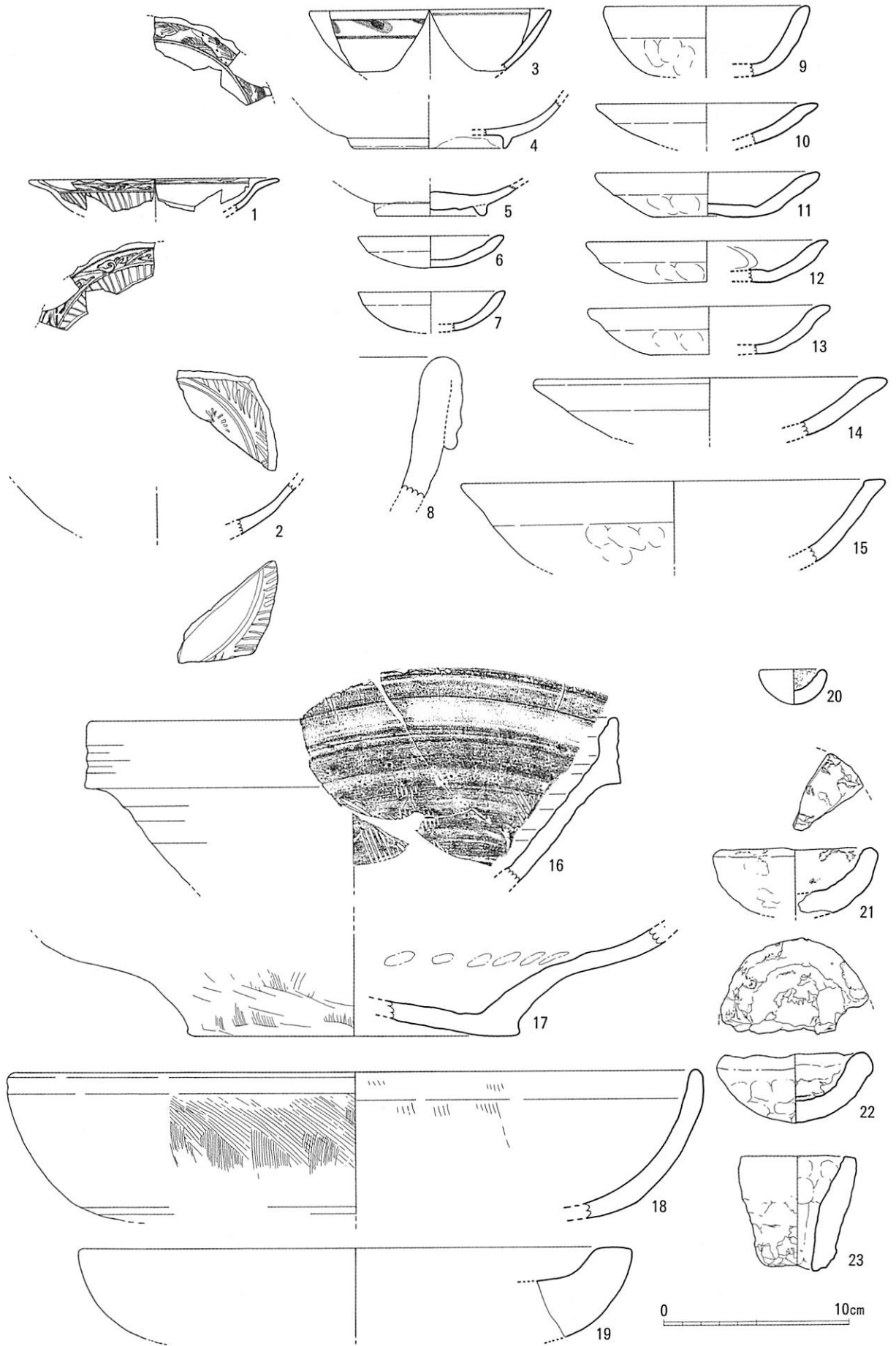


- |  |                 |
|--|-----------------|
| 1 にぶい黄橙色土 (地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土) | 7 褐灰色土          |
| 2 にぶい黄橙色土 (地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土) | 8 褐灰色土 (7層と近似)  |
| 3 にぶい黄褐色土 (1層と同じ)                        | 9 黒褐色土          |
| 4 にぶい黄褐色土 (地山がブロック状態で混在しており、人工的な埋め戻し整地土) | 10 黒褐色土 (9層と同じ) |
| 5 にぶい黄褐色土 (6層と近似)                        | 11 にぶい黄褐色粘質土    |
| 6 褐灰色粘質土 (炭・焼土をひじょうに多く含み、浅い水溜まり状を呈していた)  | 12 にぶい黄橙色粘質土    |

第256図 III区SX034実測図 (1/30)

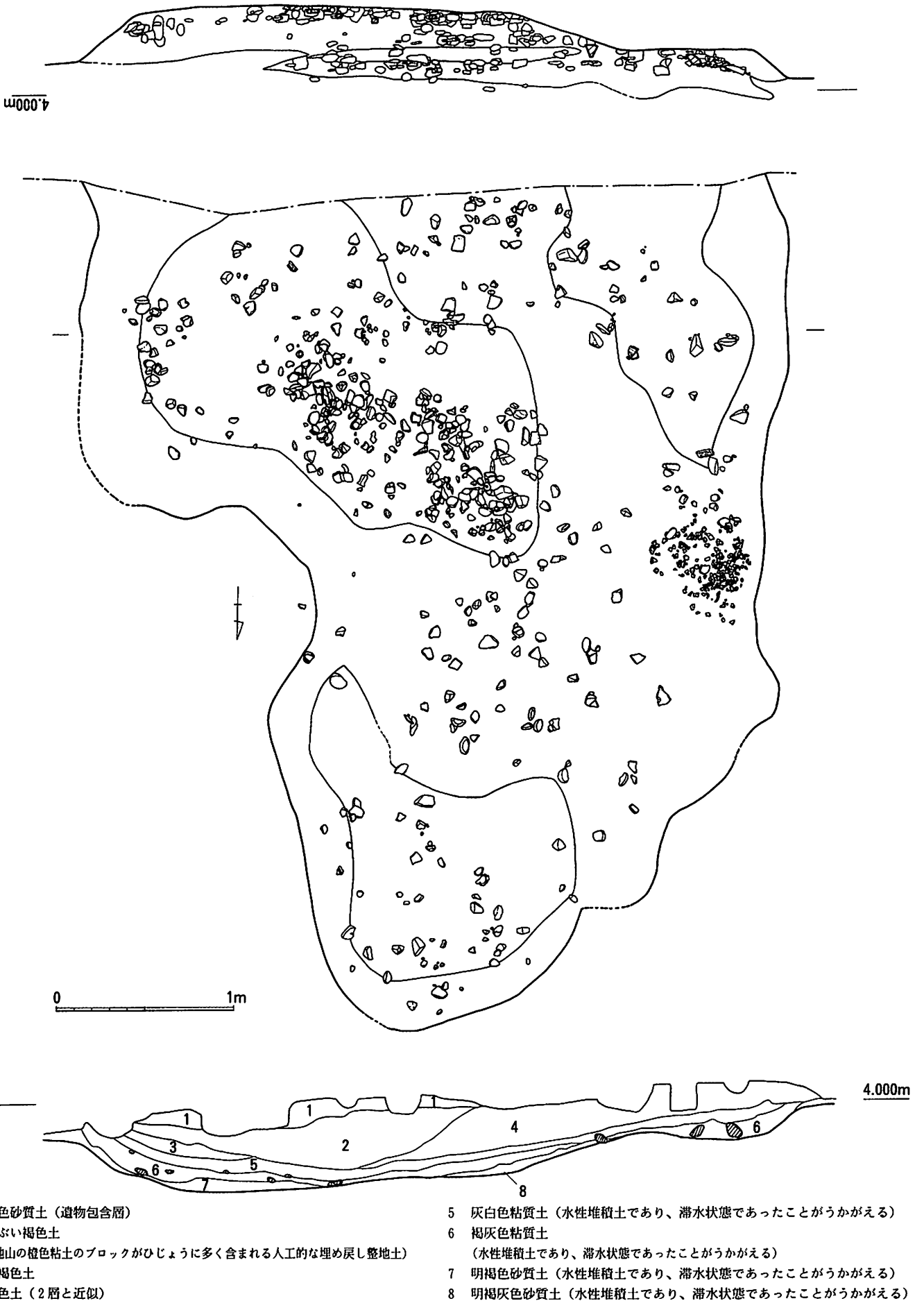
ト列3と把握でき、ピット列1とピット列2との幅は3~5m、ピット列2とピット列3との幅は4.5~5.5mを測る。

ピットから出土した遺物は第262~264図に示した。各遺物の出土遺構は遺物観察表23・24に示したとおりであるが、そのほとんどが16世紀中葉から末葉におさまるものであり、当調査区で存在したかもしれない掘立柱建物群あるいは柵列群は当該期のものであることがわかる。第262図1は白磁皿であり、口縁端には施釉がみられない。2は安山岩製石臼の下臼の皿の破片である。3は備前系陶器播鉢の口縁である。4は備前系陶器水屋甕の胴部片である。5は瓦質土器鉢であるが、焼成が軟質で黄褐色を呈する。6は雁振瓦であり、凹面にコビキ痕や布目痕が残る。7は瓦質土器火鉢であり、口縁



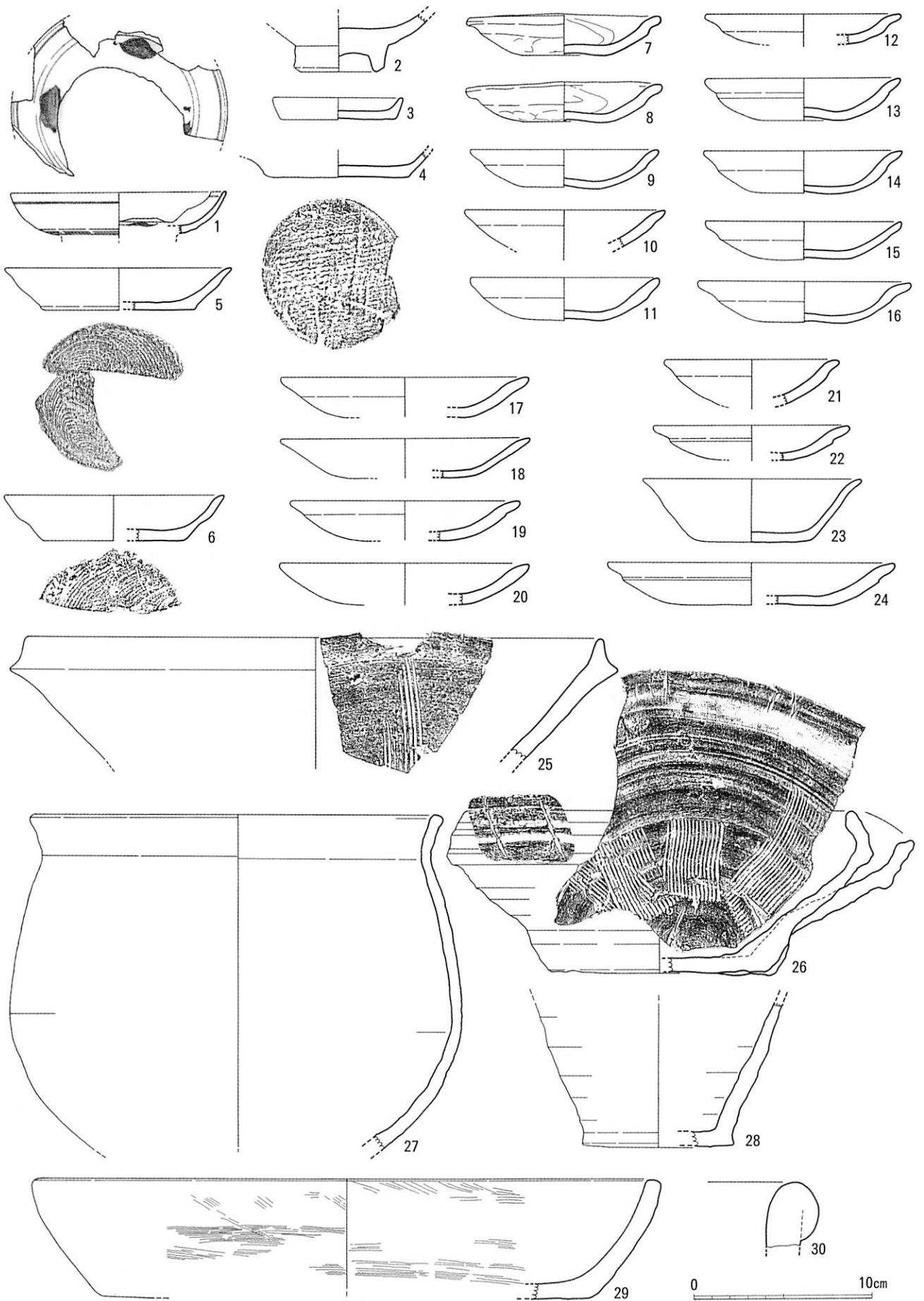
第257図 III区SX034出土遺物実測図 (1/3)





第258図 III区SX035実測図（1/60）

第2節 遺構と遺物



第259図 III区SX035出土遺物実測図(1/3)

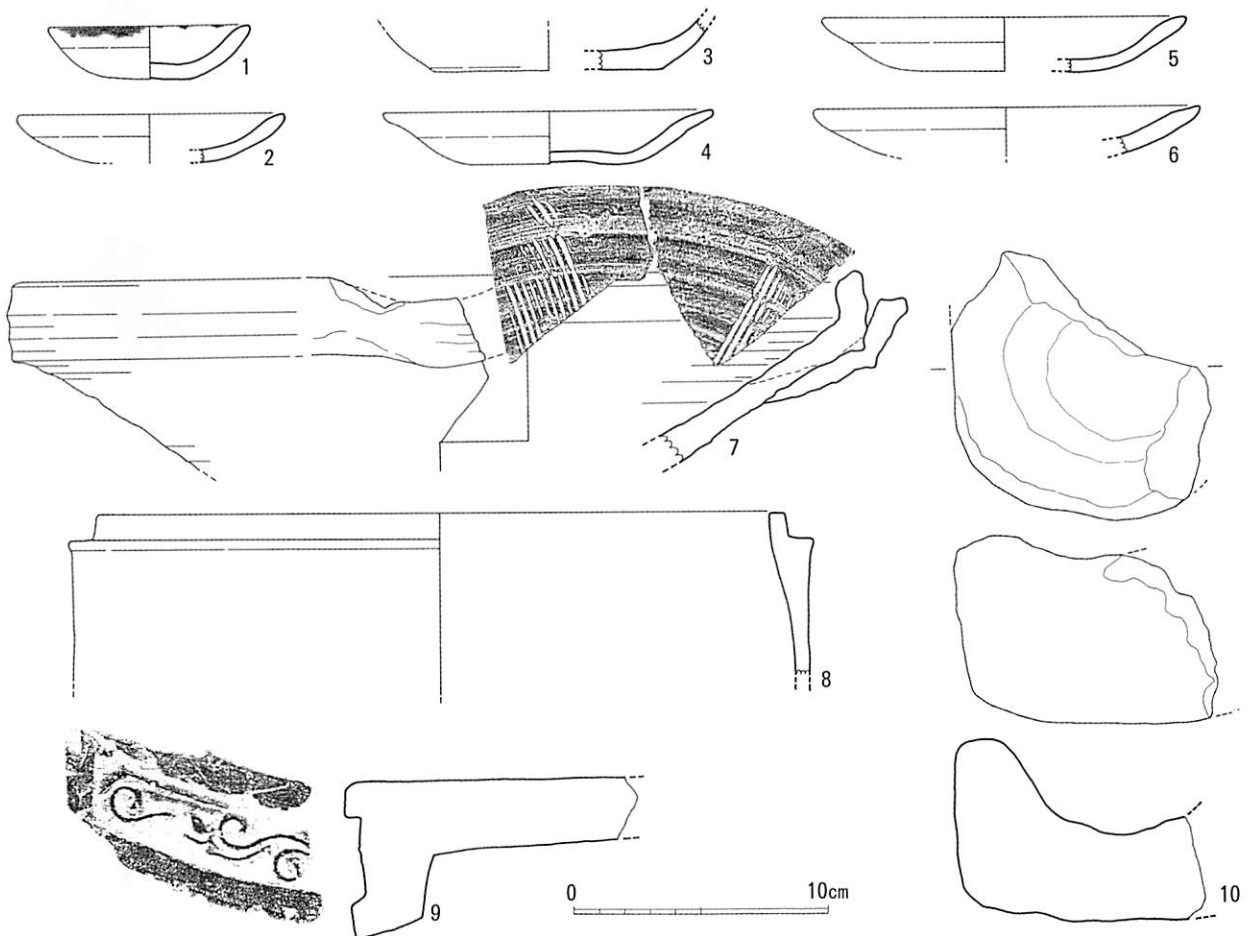
下外面に小さな2条の突帯をまわし、突帯間に雷文のスタンプがみえる。8は備前系陶器甕の胴部片である。

第263図には土師質土器・京都系土師器の皿・坏類を示した。ピット出土の多くの遺物は、京都系土師器皿であるが、そのほとんどが16世紀中葉から末葉におさまるものである。これらの資料は図化しえる大きさの遺物であり、細片であるが、図化できない遺物も多数存在するため、必ずしも遺構の帰属時期の指標になりえないものも存在する。そのため、遺構の帰属時期は出土遺物を主体にし、埋土も含めて検討して結論付けた。

第264図1は太鼓型の分銅である。片面には輪郭内をくぼませ「三」の字に似た文様を浮かび上がらせており、もう一面には楔状の刻印が二本一単位で2カ所にみられる。重量は16.02gを測る。2は繭型分銅であり、重量は69.35gを測る。側面には銅型に鉛を流し込んだ4～5mmの楕円形穴がみられる。

#### f. 包含層

包含層の出土遺物については、層位ごとの取り上げが可能であった遺物を第265～280図に示した。第265図は51層、第266図は48層、第267図は36～39層、第268図は34層、第269図は19～21層、第270～272図は25層、第273～274図は10～25層、第275図は7～25層、第276～277図は7層、第278～280図はⅢ区全域からそれぞれ出土した遺物である。



第260図 Ⅲ区SX035下層出土遺物実測図 (1/3)

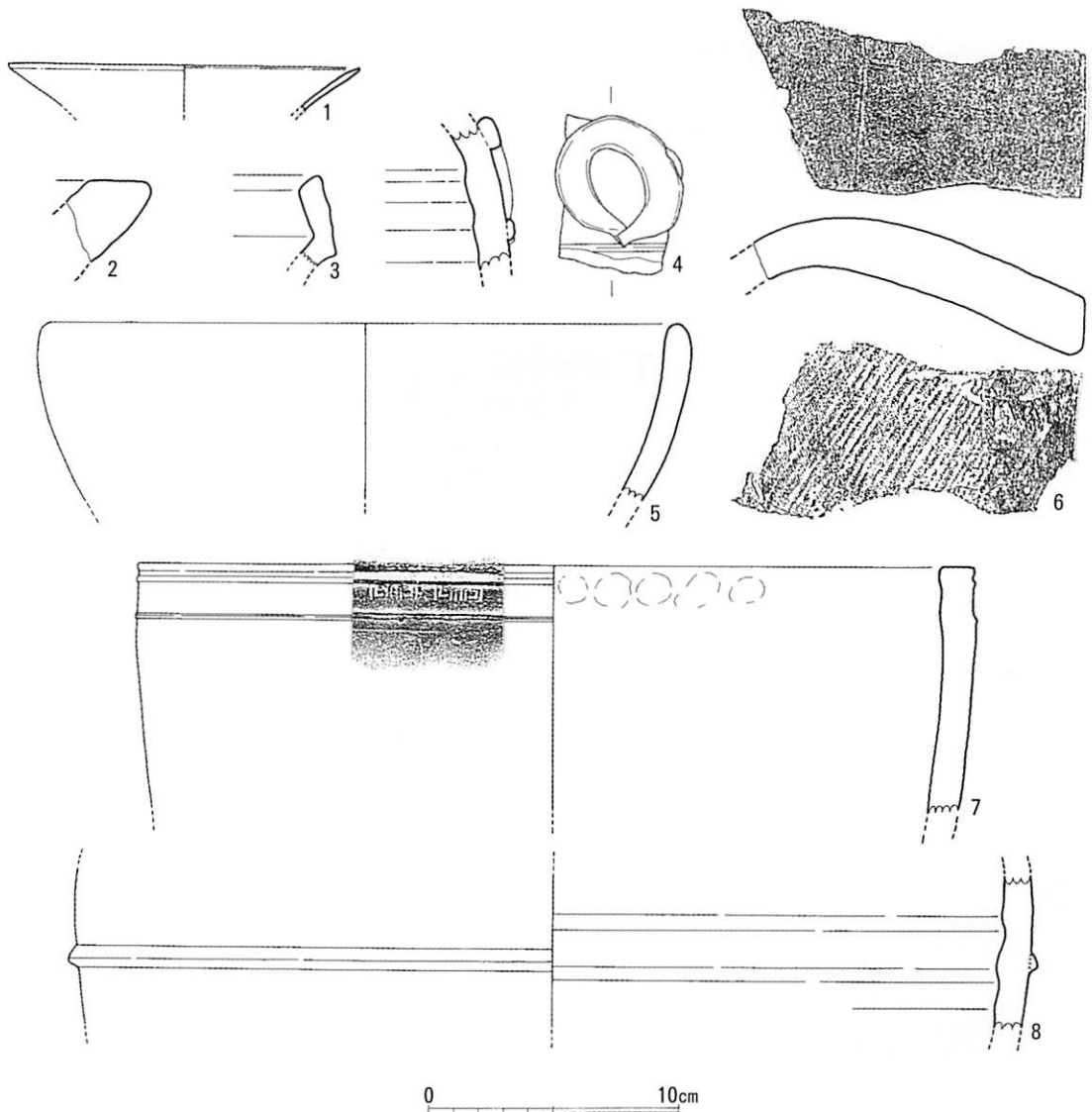
第265図1は褐色系の発色をもつ朝鮮王朝産陶器碗である。2は褐釉陶器壺であり、内外面に釉薬が施されて、底部は露胎のままである。中国南方産であろうか。

第266図1は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。2は瓦質土器鉢である。調整は丁寧で、内外面にハケ目と工具によるナデが認められる。

第267図1は中国景德鎮窯系青花水柱の注口部である。2は、口縁部をくの字状に外反させた中国龍泉窯系青磁盤である。口縁端部を波打たせ、外面に鎊を施している。3は中国産磁器碗であり、茶色釉が施されている。4は口縁部をくの字状に外反させ小野分類F群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。口唇部に鉄釉を施す特徴をもつ。5は碁笥底タイプの中国漳州窯系青花皿であり、小野分類C群に分類できる。器壁がやや厚く、深い印象をもつ。6は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7は中国景德鎮窯系青花碗である。2次



第261図 III区SX035出土銭貨(1/1)

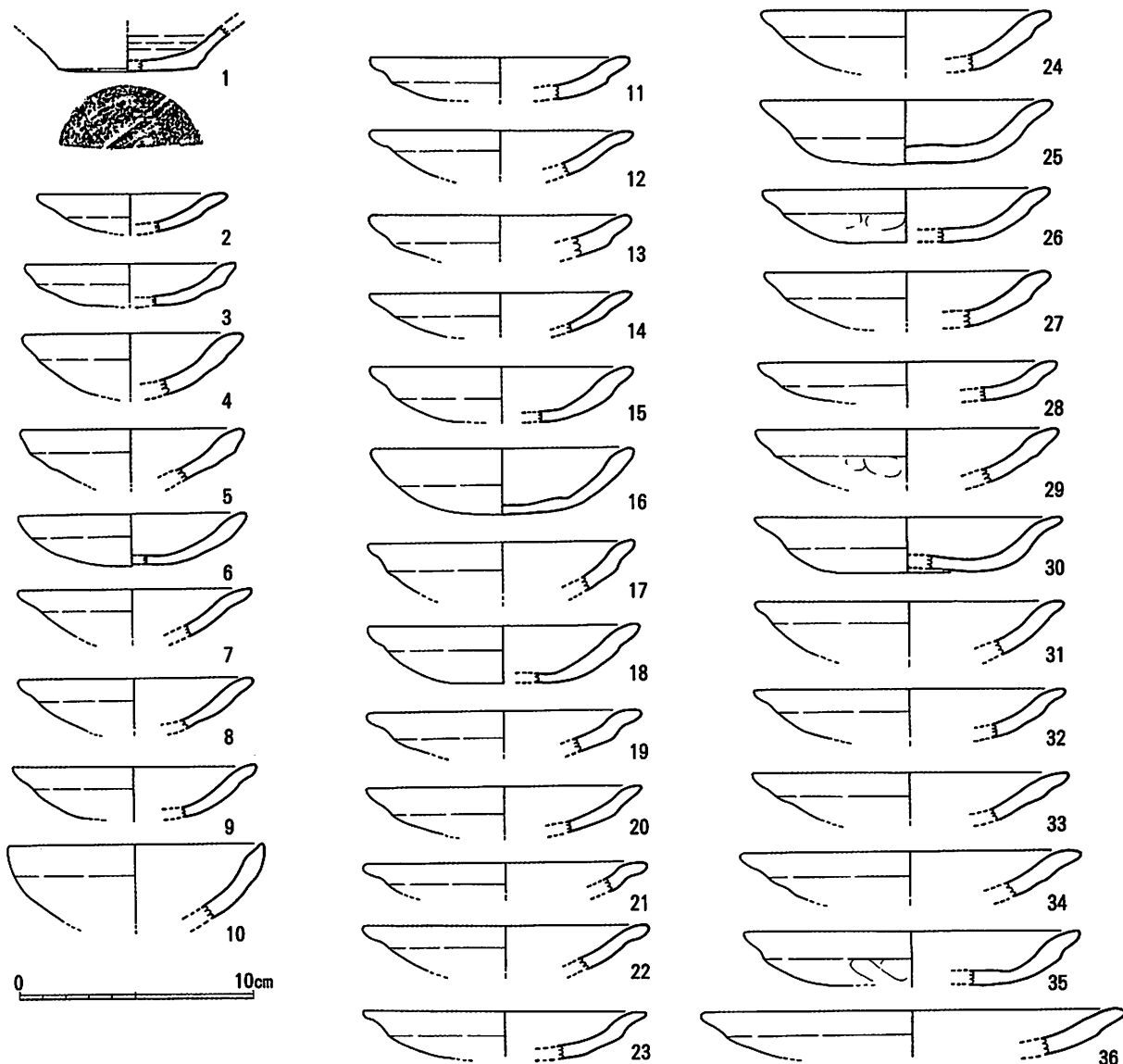


第262図 III区ピット出土遺物実測図①(1/3)

焼成を受けたためであろうか、青花および釉調がやや異なる。8は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。9は中国産翡翠釉小皿である。10・13は備前系焼締陶器播鉢である。10は当時の一般的な播鉢と異なり、小振りで器壁も薄い。口縁部はくの字状に折り曲げているのみで、内面には放射状の、また、見込み部には十字状のスリ目がみられる。13はナナメ方向のスリメがみえるため、乗岡編年近世1期に帰属するものであろう。11は瓦質土器鉢である。口縁外面を大きく三角形状に肥厚させており、高台を持つ。12は瓦質土器火鉢である。

第268図1は瀬戸美濃産陶器天目碗である。2は中国龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎬蓮弁を配するタイプである。

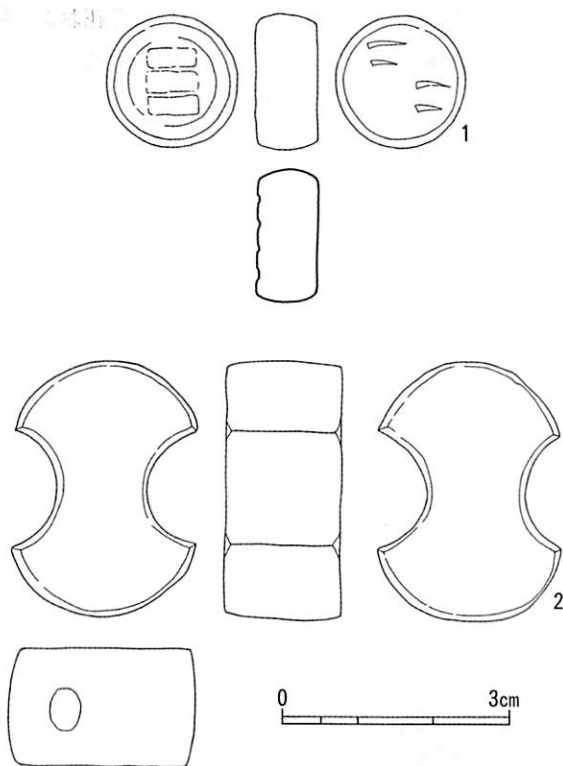
第269図1は中国漳州窯系青花盤であり、外面に鎬を施している。2は碁筭底タイプの中国漳州窯系青花皿であり、小野分類C群に分類できる。3は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。4は中国漳州窯系青花皿であり、口縁部をくの字状に外反させる小野分類F群に分類できる。外面に鎬を施している。5は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台壘付以外には全面施釉されている。



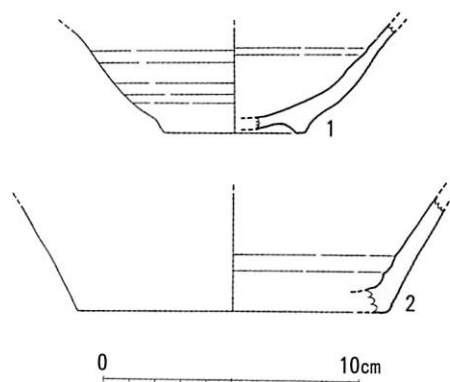
第263図 III区ピット出土遺物実測図② (1/3)

6は中国景德鎮窯系青花香炉である。内面および底部は露胎である。7は中国産五彩碗の破片である。8は器壁の薄い焼締陶器鉢である。中国南部産であろうか。9は京都系土師器皿を再利用した取瓶である。10は備前系焼締陶器茶入であろう。11は瓦質土器羽釜である。12は軽石製の環状石製品である。径4cm、厚さ1.5cmの中央に、径1cmの円孔を穿つが、用途は明らかでない。13は頁岩製の砥石である。扁平な長方形を呈し、表裏面および片方の側面を砥面として利用している。

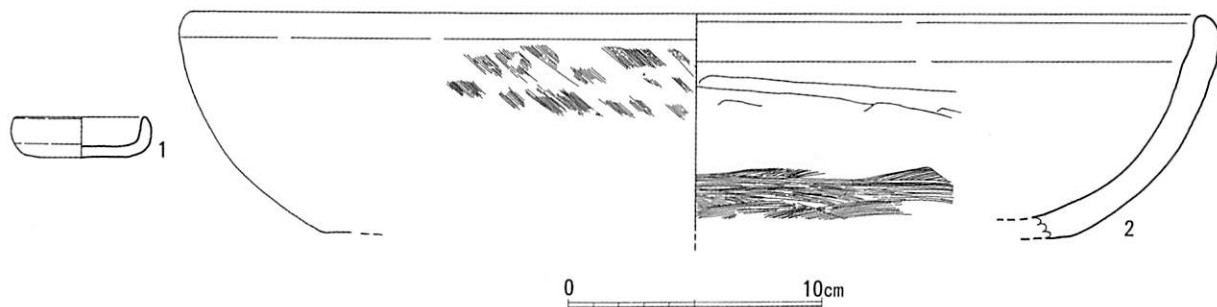
第270図1は小野分類B群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。2・3は小野分類E群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。4は中国漳州窯系青花碗である。5は中国漳州窯系青花であり、見込部に蛇目状の釉剥ぎが行われている。筒形の形態をもつ碗であろうか。6は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7・12は中国産翡翠釉碗であろうか。8は中国産磁器水注の注口部であり、外面に瑠璃釉が施釉されている。9は中国産翡翠釉菊皿である。10は碁笥底を呈する中国龍泉窯系青磁皿である。11は中国漳州窯系青花鉢である。13は内外面に象嵌技法の文様がみられる朝鮮王朝産陶器碗である。14は瀬戸美濃系天目碗の高台部を円盤状に加工し再利用したものである。15は口縁が稜花状に端反る白磁皿である。16~19は白磁皿であり、17・18・19はいずれも口縁がS字状に端反る。20は瀬戸美濃系陶器丸皿である。21は逆ハの字状に開く磁器皿である。口縁



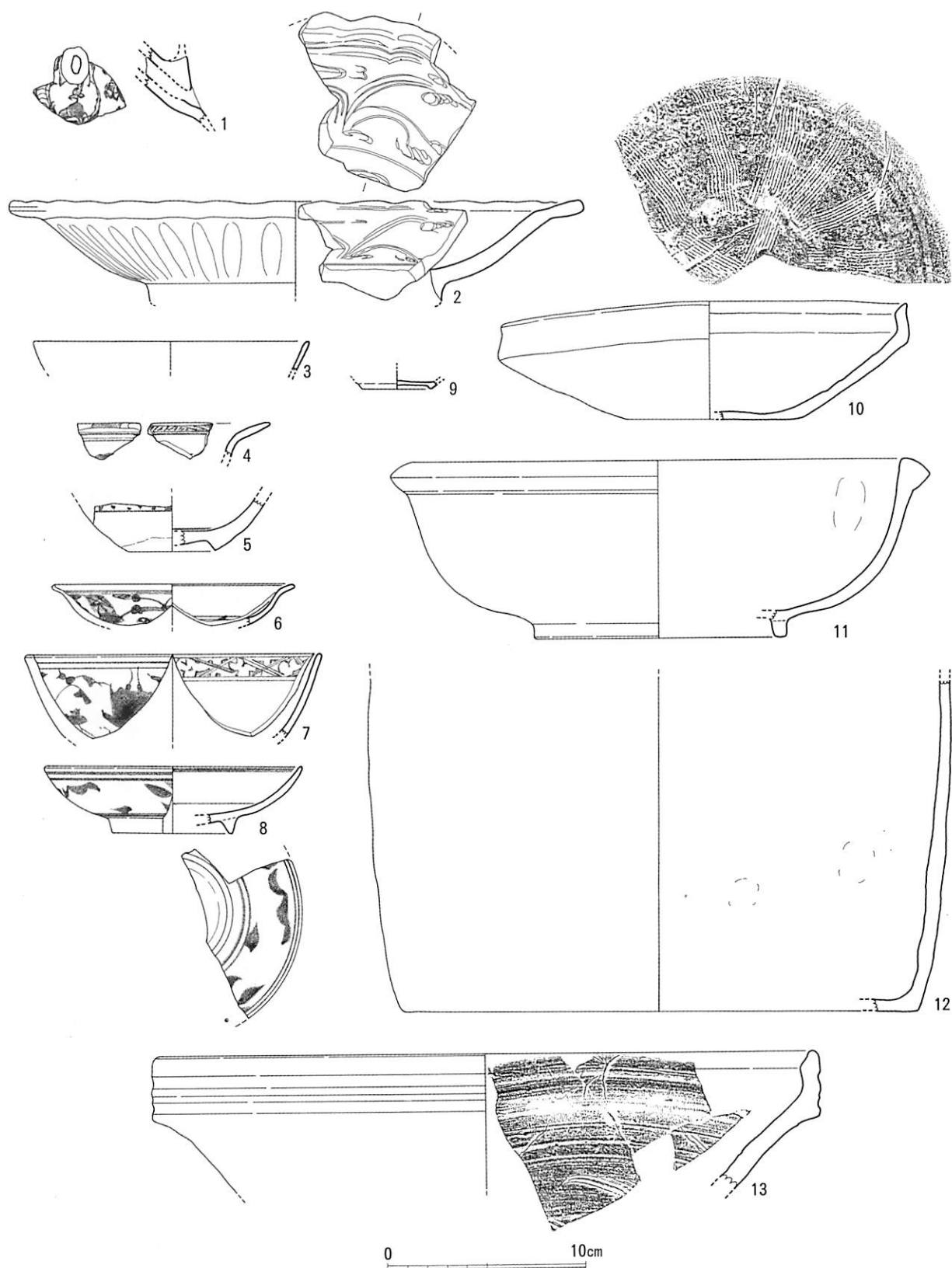
第264図 III区SP044出土遺物実測図(1/1)



第265図 III区51層出土遺物実測図(1/3)



第266図 III区48層出土遺物実測図(1/3)



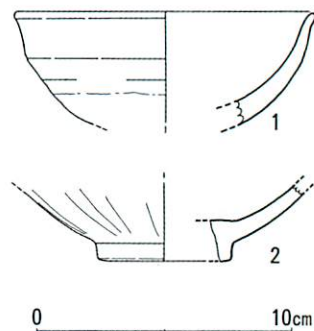
第267図 III区36~39層出土遺物実測図(1/3)

第2節 遺構と遺物

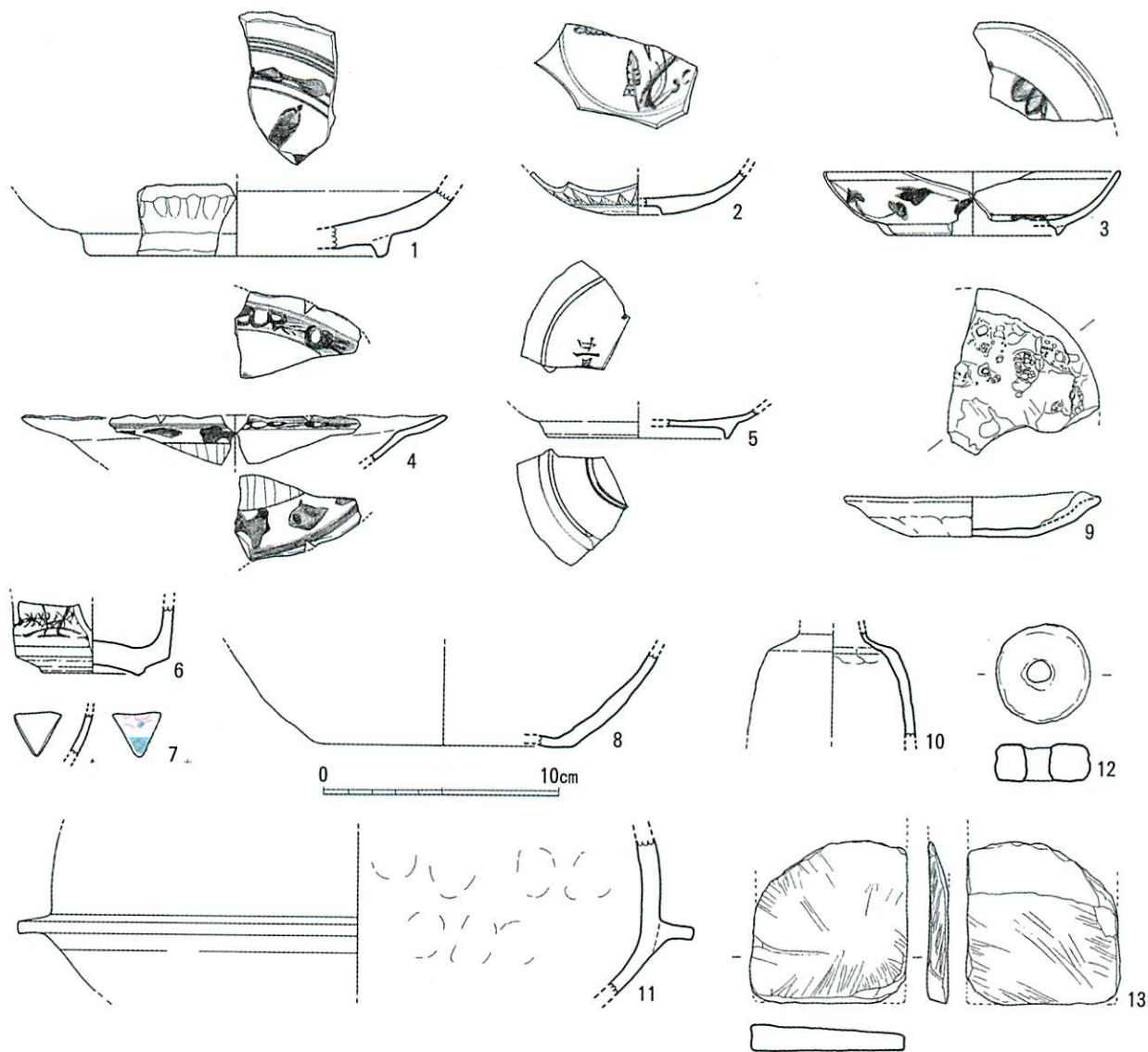
内面に沈線がみられ、口唇部は面をもつ。透明釉がかかり、灰色の発色をもつものであるが、2次焼成を受けている。

第271図1は焼締陶器鉢であり、上面に凹線がめぐる鐔状の口縁をもつ。中国南部産であろうか。2は土師質土器皿であるが、2次焼成を受けたためか、瓦質状に変化している。内面上半にはタール状の付着物がみえる。3は京都系土器器皿であり、口縁内外面にススが付着し、灯明皿であったことがわかる。4・5は備前系焼締陶器挿鉢である。6は褐釉陶器壺である。7は赤間石と呼ばれる輝緑凝灰岩製硯の陸部から海部にかけての破片である。8は長方形の結晶片岩製砥石であり、1面のみ砥面として利用している。9も長方形の結晶片岩製砥石であり、表裏面および側面1面のみ砥面として利用している。

第272図1は扁平な隅丸長方形の上端にひもを通す円環を付けた鉛製品である。表裏面は平らで文様等は確認できない。メダイであろうか。2は鉛製鉄砲弾であり、径1.2cm、重さ11.9gを測る。3



第268図 III区34層出土遺物実測図 (1/3)

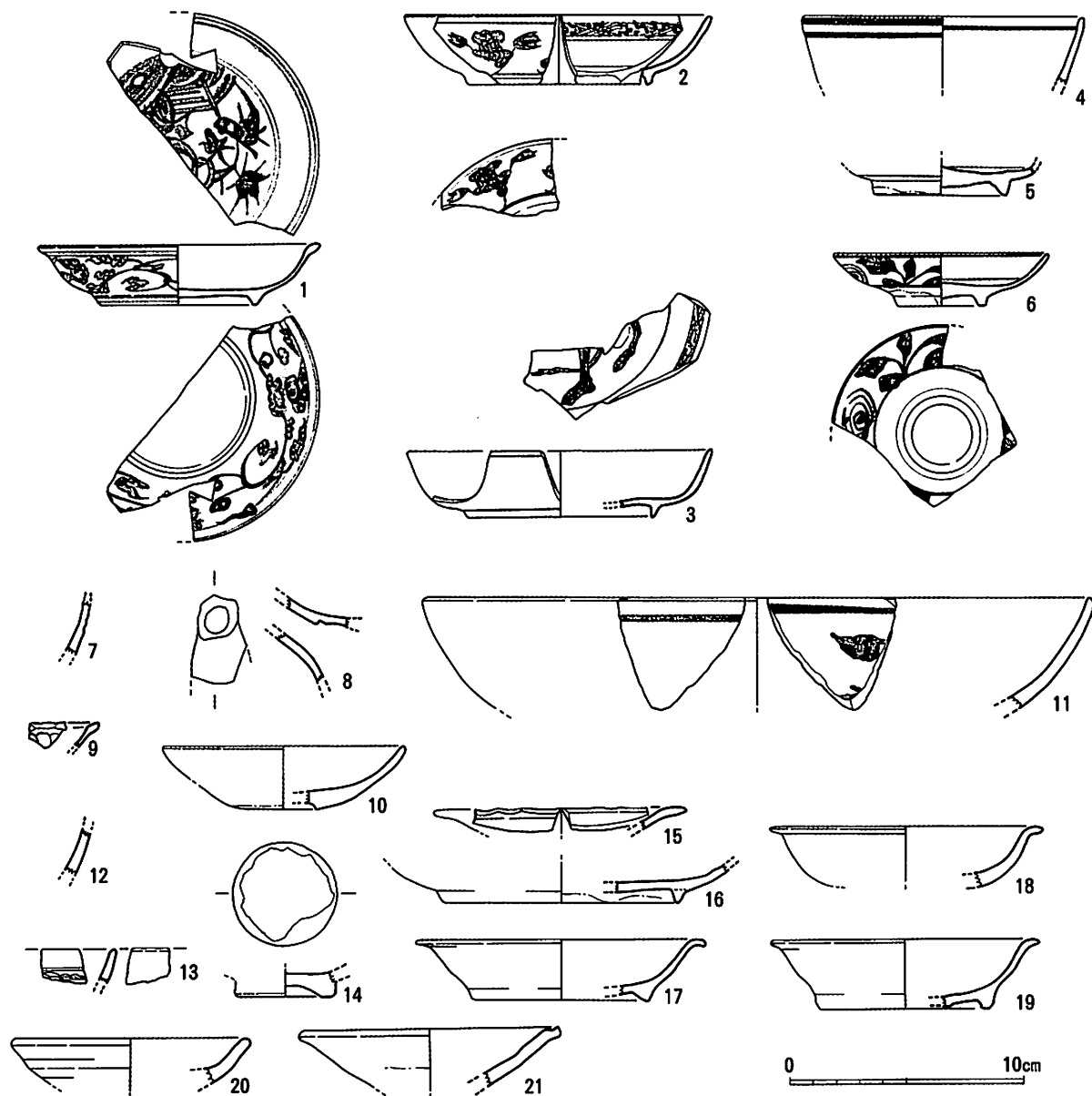


第269図 III区19～21層出土遺物実測図 (1/3)



は側面に菊状の条溝をめぐらす銅製権である。上端の円環の一部が欠けているが、87.12gを測る。

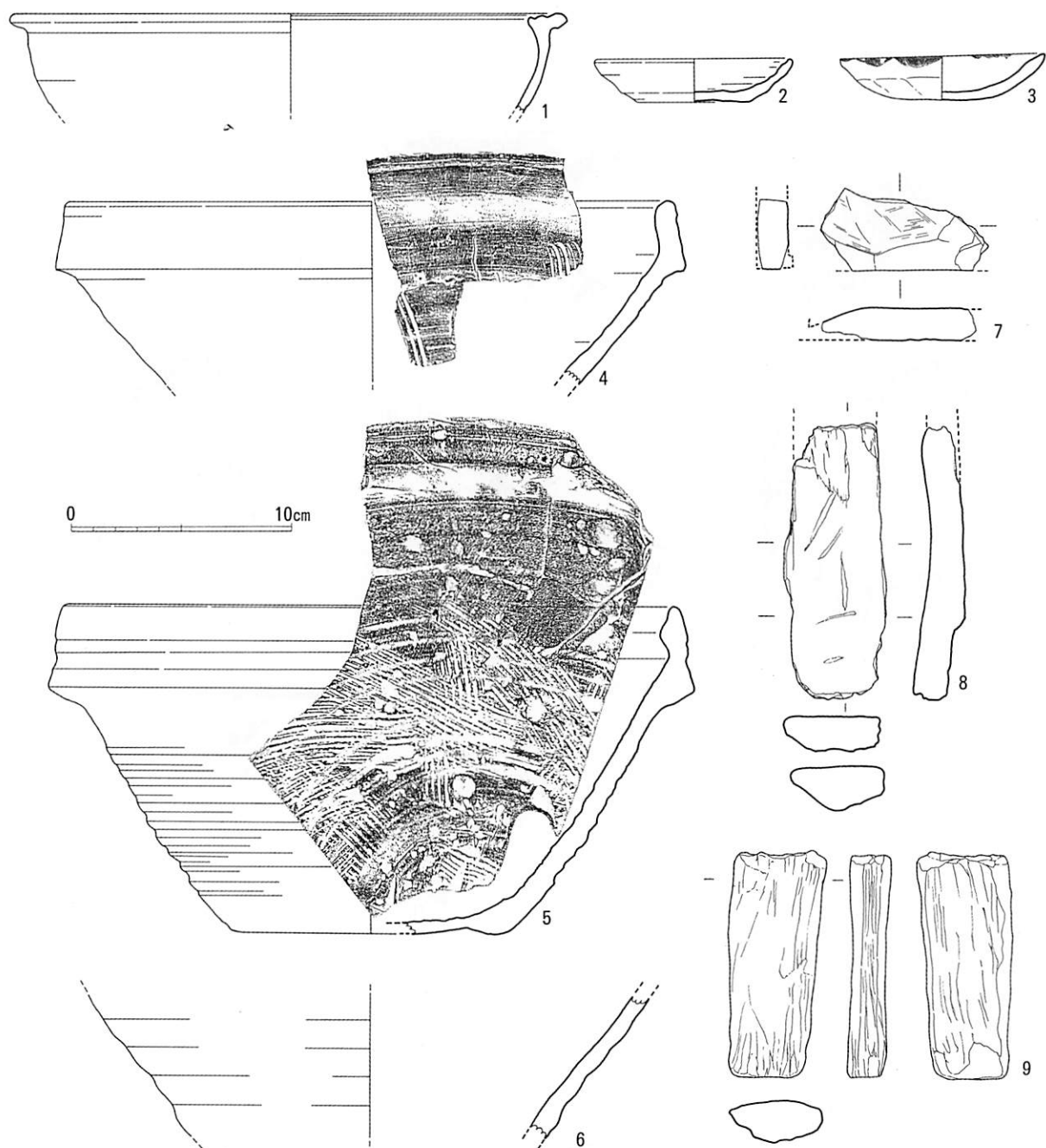
第273図1・2は中国景德鎮窯系青花碗であり、3は中国漳州窯系青花碗である。4・6は中国漳州窯系青花皿であり、6には見込み部に大きく「寿」の字を描く。5は中国景德鎮窯系青花皿である。内外面に茶釉を施し、高台内には2重圈線内に字款がみられる。7は肥前唐津系陶器溝縁皿である。1600～1630年頃の所産か。8は中国漳州窯系青花碗であり、見込み部には花文がみられる。9は白磁碗であり、高台を含めて内外面全面に施釉され、見込部に重ね焼き痕がみえる。朝鮮王朝産か。10は中国龍泉窯系青磁碗の底部片であり、高台畳付けおよび高台内は露胎のままである。11は白磁碗であり、見込みおよび外面底部畳付けおよびその内部は露胎のままである。12は中国龍泉窯系青磁碗の底部片であり、内面および外面高台部にまで施釉されている。13・14は内外面に施釉された中国龍泉窯系青磁瓶であり、同一個体であるかもしれない。15・17・19は小野分類B群に分類できる中国漳州窯系青花皿であり、高台内面のみ露胎のままである。16・18は小野分類E群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、内外面とも全面施釉されている。20は白磁稜花皿であり、見込みおよび外面底部付



第270図 Ⅲ区25層出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物

近は露胎のままである。21・23は口縁端反り形態の白磁皿である。22は花卉形の口縁形態をもつ白磁皿であり、見込みおよび外面底部付近は露胎のままである。24・25は緑釉陶器壺であり、内面・高台部および底部は露胎のままである。中国南部産。26・27は中国景德鎮窯系青花小杯である。28は中国南部産緑釉陶器瓶の破片であり、内面は露胎のままである。29は緑釉陶器壺の口縁片であり、内外面に施釉されている。中国南部産。30は中国産翡翠釉小皿である。31は瀬戸美濃系陶器天目碗である。32は碁笥底タイプの中国漳州窯系青花皿である。33は外面に鎊をもつ白磁小杯である。初期伊万里であり、1630～1650年頃の産。34は中国漳州窯系青花小壺であり、内外面とも施釉されている。35は龍泉窯系青磁瓶であり、取手が付き、外面には施文されている。36は陶器壺であり、内面に施釉されている。外面は褐色に発色している。産地不明。



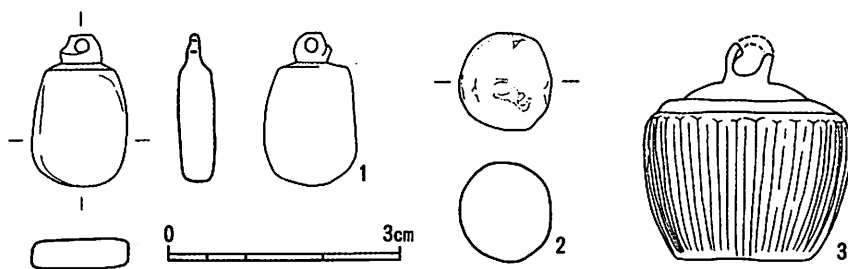
第271図 III区25層出土遺物実測図② (1/3)

第274図1は備前系焼締陶器壺である。肩が張る特徴をもち、外面に縦方向のへう記号がみえる。2は瀬戸美濃産陶器卸皿である。3は焼締陶器小壺である。薄手で赤褐色の発色をもち、別の小壺が付属しているものであろう。中国南部産か。4は備前系焼締陶器徳利の底部片である。5・6は備前系焼締陶器挿鉢であり、放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものである。7は韓半島産焼締陶器舟徳利である。8は土師質土器取瓶であり、内面に金属滓が付着している。9は土製鞆羽口の破片である。10は土錘である。11・12は砥石である。13は硯であり、海部が折損している。14は安山岩製茶臼の下臼の破片である。

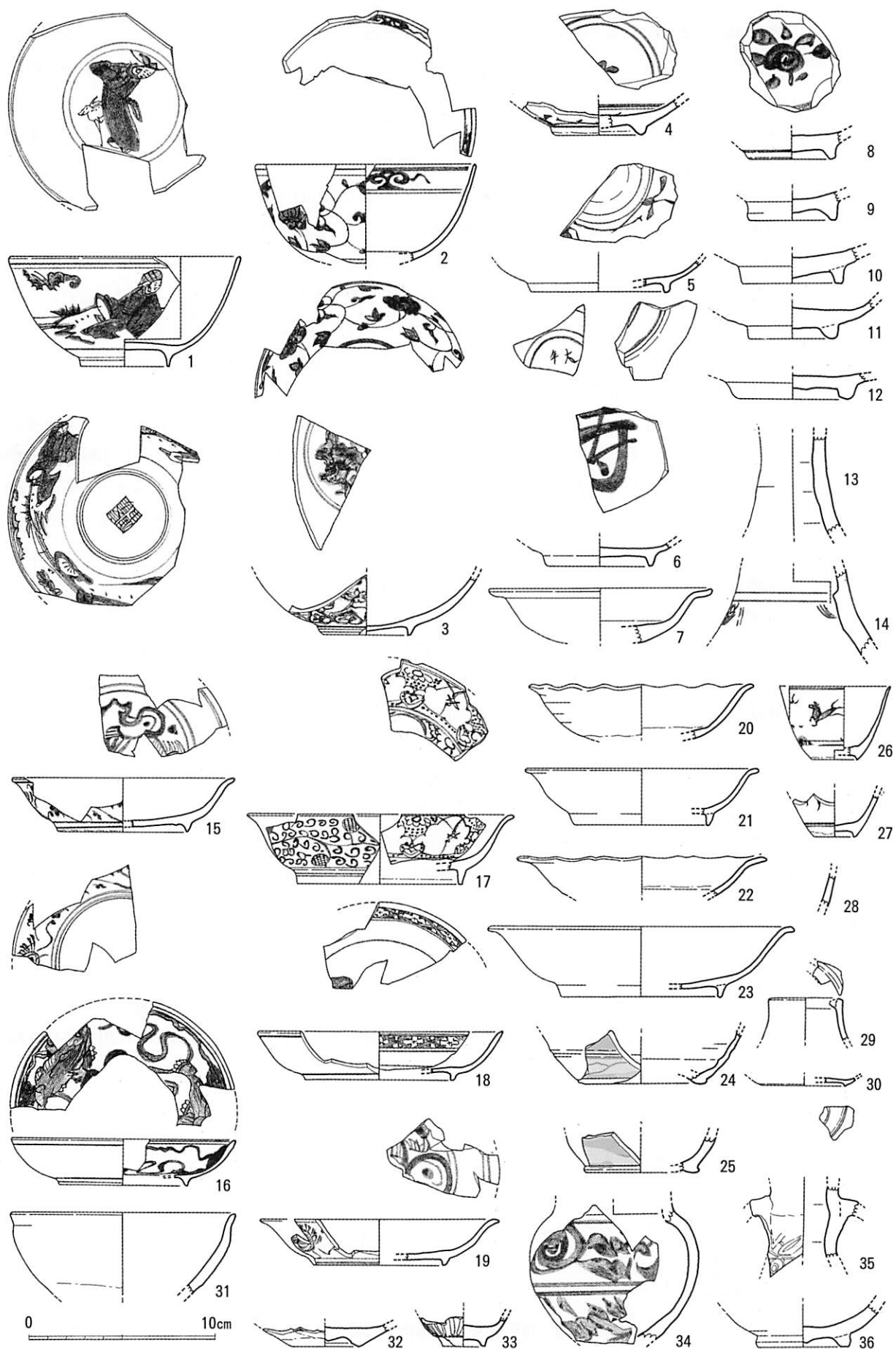
第275図1は青銅製品であり、上面を内側に折り込んだ円環状を呈し、擬宝珠の基部に嵌め込むような形態をもち、2は緑色を呈し、小さな気泡を含むガラス製品の破片である。3は凝灰岩製の容器状製品である。方形の平面形をもち、四脚がつき、上面を方形にくぼませている。

第276図1は大型の中国漳州窯系青花皿であり、外面に鎬をもち、2・11は小野分類E群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、内外面とも全面施釉されている。2には底部高台内において2重圈線内に字款がみえる。3は中国漳州窯系青花皿である。4は小野分類F群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿であり、見込みには狐文がみえる。5は中国景德鎮窯系青花盤である。6は小野分類E群に分類できる中国漳州窯系青花皿である。7は中国漳州窯系青花皿である。8は中国漳州窯系青花皿であり、見込み部を蛇の目状に釉剥ぎを行っている。9は小野分類B群に分類できる中国景德鎮窯系青花皿である。10はまっすぐに体部が逆ハの字状に開く陶器皿である。瀬戸美濃産であろうか。12は中国龍泉窯系青磁菊皿である。13・14はまっすぐに体部が逆ハの字状に開く中国産白磁皿であり、見込み部および外面高台付近は露胎のままである。15は花卉形の口縁形態をもち白磁皿であり、見込みおよび外面底部付近は露胎のままである。16は磁器小杯であり、灰色の発色をもち、17は白磁水注の注口部の破片である。18は中国南部産翡翠釉小皿である。19は中国龍泉窯系青磁香炉の底部片であり、方柱状の器形をもちものである。20は磁器碗であり、内面に透明釉、外面の高台畳付け以外に茶釉がかかっている。21は中国景德鎮窯系青花小杯であり、底部高台内に字款がみえる。22は中国産白磁皿であり、内面に隆状に器面を隆起させ花文をあしらった型作りの文様がみえる。23は中国龍泉窯系青磁碗であり、外面口縁付近に雷文の退化した文様がみえる。24は肥前産磁器人形であり、顔の部分にのみ、褐釉がみられる。底面から背面下部に円孔が穿たれている。25は型作りの土製人形であり、両手で勺をもつ座像の神像を表したものである。26は中国龍泉窯系青磁菊皿であり、底部高台内の円圈内に字款がみえる。

第277図1・2は唐津系陶器皿であり、見込み部に砂目がみられる。1600～1630の所産か。3は陶器壺の肩部片であり、外面に自然釉がみえる。4は上野高取系陶器角皿である。5は志野焼角皿である。6は瀬戸美濃系天目碗の底部片であり、円盤状に加工し再利用している。7は瀬戸美濃系陶器皿であり、見込み部に花文のスタンプがみえる。8は陶器片口鉢であり、口縁部以外には内外面に施釉



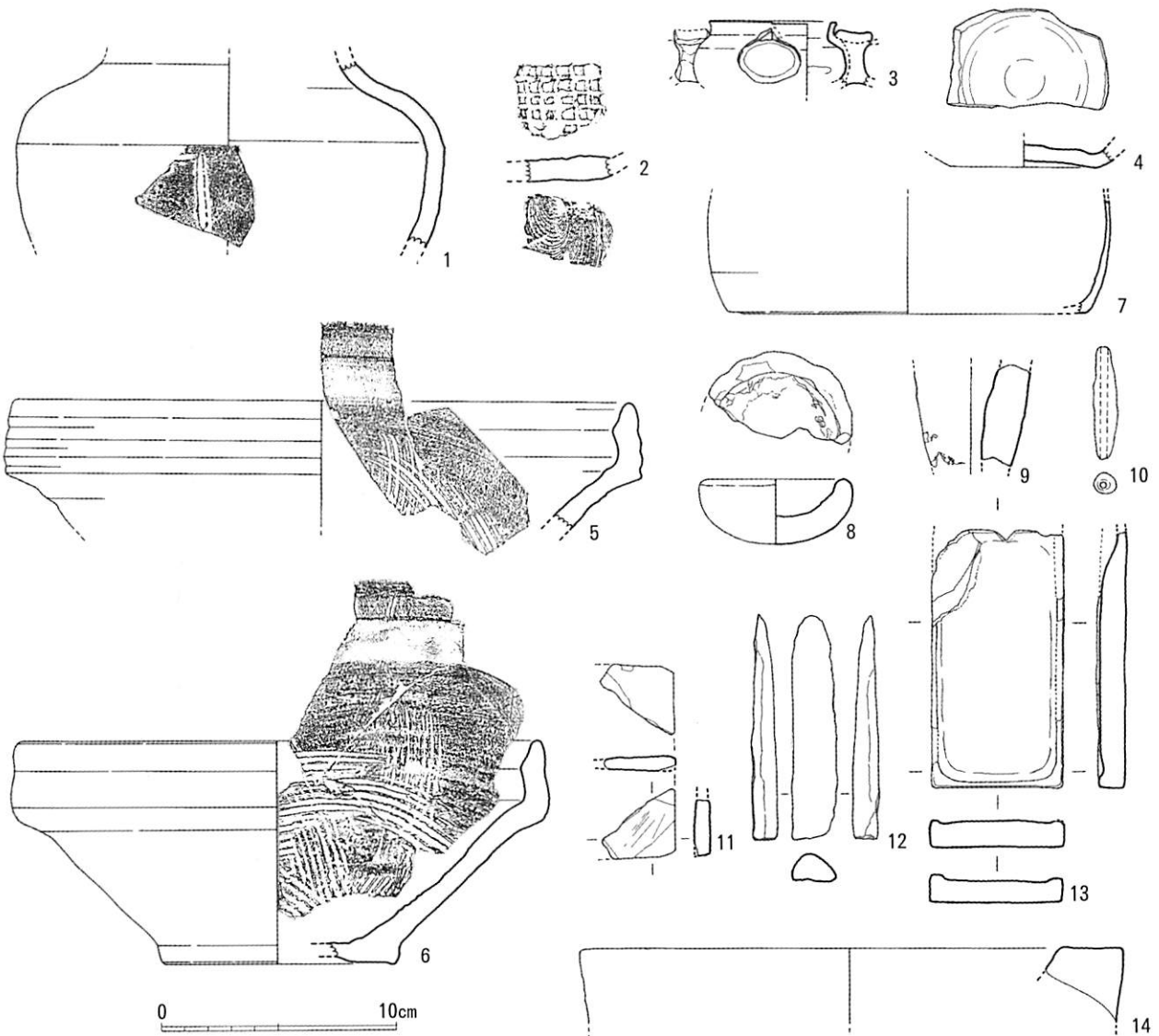
第272図 Ⅲ区25層出土遺物実測図③ (1/1)



第273図 III区10~25層出土遺物実測図① (1/3)

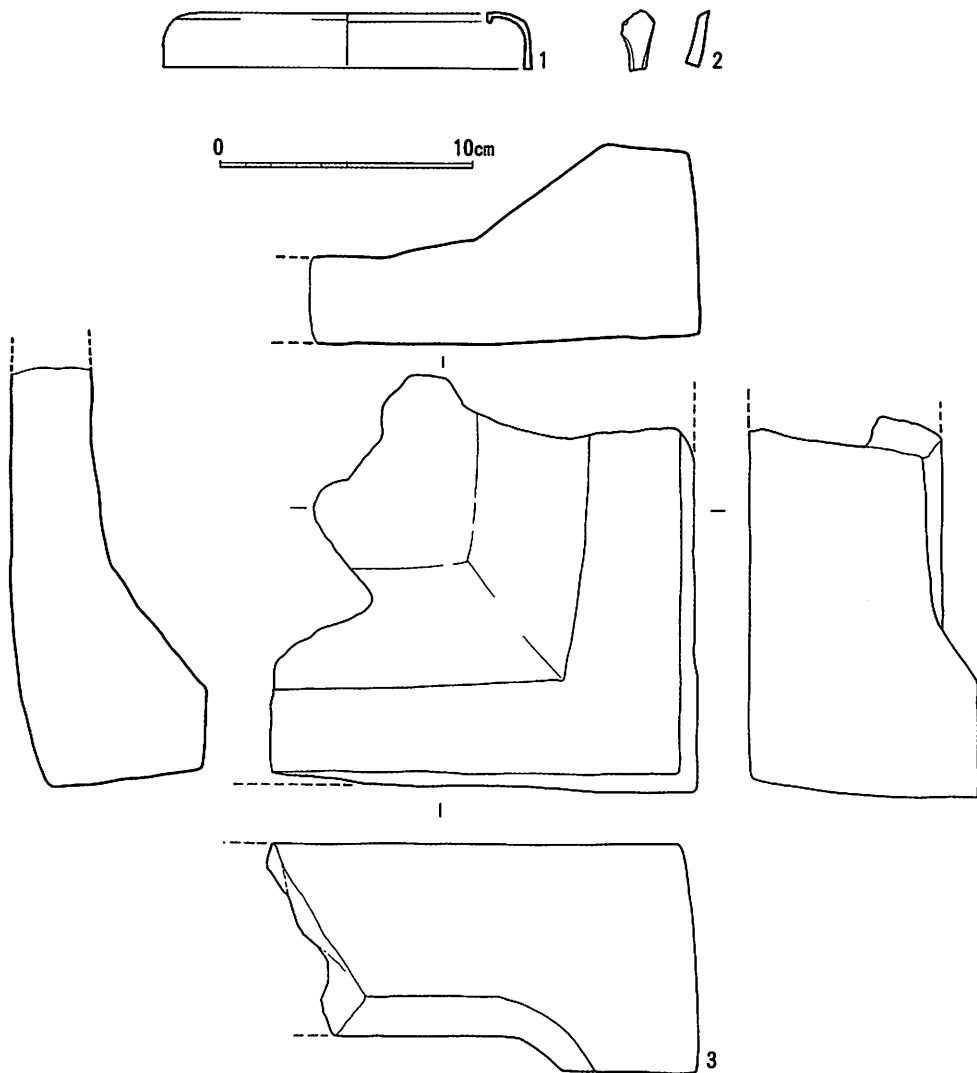
されている。9は肥前瑠璃釉香炉蓋である。文様は金銀彩の上絵付けであるが、剥落している。1650～1660年代の所産か。10は須恵器小壺の破片である。11は備前系焼締陶器小壺である。丸く大きく膨らむ胴部と対照的に小さな頸部がつき、肩部には耳がつく。12は韓半島産陶器碗である。砂目痕がみられる。13は唐津系陶器茶入であろうか。14は陶器瓶である。外面上半に褐釉がかけられ、内面には同心円文の当て具痕がみえる。15は備前系焼締陶器瓶である。16は備前系焼締陶器の建水であろうか。17は土錘である。18は備前系焼締陶器小壺である。19は備前系焼締陶器鉢である。20・23～25は備前系焼締陶器挿鉢である。21は備前系焼締陶器鉢である。22は陶器瓶であり、肩部に灰釉がかけられている。近世の所産か。

第278図1は中国景德鎮窯系青花碗である。2は肥前産染付碗であり、近世の所産である。3は中国景德鎮窯系青花皿であり、高台内に字款がみられる。4は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類B群に分類でき、5は中国漳州窯系青花皿であり、小野分類E群に分類できる。6～7は中国産五彩の口縁片である。内外面に絵付けがみられる。8～10は中国南部産翡翠釉菊皿である。11は磁器小壺で

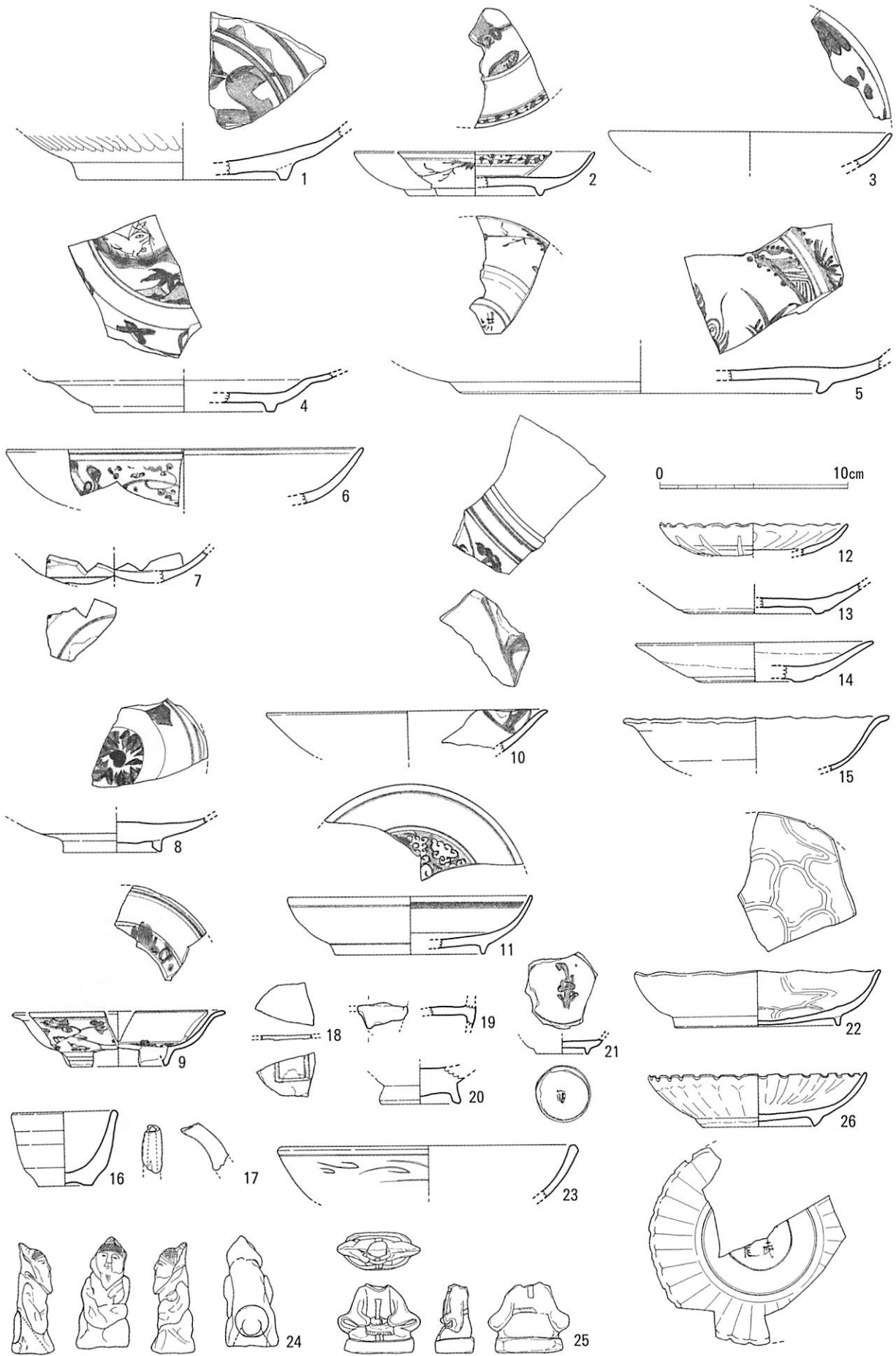


第274図 III区10～25層出土遺物実測図② (1/3)

あるが、産地は明らかでない。12は小杯であり、外面の「寿」の染め付けを挟み、鎬がみられる。13は伊万里産染付小杯である。14は中国龍泉窯系青磁碗であり、高台畳付けおよび内部は露胎のままである。15は中国龍泉窯系青磁香炉である。内外面に施釉され、三角形の脚がつく。16は志野産向付の破片である。17は中国景德鎮窯系青花器台である。方柱状のプロポーションに底面・側面に透かしをもち、上面には半球状のくぼみをもつ。18は龍泉窯系青磁器台の側面の透かしである。19は龍泉窯系青磁碗であり、外面に細弁蓮華文がつくタイプであろう。20・21は中国産白磁皿である、口縁がS字状に外反する形態をもつ。22は中国南部産白磁碗であり、見込み部および外面高台付近は露胎のままである。23・41は中国南部産褐釉陶器壺である。24は肥前唐津産陶器溝縁皿であり、1600～1630年頃の所産である。25は陶器香炉であり、暗緑色に発色する釉薬が内外面に施釉されている。26は中国景德鎮窯系青花皿である。27は中国産磁器であるが、用途は明らかでない。外面には瑠璃釉がみられる。28は瀬戸美濃系陶器折縁皿であり、29は瀬戸美濃系陶器碗であろう。30は瀬戸美濃系陶器天目碗である。31は唐津系陶器碗であり、暗緑色の発色をもつ。1590～1610年の所産か。32・33は朝鮮王朝産陶器碗であり、暗オリーブ色の発色をもつ。34は唐津系陶器皿である。35は唐津系陶器碗であり、見込み部に胎土目痕がみえる。1590～1610年の所産か。36は備前系焼締陶器瓶である。37は備前系焼締陶器鉢であろうか。

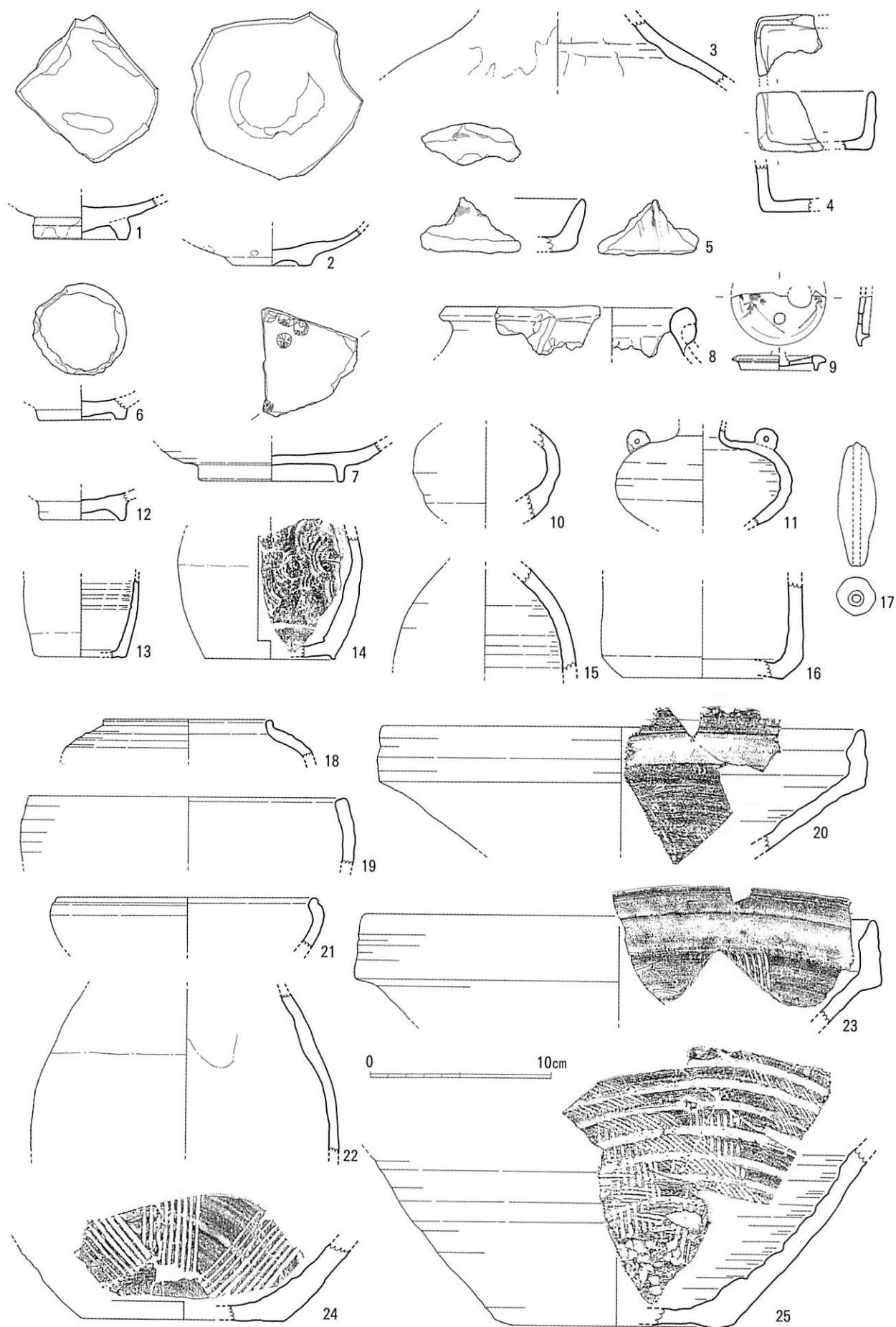


第275図 III区7～25層出土遺物実測図(1/3)



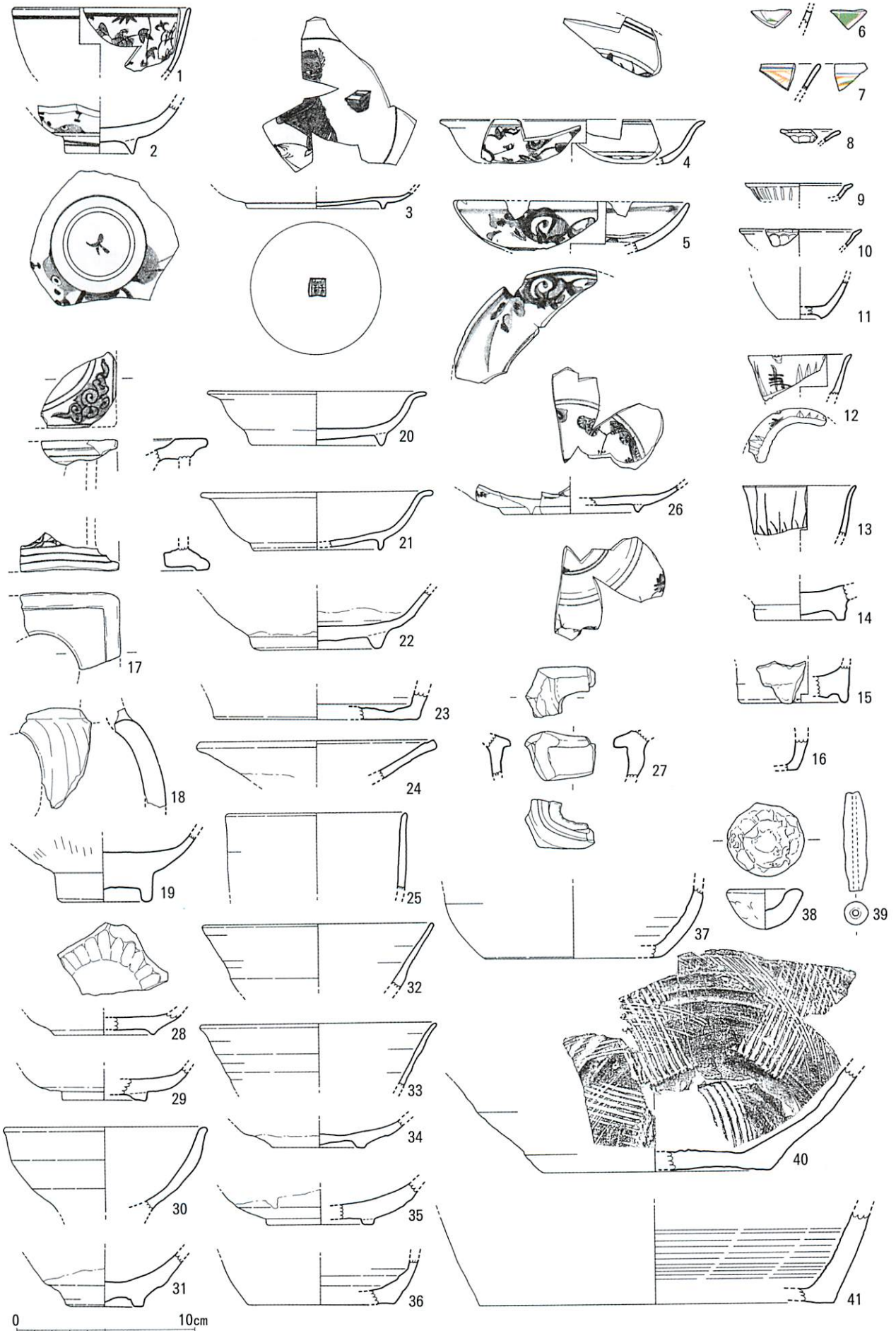
第276图 III区7層出土遺物実測図① (1/3)

第2節 遺構と遺物



第277図 III区7層出土遺物実測図② (1/3)



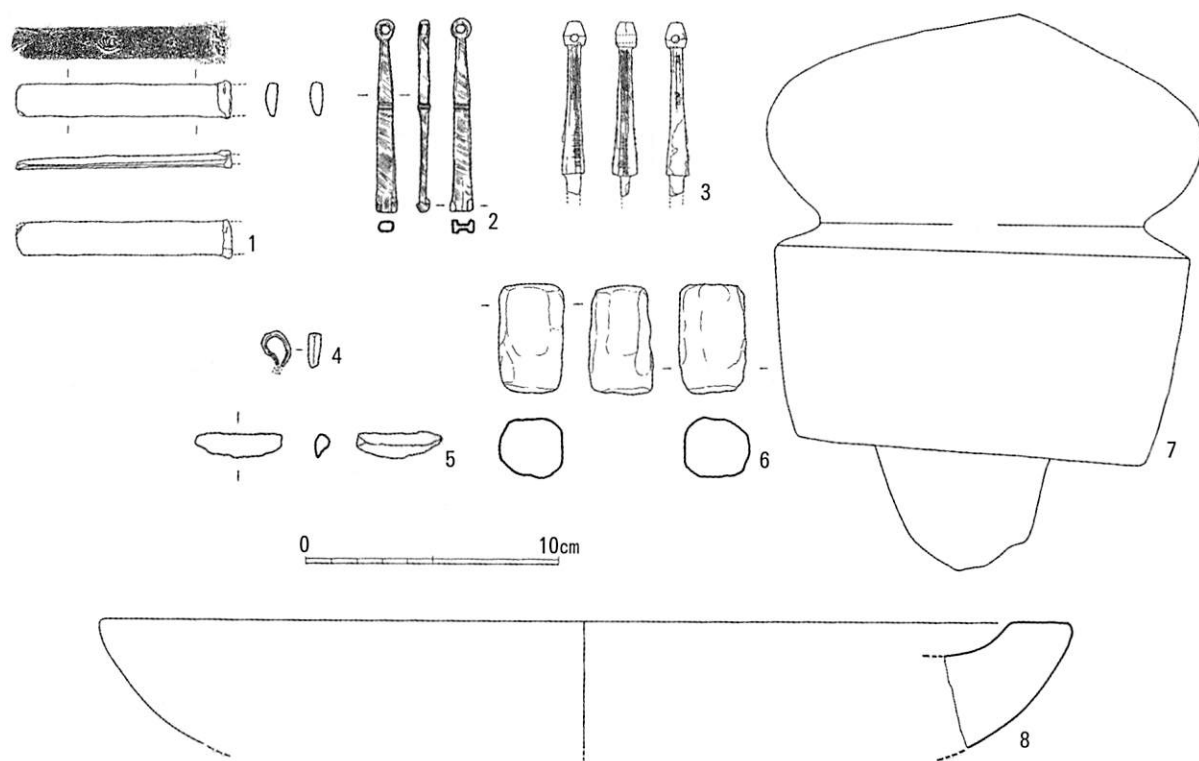


第278图 III区出土遺物実測図① (1/3)

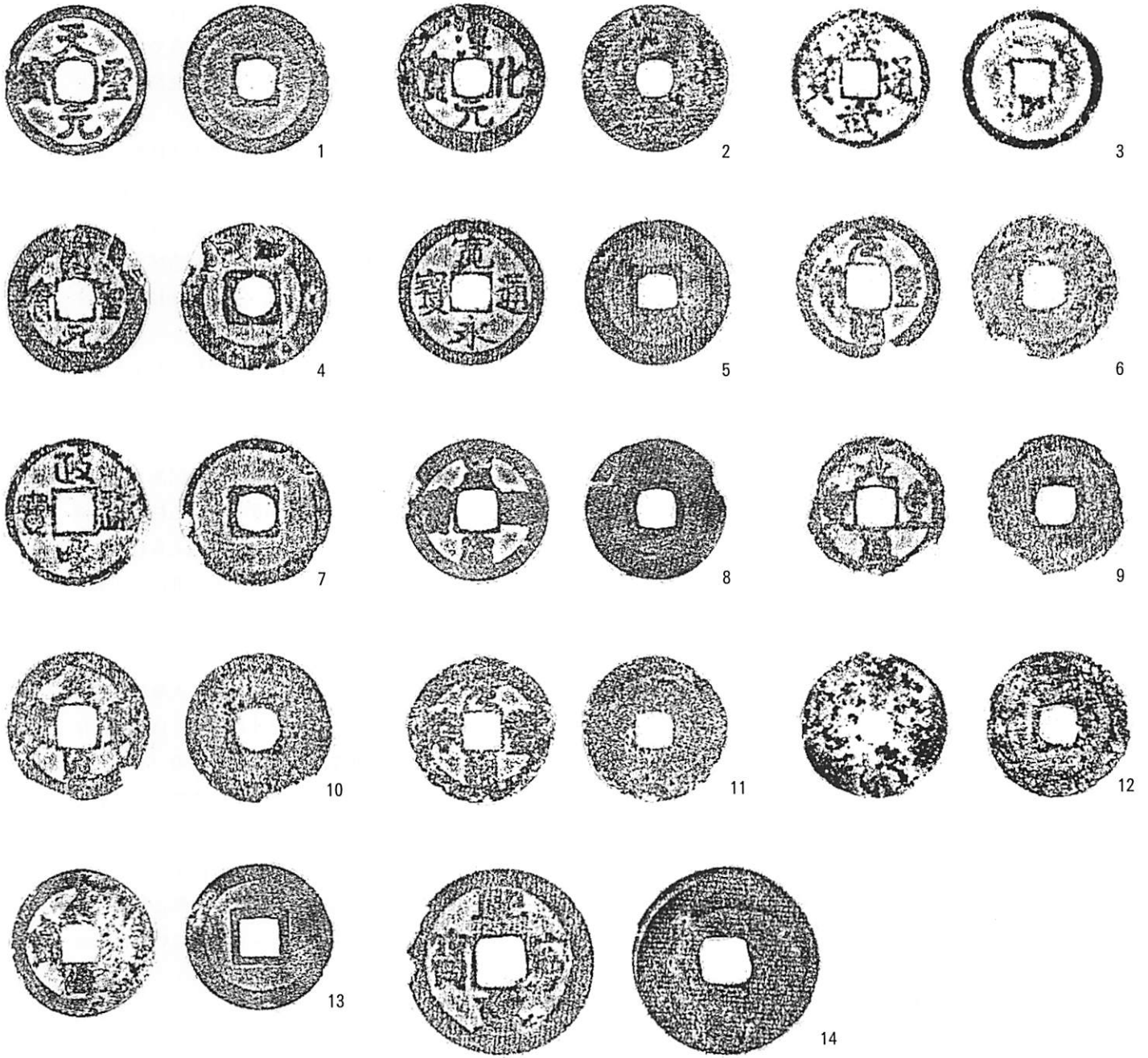
38は土師質土器取瓶であり、内面に付着物が多くみられる。39は土錘である。40は備前系焼締陶器插鉢である。

第279図1は青銅製小柄の柄である。2・3は青銅製鍵である。2の柄部は扁平な形態をもち、3の基部は断面多角面体の形態をもつ。4も青銅製品であるが、用途は明らかでない。5はガラス製品である。生きた面は球状を呈するが、形態は不明である。緑色を呈し、小さな気泡を含むガラス製品である。6は頁岩製筒形製品であるが、用途は明らかでない。7は凝灰岩製五輪塔の空風輪である。8は安山岩製石臼下臼の皿部片である。

第280図は銅銭である。1は「天聖元寶」(1023年初鑄)、2は「淳化元寶」(990年初鑄)、3は「洪武通寶」(1368年初鑄)、4は「紹聖元寶」(1094年初鑄)である。5は「寛永通寶」(1636年初鑄)であり、古寛永に属する。6・9～11は「元豊通寶」(1078年初鑄)、7は「政和通寶」(1111年初鑄)、8は「皇宋通寶？」(1038年初鑄)である。14は「熙寧重寶」(1071年初鑄)であり、折二銭である。12・13は風化が著しく、銭種は明らかでない。



第279図 III区出土遺物実測図② (1/3)



第280図 III区出土銭貨 (1/1)

### 第3節 小結

本調査区は「府内古図」に照らし合わせれば、「大友御屋敷」東側に走る第2南北街路に接する「桜町」に比定されよう。本調査区の南に位置する9次調査区Ⅰ・Ⅳ区北端において、「御所小路」に想定できる道路遺構が検出できたため、第2南北街路と「御所小路」が接する地点の遺構群であることがわかる。それでは、各時期の遺構群の変遷を追ってみよう。

本調査区では、14世紀代に遺構群が形成され始める。まず、Ⅲ区においてSE031・SE032の井戸が形成され、このほかには土坑が1基確認できているのみであり、このほかには生活の痕跡は確認できない。

これに続き、15世紀末葉～16世紀前葉には、Ⅱ～Ⅲ区にわたる非常に大きな不定形の落ち込み（Ⅱ区SX030・Ⅲ区SX035）がみられる。落ち込みの様相から土採りのために生じた落ち込みであることが推測できる。この様相は9次調査区Ⅰ・Ⅳ区においても確認できるため、広く第2南北街路に面していた場所において土採りが行われ、生活空間ではなかったことがうかがえる。

これらの落ち込みが埋め戻される16世紀中葉になると、Ⅲ区においてわずかであるが土坑群が営まはれ始めるが、明確な居住空間を構成するものではないように思える。また、Ⅱ区北東隅からⅢ区東側にかけて非常に大きな落ち込みがみられ、これは現在行われた調査区域からすれば、22次調査区まで達する。これを自然地形とするか、人為的な掘削跡による落ち込みとするかは、本調査区での発掘調査で解決しうる成果は得られていないが、当該期からこの落ち込み上に土坑（Ⅲ区SK012）が営まれているため、16世紀中葉までに形成された地形であることがうかがえる。

これに対して、16世紀後葉になると様相が一変する。Ⅱ・Ⅲ区ともきわめて多くの柱穴群・土坑群をはじめ井戸（Ⅱ区SE028・SE029・Ⅲ区SE033）、倉庫と考えられる竪穴状の方形土坑（Ⅲ区SK021）などが確認でき、この段階で一斉に町屋群が形成されたことがうかがえる。ピットのならばには、東西方向に密集して連続するピット列が3列におよび確認できているため、柵列によって区画された空間が第2南北街路に沿って存在していた可能性がある。この柵列間では建物が復元できる柱穴群は確認できていないが、Ⅲ区SD002・SD003付近に礎石とも思える人頭大より大きな石が据えられた状態で確認できたため、礎石建物が存在していた可能性も考えておくべきであろう。また、Ⅱ区の南端には東西方向に3段階の溝状遺構（Ⅱ区SD001-1・2・3）が走り、9次Ⅰ・Ⅳ区北端に確認された「御所小路」と考えられる道状遺構に関連する側溝と捉えるべきであろう。

当該期の特徴の一つとして、Ⅱ区SX033、Ⅲ区SK011、Ⅲ区SE033のようにきわめて大量の京都系土師器皿片が廃棄された遺構が検出できたことがあげられる。これらの京都系土師器皿片は前代に存在した落ち込み上や井戸掘方上に大量に埋められているため、軟弱地盤を克服するためのバラス的な役割を果たしていたことがわかるが、これらの京都系土師器皿は16世紀前葉から末葉までのものが混在して埋められているため、他所から新旧の京都系土師器皿が混在した状態のまま持ち込まれたことがわかり、付近に宴会・儀式等で大量に京都系土師器皿を必要とし、また、使用後に廃棄した施設が存在したことがうかがえよう。当該期には前述した調査区東側の大きな落ち込みは、依然として存在し、この落ち込み床面に遺構が営まれている。しかし、遺物上、型式差がほとんど現れない16世紀後葉～末葉にかけて、この落ち込みは埋められている。

落ち込みが埋没する時期と前後して、数多くの不定型な火災処理土坑が営まれている。このような16世紀後葉～末葉の遺構群の様相は「御所小路」南に位置する「御内町」に相当する9次Ⅰ・Ⅳ区、13次、21次調査区においても全く同様であり、第2南北街路に沿って存在した町屋はほぼ同様のものであったことがうかがえよう。

しかし、16世紀末葉以降、急速に町屋群が消滅し、それ以降の遺構はほとんど見られず、わずかに近世以降の水田に伴うと考えられる溝状遺構が存在するのみである。

## 第9章 自然科学的分析

### 中世大友府内町跡出土金属製品・ガラス玉の鉛同位体比分析

魯 禊<sup>ジヒン</sup>・平尾良光

(別府大学文化財研究所)

#### 1. はじめに

大分県大分市出土メダイ、メダイ様金属製品、鉛玉、鉛ガラスに関する自然科学調査の依頼があった。そこで、資料の化学組成、および鉛同位体比を測定することから、資料の材料に関する調査を行った。

#### 2. 資料

提供されたメダイなどは16世紀後半のキリスト教に関係した資料の一種と理解されている。7個のメダイ、メダイ様金属製品の大きさは縦長 1.7cm~2.4cm、横長1.5cm~2.0cm、質量2.0g~11.2gであり、その表面は全体的に白色にサビ化している。1個の鉄砲玉は最大径1.3cm、質量10.2gである。2個のガラス玉は鉛ガラスでできており、白色のサビが少し発生しており、縦長1.1cm~1.3cm、横長1.5cm、質量3.6g~4.3gである。

資料から一部測定用のサビ試料を採取した。資料の記載は第6表で示した。

第6表 大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの記載

番号	資料名	時代	出土地	出土区	測定番号
1	ペロニカメダイ	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区(土坑)	BP1021
2	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第21次調査区(S087)	BP1025
3	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区	BP1022
4	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第13次調査区(30K区)	BP1023
5	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第12次調査区(M-12区)	BP1020
6	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第18次調査区(包含層L-14区Ⅲ層)	BP1024
7	メダイ様金属製品	中世	中世大友府内町跡	第28次調査区(M-17区 No.5)	BP1026
8	鉄砲玉	中世	中世大友府内町跡	第28次調査区(M-17区 No.14)	BP1036
9	ガラス玉	中世	中世大友府内町跡	第48次調査区(S010 J区)	BP1032
10	ガラス玉	中世	中世大友府内町跡	第48次調査区(S019上層)	BP1033

#### 3. 鉛同位体比の原理<sup>(1)</sup>

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そしてこの時にすべての元素の同位体組成は地球上である値になっていて、それは地球のどこでも同じであったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的なくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛には<sup>204</sup>Pb、<sup>206</sup>Pb、<sup>207</sup>Pb、<sup>208</sup>Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた<sup>238</sup>Uは<sup>206</sup>Pbに、<sup>235</sup>Uは<sup>207</sup>Pbに、<sup>232</sup>Thは<sup>208</sup>Pbに変化する。UとThが減少した量だけ鉛の量は増えてくる。

各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量あるいは、岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによってそれぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない<sup>204</sup>Pb量と<sup>206</sup>Pb、<sup>207</sup>Pb、<sup>208</sup>Pb量との比を調査し、世界の鉱山の鉛同位体比と比べることで鉛の産地がわかることになる。

#### 4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5 mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.3 μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計（本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT 262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200℃で測定した。同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

#### 5. 測定値の表し方<sup>(2)</sup>

鉛同位体比測定の結果を理解するために材料の同位体比を次のように示した。鉛には<sup>204</sup>Pb, <sup>206</sup>Pb, <sup>207</sup>Pb, <sup>208</sup>Pbの独立した4つの同位体があり、同位体比は<sup>206</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb, <sup>207</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb, <sup>208</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb, <sup>204</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb, <sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb, <sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb, <sup>204</sup>Pb/<sup>207</sup>Pb, <sup>206</sup>Pb/<sup>207</sup>Pb, <sup>208</sup>Pb/<sup>207</sup>Pb, <sup>204</sup>Pb/<sup>208</sup>Pb, <sup>206</sup>Pb/<sup>208</sup>Pb, <sup>207</sup>Pb/<sup>208</sup>Pbという12の方法で表現される。この方法の中で一番きれいな図で表現でき、4種類の同位体を含む<sup>206</sup>Pb/<sup>204</sup>Pb-<sup>207</sup>Pb/<sup>204</sup>Pbと<sup>207</sup>Pb/<sup>206</sup>Pb-<sup>208</sup>Pb/<sup>206</sup>Pbという2つの図（第281図と第282図）を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代、後漢時代、三国時代の銅鏡を分析してこれらの図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢、三国時代の銅鏡の材料がはっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代、三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところわからないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島の場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

#### 6. 化学組成

採取された一部試料に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定器は本学に設置されている堀場製作所製のMESA500である。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を表2でまとめた。

化学組成の結果から判断すると、試料No. 2とNo. 5を除き、ほとんどの資料には鉛が80%以上含まれ、鉛が主成分である鉛金属および鉛ガラスと考えられる。試料No. 2と試料No. 5はスズと鉛が約半分ずつ含まれ、スズと鉛の合金と考えられる。

第7表 大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	ベロニカメダイ	1.1	14	85	0.1	0.5	BP1021
2	メダイ様金属製品	1.1	43	46	8.6	0.7	BP1025
3	メダイ様金属製品	1.1	0.2	99	0.0	0.0	BP1022
4	メダイ様金属製品	1.3	0.4	98	0.0	0.8	BP1023
5	メダイ様金属製品	1.3	49	47	0.6	1.9	BP1020
6	メダイ様金属製品	19	7.4	66	5.1	2.5	BP1024
7	メダイ様金属製品	0.8	0.3	84	14	1.0	BP1026
8	鉄砲玉	1.4	0.3	98	0.0	0.0	BP1036
9	ガラス玉	2.2	0.6	97	0.0	0.5	BP1032
10	ガラス玉	1.4	0.5	97	0.0	0.7	BP1033

## 7. 結果

測定の結果、得られた鉛同位体比を表3に示した。測定した結果を第281図～第284図に図化した。図から判断すると資料番号1、2、3、4、7は今までに設定された中国、朝鮮半島、日本などの領域とは異なるところに分布した。資料5、6、9、10は中国の華南産材料の領域に分布しており、資料8は朝鮮半島産材料の領域に位置する。故に資料5、6、9、10は中国の華南産の材料で、資料8は朝鮮半島産の材料で作られた可能性を示している。ただし、資料1、2、3、4、7に関してはこれら資料は設定された領域内に分布していないため、今のところ材料の産地はわかっていない。

第8表 大分市の中世大友府内町跡から出土したメダイ、メダイ様金属製品、鉄砲玉、鉛ガラスの鉛同位体比値

番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
1	ヴェロニカメダイ	18.515	15.822	39.077	0.8546	2.1106	BP1021
2	メダイ様金属製品	18.342	15.750	38.668	0.8587	2.1082	BP1025
3	メダイ様金属製品	18.327	15.756	38.619	0.8597	2.1072	BP1022
4	メダイ様金属製品	18.254	15.753	38.516	0.8630	2.1100	BP1023
5	メダイ様金属製品	18.584	15.752	39.042	0.8476	2.1009	BP1020
6	メダイ様金属製品	18.462	15.739	38.870	0.8525	2.1053	BP1024
7	メダイ様金属製品	18.690	15.761	39.087	0.8433	2.0913	BP1026
8	鉄砲玉	18.310	15.632	38.865	0.8538	2.1227	BP1036
9	ガラス玉	18.462	15.725	38.968	0.8518	2.1107	BP1032
10	ガラス玉	18.545	15.748	39.078	0.8492	2.1072	BP1033
測定誤差		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

## 8. 考察

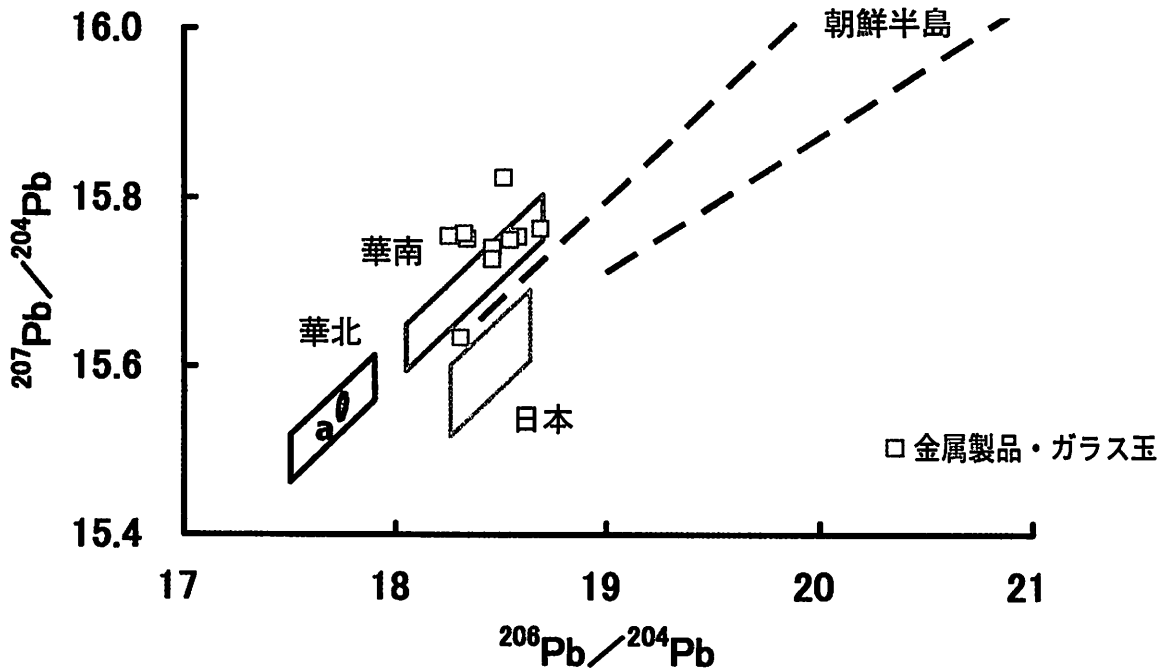
キリスト教と関係があるメダイに関する自然科学的な調査はこれまで研究があまり進んでいない。その意味で今回の化学組成調査および産地推定の研究は中世のキリスト教研究にとって意味があると思われる。大分市を中心に栄えた大友氏と関連する遺跡から出土したメダイの鉛同位体比分析の結果、資料5、6、9、10のメダイ様金属製品およびガラス玉は中国の華南産の材料で作られたと思われる、資料8の鉄砲玉は朝鮮半島産の材料を利用したとも考えられる。しかしながら、資料1、2、3、4、7は今のところ、どこの材料で作られたかわからない。ただし、資料2、3、4は同一の値ではないが、かなり近似していることから、未知の産地の類似材料で作られた可能性がある。

メダイは中世ヨーロッパの宣教師が日本へ持ってきて伝えたとして理解されている。今回測定したメダイの特徴から考え、日本で鑄造されたのかもしれないが、材料となった鉛はヨーロッパあるいは南アジアのどこかで生産されたのかもしれない。

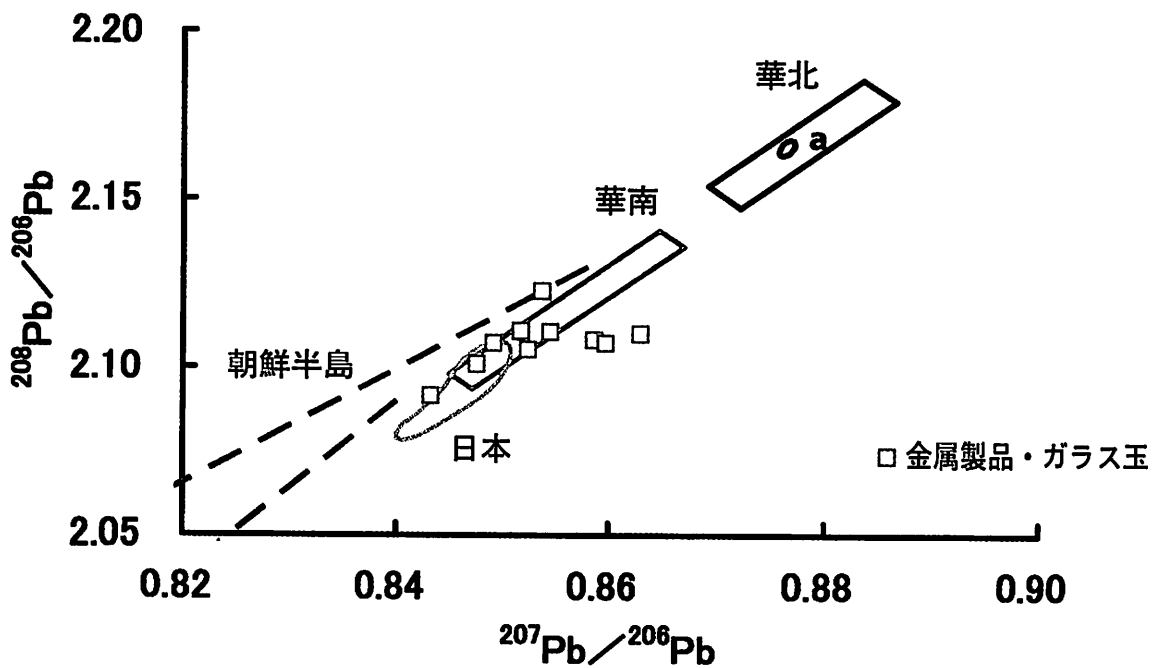
日本で出土したメダイだけではなく、ヨーロッパや南アジアのメダイあるいは鉛製品に関する研究が進むと大友の遺跡から出土したメダイの材料や流通経路がわかると思われる。

註 (1) 平尾良光編、『古代青銅の流通と鑄造』（鶴山堂1999年）31～33頁

(2) 平尾良光編、『古代青銅の流通と鑄造』（鶴山堂1999年）35～39頁

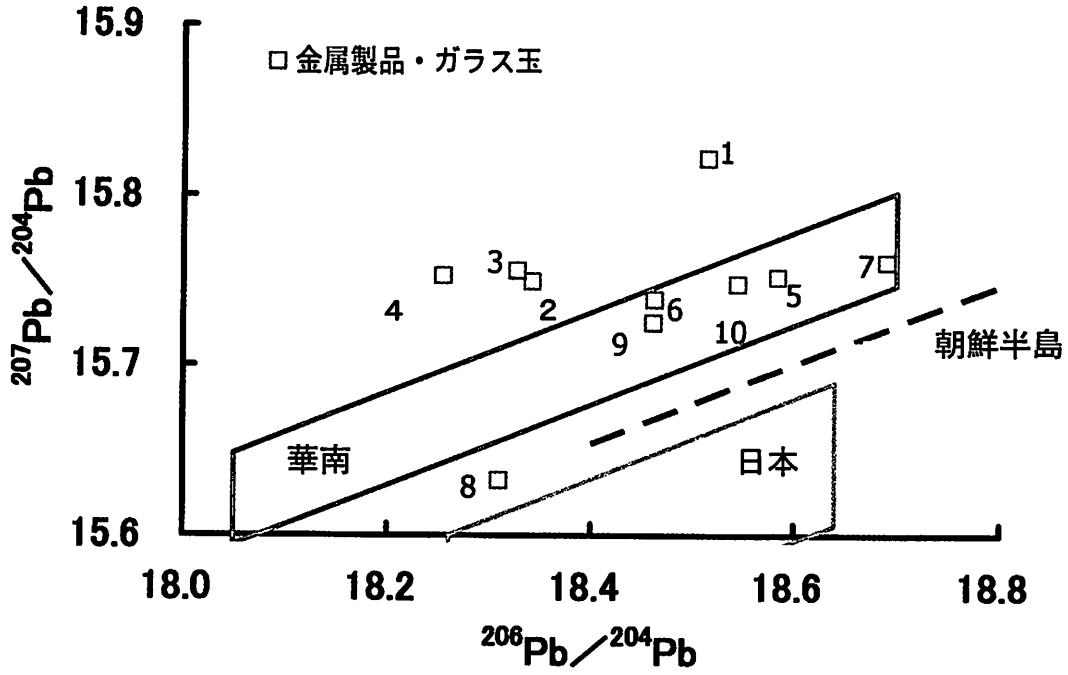


第281図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ )

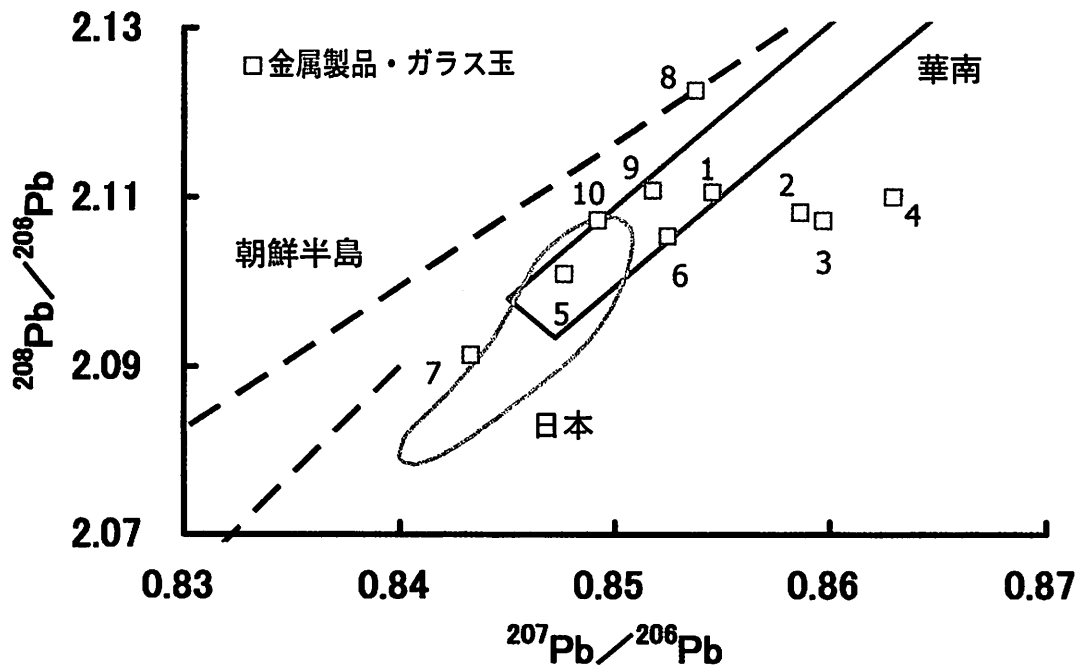


第282図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )



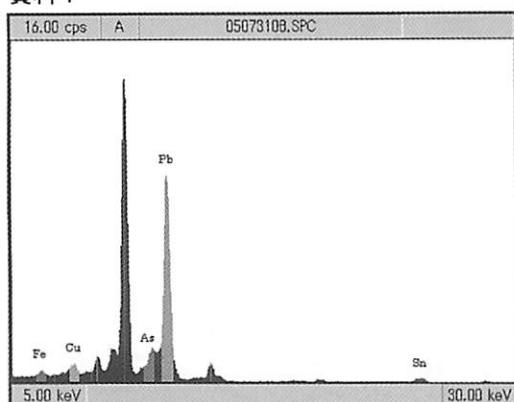


第283図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ ) - 図1の拡大図



第284図 大友氏関連遺跡から出土した金属製品・ガラス玉の鉛同位体比 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ ) - 図2の拡大図

資料 1



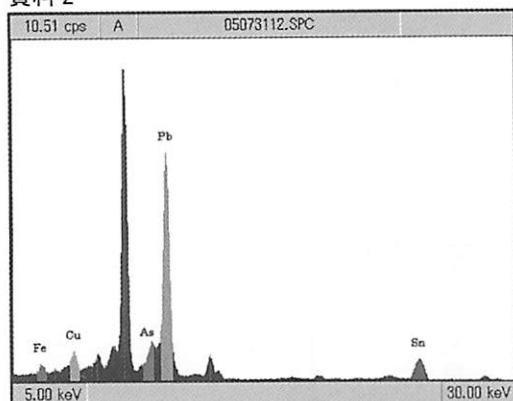
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	15.873	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	2.974	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	153.189	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	8.626	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	26.702	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.07(wt%)	5.859( $\pm$ 0.234) (cps)
Sn	13.86(wt%)	2.661( $\pm$ 0.101) (cps)
Pb	84.53(wt%)	145.184( $\pm$ 0.727) (cps)
As	0.09(wt%)	195.726( $\pm$ 0.846) (cps)
Fe	0.45(wt%)	1.419( $\pm$ 0.172) (cps)

資料 2



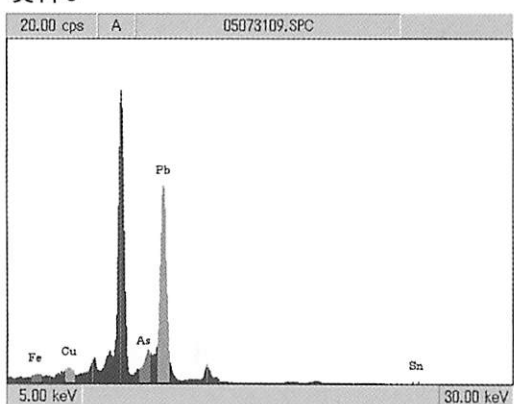
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	16.268	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	13.383	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	108.831	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	8.273	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	19.843	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.12(wt%)	7.445( $\pm$ 0.236) (cps)
Sn	43.20(wt%)	12.357( $\pm$ 0.214) (cps)
Pb	46.45(wt%)	101.842( $\pm$ 0.611) (cps)
As	8.57(wt%)	10.859( $\pm$ 0.261) (cps)
Fe	0.66(wt%)	2.536( $\pm$ 0.168) (cps)

資料 3



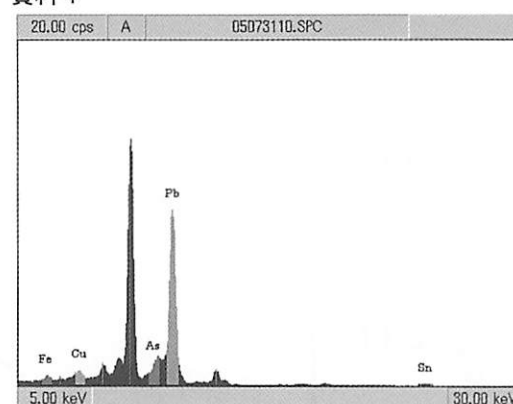
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	17.252	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	0.441	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	180.044	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	8.318	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	30.678	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.08(wt%)	6.355( $\pm$ 0.244) (cps)
Sn	0.18(wt%)	0.034( $\pm$ 0.039) (cps)
Pb	98.71(wt%)	170.784( $\pm$ 0.790) (cps)
As	0.00(wt%)	230.888( $\pm$ 0.921) (cps)
Fe	0.03(wt%)	0.099( $\pm$ 0.170) (cps)

資料 4



[結果]

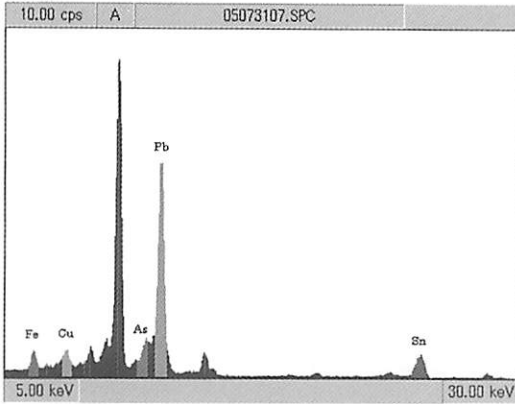
Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	16.240	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	0.897	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	160.582	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	8.925	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	27.369	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.29(wt%)	6.821( $\pm$ 0.237) (cps)
Sn	0.38(wt%)	0.065( $\pm$ 0.056) (cps)
Pb	97.58(wt%)	152.055( $\pm$ 0.744) (cps)
As	0.00(wt%)	198.413( $\pm$ 0.853) (cps)
Fe	0.75(wt%)	2.276( $\pm$ 0.175) (cps)

第285図 蛍光X線スペクトルと化学組成①

資料5



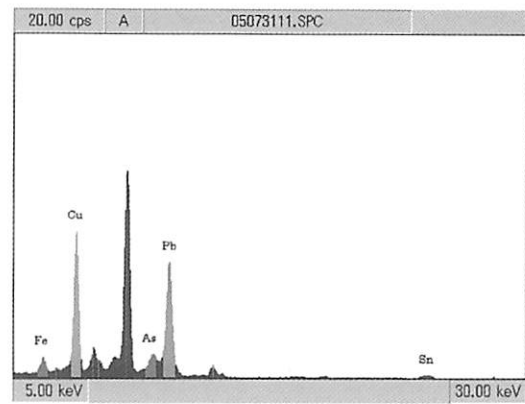
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	14.233	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	12.848	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	98.021	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	10.915	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	17.396	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.31(wt%)	6.776( $\pm$ 0.221) (cps)
Sn	49.22(wt%)	11.850( $\pm$ 0.210) (cps)
Pb	46.97(wt%)	92.278( $\pm$ 0.579) (cps)
As	0.61(wt%)	123.443( $\pm$ 0.672) (cps)
Fe	1.89(wt%)	5.698( $\pm$ 0.193) (cps)

資料6



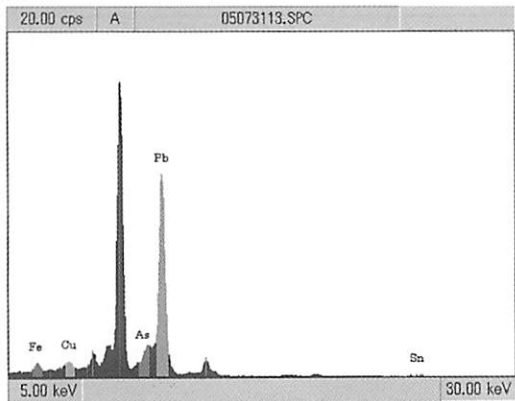
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	115.817	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	2.006	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	105.686	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	16.774	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	23.322	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	18.58(wt%)	105.031( $\pm$ 0.632) (cps)
Sn	7.43(wt%)	1.507( $\pm$ 0.083) (cps)
Pb	66.36(wt%)	98.705( $\pm$ 0.604) (cps)
As	5.13(wt%)	165.650( $\pm$ 0.781) (cps)
Fe	2.51(wt%)	9.194( $\pm$ 0.241) (cps)

資料7



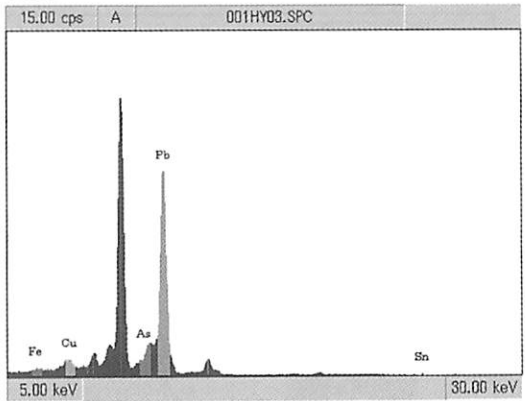
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	17.896	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	0.524	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	183.093	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	13.125	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	31.619	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	0.78(wt%)	6.424( $\pm$ 0.249) (cps)
Sn	0.27(wt%)	0.069( $\pm$ 0.043) (cps)
Pb	84.37(wt%)	173.445( $\pm$ 0.797) (cps)
As	13.54(wt%)	18.494( $\pm$ 0.331) (cps)
Fe	1.04(wt%)	4.872( $\pm$ 0.213) (cps)

資料8



[結果]

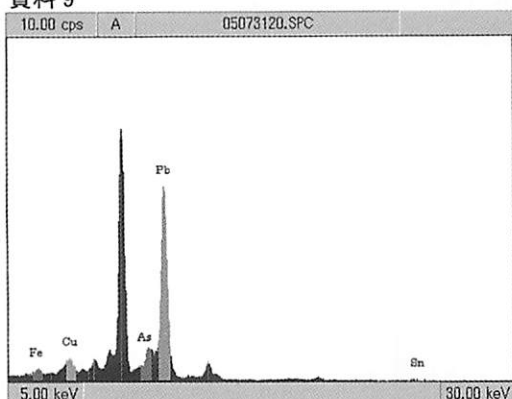
Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	14.918	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K $\alpha$	0.294	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L $\beta$	140.601	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K $\alpha$	5.952	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K $\beta$	22.644	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.38(wt%)	6.370( $\pm$ 0.226) (cps)
Sn	0.33(wt%)	0.050( $\pm$ 0.032) (cps)
Pb	98.29(wt%)	133.523( $\pm$ 0.695) (cps)
As	0.00(wt%)	168.566( $\pm$ 0.784) (cps)
Fe	0.00(wt%)	0.010( $\pm$ 0.143) (cps)

第286図 蛍光X線スペクトルと化学組成②

資料9



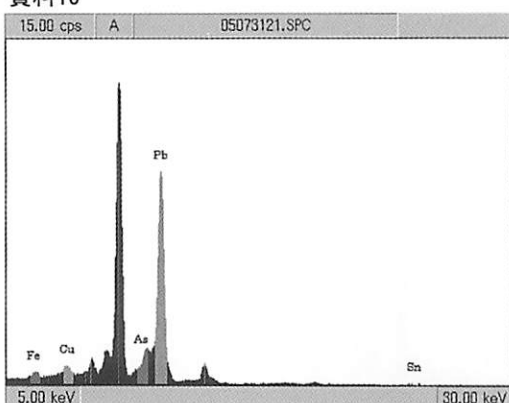
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	12.496	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.206	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	88.302	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	5.710	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	16.110	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	2.15(wt%)	6.275(±0.206) (cps)
Sn	0.59(wt%)	0.055(±0.026) (cps)
Pb	96.78(wt%)	83.035(±0.548) (cps)
As	0.00(wt%)	101.633(±0.610) (cps)
Fe	0.48(wt%)	0.814(±0.139) (cps)

資料10



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K α	15.890	7.80- 8.28
50	Sn	スズ	K α	0.436	24.87-25.51
82	Pb	鉛	L β	145.866	12.36-12.89
26	Fe	鉄	K α	9.080	6.17- 6.63
33	As	ヒ素	K β	25.208	11.46-11.98

[定量結果]

Cu	1.36(wt%)	6.483(±0.234) (cps)
Sn	0.46(wt%)	0.071(±0.039) (cps)
Pb	97.45(wt%)	137.573(±0.709) (cps)
As	0.00(wt%)	180.430(±0.814) (cps)
Fe	0.74(wt%)	2.040(±0.177) (cps)

第287図 蛍光X線スペクトルと化学組成③

No. 1		メダイ (ヴェロニカメダイ) 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 2.0cm 幅 2.0cm 重さ 2.0g 材質 (主成分) 鉛
No. 2		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第21次調査区 長さ 2.4cm 幅 1.8cm 重さ 5.0g 材質 (主成分) 鉛 備考 タガネ彫り文様あり
No. 3		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 1.9cm 幅 1.3cm 重さ 4.8g 材質 (主成分) 鉛
No. 4		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第13次調査区 長さ 1.8cm 幅 1.8cm 重さ 6.7g 材質 (主成分) 鉛
No. 5		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第12次調査区 長さ 1.7cm 幅 1.5cm 重さ 3.4g 材質 (主成分) 鉛
No. 6		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第18次調査区 長さ 2.0cm 幅 1.8cm 重さ 7.3g 材質 (主成分) 銅
No. 7		メダイ様金属製品 中世大友府内町跡第28次調査区 長さ 2.3cm 幅 1.7cm 重さ 11.2g 材質 (主成分) 鉛 備考 M-17 No. 5
No. 8		鉄砲玉 中世大友府内町跡第28次調査区 最大径 1.3cm 重さ 10.2g 材質 (主成分) 鉛 備考 M-17 No. 14
No. 9		ガラス玉 中世大友府内町跡第48次調査区 S010 J区 高さ 1.3cm 幅 1.5cm 重さ 4.3g 材質 (主成分) 鉛ガラス? 備考 キリシタン遺物 (コンタ) の可能性大
No. 10		ガラス玉 中世大友府内町跡第48次調査区 S019 (上層) 長さ 1.1cm 幅 1.5cm 重さ 3.6g 材質 (主成分) 鉛ガラス? 備考 キリシタン遺物 (コンタ) の可能性大

第288図 分析リスト

## 第10章 総括

### 第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について

本年度報告の第12・18・22・28・48次調査区において、メダイ様金属製品、ガラス玉が出土した。同様の金属製品・ガラス玉については昨年度報告の第8・13・21次調査区でも確認されている。本稿ではそれらの遺物も含め、この金属製品・ガラス玉の性格について検証していきたい。なお、ガラス玉については様々な形態のものが出土しているが、キリシタン遺物の可能性が考えられる第12・28・48次調査区出土の資料を扱うこととする。

#### 1. メダイ様金属製品について

##### (1) 各調査区におけるメダイ様金属製品について

メダイ様金属製品とは

まずメダイ様金属製品とは、中世大友府内町跡を中心として出土する扁平な円盤状の金属製品で、その上部には紐か何かを通したと思われる穿孔を施す一群をさす。金属組成は鉛を主成分とするものが圧倒的に多く、若干銅を主成分とするものが含まれる。製品の表裏には何か判読不明な模様を施すものも見られ、特に平成14年度第21次調査区で出土した資料は、十字架のような模様と、何かをはめ込んでいたと考えられる窪みを有していた。この資料が出土したことにより、その形態の特徴や金属組成等を勘案して、中世大友府内町跡で出土する円盤状金属製品の一部は、メダイとしての位置づけが可能であることが示唆された<sup>(1)</sup>。メダイ様金属製品という名称はここに由来する。

分布状況

今回報告の調査区において、メダイ様金属製品の資料数はさらにその量を増し、その分布状況等が把握できるようになってきた。本稿では、新たに検証された側面を中心に考察していきたい。

段を有して穿孔部

まず、今回新たに確認された資料(第289図1~9)を個々に見ていくことにする。1は長径1.5cm、短径1.2cm、厚さ0.3cm、重さ4.0gで円形部分の上部に段を有してその上に穿孔部を設ける。この穿孔部は紐か何かを通すためのものと考えられ、これから後はこの部分を「鈕」と呼称することとする。穿孔は面に平行して横方向に施される。金属組成は鉛を主成分とし、若干の錫が含まれる。2は長径2.0cm、短径1.6cm、厚さ0.4cm、重さ9.0gで、鈕は段を有してその上に横方向の穿孔部を設ける形態である。金属組成は鉛を主成分とする。3は長径1.7cm、短径1.5cm、厚さ0.4cm、重さ3.4gで、上部が欠損して穿孔の方向等は不明であるが、段を有していた痕跡は認められる。金属組成は鉛を主成分とする。4は長径2.0cm、短径1.8cm、厚さ0.3cm、重さ7.9gで、鈕はやはり段を有すが、その上の穿孔は認められない。金属組成は鉛を主成分とする。5は長径2.4cm、短径2.2cm、厚さ0.3cm、重さ9.7gで、鈕は段を有して穿孔部が設けられる。穿孔部が欠損しているが残存部分からみて、面に対して垂直方向に施されていたと考えられる。金属組成は銅を主成分とする。6は長径2.5cm、短径1.6cm、厚さ0.2cm、重さ4.7gである。近くに焼土層があることから被熱によって融解しているのか、あるいは製作途中段階によるものかは不明であるが、他の製品に比して輪郭線が明瞭でない。しかしながら鈕の部分をよく観察すると、先の1~5の段を有してその上に穿孔部分を施す鈕とは大きく異なった形態をなしていることが判明した。鈕は平面三角形を呈し、ペディメントを模しているような形状である。さらに傾斜部には刻みが施され、階段状をなして頂部に向かっている。穿孔部は認められないが、存在するとしたらこの三角形の頂部に施されていたものと考えられる<sup>(2)</sup>。なお金属組成は鉛を主成分とするが、若干錫が含まれる。7は長径2.2cm、短径2.0cm、厚さ0.3cm、重さ9.6gで、鈕の部分が独立していない形態である。穿孔は頂部において、メダル面に向かって垂直方向で施される。

三角形の鈕

註(1) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集)2005年

金属組成は鉛を主成分とする。

以上1～7までは第12次調査区出土資料で、次の8は第18次調査区、9は第28次調査区出土資料である。8は長径2.0cm、短径1.8cm、厚さ0.38cm、重さ7.3gで、段を付けずに直接鈕がとりつく形態である。残存状況が良くなく穿孔は確認できない。金属組成は銅が主成分である。9は長径2.3cm、短径1.7cm、厚さ0.56cm、重さ11.2gで鉛を主成分とする。鈕は段を付けず頂部に直接付される。

## (2) メダイ様金属製品の形態分類

現在中世大友府内町跡においては、全部で24点のメダイ様金属製品が出土しているが、鈕の付き方により大きく4つの形態に分類されることが確認されている。その分類基準にしたがって本報告資料を位置づけると以下ようになる。

[鈕の形態]

A類：段をつけてその上部に鈕が付く

B類：段を付けずに直接鈕が付く

C類：鈕部分が独立せずにメダル部分に直接穿孔が施される

D類：ペディメント風の鈕で頂部に穿孔が施される

[鈕の穿孔方向]

I：面に対して平行して横方向の穿孔

II：面に向かって垂直方向からの穿孔

1：A-I 2：A-II 3：A-? 4：A-? 5：A-II 6：D-(I) 7：C-II

8：B-? 9：B-II

A類が主流 この分類結果から見る限り、メダイ様金属製品はA類が最も多いが、全24点の分類結果でもA類が11点と約半数近くを占めており、メダイ様金属製品ではA類の形態が主流であることが窺える。本報告資料で次に多いB類は、全24点の中でも7点を占めており、したがってB類もメダイ様金属製品の主な形態といえる。D類も含め、メダル部分に直接穿孔を施すのではなく、鈕は別に付随させるのがこの金属製品の主な形態であることが分かる。鈕の形態と穿孔の方向の相関関係については、まずC類のようにメダル面に直接穿孔を施すものについては、その技法の制約からII類の方法しかなしえないであろう。その他のA・B・D類のように鈕が別個に付随するものについては、技術的にI・II類いずれでも可能であろうが、I類の方が圧倒的に多いのが特徴である。ただII類とするものの中にメダイ様金属製品の金属組成としては亜流の銅製品が含まれていることから、金属の違いによる製作技法の差異（鑄型の差異等）が、穿孔方法に反映している可能性もある。この点についてはまだ資料不足の点もあり、今後の検証が必要である。

製作技法の  
差異

## (3) メダイ様金属製品の分布状況

現在までに出土しているメダイ様金属製品の分布状況をみると、大友氏館東側を南北に走る第2南北街路沿線を中心に確認されていることがわかる（第290図参照）。そして全24点の内、その約4割近くにあたる9点が本報告調査区の所在する桜町界隈で出土している。昨年度報告の「豊後府内2」において、メダイ様金属製品の製作が府内で行われた可能性を示唆したが、この分布の集中域を見てみると、一つの仮説としてその製作拠点が桜町界隈にあったということが考えられる。特に本報告の第12次調査区では鍛冶工房に伴うと考えられる緑青と取瓶の出土等が確認され、第18次調査区において

桜町界隈に  
集中

緑青と取瓶

註(2) 平成16年に第41次調査区で同じ形態のメダイ様金属製品が出土した。この資料は残りが非常によく鈕の階段状部分の段も明瞭に残っている。さらに三角形の鈕の頂部には、面に対して横方向の穿孔が施されていた。

は、分銅の未成品が出土している。したがってこの桜町界限で金属製品の製作が行われていた可能性は十分に考えられる。ただ、メダイ様金属製品の主体を占める鉛製品の製作を直接示す痕跡は認められていない。そこで昨年度報告の豊後府内2でも触れたように、分銅などの青銅製品の製作を行った職能集団が、メダイ様金属製品をはじめとする鉛製品の製作にも関与したと考えるのが無難であろう。

## 2. ガラス玉について

各調査区においてガラス玉が複数点出土しているが、ここではキリシタン遺物の可能性が考えられる第12次調査区出土の小玉と第28・48次調査区出土の刻みのある一群について触れることとする。

まず、第12次調査区資料についてであるが(第1分冊 第154図)、全部で37点が集中して出土した。大きさはいずれも径0.4cm、厚さ0.2~0.3cmでほぼ同大、同形状であり、すべてが一連の遺物であることは明らかである。出土した整地層の時期から16世紀後半の所産と考えられる。これらの小玉は具体的な遺構を伴っていないということもあり、その性格についてはなかなか言及しがたいが、東京都千代田区において、同じ16世紀後半の出土遺物で興味深い類例があるので触れておきたい。東京駅八重洲北口前の開発事業に伴い実施された発掘調査で、キリシタン墓が10基確認された<sup>(3)</sup>。その中の1基から、第12次調査区とほぼ同大、同形状のガラス玉が49点出土しており、さらに同じ墓坑から木製ロザリオ玉2点と青銅製メダイが出土した。この出土状況は、49点のガラス小玉がコンタツ<sup>(4)</sup>であることを示している。そこで第12次調査区出土のガラス玉をもう一度みてみると、玉一つ一つが形態的にもほとんど同じであり、数こそは違うが相当数まとまって出土している点も同じである。キリシタン大名で知られる大友宗麟の城下町で出土している点、ガラス玉の時期が16世紀後半で、府内で他のキリシタン遺物が出土している時期である点などを勘案すると、これらのガラス玉がコンタツである可能性は十分ありえる。

次に第12次調査区のすぐ北側に隣接する第48次調査区で、刻みの入ったガラス玉が2点出土した(第289図-10・11)。いずれも鉛ガラスで、10は刻みが8つ、11は刻みが7つ入る。同形態の鉛ガラス玉が第8次調査区でも出土しており<sup>(5)</sup>、それは5つの刻みを有する。このような刻みを入れる形態のガラス玉が長崎県でも確認されている。一つは原城跡で出土しており、5つの刻みを有する青色のガラス製コンタが2点確認されている<sup>(6)</sup>。もう一つは興善町遺跡で出土しており、刻みは7つ入る<sup>(7)</sup>。長崎県出土の資料は共に十字架やメダイ等と共伴しており、キリシタン遺物のコンタであることはほぼ間違いない。先のガラス小玉同様に、第48次調査区出土のものも形態的類似性からコンタの可能性は十分考えうる。またコンタの場合、指先で珠をくりながら祈りを唱えるのに使われるという性格上、珠の大きさに区別をつけることがある。第48次調査区のもの第12次調査区のもの出土地点はさほど離れていないことから、一連のもの可能性も考えられる。なお、第48次調査区出土ガラス珠と同じ形態を有す第28次調査区(第289図-12)のようなものも出土しているが、ガラスの組成は異なる

註(3) 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会『東京都千代田区 東京駅八重洲北口遺跡』2003年

(4) コンタツとは「数える」に由来し、当時は、数珠の様に環状につないだものを、祈りを唱えながら、指先で数えていた。このことからキリスト教伝来の頃このような「珠」をコンタツと呼び、ロザリオとも証した。なお、「珠」一つを指すときはコンタという。

(5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内1 中世大友府内町跡第5次・第8次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第1集)2005年

(6) 長崎県南有馬町教育委員会『原城跡』(南有馬町文化財調査報告書第2集)1996年

(7) 長崎市教育委員会『興善町遺跡-日本団体生命保険株式会社長崎ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』1998年

## 第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について

が、やはり同様の性格付けが可能であろう。

ところで、これまで形態的・時期的類似性からキリシタン遺物の可能性を説いてきたが、同じような形態・時期を有す遺物で、明らかにキリシタン遺物ではないものがあることも事実である。例えば  
中原遺跡 大分県竹田市久住町所在の中原遺跡<sup>(8)</sup>では、座葬で葬られたと考えられる中世墓から117点の鉛ガラスの小玉が出土しているが、形態、大きさ・時期共に第12次調査区の小玉とほぼ同じである。しかし、中原遺跡のガラス珠は、その出土状況から考えて数珠であると考えられる。また、山口県山口市所在  
瑠璃光寺跡 瑠璃光寺跡遺跡<sup>(9)</sup>で検出された中世墳墓の中で、第121号墓、第123号墓から第12次調査区出土の小玉とほぼ同形態・同寸法の小玉が出土しており、第121号墓から43点、第123号墓からは40点確認されている。いずれの墓坑も円形を呈し、幼児を埋葬したとみられている。墓坑内からはガラス小玉の外に、土師器皿と銅銭が出土していることから、これらのガラス小玉は数珠と考えられる。また、同遺跡内の第10号墓からは7つの刻みを入れたガラス玉が出土している。大きさも1.2cm×1.0cmと第48次調査区出土のものに近く、さらにガラスの組成は不明だが、報告書の記述から乳白色を呈しているようで、鉛ガラスの可能性もある。したがって形態的に中世大友府内町跡で出土しているものにはかなり近いものであると思われる。このガラス玉が出土した墓坑は円形を呈し、中からは土師器皿と銅銭、さらに水晶の数珠玉が1点出土している。この出土状況を見る限り、このガラス玉もキリシタン遺物とは考えにくい。

以上より、ガラス玉自身が持つ性格は、ガラス玉そのものの形態や素材等に既定されているものではなく、それを所持する人間によって決まってくるものであることが窺える。例えば40数個まとまって出土するガラス小玉も、東京駅八重洲北口遺跡のようなキリシタン墓から出土すればコンタツであるし、中原遺跡や瑠璃光寺跡のような中世墓から出土すれば数珠と認定せざるを得ない。そうした側面からみると、中世大友府内町跡の第12・28・48次調査区出土のガラス玉は、いずれも包含層あるいは整地層からの出土であり、具体的な遺構に伴っていないため、その性格の位置づけは困難と言わざるを得ない。ただ、中世大友府内町跡で出土するガラス玉は、いずれも16世紀後半～末葉にかけてのもので、この時期府内はコレジオが設立されるなど、キリスト教の強い影響下にあったことが、当時の記録等からも窺える。特にコンタについては国内のキリシタンが非常に渴望したものの一つであり、当時府内のキリシタン達がコンタを所持していた可能性は高い<sup>(10)</sup>。さらに、コンタには十字架やメダイが大体付されるが、中世大友府内町跡ではそのメダイの出土も確認されている。これらを統合すると、中世大友府内町跡出土のガラス玉をコンタと認定しうる要素はあるといえる。

一方数珠としての可能性についてはどうであろうか。当時の府内の町の様子を描いた「府内古図」の中には、大友氏の菩提寺である萬寿寺を始めとして、いくつかの寺院が描かれている。特に萬寿寺は大友氏の菩提寺ということもあり、日本でも屈指の禪宗寺院であった。しかし、これらのガラス玉が出土する時期である16世紀後葉～末葉にかけての段階は、その寺院の影響よりも、キリシタンの影響力の方が強かったような歴史的背景が認められる。例えば長崎からイエズス会総長に宛てられた通信によれば、天正九年（1581年）に「豊後国中でもっとも豪華で大いなる伽藍をもつ主要な寺院が当市の最良の地にあった。この寺院は我らが臼杵の教会に礎石を据えた週の或る夜、火を發し、寺内より一物も持ち出せぬまま全焼した。…府内のかの寺院にはふたたび住む者がなかったので、国王フ

註（8）久住町教育委員会・大分県教育委員会『小城原遺跡・中原遺跡』（県営担い手育成基盤整備事業都野西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ）2002年

（9）山口市教育委員会『瑠璃光寺跡遺跡』1988年

（10）五野井隆史「キリスト教布教とキリシタンの道具（一）」（『英和大学キリスト教文化研究所 紀要 第20巻 第1号』2005年）



ランシスコの助言により、この件は若い国主が同寺院の収入を武士たちに分け与え、その地所は二人のキリシタンの武士に与えるように処置された。」とある<sup>(11)</sup>。ここにある「もっとも豪華で大いなる伽藍をもつ主要な寺院」とは萬寿寺を指す。さらに翌年、柴田礼能というキリシタン武将が大友義統によって萬寿寺築地の内と萬寿寺西之屋敷を与えられ、萬寿寺町屋敷のすべてを預けられたという記録がある<sup>(12)</sup>。奇しくもこの天正九年（1581年）に、イエズス会巡察使アレッサンドロ＝ヴァリニャーノによって府内にコレジオが設立されており、この頃かつて絶大な勢力を誇っていた萬寿寺の権威は消え、府内の町はキリスト教の強い影響下にあったことが窺える。

さらに、最近の発掘調査の成果によっても、16世紀後葉以降において萬寿寺権威の衰微が窺えるようになってきている。平成14年度～17年度にかけての調査で、萬寿寺が巨大な堀で囲まれていたことが判明したが<sup>(13)</sup>、いずれの調査区においてもその堀は16世紀後葉（1570年代）に埋まってしまい、その上に道路もしくは町屋が展開していくことが確認されている。特に萬寿寺西側の埋まった堀の上には、広範囲に亘る石敷きや礎石建物の跡が確認されており、前述の柴田礼能に預けられた萬寿寺西之屋敷との関連が考えられる。このように16世紀後葉以降において、萬寿寺が次第に衰微していく状況が発掘調査によっても検証されてきており、調査所見によれば、府内の町構造そのものもこの時期大きく変革していることが最近分かりつつある。特に府内の町の姿を描いたとされる「府内古図」には、萬寿寺の堀は描かれておらず、府内の町の最後の姿を描いたものと考えられる。

このように、中世大友府内町跡で出土したガラス玉の背景には、仏教的要素よりもむしろキリスト教的要素が強いものが感じられる。そしてガラス玉は他で出土したキリシタン遺物同様、すべて町屋から発見されている点も注目される。例えばヴェロニカのメダイは御内町から出土しており、メダイ様金属製品は御内町、桜町等の町屋、あるいはキリシタン武将である柴田礼能が預かったとされる西之屋敷界限等で発見されている。

以上より、中世大友府内町跡から出土するガラス玉は、確固たる位置づけはできないものの、キリシタン遺物であるコンタとしての可能性を指摘しておきたいと思う。

なお、第48次調査区出土の刻みの入る鉛ガラス玉2点については、鉛同位体比測定によって、華南産の素材が使われていることが判明した（第9章自然科学的分析の項参照）。また第8次調査区出土の鉛ガラスについても同様の産地同定がなされており、すべて一連のものである可能性が高い。この華南産の素材という点で、五野井隆史氏の興味深い指摘があるので触れておきたい<sup>(14)</sup>。当時国内ではコンタツの需要が非常に高く、フロイスが「尾張には折るためのコンタツのロザリオ rosario de contas を作る人がいないので、それらはポルトガル人の若者がマカオから売るために持ってきたものです」と述べていることに触れて、「マカオのポルトガル人達が、日本人の信心具に対する異常な関心に目ざとく反応して、それに商品価値を見出すにいたったことは当然なことであった。」としている。これは、コンタツがかなり華南の方から流入していることを示しており、鉛同位体比の測定結果と符合していて興味深い。また、メダイ様金属製品については華南産でも日本産でも朝鮮産でもない鉛が使用されているという結果が出ており、キリシタン遺物、もしくはその素材は、南蛮あるいは西洋を含めて複数のルートを経て国内に入ってきた可能性がある。

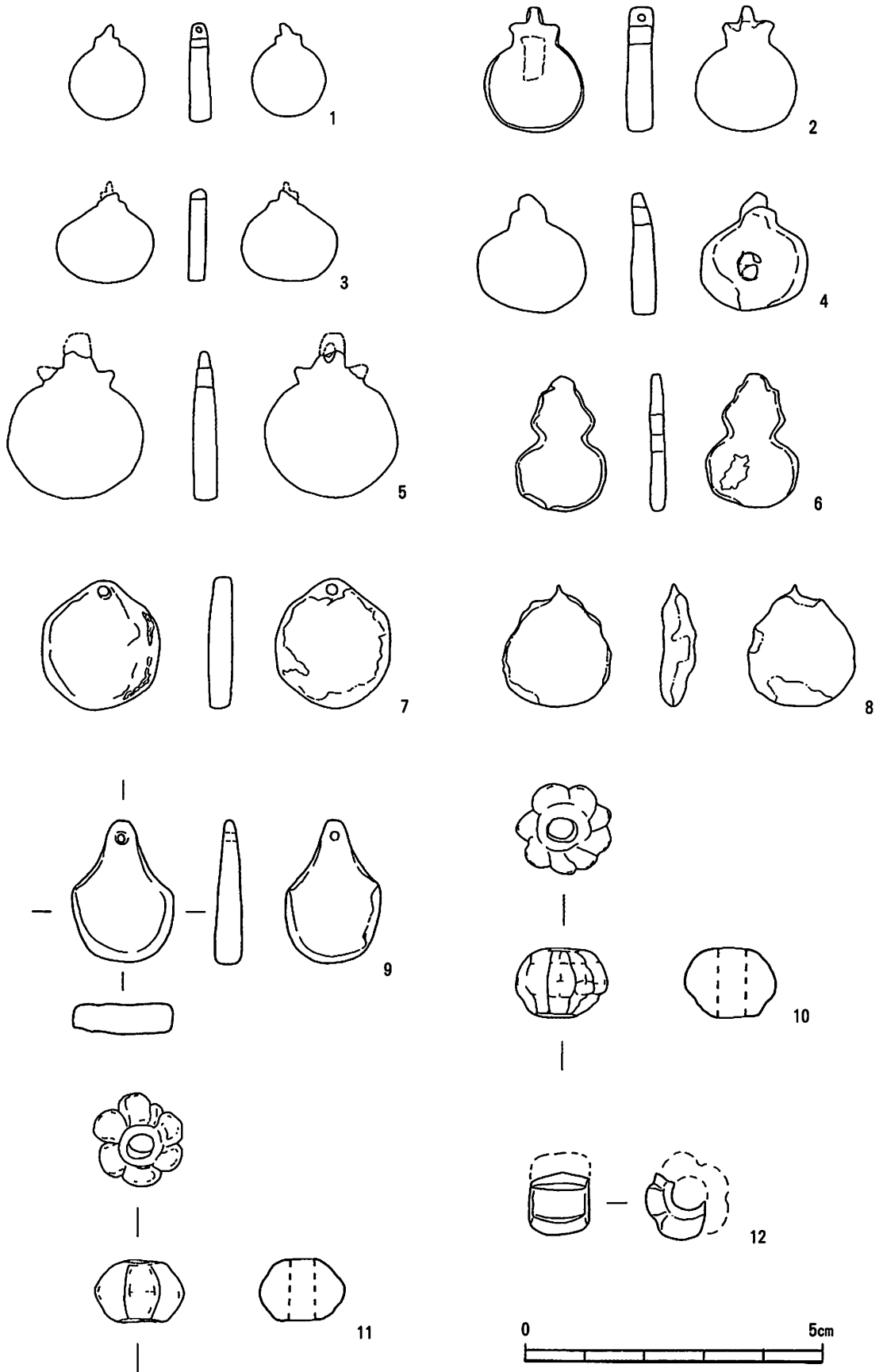
註(11) 一五八二年二月十五日付、長崎発信、ガスパル・コエリュ師のイエズス会総長宛、一五八一年度、日本年報（松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第3期 第6巻』1991年）による

(12) 渡辺澄夫『増訂 豊後大友氏の研究』1982年

(13) 平成14年度に第20次C調査区で萬寿寺北側の堀、平成15～16年度にかけて第30次調査区及び第43次調査区で萬寿寺西側の堀、平成17年度に第51次調査区で萬寿寺北西側の屈曲部を検出した。

(14) 前掲註(10)に同じ

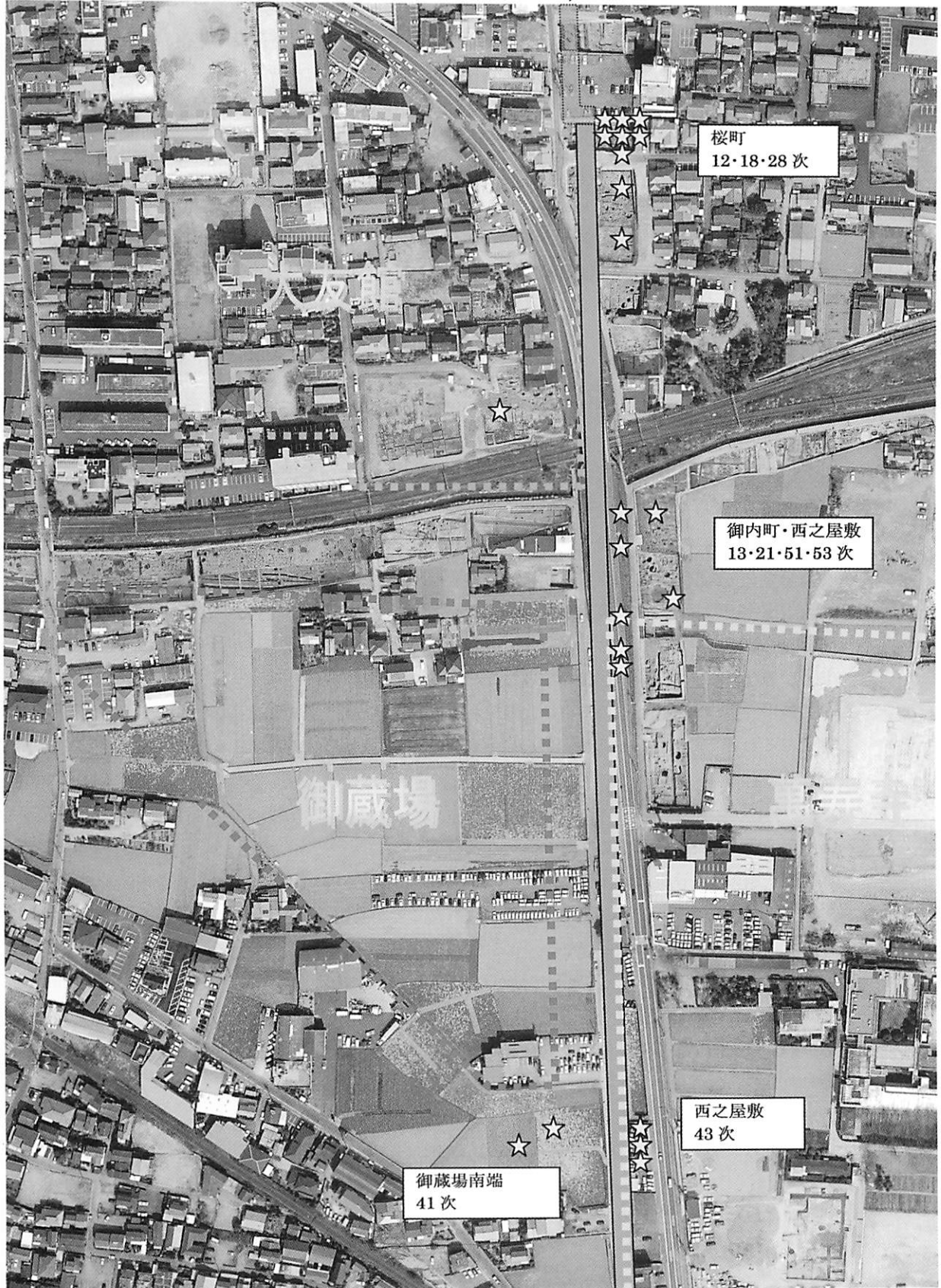
第1節 中世大友府内町跡出土のメダイ様金属製品及びガラス玉について



第289図 メダイ様金属製品・ガラス玉実測図 (1/1)

# メダイ出土地点

第2南北街路



第290図 メダイ様金属製品・出土分布図

## 第2節 豊後「府内」桜町の変遷

### 1. 豊後「府内」の桜町

「府内古図」によると、大友氏館の東側に接する街路の対面に桜町の名称が書き込まれている。第2南北街路と名付けたこの街路は、「府内」最北端の町屋である今在家町から南小路町－小笠原町－稲荷町－唐人町－桜町－御内町－魚之店－後小路町－小物座町－千手堂町－三宝院町と続く「府内」最長の南北街路である。この間、「府内」の中核である大友氏館の東側、萬寿寺の西側を通る。この中で、桜町は大友氏館の東側正面に街路を挟み対峙する町屋と言える。

地図上で復元された大友氏館は一辺約200mの方形をしており、最古と想定されている古絵図には東側に白壁の築地に南側から大・小の二つの門が描かれている。16世紀後葉のこの街路沿いの様子を表す文献として、大友義統が家臣の税所越中守に祇園社の神領として町屋敷の差配権を保証するため発給した文書に「府内屋敷 祇園御神領之義、其方可有格御候、然者東之築地至外通者、町人召移、以屋敷料、…」とある。この文献からは、第2南北街路沿いの大友氏館の東側には町屋が広がっており、間別銭などの賦課についての権限を大友家が握っていたことが理解できる。

また、天正14年(1586)に「府内」は島津氏の侵攻を受け、灰燼に帰してしまうが、その後いち早く復興した町のひとつに桜町がある。まず3年後の、天正17年の伊勢参宮帳には、「天正十七年三月廿二日 豊後符内桜町 藤左衛門尉殿 同内符方 甚四郎殿」とあり3年後には参詣を果たしている。続く天正18年には「天正十八年卯月十二日 豊後符中桜町之衆十六人つれ 了尚入道殿 宗久入道殿 同甚五郎殿 與三衛門殿 勘解由殿 新二郎殿 宗三郎殿 善一郎殿 彌三郎殿 紹意入道殿 同御小人 源三郎殿 與三大郎殿 賀衛門殿 源十郎殿 おふくの代参り彌衛門殿」とさらに多くの人々が参詣をしており、天正19年には「天正十九年卯月七日 豊後符中桜町 同唐人町四人つれ 月山 桜町吉田彌四郎 善周坊 渡邊彦四郎殿」と、北西に隣接する唐人町の住人と連れだって参詣している。その名前を見ると、名字のない人々に混じり、僧侶名称や武家名称が見られ、こうした人々をはじめ、様々な職種の人々が居住していたことが伺われる。

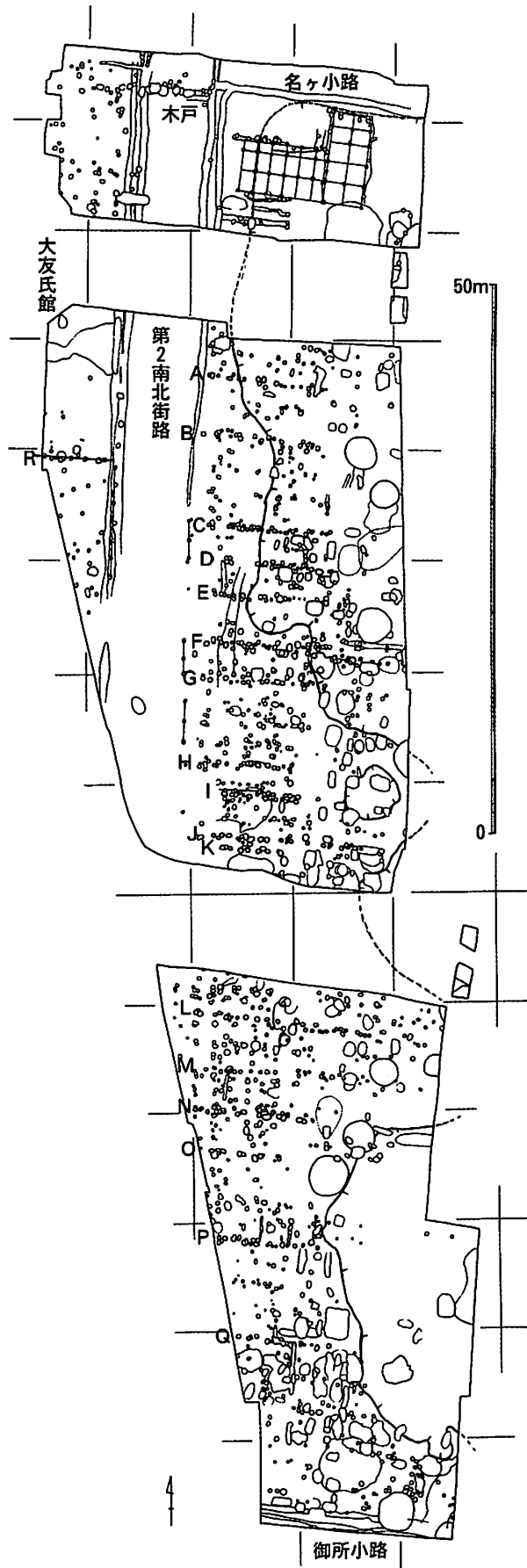
このように、大友氏館前の桜町は、国主の館の正門前と言う重要な位置にありながら、側近の武家地となるわけではなく、「…町人召移、以屋敷料…」と屋敷料を納付するような人々が居住する町屋が形成される。

### 2. 第2南北街路整備以前の桜町

大友氏館の東を南北に通る第2南北街路は、平成13年度からの発掘調査や本書を作成するにあたっての分析で、16世紀第3四半期以降に整備されたことが判明した。すなわち、「府内古図」に描かれた世界は、それ以後の様子と言える。そこで、16世紀第3四半期以前の大友氏館の東側の状況を見る。

まず、「府内古図」に大友館として描かれる部分については、大分市教育委員会の調査で15世紀後半から、盛土による嵩上げや企画性の強い大型の礎盤建物などが存在することが確認されている。さらに、16世紀前半から中葉にかけても土師質土器の大量廃棄跡が検出されており、大規模な儀礼が行われたものと推測できる。このように、「府内古図」に描かれた大友氏館の場所は、「府内」の中でも特別な場所として15世紀後半以来認識されていたことが推測される。このため、この部分の東側を区画する堀は、第18次西調査区で検出されたSD003は15世紀代、第18次西調査のSD004と第12次調査のSD08は同じ堀であるが、16世紀前葉から中葉である。二つの堀は、時期や形状が異なるが方向は一致しており、その位置の継続性が理解できる。

一方、「府内古図」に描かれる大友氏館の東部の調査であるが、府内町跡第12次調査、第18次西調査では、第2南北街路を保存する計画があったため、街路を形成する部分を掘り下げることが出来なかった。しかし、南に隣接する第28次調査では、第2南北街路を完全に除去した。その結果、街路敷



太線は大規模な掘込みの上場  
円形は井戸

第291図 「府内」桜町遺構配置図 (1/600)

## 第2節 豊後「府内」桜町の変遷

設以前の遺構はほとんど検出されなかった。また、この街路に沿った第18・28・22・9次調査では、町屋部を完全に掘り下げた。しかし、古代の井戸が検出されたものの、16世紀前半から中頃にかけての遺構や遺物は全く検出されなかった。このような調査結果から、16世紀第3四半期以前の大友氏館の東側での生活の痕跡を認めることは出来ない。すなわち、第1南北街路沿いには市町が展開しているが、その後背地から大友氏館にかけては、空閑地となっていた可能性が強い。

以上のことから、桜町成立以前は、大友氏館部分は堀で区画された中に建物などの施設が存在していたが、堀の東側から第1南北街路にかけては、空閑地として広がっていたと想定される。

### 3. 桜町の成立と構造

#### (1) 桜町の成立

大友氏館前が大きく変貌するのは、先に述べたとおり、16世紀第3四半期と考える。出土遺物から判断すると、府内町跡第28次調査の街路面を剥ぎ取った地山直上から、第2分冊第200図7・9のような瀬戸・美濃焼の大窯3期(1560～1590年)と考えられる天目茶碗と京都系土師器2期と一緒に出土している。また、府内町跡第18次西調査では、第2南北街路を分断するトレンチの最下層から第2分冊第52図の蓮弁文のある漳州窯の碗と新しい傾向の京都系土師器が出土している。さらに、名ヶ小路の最下層からも第1分冊第178図2・3の新しい傾向の京都系土師器と漳州窯が出土している。このことから、街路の普請は16世紀第3四半期と考える。

次に第2南北街路の東側で検出された大規模な掘込み地業であるが、第291図のように、北は名ヶ小路から、南は御所小路あたる部分まで、南北約130mに及ぶ。その形状は不定形で、西側は、第2南北街路面にあたる部分を避けて掘り込まれ、約70～80cmの法面を持ち、砂層まで達し、街路面からは約1.5m深くなっている。

この掘込みの掘削時期は、最下層から京都系土師器2期や漳州窯が出土しており、掘削直後に埋め立てられたとしたら、街路普請時とほぼ同時期と言える。また、府内町跡第18次東調査では、最初の段階に浅い掘込みで形成される第2南北街路を切って、大規模な掘込みが行われている。この切り合い関係から、この部分は、第2南北街路の基礎事業後に大規模な掘込みの順番であることが判る。また、名ヶ小路、御所小路は避けて掘削されている。すなわち、この大規模な掘込みは、北の名ヶ小路、南の御所小路、西の第2南北街路の位置を決定した後に掘削されたことになる。しかし、出土遺物からみると、その時期差はなく、ほぼ同時期の地業と考える。

また、埋め立て事業も、先に述べたように埋土の中から、街路最下層と同じ様相の遺物が出土することから、ほとんど同時期に行われたものと推測する。このことは、街路事業、大規模な掘込み事業、埋め立て事業が工程上の時間差はあるものの、ほぼ同時期に行われたと考える。

こうした「府内」を大改変するような大規模な土木事業を行う時期は、遺物の編年から16世紀第3四半期と考えるが、この時期「府内」や大友家にとって、この事業の契機となる出来事として、天正元年(1573)の大友義統の家督継承がある。天正9年(1581)のポルトガル宣教師の報告に「この臼杵城から四レーグワの地に府内と称する豊後の主要な都市がある。ここの住民は八千名で、新国王が居住し、彼がこの首都を統治している。」<sup>(1)</sup>と記述されている。家督継承に伴い、父大友義鎮と暮らした臼杵を離れ、府内に移住したものと考えられる。また文献でも、大友義統は家督を継いだ天正元年(1573)年12月2日に「府内」にある大友氏の施設に関わると理解されている「土圀廻屏之義、至諸郷庄申付候、仍直入郷之内、…」の文書を家臣の田北大炊助に発給している。

こうして、1560年代初めに大友義鎮が政務拠点を「府内」から「臼杵」に移して以来、「府内」の

註(1) ヴァリニャーノ 松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社東洋文庫 平凡社1573年

都市整備が停滞していたが、大友義統の家督継承により、再整備が開始されたものとする。その一環として、第2南北街路や名ヶ小路の整備、大友氏館東側の町屋の新設と整備が行われ、桜町が誕生したと思われる。

## (2)桜町の構造

礎石建物

天正年間の初めに新しく整備された桜町は、大友氏館前を通る第2南北街路に沿いの、北は名ヶ小路、南は御所小路に挟まれた西に面した町屋である。その規模は、名ヶ小路の南側の側溝の中心から御所小路の北側の側溝の中心まで128.7mである。町屋の北端部の角地には、L字状に配置された6尺5寸単位の礎石建物が建つ。この建物はW-9°-Nの名ヶ小路の方位と並行して建てられ、N-4°-Eの第2南北街路とは直交しない。また、この建物の中庭的な空間ではメダイ様金属製品や分銅等の青銅製品を製作した痕跡があり、府内の中でも特徴的な建物である。

その南側には第291図に図示したように、検出した柱穴を俯瞰すると、少なくとも17列の東西方向に密集して掘込まれた柱穴列を見ることができる。この柱穴列の評価については、東西方向に細長い掘立柱建物が建替えを繰り返した跡とも解釈できる。しかし、桜町の存続時間は約10年間で、天正14年(1586)に島津氏侵攻で焼失した後、一度復興し、10数年間存続したと想定される。その間に建替えが同じ場所で繰り返されたとしても、柱穴数が多く、不規則である。さらに、掘立柱建物として、その配置を検討しても規則性を見出すことができなかった。このような状況から、この柱穴列は柵等の町屋を区画する施設と考える。

この17列確認できる区画の間隔は一定ではないが、方位はW-9°-Nで名ヶ小路や御所小路と平行になる。この柱穴列を北からA~Q列とすると、確認できるその間隔は約3m~8mで、6尺5寸を1間とするならば、1間半~4間の間隔である。しかし、J列とK列の間隔は狭く、I列も2列の可能性もある。こうした間隔の極端に狭いものは、区割りの変更と考えると、15~16区画の短冊形に区切られる。柱穴間の建物は、掘立柱建物を見出すことが出来ず、一部に削平をまめがれた礎石が残ることから、礎石建物が考えられる。その他、木材を直接地面に置く、転ばせ根太なども考えられる。

妻入り構造

建物の構造は間口が狭いため、妻入り構造の可能性もあるが、C列とD列、F列とG列、G列とH列の間の建物の第2南北街路に面した部分には、それぞれ3本単位の柱穴があり、軒を張出していたことがわかり、平入り構造と考える。

平入り構造

また、南端部の御所小路との角地には約15m(50尺)の大区画が認められる。北側の礎石建物の区画は不明であるが、同じ規模の可能性もある。

このように、第2南北街路に面した部分には、建物が建ち並び、その東側にあたる裏手には井戸が配置され、確認されただけでも12箇所があり、掘り直しを考えると、建物区画に比べると数が少なく共同井戸として使用していたものと想定される。

このような短冊形の地割は市町である第1南北街路沿いの上市町で、16世紀中頃に区割りされた後が検出されている。そこには柱穴列もある。このことから、町割りのモデルとして、第1南北街路があり、その形態を大友氏館前の第2南北街路沿いに移したものとする。

以上桜町の構造は、北端部の名ヶ小路と南端部の御所小路の角地に大区画の屋敷地が配置されるが、その間は、約3m~8mの間隔で15~16区画に区切られる。建物構造は、掘立柱建物以外で、礎石建物は、転ばせ根太の建物などが考えられる。

## (3)桜町の性格

発掘調査の結果、大友氏館の正門前にあたる桜町は、1570年代に新設された町屋である可能性が高いことが判った。そこで、この町屋の性格を考えると、北端部の角地の大区画の礎石建物は、中庭的な場所に青銅製品を鋳造したと考えられる遺構が検出され、周辺からは、分銅やメダイ様金属製品が出土している。特に、太鼓形分銅は、片面に大友家の定紋である三木紋が陽刻されており、大友家と

太鼓形分銅

## 第2節 豊後「府内」桜町の変遷

直接的な関係を見ることが出来る。また、この礎石建物周辺からは朝鮮産陶磁器・中国産陶磁器・黒楽茶碗などの輸入陶磁器や茶道具の優品が集中して出土している。このような状況から、この角地の礎石建物の所有者は、大友家と強い関係を持つ裕福な有力者と推定できる。

また、柵列などの痕跡と推測される柱穴列に短冊形に区画された部分には、伊勢参宮帳に見られる名字の無い人々が居住していたと思われる。その生業については、明確ではないが、表具師が使用する丸包丁が出土していることから、表具屋、町屋の後背地から埴塙などの生産道具が出土していることから鍛冶職人、第2南北街路に張り出して3本1単位柱穴が3カ所で確認されるのは、街路に面して庇を出し店舗を構えた姿と想定出来る。このように、短冊形区画の住民は、職人や商人であった可能性が強い。こうした人々が、祇園社を維持・管理するために「屋敷料」を納めていたものと考えられる。

そして、桜町南端部の御所小路との角地に認められる大区画の建物構造は不明であるが、御所小路の名称から推定されるように、大友氏館との関連の強さをうかがうことが出来る。また、この区画の内部や周辺からは、武家儀礼に使用されたと考えられる京都系土師器が破砕された状況で、大量に廃棄された跡が検出された。このような状況から、大友家直属の武家が居住する区画と推定する。なお、御所小路の南側沿いを発掘調査した府内町跡第7次調査では、柱穴列によらない、溝による大区画が検出されており、武家地と考えられている。

武家地

このように、桜町は南端部と北端部の角地に大区画の敷地を配置し、そこには大友家と直接的な関係の強い人物を居住させる。この両区画の間は、短冊形の地割りを配置し、そこには職人・商人が居住する町屋を形成する。このように、桜町は、大友氏館の正門前の立地にもかかわらず、16世紀第4四半期以降は、大友家と直接結びつく武家や有力者、職人・町人が規則性をもって居住する計画的な町屋であったと考えられる。

### 4. 島津氏侵攻後の桜町とその周辺

桜町は町屋の完成から10数年後の天正14年（1586）12月、島津氏侵攻で焼失する。桜町の調査区全体で検出される焼土層は、出土遺物からこの時期のものと考えられる。しかし、島津氏は豊臣秀吉の九州進出を受け、天正15年（1587）2月には豊後から撤収する。桜町の復興はその後と推測されるが、その2年後の天正17年（1589）3月には、伊勢神宮に参詣を果たしている。

豊臣秀吉

発掘調査で、復興後の町屋の状況を確認することは出来なかったが、柱穴列を構成する幾つかは、復興後に属する可能性がある。また、焼失したと考えられる北の角地の礎石建物も、荒らされること無く存続している。そして、天正18年（1590）の伊勢参宮帳に記載されている大勢の様々な階層の人々の名前は、島津氏侵攻以前の桜町に居住する人々のイメージと一致する。

桜町は、その後、文禄2年（1593）に大友家が豊臣秀吉から除国された後も存在し、慶長7年（1602）に近世府内城下町に移転し、大友氏の「府内」は消滅する。その後、この地は、徐々に農地化すると思われる。そして、寛永11年（1634）に府内藩主となった日根野高明は、水田開発のため、大分川の上流から農業用水路である初瀬井路を開削し、それまであった国井手をつなげ、大分川の下流域の水田化を試み、慶安3年（1650）に成功する。その結果、中世都市であった「府内」は水田・畑地と化してしまうと考える。しかし、第2南北街路や名ヶ小路などの主要道路は、その後も規模を縮小しながら存続し、今日に至っており、名ヶ小路は1mにも満たない道幅となって、今日も見る事ができる。

日根野高明  
初瀬井路



# 遺物觀察表

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位:cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第7図1	陶器	天目	中国	-	-	-	SF230		
第7図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	(1.6)	SF230		
第7図3	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	-	2.1	SF230		
第7図4	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	(1.9)	SF230		
第7図5	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	-	2.2	SF230		
第7図6	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	-	(2.0)	SF230		
第7図7	陶器	播鉢	備前	-	-	(4.3)	SF230		
第7図8	陶器	播鉢	備前	-	-	(6.0)	SF230		
第7図9	陶器	播鉢	備前	-	-	(5.5)	SF230	中世6期	
第7図10	陶器	播鉢	備前	-	-	(5.9)	SF230	中世6期	
第7図11	陶器	鉢	備前	-	-	(4.2)	SF230		
第7図12	陶器	壺	備前	-	-	(2.6)	SF230		
第7図13	瓦質土器	鉢	在地	-	-	(6.1)	SF230		
第8図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD009	F群	
第8図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD009	E群	
第8図3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD009	C群	
第8図4	陶器	碗	瀬戸美濃	-	(5.2)	-	SD009		
第8図5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD009		
第8図6	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD009	細線蓮弁文	
第8図7	褐釉陶器	壺	中国	-	-	-	SD009		
第8図8	京都系土師器	皿	在地	-	-	(2.5)	SD009		
第8図9	陶器	瓶	備前	-	-	(5.5)	SD009		
第9図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD017	F群	
第9図2	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD017		
第9図3	白磁	皿	中国	-	-	-	SD017		
第9図4	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	SD017		
第9図5	陶器	天目	中国	-	-	-	SD017		
第9図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD017		
第9図7	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SD017		
第9図8	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD017		
第9図9	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD017		
第10図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD020		
第10図2	青磁	稜花皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SD020		
第10図3	陶器	皿	肥前(唐津)	-	-	-	SD020		
第10図4	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	(3.1)	-	SD020		
第10図5	磁器	小杯	肥前	-	(2.4)	-	SD020	鎬文	
第10図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD020		
第10図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD020		
第10図8	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD020		
第10図9	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SD020	中世4期	
第10図10	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SD020	近世1期	
第10図11	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD020		
第11図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD019	E群	
第11図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.8)	-	SD019	E群	
第11図3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD019		
第11図4	青花	盤	中国(漳州窯)	-	-	-	SD019		
第11図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SD019		
第11図6	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SD019	近世1期	
第11図7	瓦質土器	火鉢	備前	-	-	-	SD019		
第11図8	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD019		
第15図1	五彩	碗	中国	-	-	-	SK008		
第15図2	青花	碗	中国(漳州窯)	-	-	-	SK008		
第15図3	雜釉陶器	碗	朝鮮王朝	(13.7)	-	-	SK008		
第15図4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.6)	-	SK008	E群	
第15図5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.2	5.2	2.3	SK008	B1群	
第15図6	青花	碗	中国(景德鎮窯)	(11.8)	(4.6)	6.4	SK008	F群	
第15図7	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(5.4)	-	SK008	F群	
第15図8	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(4.6)	-	SK008		
第15図9	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK008		
第15図10	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK008		
第15図11	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	(2.3)	SK008		
第15図12	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SK008	近世1期	
第15図13	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK008		
第19図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK013		
第21図	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SK016	近世1期	
第23図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK018	C群	
第23図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK018	C群	
第23図3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK018	C群	
第23図4	青花	碗	中国(景德鎮窯)	(14.0)	-	-	SK018	E群	
第23図5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	5.0	-	SK018	E群	
第23図6	青花	盤	中国(漳州窯)	(33.2)	-	-	SK018	F群	
第23図7	青磁	碗	中国(龍泉窯)	(8.2)	(4.9)	2.9	SK018		
第23図8	白磁	皿	中国	-	(6.1)	-	SK018		
第23図9	黒釉陶器	瓶	中国南部	-	6.8	-	SK018		
第23図10	陶器	壺	備前	-	-	-	SK018	中世6期	

遺物観察表 2 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第23図11	陶器	甕	備前	-	-	-	SK018		
第23図12	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK018		
第23図13	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK018		
第23図14	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK018		
第23図15	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK018		
第23図16	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK018		
第23図17	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図18	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図19	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図20	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図21	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図22	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK018		
第23図23	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	2.2	SK018		
第23図24	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	1.9	SK018	灯明皿	
第23図25	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	-	2.2	SK018		
第23図26	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	2.3	SK018		
第23図27	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	2.6	SK018		
第23図28	京都系土師器	坏	在地	11.0	-	3.6	SK018		
第25図1	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	2.3	SK022		
第25図2	陶器	播鉢	備前	26.0	-	7.2	SK022	近世1期 斜めスリ目	
第27図	瓦質土器	火鉢	在地	34.3	-	22.9	SK024		
第29図	瓦質土器	香炉	在地	(12.2)	-	(3.7)	SK025		
第31図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK029		
第31図2	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	2.2	SK029		
第31図3	京都系土師器	皿	在地	(10.5)	-	2.3	SK029		
第33図1	陶器	鉢	備前	(18.7)	-	(5.6)	SK040		
第35図1	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SK069		
第35図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SK069		
第35図3	陶器	壺	龜山?	-	-	-	SK069		
第35図4	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK069		
第35図5	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	SK069		
第35図6	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	(2.7)	SK069		
第37図1	白磁	皿	中国	-	(4.1)	-	SK078	E-4群 菊皿	
第37図2	京都系土師器	皿	在地	(11.4)	-	(2.3)	SK078		
第37図3	瓦質土器	火鉢	在地	-	(30.0)	-	SK078		
第39図	陶器	壺	不明	-	-	-	SK101		
第41図1	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	2.3	SK109		
第41図2	陶器	瓶	備前	(4.8)	-	(8.7)	SK109		
第41図3	瓦質土器	播鉢	在地	(30.0)	-	(8.4)	SK109	防長系	
第43図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK136		
第43図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK136		
第43図3	京都系土師器	皿	在地	(8.2)	-	(1.7)	SK136		
第43図4	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	(2.0)	SK136		
第43図5	土師質土器	皿	在地	-	-	-	SK136		
第43図6	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK136		
第45図	陶器	天目	瀬戸美濃	(13.1)	(6.4)	5.4	SK175		
第47図1	白磁	棧花皿	中国	-	-	-	SK200		
第47図2	青花	瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK200		
第47図3	五彩	碗	中国	-	-	-	SK200		
第47図4	白磁	小杯	朝鮮王朝	(7.1)	-	-	SK200		
第47図5	白磁	皿	中国	(13.5)	(7.0)	2.5	SK200		
第47図6	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	(2.0)	SK200	灯明皿	
第47図7	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	2.4	SK200	灯明皿	
第47図8	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	-	(2.1)	SK200		
第49図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK213		
第49図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK213		
第49図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(11.4)	(6.6)	2.0	SK213	E群	
第49図4	白磁	皿	中国	-	(6.8)	-	SK213		
第51図	陶器	播鉢	備前	-	-	-	SK214	近世1-6期 斜めスリ目	
第53図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK243	B2群	
第53図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK243		
第53図8	京都系土師器	皿	在地	(8.2)	-	2.3	SK243		
第55図	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK244		
第65図1	青磁	碗	中国	-	-	-	SE007		
第65図2	黒釉陶器	壺	中国	-	-	-	SE007		
第65図3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図4	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図7	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SE007		

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類③)

挿図No.	器種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第65図8	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図9	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図10	京都系土師器 皿	在地	(10.4)	-	(2.6)	SE007		
第65図11	京都系土師器 皿	在地	(11.6)	-	(2.1)	SE007		
第65図12	京都系土師器 皿	在地	(6.0)	-	2.0	SE007		
第65図13	土師質土器 皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図14	土師質土器 小皿	在地	(5.4)	-	(1.9)	SE007		
第65図15	土師質土器 耳皿	在地	-	-	-	SE007		
第65図16	土師質土器 耳皿	在地	-	-	(2.2)	SE007		
第65図18	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE007		
第65図19	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	4.1	-	1.8	SE007		
第65図20	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	(7.5)	-	-	SE007		
第65図21	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	8.5	-	4.5	SE007		
第65図22	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	8.6	-	4.8	SE007		
第67図1	青花 皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.8)	-	SE010	E群	
第67図2	青花 碗	中国(漳州窯)	-	-	-	SE010		
第67図3	陶器 皿	瀬戸美濃	10.9	5.6	2.2	SE010		
第67図4	陶器 播鉢	備前	-	-	-	SE010		
第67図5	陶器 播鉢	備前	-	-	-	SE010	近世1-6期 斜めスリ目	
第67図6	陶器 鉢	備前	-	-	-	SE010		
第67図7	陶器 鉢	備前	-	-	-	SE010		
第67図8	陶器 鉢	備前	-	(10.0)	-	SE010		
第67図9	陶器 鉢	備前	(16.4)	-	-	SE010		
第67図10	瓦質土器 播鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図11	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図12	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図13	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図14	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図15	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図16	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第67図17	瓦質土器 火鉢	在地	-	-	-	SE010		
第68図1	瓦質土器 風炉	在地	(41.6)	(30.4)	9.4	SE010		
第68図2	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE010		
第68図3	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE010		
第68図4	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE010		
第68図5	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE010		
第68図6	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE010	墨書	
第68図7	京都系土師器 皿	在地	(12.2)	-	(2.2)	SE010		
第68図8	京都系土師器 皿	在地	(13.2)	-	(2.4)	SE010		
第68図9	京都系土師器 坏	在地	(10.2)	-	(3.3)	SE010		
第68図10	京都系土師器 坏	在地	(10.0)	-	3.4	SE010		
第68図11	京都系土師器 坏	在地	(10.6)	-	(3.8)	SE010		
第68図12	京都系土師器 坏	在地	11.2	-	3.8	SE010		
第68図13	土師質土器 皿	在地	(7.4)	(7.0)	(3.4)	SE010		
第68図14	土師質土器 皿	在地	(8.4)	(6.3)	(1.2)	SE010		
第68図15	土師質土器 皿	在地	-	(6.6)	-	SE010		
第68図16	土師質土器 皿	在地	-	(7.0)	-	SE010		
第68図17	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE010		
第68図18	土師質土器 取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	SE010		
第72図1	青花 碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SE012	E群	
第72図2	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE012		
第72図3	京都系土師器 皿	在地	8.6	-	2.3	SE012		
第72図4	京都系土師器 皿	在地	12.0	-	2.7	SE012		
第72図5	京都系土師器 坏	在地	(10.4)	-	3.4	SE012		
第72図6	陶器 播鉢	備前	-	-	-	SE012		
第72図7	陶器 播鉢	備前	-	-	-	SE012		
第72図8	陶器 鉢	備前	(15.0)	-	-	SE012		
第72図9	土師質土器 碗	在地	(15.2)	(7.8)	5.5	SE012		
第74図1	青花 皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SE021		
第74図2	白磁 皿	中国	-	-	-	SE021		
第74図3	褐彩磁器 皿	中国	-	-	-	SE021		
第74図4	褐釉陶器 壺	中国	-	-	-	SE021		
第74図5	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(10.9)	(4.4)	2.8	SE021	C群	
第74図6	青花 碗	中国(景德鎮窯)	-	5.1	-	SE021	E群	
第74図7	雜釉陶器 皿	朝鮮王朝	-	(5.2)	-	SE021		
第74図8	青磁 皿	中国	-	-	-	SE021		
第74図9	白磁 皿	中国	(10.7)	(4.8)	2.8	SE021		
第74図10	白磁 皿	中国	-	(6.1)	-	SE021	口禿	
第74図11	陶器 天目	瀬戸美濃	(11.6)	-	-	SE021		
第74図12	陶器 碗	瀬戸美濃	(16.0)	-	-	SE021		
第75図1	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE021		
第75図2	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE021		
第75図3	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE021		
第75図4	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE021		
第75図5	京都系土師器 皿	在地	-	-	-	SE021		

遺物観察表 4 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類④)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第75図6	京都系土師器	皿	在地	7.8	—	1.9	SE021	
第75図7	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.0	SE021	灯明皿
第75図8	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.0	SE021	
第75図9	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	SE021	
第75図10	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.0	SE021	
第75図11	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	SE021	
第75図12	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.5	SE021	
第75図13	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.1	SE021	
第75図14	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	SE021	
第75図15	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.1	SE021	
第75図16	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75図17	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75図18	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75図19	土師質土器	皿	在地	(8.2)	(7.0)	1.1	SE021	
第75図20	土師質土器	皿	在地	(8.2)	(5.6)	1.5	SE021	
第75図21	土師質土器	皿	在地	—	6.9	—	SE021	
第75図22	土師質土器	皿	在地	—	6.2	—	SE021	
第75図23	土師質土器	皿	在地	—	(8.4)	—	SE021	
第75図24	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75図25	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SE021	
第75図26	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SE021	
第75図27	土師質土器	鍋	在地	—	—	—	SE021	
第75図28	土師質土器	鍋	在地	—	—	—	SE021	
第75図29	瓦質土器	甕?	東播系	—	—	—	SE021	
第75図30	瓦質土器	鍋	防長系	—	—	—	SE021	
第75図31	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75図32	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75図33	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75図34	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75図35	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75図36	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75図37	陶器	壺	備前	—	—	—	SE021	
第75図38	陶器	壺?	龜山?	—	—	—	SE021	
第75図39	陶器	搦鉢	備前	—	—	—	SE021	近世1期
第75図40	陶器	甕	備前	—	—	—	SE021	
第75図41	陶器	甕	備前	—	—	—	SE021	
第75図42	陶器	鉢	備前	21.4	—	(5.3)	SE021	
第79図	須恵質土器	甕?	東播系	—	—	—	SE201	
第81図1	青花	皿	中国(景德镇窯)	—	—	—	SX041	
第81図2	青花	皿	中国(漳州窯)	—	—	—	SX041	
第81図3	青花	瓶	中国(景德镇窯)	—	—	—	SX041	
第81図4	青花	皿	中国(景德镇窯)	(12.2)	(6.8)	2.7	SX041	B1群
第81図5	青花	皿	中国(景德镇窯)	—	(5.2)	—	SX041	B2群
第81図6	青花	碗	中国(景德镇窯)	—	(5.7)	—	SX041	E群
第81図7	白磁	碗	中国	—	(4.5)	—	SX041	
第82図1	褐釉陶器	壺	中国	—	—	—	SX041	
第82図2	焼締陶器	鉢	中国南部	19.5	9.6	11.2	SX041	B類
第82図3	陶器	舟德利	朝鮮王朝	—	—	—	SX041	
第82図4	陶器	舟德利	朝鮮王朝	—	13.2	—	SX041	
第83図1	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	—	2.1	SX041	灯明皿
第84図2	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.3	SX041	灯明皿
第84図3	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	—	2.1	SX041	
第84図4	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	—	2.3	SX041	
第84図5	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	1.9	SX041	
第84図6	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.0	SX041	灯明皿
第84図7	京都系土師器	皿	在地	(10.2)	—	2.1	SX041	
第84図8	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	(2.4)	SX041	
第84図9	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.3	SX041	
第83図10	京都系土師器	皿	在地	(10.7)	—	2.1	SX041	
第83図11	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.3	SX041	
第83図12	京都系土師器	皿	在地	(10.9)	—	2.2	SX041	
第83図13	京都系土師器	皿	在地	(11.3)	—	2.2	SX041	
第83図14	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	—	(2.1)	SX041	
第83図15	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	—	2.6	SX041	
第83図16	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.5	SX041	灯明皿
第83図17	京都系土師器	皿	在地	(12.1)	—	2.1	SX041	
第83図18	京都系土師器	皿	在地	(12.1)	—	2.5	SX041	
第83図19	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	—	2.0	SX041	
第83図20	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	—	2.3	SX041	
第83図21	京都系土師器	皿	在地	(12.3)	—	2.6	SX041	
第83図22	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	1.6	SX041	
第83図23	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	2.1	SX041	
第83図24	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	2.2	SX041	
第83図25	京都系土師器	皿	在地	(12.5)	—	2.5	SX041	
第83図26	京都系土師器	皿	在地	(12.5)	—	2.7	SX041	

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑤)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第83図27	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	2.5	SX041	
第83図28	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	—	(2.3)	SX041	
第83図29	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	—	2.8	SX041	
第83図30	京都系土師器	皿	在地	14.3	—	2.1	SX041	
第83図31	京都系土師器	皿	在地	(14.5)	—	2.6	SX041	
第83図32	京都系土師器	皿	在地	(14.6)	—	2.0	SX041	
第83図33	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	—	(2.5)	SX041	
第83図34	京都系土師器	皿	在地	(16.6)	—	2.4	SX041	灯明皿
第83図35	京都系土師器	皿	在地	(16.6)	—	2.6	SX041	灯明皿
第83図36	京都系土師器	皿	在地	(18.3)	—	3.1	SX041	
第83図37	京都系土師器	坏	在地	10.6	—	4.7	SX041	
第83図38	京都系土師器	坏	在地	(11.6)	—	(3.4)	SX041	
第83図39	京都系土師器	坏	在地	(11.6)	—	4.1	SX041	
第83図40	京都系土師器	坏	在地	11.6	(6.0)	3.6	SX041	
第83図41	土師質土器	皿	在地	—	5.7	—	SX041	
第83図42	土師質土器	皿	在地?	—	—	—	SX041	
第84図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	—	SX01	B群
第84図3	青磁	碗	中国	—	(6.3)	—	SX01	
第84図4	白磁?	皿	中国	—	(7.3)	—	SX01	
第84図5	陶器	甕	常滑	—	—	—	SX01	
第84図6	陶器	甕	常滑	—	—	—	SX01	
第84図7	陶器	甕	備前	—	—	—	SX01	中世6期
第84図8	須恵質土器	捏鉢	東播系	—	—	—	SX01	
第84図9	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SX01	
第84図10	焼締陶器	鉢	不明(中国?)	—	(8.4)	—	SX01	
第84図11	瓦質土器	鉢?	在地	—	—	—	SX01	
第84図12	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SX01	
第84図13	瓦質土器	火鉢	在地	—	—	—	SX01	
第84図14	須恵質土器	播鉢	東播系	—	(15.6)	—	SX01	
第85図1	京都系土師器	皿	在地	(9.4)	—	(2.0)	SX01	
第85図2	京都系土師器	皿	在地	(10.2)	—	2.4	SX01	
第85図3	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.1	SX01	
第85図4	京都系土師器	皿	在地	(10.2)	—	2.4	SX01	
第85図5	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	—	(2.2)	SX01	
第85図6	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	—	2.2	SX01	
第85図7	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.1	SX01	
第85図8	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.2	SX01	
第85図9	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	—	(2.0)	SX01	
第85図10	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	—	2.2	SX01	
第85図11	京都系土師器	皿	在地	(11.0)	—	(2.6)	SX01	
第85図12	京都系土師器	皿	在地	(11.2)	—	(1.9)	SX01	
第85図13	京都系土師器	皿	在地	(11.2)	—	2.4	SX01	
第85図14	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	—	1.7	SX01	
第85図15	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	(2.3)	SX01	
第85図16	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	(2.5)	SX01	灯明皿
第85図17	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	1.9	SX01	
第85図18	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	2.0	SX01	
第85図19	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	—	2.0	SX01	
第85図20	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	—	(2.2)	SX01	
第85図21	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	—	(2.2)	SX01	
第85図22	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	—	2.3	SX01	
第85図23	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	—	2.4	SX01	
第85図24	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	—	(1.9)	SX01	
第85図25	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	—	(2.5)	SX01	
第85図26	京都系土師器	皿	在地	(13.6)	—	2.3	SX01	
第85図27	京都系土師器	皿	在地	(13.8)	—	(2.4)	SX01	
第85図28	京都系土師器	皿	在地	(14.1)	—	2.1	SX01	
第85図29	京都系土師器	皿	在地	(14.2)	—	2.0	SX01	
第85図30	京都系土師器	皿	在地	(15.4)	—	2.0	SX01	
第85図31	京都系土師器	皿	在地	(14.4)	—	(2.2)	SX01	
第85図32	京都系土師器	皿	在地	(14.6)	—	2.9	SX01	
第85図33	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	—	2.0	SX01	
第85図34	京都系土師器	皿	在地	(16.4)	—	(2.2)	SX01	
第86図1	土師質土器	皿	在地	(12.0)	(8.2)	3.3	SX01	
第86図2	土師質土器	皿	在地	(12.2)	(9.0)	3.7	SX01	
第86図3	土師質土器	皿	在地	(12.7)	(9.1)	(3.4)	SX01	
第86図4	土師質土器	皿	在地	(13.6)	(10.4)	3.4	SX01	
第86図5	土師質土器	坏	在地	—	6.3	—	SX01	
第86図6	土師質土器	坏	在地	—	6.0	—	SX01	
第86図7	土師質土器	坏	在地	—	(6.6)	—	SX01	
第86図8	土師質土器	坏	在地	—	(7.6)	—	SX01	
第86図9	土師器	坏	在地	(12.1)	—	3.5	SX01	
第86図10	土師器	坏	在地	(12.8)	—	(3.5)	SX01	
第86図11	土師器	坏	在地	(13.8)	—	(3.6)	SX01	
第86図12	土師器	坏	在地	(14.2)	—	—	SX01	

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑥)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第86図13	土師器	坏	在地	(14.8)	—	—	SX01		
第87図1	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.1	SX004		
第87図2	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.2	SX004		
第87図3	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	—	2.0	SX004		
第87図4	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	—	1.7	SX004		
第87図5	土師質土器	蓋	在地	5.4	—	1.7	SX004		
第87図6	土師質土器	蓋	在地	4.9	—	1.5	SX004		
第87図7	土師質土器	耳皿	在地	—	—	—	SX004		
第87図8	土師質土器	耳皿	在地	—	—	—	SX004		
第87図9	土師質土器	皿	在地	(8.0)	(5.6)	1.6	SX004		
第87図10	土師質土器	皿	在地	—	(7.2)	—	SX004		
第87図11	土師質土器	皿	在地	—	(7.0)	—	SX004		
第87図12	土師質土器	皿	在地	—	(7.2)	—	SX004		
第88図1	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図2	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図3	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図4	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図5	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図6	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SX005		
第88図7	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.1	SX005		
第88図8	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.2	SX005		
第88図9	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SX005		
第88図10	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	—	2.3	SX005		
第88図11	京都系土師器	皿	在地	(13.4)	—	1.8	SX005		
第89図1	京都系土師器	皿	在地	9.8	—	2.2	SX006		
第89図2	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	1.9	SX006		
第89図3	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.1	SX006		
第89図4	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.2	SX006		
第89図5	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	2.3	SX006		
第89図6	京都系土師器	皿	在地	(10.4)	—	2.3	SX006		
第89図7	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	1.9	SX006		
第89図8	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	—	2.4	SX006		
第89図9	京都系土師器	皿	在地	(10.6)	—	2.0	SX006		
第89図10	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.0	SX006		
第89図11	京都系土師器	皿	在地	(10.8)	—	2.1	SX006		
第89図12	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.3	SX006		
第89図13	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.4	SX006		
第89図14	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.4	SX006		
第89図15	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX006		
第89図16	京都系土師器	皿	在地	(11.2)	—	2.0	SX006		
第89図17	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.2	SX006		
第89図18	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.4	SX006		
第89図19	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.4	SX006		
第89図20	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.4	SX006		
第89図21	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	—	2.1	SX006		
第89図22	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	—	2.1	SX006		
第89図23	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	—	2.2	SX006		
第89図24	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	2.4	SX006		
第89図25	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	2.3	SX006		
第89図26	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	—	2.6	SX006		
第89図27	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.4	SX006		
第89図28	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.0	SX006		
第89図29	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.3	SX006		
第89図30	京都系土師器	皿	在地	(13.4)	—	2.0	SX006		
第89図31	京都系土師器	皿	在地	(13.4)	—	2.0	SX006		
第89図32	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	1.9	SX006		
第89図33	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.1	SX006		
第89図34	京都系土師器	皿	在地	(13.6)	—	2.3	SX006		
第89図35	京都系土師器	皿	在地	13.8	—	2.3	SX006		
第89図36	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.2	SX006		
第89図37	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.3	SX006		
第89図38	京都系土師器	皿	在地	14.6	—	1.8	SX006		
第89図39	京都系土師器	皿	在地	15.6	—	1.9	SX006		
第89図40	京都系土師器	皿	在地	15.4	—	2.5	SX006		
第89図41	京都系土師器	皿	在地	15.4	—	2.8	SX006		
第89図42	京都系土師器	皿	在地	15.6	—	2.4	SX006		
第89図43	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	—	2.5	SX006		
第89図44	京都系土師器	皿	在地	16.2	—	2.8	SX006		
第89図45	土師質土器	蓋	在地	(4.6)	—	1.8	SX006		
第89図46	土師質土器	蓋	在地	4.9	—	1.8	SX006		
第89図47	土師質土器	蓋	在地	5.0	—	2.0	SX006		
第89図48	土師質土器	蓋	在地	5.2	—	1.7	SX006		
第89図49	土師質土器	蓋	在地	6.0	—	2.0	SX006		
第89図50	土師質土器	耳皿	在地	—	—	—	SX006		
第89図51	土師質土器	耳皿	在地	—	—	—	SX006		

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑦)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第89図52	土師質土器	坏	在地	(8.2)	(5.8)	2.7	SX006		
第100図1	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	包含層		
第100図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	F群	
第100図5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	F群	
第100図6	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	F群	
第100図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	F群	
第100図8	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	包含層		
第100図9	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	包含層		
第100図10	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図11	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図12	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図13	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第100図14	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.2)	-	包含層	E群	
第100図15	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.3)	-	包含層	E群	
第100図16	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.3)	-	包含層	E群	
第100図17	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(8.2)	-	包含層	E群	
第100図18	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(5.8)	-	包含層	E群	
第100図19	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.2)	-	包含層	E群	
第100図20	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.6)	-	包含層	E群	
第100図21	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(8.6)	-	包含層	E群	
第100図22	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.6)	-	包含層	E群	
第100図23	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(6.9)	-	包含層	E群	
第100図24	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(5.4)	-	包含層	C群	
第100図25	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(9.2)	(4.0)	2.0	包含層	C群	
第101図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(13.0)	(7.1)	3.2	包含層	E群	
第101図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(12.8)	(6.8)	3.2	包含層	E群	
第101図3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図4	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図6	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図7	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図8	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図9	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図10	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図11	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図12	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図13	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図14	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図15	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第101図16	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	C群	
第101図17	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	2.9	-	包含層	C群	
第101図18	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	C群	
第101図19	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(4.6)	-	包含層	C群	
第101図20	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	E群	
第101図21	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(4.1)	-	包含層	E群	
第101図22	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(5.8)	-	包含層	E群	
第101図23	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	(4.9)	-	包含層		
第101図24	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(4.0)	-	包含層		
第101図25	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(4.9)	-	包含層		
第101図26	青花	碗	中国(漳州窯)	-	(5.0)	-	包含層		
第102図1	褐彩磁器	皿	中国	-	-	-	包含層		
第102図2	褐彩磁器	皿	中国	-	-	-	包含層		
第102図3	褐彩磁器	皿	中国	-	(10.2)	-	包含層		
第102図4	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第102図5	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第102図6	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第102図7	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	(3.0)	-	包含層		
第102図8	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	2.9	-	包含層		
第102図9	五彩	碗?	中国	-	-	-	包含層		
第102図10	五彩	碗?	中国	-	-	-	包含層		
第102図11	陶器	小皿	中国	-	-	-	包含層	翡翠釉	
第102図12	青花	盤	中国(漳州窯)	-	-	-	包含層		
第102図13	青花	盤	中国(漳州窯)	-	-	-	包含層		
第102図14	青花	盤	中国(漳州窯)	-	(13.3)	-	包含層		
第102図15	青花	瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第102図16	青花	瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層		
第102図17	青花	瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	包含層	把手 「書卷図」	
第102図18	青磁	輪花皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	包含層		
第102図19	青磁	輪花皿	中国(龍泉窯)	(10.2)	(4.1)	3.2	包含層		
第102図20	青磁	香炉?	中国(龍泉窯)	-	-	-	包含層		
第102図21	青磁	碗?	中国(龍泉窯)	-	-	-	包含層		
第102図22	青磁	香炉	肥前	-	(5.5)	-	包含層		
第103図1	白磁	碗	中国	-	-	-	包含層		



遺物観察表 8 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑧)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位:cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第103図2	白磁	碗	中国	-	(5.6)	-	包含層		
第103図3	白磁	碗	中国	-	(5.0)	-	包含層		
第103図4	白磁	碗	中国	-	(5.4)	-	包含層		
第103図5	白磁	碗	中国	-	(4.7)	-	包含層		
第103図6	白磁	碗	中国	-	-	-	包含層		
第103図7	白磁	碗	中国	-	-	3.0	包含層		
第103図8	白磁	碗	中国	(10.0)	(5.2)	2.7	包含層		
第103図9	白磁	碗	ベトナム	-	-	-	包含層		
第103図10	白磁	碗	朝鮮王朝	-	-	-	包含層		
第103図11	白磁	碗	朝鮮王朝	-	(4.6)	-	包含層		
第103図12	白磁	小杯	中国	(7.1)	(3.6)	3.3	包含層		
第103図13	白磁	小杯	中国	-	2.3	-	包含層		
第103図14	白磁	小杯	中国	-	(2.6)	-	包含層		
第103図15	白磁	小杯	中国	-	(3.0)	-	包含層		
第103図16	白磁	角杯	中国	-	(3.8)	-	包含層		
第103図17	褐釉陶器	壺	中国	-	-	-	包含層		
第103図18	褐釉陶器	壺	中国	-	-	-	包含層		
第103図19	華南三彩	不明	中国	-	-	-	包含層		
第103図20	華南三彩	鶴形水注	中国	-	-	-	包含層		
第103図21	華南三彩	水注?	中国	-	-	-	包含層		
第103図22	華南三彩	水注	中国	-	(5.2)	-	包含層		
第104図1	陶器	皿	瀬戸美濃	-	-	-	包含層	志野	
第104図2	陶器	皿	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図3	陶器	小鉢	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図4	陶器	折縁菊皿	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図5	陶器	瓶	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図6	陶器	小皿	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図7	陶器	卸皿	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第104図8	陶器	皿	瀬戸美濃	-	(5.4)	-	包含層		
第104図9	陶器	丸皿	瀬戸美濃	(10.0)	(5.4)	2.4	包含層		
第104図10	陶器	皿	肥前(唐津)	-	-	-	包含層		
第104図11	陶器	皿	肥前(唐津)	-	-	-	包含層	絵唐津	
第104図12	陶器	皿	肥前(唐津)	-	-	-	包含層	絵唐津	
第104図13	陶器	皿	肥前(唐津)	-	-	-	包含層	絵唐津	
第104図14	染付	小杯	肥前	(6.0)	-	-	包含層		
第104図15	陶器	搦鉢	肥前(唐津)	-	-	-	包含層		
第104図16	陶器	皿	肥前(唐津)	-	(4.5)	-	包含層		
第104図17	陶器	皿	肥前(唐津)	-	(4.3)	-	包含層	絵唐津	
第104図18	陶器	皿	肥前(唐津)	-	(4.6)	-	包含層	絵唐津	
第104図19	陶器	皿	肥前(唐津)	(11.5)	(13.8)	2.1	包含層		
第104図20	陶器	大皿	肥前	-	(8.7)	-	包含層		
第104図21	陶器	瓶	備前	4.8	-	-	包含層		
第104図22	陶器	瓶	備前	-	-	-	包含層		
第104図23	陶器	瓶	備前	-	-	-	包含層		
第105図1	陶器	小鉢	備前	-	-	-	包含層		
第105図2	陶器	鉢	備前	-	-	-	包含層		
第105図3	陶器	鉢	備前	-	-	5.1	包含層		
第105図4	陶器	鉢	備前	(12.8)	(8.0)	4.2	包含層		
第105図5	陶器	鉢	備前	(20.6)	-	5.1	包含層		
第105図6	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図7	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図8	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図9	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図10	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図11	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図12	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図13	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図14	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図15	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図16	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図17	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第105図18	陶器	搦鉢	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第106図1	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層	近世1期	
第106図2	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図3	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図4	陶器	水屋甕	備前	(13.8)	-	-	包含層		
第106図5	陶器	水屋甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図6	陶器	水屋甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図7	陶器	水屋甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図8	陶器	瓶or鉢	備前OR中国	(12.0)	-	-	包含層		
第106図9	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図10	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図11	陶器	甕	備前	-	-	-	包含層		
第106図12	陶器	不明	備前	-	-	-	包含層	把手	
第106図13	陶器	甕	備前or常滑	-	-	-	包含層		

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑨)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第106図14	陶器	壺	備前	-	-	-	包含層		
第107図1	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図2	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図3	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図4	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図5	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図6	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図7	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図8	陶器	天目	瀬戸美濃	-	-	-	包含層		
第107図9	陶器	天目	中国	-	-	-	包含層		
第107図10	陶器	天目	中国	-	-	-	包含層		
第107図11	陶器	天目	中国	-	-	-	包含層		
第107図12	陶器	天目	中国	-	-	-	包含層		
第107図13	陶器	天目	中国	-	(4.3)	-	包含層		
第107図14	陶器	天目	中国	-	(4.2)	-	包含層		
第108図1	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	包含層		
第108図2	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	包含層		
第108図3	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	1.9	包含層	灯明皿	
第108図4	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	2.0	包含層		
第108図5	京都系土師器	皿	在地	(8.6)	-	1.6	包含層	灯明皿	
第108図6	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	-	(1.9)	包含層		
第108図7	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	-	2.1	包含層	灯明皿	
第108図8	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	-	2.0	包含層		
第108図9	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	-	1.8	包含層		
第108図10	京都系土師器	皿	在地	9.1	-	2.2	包含層	灯明皿	
第108図11	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	-	1.8	包含層		
第108図12	京都系土師器	皿	在地	(9.0)	-	1.9	包含層		
第108図13	京都系土師器	皿	在地	(9.2)	-	2.1	包含層		
第108図14	京都系土師器	皿	在地	(10.5)	-	(2.3)	包含層		
第108図15	京都系土師器	皿	在地	(11.2)	-	3.2	包含層		
第108図16	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	-	(2.4)	包含層		
第108図17	京都系土師器	皿	在地	(11.9)	-	2.1	包含層		
第108図18	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	2.3	包含層		
第108図19	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	-	2.2	包含層		
第108図20	京都系土師器	皿	在地	12.2	-	2.6	包含層		
第108図21	京都系土師器	皿	在地	(12.2)	-	2.5	包含層		
第108図22	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	2.3	包含層		
第108図23	京都系土師器	皿	在地	(12.6)	-	(2.1)	包含層		
第108図24	京都系土師器	皿	在地	(12.8)	-	(2.6)	包含層		
第108図25	京都系土師器	皿	在地	(13.0)	-	2.5	包含層		
第108図26	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	-	2.1	包含層		
第108図27	京都系土師器	皿	在地	(13.6)	-	2.5	包含層		
第108図28	京都系土師器	皿	在地	(14.0)	-	(2.2)	包含層		
第108図29	京都系土師器	皿	在地	(15.8)	-	2.1	包含層		
第108図30	京都系土師器	皿	在地	(16.2)	-	(2.7)	包含層		
第108図31	京都系土師器	坏	在地	(10.0)	-	(3.5)	包含層		
第108図32	京都系土師器	坏	在地	(10.0)	-	3.0	包含層		
第108図33	京都系土師器	坏	在地	(11.2)	-	3.3	包含層		
第108図34	土師質土器	蓋	在地	5.2	-	1.8	包含層		
第108図35	土師質土器	蓋	在地	6.8	-	4.0	包含層		
第108図36	土師質土器	燭台	在地	-	-	-	包含層		
第108図37	土師質土器	燭台	在地	-	5.4	-	包含層		
第108図38	土師質土器	耳皿	在地	-	-	-	包含層		
第108図39	土師質土器	皿	在地	-	-	-	包含層		
第108図40	土師質土器	皿	在地	-	-	-	包含層		
第108図41	土師質土器	皿	在地	(7.8)	-	(1.9)	包含層		
第108図42	土師質土器	皿	在地	(7.9)	-	2.0	包含層		
第108図43	土師質土器	皿	在地	(9.4)	-	(1.9)	包含層		
第108図44	土師質土器	皿	在地	(12.8)	-	3.0	包含層		
第108図45	土師質土器	皿	在地	-	(8.0)	-	包含層		
第108図46	土師質土器	皿	在地	-	(7.1)	-	包含層		
第108図47	土師質土器	碗	在地	-	(8.0)	-	包含層		
第109図1	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図2	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図3	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図4	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図5	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図6	瓦質土器	不明	在地	-	-	-	包含層		
第109図7	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図8	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図9	瓦質土器	甕?	在地	-	-	-	包含層		
第109図10	瓦質土器	鉢?	在地	-	-	-	包含層		
第109図11	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図12	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図13	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	包含層		

遺物観察表10 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑩)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第109図14	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図15	瓦質土器	鉢	在地	(32.0)	-	-	包含層		
第109図16	瓦質土器	掃鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図17	瓦質土器	掃鉢	在地	-	-	-	包含層		
第109図18	瓦質土器	香炉	在地	(12.2)	-	-	包含層		
第109図19	瓦質土器	香炉	在地	-	-	6.8	包含層		
第110図1	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図2	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図3	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図4	京都系土師器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図5	京都系土師器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図6	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図7	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図8	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図9	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図10	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図11	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図12	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	-	-	-	包含層		
第110図13	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	4.9	-	-	包含層		
第110図14	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	5.0	-	-	包含層		
第110図15	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	5.0	-	-	包含層		
第110図16	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(5.6)	-	-	包含層		
第110図17	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(6.2)	-	-	包含層		
第110図18	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	6.2	-	-	包含層		
第110図19	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	6.6	-	-	包含層		
第110図20	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	6.6	-	-	包含層		
第110図21	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(6.9)	-	-	包含層		
第110図22	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.0	-	-	包含層		
第110図23	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(6.8)	-	-	包含層		
第110図24	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(7.1)	-	-	包含層		
第110図25	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	(7.2)	-	-	包含層		
第110図26	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.4	-	-	包含層		
第110図27	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.3	-	-	包含層		
第110図28	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.4	-	-	包含層		
第110図29	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.7	-	-	包含層		
第110図30	土師質土器	取瓶(埴埴)	在地	7.8	-	-	包含層		
第112図1	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SP043	L20区	
第112図2	青花	碗	中国(景德镇窯)	-	-	-	SP248	E群 K20区	
第112図3	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SP074	F群 K21区	
第112図4	青花	碗	中国(景德镇窯)	-	-	-	SP146		
第112図5	青花	碗	中国(景德镇窯)	-	-	-	SP251	K19区	
第112図6	青花	不明	中国(景德镇窯)	-	-	-	SP039	L20区	
第112図7	白磁	小壺	中国	(2.7)	-	-	SP086	L20区	
第112図8	青花	皿	中国(景德镇窯)	(10.9)	(6.6)	2.6	SP144	E群	
第112図9	白磁	皿	中国	(15.7)	(9.4)	3.1	SP144	E群	
第112図10	青花	皿	中国(景德镇窯)	-	(8.2)	-	SP145		
第112図11	白磁	菊皿	中国	(7.0)	-	-	SP145	E群	
第112図12	青花	皿	中国(景德镇窯)	(19.9)	-	-	J20区北壁	F群	
第112図13	陶器	壺	常滑	-	-	-	SP152	L21区	
第112図14	焼締陶器	小壺	中国?	-	-	-	SP278	J19区	
第112図15	陶器	壺?	瀬戸美濃	-	-	-	SP141	K20区	
第113図16	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP112	K20区	
第113図17	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP241	K20区	
第113図18	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP137	L21区	
第113図19	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP240	K21区	
第113図20	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP245	K20区	
第113図21	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP271	K21区	
第113図22	京都系土師器	皿	在地	(11.4)	-	2.2	SP142	K20区	
第113図23	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	2.2	SP141	K20区	
第113図24	京都系土師器	皿	在地	(11.8)	-	(2.6)	SP129	M20区	
第113図25	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	1.8	SP284	K21区	
第113図26	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	(2.0)	SP120	K20区	
第113図27	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	2.6	SP110	K20区	
第113図28	京都系土師器	皿	在地	(12.0)	-	3.0	SP254	K20区	
第113図29	京都系土師器	皿	在地	(12.4)	-	(2.1)	SP154	K20区	
第113図30	陶器	壺	備前	-	-	-	SP154	K20区	
第113図31	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP146		
第113図32	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP146		
第113図33	陶器	壺	備前	-	-	-	SP146		
第113図34	京都系土師器	皿	在地	(7.2)	-	(2.0)	SP199	K21区	
第113図35	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.2	SP199	K21区	
第113図36	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SP199	近世1期 斜めスリ目 K21区	
第113図37	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SP247	K19区	
第113図38	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SP118	K20区	
第113図39	陶器	掃鉢	備前	-	-	-	SP290	K20区	

第22次調査区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)

挿図No.	器種		生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第113図40	陶器	壺	備前		(10.2)		SB04		
第113図41	陶器	壺	備前		(12.4)		SP121	K20区	
第113図42	陶器	瓶	備前				SB07	へら記号「大」	
第113図43	瓦質土器	搦鉢	在地				SP277	K19区	
第113図44	瓦質土器	鉢	在地				SP260	K21区	
第113図45	瓦質土器	火鉢	在地				SP113	K20区	
第113図46	瓦質土器	火鉢	在地				SP113	K20区	
第113図47	京都系土師器	皿	在地				SP258	K20区	
第113図48	瓦質土器	火鉢	在地				SP258	K20区	
第114図50	瓦質土器	火鉢	在地				SP181	K20区	
第114図51	京都系土師器	皿	在地	(10.8)		(2.2)	SP186	K・L21区	
第114図52	瓦質土器	搦鉢	在地	(34.2)	(16.0)	12.3	SP186	K・L21区	
第117図 1	弥生土器	甕	—	(13.2)			トレンチ		
第117図 2	弥生土器	壺	—	(14.8)			トレンチ	複合口縁	

第22次調査区遺物観察表 (土製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	孔径	厚さ	孔径	厚さ				
第9図10	土錘	土師質	—	長さ	3.9	幅	1.8	孔径	0.6		SD017		
第10図12	土錘	土師質	—	長さ	3.6	幅	1.5	孔径	0.3		SD020	上部欠損	
第13図	土玉	土	—	径	2.1	—	—	—	—	8.9	SD202	用途不明	
第19図 2	土錘	土師質	—	長さ	4.0	幅	0.9	孔径	0.3		SK013	上部欠損	
第47図 9	土錘	土師質	—	長さ	3.6	幅	1.5	孔径	0.6		SK200		
第65図17	土錘	土師質	—	長さ	4.2	幅	2.1	孔径	0.9		SE007		
第110図31	円盤状加工品	土師質	—	径	2.8	厚さ	0.4	—	—		包含層	京都系土師器の口縁部を加工	
第110図32	円盤状加工品	土師質	—	径	4.0	厚さ	0.8	—	—		包含層		
第110図33	円盤状加工品	土師質	—	径	6.6	厚さ	2.0	—	—		包含層		
第110図34	円盤状加工品	瓦質	—	径	2.2	厚さ	0.7	—	—		包含層		
第110図35	円盤状加工品	瓦質	—	径	3.0	厚さ	1.0	—	—		包含層		
第110図36	円盤状加工品	瓦質	—	径	3.8	厚さ	1.2	—	—		包含層		
第110図37	円盤状加工品	陶器	—	径	5.4	厚さ	1.4	—	—		包含層	備前系搦鉢を加工	
第110図38	犬形土製品	土師質	—	—	—	—	—	—	—		包含層	M20	
第115図49	土鈴?	土師質	—	—	—	—	—	—	—		SP181		

第22次調査区遺物観察表 (石製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ	最大長	最大幅	最大厚				
第8図12	砥石	石	—	長さ	9.6	幅	4.4	厚さ	0.9	49.3	SD009		
第16図 2	砥石	石	—	長さ	8.6	幅	5.5	厚さ	4.2	327.9	SK008		
第41図 4	石錘	石	—	長さ	6.5	幅	3.3	厚さ	1.1	20.9	SK109		
第72図10	石臼	石	フルギアナ	最大長	6.4	幅	6.2	最大厚	2.8	93.0	SE012		
第77図 2	石臼	安山岩	上臼	径	31.0	—	—	厚さ	7.7	2,200.0	SE021		
第112図27	硯	赤間石	—	長さ	4.0	最大幅	4.2	最大厚	0.9	14.9	包含層		
第112図28	砥石	—	—	長さ	5.5	最大幅	4.8	最大厚	1.4	42.5	包含層		
第112図29	石錘	—	—	最大長	8.5	最大幅	6.5	厚さ	1.4	143.6	包含層		
第114図53	輪	石	羽口	長さ	10.0	—	—	孔径	4.0	—	SP002		

遺物観察表12 (第22次調査区)

第22次調査区遺物観察表 (金属製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)					重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.	
				長さ	幅	高さ	厚さ	径					
第7図14	銅製金具	銅	-	長さ	4.0	幅	1.4	-	-	3.0	SF230		
第7図15	銅製金具	銅	-	長さ	1.2	-	-	-	-	0.6	SF230		
第8図10	繭型分銅	銅	-	長さ	1.0	-	-	厚さ	0.4	0.8	SD009		
第8図11	太鼓型分銅	銅	-	長さ	0.9	-	-	厚さ	0.4	1.0	SD009		
第16図1	柄杓	青銅	頭	径	4.5	高さ	1.8	-	-	21.3	SK008		
第47図10	鏡	銅	口縁部	最大長	3.8	-	-	-	-	-	SK200		
第68図19	銅製金具	銅	-	長さ	1.0	-	-	-	-	0.6	SE010		
第72図11	不明(インゴット)	鉛?	-	最大幅	3.7	高さ	1.4	-	-	55.2	SE012		
第72図12	小柄	銅	-	長さ	15.8	-	-	-	-	44.3	SE012		
第91図	繭型分銅	銅	-	長さ	0.7	-	-	厚さ	0.3	0.4	SP160		
第111図1	銅板	銅	-	長さ	2.0	幅	1.6	厚さ	0.09	1.4	包含層		
第111図2	銅板	銅	-	長さ	2.2	幅	1.3	厚さ	0.06	1.7	包含層		
第111図3	銅板	銅	-	-	-	-	-	-	-	4.0	包含層		
第111図4	銅製金具	銅	-	径	1.6	高さ	1.1	-	-	1.9	包含層	ドーム状	
第111図5	銅製金具	銅	-	長さ	1.0	-	-	-	-	0.6	包含層	ピン?	
第111図6	釘	銅	-	長さ	1.6	-	-	-	-	0.9	包含層		
第111図7	銅製金具	銅	-	長さ	2.3	-	-	-	-	0.5	包含層	ピン? (円錐状)	
第111図8	釘?	銅	-	長さ	4.5	-	-	-	-	3.2	包含層		
第111図9	銅製金具	銅	-	長さ	4.1	-	-	-	-	1.5	包含層	ピン?	
第111図10	銅製金具	銅	-	長さ	3.9	-	-	-	-	4.6	包含層	留め金具?	
第111図11	銅製金具	銅	-	長さ	7.2	-	-	厚さ	-	7.6	包含層	L字状	
第111図12	銅製金具	銅	-	長さ	3.2	-	-	厚さ	-	1.5	包含層	留め金具?	
第111図13	銅製金具	銅	-	-	-	-	-	-	-	2.0	包含層	引き手金具	
第111図14	銅製金具	銅	-	径	2.1	-	-	厚さ	-	5.2	包含層	環状	
第111図15	銅製金具	銅	-	長さ	1.2	-	-	厚さ	-	0.1	包含層		
第111図16	銅線	銅	-	長さ	2.0	-	-	厚さ	-	0.5	包含層		
第111図17	銅線	銅	-	長さ	-	-	-	厚さ	-	0.4	包含層		
第111図18	銅製金具	銅	-	長さ	-	幅	0.5	厚さ	0.2	2.2	包含層		
第111図19	鍵	銅	-	長さ	5.6	-	-	厚さ	-	0.6	包含層		
第111図20	太鼓型分銅	銅	-	径	0.6	-	-	厚さ	0.2	0.3	包含層		
第111図21	繭型分銅	銅	-	長さ	2.0	-	-	厚さ	1.0	12.2	包含層	刻印有り	
第111図22	小柄	銅	-	長さ	8.5	幅	1.2	厚さ	-	27.3	包含層		

第22次調査区遺物観察表 (瓦)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)					遺構名	備考	図版 No.	
				長さ	幅	高さ	厚さ	径				
第69図1	平瓦	-	-	長さ	20.5	幅	28.0	厚さ	1.8	SE010		
第69図2	平瓦	-	-	長さ	18.5	幅	27.5	厚さ	1.8	SE010		
第69図3	平瓦	-	-	長さ	20.0	幅	36.0	厚さ	1.4	SE010		
第69図4	平瓦	-	-	長さ	23.0	幅	29.0	厚さ	1.9	SE010		
第69図5	丸瓦	-	-	長さ	20.0	幅	36.0	厚さ	1.6	SE010		
第70図6	丸瓦	-	-	長さ	25.0	幅	41.0	厚さ	1.6	SE010		
第70図7	丸瓦	-	-	長さ	22.0	幅	34.0	厚さ	2.5	SE010		
第70図8	丸瓦	-	-	長さ	19.0	幅	33.5	厚さ	1.8	SE010		
第70図9	丸瓦	-	-	長さ	19.0	幅	31.0	厚さ	1.8	SE010		
第70図10	丸瓦	-	-	長さ	19.0	幅	34.0	厚さ	1.8	SE010		
第76図1	平瓦	-	-	長さ	17.0	幅	26.0	厚さ	1.8	SE021		
第76図2	平瓦	-	-	長さ	13.5	幅	33.0	厚さ	1.8	SE021		
第76図3	丸瓦	-	-	長さ	15.5	幅	30.0	厚さ	1.9	SE021		
第76図4	丸瓦	-	-	長さ	18.0	幅	31.5	厚さ	1.1	SE021		
第76図5	丸瓦	-	-	長さ	22.0	幅	28.0	厚さ	1.8	SE021		
第76図6	丸瓦	-	-	長さ	25.0	幅	37.0	厚さ	1.6	SE021		

第22次調査区遺物観察表 (その他)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)					重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.	
				長さ	幅	高さ	厚さ	径					
第33図2	紐?	布	-	長さ	8.7	幅	1.5	厚さ	1.8	8.8	SK040		
第33図3	紐?	布	-	長さ	6.6	幅	1.1	厚さ	1.0	2.9	SK040		
第77図1	ガラス	ガラス	-	長さ	2.3	幅	-	厚さ	0.3	1.3	SE021		
第89図53	油煙墨	-	-	長さ	3.2	幅	1.8	厚さ	0.8	3.0	SX006		
第112図23	小玉	ガラス	-	径	0.7	-	-	厚さ	0.3	0.2	包含層		
第112図24	ガラス	ガラス	-	長さ	1.7	-	-	厚さ	0.3	0.1	包含層		
第112図25	ガラス	ガラス	-	長さ	1.7	幅	0.3	厚さ	0.6	0.9	包含層		
第112図26	水晶	水晶	-	長さ	2.7	幅	1.2	厚さ	1.3	7.8	包含層		
第117図3	浮き?	不明	-	長さ	12.3	径	2.5	孔径	0.2	74.6	トレンチ		

第22次調査区遺物観察表 (銭貨)

挿図No.	銭貨名	初鑄造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考	図版 No.
第7図17	不明	—	—	1.4	—	—	SF230		
第9図11	熙寧元寶	1068	北宋	1.5	24.0	篆書	SD017		
第47図11	元祐通寶	1086	北宋	1.8	24.0	篆書	SK200		
第68図20	不明	—	—	0.8	—	—	SE010	「洪」「武」判読	
第72図13	聖宋元寶	1101	北宋	2.9	23.6	行書	SE012		
第84図1	不明	—	—	3.0	24.7	—	SX01		
第115図1	不明	—	—	0.7	—	—	L20		
第115図2	不明	—	—	1.5	—	篆書	J20	「熙」「寧」判読	
第115図3	不明	—	—	1.0	—	行書	L20	「宋」「元」判読	
第115図4	不明	—	—	1.8	22.6	—	J20		
第115図5	不明	—	—	2.5	24.5	—	L20		
第115図6	至道元寶	995	北宋	1.9	23.9	真書	L21		
第115図7	景德元寶	1004	北宋	2.6	25.0	—	L21		
第115図8	祥符元寶	1009	北宋	1.4	—	—	M21		
第115図9	天聖元寶	1023	北宋	2.2	24.1	篆書	L21		
第115図10	皇宋通寶	1038	北宋	2.1	25.1	篆書	K21		
第115図11	皇宋通寶	1038	北宋	2.1	24.1	真書	L21		
第115図12	治平元寶	1064	北宋	3.5	24.5	篆書	K21		
第115図13	熙寧元寶	1068	北宋	1.8	23.4	真書	M21		
第115図14	熙寧元寶	1068	北宋	1.9	23.7	篆書	L20		
第115図15	熙寧元寶	1068	北宋	1.7	23.7	真書	K19		
第115図16	熙寧元寶	1068	北宋	2.1	24.3	篆書	L21		
第115図17	皇宋通寶	1038	北宋	1.9	24.4	篆書	L20		
第115図18	元豐通寶	1078	北宋	1.7	24.0	篆書	L20		
第115図19	元豐通寶	1078	北宋	2.1	24.9	篆書	L20		
第115図20	元豐通寶	1078	北宋	2.5	24.2	行書	L21		
第115図21	元祐通寶	1086	北宋	2.3	24.4	行書	M21		
第116図22	元祐通寶	1086	北宋	1.8	23.8	行書	L20		
第116図23	紹聖元寶	1094	北宋	2.0	23.8	篆書	L20		
第116図24	元符通寶	1098	北宋	1.5	24.1	篆書	L21		
第116図25	聖宋元寶	1101	北宋	2.3	23.8	行書	K21		
第116図26	洪武通寶	1368	明	1.3	21.9	—	L20		
第116図27	寛永通寶		江戸	1.0	—	—	L21	古寛永	
第116図28	嘉靖通寶	1527	明	1.9	24.6	—	SP150		
第116図29	祥符通寶	1009	北宋	2.8	23.9	—	SP219		

遺物観察表14 (第9次調査区)

第9次調査区II区遺物観察表(土器・陶磁器類①)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第126図1	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.6	—	SD001-1・2		
第126図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.2	—	—	SD001-1・2		
第126図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	9.6	—	—	SD001-1・2		
第126図4	白磁	皿	中国	11.2	6.0	2.6	SD001-1・2		
第126図5	陶器	鉢	中国	7.8	—	—	SD001-1・2	褐釉	16
第126図6	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SD001-1・2		
第126図7	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	1.8	SD001-1・2		
第126図8	京都系土師器	坏	在地	11.4	—	3.1	SD001-1・2		
第126図9	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.2	SD001-1・2		
第126図10	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.4	SD001-1・2		
第126図11	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.2	SD001-1・2		
第126図12	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	2.2	SD001-1・2		
第126図13	京都系土師器	皿	在地	15.4	—	2.7	SD001-1・2		
第127図1	瓦質土器	羽釜	在地	15.0	—	—	SD001-3		
第127図2	京都系土師器	皿	在地	11.3	—	2.2	SD001-3		
第127図3	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.1	SD001-3		
第127図4	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.1	SD001-3		
第127図5	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.3	SD001-3		
第127図6	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SD001-3		
第127図7	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.8	SD001-3		
第129図1	青磁	小碗	中国(龍泉窯)	8.0	4.2	3.1	SD002		
第129図2	白磁	皿	中国	17.2	9.2	3.1	SD002		
第129図3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SD002	口縁内外面にススが付着	
第129図4	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SD002	口縁内外面にススが付着	
第129図5	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SD002	取瓶として再利用されている	
第129図6	土師質土器	皿	在地	11.0	6.4	2.8	SD002		
第129図7	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD002		
第129図8	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD002		
第129図9	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SD002		
第129図10	京都系土師器	坏	在地	11.8	—	—	SD002		
第129図11	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SD002	取瓶として再利用されている	
第129図12	陶器	播鉢	備前	—	15.0	—	SD002		
第129図13	焼締陶器	鉢	中国南部	26.4	—	—	SD002		16
第129図14	瓦質土器	鉢	在地	35.0	—	—	SD002		
第129図15	土師質土器	鍋	在地	43.5	—	—	SD002		
第132図1	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	—	SK003		
第132図2	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SK003		
第132図3	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SK003		
第134図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	SK004		
第134図2	青花	皿	中国	—	—	—	SK004		
第134図3	青花	皿	中国	13.0	—	—	SK004		
第134図4	白磁	小杯	中国	—	3.4	—	SK004		
第134図5	陶器	皿	備前	23.0	14.0	3.8	SK004		
第134図6	土師質土器	香炉	在地	—	6.8	—	SK004		
第134図7	京都系土師器	皿	在地	7.4	—	1.4	SK004		
第134図8	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.9	SK004		
第134図9	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK004		
第134図10	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	—	SK004		
第134図11	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	1.7	SK004		
第134図12	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	2.0	SK004		
第134図13	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.0	SK004		
第134図14	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK004		
第134図15	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.0	SK004		
第134図16	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	—	SK004		
第134図17	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.7	SK004		
第134図18	土師質土器	取瓶	在地	10.6	—	—	SK004		
第134図19	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.2	SK004		
第134図20	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.5	SK004		
細136図1	焼締陶器	甕	タイ(メナムノイ)	22.0	—	—	SK004		
細136図2	陶器	水屋甕	備前	23.0	—	—	SK004		
第138図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	11.6	—	—	SK005		
第138図2	青花	碗	中国	11.8	—	—	SK005		
第138図3	白磁	皿	中国	17.8	—	—	SK005	4と同一個体か	
第138図4	白磁	皿	中国	—	9.0	—	SK005	3と同一個体か	
第138図5	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	SK005		
第138図6	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	SK005		
第138図7	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	—	SK005		
第138図8	焼締陶器	長胴壺	ベトナム	13.0	14.0	33.0	SK005		16
第139図1	青花	碗	中国(漳州窯)	14.0	—	—	SK006		
第139図2	白磁	皿	中国	11.0	6.0	2.4	SK006		
第139図3	華南三彩	盤	中国	—	—	—	SK006		
第139図4	華南三彩	盤	中国	—	—	—	SK006		
第139図5	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	12.6	6.8	3.2	SK006		16
第139図6	京都系土師器	耳皿	在地	—	—	—	SK006		
第139図7	京都系土師器	皿	在地	11.7	—	—	SK006		

第9次調査区II区遺物観察表(土器・陶磁器類②)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第139図8	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SK006	
第139図9	土師質土器	皿	在地	—	7.0	—	SK006	
第139図10	土師質土器	円盤状土製品	在地	—	—	—	SK006	
第139図11	磁器	菊花皿	中国南部	6.0	3.7	1.2	SK006	翡翠釉
第141図	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.2	SK007	
第143図1	青花	皿	中国	13.4	—	—	SK008	
第143図2	白磁	皿	中国	13.0	7.0	3.0	SK008	
第143図3	陶器	天目	瀬戸美濃	11.6	4.0	6.1	SK008	
第143図4	陶器	鉢	備前	23.0	—	—	SK008	
第143図5	京都系土師器	皿	在地	9.8	—	—	SK008	
第143図6	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.1	SK008	
第143図7	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.0	SK008	
第143図8	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.0	SK008	
第143図9	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	SK008	
第143図10	京都系土師器	皿	在地	17.4	—	—	SK008	
第145図1	青花	皿	中国(景德镇窯)	—	—	—	SK009	
第145図2	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	2.1	SK009	
第147図1	青花	皿	中国	—	—	—	SK010	
第147図2	焼締陶器	壺	不明	—	7.2	—	SK010	
第147図3	陶器	壺	備前	19.0	—	—	SK010	
第147図4	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SK010	
第147図5	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	SK010	
第147図6	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	—	SK010	
第147図7	京都系土師器	皿	在地	11.0	1.8	—	SK010	
第147図8	京都系土師器	皿	在地	8.4	1.7	—	SK010	
第147図9	京都系土師器	皿	在地	12.8	2.4	—	SK010	
第147図10	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SK010	
第147図11	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SK010	
第147図12	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	—	SK010	
第147図13	土師質土器	碗?	在地	11.4	—	—	SK010	
第147図14	京都系土師器	坏	在地	11.6	—	3.6	SK010	
第147図15	土師質土器	坏	在地	—	6.0	—	SK010	
第147図16	土師質土器	鉢	在地	36.0	—	—	SK010	
第147図17	瓦質土器	鍋	在地	39.0	—	—	SK010	
第149図1	白磁	碗	中国	—	4.3	—	SK011	
第149図2	陶器	德利	備前	—	6.8	—	SK011	
第149図3	白磁	皿	中国	16.7	3.7	9.0	SK011	
第149図4	陶器	天目	瀬戸美濃	11.8	—	—	SK011	
第149図5	陶器	天目	瀬戸美濃	12.0	—	—	SK011	
第149図6	陶器	甕	備前	—	—	—	SK011	
第149図7	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	SK011	
第149図8	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第149図9	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第149図10	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.4	SK011	
第149図11	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK011	
第149図12	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	2.1	SK011	
第149図13	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SK011	
第149図14	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SK011	
第151図	陶器	德利	備前	—	—	—	SK012	
第153図1	白磁	香炉	中国	8.6	5.4	5.0	SK013	17
第153図2	焼締陶器	小壺	備前	4.8	—	—	SK013	
第153図3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SK013	
第153図4	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.3	SK013	
第155図	白磁	皿	中国	11.6	6.6	2.5	SK014	
第156図1	陶器	小壺	備前	—	—	—	SK017	
第156図2	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	—	SK017	
第156図3	京都系土師器	皿	在地	14.6	—	2.2	SK017	
第157図	青花	皿	中国(漳州窯)	—	10.2	—	SK018	17
第158図1	瓦質土器	釜	在地	12.0	—	—	SK019	
第158図2	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.9	SK019	
第160図1	青花	皿	中国(景德镇窯)	10.0	6.0	2.4	SK022	
第160図2	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SK022	
第160図3	瓦質土器	鍋	在地	30.0	—	—	SK022	
第160図4	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	2.1	SK022	
第161図1	白磁	皿	中国	—	7.0	—	SK023	
第161図2	白磁	皿	中国	11.0	4.4	2.6	SK023	
第161図3	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	SK023	
第161図4	陶器	播鉢	備前	29.0	—	—	SK023	
第161図5	瓦質土器	鉢	在地	42.0	30.0	6.9	SK023	
第164図1	瓦質土器	鉢	在地	—	28.0	—	SK024	
第164図2	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	2.0	SK024	
第165図	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.3	SK025	
第166図	白磁	皿	中国	9.5	4.6	2.2	SK026	
第168図	瓦質土器	火鉢	在地	—	30.5	—	SK027	
第170図1	青花	碗	中国(漳州窯)	—	6.0	—	SE028	



遺物観察表16 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類③)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第170図2	青磁	皿	中国(龍泉窯)	—	5.5	—	SE028		
第170図3	白磁	皿	中国	6.4	—	—	SE028		
第170図4	陶器	皿	不明	12.0	2.5	10.2	SE028		
第170図5	陶器	壺	備前	10.0	—	—	SE028		
第170図6	陶器	搦鉢	備前	22.5	—	—	SE028		
第170図7	陶器	搦鉢	備前	—	11.0	—	SE028		
第170図8	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.6	SE028		
第170図9	京都系土師器	皿	在地	6.4	—	2.9	SE028		
第170図10	京都系土師器	皿	在地	12.3	—	2.3	SE028		
第170図11	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	—	SE028		
第170図12	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SE028		
第170図13	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SE028		
第170図14	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SE028		
第170図15	土師質土器	鍋	在地	37.0	—	—	SE028		
第173図	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.0	SE029		
第174図1	青花	皿	在地	—	5.0	—	SX030		
第174図2	青花	壺	中国(漳州窯)	—	8.6	—	SX030		17
第174図3	青花	碗	中国	—	5.4	—	SX030		
第174図4	磁器	碗	中国(景德鎮窯)	—	5.4	—	SX030		
第174図5	陶器	不明	中国	—	—	—	SX030		17
第174図6	陶器	天目	中国	—	4.0	—	SX030		
第174図7	焼締陶器	蓋	瀬戸美濃	13.2	—	—	SX030		17
第174図8	焼締陶器	注口	中国南部	—	—	—	SX030		
第174図9	瓦質土器	焙烙	在地	—	—	—	SX030	柄の着装部	
第174図10	陶器	壺	備前	—	10.0	—	SX030		
第174図11	陶器	皿	備前	23.5	15.0	3.8	SX030		
第174図12	京都系土師器	皿	備前	12.0	—	1.9	SX030	取瓶として再利用されている	
第174図13	土師質土器	取瓶	在地	—	—	—	SX030		
第174図14	京都系土師器	小皿	在地	5.5	—	1.7	SX030		
第174図15	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SX030		
第174図16	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX030		
第174図17	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SX030		
第174図18	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX030		
第174図19	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SX030		
第174図20	土師質土器	皿	在地	14.0	—	—	SX030		
第174図21	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.1	SX030		
第174図22	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.1	SX030		
第174図23	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.1	SX030		
第174図24	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SX030		
第174図25	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.2	SX030		
第174図26	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.3	SX030		
第174図27	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	SX030		
第174図28	京都系土師器	皿	在地	13.3	—	2.1	SX030		
第174図29	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	SX030		
第174図30	京都系土師器	皿	在地	16.4	—	—	SX030		
第175図1	陶器	搦鉢	備前	—	15.0	—	SX030		
第175図2	陶器	搦鉢	備前	—	15.0	—	SX030		
第175図3	土師質土器	深鍋	在地	23.0	—	—	SX030		
第175図4	土師質土器	深鍋	在地	26.0	—	—	SX030		
第175図5	土師質土器	鍋	在地	41.0	—	—	SX030		
第175図6	土師質土器	鍋	在地	42.0	—	—	SX030		
第176図1	陶器	甗	備前	76.0	—	—	SX030		
第176図2	陶器	甗	備前	80.0	—	—	SX030		
第176図3	陶器	甗	備前	—	—	—	SX030		
第178図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	5.8	—	SX031		
第178図2	土師質土器	坏	在地	—	6.0	—	SX031		
第179図1	青花	碗	中国(漳州窯)	—	5.0	—	SX032		
第179図2	白磁	皿	中国	11.3	—	—	SX032		
第179図3	瓦質土器	風炉	在地	—	—	—	SX032	脚部	
第179図4	土師質土器	皿	在地	—	—	—	SX032		
第179図5	京都系土師器	皿	在地	8.6	—	1.9	SX032		
第179図6	京都系土師器	皿	在地	8.2	—	1.8	SX032		
第179図7	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	1.8	SX032		
第179図8	土師質土器	坏	在地	—	9.2	—	SX032		
第179図9	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX032		
第179図10	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	2.4	SX032		
第179図11	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.1	SX032		
第179図12	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SX032		
第180図1	青花	皿	在地	8.4	—	—	SX032		
第180図2	瓦質土器	壺	不明	—	16.0	—	SX032		
第180図3	土製品	燭台	在地	—	7.0	—	SX032		
第180図4	瓦質土器	鍋?	在地	—	—	—	SX032		
第180図5	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SX032		
第180図6	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	1.9	SX032		
第180図7	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.2	SX032		

第9次調査区II区遺物観察表(土器・陶磁器類④)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第182図1	京都系土師器 小皿	在地	4.6	—	1.6	SX033		
第182図2	京都系土師器 小皿	在地	5.2	—	1.8	SX033		
第182図3	京都系土師器 小皿	在地	4.6	—	1.9	SX033		
第182図4	京都系土師器 小皿	在地	1.8	—	1.7	SX033		
第182図5	土師質土器 皿	在地	11.5	8.8	3.6	SX033		
第182図6	土師質土器 皿	在地	13.7	9.2	3.1	SX033		
第182図7	京都系土師器 皿	在地	10.2	—	2.0	SX033		
第182図8	京都系土師器 皿	在地	10.5	—	2.3	SX033		
第182図9	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	1.9	SX033		
第182図10	京都系土師器 皿	在地	11.9	—	2.6	SX033		
第182図11	京都系土師器 皿	在地	11.9	—	2.5	SX033		
第182図12	京都系土師器 皿	在地	13.2	—	2.6	SX033		
第182図13	京都系土師器 皿	在地	13.2	—	2.5	SX033		
第182図14	京都系土師器 皿	在地	12.3	—	2.3	SX033		
第182図15	京都系土師器 皿	在地	12.3	—	—	SX033		
第182図16	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.4	SX033		
第182図17	京都系土師器 皿	在地	15.8	—	—	SX033		
第182図18	京都系土師器 皿	在地	17.0	—	—	SX033		
第182図19	京都系土師器 皿	在地	19.8	—	2.9	SX033		
第185図1	土師質土器 皿	在地	—	10.4	—	SP058		
第185図2	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	—	SP035		
第185図3	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	2.2	SP049		
第185図4	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	—	SP055		
第185図5	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.7	SP047		
第185図6	京都系土師器 皿	在地	13.4	—	—	SP048		
第185図7	京都系土師器 皿	在地	13.4	—	—	SP044		
第185図8	京都系土師器 皿	在地	13.5	—	2.4	SP055		
第185図9	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	2.1	SP035		
第185図10	京都系土師器 皿	在地	13.8	—	2.3	SP040		
第185図11	京都系土師器 皿	在地	16.0	—	2.1	SP049		
第186図2	瓦質土器 火鉢	在地	31.4	—	—	SP036		
第186図3	瓦質土器 火鉢	在地	44.0	—	—	SP056		
第186図4	陶器 甕	備前	—	44.6	—	SP056		
第187図1	青花 皿	中国(漳州窯)	—	4.0	—	47層		
第187図2	青花 皿	中国(景德鎮窯)	—	6.4	—	47層		
第187図3	青花 皿	中国(漳州窯)	16.0	9.5	2.8	47層		17
第187図4	陶器 皿	瀬戸美濃	—	8.6	—	47層		
第187図5	京都系土師器 皿	在地	10.8	—	2.2	47層		
第187図6	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	47層		
第188図1	青花 碗	中国	—	4.4	—	45層		
第188図2	青花 皿	中国(漳州窯)	24.0	—	—	45層		
第188図3	青花 碗	中国(景德鎮窯)	12.2	—	—	45層		
第188図4	青花 皿	中国(漳州窯)	12.2	—	—	45層		
第188図5	青花 碗?	中国(漳州窯)	—	7.8	—	45層		
第188図6	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	4.4	—	45層		
第188図7	陶器 小壺	備前	—	5.6	—	45層		
第188図8	陶器 瓶	備前	5.6	—	—	45層		
第188図9	陶器 小壺	備前	5.0	—	—	45層		
第188図10	陶器 小壺	備前	—	—	—	45層		
第188図11	土師質土器 坏	在地	11.0	7.8	3.0	45層		
第188図12	京都系土師器 皿	在地	8.8	—	2.0	45層		
第188図13	京都系土師器 皿	在地	8.8	—	2.1	45層		
第188図14	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.2	45層		
第188図15	京都系土師器 皿	在地	11.5	—	2.3	45層		
第188図16	京都系土師器 皿	在地	12.5	—	2.8	45層		
第188図17	陶器 播鉢	備前	30.0	—	—	45層		
第189図1	白磁 皿	中国	13.6	—	—	9・10・14・42層		
第189図2	白磁 皿	中国	—	9.7	—	9・10・14・42層		
第189図3	白磁 皿	中国	—	2.4	—	9・10・14・42層		
第189図4	陶器 瓶	備前	5.0	—	—	9・10・14・42層		
第189図5	陶器 天目	瀬戸美濃	12.6	—	—	9・10・14・42層		
第189図6	陶器 小壺	備前	—	6.4	—	9・10・14・42層		
第189図7	陶器 皿	備前	26.0	—	—	9・10・14・42層		
第189図8	陶器 播鉢	備前	31.0	—	—	9・10・14・42層		
第190図	陶器 甕	備前	61.2	—	—	9・10・14・42層		
第191図2	白磁 小瓶	中国	3.6	—	—	7層		
第191図3	白磁 皿	中国	—	2.0	—	7層		
第191図4	染付 蓋	肥前	—	—	—	7層	18世紀	
第191図5	陶器 不明	中国	—	—	—	7層	華南三彩	
第191図6	磁器 不明	中国	—	—	—	7層	五彩	
第191図8	染付 杯	肥前	7.0	—	—	7層	17世紀後半	
第191図9	青花 皿	中国(漳州窯)	—	—	—	7層		
第191図10	陶器 皿	不明	10.4	—	—	7層		
第191図11	青花 碗	中国?	8.4	—	—	7層		18
第191図12	磁器 皿	不明	—	10.0	—	7層		

遺物観察表18 (第9次調査区)

第9次調査区II区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第191図13	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	9.0	—	7層		
第191図14	青花	皿	中国(景德鎮窯)	14.6	—	—	7層		
第191図15	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	8.0	—	7層		
第191図16	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	8.0	—	7層		
第191図17	白磁	皿	中国	12.0	7.0	3.0	7層		
第191図18	白磁	皿	中国	—	6.4	—	7層		
第191図19	陶器	皿	唐津	14.0	—	—	7層		
第191図20	磁器	皿	肥前	14.0	—	—	7層		
第191図21	白磁	皿	中国	16.0	8.5	3.4	7層		
第191図22	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	5.4	2.0	7層		
第191図23	陶器	皿	唐津	—	4.6	—	7層		
第191図24	陶器	皿	瀬戸美濃	—	6.0	—	7層		
第191図25	陶器	天目	瀬戸美濃	12.4	—	—	7層		
第191図26	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	—	7層		
第191図27	陶器	碗	肥前	—	5.0	—	7層		
第191図28	陶器	碗	不明	—	6.0	—	7層		
第191図29	青磁	皿	中国	—	4.5	—	7層		
第191図30	陶器	碗	朝鮮王朝?	—	6.5	—	7層		
第191図31	青磁	皿	中国	—	7.0	—	7層		
第191図32	陶器	皿	唐津	—	3.6	—	7層		
第191図33	陶器	碗	肥前	—	5.2	—	7層		
第191図34	青磁	碗	中国	—	4.6	—	7層		
第191図35	青花	皿	中国(漳州窯)	38.6	—	—	7層		
第192図1	陶器	小壺	備前	—	4.4	—	7層		
第192図2	陶器	小壺	備前	—	—	—	7層		
第192図3	陶器	鉢	備前	17.0	—	—	7層		
第192図4	陶器	甗	備前?	—	—	—	7層		
第192図5	陶器	壺	備前	10.0	—	—	7層		
第192図6	陶器	鉢	備前	27.0	—	—	7層		
第192図7	陶器	蓋	不明	18.8	14.6	1.8	7層		
第192図8	陶器	瓶	備前	5.4	—	—	7層		
第192図9	焼締陶器	德利	朝鮮王朝	—	—	—	7層		
第192図10	陶器	搦鉢	備前	34.5	—	—	7層		
第192図11	陶器	壺	備前	8.0	—	—	7層		
第192図12	陶器	搦鉢	備前	—	16.0	—	7層		
第192図13	京都系土師器	小皿	在地	3.4	—	1.8	7層		
第192図14	京都系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	7層		
第192図15	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.1	7層		
第192図16	京都系土師器	皿	在地	11.6	—	2.2	7層		
第192図17	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.4	7層		
第192図18	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.3	7層		
第192図19	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	2.2	7層		
第192図20	瓦質土器	火鉢	在地	38.0	—	—	7層		
第193図1	磁器	猪口	肥前	—	2.6	—	II区		
第193図2	磁器	猪口	肥前	—	3.0	—	II区		
第193図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	7.4	2.9	II区	18	
第193図4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.4	—	II区		
第193図5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	6.0	—	II区		
第193図6	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	II区		
第193図7	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.0	—	II区		
第193図8	青花	皿	中国(漳州窯)	14.0	—	—	II区		
第193図9	青花	蓋	中国(漳州窯)	—	—	—	II区		
第193図10	陶器	瓶子	瀬戸	—	—	—	II区	古瀬戸 13~14世紀	
第193図11	白磁	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.0	—	II区	18	
第193図12	陶器	皿	瀬戸美濃	—	6.0	—	II区		
第193図13	青花	皿	中国(漳州窯)	9.8	5.0	2.7	II区		
第193図14	陶器	皿	瀬戸美濃	12.0	—	—	II区		
第193図15	陶器	皿	瀬戸美濃	9.8	5.4	1.8	II区		
第193図16	白磁	瓶	中国	6.0	—	—	II区		
第193図17	陶器	碗	不明	13.4	6.2	4.4	II区		
第193図18	陶器	瓶	朝鮮王朝	—	—	—	II区	18	
第193図19	陶器	天目	瀬戸美濃	13.0	—	—	II区		
第193図20	陶器	天目	瀬戸美濃	—	4.5	—	II区		
第193図21	青花	皿	中国(漳州窯)	23.5	—	—	II区		
第194図1	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.1	II区		
第194図2	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0	II区	スス付着	
第194図3	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.1	II区		
第194図4	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.1	II区		
第194図5	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.1	II区		
第194図6	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	1.8	II区	取瓶として再利用	
第194図7	陶器	德利	備前	—	4.2	—	II区		
第194図8	焼締陶器	德利?	朝鮮王朝?	—	—	—	II区		
第194図9	陶器	瓶	備前	5.0	—	—	II区		
第194図11	瓦質土器	釜	在地	—	—	—	II区		
第194図12	瓦質土器	鉢	在地	—	20.0	—	II区		

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第194図13	陶器 播鉢	備前	29.5	—	—	Ⅱ区		
第194図14	陶器 播鉢	備前	30.5	—	—	Ⅱ区		
第194図15	瓦質土器 鉢	在地	32.0	—	—	Ⅱ区		
第194図16	瓦質土器 火鉢	在地	41.0	—	—	Ⅱ区		
第194図17	瓦質土器 火鉢	在地	41.6	—	—	Ⅱ区		
第194図18	瓦質土器 鍋	在地	44.0	—	—	Ⅱ区		

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(土製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	4.8	幅	1.8	穴径	0.8				
第139図10	円盤状土製品	土師質	—								SK006		
第187図7	土錘	土製	全体	長さ	4.8	幅	1.8	穴径	0.8		47層		
第191図1	人形	磁器	破片								7層		18
第194図10	仏像	土製	破片								Ⅱ区		18

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(石製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	高さ	穴径	長さ	穴径				
第132図6	砥石	結晶片岩	破片	長さ	1.6	幅	5.6	長さ	18.5	217.0	SK003		
第135図	石臼	安山岩	全体	径	31.0	高さ	11.5				SK004		
第147図19	砥石	結晶片岩	破片	長さ	2.6	幅	6.6	長さ	19.5	224.0	SK010		
第149図15	石臼	安山岩	破片								SK011		
第149図16	砥石	結晶片岩	破片	長さ	4.0	幅	7.5	長さ	16.6	665.0	SK011		
第171図	無縫塔(中台)	凝灰岩	全体	高さ	18.8	幅	46.0				SE028		17
第191図7	硯	堆積岩	破片								7層		

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(金属製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	縦	横	厚さ	穴径	長さ				
第177図	椀型滓	鉄	破片	縦	13.2	横	14.2	厚さ	6.2	1450	SX030		
第187図8	不明	金属製	破片	長さ	6.5	幅	1.4	穴径	0.5		47層		17
第188図18	不明	銅製	全体	縦	1.5	横	1.5	長さ	2.2		45層		17
第192図21	不明	銅	全体	縦	1.5	横	1.45	長さ	2.2	16.0	7層		18

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(瓦)

挿図No.	器種	部位	寸法(単位cm)						遺構名	備考	図版No.	
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ				
第132図4	埴	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	3.1		SK003		
第132図5	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.6		SK003		
第136図3	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.6		SK004		
第147図18	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	1.8		SK010		
第186図1	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	厚さ	2.2		SP042		

## 第9次調査区Ⅱ区遺物観察表(銭貨)

挿図No.	銭貨名	初鑄造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第128図	熙寧元寶	1068	北宋	2.5	2.4	篆書	SD001-1・2		
第130図	皇宋通寶	1038	北宋	2.8	2.5	真書	SD002		
第162図	元豐通寶	1078	北宋	1.9	2.4	行書	SK023		
第172図1	景祐元寶	1034	北宋		2.5	真書	SE028		
第172図2	元豐通寶	1078	北宋		2.4	行書	SE028		
第172図3	皇宋通寶	1038	北宋		2.4	篆書	SE028		
第183図	皇宋通寶?	1038	北宋	2.1	2.4	真書	SX033		
第195図1	景德元寶	1004	北宋	2.0	2.4	真書	14~67層		
第195図2	元豐通寶	1078	北宋	2.7	2.4	行書	7層		
第195図3	咸平元寶	998	北宋	2.0	2.4	真書	7層		
第195図4	治平元寶	1064	北宋	2.6	2.4	篆書	7層		
第195図5	至和元寶	1054	北宋	1.4	2.4	真書	7層		
第195図6	元祐通寶	1086	北宋	1.4	2.4	篆書	Ⅱ区		
第195図7	皇宋通寶	1038	北宋	1.9	2.4	篆書	Ⅱ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物觀察表(土器・陶磁器類①)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第202図	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SD001	
第203図1	白磁	皿	中国	11.0	5.0	3.1	SD002	
第203図2	陶器	掃鉢	備前	31.0	—	—	SD002	
第205図1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	6.4	—	SD004	
第205図2	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	—	SD004	
第205図3	陶器	掃鉢	備前	24.0	—	—	SD004	
第206図1	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SD005	
第206図2	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SD005	
第206図3	瓦質土器	鉢	在地	25.0	—	—	SD005	
第207図	京都系土師器	坏	在地	12.0	—	—	SD006	
第208図1	土師質土器	小皿	在地	7.6	6.5	1.2	SK009	
第208図2	土師質土器	小皿	在地	8.2	7.2	1.1	SK009	
第208図3	土師質土器	小皿	在地	9.0	7.6	1.3	SK009	
第209図	陶器	壺	備前	—	10.0	—	SK010	
第211図1	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.3	SK011	
第211図2	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	SK011	
第211図3	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.2	SK011	
第211図4	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SK011	
第211図5	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SK011	
第211図6	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	2.2	SK011	
第211図7	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.2	SK011	
第211図8	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.5	SK011	
第211図9	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	2.1	SK011	
第211図10	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.5	SK011	
第211図11	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.3	SK011	
第211図12	京都系土師器	皿	在地	14.4	—	2.3	SK011	
第213図1	京都系土師器	皿	在地	11.5	—	2.3	SK012	
第213図2	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	2.0	SK012	
第213図3	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	SK012	
第213図4	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.0	SK012	
第213図5	土師質土器	坏	在地	—	10.0	—	SK012	
第215図1	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	2.6	SK013	
第215図2	陶器	壺	備前	—	11.8	—	SK013	
第216図1	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.6	SK014	
第216図2	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.5	SK014	
第216図3	京都系土師器	皿	在地	13.5	—	—	SK014	
第216図4	陶器	德利	備前	—	11.6	—	SK014	
第216図5	陶器	掃鉢	備前	30.0	—	—	SK014	
第216図6	陶器	壺	中国	—	—	—	SK014	褐釉
第218図1	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	—	SK016	
第218図2	京都系土師器	皿	在地	—	—	—	SK016	
第219図1	白磁	皿	中国	16.0	9.4	3.4	SK017	
第219図2	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.5	SK017	
第219図3	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SK017	
第219図4	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SK017	
第219図5	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.1	SK017	
第219図6	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SK017	
第219図7	京都系土師器	皿	在地	13.4	—	—	SK017	
第220図	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	—	—	SK017	
第222図1	瓦質土器	蓋	在地	11.0	—	4.0	SK019	
第222図2	京都系土師器	坏	在地	10.0	5.0	3.7	SK019	
第223図1	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SK020	
第223図2	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.1	SK020	
第223図3	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	2.1	SK020	
第225図1	磁器	皿	中国	—	—	—	SK021	19
第225図2	白磁	皿	中国	—	3.6	—	SK021	
第225図3	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	5.0	2.3	SK021	
第225図4	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SK021	
第225図5	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	SK021	
第225図6	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.5	SK021	
第225図7	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	2.5	SK021	
第225図8	陶器	壺	中国?	16.0	—	—	SK021	褐釉
第225図9	陶器	壺	備前	8.8	20.0	12.0	SK021	19
第225図10	陶器	掃鉢	備前	23.0	11.0	11.0	SK021	
第225図11	陶器	鉢	備前	18.2	—	—	SK021	
第225図12	陶器	壺	備前	—	—	—	SK021	
第226図1	瓦質土器	火鉢	在地	33.0	—	—	SK021	
第226図2	瓦質土器	火鉢	在地	39.0	—	—	SK021	
第227図1	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	—	SK022	
第227図2	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SK022	
第227図3	土師質土器	皿	在地	11.0	—	—	SK022	
第227図4	瓦質土器	火鉢?	在地	33.0	—	—	SK022	
第229図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.0	4.8	5.4	SK023	
第229図2	青磁	皿	中国	11.5	—	—	SK023	
第229図3	白磁?	皿	中国	11.6	4.5	2.8	SK023	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第229図4	白磁	皿	中国	11.6	6.5	2.9	SK023	
第229図5	青磁	盤	中国	—	12.0	—	SK023	
第229図6	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SK023	
第229図7	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SK023	
第229図8	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SK023	
第229図9	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SK023	
第229図10	京都系土師器	坏?	在地	12.0	—	—	SK023	
第229図11	陶器	壺	備前	18.0	—	—	SK023	
第229図12	瓦質土器	鉢	在地	31.0	—	5.7	SK023	
第229図14	陶器	不明	備前	—	10.0	—	SK023	
第231図1	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	—	SK024	
第231図2	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SK024	
第231図3	京都系土師器	皿	在地	9.6	—	1.9	SK024	
第231図4	京都系土師器	皿	在地	10.5	—	—	SK024	
第231図5	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	2.7	SK024	
第231図6	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SK024	
第231図7	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.4	SK024	
第231図8	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	—	SK024	
第232図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	—	—	SK025	
第232図2	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.5	SK025	
第232図3	京都系土師器	皿	在地	22.0	—	—	SK025	
第234図1	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.5	SK026	
第234図2	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SK026	
第234図3	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	SK026	
第234図4	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	—	SK026	
第236図1	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	2.0	SK027	
第236図2	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.5	SK027	
第236図3	京都系土師器	皿	在地	11.8	—	—	SK027	
第236図4	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SK027	
第236図5	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	—	SK027	
第236図6	土師質土器	鉢	在地	37.0	—	—	SK027	
第236図7	瓦質土器	火鉢	在地	41.0	37.0	—	SK027	
第238図1	青花	皿	中国(漳州窯)	10.8	—	—	SK028	
第238図2	瓦質土器	火鉢	在地	40.0	36.8	14.5	SK028	
第240図1	青花	小壺	中国	—	3.0	—	SK029	19
第240図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.0	5.4	2.4	SK029	
第240図3	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	—	—	SK029	
第240図4	青花	碗	中国(漳州窯)	12.6	—	—	SK029	
第240図5	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	SK029	
第240図6	白磁	碗?	中国	—	6.2	—	SK029	
第240図7	陶器	瓶	備前	—	6.6	—	SK029	
第240図8	青磁	碗	中国(龍泉窯)	13.0	5.6	4.7	SK029	19
第240図9	焼締陶器	德利	朝鮮王朝	—	13.0	—	SK029	
第240図10	陶器	甕	備前	—	—	—	SK029	
第240図11	陶器	播鉢	備前	—	—	—	SK029	
第240図12	陶器	播鉢	備前	14.0	—	—	SK029	
第240図13	陶器	播鉢	備前	32.0	13.0	12.0	SK029	
第240図14	瓦質土器	火鉢	在地	—	41.6	—	SK029	
第241図1	陶器	甕	備前	—	—	—	SK029	
第241図2	陶器	甕	備前	—	44.0	—	SK029	
第241図3	陶器	甕	備前	—	42.0	—	SK029	
第242図1	土師質土器	皿	在地	—	6.0	—	SK029	
第242図2	瓦質土器	火鉢	在地	32.0	—	—	SK029	
第242図3	京都系土師器	坏	在地	10.6	6.0	3.5	SK029	
第242図4	京都系土師器	坏	在地	10.5	—	—	SK029	
第242図5	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	2.4	SK029	
第242図6	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	SK029	
第242図7	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.4	SK029	
第242図8	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.3	SK029	
第242図9	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SK029	
第242図10	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SK029	
第242図11	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	3.0	SK029	
第244図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	14.0	—	—	SK030	
第244図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	3.1	SK030	
第244図3	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.8	—	SK030	
第244図4	白磁	皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030	
第244図5	白磁	皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030	
第244図6	白磁	皿	中国	14.0	9.0	2.9	SK030	
第244図7	白磁	皿	中国	14.0	6.6	3.3	SK030	
第244図8	陶器	天目	瀬戸美濃	11.2	4.2	6.4	SK030	
第244図9	青磁	鉢	中国(龍泉窯)	22.0	—	—	SK030	
第244図10	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	—	SK030	
第244図11	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.4	SK030	
第244図12	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.5	SK030	

第9次調査区Ⅲ区遺物觀察表(土器・陶磁器類③)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第244図13	陶器	鉢	備前	15.0	—	8.2	SK030		
第244図14	陶器	搦鉢	備前	—	14.0	—	SK030		
第247図1	白磁	皿	中国	10.6	—	—	SE031		
第247図2	緑釉陶器	小壺	不明	—	—	—	SE031		
第247図3	土師質土器	坏	在地	12.0	8.0	3.2	SE031		
第247図4	土師質土器	小皿	在地	8.8	7.0	0.9	SE031		
第247図5	土師質土器	小皿	在地	9.5	8.0	1.1	SE031		
第247図6	土師質土器	坏	在地	11.6	8.0	3.3	SE031		
第247図7	須恵器	甕	龜山焼?	—	—	—	SE031		
第247図8	土師質土器	鍋	在地	—	20.0	—	SE031		
第249図1	土師質土器	坏	在地	12.6	9.0	2.3	SE032		
第249図2	土師質土器	坏	在地	—	10.0	—	SE032		
第249図3	土師質土器	小皿	在地	8.0	6.6	1.6	SE032		
第249図4	瓦質土器	搦鉢	在地	23.0	—	—	SE032		
第250図1	青花	碗	中国(漳州窯)	—	5.0	—	SE033	井筒内	
第250図2	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SE033	井筒内	
第250図3	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SE033	井筒内	
第250図4	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	SE033	井筒内	
第250図5	京都系土師器	皿	在地	11.0	2.4	—	SE033	井筒内	
第250図6	京都系土師器	皿	在地	11.5	2.1	—	SE033	井筒内	
第250図7	京都系土師器	皿	在地	12.0	2.4	2.4	SE033	井筒内	
第250図8	陶器	瓶	備前	5.6	—	—	SE033	井筒内	
第250図10	京都系土師器	坏	在地	11.0	6.0	3.5	SE033	井筒内	
第251図1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	SE033	掘方内	
第251図2	京都系土師器	小皿	在地	5.7	—	1.6	SE033	掘方内	
第251図3	京都系土師器	小皿	在地	6.0	—	1.8	SE033	掘方内	
第251図4	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SE033	掘方内	
第251図5	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.5	SE033	掘方内	
第251図6	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	SE033	掘方内	
第251図7	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.5	SE033	掘方内	
第251図8	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.5	SE033	掘方内	
第251図9	京都系土師器	皿	在地	13.6	—	2.5	SE033	掘方内	
第251図10	京都系土師器	皿	在地	17.0	—	2.8	SE033	掘方内	
第251図11	京都系土師器	皿	在地	17.0	—	2.1	SE033	掘方内	
第253図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	18.6	10.0	4.1	SE033		
第253図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	—	4.0	—	SE033		
第253図3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	15.0	—	—	SE033		
第253図4	青磁	碗	中国(龍泉窯)	12.6	5.6	5.6	SE033		
第253図5	白磁	皿	中国	11.5	6.6	2.2	SE033		
第253図6	陶器	搦鉢	備前	25.0	—	—	SE033		
第253図7	陶器	搦鉢	備前	—	11.0	—	SE033		
第253図8	陶器	搦鉢	備前	30.0	13.0	13.4	SE033		
第253図9	陶器	茶入	備前	6.0	—	—	SE033		
第253図10	瓦質土器	鉢	在地	33.0	—	—	SE033		
第253図11	瓦質土器	鉢	在地	42.0	—	—	SE033		
第254図1	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	41.0	14.8	SE033		
第255図1	京都系土師器	皿	在地	8.5	—	2.0	SE033		
第255図2	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.2	SE033		
第255図3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	SE033		
第255図4	京都系土師器	皿	在地	10.9	—	2.3	SE033		
第255図5	京都系土師器	皿	在地	10.7	—	2.3	SE033		
第255図6	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	2.4	SE033		
第255図7	京都系土師器	皿	在地	12.3	—	2.6	SE033		
第255図8	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.8	SE033		
第255図9	京都系土師器	皿	在地	12.4	—	2.2	SE033		
第255図10	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.5	SE033		
第255図11	京都系土師器	皿	在地	16.2	—	3.3	SE033		
第257図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.3	—	—	SX034		19
第257図2	陶器	碗	朝鮮王朝	—	—	—	SX034	彫三島	19
第257図3	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	—	—	SX034		
第257図4	白磁	皿	中国	—	8.5	—	SX034		
第257図5	白磁	皿	中国	—	6.0	—	SX034		
第257図6	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.2	SX034		
第257図7	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	SX034		
第257図8	陶器	甕	備前	—	—	—	SX034		
第257図9	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	3.8	SX034		
第257図10	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SX034		
第257図11	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.4	SX034		
第257図12	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.2	SX034		
第257図13	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.6	SX034		
第257図14	京都系土師器?	皿	在地	19.0	—	—	SX034		
第257図15	土師質土器	鍋	在地	23.0	—	—	SX034		
第257図16	陶器	搦鉢	備前	28.8	—	—	SX034		
第257図17	陶器	不明	備前?	—	18.0	—	SX034		
第257図18	瓦質土器	鉢	在地	37.0	—	—	SX034		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類④)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第257図20	土師質土器	取瓶	在地	3.6	—	1.9	SX034		
第257図21	土師質土器	取瓶	在地	8.5	—	—	SX034		
第257図22	土師質土器	取瓶	在地	8.0	—	3.7	SX034		
第259図1	青花	皿	中国(漳州窯)	12.0	—	—	SX035		
第259図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	SX035		
第259図3	土師質土器	小皿	在地	7.3	6.5	1.3	SX035		
第259図4	土師質土器	皿	在地	—	8.0	—	SX035		
第259図5	土師質土器	皿	在地	12.6	8.6	2.3	SX035		
第259図6	土師質土器	皿	在地	11.0	8.0	2.5	SX035		
第259図7	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	2.2	SX035		
第259図8	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.0	SX035		
第259図9	京都系土師器	皿	在地	10.5	—	2.1	SX035		
第259図10	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SX035		
第259図11	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.4	SX035		
第259図12	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SX035		
第259図13	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.3	SX035		
第259図14	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.3	SX035		
第259図15	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.1	SX035		
第259図16	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.3	SX035		
第259図17	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.2	SX035		
第259図18	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.2	SX035		
第259図19	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.2	SX035		
第259図20	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.2	SX035		
第259図21	京都系土師器	皿	在地	9.6	—	—	SX035	1層下層	
第259図22	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SX035	1層下層	
第259図23	土師質土器	皿	在地	12.0	6.0	3.5	SX035	1層下層	
第259図24	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.3	SX035	1層下層	
第259図25	陶器	掃鉢	備前	32.0	—	—	SX035		
第259図26	陶器	掃鉢	備前	21.0	12.0	9.0	SX035		
第259図27	土師質土器	甕	在地	23.0	—	—	SX035		
第259図28	陶器	瓶	備前	—	—	4.0	SX035		
第259図29	瓦質土器	火鉢	在地	35.0	27.0	6.5	SX035		
第259図30	陶器	甕	備前	—	—	—	SX035		
第260図1	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	2.1	SX035	下層(2層)	
第260図2	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	—	SX035	下層(2層)	
第260図3	土師質土器	皿	在地	—	9.0	—	SX035	下層(2層)	
第260図4	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	SX035	下層(2層)	
第260図5	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.1	SX035	下層(2層)	
第260図6	京都系土師器	皿	在地	15.0	—	—	SX035	下層(2層)	
第260図7	陶器	掃鉢	備前	33.0	—	—	SX035	下層(2層)	
第260図8	土師質土器	鉢	在地	27.0	—	—	SX035	下層(2層)	
第262図1	白磁	皿	中国	13.8	—	—	SP049	口禿	
第262図3	陶器	掃鉢	備前	—	—	—	SP041		
第262図4	陶器	水屋甕	備前	—	—	—	SP043		
第262図5	瓦質土器	鉢	在地	25.0	—	—	SP079		
第262図7	瓦質土器	火鉢	在地	33.0	—	—	SP067		
第262図8	陶器	水屋甕	備前	—	—	—	SP064		
第263図1	土師質土器	皿	在地	—	6.0	—	SP074		
第263図2	京都系土師器	皿	在地	8.0	—	—	SP040		
第263図3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	—	SP067		
第263図4	京都系土師器	皿	在地	9.4	—	—	SP054		
第263図5	京都系土師器	皿	在地	9.5	—	—	SP054		
第263図6	京都系土師器	皿	在地	9.5	—	2.1	SP063		
第263図7	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	—	SP063		
第263図8	京都系土師器	皿	在地	10.0	—	—	SP078		
第263図9	京都系土師器	皿	在地	10.4	—	—	SP084		
第263図10	京都系土師器	坏	在地	11.0	—	—	SP078		
第263図11	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP083		
第263図12	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP071		
第263図13	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP062		
第263図14	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP067		
第263図15	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	—	SP047		
第263図16	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.9	SP052		
第263図17	京都系土師器	皿	在地	11.2	—	—	SP067		
第263図18	京都系土師器	皿	在地	11.4	—	2.4	SP049		
第263図19	京都系土師器	皿	在地	11.5	—	—	SP055		
第263図20	京都系土師器	皿	在地	11.5	—	—	SP063		
第263図21	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SP074		
第263図22	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SP067		
第263図23	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SP085		
第263図24	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SP076		
第263図25	京都系土師器	皿	在地	12.2	—	2.6	SP058		
第263図26	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	2.2	SP057		
第263図27	京都系土師器	皿	在地	12.0	—	—	SP052		
第263図28	京都系土師器	皿	在地	12.5	—	—	SP048		



第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑤)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	器高			
第263図29	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	—	SP064	
第263図30	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.4	SP082	
第263図31	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SP049	
第263図32	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	SP048	
第263図33	京都系土師器	皿	在地	13.2	—	—	SP053	
第263図34	京都系土師器	皿	在地	14.2	—	—	SP067	
第263図35	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.3	SP046	
第263図36	京都系土師器	皿	在地	17.8	—	—	SP074	
第265図1	陶器	碗	朝鮮王朝	—	5.6	—	51層	
第265図2	陶器	壺	中国	—	12.0	—	51層	褐釉
第266図1	京都系土師器	小皿	在地	5.2	—	1.6	48層	
第266図2	瓦質土器	鉢	在地	40.0	—	—	48層	
第267図1	青花	水柱	中国(景德鎮窯)	—	—	—	36~39層	
第267図2	青磁	盤	中国(龍泉窯)	29.0	14.6	—	36~39層	
第267図3	磁器	碗	中国	14.0	—	—	36~39層	
第267図4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	—	—	36~39層	
第267図5	青花	皿	中国(漳州窯)	—	4.4	—	36~39層	
第267図6	青花	皿	中国(漳州窯)	12.2	—	—	36~39層	
第267図7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	15.0	—	—	36~39層	
第267図8	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	6.0	3.4	36~39層	
第267図9	磁器	皿	中国南部	—	3.5	—	36~39層	翡翠釉
第267図10	磁器	搗鉢	備前	20.5	8.5	6.0	36~39層	
第267図11	瓦質土器	鉢	在地	25.0	12.6	8.9	36~39層	
第267図12	瓦質土器	火鉢	在地	—	26.0	—	36~39層	
第267図13	陶器	搗鉢	備前	33.0	—	—	36~39層	
第268図1	陶器	天目	瀬戸美濃	12.0	—	—	34層	
第268図2	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	34層	
第269図1	青花	盤	中国(漳州窯)	—	12.5	—	19~21層	
第269図2	青花	皿	中国(漳州窯)	—	2.5	—	19~21層	
第269図3	青花	皿	中国(漳州窯)	12.5	7.4	2.7	19~21層	
第269図4	青花	皿	中国(漳州窯)	18.0	—	—	19~21層	
第269図5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.5	—	19~21層	
第269図6	青花	香炉	中国(景德鎮窯)	—	4.4	—	19~21層	
第269図7	磁器	碗	中国	—	—	—	19~21層	五彩
第269図8	陶器	鉢	中国南部?	—	5.5	—	19~21層	
第269図9	京都系土師器	皿	在地	10.8	—	1.7	19~21層	取瓶として再利用
第269図10	陶器	茶入	備前	—	—	—	19~21層	
第269図11	瓦質土器	羽釜	在地	—	—	—	19~21層	
第270図1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	2.6	25層	
第270図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	3.0	25層	
第270図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	2.8	25層	
第270図4	青花	碗	中国(漳州窯)	12.0	—	—	25層	
第270図5	青花	碗?	中国(漳州窯)	—	5.6	—	25層	
第270図6	青花	皿	中国(漳州窯)	12.0	6.8	2.6	25層	
第270図7	磁器	碗?	中国南部	—	—	—	25層	翡翠釉
第270図8	磁器	水注	中国	—	—	—	25層	瑠璃釉
第270図9	磁器	菊皿	中国南部	—	—	—	25層	翡翠釉
第270図10	青磁	皿	中国(龍泉窯)	10.6	3.0	2.7	25層	
第270図11	青花	鉢	中国(漳州窯)	28.6	—	—	25層	
第270図12	磁器	碗?	中国南部	—	—	—	25層	翡翠釉
第270図13	陶器	碗	朝鮮王朝	—	—	—	25層	象嵌技法
第270図14	陶器	天目	瀬戸美濃	—	4.2	—	25層	
第270図15	白磁	皿	中国	11.0	—	—	25層	
第270図16	白磁	皿	中国	—	10.0	—	25層	
第270図17	白磁	皿	中国	12.4	7.5	2.6	25層	
第270図18	白磁	皿	中国	11.6	—	—	25層	
第270図19	白磁	皿	中国	11.2	7.0	3.0	25層	
第270図20	陶器	丸皿	瀬戸美濃	10.0	—	—	25層	
第270図21	磁器	皿	不明	11.0	—	—	25層	
第271図1	焼締陶器	鉢	中国南部	25.0	—	—	25層	
第271図2	土師質土器	皿	在地	9.0	5.0	1.9	25層	
第271図3	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	1.9	25層	灯明皿
第271図4	陶器	搗鉢	備前	28.0	—	—	25層	
第271図5	陶器	搗鉢	備前	28.0	13.0	14.8	25層	
第271図6	陶器	壺	中国南部	—	—	—	25層	褐釉
第273図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.2	4.6	5.9	10~25層	
第273図2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.0	—	—	10~25層	
第273図3	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.8	—	10~25層	
第273図4	青花	碗	中国(漳州窯)	—	5.0	—	10~25層	
第273図5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.2	—	10~25層	
第273図6	青花	皿	中国(漳州窯)	—	5.6	—	10~25層	
第273図7	陶器	皿	肥前	12.0	—	—	10~25層	唐津系溝縁皿、1600~1630年
第273図8	青花	碗	中国(漳州窯)	—	4.6	—	10~25層	
第273図9	白磁	碗	朝鮮王朝	—	4.6	—	10~25層	
第273図10	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.5	—	10~25層	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑥)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第273図11	白磁	碗	中国	-	4.6	-	10~25層		
第273図12	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	6.0	-	10~25層		
第273図13	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	-	-	-	10~25層		
第273図14	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	-	-	-	10~25層		
第273図15	青花	皿	中国(漳州窯)	12.0	7.0	2.9	10~25層		
第273図16	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.8	2.5	10~25層		
第273図17	青花	皿	中国(漳州窯)	14.4	9.0	3.8	10~25層		
第273図18	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.2	8.0	2.6	10~25層		
第273図19	青花	皿	中国(漳州窯)	13.0	7.0	2.5	10~25層		
第273図20	白磁	皿	白磁	12.0	-	-	10~25層		
第273図21	白磁	皿	白磁	12.4	7.0	3.0	10~25層		
第273図22	白磁	皿	白磁	13.4	-	-	10~25層		
第273図23	白磁	皿	白磁	16.4	8.5	3.8	10~25層		
第273図24	陶器	瓶	中国南部	-	6.8	-	10~25層	緑釉	
第273図25	陶器	瓶	中国南部	-	6.0	-	10~25層	緑釉	
第273図26	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	6.0	2.4	3.9	10~25層		
第273図27	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	2.2	-	10~25層		
第273図28	陶器	瓶	中国南部	-	-	-	10~25層	緑釉	
第273図29	陶器	瓶	中国南部	4.2	-	-	10~25層	緑釉	
第273図30	磁器	小皿	中国南部	-	4.8	-	10~25層	翡翠釉	
第273図31	陶器	天目	瀬戸美濃	12.0	-	-	10~25層		
第273図32	青花	皿	中国(漳州窯)	-	3.6	-	10~25層		
第273図33	白磁	小杯	伊万里	-	2.4	-	10~25層	1630~1650年	
第273図34	青花	小壺	中国(漳州窯)	-	-	-	10~25層		20
第273図35	青磁	瓶	中国(龍泉窯)	-	-	-	10~25層		
第273図36	陶器	壺	不明	-	5.0	-	10~25層		
第274図1	陶器	壺	備前	-	-	-	10~25層		
第274図2	陶器	卸皿	瀬戸美濃	-	-	-	10~25層		
第274図3	焼締陶器	小壺	中国?	5.2	-	-	10~25層		20
第274図4	陶器	德利	備前	-	6.0	-	10~25層		
第274図5	陶器	播鉢	備前	26.0	-	-	10~25層		
第274図6	陶器	播鉢	備前	22.0	10.0	9.4	10~25層		
第274図7	焼締陶器	德利	朝鮮王朝	-	15.0	-	10~25層		
第274図8	土師質土器	取瓶	在地	6.0	-	2.8	10~25層		
第276図1	青花	皿	中国(漳州窯)	-	11.1	-	7層		
第276図2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	7.0	2.3	7層		
第276図3	青花	皿	中国(漳州窯)	15.0	-	-	7層		
第276図4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	9.6	-	7層		
第276図5	青花	盤	中国(景德鎮窯)	-	19.0	-	7層		
第276図6	青花	皿	中国(漳州窯)	19.0	-	-	7層		
第276図7	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	7層		
第276図8	青花	皿	中国(漳州窯)	-	5.8	-	7層		
第276図9	青花	皿	中国(景德鎮窯)	11.4	5.2	3.0	7層		
第276図10	陶器	皿	瀬戸美濃?	15.0	-	-	7層		
第276図11	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.0	8.0	3.1	7層		
第276図12	青磁	菊皿	中国(龍泉窯)	10.0	-	-	7層		
第276図13	白磁	皿	中国	-	7.5	-	7層		
第276図14	白磁	皿	中国	12.6	5.2	2.1	7層		
第276図15	白磁	皿	中国	14.0	-	-	7層		
第276図16	磁器	小杯	不明	5.8	3.0	4.0	7層		
第276図17	白磁	水注	中国	-	-	-	7層		
第276図18	磁器	小皿	中国南部	-	-	-	7層	翡翠釉	
第276図19	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	-	-	-	7層		
第276図20	磁器	碗	中国	-	4.0	-	7層	茶釉	
第276図21	青花	小杯	中国(景德鎮窯)	-	2.8	-	7層		
第276図22	白磁	皿	中国	13.0	8.8	3.0	7層		
第276図23	青磁	碗	中国	16.0	-	-	7層		
第276図26	青磁	皿	中国	11.5	6.0	2.8	7層		21
第277図1	陶器	皿	肥前(唐津)	-	5.2	-	7層		
第277図2	陶器	皿	肥前(唐津)	-	4.2	-	7層		
第277図3	陶器	壺	不明	-	-	-	7層		
第277図4	陶器	角皿	上野高取	-	-	-	7層		
第277図5	陶器	角皿	志野	-	-	-	7層	1590~1610年	
第277図6	陶器	天目	瀬戸美濃	-	4.8	-	7層		
第277図7	陶器	皿	瀬戸美濃	-	8.0	-	7層		
第277図8	陶器	鉢	不明	14.0	-	-	7層		
第277図9	染付	香炉	肥前	4.2	-	-	7層	瑠璃釉 1650~1660年代	
第277図10	須恵器	壺	不明	-	-	-	7層		
第277図11	陶器	小壺	備前	-	-	-	7層		21
第277図12	陶器	碗	朝鮮王朝	-	4.6	-	7層		
第277図13	陶器	茶入	肥前(唐津)?	-	5.0	-	7層		
第277図14	陶器	瓶	不明	-	7.2	-	7層		
第277図15	陶器	瓶	備前	-	-	-	7層		
第277図16	陶器	建水?	備前	-	8.6	-	7層		
第277図18	陶器	小壺	備前	9.4	-	-	7層		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土器・陶磁器類⑦)

挿図No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第277図19	陶器	鉢	備前	17.0	—	—	7層		
第277図20	陶器	播鉢	備前	26.5	—	—	7層		
第277図21	陶器	鉢	備前	14.0	—	—	7層		
第277図22	陶器	瓶	不明	—	—	—	7層		
第277図23	陶器	播鉢	備前	28.0	—	—	7層		
第277図24	陶器	播鉢	備前	—	11.0	—	7層		
第277図25	陶器	播鉢	備前	—	12.0	—	7層		
第278図1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	10.0	—	—	Ⅲ区		
第278図2	染付	碗	肥前	—	4.0	—	Ⅲ区		
第278図3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.5	—	Ⅲ区		
第278図4	青花	皿	中国(漳州窯)	14.6	—	—	Ⅲ区		
第278図5	青花	皿	中国(漳州窯)	13.2	—	—	Ⅲ区		
第278図6	磁器	皿	中国	—	—	—	Ⅲ区	五彩	21
第278図7	磁器	皿	中国	—	—	—	Ⅲ区	五彩	21
第278図8	磁器	菊皿	中国南部	—	—	—	Ⅲ区	翡翠釉	
第278図9	磁器	菊皿	中国南部	6.0	—	—	Ⅲ区	翡翠釉	
第278図10	磁器	菊皿	中国南部	6.6	—	—	Ⅲ区	翡翠釉	
第278図11	磁器	小壺	不明	—	2.4	—	Ⅲ区		
第278図12	磁器	小杯	不明	5.6	—	—	Ⅲ区		
第278図13	染付	小杯	伊万里	6.2	—	—	Ⅲ区		
第278図14	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.0	—	Ⅲ区		
第278図15	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	Ⅲ区		
第278図16	陶器	向付	志野	—	—	—	Ⅲ区		
第278図17	青花	器台	中国(景德鎮窯)	—	—	—	Ⅲ区		21
第278図18	青磁	器台	中国(龍泉窯)	—	—	—	Ⅲ区		21
第278図19	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	5.2	—	Ⅲ区		
第278図20	白磁	皿	中国	12.0	7.0	3.0	Ⅲ区		
第278図21	白磁	皿	中国	12.8	7.0	3.2	Ⅲ区		
第278図22	白磁	碗	中国南部	—	7.0	—	Ⅲ区		
第278図23	陶器	壺	中国南部	—	11.4	—	Ⅲ区	褐釉	
第278図24	陶器	皿	肥前(唐津)	13.0	—	—	Ⅲ区	溝緑皿 1600~1630年	
第278図25	陶器	香炉?	不明	5.0	—	—	Ⅲ区		
第278図26	青花	皿	中国(景德鎮窯)	—	7.2	—	Ⅲ区		
第278図27	磁器	不明	中国	—	—	—	Ⅲ区	瑠璃釉	
第278図28	陶器	皿	瀬戸美濃	—	5.6	—	Ⅲ区		
第278図29	陶器	碗	瀬戸美濃	—	6.6	—	Ⅲ区		
第278図30	陶器	天目	瀬戸美濃	11.2	—	—	Ⅲ区		
第278図31	陶器	碗	肥前(唐津)	—	4.4	—	Ⅲ区	1590~1610年	
第278図32	陶器	碗	朝鮮王朝	12.6	—	—	Ⅲ区		
第278図33	陶器	碗	朝鮮王朝	13.0	—	—	Ⅲ区		
第278図34	陶器	皿	肥前(唐津)	—	5.0	—	Ⅲ区		
第278図35	陶器	碗	肥前(唐津)	—	6.0	—	Ⅲ区	胎土目 1590~1610年	
第278図36	陶器	瓶	備前	—	8.0	—	Ⅲ区		
第278図37	陶器	鉢	備前	—	9.6	—	Ⅲ区		
第278図38	土師質土器	取瓶	在地	4.0	—	2.2	Ⅲ区		
第278図40	陶器	播鉢	備前	—	12.4	—	Ⅲ区		
第278図41	陶器	壺	中国南部	—	19.6	—	Ⅲ区	褐釉	

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(土製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法(単位cm)						重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				口径	幅	長さ	高さ	厚さ	幅				
第257図23	鞆羽口	土製	全体	口径	3.5	幅	6.0	長さ	5.8	—	SX034		
第274図9	鞆羽口	土製	破片	幅	4.8	長さ	4.2				10~25層		
第274図10	土錘	土製	全体	幅	1.0	長さ	4.8				10~25層		
第276図24	人形	磁器	全体	高さ	6.0	幅	2.8	厚さ	2.4	—	7層		20
第276図25	人形	土製品	破片	高さ	3.8	幅	4.4	厚さ	2.0	—	7層		20
第277図17	土錘	土製品	全体	幅	2.2	長さ	6.6				7層		
第278図39	土錘	土製品	全体	幅	1.2	長さ	5.5				Ⅲ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (石製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.
				厚さ	幅	長さ	径	高さ	厚さ				
第215図3	砥石	堆積岩	破片	厚さ	5.5	幅	5.5	長さ	8.7	—	SK013		
第216図7	砥石	堆積岩	破片	厚さ	5.5	幅	3.8	長さ	7.5	—	SK014		
第216図8	石臼	安山岩	破片	径	42.0					—	SK014		
第226図4	鞆羽口		破片							—	SK021		
第242図15	茶臼	輝緑凝灰岩	破片							—	SK029	赤間石	
第242図16	石臼	安山岩	破片							—	SK029		
第244図15	砥石	砂岩	破片	厚さ	4.0	幅	4.4	長さ	3.9	—	SK030		
第254図2	石臼	安山岩	破片							—	SE033		
第257図19	石臼	安山岩	破片	径	30.0					—	SX034		
第260図10	凹み石	凝灰岩	破片							—	SX035		
第262図2	石臼	安山岩	破片							—	SP054		
第269図12	環状石	軽石	全体	径	4.2	厚さ	1.5			9.2	19~21層	用途不明	
第269図13	砥石	頁岩	破片	横	6.3	厚さ	0.8			—	19~21層		
第171図7	硯	輝緑凝灰岩	破片	厚さ	1.4					—	25層	赤間石	
第171図8	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	1.9	幅	4.5	長さ	12.2	—	25層		
第171図9	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	1.8	幅	4.1	長さ	10.3	130.6	25層		
第274図11	砥石	石製品	破片	幅	2.6	長さ	3.2			5.7	10~25層		
第274図12	砥石	結晶片岩	破片	幅	1.9	長さ	9.4			29.7	10~25層		
第274図13	硯	泥岩	破片	厚さ	1.1	幅	5.5	長さ	10.8	100.3	10~25層		
第274図14	茶臼	安山岩	破片							—	10~25層		
第275図3	不明	凝灰岩	破片	高さ	9.0					—	7~25層		
第279図6	不明	頁岩	全体	長さ	4.3	径	2.5			—	Ⅲ区		
第279図7	五輪塔 空風輪	凝灰岩	全体	高さ	21.5	径	17.0			—	Ⅲ区		
第279図8	石臼	安山岩	破片	径	19.0					—	Ⅲ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (金属製品)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.
				厚さ	幅	長さ	径	高さ	厚さ				
第225図13	不明	鉄製	破片	厚さ	0.3	幅	1.3	長さ	10.2	—	SK021		
第229図13	不明	青銅製	破片	厚さ	0.5	幅	2.5	長さ	3.8	—	SK023		
第229図15	不明	鉄製	破片	厚さ	0.5	幅	1.3	長さ	10.0	—	SK023		19
第264図1	分銅	銅製	全体	高さ	0.8	径	1.6			16.02	SP044	太鼓型	19
第264図2	分銅	銅製	全体	縦	3.3	横	2.4	厚さ	1.5	69.35	SP044	繭型	
第272図1	メダイ?	鉛製	全体	縦	1.9	横	1.2	厚さ	0.4	4.10	25層		
第272図2	鉄砲弾	鉛製	全体	径	1.2					11.90	25層		
第272図3	権	銅製	全体	高さ	2.8	径	2.8			87.12	25層		20
第275図1	不明	青銅製	全体	高さ	2.1	径	14.5			—	7~25層		
第279図1	小柄	青銅製	柄のみ	長さ	8.4	幅	1.3	厚さ	0.4	—	Ⅲ区		21
第279図2	鍵	青銅製	全体	長さ	7.5	幅	0.9	厚さ	0.5	—	Ⅲ区		21
第279図3	鍵	青銅製	破片	長さ	6.6	幅	1.0	厚さ	0.9	—	Ⅲ区		21
第279図4	不明	青銅製	破片							—	Ⅲ区		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (瓦)

挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						遺構名	備考	図版 No.	
				長さ	幅	厚さ	径	高さ	厚さ				
第222図3	雁振瓦		破片	長さ	28.5	幅	—	厚さ	1.6	—	SK019		
第226図3	丸瓦		破片	長さ	16.5	幅	14.5	厚さ	3.0	—	SK021		
第229図16	平瓦		完形	径	7.2	厚さ	2.2			—	SK023	円板状加工品	
第242図12	軒平瓦		破片							—	SK029		
第242図13	丸瓦		破片	厚さ	2.1					—	SK029		
第242図14	雁振瓦		破片	厚さ	2.0					—	SK029		
第250図9	雁振瓦		破片	厚さ	2.1					—	SE033		
第254図3	雁振瓦		破片	厚さ	2.5					—	SE033		
第254図4	丸瓦		破片	厚さ	2.6					—	SE033		
第260図9	軒平瓦		破片	厚さ	2.5					—	SX035		
第262図6	雁振瓦		破片	厚さ	2.5					—	SP058		

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表 (その他)

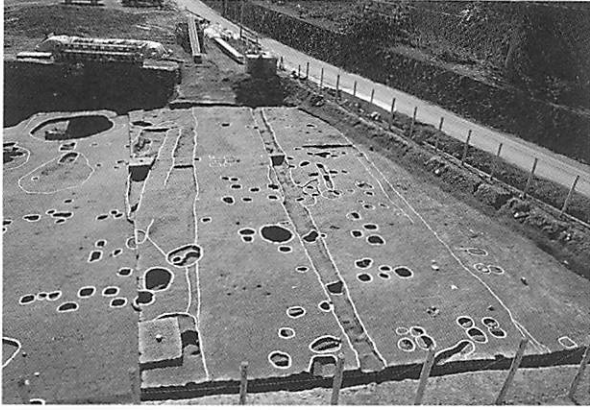
挿図No.	器種	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	高さ	径	厚さ	厚さ				
第275図2	不明	ガラス	破片							—	7~25層		
第279図5	不明	ガラス	破片							—	Ⅲ区		21

遺物観察表28 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅲ区遺物観察表(銭貨)

挿図No.	銭貨名	初製造年	国・王朝名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	遺構名	備考	図版 No.
第261図	不明	不明	不明			不明	SX035		
第280図1	天聖元寶	1023	北宋			真書	7層		
第280図2	淳化元寶	990	北宋	2.3	2.4	真書	7層		
第280図3	洪武通寶	1368	明			真書	25層		
第280図4	紹聖元寶	1094	北宋	1.9	2.4	行書	7層		
第280図5	寛永通寶	1636	日本	2.4	2.4	真書	7層	古寛永	
第280図6	元豊通寶	1078	北宋	2.1	2.4	篆書	Ⅲ区		
第280図7	政和通寶	1111	北宋	2.8	2.4	篆書	7層		
第280図8	皇宋通寶?	1038	北宋			篆書	51層		
第280図9	元豊通寶	1078	北宋	2.1	2.4	篆書	Ⅲ区		
第280図10	元豊通寶	1078	北宋	2.9	2.4	行書	Ⅲ区		
第280図11	元豊通寶	1078	北宋		2.4	篆書	10~25層		
第280図12	不明	不明	不明			不明	25層		
第280図13	不明	不明	不明			不明	19層		
第280図14	熙寧重寶	1071	北宋	5.8	3.1	真書	Ⅲ区	折二銭	

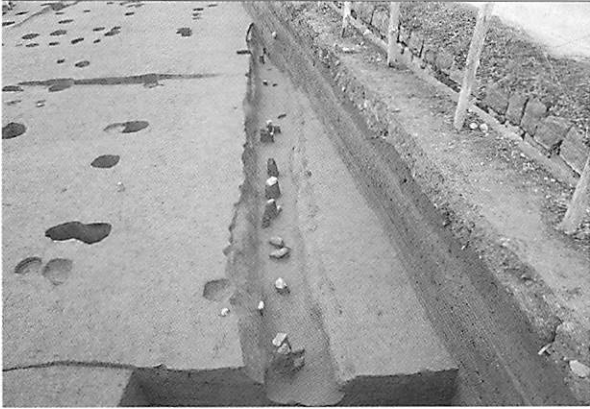
# 写 真 图 版



第22次調査区 北から



第22次調査区 東から



SD202



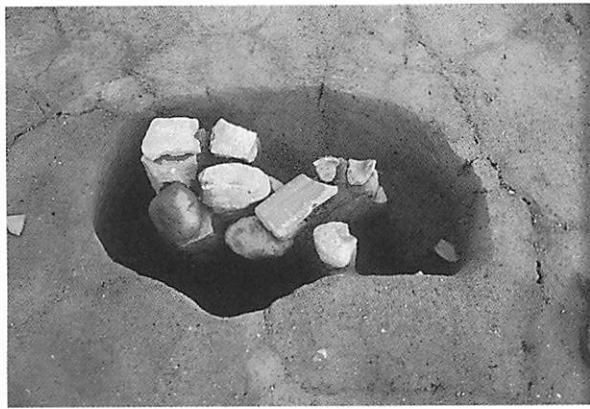
SD202土層



SK008



SK013



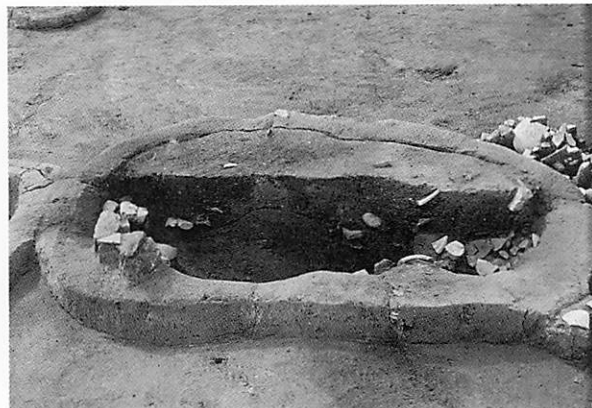
SK018



SK024



SK029



SK040



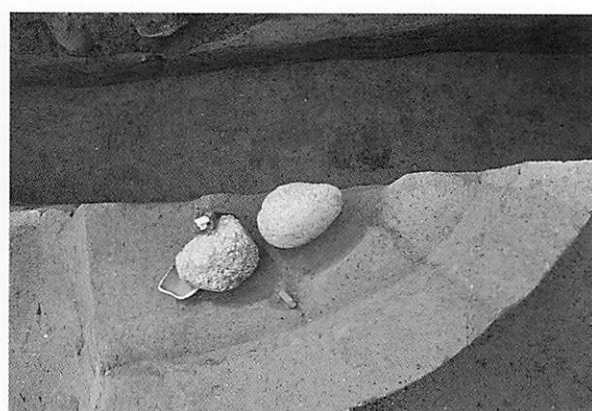
SK069



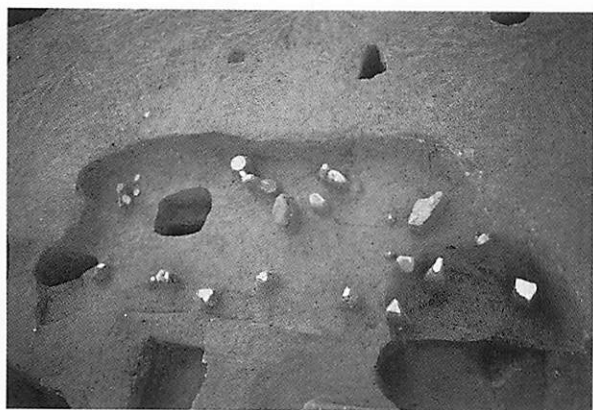
SK100



SK109



SK175



SK200

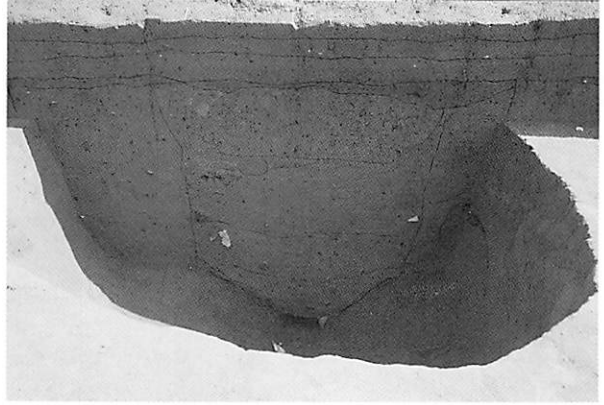


SK243





SE007 埴塙 (取瓶) 出土状況



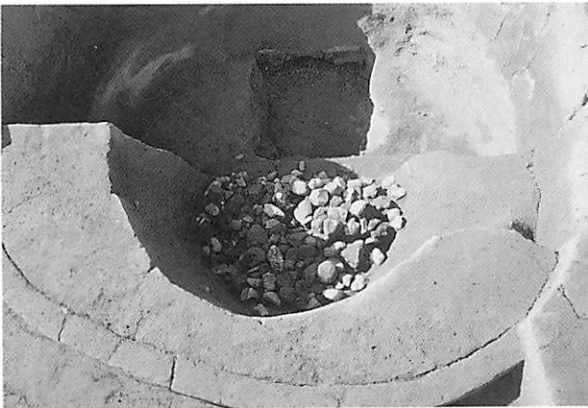
SE007



SE010



SE012



SE021・SE242



SE021・SE242



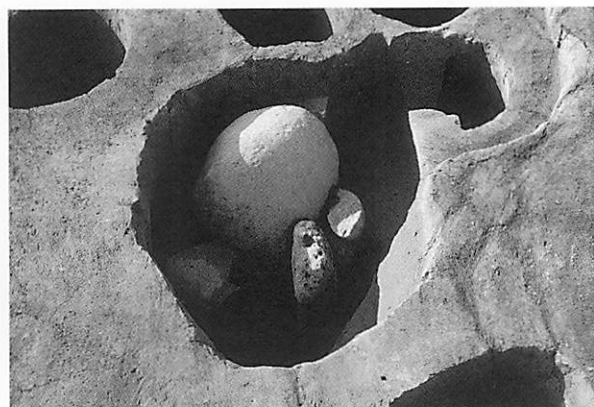
SE242 井筒



SE201



SE201



SP160



SX004



SX005



SX006



SX006



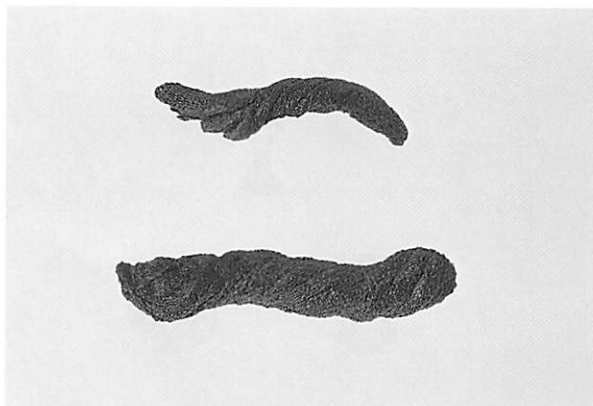
SX041



SX01



SK008 出土銅製柄杓 (第16図1参照)



SK040 出土布 (第33図2参照)



SE007 出土埴塼 (取瓶) (第65図参照)

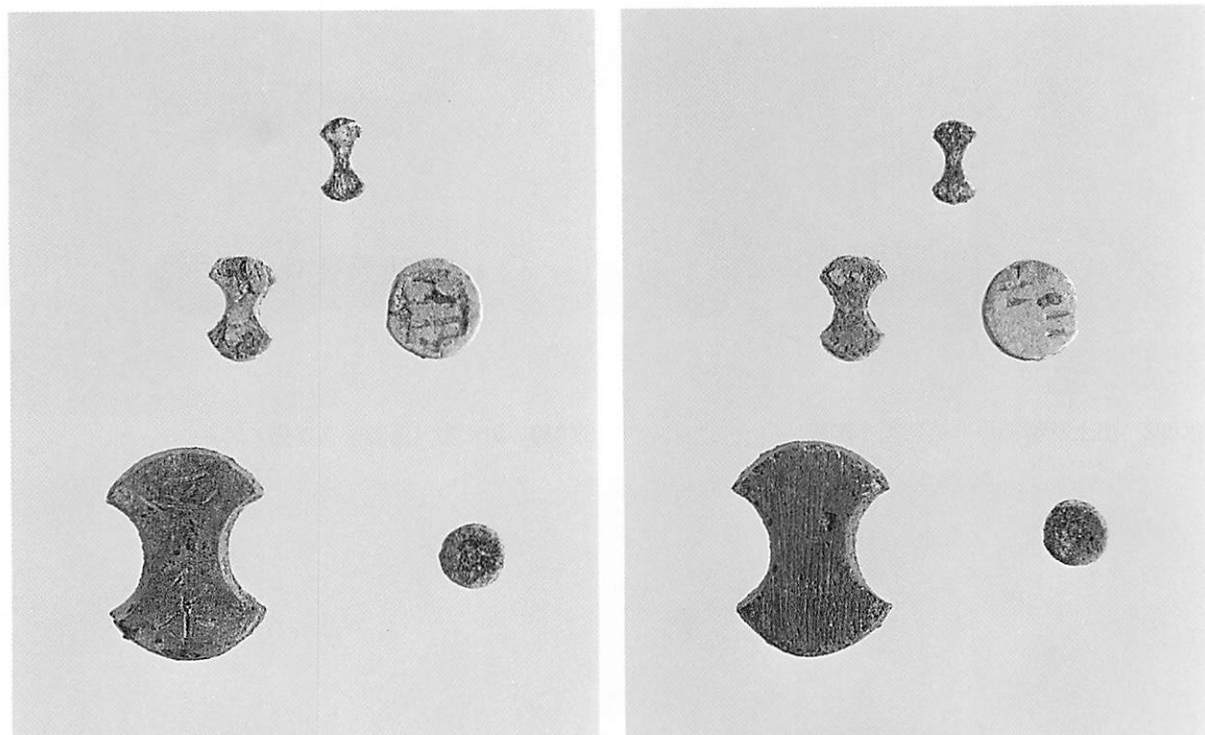


SE012 出土鉛製品 (第72図11参照)



SX006 出土油煙墨 (第89図53参照)





分銅 (上段 SP160 [第91図] 中段 SD009 [第8図10・11] 下段 包含層出土 [第111図20・21])

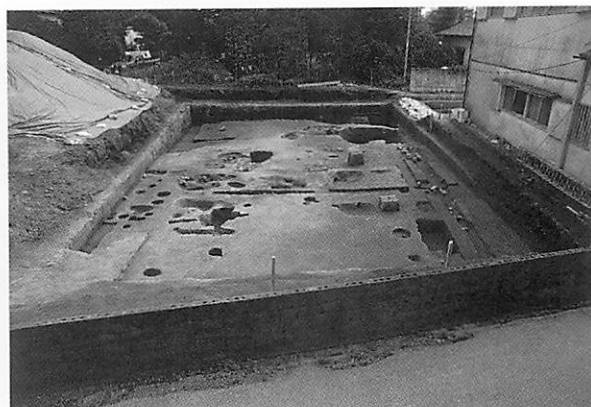


包含層出土坩堝 (取瓶) (第110図1~30参照)





II区全景 (北から)



II区全景 (西から)



II区完掘状態全景 (東から)



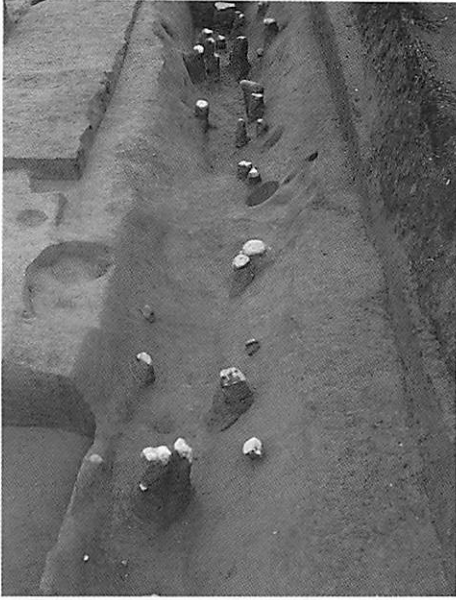
II区完掘状態全景 (西から)



II区完掘状態全景 (北から)



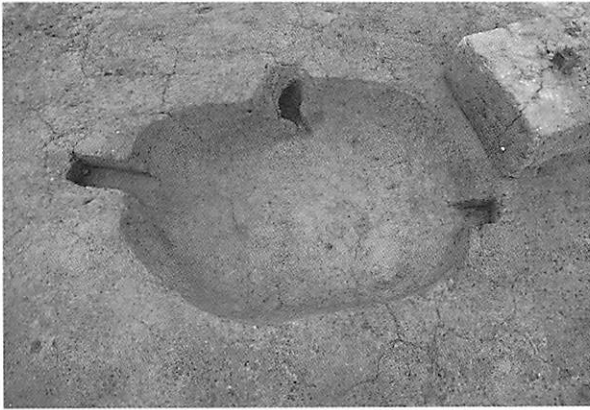
II区SD001-3 (西から)



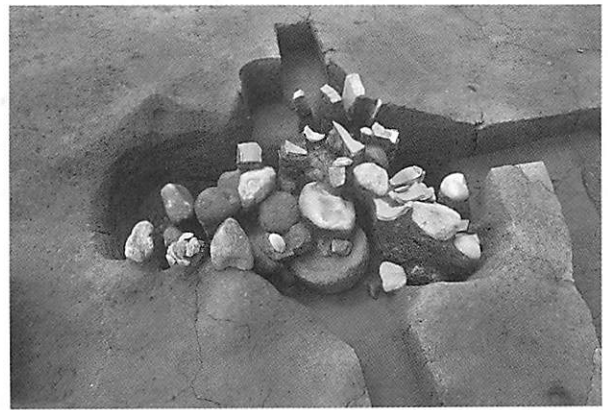
II 区SD001-1 (西から)



II 区SK003



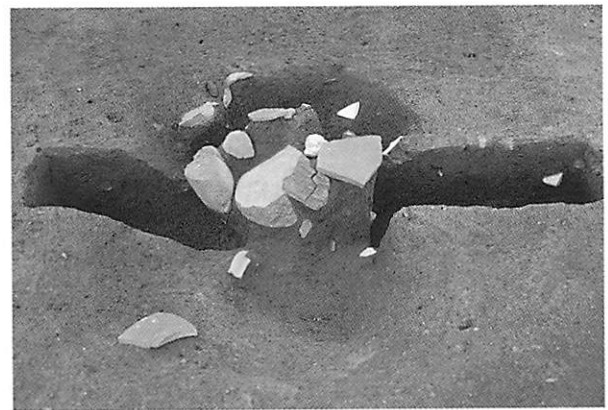
II 区SK003完掘状態



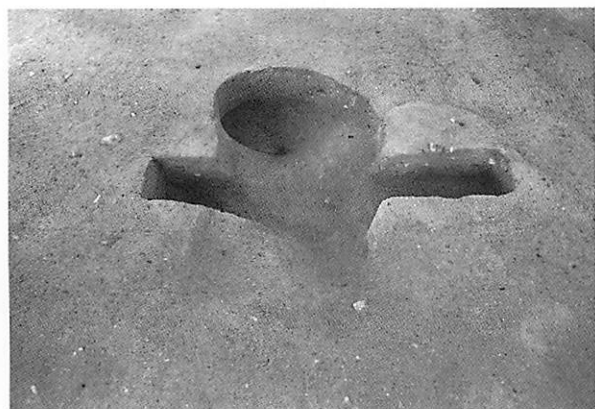
II 区SK004



II 区SK004完掘状態



II 区SK005



II 区SK005完掘状態



II 区SK007



II 区SK008



II 区SK009



II 区SK010



II 区SK011





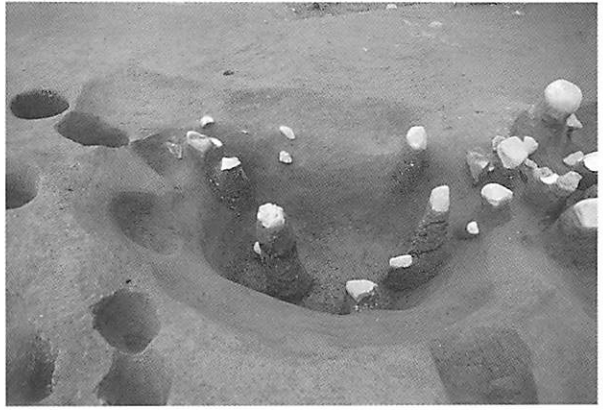
II区SK013・SK014



II区SK013



II区SK014



II区SK022



II区SK023



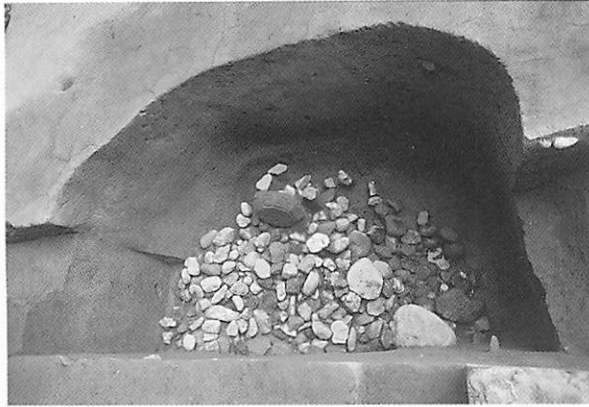
II区SK022・SK023完掘状態



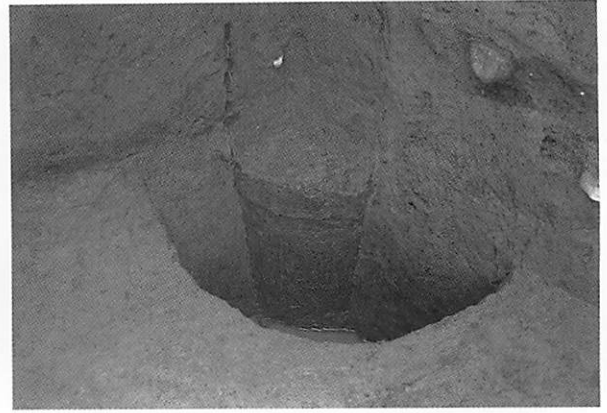
II区SK024



II区SE028



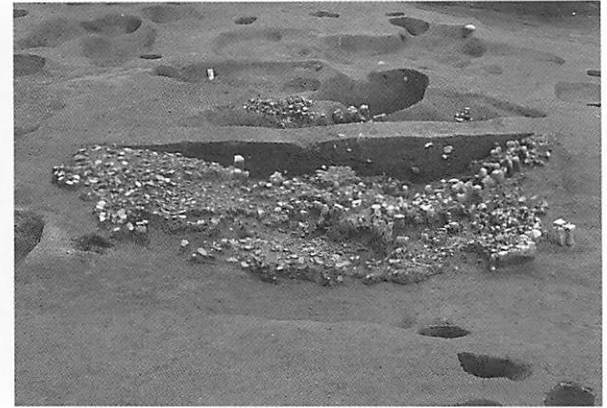
II区SE028



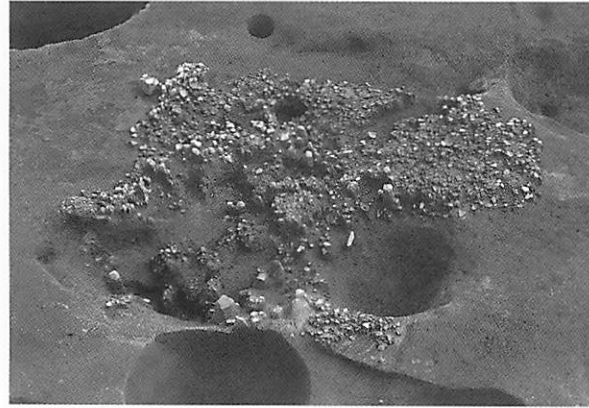
II区SE029



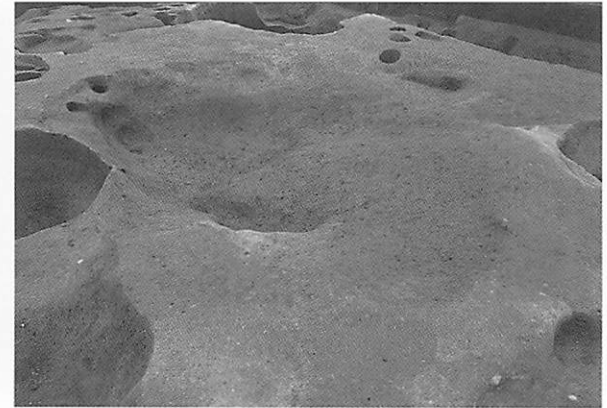
II区SX030



II区SX033



II区SX033



II区SX033完掘状態



III区全景 (東から)



III区完掘状態全景 (東から)



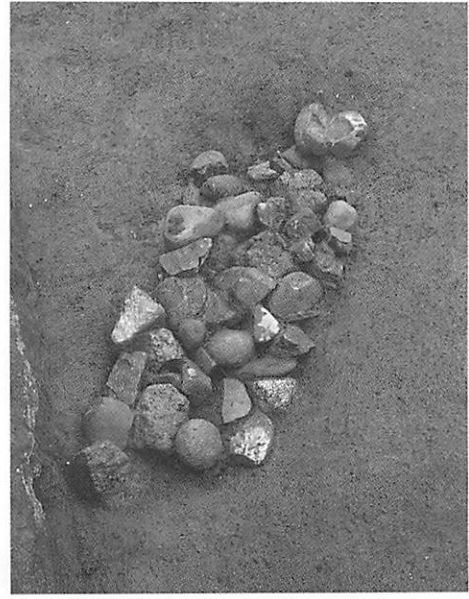
Ⅲ区完掘状態全景 (東から)



Ⅲ区SK011



Ⅲ区SK012



Ⅲ区SK013



Ⅲ区SK015



Ⅲ区SK019・SK020



III区SK021



III区SK021完掘状態



III区SK023



III区SK023完掘状態



III区SK024



III区SK026



III区SK027



III区SK029 (北から)



III区SK029 (西から)



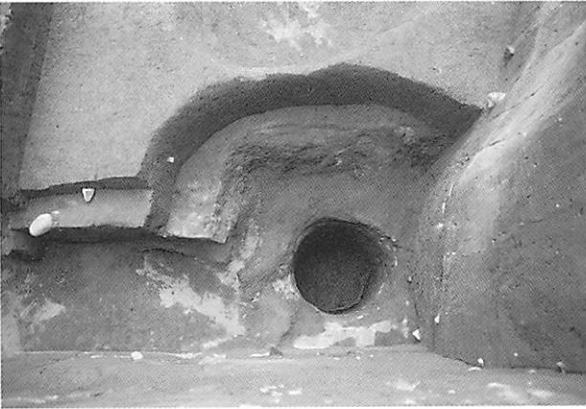
III区SK029完掘状態 (北から)



III区SK030



III区SE031



III区SE032



III区SE033集石検出状態 (北西から)



III区SE033集石検出状態 (北から)



III区SE033井筒内遺物出土状態



III区SE033半掘状態 (南から)



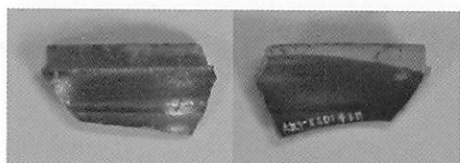
III区SE033完掘状態 (北から)



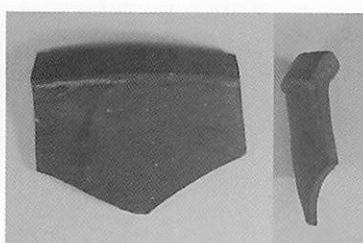
III区SX034



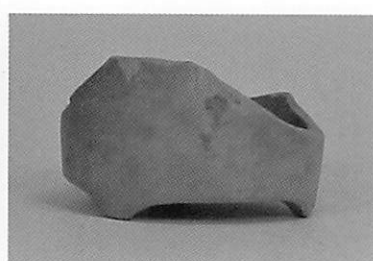
III区SX035



126-5  
II区SD001-1・2出土遺物  
(第126図参照)



129-13  
II区SD002出土遺物  
(第129図参照)



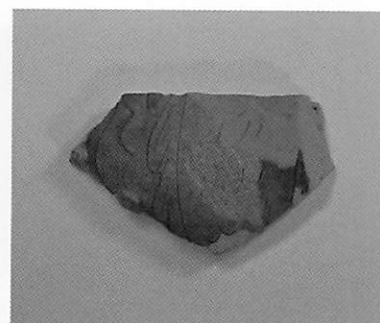
134-6  
II区SK004出土遺物  
(第134図参照)



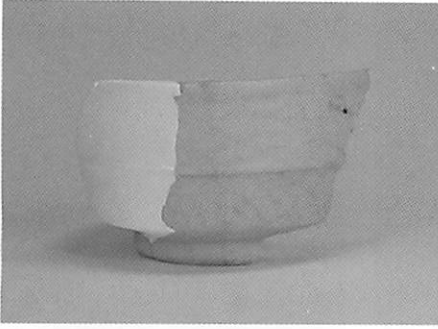
138-8  
II区SK005出土遺物 (第138図参照)



139-11  
II区SK006出土遺物 (第139図参照)

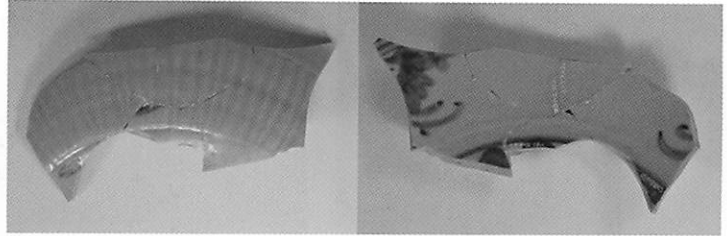


139-4



153-1

II区SK013出土遺物 (第153図参照)



157

II区SK018出土遺物 (第157図参照)

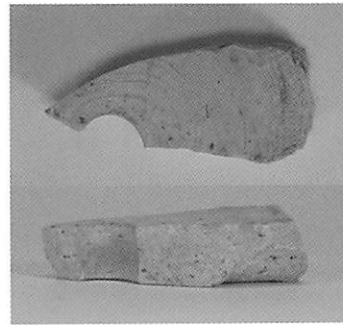


174-2

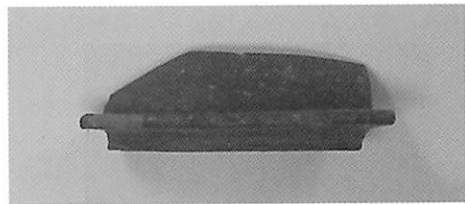


171

II区SE028出土遺物 (第171図参照)

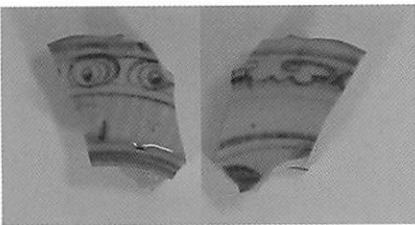


174-5



174-7

II区SX030出土遺物 (第174図参照)



187-3

II区47層出土遺物 (第187図参照)

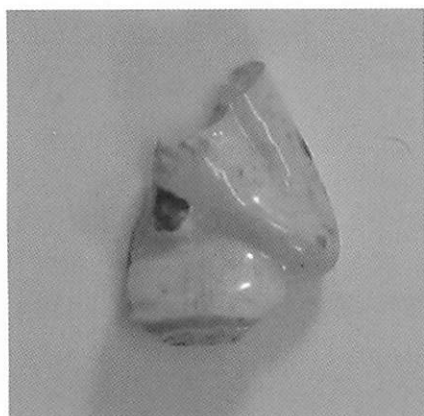


187-8

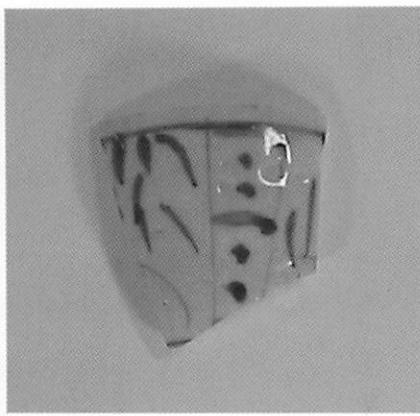


188-19

II区45層出土遺物 (第188図参照)



191-1



191-11



192-21

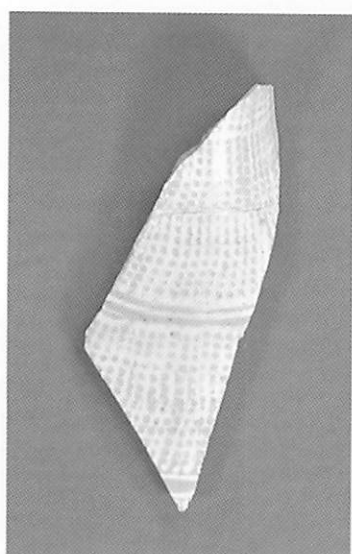
II区7層出土遺物 (第191・192図参照)



193-3



193-10



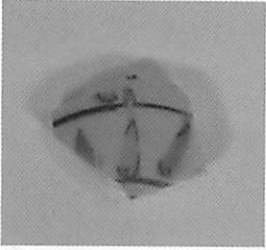
193-18



194-10

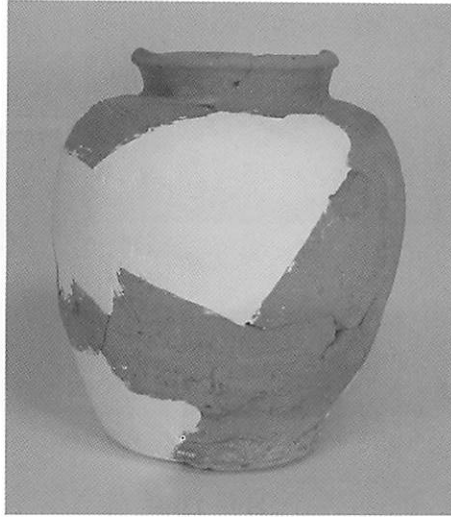
II区出土遺物 (第193・194図参照)





225-1

Ⅲ区SK021出土遺物 (第225図参照)



225-9



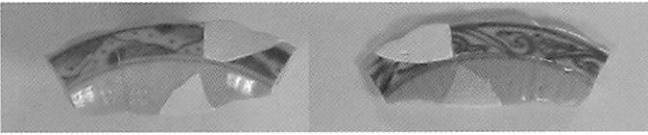
229-15

Ⅲ区SK023出土遺物 (第229図参照)

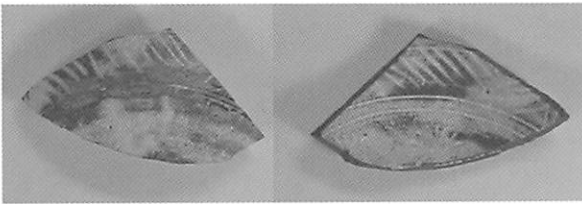


240-1

Ⅲ区SK029出土遺物 (第240図参照)

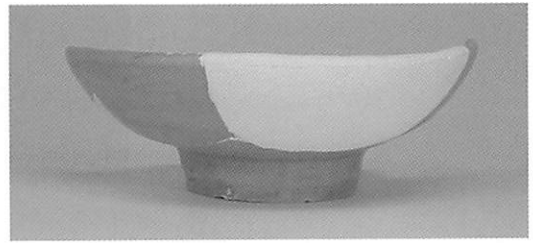


257-1



257-2

Ⅲ区SX034出土遺物 (第257図参照)

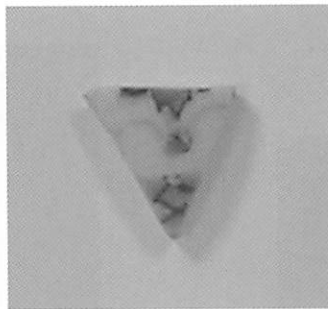


240-8



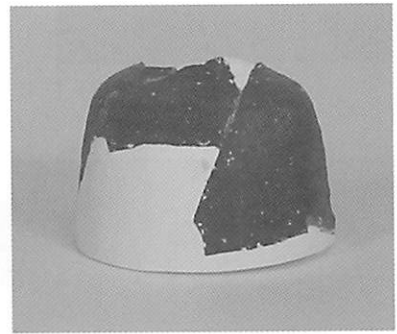
264-1

Ⅲ区SP044出土遺物  
(第264図参照)



269-7

Ⅲ区19~21層出土遺物 (第269図参照)



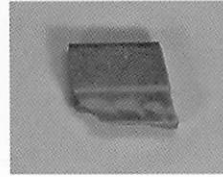
269-10



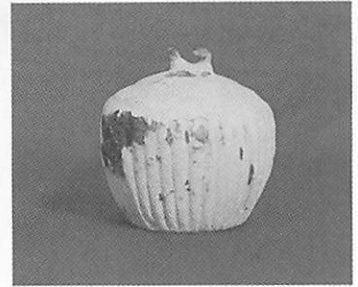
270-1



270-6



270-13



272-3

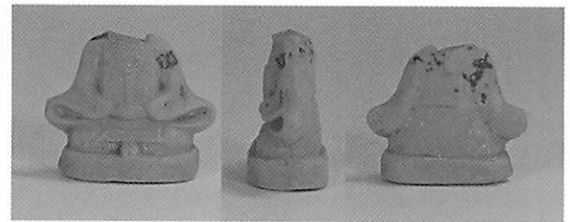
Ⅲ区25層出土遺物 (第270・272図参照)



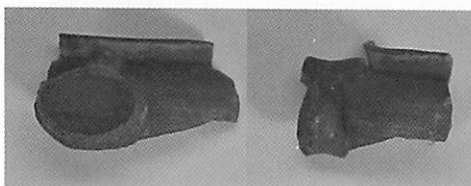
273-1



273-34

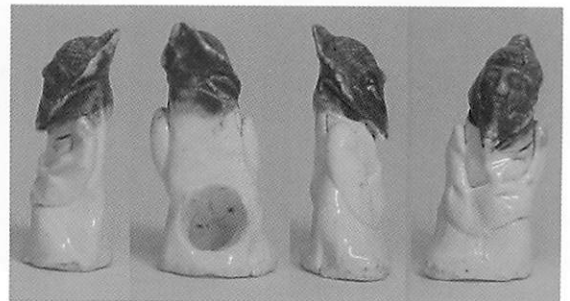


276-25



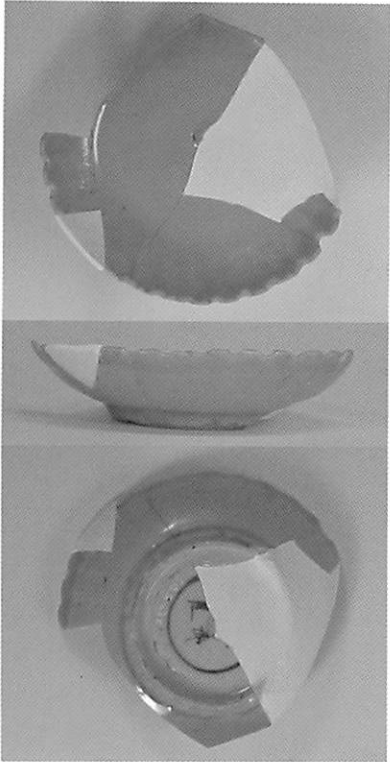
274-3

Ⅲ区10~25層出土遺物 (第273・274図参照)

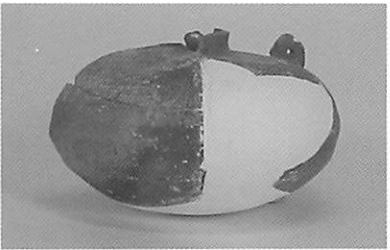


276-24

Ⅲ区7層出土遺物 (第276図参照)



276-26

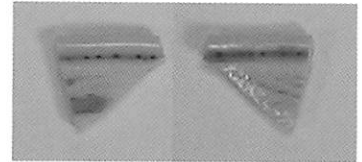


277-11

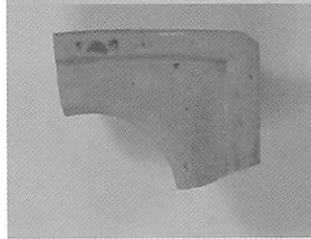
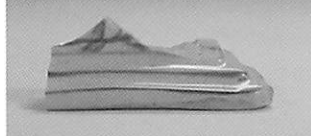
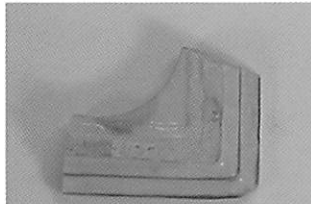
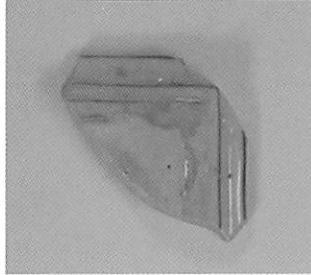
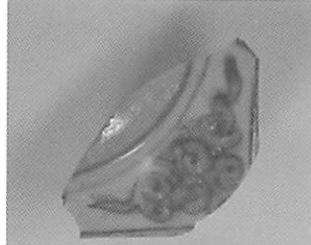
Ⅲ区7層出土遺物  
(第276・277図参照)



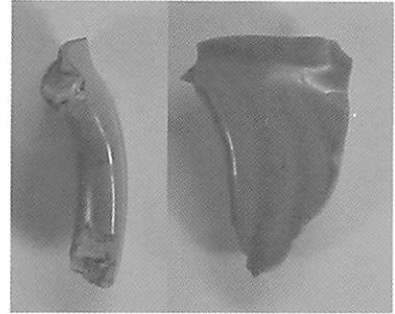
278-6



278-7



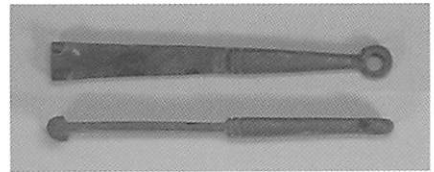
278-17



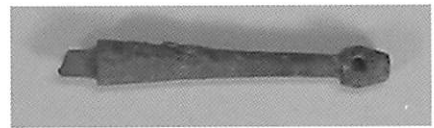
278-18



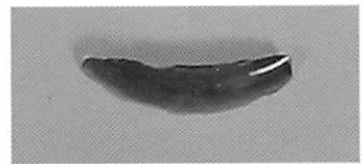
279-1



279-2



279-3



279-5

Ⅲ区出土遺物 (第278・279図参照)

## 報告書抄録

ふりがな	ぶんごふない4-ちゅうせいおおともふないまちあとだい9じ・だい12じ・だい18じ・だい22じ・だい28じ・だい48じちょうさく-							
書名	豊後府内4-中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区-							
副書名	一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(2)							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	坂本嘉弘・友岡信彦・原田昭一・楨島隆二・吉田寛・後藤晃一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中世大友府内町跡第9次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 35"	131° 37' 17"	2000年4月～ 2001年10月	650	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第12次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 39"	131° 37' 17"	2001年5月～ 2002年3月	700	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第18次西調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2001年11月～ 2002年3月	450	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第18次東調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2002年5月～ 2003年3月	700	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第22次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 36"	131° 37' 17"	2002年7月～ 2003年3月	600	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第28次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 37"	131° 37' 17"	2003年5月～ 2003年12月	480	一般国道10号 古国府拡幅事業
中世大友府内町跡第48次調査区	大分市錦町	322	051	33° 13' 40"	131° 37' 17"	2004年12月～ 2005年3月	70	一般国道10号 古国府拡幅事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中世大友府内町跡第9次調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第12次調査区	包蔵地 ほか	中世	礎石建物・井戸・柱穴 道路・側溝	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 銅銭・分銅・犬型土製品				
中世大友府内町跡第18次西調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴・ 道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第18次東調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・瓦・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第22次調査区	包蔵地 ほか	中世	土坑・井戸・柱穴・道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 油煙墨・砥石・取瓶・銅銭・分銅				
中世大友府内町跡第28次調査区	包蔵地 ほか	中世	溝・土坑・井戸・柱穴・ 道路	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・取瓶・銅銭・油煙墨・瓦				
中世大友府内町跡第48次調査区	包蔵地 ほか	中世	道路・側溝・井戸・土坑	コンタ・分銅・銅銭・陶磁器・土 師質土器・瓦質土器・石臼				
要約	<p>14世紀以降の中世の都市遺跡の発掘調査を行った。特に、16世紀中葉～後葉以降に遺構・遺物が集中し、戦国時代の府内の景観をあらわした「府内古図」にみえる大友氏館正面の第2南北街路およびそれに面した「桜町」に相当する町屋群の様相が明らかになってきた。柵列と考えられるピット群をはじめ、土坑・側溝・溝・井戸などの遺構や、中国大陸からもたらされた陶磁器類、分銅・権、鍛冶関連遺物、ガラス製品など、当時の「桜町」周辺の生活の様子をうかがい知れる良好な遺物群が数多く確認できた。</p>							

---

---

## 豊 後 府 内 4

中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区  
一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告第9集  
(第3分冊)

平成18年3月31日

**編集** 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地  
TEL (097) 597-5675

**発行** 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地  
TEL (097) 597-5675

**印刷** 大野印刷株式会社  
〒874-0902 別府市青山町1-7  
TEL (0977) 21-0505

---

---